

090.1-682



2005年度  
博士学位請求論文



# 葬送祭祀儀礼の系譜から見た古墳の成立

明治大学大学院文学研究科

学位請求者 史学専攻

古屋 紀之

## 序

そもそも筆者がこのような研究を志すきっかけとなったのは、やはり古墳の発掘調査に参加したときの経験からだった。それは私が考古学を学んだ明治大学考古学研究室が行った二つの調査現場でのことであった。

ひとつは 1993 年の長野県長野市所在の和田東山 3 号墳である。前期の未盗掘前方後円墳の発掘ということで、夏休みの調査全体の日程からみればごく僅かな 2 週間ほどの参加であったが、後円部墳頂で検出された墓壇の発掘に従事することができた。残念ながら土層観察の途中で他の遺跡の発掘へと赴くことになったが、のちになって墓壇中央の土層観察用に残しておいたベルトを除去する際に、墓壇中央上層の黒色土中から土師器が出土したことを聞いた。浅学な学生だった私にはなぜそのような場所から土器が出土するのが不思議に思えて仕方が無かった。

ふたつめは翌 1994 年の山形県川西町所在の下小松古墳群の発掘調査でのことである。下小松古墳群は前期から後期にいたる大群集墳であるが、その年に発掘したのは後期に属する小さな前方後円墳（K-68 号墳）であった。後円部墳頂に 2 基の墓壇があり、そのうち東側の墓壇の埋土上層から土師器杯が出土した。ちょうど墓壇中央を横断する土層観察用のベルトにひっかかっており、山形県特有の赤褐色の土に色とりどりの軟礫が含まれた極彩色の土層壁面に土器片がはまっていたのを印象的に覚えている。そして、前年の和田東山 3 号墳においてもそのような事例があったことを急に思い出し、なにか重要なことに遭遇したような感覚になったが、合宿による発掘調査だったこともあり、その時にはそれ以上考えなかった。

そののち、合宿から帰ってからよくよく考えてみるに、遠く離れた二ヶ所の、しかも年代的にかけ離れた古墳において同様な事例があるということは決して偶然ではなく、古墳時代の葬送儀礼において土器を主体部上に置く行為が慣例としてあったのではないかと思うようになった。それからはそのような事例集めに夢中になった。そうした中で埋蔵文化財研究集会の資料集『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』（1989）に収録されたデータは衝撃的だった。その全国的な集成において、前期古墳における土器の出土位置が明記されており、主体部上から土器が出土する事例が多々あることに気づいたのだ。それからは、古墳における土器の出土のしかたに関して自分なりに勉強する日々が続いた。その過程で、前期古墳出土土器には同じような形をした壺が多く出土する場合と、多くの器種がセットで出土する場合の二相があることに気づき、さらにそのような分析がすでに師の小林三郎先生や岩崎卓也氏・塩谷修氏によって論及され、古墳出現に関わる重要な研究テーマとして指摘されていることも知った。その後、小林先生に卒業論文のテーマとして採り挙げたいという旨をご相談すると一も二も無く賛成してくださった。先生の若かりし日に調査した茨城県勅使塚古墳や佐自塚古墳の事例、さらに東日本では記念碑的発掘調査ともなった

常陸丸山古墳や能満寺古墳においても主体部上から土器が出土した事例から、重要な課題であることは認識していたが、その後、学会ではあまり主要なテーマとして採り挙げられていないことが残念だったという。そうして、東日本全体の様相についてなんとか卒業論文にまとめ、小林先生の勧めもあって初めて学会誌に発表した論考が「墳墓における土器配置の系譜と意義」（駿台史学 104 号、1998）である。いま読み返すとなんとも無謀な論及だが、ともあれその後も同様な視点で範囲を広げ、弥生から古墳へという時代変化に論点の重心を移して研究を進めた。そして、それらをまとめあげたものが本書である。自分の力量をはるかに超えた範囲を扱ったために、多くの方々にこれまで指摘されたとおり非常に大雑把なものとなったが、自分の力の範囲ではいまのところこれが精一杯である。また、あえて広範囲を扱ったのは、研究の細別化・個別化が進むなかで、それぞれの研究が歴史学全体のなかでの位置づけが見えにくくなっている原状を危惧したからである。細別化と体系化は車の両輪であるべきであろう。私の研究は「土器配置」という個別的な視点ではあるが、時間・空間的なことでは「体系的」であろうと極力つとめた結果である。

本書が出来上がるまで実に多くの方々のご協力を賜った。関係者の皆様やお世話になった機関には深くお礼申し上げたい。また、とくに恩師である小林先生には、思い込みの激しい筆者を長年にわたり丁寧に導いてくださった。稚拙なる一書ではあるが、この研究成果を公表することにより、こうした方々のご恩に報いることができればと思うと同時に、これからの考古学の進展にいかばかりでも寄与できればと念じる次第である。

2005 年 9 月

筆者

# 目次

序

目次

挿図・表・写真目次

凡例

## 序章 墳墓の祭祀的研究の意義

はじめに 1

第1節 古墳研究の目的の変遷と祭祀的古墳研究の意義

戦前の古墳研究目的の変遷 2 戦後の古墳研究の目的の変遷 3

古墳祭祀研究の動向 5

第2節 古墳の葬送祭祀的研究と隣接諸分野との協業の可能性について

古代文献研究と古墳研究の接点—継承儀礼・葬送儀礼を中心に— 7

隣接諸分野の成果の援用方法 9 考古学による葬送祭祀研究 10

## 第1章 墳墓における土器配置研究の意義

第1節 古墳出現に関わる研究史

小林行雄の業績 12 弥生墓制研究の進展と「発生期古墳」の概念 13

近藤義郎の業績 15 都出比呂志の業績 16 土器編年の進展 17

寺沢薫による纏向型前方後円墳の提唱 17 赤塚次郎の業績 18

北條芳隆の業績 19 前期古墳の多様性 19

第2節 墳墓における土器配置の研究史

弥生墓制の土器配置研究 21 前期古墳の土器配置研究 24

問題の所在—方法論の整備のために— 27

## 第2章 土器配置研究の方法と墳墓編年

第1節 用語の定義（1）—「祭祀」と「儀礼」— 31

第2節 土器配置研究の方法

「土器配置」とは 33 考古学的祭祀研究における分析過程 33

土器配置の「型」の抽出 34

第3節 墳墓の編年について 36

第4節 用語の定義（2）—墓の形態をあらわす用語について— 38



### 第3章 弥生墓制の土器配置と葬送祭祀儀礼

#### 第1節 北部九州の土器配置と葬送祭祀儀礼

埋葬施設への土器副葬 39 「二塚山型土器配置」—いわゆる「祭祀遺構」の土器配置— 40

「宮の前型土器配置」—高杯を中心とする供献行為— 43 小結 44

#### 第2節 畿内における土器配置と葬送祭祀儀礼

「東奈良型土器配置」—廃棄された土器群— 46

「瓜生堂型土器配置」、その他—墳丘に配置された土器— 47 墓壇内に置かれた土器 49

墓壇上の土器 49 小結 50

#### 第3節 四国北東部の土器配置と葬送祭祀儀礼

「桜ノ岡型土器配置」—集石土壇墓の土器配置— 51

「萩原型土器配置」—墳丘墓における主体部上土器配置— 54 小結 56

#### 第4節 吉備の土器配置と葬送祭祀儀礼

「四辻型土器配置」—中期～後期中葉までの主体部上の土器配置— 57

「楯築型土器配置」—後期後葉に出現した「典型例」の土器配置— 59

後期後葉における楯築型土器配置の「変容形」とその他の土器配置 64

備前・備中南部における終末期（庄内式併行期）の土器配置 65

「中山型土器配置」—中国山地山間部の墳墓における土器配置— 67 小結 68

#### 第5節 山陰・三次地域の土器配置と葬送祭祀儀礼

中期後半から後期初頭の三次・石見の土器配置 70

「山陰型土器配置」—山陰地方に特有な主体部上土器配置— 71 小結 76

#### 第6節 近畿北部の土器配置と葬送祭祀儀礼

「近畿北部型土器配置」—後期における「墓壇内破碎土器供献」と主体部上土器配置— 78

後期後葉以降の大型台状墓・墳丘墓の土器配置 81 小結 82

#### 第7節 播磨の土器配置と葬送祭祀儀礼 83

#### 第8節 北陸の土器配置と葬送祭祀儀礼

後期（猫橋式～法仏式併行期）における北陸の土器配置 85

庄内式併行期（月影式～白江式古段階）の様相 87 小結 88

#### 第9節 東日本における墳丘墓の土器配置と葬送祭祀儀礼 90

#### 第10節 関東の土器配置と葬送祭祀儀礼

方形周溝墓という遺構の特質 92 方形周溝墓の土器配置 94 小結 96

### 第4章 移行期の儀器・祭器

#### 第1節 吉備系特殊器台の変化—宮山墳丘墓と矢藤治山墳丘墓— 98

#### 第2節 伯耆系特殊土器類 100

#### 第3節 山陰系特殊器台形土器・特殊器台形埴輪 102

#### 第4節 畿内系加飾壺

畿内系加飾壺の特徴 106 加飾壺出土墳墓の検討 108

## 第5章 前期古墳の土器配置

### 第1節 西日本における前期古墳の土器配置

各地の弥生墓制の延長にある土器配置 113 畿内型前期古墳の土器配置 114

小結 118

### 第2節 東日本における前期古墳の土器配置

「弘法山型土器配置」—東日本における古墳出現期の主体部上土器配置— 119

「北ノ作型土器配置」—廻間Ⅲ式併行期の主体部上土器配置—、その他 124

「国分尼塚型土器配置」—白江式期以降の北陸地方の様相— 126

「釈迦山型土器配置」—前期中相～新相の土器配置— 128

## 第6章 冪繞配列 130

### 第1節 冪繞配列の初源問題 131

### 第2節 吉備系特殊器台形埴輪の使用状況 133

### 第3節 底部穿孔壺の冪繞配列

畿内における底部穿孔壺の冪繞配列 138 吉備における底部穿孔壺の冪繞配列 140

四国北東部における底部穿孔壺の冪繞配列 141

九州における底部穿孔壺の冪繞配列 142

東日本の冪繞配列の成立に関する問題 143 東日本における底部穿孔壺の冪繞配列 145

### 第4節 円筒埴輪の冪繞配列

円筒埴輪による冪繞配列の基本構造 155 主体部方形冪繞配列と土器配置 156

壺形埴輪との関係と地域における円筒埴輪の受容の問題 157

円筒埴輪による冪繞配列の意義の変遷 159

## 第7章 考察—墳墓における土器配置の系譜と意義—

### 第1節 弥生時代から古墳時代前期にかけての土器配置の系譜

弥生時代の系譜 160 移行期の土器配置の動向 162 古墳時代前期前半の様相 166

古墳時代前期後半の様相 167 結論—古墳出現に関わる土器配置の系譜— 167

### 第2節 儀器・祭器の象徴化について—打欠・穿孔行為を中心に—

吉備における儀器の穿孔について 169

黒宮大塚墳丘墓出土土器の観察と儀礼の復原 170

「位相の移行」と土器の打撃穿孔行為について 175

儀器の象徴化の進行と葬送祭祀の変化 176

### 第3節 葬送祭祀儀礼の系譜からみた古墳の出現過程 179

あとがき 182

謝辞 183

挿図・表出典 184

図版

## 挿図・表・写真目次

図 1	土器・埴輪配置位置の分類	29
図 2	「楯築型土器配置」に使用される儀器の分類	60
図 3	「墓墳内破碎土器配置」の一例	79
図 4	「周堤・周溝を有する建物跡」と方形周溝墓の旧地表面と削平模式図	93
図 5	「畿内系加飾壺」の形式分類	107
図 6	弥生時代後期～古墳時代前期の土器配置の系譜	164
図 7	围绕配列の系譜	165
図 8	古墳成立にかかわる土器配置の要素	168
図 9	黒宮大塚墳丘墓出土供膳具の穿孔方法	172
図 10	第 1 群前方後円（方）墳と第 2 群前方後円墳	180
表 1	土器編年併行関係表	36
表 2	「畿内系加飾壺」出土墳墓要素表	109
表 3	東日本の墳墓における土器配置一覧（1）	151
表 4	東日本の墳墓における土器配置一覧（2）	152
表 5	東日本の墳墓における土器配置一覧（3）	153
表 6	関東・東北の円筒埴輪を出土する前期古墳	158
写真 1～7	黒宮大塚出土土器穿孔の拡大写真	171

## 凡例

- ・本書は、2005 年度に明治大学大学院文学部に提出した学位請求論文である。
- ・本書は、日本列島の弥生時代から古墳時代にかけての墳墓において行われた葬送祭祀儀礼を、土器の出土状況を主な資料として考古学的手法により復原しようと試みたものである。
- ・本書は本文と巻末図版からなる。本文編第 3～6 章において個々の遺跡の事例分析をなるべく詳細に記述することを心がけた。また、各遺跡の図については図版にまとめた。
- ・各遺跡の所在については、引用文献との対応関係の便宜を図る意味で、いわゆる「平成の大合併」以前の市町村名に従っている。
- ・図版一覧および図版凡例は、別に図版の冒頭に設けた。

## 序章 墳墓の祭祀的研究の意義

### はじめに

古墳がつくられはじめたころ、倭人たちが活躍した時代は、多分に祭祀的色彩のつよい文化が発達していた。今を生きる我々に比べ、はるかに祭祀や信仰が生活に深く根付いていたことだろう。このことは、多くの発掘現場において、我々が当時のなんらかの祭祀の痕跡を目にすることが珍しくないことから明らかである。

本書で述べるのは、弥生時代から古墳時代前期にかけての墳墓における土器を使用した葬送祭祀儀礼の復原と、その系譜関係についてである。古墳出現期は列島の歴史において、国家形成への動きが胎動する重要な時期であり、また、多くの研究者の関心が寄せられているところでもある。特に墳墓の研究により弥生時代から古墳時代への政治体制の変化に言及する研究が数多く行われているが、実は祭祀的側面からの研究が意外に少ないことが危惧されるところである。そのような状況の中で、本書は古墳出現の問題について、特に葬送祭祀儀礼に重心を置いて研究を進める。そして、その過程で「土器配置」という、およそ聞きなれぬであろう用語を多用することになる。

「土器配置」とは、発掘調査による純粋な土器の出土状況のデータと、土器を使用した葬送祭祀・儀礼などの理論的に高次に属する概念との間をむすぶ橋渡しの役割を担わせるために筆者が作り出した概念である。その意図は考古学的な手法によって「祭祀」という抽象概念を研究するための方法論を開拓するところにある。

これまで、とくに文字資料出現以前の時代の考古学で「祭祀」といえば、通常の生活行動の範疇で説明できないモノ・事象に関して使用される代名詞のような印象があった。もちろんそうではなく、しっかり祭祀の概念を正確に把握したうえでの祭祀研究も存在したが、上記の情勢が多勢を占めたため、逆に祭祀研究そのものが正当な評価を下されてこなかったということもある。本来、祭祀的な構造物である古墳の研究においてもそのような風潮は濃厚で、広瀬和雄をして「(思想や祭祀など人間の意識などに) 関する論文があると、それは実証的でないと、何か正當に評価しないような傾向がありはしないか。(中略) 前方後円墳の祭祀的側面をもう少し真剣にかんがえてもいいのではないか」<sup>1)</sup> という提言をなさしめているのが現状である。

そこで本書はまず、本論の前に序論を置き、本研究の意義を明確にすることにした。これまでの古墳研究がどのような目的をもって行われてきたのかを学史を振り返ることによって確認することから始め、さらに祭祀的研究がとるべき方法についても触れておくことにする。

### 註

- 1) 広瀬和雄 1994「記念講演 前方後円墳研究の指針」『前方後円墳の出現をめぐる 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流十周年記念大会の記録』両丹考古学研究会

## 第1節 古墳研究の目的の変遷と祭祀的古墳研究の意義

ここでは古墳研究の目的の変遷を戦前・戦後に分けて略述する。その際に、とくに戦前の研究史とその意義については斎藤忠<sup>2)</sup>や勅使河原彰<sup>3)</sup>の著作を参考にした。

註

2) 斎藤 忠 1974『日本考古学史』吉川弘文館

3) 勅使河原彰 1995『日本考古学の歩み』名著出版

### 戦前の古墳研究目的の変遷

古墳研究の目的とそのプロセスを明確にしている研究は、江戸中期における蒲生君平の『山陵志』<sup>4)</sup>まで遡る。山陵志における研究プロセスは、①伝承によって天皇陵を考定し、②それぞれの古墳の立地・地形を観察し、③それらをもとに古墳の変遷観を導き出す、というものである。これは古墳自体の型式学的検討から編年を組むのではなく、古墳の相対年代観は『記紀』の歴代天皇の即位順序に規定されていたため、研究の目的はあくまでも古代歴代天皇陵の変遷史としての古墳研究であった。

明治時代も中期になると八木英三郎が古墳の変遷観を示す<sup>5)</sup>。これは古墳時代を古墳の変遷観から三時期に区分しているが、やはり古代天皇陵の変遷史としての古墳研究であった。また、古墳の相対年代観はやはり『記紀』の記述を根拠としており、このことについては喜田貞吉の著名な批判がある<sup>6)</sup>。

一方で、三宅米吉は『日本史学提要』第1編<sup>7)</sup>のなかで儒教的な歴史観や年代記的な歴史叙述を批判し、社会学的な歴史叙述を目指した。これを受けてか、坪井正五郎の「足利古墳発掘報告」<sup>8)</sup>では、古墳を構成する各要素（墳丘・副葬品・被葬者）を資料として、古墳時代社会の構造（生産・分業・階級）を推定するに至っている。

大正年間に行われた西都原古墳群の発掘<sup>9)</sup>は、古墳研究における目的と分析資料の関係に大幅な転換を迫るものだった。喜田の主張以前は、研究目的はあくまでも古墳自身であり、その年代考定の史料として『記紀』が使われていた。しかし、西都原古墳群の発掘は当初から、発掘結果から『記紀』の所伝を裏付けるためという明確な目的を持っており、はじめて古墳を資料として歴史に言及するという方法を実践したものでいえる。つまりそれまでの目的と資料の関係が逆転したのである。結局、発掘調査の結果、西都原古墳群の年代がもくろみよりも新しくなり、『記紀』の裏づけ作業は失敗に終わった。このことから考古学者の間にも『記紀』の所伝に対する疑念が生じ、古墳を資料として真の歴史を構築するという構図がようやくできあがる。

しかし、その気運は三宅が志した社会学的な歴史構築の方向へとは向かず、皇国史観に圧迫されながら古墳年代論に終始する。大正年間に喜田貞吉と高橋健自の間で行われた竪穴・横穴式石室年代論争にそれがあらわれている<sup>10)</sup>。

その後、古墳研究の中心的な動きは京都大学の研究者にみられた。浜田耕作は西都原古墳群の報告<sup>11)</sup>の中で古墳年代論の解決策として、中国・朝鮮の資料を参考にすることを述べており、具体的には古鏡を採り挙げた。この方向性は富岡謙蔵の古鏡の年代研究<sup>12)</sup>に引き継がれ、その成果を古墳研究に組織的に展開したの

が梅原末治<sup>13)</sup>である。こうして遺物・遺構の型式学的研究が盛んに行われるようになったが、戦前までの古墳研究は編年研究が目的化してしまったとも言える。

この潮流に対して森本六爾は、鳥居龍蔵の「人類学的方法により、古墳を研究し、その精神的並びに物質的文化を明らかにすべし」<sup>14)</sup>という主張を引用し、当時の古墳研究の潮流に警鐘を鳴らしているが<sup>15)</sup>、学界で大きく採り上げられることはなかった。

#### 註

- 4) 蒲生君平 1808『山陵志』
- 5) 八木装三郎 1896・97「日本の古墳時代」『史学雑誌』第7編第11号、第8編第1・4号
- 6) 喜田貞吉 1903「古墳の年代を定むる事に就いて」『歴史地理』第5巻第3号
- 7) 三宅米吉 1886『日本史学提要』第1編
- 8) 坪井正五郎 1887「足利古墳発掘報告」『理学協会雑誌』40～44号
- 9) 浜田耕作ほか 1915『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告書』
- 10) 喜田貞吉 1913「上古の陵墓」『皇陵』日本歴史地理学会  
高橋健自 1914「喜田博士の『上古の陵墓』を読む」『考古学雑誌』第4巻第7号  
喜田貞吉 1914・15「古墳墓年代の研究」『歴史地理』第24巻第3・5・6号、第26巻第3～6号
- 11) 浜田耕作 1915「西都原古墳ノ時代ニ就テ」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告書』
- 12) 富岡謙蔵 1920『古鏡の研究』
- 13) 梅原末治 1921『佐味田及新山古墳研究』岩波書店  
梅原末治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部研究報告第12冊  
梅原末治 1943「上代古墳出土の古鏡に就いて」『鏡剣及玉の研究』考古学会編
- 14) 鳥居龍蔵 1925「序文」『人類学上より見たる我が上代の文化』叢文閣
- 15) 森本六爾 1934「墳墓研究の方法並びに沿革」『歴史公論』第3巻第11号

#### 戦後の古墳研究の目的の変遷

戦後の古墳研究については膨大な量があるが、まずは小林行雄の業績に触れなければならない。小林行雄の同范鏡論・伝世鏡論を基礎とした古墳出現論<sup>16)</sup>は、それまで年代論に終始してきた戦前の研究から大きく飛躍し、ようやく考古資料に立脚して当時の社会構成を復原するという気運を立ち上げた。しかし、銅鏡が地方首長の権威を保証する威信材として政権の中央から配布されたとする「配布論」に対しては、発表当時から西嶋定生<sup>17)</sup>や内藤晃<sup>18)</sup>らによる説得力のある批判が展開された。それにもかかわらず「配布論」は多くの研究者から政治史復原のための道標として歓迎され、ほぼ定説のように扱われて現在に至っているといえよう。

小林行雄のあとに、後の研究に大きな影響を及ぼした理論を唱えたのは西嶋定生<sup>19)</sup>である。それは西嶋理論の中核をなす「擬制的同祖同族論」である。この理論は近藤義郎によって古墳研究に組み入れられ<sup>20)</sup>、氏の前方後円墳論を支えた。西嶋・近藤の主張では、古墳とは当時の政治体制の身分的秩序を表したものであるという仮設が前提となっており、そこで展開される古墳研究の目的は、当時の政治体制を古墳の分析を通

して再構築することである。これは完全に政治史復原のための古墳研究と言えるだろう。以後の古墳研究のほとんどがこのスタンスをとっていると言えよう。都出比呂志が提唱した「前方後円墳体制論」<sup>21)</sup>は古墳研究に国家論を導入したものであるが、政治史復原のための古墳あるいは古墳時代研究の、ひとつの到達点というべきものである。

ところが、都出は数年後に自らの政治史研究の方法について、方向性の転換を示唆するような提言を行っている。それは「祖霊祭式の政治性」<sup>22)</sup>という論考のなかで述べられており、要約すればおよそ以下のようになる。まず、戦後の主要な古墳研究の理論を振り返り、それらが根本的には『記紀』から引用された歴史観に支配されたものと指摘する。そして、政治構造や政治圏について考古学は「独自の結論を導けると考えるべきではない」とし、その解決策として文献史学・人類学などの隣接諸分野との協業を提言している。都出がこのような考えにいたるきっかけとなったのは、氏も文中で述べているとおり田中琢の『倭人争乱』のなかでの提言であろう。重要な提言なので以下に少し長めに引用してみよう。

「前方後円形の斎場を見渡したとき、そこで挙行されるまつりのための祭具や装置には、共通するものと共通しないところがある。このなかの共通性をつかまえて、同じような祭具や装置を使用するまつりが挙行されたのだから、そのまつりの主人公であった族長のあいだに政治的な結びつき、族長の連合が成立していた状況が反映している、と考える研究者が多い。ときにはそれによって初期の国家や政権を云々する議論もごく普通におこなわれている。だが、似かよったまつりを挙行したからとして、それを連合や国家があった証拠とすることができののだろうか。」

田中琢『倭人争乱』<sup>23)</sup>より

この田中の、現在の古墳研究を根底から揺るがすような根本的な問いが、前方後円墳体制論を唱えた都出自身によって受けとめられたことは、古墳研究史上、大きな意味があると評価されなければならない。最近では森下章司が講演の中で筆者と同一箇所を引用し、「特異な意見」としながらも「重要な視点」として紹介している<sup>24)</sup>。筆者が墳墓研究と政治史復原の間に祭祀研究を介在させるべきと主張するのも、この提言に理論的根拠を置いているといえよう。

なお、このような田中や都出の提言を受けて北条芳隆も古墳研究の現状に対して痛烈な批判を寄せている<sup>25)</sup>。すなわち「前方後円墳ありき、そこに政治権力ありき」という考え方に対して疑問を投げかけ、「資料と評価の間をつなぐ橋渡しの理論が明示されることなく研究は進む」と述べている。都出と北条の主張の目的とするところは異なるが、現在の古墳研究における理論なき政治史復原の方向性に警鐘をならしているという点では共通する。1990年代後半以降になり、ようやく古墳研究の方向性は小林行雄の理論的枠組みから脱却をはじめているのかも知れない。

## 註

16) 小林行雄 1955「古墳発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号

小林行雄 1961「同范鏡考」『古墳時代の研究』青木書店

17) 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号

18) 内藤 晃 1959「古墳文化の成立—いわゆる伝世鏡の理論を中心として」『歴史学研究』第236号

内藤 晃 1960「古墳文化の発展—同范鏡問題の再検討」『日本史研究』第48号

- 19) 前掲註17文献(西嶋1961)参照
- 20) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 21) 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第343号
- 22) 都出比呂志 1995「祖霊祭式の政治性—前方後円墳分布圏の解釈」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部
- 23) 田中 琢 1991『日本の歴史② 倭人争乱』集英社 210頁参照
- 24) 森下章司 2005「古墳の出現に関する議論」『古墳のはじまりを考える』学生社
- 25) 北條芳隆 2000「前方後円墳の論理」・「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』青木書店

## 古墳祭祀研究の動向

このような政治史復原にやや偏ったともいうべき学界の動向に対して、政治的側面よりも、まず古墳の祭祀的側面を研究し墳墓としての実態と意味づけを行うべきであるとする意見は、実は以前から一部の研究者によって提出されていた。たとえば白石太一郎は、

「古墳が死者を埋葬する墳墓である以上、古墳を歴史の史料として利用する場合、その埋葬様式の諸形態の思想的背景を可能ならぎり追求しておくことは必須の前提作業であろう。古墳の造営が当時の社会において、政治的・社会的に何らかの機能をはたしたであろうことは否定できないが、それはまず墳墓の造営がはたす思想的・宗教的役わりを媒介としてはじめて機能を果すのであって、この点を無視して、古墳を政治史や社会構成史の史料として利用するのは、きわめて危険であるといわねばならない」

白石太一郎は「ことどわたし考」<sup>26)</sup>序文より

と述べている。また、和田晴吾も、

「古墳は、政治的記念物である前に、まず何よりも、祖先崇拜に基礎を置く首長の葬送儀礼、ならびにそれに纏わる様々な儀礼が執り行われた宗教的構築物であり、記念物である。したがって、古墳のもつ多様な性格を解明するためにはその場で実修された古墳祭祀と総称される諸儀礼の実態と意味とを追及することが不可欠の作業であり、そのことがまた古墳の政治的理解のための要点とも背景ともなる」

和田晴吾「墓壙と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査—」<sup>27)</sup>より

としている。筆者の主張は改めて述べるまでもなく、白石・和田の説くところに言い尽くされていると言って良い。古墳の考古学的研究は、まず葬送祭祀研究のなかで行われるべきものであり、葬送祭祀や宗教に政治がどのようにかかわるかは、また次の問題といえるだろう。

これまで見てきたように古墳研究における目的は常に変化しているといえるが、筆者は現段階においては、当面古墳研究が推し進めるべき方向性は、葬送祭祀研究としての古墳研究だと感じている。そうした意味で本書で示す土器配置の研究は大きな意義をもつものと考えている。



註

- 26) 白石太一郎 1975「ことどわたし考—横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって」『樞原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』  
吉川弘文館
- 27) 和田晴吾 1997「墓壙と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査—」『立命館大学考古学論集』Ⅰ

## 第2節 古墳の葬送祭祀的研究と隣接諸分野との協業の可能性について

次に都出比呂志が説いた、隣接諸分野との協業の可能性について、もう少し考えてみることにしよう。

### 古代文献研究と古墳研究の接点—継承儀礼・葬送儀礼を中心に—

祭祀の問題は精神・思想的領域の比重が高いため、本来、考古学の方法では扱いにくいテーマである。したがって、都出比呂志が考古学による政治史復原作業に対して「独自の結論を導けると考えるべきではない」（前節参照）と指摘したことは、おそらく祭祀の復原研究にも当てはまることと考えられる。そのせいか、古墳研究において古代文献の成果を援用し、解釈を導き出す方法は早くから行われてきたが、その援用方法には多くの問題点が含まれているようだ。

そのようなものの一つとして「古墳における継承儀礼説」が典型例として挙げられる。これは古代史において、考古学と文献史学の両者ともに深く関わってきた主要テーマであるため、以下にやや簡単に言及しておこうと思う。

この問題については岡田精司の「古墳上の継承儀礼説について」（1999）<sup>28)</sup>という論考中で詳述されている。氏の論点を要約すれば以下のようになろう。古墳上の継承儀礼説は考古学者の間では近藤義郎（1983）<sup>29)</sup>、水野正好（1971）<sup>30)</sup>らの所論に説かれており、場合によっては定説のように扱われていることもある。そして岡田は、近藤や水野の「古墳上継承儀礼説」は折口信夫の「大嘗祭の本義」<sup>31)</sup>における「大嘗祭＝即位儀礼説」に端を発しているという。折口のこの説は現在では実証性に乏しいとして否定的な見解が多勢を占めるが、その詩的な文章表現力によってか、非常に影響力の大きな論文である。折口自身は古墳のことについては何も触れていないが、岡田は、近藤が墳丘上の飲食儀礼を共同体的農耕祭祀ととらえて初穂祭のイメージを取り入れ、折口の「大嘗祭＝即位儀礼説」に連結することによって「墳丘上祭祀継承儀礼説」を作り出したと分析している。さらに岡田は「古墳上継承儀礼説」の是非を検証するために、『記紀』を中心に古代天皇の葬送および即位儀礼の記事を収集し、検討を加えている。その結果、葬送の場において継承儀礼が行われたことは一度もないという結論を導き出し、考古学者が継承儀礼説という解釈を導き出すための手続きに対して痛烈な批判を浴びせた。

以上が岡田の「古墳上継承儀礼説」批判の内容であるが、この議論は考古資料の解釈に文献記事を援用する際のさまざまな問題を浮き彫りにしているといえよう。上記の岡田の主張を端的に表現すれば、古墳や弥生墳丘墓における首長権などの継承儀礼を行ったことは古代文献からは証明できないということであろう。たしかに岡田の分析したとおり、『記紀』には古墳において継承儀礼が行われた証拠は見当たらないが、それ以前の問題として、日本において伝存する古代文献の成立年代よりもはるかに遡る時代の墳墓祭祀について、それらの記事の内容から導かれる解釈を直接引用すること自体、差し控えるべきであると思われる。そして逆に、新しい時代の古文献の記事から、はるかに遡る時代の考古学的事象についてその是非を論じることまた、方法論的には不可能なことであらうと筆者は考える。

とすると、考古学者は古代文献の存在しない時代の葬送祭祀については、やはり考古学の方法のみで可能な限り復原しなければならないのだろうか。この問題は考古学側が扱おうとする資料の年代によって異なるものと思われる。8世紀前半に成立した『記紀』や種々の律令などの古代文献が、古墳時代の葬送祭祀を復

原するにあたり、いったいいつごろまで遡って参考にしてよいのかということが問題であろう。

まず、現存する最古の神祇令である養老神祇令（718 年施行。701 年に施行された大宝令は伝存していない）には天皇崩御に伴う葬送儀礼の規定は無い<sup>32)</sup>。そこで、岡田精司は前掲論文（1999）の中で『記紀』にみえる葬送祭祀を描写した記事を拾い出して検討を加えているが、殯・挽歌・復活の呪術・寿陵などの存在を示す記事があることを指摘している。これら『記紀』にみえる葬送記事に関して早くから考古学者に注目されていたのは、イザナギノミコトの黄泉の国からの逃避行説話である。そこにはヨモツヘグイやコトドワタシといった儀礼的行為が登場するが、小林行雄<sup>33)</sup>や白石太一郎<sup>34)</sup>はこれらの記事の原形が後期古墳の横穴式石室における土器を使用した儀礼の痕跡に求められることを明らかにした。このことは考古資料の分析から、古墳時代に実際に行われていた葬送儀礼が『記紀』に説話の形で反映されていることを立証したものであり、考古学が古代文献の考証に有効であることを示した貴重な研究例であると言える。

しかし、即位に関する記事と同様に葬送儀礼に関しても、『記紀』にかろうじて断片的な情報として残されているのは古墳時代後期（およそ 6 世紀代）までであり、それ以前の葬送祭祀については発掘資料から得られる以上の情報を『記紀』に求めるのは困難といわざるを得ない。唯一、葬送儀礼の内容について具体的な記述があるのは『記紀』のなかにみえるアメノワカヒコの葬儀の様子であろう<sup>35)</sup>。それによると①喪屋をつくること、②食物を運ぶ係、ほうきを持つ係、御饌（そなえもの）の係、米をつく係、泣く係（泣き女）など多くの役割を分担して行うこと（『記紀』ではこれらを種々の鳥が分担する）、③一定期間、歌舞して死者を弔うこと（『記紀』では八日八夜）、などがわかる。

この記事をみて思い起こされるのは「魏志倭人伝」にみる倭人の葬儀に関わる習俗に関する記事である。その部分を引用してみよう。

#### 原文

「其死、有棺無槨、封土作冢。始死停喪十日余日。當時不食肉。喪主哭泣。他人就歌舞飲酒。已葬、舉家詣、水中澡浴。以如練沐。」

#### 訳文

「死ぬと、棺に収められるが槨はなく、土をつんで冢を作る。人が死ぬとすぐ十日余りのもがりをし、その間は肉を食べず、喪主は哭泣し、ほかの者はそのそばで歌舞し酒を飲む。埋葬が終わると、家じゅうの者が水中に入って身体を洗うが、その様子は中国で行う練沐とよく似ている。」

小南一郎訳<sup>36)</sup>

『三国志 魏書』卷三十東夷伝倭人条、いわゆる「魏志倭人伝」<sup>37)</sup>に伝えられる倭人の習俗はおおよそ 3 世紀半ばごろまでの情報と考えられるため、これらは弥生時代の末ごろにおける倭人の葬送儀礼の様子と考えて良いだろう。かなり時代のかけ離れた二つの文献ではあるが、埋葬前の一定期間「喪」を設けることと、死者を弔うのに歌舞し、その場に飲食物が用意されたことが共通しているため、およそ弥生時代末から古墳時代にかけての葬儀の様子をある程度表していると考えても良いだろう。

結論を述べれば、5 世紀以前の葬送祭祀儀礼を復原するために多少なりとも参考になるのは上記の二件の

文献記事のみといえる。たった二件の記事が無批判に信用して当時の葬送儀礼の様子を描き出すことは、方法論的には到底正しいとは言えず、基本的には考古学的データを積み重ねていくことが常道ではあるが、二件の文献記事は物的証拠として残らない情報を備えており、その重要性をまったく否定することはできない。要はその援用方法について正しい手続きを経るかどうかが重要なのである。次にこうした隣接諸分野の研究成果の援用方法について見ていくことにしよう。

#### 註

- 28) 岡田精司 1999「古墳上の継承儀礼説について 祭祀研究の立場から」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第80集
- 29) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 30) 水野正好 1971「埴輪芸能論」『古代の日本2 風土と生活』角川書店
- 31) 折口信夫 1930「大嘗祭の本義」『古代研究』民俗学篇第2冊 大岡山書店（『折口信夫全集』第3巻、1955所収）
- 32) 高塩 博 1999「神祇令」『縮刷版 神道事典』國學院大學日本文化研究所編 弘文堂
- 33) 小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊
- 34) 白石太一郎 1975「ことどわたし考—横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって」『橿原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館
- 35) 次田真幸 1977『古事記（上） 全訳注』講談社学術文庫  
※『日本書紀』では、やや簡略化された内容となっている。  
宇治谷孟 1988『日本書紀（上） 全現代語訳』講談社学術文庫
- 36) 今鷹真・小南一郎訳 1993『正史 三国志4』ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 37) 佐原真 2003『魏志倭人伝の考古学』岩波書店

#### 隣接諸分野の成果の援用方法

考古学的データから得られる情報は祭祀の物質的な側面を物語るのみで、さらにその祭祀・儀礼の意味づけや歴史的意義を考察する段階では、隣接諸分野の研究成果を援用する必要にせまられる場合がある。この問題に対して土生田純之は次のような提言をしている<sup>38)</sup>。

- ①後世の史料などを参考にするときは、歴史的な方向性を見定めること。時代の順序を追ってあとづける作業を怠ってはならない。
- ②人類学の成果については解釈するための「証拠」として用いず、あくまでも「ヒント」に留めること。
- ③葬送の場面に働く経済的な視点も視野に入れること。具体的には贈与交換システムに基づいた再分配経済論について配慮する必要がある。

（筆者要約）

土生田のこうした提言から学ぶべきことは多いと思う。それぞれの学問分野は役割が異なり、その関係を理解しておかなければ、その成果の援用方法も誤りやすい。特に②の提言に関して、人類学の資料は現存する未開民族の生活や過去に調査された民族誌であるが、これらを日本列島における原始・古代の葬送祭祀研

究に援用しようと思えば、それは過去に失われたデータに対して解釈の選択肢の幅を広げるための一般理論を用意する学問であり、あくまでも事実関係は日本列島の文献なり考古資料によらなければならない。人類学について土生田はP・メトカーフ、R・ハンティントン著『死の儀礼』<sup>39)</sup>などの著作を挙げ、未開民族の葬送儀礼の観察から解釈の幅を広げるためのヒントが得られることを指摘している。

また、日本における民俗学の調査データや古文書などの資料をより遡った時代の研究に援用しようと思えば、ただ解釈を当てはめるのではなく、土生田が①で提言したとおり、それらの資料の特徴が過去の資料の変化の延長上にあるものとして妥当かどうかを見極める必要があるだろう。これらのことは、実際に後段で本書の分析結果と先に述べた古文書に見られる記事とのつきわせ作業の際に役立った。ただ、そのような方法が取れなくても、上述の人類学の成果の援用のように、解釈の枠を広げるヒントととしてならば、国内の民俗資料・文献資料を使用することも可能であろう。筆者は竹岡俊樹の著作『日本民族の感性世界—考古学から文化分析学へ—』<sup>40)</sup>において展開されている古文書や民俗資料を駆使した文化分析学の方法は、本稿に述べるような弥生時代から古墳時代にかけての葬送祭祀研究においても有効であると考え。竹岡が強調する「位相の転換」という視点は葬送祭祀に限らず、さまざまな祭祀における儀礼を理解するうえで非常に有効であり、意味づけが難しい考古資料の解釈に選択肢の幅と一定の基準を与えるものとする。

#### 註

38) 土生田純之 1997「古墳における儀礼研究の課題と意義」『宗教と考古学』勉誠出版 (『黄泉国の成立』学生社,1998 所収)

39) P・メトカーフ、R・ハンティントン 1996『死の儀礼—葬送習俗の人類学的研究』池上良正・池上富美子訳 未来社

40) 竹岡俊樹 1996『日本民族の感性世界—考古学から文化分析学へ—』同成社

### 考古学による葬送祭祀研究

これまで祭祀研究における考古学と隣接諸分野との関係について述べてきたが、もちろん考古学独自の方法を鍛え上げることが何よりも重要な課題である。それは考古学側における祭祀研究の方法が整っていないければ、結局は解釈の全てを隣接諸分野の研究成果に委ねることになりかねないからだ。これまで考古学的祭祀研究が正当な評価を得てこなかったのは、その方法論が未整備であったことにも原因があると思われる。本研究の副次的な目的として、考古学による祭祀復原のための方法論を提示することも挙げられる。この筆者の方法論の詳細については次章からの本論に譲るとして、ここでは考古学独自の方法による葬送祭祀研究にはどのようなものがあるのかを見ていきたい。

まず和田晴吾の業績<sup>41)</sup>を挙げなければならないだろう。和田は古墳祭祀の総体を次のような手順として概念化した。すなわち「墓域の選定」→「整地」→「墳丘の築造・内部施設の構築・埋葬」→「外部施設の整備（葺石・埴輪など）」の四段階があり、各段階における儀礼の存在を指摘している。また、被葬者の死がどの段階で発生するかによって、竪穴系埋葬施設の墓壇と盛土の関係が異なることも検討している。和田の作業は古墳における葬送祭祀の具体的な手順を復原する上で指針となるべきものであろう。このうち納棺の問題に関しては和田自身が古墳時代の全時期を通して検討を加えており<sup>42)</sup>、前期古墳の副葬品の配置に関しては今尾文昭が儀礼の諸段階を考慮しながら検討している<sup>43)</sup>。また、埋葬終了後に行われる土器を使用する儀礼については弥生時代後期から古墳時代前期までを筆者が検討し<sup>44)</sup>、横穴式石室墳のそれについては土生田

純之が検討している<sup>45)</sup>。埴輪配列の問題については膨大な研究の蓄積があり、ここでいちいち触れることはしないが、古墳の葬送儀礼の諸段階の中でどのように捉えられるのかという視点から、埴輪配列の意義を捉えなおす必要があるだろう。

これらの研究を見ていくと、考古学的なデータから当時の葬送儀礼の内容を復原することは、その行為的側面に関してはある程度は可能であることが分かる。考古学だから祭祀研究は不可能であるという先入観は捨て、積極的に考古学独自の方法を開拓していくべきであろう。

以上、考古学的手法による祭祀研究の方法と課題について述べてきた。都出比呂志が提唱した文献史学・人類学などの隣接諸分野との協業は、困難な作業ではあるが不可能なことではない。結論を導くためのものではなく、解釈の選択肢の幅を広げるヒントという位置づけに限定して、使用することについては何ら問題はないと思われる。また、和田や今尾、土生田らの業績や本書に示す筆者の研究のように、考古学独自の方法によっても、ある程度は祭祀の内容を復原することは可能である。今後、考古学による祭祀研究にとって、この方面の考古学独自の理論的枠組みを構築する努力をすることと、隣接諸分野との協業も模索していくこと、という二つの方向性が大きな指針となるだろう。

#### 註

- 41) 和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元第6巻 古墳時代の王と民衆』講談社
- 42) 和田晴吾 1995「棺と古墳祭祀—『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』」『立命館文学』第542号
- 43) 今尾文昭 1984「古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—」『橿原考古学研究所論集』第6
- 44) 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第104号 駿台史学会  
古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号  
古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』第120号
- 45) 土生田純之 1998『黄泉国の成立』学生社

## 第1章 墳墓における土器配置研究の意義

弥生時代～古墳時代の墳墓から土器・埴輪類が出土するとき、その出土の仕方に特定の場所・配置方法をうかがい知ることができる場合がある。例えば、列をなして墳丘や埋葬施設を取り囲むように出土したり、埋葬施設上や埋葬施設内などにその場所を意識して置かれていたりするのである。これらの土器類の出土状況をパターンごとに土器配置類型を設定して整理していくと、いくつかの類型に相当数の類例があり、一定の志向性を読み取ることができる。そして、葬送の場における土器配置に見られる志向性が共通するということから、祭祀に伴う儀礼行為が同一のものであったということが推定できる。

文字史料が欠如した時代における祭祀の精神的・思想的内容を明らかにすることは非常に困難がつきまとう。しかし、祭祀の中でも行為的側面を表現した儀礼については、それを施行した結果のこされる物的痕跡を上記のプロセスを経て考古学的に分析することで、その系譜や性格を追及することは可能であろう。このような観点から弥生時代～古墳時代前期にかけての墳墓における葬送祭祀儀礼の系譜を体系的に把握し、当時の社会変化の様子を墓制に表れる宗教的な側面から描き出そうとすることが、本書の目的である。

### 第1節 古墳出現に関わる研究史

土器配置研究の意義を明らかにするために、これまでの古墳出現に関わる研究の大まかな流れについて触れておきたい。なお、今日的な意味で古墳の出現についての研究がはじまったのは戦後からと言えよう。戦前の研究については岩崎卓也の整理<sup>46)</sup>を参照していただくことにしてここでは触れないこととする。また、以下に研究史をまとめるにあたり、個々の研究の他、坂本和俊による研究史の整理<sup>47)</sup>を参考にした。

#### 註

46) 岩崎卓也 1988「古墳出現論」『論争・学説日本の考古学5 古墳時代』雄山閣

47) 坂本和俊 1990「古墳の出現と地方伝播の諸問題」山岸良二編『原始・古代日本の墓制』同成社

#### 小林行雄の業績

この問題について、はじめて本格的にその歴史的意義を論じたのは小林行雄であろう。小林は古墳から出土する銅鏡の分析から、古墳の発生の要因は各地域首長（小林は「貴族」という用語を使用）の權威の革新の結果と見た<sup>48)</sup>。その外的要因として大和政権による地域首長の地位の外的承認を挙げ、その内的要因として首長権の世襲制の発生を挙げている。前者の論拠として三角縁神獣鏡の分析から導かれた「同范鏡論」が、後者の論拠として漢鏡の伝世に注目した「伝世鏡論」が述べられている。

また、小林行雄の業績として前期古墳の相対年代的細分を試み、のちの前期古墳編年研究の基礎をつくったことも重要なこととしてあげられる。「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」<sup>50)</sup>という論文がそれである。その中で三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡の副葬状況に、椿井大塚山古墳のように中国製のものがすべて占められる古墳と、佐味田宝塚古墳のように中国製のものに倣製鏡がともなう古墳の二者の存在を指摘

し、さらに後者の倣製鏡をともなう古墳のみに碧玉製腕飾類が伴うことを明らかにした。小林はこの結果をもって「いま問題となっている鏡群の相の新古は、首長の文化活動の相違という一層大きな事実をあらはしてはいるとはいっても、それらの古墳の副葬品全体の相の新古をただちには意味していないといわねばならない」と述べており、副葬品の二相が編年的な前後関係であるとするに慎重な態度を示している。しかし、現在では一部の例をのぞいて、この小林の指摘した副葬品の二相が、のちの前期古墳編年細分の基礎となり、その古相をしめす古墳の中からさらに最古の古墳を抽出する作業が行われることとなる。

小林がのこした前期古墳研究の業績の中でもう一つ重要なものとして、埋葬施設構造の研究<sup>51)</sup>が挙げられる。この研究の骨子は、竪穴式石室をその平面形態からA～Cの3種（A：短小形、B：長大形、C：幅広形）に分類したこと、粘土床の構造に注目し割竹形木棺の形態を復原し、さらに木棺収容後に竪穴式石室を構築したと予想したこと、粘土槨を竪穴式石室の省略形ととらえ年代的に新しく位置づけたこと、などである。これらのことものの編年研究に大きな影響を与え、さらにB類とされた長大形の石室については、のちに弥生墳丘墓と前期古墳との質的な違いを表す要素のひとつとして注目されるようになる。

これら小林行雄の1960年代初頭までの一連の業績に対していくつかの反論があったことは序章で述べたので繰り返さないが、このように前期古墳の研究は副葬品と埋葬施設の研究から始められ、のちに墳丘構造や埴輪の問題が加わってくるという推移をたどる。

#### 註

48) 小林行雄 1955「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号（『古墳時代の研究』青木書店、1961に再録）

49) 小林行雄 1961「同范鏡考」『古墳時代の研究』青木書店

50) 小林行雄 1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』

51) 小林行雄 1941「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』

### 弥生墓制研究の進展と「発生期古墳」の概念

さて、小林の一連の業績により、前期古墳の具体像が明らかにされてくると、古墳出現の問題はその歴史的意義を追及する方向性のほか、編年学的に最古の古墳をつきとめようとする潮流が盛んになった。後者の動きは弥生時代に編年される高塚墓の発見により、古墳の定義の問題が急速に浮上したためである。

弥生時代の区画墓（墳丘墓・周溝墓・台状墓を含む）の発見・認識は1964年の宇津木向原遺跡<sup>52)</sup>に端を発している。浅い溝を方形にめぐらせたこの墓制は大場磐雄によって「方形周溝墓」<sup>53)</sup>と命名されるとともに、古墳の発生について弥生時代にそのルーツをたどる糸口を与えた。方形周溝墓はその後、大規模開発にともなう緊急調査がさかんになるにつれ、全国的にその類例が知られるようになる<sup>54)</sup>。一方、山陰地方では1968年の順庵原1号墳<sup>55)</sup>の発掘調査により四隅突出型墳丘墓がはじめて学界に認識され、その後も同種の墳墓の発見があいついだことにより、弥生時代の高塚墳の存在がにわかに注目された。とくに1970年から調査が開始された仲仙寺墳墓群<sup>56)</sup>は同じ荒島墳墓群中に大成古墳、造山1号墳、造山3号墳などの古墳時代前期の大型方墳が存在することから、四隅突出型墳丘墓が発生期古墳との関わりで論じられるようになった。実際に当初の研究では、これらの墳墓を「在地型古墳」として、畿内型古墳とは別系統の発生期古墳として認識していた例もある<sup>57)</sup>。



このように当時の「発生期古墳」の概念は、いまだ土器編年が整備されていない学界において、現在では弥生時代後期や庄内式併行期に編年されるべき「墳丘墓」に対して、定型化した古墳の前段階の高塚墳という認識の下に使用された概念であり、現在、一般的には「弥生墳丘墓」と呼称されている墳墓を「古墳」と呼称する立場があったことを示している。この概念について考えるときに参考になるのが後藤守一の「古墳」という用語の整理であろう<sup>58)</sup>。後藤は「古墳」には、原始・古代における古い墓という意味で使う広義のものと、「古墳文化時代の表徴となっている「古墳」という考古学研究上の用語」として使用する狭義のものがあることを指摘した上で、その狭義の意味における典型例の古墳の特徴を、①高い墳丘を有すること、②遺骸をいろいろな形式の棺におさめ、多くの場合それを囲むのに石室をもってしていること、③棺の内外に各種の副葬品が置かれていること、④内部主体が高い墳丘の墳頂近く（つまり盛土中）にあること、と整理した。後藤のあげたこの四つの特徴は、5世紀代の応神・仁徳陵を代表とする中期古墳のもの、という後藤自身のことわりがつけられているのであるが、おそらく古墳時代に限定してという意味で狭義の「古墳」という用語を定義しようとしたものと思われる。一方で、小林行雄は古墳の説明として、

「土を高くもった古代の墓を意味する語。高塚ともいう。一般的な意味で古墳とよびうる墳墓は、世界各地において国家的統一の初期につくられている。日本では弥生式時代につづく時代を、さかんに古墳がつくられたことによって、とくに古墳時代とよんでいる。しかし、古墳という名称を日本のものにかぎって使用すべきだという説には無理がある。」

小林行雄「こふん 古墳」『図解考古学辞典』<sup>59)</sup>より

と述べており、後藤の言う「広義の古墳」により近い意味で定義しているようだ。このように当時の学界ではまだ広い意味での「古墳」という用語法が通用しており、その限りでは現在の弥生墳丘墓を古墳と呼称することはそれほど常識を逸脱したことではなかったのであろう。森浩一は広義の意味で古墳という名称を使用する研究者の代表格で、高い墳丘をもつ墓をすべて古墳と呼んでおり、「弥生時代の古墳」という表現も辞さない<sup>60)</sup>。その一方で間壁忠彦・間壁菫子は狭義の意味で「古墳」と呼ぶことに理解を示しつつも、狭義の古墳の要素が弥生時代後期に築造された「黒宮大塚古墳」にすでに見られるとして、「早期古墳」の呼称および概念を提唱した<sup>61)</sup>。先の「発生期古墳」の語もこれに近い意味で使用されたものと思われる。このように、当時、古墳という用語については現在のようにほぼ限定的な使用状況ではなく、研究者それぞれによってさまざまな用語法があったことが窺い知れる。そして、弥生時代の高塚の発見によって、どこからを「古墳」および「古墳時代」とするか、ひいては古墳時代と弥生時代をいかに峻別するかが大きな問題となってきた。ただし、本来ならば用語の問題はともかく、弥生時代後期という時期に大きな墳丘が築造されていたという事実自体をどのように受け止めるかが、本質的に問われなければならなかったのだろう。

#### 註

52) 大場磐雄 1964「東京八王子発見の方形周溝特殊遺構」『日本考古学協会 39年度大会発表要旨』

53) 大場磐雄 1965「方形周溝墓」『日本の考古学』Ⅲ 月報3 河出書房

54) 大塚初重・井上裕弘 1969「方形周溝墓の研究」『駿台史学』第24号

55) 門脇俊彦 1971「順庵原一号墳について」『島根県文化財調査報告』第7号 島根県教育委員会

- 56) 近藤 正 1972『仲仙寺古墳群』島根県教育委員会
- 57) 近藤 正 1971「山陰に於ける弥生時代墓制の展開」『日本考古学協会昭和 46 年度大会研究発表要旨』
- 58) 後藤守一 1958「古墳の編年研究」『古墳とその時代（一）』古代史談話会 朝倉書店
- 59) 小林行雄 1959「こふん 古墳」『図解考古学辞典』初版 創元社
- 60) 森 浩一 1986「巨大古墳出現への力」『日本の古代 5 前方後円墳の世紀』中央公論社
- 61) 間壁忠彦・間壁葎子 1977「「大塚」は古墳か否か—黒宮調査整理メモより—」『倉敷考古館研究集報』第 13 号

## 近藤義郎の業績

このような状況下で、墳墓を明確な相対編年のもとに弥生時代のものと古墳時代のものに峻別し、その内容の分析から両者が質的にも区別されることを説き、弥生時代のものを「弥生墳丘墓」として年代的にも質的にも「古墳時代の古墳」と分けて考えたのが近藤義郎である。

近藤はまず、1958 年の都月坂 1 号墳における文様の施された埴輪片の採集を皮切りに、1961 年の伊予部山遺跡、1963 年の宮山遺跡などの資料を加えつつ、円筒埴輪の起源が弥生時代の特殊器台形土器に求められることを確信し、1967 年に春成秀爾との共著「埴輪の起源」<sup>62)</sup>において、立坂型→向木見型→宮山型→都月型という四型式の変遷を明らかにした。また、立坂型が上東式土器併行、向木見型が上東末～酒津式併行、宮山型も酒津式併行、都月型が布留式併行というように、各形式の土器編年との対応関係を示した。これにより各遺跡の時間的位置づけがはつきりするようになった。

次に弥生時代の墳丘を有する墓制については、すでに 1966 年の「古墳発生をめぐる諸問題」<sup>63)</sup>においてその存在を指摘しているが、1977 年の「古墳以前の墳丘墓」<sup>64)</sup>においては弥生墓制の中で主に盛土によって外部と画されているものについて「弥生墳丘墓」の語を使用するようになった。近藤がこの論文の中で弥生墳丘墓の事例として挙げているのは、楯築墳丘墓（双方中円形）、仲仙寺 9・10 号墓（四隅突出型）、西条 52 号墳（前方後円形）、宮山墳丘墓（前方後円形）などであり、その特徴として、墳丘を有すること、突出部を有するものがあること、墳端に列石を有するものがあること、さまざまな器種を含む供献土器群が出土すること、などを挙げ、古墳との共通性と差異性について論じている。この段階ではほぼ現在と同様な「弥生墳丘墓」像が確定した。

その後、1977 年の「前方後円墳の成立」<sup>65)</sup>を経て、1983 年には『前方後円墳の時代』<sup>66)</sup>が出版される。ここでは弥生墳丘墓の諸特徴が述べられた後に、それらとの差異性に注目しつつ「成立期前方後円墳の三つの特質」として次の三点をあげている。すなわち、①鏡の多量副葬指向、②長大な割竹形木棺、③墳丘の前方後円形という定型化とその巨大性、という三点であるが、これらのことは弥生墳丘墓との比較を通してはじめて明確にされ得た特質である。この特質は現在においては布留式併行期に成立する、三角縁神獣鏡が登場し、定型化した巨大前方後円墳が出現した段階の古墳に対応する特質であり、のちにその存在が認識される纏向型前方後円墳は含まれていないことに注意する必要がある。

また、『前方後円墳の時代』においては両者の違いについて、祭祀的な側面からの言及があったことが大きく評価できる。古墳における葬送祭祀の本質を「祖霊祭祀」と規定し、それが弥生墳丘墓に遡って行われていたことを述べている。そして、列島の広い範囲の首長が「共通の祖霊の世界」をもった段階が、古墳時代であるとする。すなわち、近藤の考える「古墳」とは、擬制的同祖同族関係によって結ばれた各地の部族が、

列島の広範囲で共通の祖霊祭祀にもとづく葬送を行った結果つくられたもの、ということができよう。そして、近藤はこの祖霊祭祀にともなって、首長権の継承儀礼が墳墓における葬送祭祀に付随して行われたことを主張しているが、これについては岡田精司の反論があることは序章で述べた通りである。

それはともかく、近藤が墳墓出土土器から儀礼の道具立てを復原し、葬送祭祀の性格を論じ、「祖霊祭祀論」を通じて弥生墳丘墓と古墳の違いを祭祀的側面から説明したことは学史上高い評価を与えられるものであろう。しかし一方で、資料から結論に至るまでの過程が観念的な論拠によって結ばれており、具体的な資料操作に拠っているわけではないという問題があり、考古学的な祭祀研究の発展にはつながらなかった。

#### 註

- 62) 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号
- 63) 近藤義郎 1966「古墳発生をめぐる諸問題」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代(下)』河出書房
- 64) 近藤義郎 1977「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』37
- 65) 近藤義郎 1977「前方後円墳の成立」『慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 考古論集』
- 66) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

#### 都出比呂志の業績

以上が、近藤義郎の一連の業績を要約したものであるが、これによって瀬戸内地方の弥生墓制と古墳との関係が明確になった。近藤のこれらの業績を受けて、都出比呂志はいくつかの研究を付け足し、これを発展的に継承した。都出の古墳出現期研究の前半段階の研究項目は、その後いくつかの論考で補強はされているものの、すでに1979年の「前方後円墳出現期の社会」にその多くが出揃っていると言ってよい<sup>67)</sup>。それを参照すると古墳発生に関わる都出の業績の中で特に注目すべき項目は三点ある。一つめは墳墓における埋葬頭位に注目し、弥生末期のそれに統一性が無いことに反して、畿内における前期古墳のほとんどが北頭位を採用することを明らかにしたこと。二つめは竪穴式石室および粘土槨などの埋葬施設の形態的検討、埴輪の型式・様式的検討、種々の副葬品の組み合わせの検討、などから前期古墳を4期に編年したことである。これらの仕事は都出自身が述べているとおり、小林行雄の前掲の業績を基礎に、京都府向日丘陵の前期古墳の調査で出土した埴輪資料の検討を基にした独自の埴輪編年観を補強材として付け加えたものである。三つめは当時、庄内式の設定など徐々に進められていた畿内の土器編年と先に挙げた前期古墳の時期区分の対応関係を示したことである。当時、古墳出土土器資料は非常に限られており、都出が対応関係の基準としてあげた資料は、箸墓古墳、元稲荷古墳、東大寺山古墳、弁天山C1号墳、池ノ内1号墳のわずか5古墳の出土土器だけであった。にもかかわらず、前期古墳の古い部分の併行関係はほぼ妥当な結果が導き出されており、これにより前期古墳の年代が土器編年と対応させて論じられるようになった<sup>68)</sup>。

なお、のちに都出が、前方後円墳の出現の問題を国家形成過程の議論の中で論じ、古墳の出現を部族連合の結果とみなし初期国家段階として位置づけたことは著名な業績であるが<sup>69)</sup>、本書目的の範疇の外であるので、ここでは詳しくは触れる必要はないだろう。

## 註

- 67) 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号  
都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」小野山節編『王陵の比較研究』京都大学  
都出比呂志 1982「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号  
都出比呂志 1989「前方後円墳の誕生」白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- 68) ちなみに前期後半段階の古墳の土器資料はいまだに充分でなく、土器編年との正確な対応関係はつかめていないのが現状であろう。
- 69) 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第343号

## 土器編年の進展

話が多少前後するが、近藤や都出がそれぞれの論を展開した1960年代後半から1980年代は各地において大規模開発にともなう緊急調査が行われた時期であり、多量の発掘データや考古資料が蓄積された。その主な成果として土器編年の飛躍的な進展が挙げられるだろう。

各地で弥生時代から古墳時代にかけての時期の土器編年に注目が集まった。比較的早くから注目されていたのは吉備における酒津式<sup>70)</sup>、あるいは山陰における鍵尾式<sup>71)</sup>の帰属問題である。これらを弥生土器とするか土師器とするかによって、それらが弥生時代のものなのか古墳時代のものなのかが分かれるからである。以後、土師器の定義、古墳の定義、古墳時代の定義などをめぐって多くの議論が交わされることとなる。そのようななかで田中琢による庄内式土器の提唱<sup>72)</sup>は畿内第五様式と布留式の間を型式学的に充填する結果となり、大きな成果を挙げた。また石野・関川らによる纏向遺跡の調査<sup>73)</sup>では庄内式から布留式にいたる土器編年が整備されるとともに、豊富な外来系土器との相伴関係から各地域間の併行関係について言及された画期的な調査成果となった。また、大和の編年に関して言えば、寺沢薫がより整備された形で再提示している<sup>74)</sup>。それ以後、庄内式土器研究会が発足するなど<sup>75)</sup>、各地で該期の土器編年および地域間の併行関係に関する研究が盛んになり、古墳時代の開始の問題について土器や集落などの墳墓以外の要素から見出される地域間動態から論じる視点が開けてきた。

## 註

- 70) 鎌木義昌 1958「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』1
- 71) 山本 清 1971「鍵尾遺跡出土の土器」『土師式土器集成』1  
藤田憲司 1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号
- 72) 田中 琢 1964「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号
- 73) 石野博信・関川尚久ほか 1976『纏向』榎原考古学研究所編
- 74) 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物49
- 75) 庄内式土器研究会 1992『庄内式土器研究』I

## 寺沢薫による纏向型前方後円墳の提唱

また、纏向遺跡では纏向古墳群の調査により、纏向石塚を中心とする狭小な前方部をもつ前方後円墳の一群が、箸墓古墳に先行あるいは併行して築造されたことが、周溝出土土器などから确实視されるようになって

た。これをうけて寺沢薫は後円部径と前方部長の比が2 : 1を示す一群の前方後円形墳を纏向型前方後円墳と命名し、箸墓古墳のように定型化した前方後円墳に先がけて全国的に広がったという見解を示した<sup>76)</sup>。ここにおいて、古墳の出現をめぐって今ひとつの段階設定の可能性が示唆されたといつてよい。すなわち布留式併行期段階における箸墓以降の定型化した前方後円墳をもって古墳の出現とするのか、あるいは庄内式併行期の定型化以前の「前方後円墳」をみとめて古墳の出現とするか、の二者である。この問題について、たしかに西日本においては定型化した前方後円墳の出現の方がより明確な画期として捉えられるが、東日本においては庄内式併行期における神門古墳群のような墳丘をとまなう前方後円形墳丘墓の出現の方が前代の墓制との差異性が明瞭であり、ここから古墳とする意見も根強い<sup>77)</sup>。

#### 註

76) 寺沢 薫 1988「大和—大和における状況と纏向型前方後円墳の出現と拡散の意義(要旨)」『第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制 第三分冊—発表要旨—』

77) 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して—」『古代』77号

### 赤塚次郎の業績

このような情勢の中で赤塚次郎の1990年代の業績は大きな役割を果たした。赤塚次郎の行った数々の研究の中で、古墳出現に関わる問題において特に評価されるのは東海西部にける土器編年の整備<sup>78)</sup>と前方後方墳の初源理解の転換<sup>79)</sup>であろう。前者においては庄内式併行期から布留式併行期にいたる廻間様式を三段階に区分し、さらに細別様式を設けた。それによって、東日本各地で見られる東海西部系土器群のおよその併行関係が分かり、廻間編年を媒介にしてそれ以西の土器編年と東日本各地の土器編年の併行関係がおおよそつかめるようになってきた。これにより、東日本における古墳の出現が西日本とほぼ変わらない古さまで遡ることが判明してきたのである。

また、もう一つの前方後方墳については1950～60年代に大塚初重によって集成され、その問題点の多くは指摘されていたが<sup>80)</sup>、1970年代以降に増加してきた前方後方形周溝墓と高い墳丘をもった前方後方墳との関係が不明瞭のままであった。それまで前方後方墳は前方後円墳の亜流として位置づけられていたため、巨大前方後円墳出現以前の周溝墓的な前方後方形の遺構をどのように解釈したらよいのかが研究者にとってとまどいだったと思われる。赤塚次郎は方形周溝墓の一隅に陸橋をもつタイプからしだいに前方部へと発達する型式変化を想定し、前方後方墳が前方後円墳とは全く異なる系列で誕生したことを主張した。その型式変化の過程や、前方後方墳の起源が東海西部地方にあることなど、まだ検証すべき内容を多く含む主張であるが、赤塚の前方後方墳論は、古墳はすべて畿内から発したとする従来の常識的な見解を打破したという点で、研究史者の心理に大きな変化を与えたと言えよう。

#### 註

78) 赤塚次郎 1990「考察 廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

79) 赤塚次郎 1988「東海の前方向後方墳」『古代』第86号

赤塚次郎 1989「前方後方墳覚書'89」『考古学ジャーナル』307

赤塚次郎 1991「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号

80) 大塚初重 1956「前方後方墳の成立とその性格」『駿台史学』第6号

大塚初重 1962「前方後方墳序説」『明治大学人文科学研究所紀要』第1冊

## 北條芳隆の業績

このような東海西部の動きに影響されてか、四国北東部において古墳時代前期におけるかの地の独自性を追求する研究が盛んとなり、北條芳隆によって「讃岐型前方後円墳」が提唱されることとなる<sup>81)</sup>。讃岐型前方後円墳の特徴として、①前方部が尾根の上方に寄せられる、②細く長く撥形に開く前方部をもつ、③白色円礫の墳頂平坦面への敷設、④埋葬頭位が東西方向優位、⑤鏡1面のみの副葬、などを挙げ、さらに当地域における弥生墳丘墓との連続性を重視して畿内とは別系列で在地で発達した前方後円墳との評価を下している。また、北條は箸墓類型以後の畿内型前方後円墳を「第2群前方後円(方)墳」「真正前方後円(方)墳」とし、それに対して讃岐型前方後円墳や東日本に多い小型の前方後方墳、あるいは纏向型前方後円墳など、布留式以前から各地域で展開しているものを「第1群前方後円(方)墳」として、系列上区別した<sup>82)</sup>。このことは、それまで前方後円墳か前方後方墳かといった基本的な墳形によって墳墓を分ける考え方に対して、墳形のみならず墳墓の様々な要素、あるいは墳形の細部のちがいに注目した、より質的な系列区分が行われたという点で大きな成果と評価できる。この北條の作業によって、前方後円形あるいは前方後方形の墳墓は箸墓古墳の成立に先立って列島の広範囲において多元的に出現したことが明確にされたと言えよう。

## 註

81) 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』

大阪大学考古学研究室

82) 北條芳隆 1992「弥生末期の墳墓と前方後円墳」『古備の考古学的研究(上)』山陽出版社

北條芳隆 2000「前方後円墳における二者」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通著『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革』

青木書店 95～109頁

## 前期古墳の多様性

さて、これまで当該期の墳墓の各要素について数多くの研究がなされてきた。そのなかでやはり注目されてきたのは墳丘・副葬品・埋葬施設・埴輪の4要素であろう。このうち副葬品や墳丘築造規格にかかわる研究は、葬儀時および生前の首長間における贈与交換の体系から政治状況を復原するという小林行雄以来の方向性をつらぬいている。また、墳丘構造や埋葬施設および埴輪の生産に関わる研究は、広義には墳墓祭祀の研究に含まれるけれども、どちらかといえばそれは古墳の構築技術にかかわる問題であるため、狭義には祭祀研究とは言いがたい。振り返ると、現在までの古墳出現期における墳墓研究の大半はこの二者に含まれるものであり、実は墳墓における葬送祭祀を正面から取り扱った研究は非常に少ないというのが現状である。

土器編年や弥生墓制研究の進展とともに、1980年代および90年代は各地で弥生墳丘墓や出現期古墳の重要な発掘調査が相次いだ。その主なものだけでも、神門古墳群(千葉県、1975～83)、楯築墳丘墓(岡山県、76～89年)、萩原1号墓(徳島県、1980～81年)、鶴尾神社4号墳(香川県、1982年)、西谷3号墓(島根県、

1983～93 年)、津古生掛古墳(福岡県、1985～86 年)、廻間 SZ01(愛知県、1985 年)、芝ヶ原古墳(京都府、1986 年)、権現山 51 号墳(兵庫県、1989 年)、雪野山古墳(滋賀県、1989～92 年)、矢藤治山墳丘墓(岡山県 1990～92 年)、園部黒田古墳(京都府、1990 年)、中山大塚古墳(奈良県、1993～94 年)、西求女塚古墳(兵庫県、1993～95 年)、高部古墳群(千葉県、1993～94 年)、ホケノ山古墳(奈良県、1995～2000 年)、西上免古墳(愛知県、1995 年)、象鼻山古墳(岐阜県、1996～98)、安満宮山古墳(大阪府、1997 年)、東殿塚古墳(奈良県、1997 年)、黒塚古墳(奈良県、1997～99 年)、秋葉山 3 号墳(神奈川県、1997 年)、大風呂南墳墓群(京都府、1998～99 年)、赤坂今井墳丘墓(京都府、1998～2000 年)など、まさに目白押しである。いずれも重要な発見があったばかりでなく、この 20 年程で各地域における弥生墳丘墓および前期古墳の多様性が浮き彫りになってきたといえよう。

こうした動向のなかで近年ようやく墳墓における土器を使用した祭祀・儀礼に対する関心が深まってきた。それは、土器編年の整備により出土土器によって墳墓の年代を決定することができるようになったために、土器の出土状態に対する関心が相対的に高まったことがきっかけではあるが、近藤義郎<sup>83)</sup>や渡辺貞幸<sup>84)</sup>らによる弥生墳丘墓における土器を使用した儀礼の検討から、墳墓の祭祀的系統を追及する気運が高まってきたことが直接的な要因と言えるだろう。筆者の研究もこうした流れの中で位置づけられる。

弥生時代から古墳時代前期にかけての墳墓における葬送祭祀儀礼の系統整理は、小嶋芳孝<sup>85)</sup>や川上洋一<sup>86)</sup>らのような一部の研究を除いて、これまで各地域で個別的に、相互に連絡なく、多元的に行われてきており、同一の方法論に立脚した体系的な作業はほとんど行われてこなかった。しかし、これまでの研究においてその多様性が浮き彫りになった当該期の墳墓の系統整理を行うためには、物質的な側面も重要だが、それらの墳墓がどのような精神的・思想的背景の下で築造されたのかを調べるからこそ重要なのではないだろうか。これが前期古墳の研究史を振り返ることによって得られた、墳墓における葬送祭祀儀礼の研究の意義といえるだろう。

#### 註

83) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

84) 渡辺貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」『島根県考古学会誌』第 10 集

85) 小嶋芳孝 1983「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌 26

86) 川上洋一 1995「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析—北部九州と吉備を中心にして—」『考古学研究』第 42 巻第 2 号

## 第2節 墳墓における土器配置の研究史

次に、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓における土器配置の研究にどのようなものがあるのかを述べていきたい。その際に、後段の事例分析にあたる第3～6章において詳細に触れている箇所については、ここでは概述にとどめておく。

### 弥生墓制の土器配置研究

弥生墓制における土器配置研究は北部九州において比較的早くから研究の積み重ねがあった。それは、鏡山猛（1952）<sup>87)</sup>、高倉洋彰（1973）<sup>88)</sup>、石橋新次（1982）<sup>89)</sup>、小田富士雄（1982）<sup>90)</sup>、川上洋一（1995）<sup>91)</sup>らの研究であるが、縄文時代からつづく個々の埋葬施設への土器副葬行為が弥生時代前期にピークをむかえ、中期以降は「祭祀遺構」とよばれる土坑に土器が廃棄された遺構が、集団墓の墓域の外縁もしくは中に複数個営まれることを明らかにしている。これらの祭祀遺構の位置づけについては、石橋新次が、葬送に伴う祭祀に使用した土器群を一括廃棄したという基本的な性格付けをしている。

畿内における「方形周溝墓」出土土器についての祭祀的な研究は、田代克己（1985）<sup>92)</sup>、辻本宗久（1987）<sup>93)</sup>、田中清美（1988）<sup>94)</sup>、大庭重信（1992）<sup>95)</sup>、深澤芳樹（1996a・b）<sup>96)</sup>、大庭重信（2001）<sup>97)</sup>らのものがある。これら一連の研究における問題提起となったのは田代の研究であろう。田代（1985）は方形周溝墓から出土する土器に対して、状況の検討なしに「供献土器」という呼称を用いる研究姿勢を批判し、周溝中からほとんど接合できない土器片が多量に出土するような状況について、祭祀に使用した土器を「穢れ」除去のために破壊して廃棄したものという認識を示した。そして、祭祀の具体像については、調理器や供膳具の存在から「魏志倭人伝」にみられる「歌舞飲酒」などの葬送記事との関連性を示唆した。これをうけて、辻本（1987）は「方形周溝墓」出土土器の中には田代の指摘する廃棄された土器と、意図的に設置したような供献土器の両者があるとし、田中（1988）は穿孔・打欠土器の墳墓での配置状況を具体的に検討した。大庭（1992）は「方形周溝墓」から出土する土器のうち「壺 D」とよばれる装飾性の無い広口壺が、墳墓においてのみ煤が付着する傾向が高いことを示し、墳墓の祭祀において何らかの煮沸行為が行われたことを証明した。また、大庭（2001）は近年の加美遺跡における墳丘が遺存している「方形周溝墓」の調査において、墳丘構造とのかかわりをも含めた土器の出土状況を検討し、墳丘築造から各埋葬、墳丘の拡張などの時系列にそって、格段階ごとの土器を使用した祭祀のあり方を詳細に検討している。なお、深澤（1996a・b）の研究は京都府亀井盆地の千曲川遺跡における「方形周溝墓」出土土器のうち、供献されたと考えられる土器を抽出し、その出身地を分析することによって、葬送祭祀にみられる地域間関係を追及している。

四国北東部については、中期からみられる「集石土壙墓」における土器の破碎と火の使用を伴う儀礼の存在が明らかにされている。石川直章（1990・91）<sup>98)</sup>や栗林誠治（2003）<sup>99)</sup>の研究に詳しいが、その詳細は第3章第3節に譲る。なお、終末期から古墳時代前期にかけての首長墓における土器配置については大久保徹也が画期のあり方に重点を置いて論述している<sup>100)</sup>。

吉備における墳墓出土土器から祭祀・儀礼にせまる研究については近藤義郎の一連の業績がある。近藤は吉備の弥生墳丘墓における葬送祭祀儀礼の画期を特殊器台や特殊壺の出現に求め、主に楯築墳丘墓の発掘調査成果からその内容を復原している。それはすでに『前方後円墳の時代』（1983）<sup>101)</sup>の中の「祖霊祭祀」とい



う一文において発表されているが、より具体的に提示されたのは楯築墳丘墓の発掘調査報告書『楯築弥生墳丘墓の研究』（1992）<sup>102)</sup>においてであろう。その中の「埋葬祭祀」という項目の中で、特殊土器類や多量の高杯を使用した共飲共食儀礼を挙行した後に、それらの使用の終わった儀器に穿孔を施し、使用できないようにして、主体部上や墳丘の各所に「片付け」た、という儀礼の流れを復原した。また、「弥生墳丘墓における埋葬儀礼」（1992）<sup>103)</sup>では特殊土器類が前代の器台や壺との型式的な連続性の上ではなく、「突然変異的」に出現し、楯築墳丘墓の儀礼において始めて使用されたことを説く。そして、「特殊器台の成立と展開」（2001）<sup>104)</sup>では立坂型までの特殊土器類が焼成後に穿孔され、向木見型以降は製作時に焼成前穿孔することから、前者は飲食儀礼終了後に穿孔したのに対して、後者は儀礼自身が形式化され、はじめから穿孔を施した象徴化された土器を使用して儀礼が行なわれたと述べた。ところが、「象徴化の話（続）」（2002）<sup>105)</sup>以降では自説を大きく転換し、立坂型の特殊土器類および、それらに伴う儀器は、儀礼の前に丁寧に穿孔され、はじめから象徴化された土器として儀礼に使用されたと考えた。このことについては本書第7章第2節において詳しく考察するが、弥生時代後期の墳丘墓から前期古墳への祭祀儀礼を考える上で象徴化の本質に触れた重要な提言であるといえる。

山陰においては古くから墳墓の主体部上において土器が出土することが注意されてはいたが、土器編年のための資料として考察が進められ、なかなか祭祀的な側面の研究は深められなかった。とくに的場土壙墓の主体部上から出土した土器群は、意図的に配置された状態が確認され、その器種構成とともに墓壙上における土器の供献行為の具体的な姿が把握されたにもかかわらず、儀礼の実態考究までは至らなかった<sup>106)</sup>。しかし、1983年以降継続的に発掘調査された西谷3号墓の2基の中心主体からおびただしい土器が出土するに及び、渡辺貞幸によって首長埋葬にかかわる儀礼行為の痕跡として大きくとりあげられることになる<sup>107)</sup>。西谷3号墓では土器のほか、朱の精製に使用された円礫が土器の下層中央から発見されたことや、墓壙埋め戻し後に墓壙上に一時的に建てられた建築物の巨大な柱穴が4つ検出されたことによって、首長墓における墓壙上の葬送儀礼の実態がみえてきたことが大きな成果である。さらに多量の山陰系土器と共に、吉備や丹後および北陸南西部からの搬入土器が一定量含まれていることから、当時の地域間における首長層の交流関係が把握されたことも重要であろう。

近畿北部の但馬・丹後・北丹波などの地域においては、大規模開発により丘陵上の台状墓群が数多く調査されるようになったため、1990年代以降にいわゆる「墓壙内破碎土器供献」の存在が在地の研究者の注意にのぼるようになったという。そして「墓壙内破碎土器供献」の様相について肥後弘幸が1994年の論考でまとめた結果、学界においても知られるようになった<sup>108)</sup>。その内容の詳細は第3章第6節に譲るが、他地域とは著しく様相が異なる独自の土器配置が明らかになった。

北陸地方における墳墓の土器配置については、古くは王山墳墓群などで、出土土器が注意にのぼっていた<sup>109)</sup>。また、原目山墳墓群<sup>110)</sup>においては墓壙上から月影式土器の良好な一括資料が得られたことで、編年的にも祭祀的な問題としてもひとつの成果となったことは間違いない。しかし、北陸の弥生墓制の研究史上大きな画期となったのは小羽山墳墓群の調査<sup>111)</sup>であろう。小羽山墳墓群においても大型の墳丘墓の墓壙上から40個体を越える土器群が検出され、さらに朱の精製に使用された石杵が存在するなど、西日本の墳丘墓文化との関係性が古川登によって明らかにされつつある。その後も北陸では新資料が相次ぎ、古川<sup>112)</sup>や筆者<sup>113)</sup>により北陸地方南西部の弥生時代後期から古墳時代にかけての様相が整理された。また、新潟県では屋鋪塚1号

墓の発掘<sup>114)</sup>により、墓壙内破碎土器供献が確認され、北陸北東部における弥生台状墓の土器配置の一端が始めて明らかにされたことも、大きな成果であろう。

一方、方形周溝墓が多く営まれた東日本では、関東において出土土器の祭祀的な研究の蓄積がある。先駆的な業績として伊藤敏行による方形周溝墓の総括的な研究の一部として、出土土器の出土状況に関しての考察があり<sup>115)</sup>、また、山岸良二による穿孔土器の分析がある<sup>116)</sup>。近年では立花実<sup>117)</sup>や福田聖<sup>118)</sup>らによる分析があるが、大半は盛土が失われているために、分析対象がほぼ周溝中出土土器に限られてしまうという研究上の制約があり、大きな壁となっている。その詳細は第3章第10節において述べる。

以上が、弥生墓制における土器配置研究であるが、各地域において各研究の系統が個別的に進行しており、田代克己などの一部の先駆的な業績を除けば、各地域間における資料および研究の比較作業や方法論のつき合せなどが行われてこなかったといえる<sup>119)</sup>。こうした状況の中で、筆者は西日本の様相と北陸の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての様相を整理したが<sup>120)</sup>、弥生時代前半期の様相や、東海地方における方形周溝墓の様相など、いまだ未整理の部分を多く残している。今後の課題としたい。

## 註

- 87) 鏡山 猛 1952「甕棺累考（一）その群団と共有体」『史淵』第53輯
- 88) 高倉洋彰 1973「弥生時代祭祀の一形態—甕棺墓地における土器祭祀を中心として—」『古代文化』第25巻第1号
- 89) 石橋新次 1982「佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構」『古文化談叢』第10集
- 90) 小田富士雄 1982「弥生時代北部九州の墳墓祭祀—近年の調査例を中心にして—」『古文化談叢』第10集
- 91) 川上洋一 1995「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析—北部九州と吉備を中心にして—」『考古学研究』第42巻第2号
- 92) 田代克己 1985「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』鳥越憲三郎博士古希記念論文集 雄山閣出版
- 93) 辻本宗久 1987「弥生時代の墳墓祭祀について—大阪湾沿岸地域の資料を中心として—」『花園史学』第8号
- 94) 田中清美 1988「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2 考古学を学ぶ会
- 95) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26
- 96) 深澤芳樹 1996a・b「墓に土器を供えるという行為について（上・下）」『京都府埋蔵文化財情報』第61・62号  
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 97) 大庭重信 2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号
- 98) 石川直章 1990・91「火を伴う葬送についてのノート1・2」『徳島県埋蔵文化財センター年報』1・2  
(財) 徳島県埋蔵文化財センター
- 99) 栗林誠治 2003「弥生時代・東四国における墓制の様相」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』
- 100) 大久保徹也 2000「四国北東部地域における首長層の政治的結集—鶴尾神社4号墳の評価をめぐって—」『前方後円墳を考える』  
古代学協会四国支部第14会大会研究発表要旨集  
大久保徹也 2002「四国北東部地域における地域的首長埋蔵儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集 徳島の考古学』  
徳島の考古学論集刊行会
- 101) 近藤義郎 1983「祖霊祭祀」『前方後円墳の時代』岩波書店 167～174頁参照
- 102) 近藤義郎 1992「埋葬祭祀」『橿原弥生墳丘墓の研究』橿原刊行会 154～157頁参照
- 103) 近藤義郎 1992「弥生墳丘墓における埋葬儀礼」『東アジアの古代文化』73

- 104) 近藤義郎 2001「特殊器台の成立と展開」『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版 136～147 頁参照
- 105) 近藤義郎 2002「象徴化の話（続）」『古代史の海』28 号  
 近藤義郎 2002『楯築弥生墳丘墓』吉備考古ライブラリィ 8 吉備人出版  
 近藤義郎 2003「象徴化の話（続々）」『古代史の海』32 号
- 106) 近藤正・前島己基 1972「島根県松江市の場土墳墓」『考古学雑誌』第 57 巻第 4 号
- 107) 渡辺貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」『島根県考古学会誌』第 10 集  
 渡辺貞幸 1995「西谷三号墓の調査について」『出雲・西谷墳墓群シンポジウム 四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』  
 出雲市教育委員会
- 108) 肥後弘幸 1994 a・b「墓壇内破碎土器供献（上・下）—近畿北部弥生墳墓土器供献の一致相—」『みずほ』第 12・13 号  
 大和弥生文化の会
- 109) 齊藤優・相山林継・武藤正典編 1966『王山・長泉寺山古墳群』福井県教育委員会
- 110) 大塚初重 1986「原目山墳墓群」『福井県史』資料編 13 考古 福井県
- 111) 古川 登 1995「発掘調査と問題意識—小羽山墳墓群の調査から—」『長野県考古学会誌』75 号  
 古川 登 1997「北陸南西部における弥生時代首長墓の認識—北加賀・越前北部地域の事例から—」『考古学研究』第 43 巻第 4 号
- 112) 古川 登 2003「北陸地方における古墳の出現」『風巻神山古墳群』清水町文化財発掘調査報告 VII
- 113) 古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』第 120 号
- 114) 八重樫由美子 2004『屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』寺泊町教育委員会
- 115) 伊藤敏行 1986「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究 I」『研究論集』IV （財）東京都埋蔵文化財センター  
 伊藤敏行 1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究 II」『研究論集』VI （財）東京都埋蔵文化財センター
- 116) 山岸良二 1989「穿孔土器素描」『史館』第 21 号
- 117) 立花 実 1996「「方形周溝墓」出土の土器 南関東①神奈川県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社  
 立花 実 2000a「方形周溝墓の常識」『西相模考古』第 9 号  
 立花 実 2000b「第 V 章第 3 節 方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団
- 118) 福田 聖 1996「方形周溝墓の死者儀礼」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社  
 福田 聖 2004「方形周溝墓と土器Ⅱ—概観 その 1—」『研究紀要』第 19 号 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 119) 非常に広範囲を扱った論文として小嶋芳孝（1983）が挙げられるが、この論文については次項において詳述する。  
 小嶋芳孝 1983「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌 26 号
- 120) 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第 14 号  
 古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』第 120 号

## 前期古墳の土器配置研究

前期古墳の土器配置についてその研究史を振り返ってみると、西日本のそれについては埴輪配置の研究が盛んに行われている<sup>121)</sup>のに対して土器配置の研究は非常に少ない。わずかに主体部内から出土する土器について、田上雅則<sup>122)</sup>や大庭重信<sup>123)</sup>の研究がある。とくに大庭は埋葬施設に配置される土器を貯蔵具（壺・甕）と供膳具（高杯・小型丸底土器・小型器台）とに分け、前者は足元側の棺小口付近にほぼ限定されて置かれるのに対し、後者は棺内・棺外・棺上と、置かれる位置が様々であることを明らかにした。また、前者は埋

葬儀礼に使用された朱を入れて副葬した「朱壺」であることを指摘している。本稿では埋葬施設内に副葬品として納められた土器については分析に加えていないので、大庭の研究を参照してもらいたい。

また、前期後半段階の食物形土製品を伴う土器配置について中條英樹の考察<sup>124)</sup>があるが、それ以前の弥生墳丘墓から受け継がれた土器を使用した祭祀については、ほとんど無いのが原状である。西日本の古墳研究がこれらの分野に目を向けてこなかったのは、良好な資料の蓄積が80年代後半以降のことであったことにも起因するのだろう。前期古墳における土器の出土状況についての研究の蓄積は、むしろ埴輪や副葬品に乏しい東日本において行われてきたのである。

東日本においてこのテーマにいち早く取り組んだのは小林三郎と岩崎卓也である。

小林三郎<sup>125)</sup>は古墳から出土する土器を「古墳墳丘における葬礼によって埋置される土器群」と「副葬品として遺骸とともに埋葬されたもの」とに二分している。さらに前者の土器群を①「主体部上に埋置された土器群」と②「儀器化された壺形土器」によって代表される二者に細別し、①は高杯、埴、器台などを中心とする土器群で、方形・円形周溝墓出土土器と共通し、②の壺形土器はおおよそ儀器化されたものが墳頂周縁もしくは墳丘の段、裾などに配列されたものと推察した。また、日常用具としての土器が葬送儀礼に参加する中で、あるものが儀器化するという流れの中に古墳成立の問題が隠されている、という重要な指摘をしている。

岩崎卓也<sup>126)</sup>も古墳における土器祭祀が古墳出現の問題と密接に関わるものという観点から分析を行った。その分類は、Ⅰ埋葬施設内に副葬されるもの（a 通有の大きさ、b ミニチュア）、Ⅱ埋葬施設外に置かれたもの（a 墳頂・埋葬施設上、b 墳頂近くの特別施設、c それ以外の墳域）である。この中で岩崎が分析したのはⅠa・Ⅰb・Ⅱaのみで、他は省略されている。Ⅱaとして分類された主体部上の土器群を「神人共食」の具とし弥生時代からの系譜につらなるものと捉えており、この中で高杯を含む例は「共食→供献」の流れを示すものとしている。Ⅰに分類した埋葬施設内の土器については弥生時代からの系譜とは捉えずに、小型埴が多いことから「倭政権による儀礼整備に基づく一姿相」と捉えている。なお、壺形土器の配列に関しては埴輪的なものとしてほとんど触れられていない。

この小林と岩崎の論考は大変近い時期に世に出たもので、お互いに関連性はないと考えられるが、その分類方法は類似している部分が多い。この1970年代初頭の二論考において、すでに主体部上土器群、壺形土器による墳丘圍繞配列、埋葬施設内に納められた土器、の基本的な三分類がすでに抽出されており、のちの土器配置研究の基礎ができあがっていたといえる。

なお、1970年代の関連する論考として小室勉の「墳丘外表土器群の一考察」<sup>127)</sup>が挙げられる。小室は関東地方の古墳において主体部上から土器が出土した事例を集成し、茨城県諏訪間遺跡の土器の出土状況がこれらと共通することを確認した。その上で、主体部上から出土する土器片が接合しないことから、別の場所において破碎されたものを古墳に持ち運んで、埋葬終了後に墓壙上に散布した、と考えた。このような主体部上への破片散布については大塚初重がすでに能満寺古墳の発掘調査<sup>128)</sup>の結果から推定しているが、小室はさらに一歩進んで、それらの土器が殯において使用されたもので、殯終了後に破碎されたと推察している。しかし、実際に殯に関連する遺構を検出したわけではなく、推察の域を出ないが、墓域以外の場所における葬送儀礼の全体像をも視野に入れた重要な指摘といえる。

1980年代以降では、まず塩谷修の研究が注目される。1983年の論考<sup>129)</sup>は具体的な資料分析から関東地方

の前期古墳の動態を探り、この分野の基本的な方法を示したものとして高い評価を与えることができる。塩谷の分類は以下のとおりである。

A類 埋葬施設上に埋置されたもの

A1 壺形土器、器台形土器、高坏形土器のセット関係を充足するもの

A2 セット関係を充足しないもの

B類 くびれ部、前方部先端を中心とした埋葬施設以外の特定の場所に置かれたもの

C類 墳頂部周縁あるいは墳丘周縁に配置・配列されたもの

A1からA2への変化は儀礼化の進展とし、全体的にA類からC類に向かって仮器化の進行と地域差の解消が見られるので、A1→A2→B→Cという変遷を想定した。また群馬県域ではA類が全く見られずC類が多いことから、他の地域とは違った古墳の出現の仕方を示唆している。

塩谷の1990年の論考<sup>130)</sup>では、先にA類とした主体部上で行われる「土器祭祀」の系譜を山陽、山陰に求め、関東への波及については東海西部地方が媒介になったとする。

塩谷のほかに東日本における墳墓の土器配置をテーマとした研究は駒見佳容子(1985)<sup>131)</sup>と山本靖(1993)<sup>132)</sup>のものがある。駒見はそれまでの研究を総括し、穿孔土器の意義に触れ、弥生時代中期の方形周溝墓から古墳時代中期の「埴輪祭祀」に至るまでの葬送祭祀の流れを追った。その結果、埴輪祭祀の受容を大きな画期とみとめ、中期に始まる他の要素も併せて、その段階を畿内政権の確立と見ている。山本靖は埼玉県域における「土器祭式」の分析を試み、小玉地域周辺では塩谷分類のA類→B類、荒川流域ではB類→C類の変遷がたどれる事を指摘した。

なお、前期古墳及びその前段階の墳墓の祭祀を扱った論文として注目すべきは小嶋芳孝の「埴輪以前の古墳祭祀」(1983)<sup>133)</sup>であろう。小嶋は埴輪が普及する以前の「古墳祭祀」の内容を把握するために各地の墳墓から出土する「供献土器」の内容を検討した。対象とした地域は、北陸の資料を中心に北部九州、山陽、山陰、近畿、東海、関東と非常に広く、他に類を見ない業績となっている。また、土器編年および各地域間の併行関係が今ほど正確に把握されていなかった当時において、庄内式併行期以前をⅠ期、布留式併行期以降をⅡ期とし、その比較によって分析を進めている。たった二時期区分であるが、現在の目から見ても正確な時期決定を下していることも評価できよう。ただし、小嶋の研究は祭祀研究を行う際に必要な理論的前提が皆無で、「古墳祭祀」という用語の具体的説明が無いばかりか、「埴輪」や「供献土器」が「古墳祭祀」においてどのように使用されたのかという考察がない。また、分析項目は古墳から出土した土器そのもの及び、器種構成のみにとどまっている。さらに埴輪と土器という二者択一的なフレーズの中で論述が進み、あたかも両者の形態的な差のみを論じているようであり、「古墳祭祀の様式として埴輪祭祀が波及する以前に、畿内系有段口縁壺を中心とする祭祀が広く行われてきた」という結論が示すとおり、より本質的な差である配置方法の違いについては触れられていない。

註

121) 三木文雄 1958『はにわ』講談社

- 春成秀爾 1977「埴輪」『考古資料の見方《遺物編》』地方史マニュアル6 柏書房
- 稲村 繁 1984「埴輪部に配置された埴輪について—方形埴輪列を中心に—」『史学研究集録』9 國學院大學大学院
- 坂 靖 1988「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館
- 橋本博文 1992「埴輪の配列」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣
- 高橋克久 1996『歴史発掘9 埴輪の世紀』講談社
- 高橋克久 1999「埴輪と古墳のまつり」『古代史の論点』5 小学館
- 坂 靖 2000「埴輪祭祀の変容」『古代学研究』第105号
- 広瀬 覚 2002「前・中期古墳の埴輪配列—畿内を中心に—」『季刊考古学（特集・埴輪が語る古墳の世界）』第79号 雄山閣
- 122) 田上雅則 1993「前期古墳にみられる土師器の「副葬」」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』
- 123) 大庭重信 1996「雪野山古墳にみる土器副葬の意義」『雪野山古墳の研究 考察編』雪野山古墳発掘調査団編 八日市市教育委員会
- 124) 中條英樹 2003「土製品からみた埴輪における儀礼について」『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 125) 小林三郎 1972「古墳出土の土師式土器Ⅰ」『土師式土器集成』本編2 東京堂出版
- 126) 岩崎卓也 1973「古式土師器再考」『史学研究』91 東京教育大学文学部
- 127) 小室 勉 1972「埴丘外表土師器群の一考察」茂木雅博編『常陸須和間遺跡』雄山閣出版
- 128) 大塚初重 1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第1巻第3号
- 129) 塩谷 修 1983「古墳出土の土師器に関する一試論—関東地方の古式土師器を中心として」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編
- 130) 塩谷 修 1990「関東地方における古墳出現の背景」『土浦市立博物館紀要』第3号
- 131) 駒見佳容子 1985「葬送祭祀の一検討—関東地方を中心として」『土曜考古』第10号
- 132) 山本 靖 1993「埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相」『研究紀要』第10号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 133) 小嶋芳孝 1983「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌26号

## 問題の所在—方法論の整備のために—

これまで述べてきた研究史を振り返ると、およそ次のような問題が指摘できる。

ひとつは、用語の定義・位置づけの不徹底である。これは特に東日本における研究に著しい問題であろう。各研究者は「古墳祭祀」・「土器祭祀」・「土器祭式」・「埴輪祭祀」などの用語を何ら説明もなしに使用するが、それらの語が表す行為が具体的に当時の人々のどのような行動を意味しているのかを考えたとき、これらが非常に不適切な用語法といわざるを得ない。筆者は考古学的手法によって祭祀研究を試みる場合には、発掘調査あるいは遺物の整理によって得られたいわゆる考古資料的データを表現する用語と、そこから復原されるより上位の研究段階に属する用語を、しっかり区別し、その関係性を説明した上で使用すべきだと考えている。実際には前者については考古学上の用語を使用し、後者については祭祀研究ということなので宗教学あるいは宗教社会学など、祭祀に関連する諸分野によって定義された用語法にのっとって使用すべきであろう。そのように考えると、我々が墳墓の発掘調査において発見する土器とは、本来、飲食儀礼であったり、食物供献儀礼であったり、様々な儀礼に使用された容器であることが第一義なので、そのような儀礼を行った祭祀を「土器祭祀」と呼称するのは明らかに不適切であろう。また、「埴輪祭祀」や「埴輪祭式」という用語もよく見かけるものだが、その用語法について深く考察した例を知らない。筆者もその用語法の個々のケースにおける是非は未だ検討していないが、前期古墳において一定度、円筒埴輪が普及した段階における円

筒埴輪配列を指して「埴輪祭祀」と呼ぶことに抵抗を感じる。それは後段でも述べるとおり、その段階の埴輪配列自体から祭祀的な性質が退色し、古墳の外部施設のうちの一つとして整備されるようになったと考えるため、埴頂や造り出しの家形埴輪を中心とする祭祀的性格が濃厚な形象埴輪群と同列には捉えられないと考えるからである。少なくとも「祭祀」という観念的な用語と、「埴輪」という器物を表す考古学的な用語との関係性を説明したうえで使用すべきものと思う。

次に配置の系譜に関する問題である。塩谷は 1983 年の論考<sup>134)</sup>の方法の骨子として、次のように述べている。

「古墳出土土師器の年代観は、本来土師器を伴う葬送祭祀形態の変遷の中で捉えられるべき問題であり、個々の土器型式それ自体を問題にする以前に、土師器群の出土状況、あるいは器種組成と言った何らかの形で葬送祭祀の実態を示すと思われるものからその変遷を辿っていかなければならないものと思われる。」

この塩谷の方法は土器編年が現在ほど整備されておらず、土器自身による年代決定が困難だった段階においては妥当なものであるが、当時から飛躍的に編年網が整備された今日では、むしろ個々の資料の年代的位置づけは土器編年にしたがって行い、時間空間の中に各資料を配列し、各祭祀の動向を追うべきであろう。さらに土器編年が整備されていない時期の研究であるがために、塩谷は先に述べた A1・A2・B・C という配置類型を一系統の祭祀と捉えていたが、このことも土器編年上で個々の資料を配列していけば、それぞれが併行関係をもって多元的に行われていたことがわかるのである。この実態は後段、第 5 章および第 6 章で述べることになる。

以上の研究史上の問題点を踏まえて、筆者は 1998 年の論考「墳墓における土器配置の系譜と意義」<sup>①</sup>において、東日本の前期古墳における土器を使用した祭祀の系譜を分析する上で、用語の定義と方法論を提示した。以下に要約すると、まず「祭祀」・「儀礼」については、「まつる」行為と精神的・思想的側面も含めた総体として「祭祀」を定義し、「まつる」行為のうち一定の形式をもったものを「儀式」として定義した。つまり「儀式」は「祭祀」の行為的側面の形式化されたものを表すとしたのである。そして、われわれが扱う考古資料は「儀式」のうち物的証拠として残される何らかの痕跡であると説明した。そして、考古学的に把握できる土器の出土状況については、これを「祭祀」や「儀礼」など祭祀的な用語で呼称することを避け、「土器配置」という用語で統一して呼ぶことにし、各土器配置の特徴を分析することによって、それらがどのような儀礼を行った祭祀の痕跡なのかということを考察した。

しかし、この論考においては方法論上の欠陥があった。それは先学が示してきた土器の出土状況の分類を整理し提示したが（図 1）、これらの分類があくまでも土器が出土した状況の分類にしかすぎないにもかかわらず、それぞれを「土器配置類型」とよび、あたかもその分類ひとつひとつが一種の儀礼であるかのような位置づけをしたことである。このことについては次に西日本の弥生墳丘墓の土器配置を分析した際に、渡辺貞幸の論考「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」（1993）<sup>135)</sup>中の次のような言説に接して考え方を改めた。

「(墓墳上の) 土器群の出土状況からすると、土器はきちんと並べられたわけではなく、かなり無造作に集積されたようである。私たちが発掘によって検出したのは、墓上の祭祀そのものの姿ではなく、祭儀後の後片付けされた状態なので

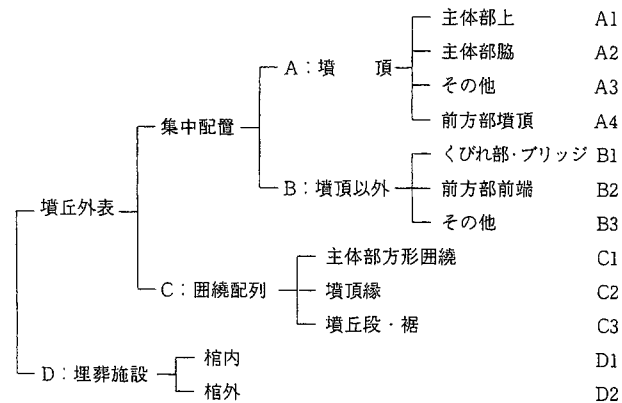


図1 土器・埴輪配置位置の分類

ある。」

さらに、筆者が分類したのは土器が配置される位置のみであって、本来ならば儀礼の特徴を表現するためにはもっと多くの要素について検討する必要があることに気づいた。そして、「土器配置」という概念は配置位置にとどまらず、もっと多くの特徴によって規定されるべきだと考え、その概念の枠を広げることにした。そうして2002年に発表した「古墳出現前後の葬送祭祀」<sup>③</sup>では分析方法の骨子として次のように述べた。まず、「具体的な現象としての土器の出土状況はとりあえず「配置」という概念でうけとめ、そこから想定できる「供献」・「埋納」・「廃棄」などの解釈はひとまず排除」すること。次に、個々の土器配置を特徴付ける検討要素として、①配置位置、②器種構成、③使用土器系譜、④出土時の状態、⑤墳墓の階層性との関係、の5項目をあげ、これらを検討してから類型化するという手続きを踏むこと。そして最後に「類型化された資料群が時間的・空間的にどのような分布を示すかを調べ、一定の共通した志向性を認識できるものについて、その背後に特定の「祭祀」を認定する」として、「考古学的祭祀」ともいうべき概念の把握方法を提示した<sup>136)</sup>。

以上が、筆者がこれまでの研究で考えてきた、墳墓における土器あるいは埴輪を使用した祭祀・儀礼の分析方法である。本書では基本的にこの方法を踏襲するが、若干の修正などがあるために第2章において改めて正式に提示することにした。以上の方法を用いて、弥生時代から古墳時代前期にかけての「土器配置」の系譜関係を調べることにする。その際には「土器」・「埴輪」の区別や、「周溝墓」・「台状墓」・「墳丘墓」・「古墳」などの各種の墓制を表す名称など、あるいは「西日本」・「東日本」などの地域的な差、さらに「弥生時代」・「古墳時代」という時代区分にも捉われることなく、それらの語句がもたらす先入観を廃して、同一の視点、同一の分析方法によって体系的に分析することを心がけた。このことが、本研究の意義であり、また特色ともなるだろう。

なお、これまで筆者が発表してきた論考などについて以下に列举し、その内容の略示した。本書はこれらの成果を総合して新たに書き下ろし、若干の補完を行ったものである。上文中の上付きの○で囲まれた番号は以下の論文を示している。

①「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本における古墳時代の開始」『駿台史学』第104号



駿台史学会 1998.9

※東日本の畿内系二重口縁壺の型式学的編年・東日本の古墳時代前期の墳墓の土器配置分析

- ②「墳墓における土器配置から古墳時代の開始に迫る」『弥生の『ムラ』から古墳の『クニ』へ』大学合同考古学シンポジウム実行委員会編 2002.2

※西日本の弥生時代～東日本の古墳時代前期の土器配置の概観

- ③「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号 日本考古学協会 2002.11

※西日本の弥生時代後期～古墳時代前期の土器配置の分析

- ④「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』第120号 駿台史学会 2004.2

※北陸地方の弥生時代後期～古墳時代前期の土器配置の分析・東日本の出現期古墳の土器配置の系譜

- ⑤「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質—関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に—」『土曜考古』第28号 土曜考古学研究会 2004.5

※関東・東北地方における古墳時代前期の底部穿孔壺による圍繞配列の分析

- ⑥「土器・埴輪配置から見た東日本の古墳の出現」『東日本における古墳の出現』東北・関東前方後円墳研究会編 六一書房 2005.5

※東日本の前期古墳における土器配置の系譜、特にその起源について

- ⑦「弥生墳墓の土器配置にみる祭祀」『季刊考古学（特集・弥生墓制の地域における新展開）』第92号 雄山閣出版 2005.7

※土器配置研究の方法の再提示・弥生墓制の土器配置概観

## 註

- 134) 塩谷 修 1983「古墳出土の土師器に関する一試論—関東地方の古式土師器を中心として」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編
- 135) 渡辺貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『島根県考古学会誌』第10集
- 136) このような筆者の方法に対して、北條芳隆氏より電子メールにて以下のようなご指摘をいただいた。それは筆者が土器・埴輪配置から「祭祀」を定義していることについて、土器や埴輪の配置から考えられる祭祀はあくまでもそれらの側面での表徴であって、「祭祀の総体」ではない、という指摘である。確かに筆者も、土器配置は古墳における祭祀全体のなかでの一部の儀礼行為の痕跡であると考えてるので、北條氏の指摘は的確なものとして受け止めている。この問題については、第2章第2節においてあらためて述べることにする。

なお、筆者の研究のあとには、君嶋俊行氏が関東地方と美作地域の底部穿孔壺による圍繞配列について、さらに検討を進めている。

君嶋俊行 2002「関東地方における壺形埴輪の成立過程—「圍繞配列」の受容と歴史的意義—」『土曜考古』第26号

君嶋俊行 2004「川東車塚古墳における二重口縁壺形土器の圍繞配列」倉林眞砂斗・澤田秀実・君嶋俊行編『川東車塚古墳の研究』吉備人出版

## 第2章 土器配置研究の方法と墳墓編年

### 第1節 用語の定義（1） —「祭祀」と「儀礼」—

第1章第2節において研究史の問題点を整理し、そのなかでこれまでの研究がとくに「祭祀」や「儀礼」といった用語の定義や説明をしていないことが大きな問題であると指摘した。したがって、考古学的祭祀研究をはじめるにあたり、「祭祀」・「祭式」・「儀礼」・「儀式」などの用語の整理がまず必要であろう。

これらの用語のうち重要なのは「祭」と「儀」の二語の意味であろう。このふたつの語を『大漢和辞典』<sup>137)</sup>で引いてみると、それぞれ多くの意味があるが、祭祀研究において使用するにふさわしい意味として次のようなものがある。「祭」は「まつる」あるいは「まつり」であり、まつる対象として神や先祖などが挙げられている。一方、「儀」は「のり」、「のつとる」、「かたどる」などであり、きまった作法や形式的な動作と言えそうである。従って、両者は次元が異なる語句であり、「祭」の中の決まった動作や作法を指して「儀」という用語を使用するのが正しいあり方であろう。

次に「祭祀」と「祭式」について考えてみよう。同じく『大漢和辞典』では「祭祀」について「神や祖先のまつり。」と説明しているから、ほぼ「まつり」と同義で使用して良いだろう。ところが「祭式」については「まつりの儀式」と説明しているのでこちらは「祭」と同義で使用するわけにはいかず、「祭における儀式」の略語とも言えそうだ。よって本研究では、混同しないように「祭式」という用語は使用しない。

それでは「儀礼」と「儀式」はどのような違いがあるのだろうか。『大漢和辞典』では「儀式」を①「のつとる」・「のり」・「おきて」、②「礼儀のしかた」・「作法」、③「式典」、と説明している。一方、「儀礼」は「儀式」と同義であると説明している。ということは、両者は同義語として使用してよいかということが問題になろう。この点について少し異なる方面から考察する必要がある。それは「儀礼」や「儀式」という用語は「祭祀」とことなり、どちらかといえば漢字研究や神道学ではなく、文化人類学や社会学において定義づけがされてきた用語であるので、そちらの方の言説を参考にしてみよう。

まず青木保は『社会学事典』の「儀礼」の項目で「儀礼」と「儀式」の関係について次のように整理している<sup>138)</sup>。すなわち、二つの語の関係性には二つのパターンがある。ひとつは両者を異なる意味で使用方法で、その場合の「儀礼 ritual」は宗教的、「儀式 ceremonial」は世俗的・社会的という区別で使用するというものである。もう一つのパターンとしては、「人間の形式的行動一般」を指す広義の用語としての「儀礼」があり、その中に「象徴的な性格の強い形式的行動」を指す狭義の「儀礼」と、「社会的性格の強い形式的行動」を指す「儀式」、という二つの用語が含まれるとする考え方である。そして、青木は後者のパターンの方が適当であるとしている。

青木が説明している広義の「儀礼」という用語には、例えば、あいさつのような、日常生活における形式的行動も含まれており、我々が普段使用する「儀礼」という用語よりもはるかに広い意味を内包している。ところが、学術用語としてはこちらの方が一般的であり、たとえば、

「儀礼といえば従来宗教儀礼と同義とされたが、あいさつに代表される儀式的行動や直接宗教とは関係のない世俗的な

行事も含まれ、文化のなかの形式化された行動の広い範囲に及ぶ」

梶原景昭「儀礼」『文化人類学事典』<sup>139)</sup>より

「儀礼とは、ある特定の状況のもとで、その状況に固有な秩序だった様式をもつ人間の行動のこと」

真野俊和「儀礼と行事」『日本宗教事典』<sup>140)</sup>より

などのように広い意味で説明されることの方が多い。しかし、本研究においては広い意味で「儀礼」という用語を使用すると大変な混乱が予想されるので、本書では青木の言う狭義の「象徴的な性格の強い形式的行動」という意味で「儀礼」という用語を使用する。なお、その意味で「儀式」という言葉は宗教的な「儀礼」よりも社会的な意味合いが強いという説明がされているので、こちらは使用しないことにする。本書の目的とするところは本来、宗教的意味合いの強いと思われる葬送祭祀の研究であるため、「儀礼」という一語で充分用が足りると思われる。

最後に「祭祀」と「儀礼」という二語の関係性についてであるが、これについては上記の考察を踏まえて次のように定義したい。すなわち、「祭祀」はまつりの精神的・思想的側面と行為的側面を包括した全体を指す用語であり、「儀礼」はまつりのうち形式的な行動をとまなう行為である、と。

この二語について筆者と同様な関係性を表していると思われるのが、岡田荘司の「まつり」の語を説明した次の一文である。

「まつり」の語源は、神の威に人が従うこと、奉仕することであり、服従するという「まつらふ」の動詞から来していると解釈されている。すなわち、可視的な祭りの儀礼をとおして、神は靈威を増進し、人は神威を享受する」

岡田荘司「第5部まつり」序文『神道事典』<sup>141)</sup>より

本書における分析内容は「祭祀」のなかでも「葬送」に関わるものなので、「葬送祭祀」の研究に属すると言える。そして、「葬送祭祀」の中に含まれる儀礼として、整地や墳丘構築、遺骸埋葬など様々なものが挙げられるが、その中でも土器を使用した儀礼が分析対象となる。墳墓で見つかる土器の出土状況が、「飲食儀礼」や「供献儀礼」など、どのような性格の儀礼の痕跡なのかが、本書の考察するところとなる。

なお、関連する用語として、祭祀全体において使用される器具に対して「祭器」という用語をもちい、「祭器」のなかでも特に「儀礼」に使用された器具については「儀器」と呼称することにしたい。

## 註

137) 諸橋轍次著・鎌田正・米山寅太郎編 1990-2000『大漢和辞典 修訂第2版』大修館書店

138) 青木 保 1994「儀礼」『〔縮刷版〕社会学事典』弘文堂

139) 梶原景昭 1994「儀礼」『〔縮刷版〕文化人類学事典』弘文堂

140) 真野俊和 1994「儀礼と行事」『〔縮刷版〕日本宗教事典』弘文堂

141) 岡田荘司 1999「第5部まつり」序文『〔縮刷版〕神道事典』國學院大學日本文化研究所 弘文堂

## 第2節 土器配置研究の方法

### 「土器配置」とは

墳墓出土土器から葬送祭祀を復原する際に注意しなければならないことは、土器の出土状態そのものが「儀礼」や「祭祀」といった概念を表現しているわけではないということである。発掘調査によって得られる土器の出土状況に関する情報には、自然現象や後世の人による二次的な移動や破壊が伴うために、まずそれらを考慮したうえで墳墓の葬送儀礼終了時の最終的な土器の位置・状態を復原する必要がある。筆者は葬送儀礼を営んだ人々が遺した土器のあり様を「土器配置」と呼んでいる。断っておかなければならないことはここで使用する『配置』という用語には本来の意味の「配置」の他、「埋納」・「埋置」・「供献」・「遺棄」・「廃棄」・「投棄」など、土器を遺した人々の意思・志向性を含んだ様々な用語の総称として使用するというものである。このような措置をとる理由としては、分析以前の段階においては当時の人々の意思・志向性を含む用語を排除する必要があり、これら全ての用語を一度客観的な総称によって統一しておきたかったためである。よってここで使用する『土器配置』という用語は上記の意味で使用する学術用語として定義するものとする。

### 考古学的祭祀研究における分析過程

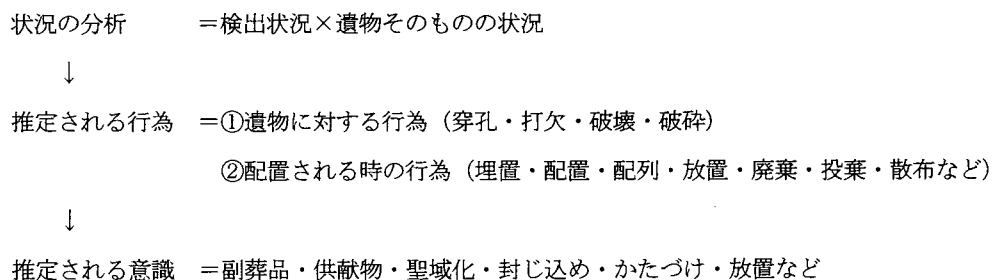
一般的に考古学によって祭祀を研究する場合、発掘現場で得られる考古学的データから祭祀の「型」を抽出するまでの作業過程を示せば、およそ以下のA・B・Cの三段階に分けられるだろう。

#### A. 遺物とその出土状況および遺構の分析

- A-1：出土遺物・遺構の空間的位置と層位の検討。遺構と遺物の位置関係。遺物が原位置を保っているのか、二次的な移動を被っているのか、など。墳墓遺跡における二次的な移動の具体例として、木棺の腐朽にともなう陥没や、墳頂縁に置かれたものが墳丘斜面や周溝に転落する場合などが挙げられる。さらに様々な自然現象や後世の人為的な削平・攪乱なども含まれる。それらを考慮したうえで、祭祀終了時の遺物の原位置を復原する。
- A-2：遺物の出土時の状態の検討。例えば土器で言えば、破片は広範囲から出土するのかまとまっているのか、あるいはほぼ完形で出土したのかなど。また、破片が接合するかどうか、破片の状態はどうか（磨耗・割れ具合）など。
- A-3：遺物に残る使用痕跡の検討。打欠・穿孔の有無や火の使用、赤色顔料の使用などの検討。

#### B. 儀礼行為の復原

- B-1：A-1～3の検討から遺物の「配置・廃棄」についてどのような状況が復原できるか。



#### B・2：A・3より、儀礼時の行為の復原

考古資料から考える場合には、遺物に残る使用痕跡（破壊・穿孔・煤・朱など）を観察することや、道具立て（土器の器種組成・各種の土製品など）から、ある程度儀礼の内容を類推することが可能である。また、民族資料や文献記事を援用する方法もある。しかし、その場合には序章第2節で述べたような援用方法を遵守する必要がある。

#### B・3：儀器・祭器の製作時に付与された要素の検討

土器で言えば、壺や高杯など本来「容器・うつわ」として機能する土器に対する焼成前穿孔や、文様のあり方、つくりの精粗など、製作段階で既に付与された要素の中に祭祀・儀礼に対する意識・意図を読み取る。祭祀用に製作された土器とそうでないもののちがいなど。

#### C. 祭祀の「型」の抽出

A・Bの各段階で確認された様々な要素の総体として、祭祀の「型」を抽出する。また、その祭祀的機能・性格を考察する。なお、こうして把握された祭祀は考古学的方法により復原された祭祀であるため、一般的に使用する「祭祀」と区別する意味で、「考古学的祭祀」と呼ぶべきものであろう。

#### 土器配置の「型」の抽出

本書では墳墓における葬送祭祀の儀礼の具体像を追及するために、墳墓から出土する土器あるいは埴輪の配置状況を分析するのであるが、考古学的方法によっているために、必ずしも祭祀の内容や性格が明らかになるとは限らない。ただし、それぞれの祭祀の内容が分からなくても、上記のプロセスを経ることによって考古学的データから同じような型の儀礼の痕跡を抽出し、その分布や変遷を調べ、系譜関係を追うことができるだろう。少なくともそこまでできれば、弥生墓制の中からどのような儀礼的系譜関係をもって古墳が出現してくるかという問題に言及することができると思われる。

「儀礼の型」を抽出するためには、考古学的に把握されるそれぞれの墳墓における「土器配置」の内容を比較検討しなければならない。そのために、①配置位置、②器種構成、③使用土器の系譜、④出土時の状態あるいは土器自身に残る使用痕跡、⑤墓の階層性との関係、の5要素に着目し、分析を進めることとする。これらの5要素について、上記のプロセスにもとづいて分析を進めていくと、同じような特徴を共有する土器配置がかなりの数の墳墓において見られることに気づく。そのとき、それらの土器配置を遺した人々の間には共通の志向性があったということが言え、決まった儀器や行為をとまなう儀礼の存在を考古学的に立証することができる。また、その背後には共通した精神あるいは信仰にもとづく祭祀の存在を想定することができるだろう。

以上が、土器配置研究と葬送祭祀および儀礼を復原するプロセスであるが、ここまで手続きを踏んだとしても、儀礼や祭祀については完全に復原できるわけではない。それは儀礼で言えば人の身振り・動作あるいは音曲や効果音などは遺らないし、また、祭祀の基となる信仰の内容やその性質などという問題に対して言及することは考古学的方法では困難といわざるを得ない。祭祀や儀礼について考古学の研究対象となりう

るのは、使用された道具と人の動作を推定できるような道具の出土状況、儀礼を行った場・建造物の跡、あるいは儀礼の場面を表現した絵画などに限られるのである。

筆者は 2002 年の論考<sup>142)</sup>で共通の特徴をもつ土器配置のまとまりを「〇〇型葬送祭祀」と呼称したが、上記のように考えると、やはり考古学的事象に対して「祭祀」と呼ぶことに抵抗を感じるし、また、先述した北條の指摘<sup>143)</sup>どおり、葬送祭祀自体は墳墓のあらゆる要素を検討したうえで、規定すべき問題であろう。したがって、本書では「〇〇型土器配置」というように、あくまでも考古学的現象面のレベルにおいての呼称にとどめることとする。ただし、その背後には上述したように、共通の儀礼を想定しているということを明記しておきたい。

#### 註

142) 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第 14 号

143) 本書註 136（第 1 章第 2 節）参照

### 第3節 墳墓の編年について

本書における墳墓の編年は、土器編年に従うことを基本とし、土器資料に乏しい古墳については副葬品の組み合わせや埴輪の形態などを参考にする。各地の土器編年と前期古墳の編年の対応は表1に従うものとする。前段にも述べたとおり、弥生時代後期から庄内式併行期の土器群については1970～90年代を中心に多くの資料・研究が積み重ねられてきており、各地域間の併行関係はおおよそそのところでは共通理解が得られるようになっているといえよう。いまここで土器編年の詳細を論じることは本書の目的ではないので割愛し、参考とした文献の提示のみに留めたい。地域間の併行関係については久住猛雄（1999）<sup>144</sup>、藤田憲司（1979）<sup>145</sup>、大久保徹也（1990）<sup>146</sup>、野々口陽子（野島・野々口2000）<sup>147</sup>、北島大輔（2000）<sup>148</sup>などを参考にした。しかし、筆者が2002年に示した併行関係表<sup>149</sup>では鍵となる山陰・畿内・北陸南西部・東海西部の併行関係に誤った認識をもったまま提示していたため、2004年の論考<sup>150</sup>では新たに堀大介（2002・2003）<sup>151</sup>の論考を参考にして、地域間の併行関係を修正した。表1はそうして修正されたものに従っている。

古墳時代前期の墳墓の編年は2002年の論考<sup>152</sup>とおなじく、土器・埴輪・副葬品などを総合的に検討して、古相・中相・新相の3段階に区分した。古相は寺沢薫編年<sup>153</sup>の布留0式～布留1式前半併行期で都月型特殊器台形埴輪と最古式の円筒埴輪の時期を含む。腕輪形石製品出現以前。古い一群に箸墓・中山大塚・権現山51号・西殿塚・浦間茶臼山・西求女塚・元稲荷など、新しい一群に東殿塚・黒塚・椿井大塚山・豊前石塚山・前橋天神山などの諸古墳がある。中相は腕輪形石製品が出現してから、川西宏幸編年<sup>154</sup>の第Ⅱ期の円筒埴輪が出現するまで。古い一群に桜井茶臼山・雪野山・寺戸大塚など、新しい一群にメスリ山・新山・平尾城山・蛭子山1号などの諸古墳がある。新相は川西宏幸の第Ⅱ期円筒埴輪出現以降で壺形土器・埴輪が長胴化する時期である（古屋1998）<sup>155</sup>。

表1 土器編年併行関係表<sup>156</sup>

時期	北部九州		山陰		吉備		畿岐	近畿北部	畿内		前期古墳		東海西部	北陸南西部		東日本墳墓				
	常松 (1993)	久住 (1999)	花谷 (1987)	赤澤 (1992)	中川 (1996)	柳瀬 (1977)	高橋 (1986・88)	大久保 (1990)	野々口 (1999・2000)	関川 (1976)	寺沢 (1986)	古屋 (2002)	和田 (1987)	赤塚 (1990・2002)	田嶋 (1986)		堀 (2002)	古屋 (1998)		
弥生時代 後期前葉			(飯来派)	草田 1	I 期	鬼川市 I	VII - a		後期 I		V 様式				八王子小宮	漆町 1 群	猫橋			
弥生時代 後期中葉				II 期	VII - b		後期 II		山中 I						漆町 2 群	法仏				
弥生時代 後期後葉			九重	草田 2	III 期	鬼川市 II	VII - c	下川津 I	後期 III						山中 II		(+)			
			的場	草田 3	IV 期	鬼川市 III	VIII - a	下川津 II	後期 IV						VI 様式					
庄内前半	西新 1 式	I A	鍵尾	草田 4	V 期	オの町 I	IX - a	下川津 III	庄内 I	纏向 1	庄内 0				廻間 I	漆町 3 群	月影	1 期		
庄内後半		I B		草田 5	VI 期古	オの町 II	IX - b	下川津 IV		纏向 2	庄内 1					漆町 4 群				
					VI 期中	下田所	IX - c	下川津 V	纏向 3 古	庄内 2							廻間 II	漆町 5 群	白江	2 期
古墳時代 前期前半	西新 II 式	II A	大木 権現山	草田 6	VI 期新	(+)	X - b		庄内 II	纏向 3 新	布留 0				古相	1 期		廻間 III	漆町 6 群	古府クルビ
		II B	小谷	草田 7		鬼川上郷	X - c		下川津 VI	布留 I	纏向 4	布留 1	漆町 7 群	4 期						
		II C							X - d		布留 II	纏向 5	布留 2	漆町 8 群	5 期					
古墳時代 前期後半											布留 3	新相	3 期	松戸戸 1		高島	6 期			
													4 期					漆町 10 群	7 期	

註

- 144) 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX
- 145) 藤田憲司 1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号
- 146) 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会他
- 147) 野島永・野々口陽子 2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」(2)『京都府埋蔵文化財情報』76
- 148) 北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年―尾張低地部編年の提示、近畿北陸地方との併行関係を中心に―」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 149) 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀―土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理―」『日本考古学』第14号
- 150) 古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷―東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として―」『駿台史学』第120号
- 151) 堀 大介 2002「古墳成立期の土器器編年―北陸南西部を中心に―」『朝日山』朝日町文化財調査報告書第3集  
堀 大介 2003「月影式の成立と終焉」『古墳出現期の土器器と実年代』シンポジウム資料集 (財)大阪府文化財センター
- 152) 前掲註149文献 (古屋2002) 参照
- 153) 寺沢 薫 1986「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49
- 154) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 155) 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義―東日本の古墳時代の開始―」『駿台史学』第104号
- 156) 常松幹雄 1993「庄内式土器の時代(玄界灘沿岸)」『考古学ジャーナル』363号  
前掲註144文献 (久住1999) 参照  
花谷めぐむ 1987「山陰古式土器の型式学的研究―島根県内の資料を中心として」『島根県考古学会誌』第4集  
赤澤秀則 1992「IV. 小結 1. 出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5  
鹿島町教育委員会  
中川 寧 1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根県考古学会誌』第13集  
柳瀬昭彦ほか 1977『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会  
高橋 護 1986「上東式土器の編年細分基準」『岡山県立博物館研究報告』7  
高橋 護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9  
前掲註146文献 (大久保1990) 参照  
野島永・野々口陽子 1999・2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」(1)・(2)『京都府埋蔵文化財情報』74・76  
石野博信・関川尚功 1976『纏向』橿原考古学研究所編 桜井市教育委員会  
寺沢 薫 1986「畿内古式土器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49  
前掲註149文献 (古屋2002) 参照  
和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第43巻第2号  
赤塚次郎 1990「考察 廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
赤塚次郎 2002「三世紀を中心とする東海地域」『古墳出現期の土器器と実年代』発表資料  
田嶋明人 1986「漆町出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター  
前掲註155文献 (古屋1998) 参照



## 第4節 用語の定義（2）—墓の形態をあらわす用語について—

本書では墳墓の形態についていかなる用語を使用するかということは二義的なことであるが、文中で使用する用語がどのような種類の墓制を指しているかということは明らかにしておかなければならないことであろう。このことについては長い研究史があるが、本書の直接的な目的から外れるために、研究史の詳細は省略し、本書における用語法の提示のみに留めたい。

まず墓制のあらゆる形態の総称として「墳墓」という用語を使用する。この語は小島麗逸によれば、

「墳墓の墳は人が埋葬されている場所で、土盛がされ高くなっているところをさす。墓は土盛をしない平らなところをいう」

小島麗逸「序 墳墓学の問題」<sup>157)</sup>より

ということなので、墳丘の有るものと無いものも含んだ総称としてふさわしいと言えよう。

次に墳丘や溝によって周囲から区画された墳墓の総称として「区画墓」の名称を用い、その区画方法によって別称を設ける。すなわち、主に盛土によって区画されているものを「墳丘墓」、主に地山の削り出し整形によって区画されているものを「台状墓」、そして主に溝によって区画されているものを「周溝墓」と呼ぶことにする。この三者の間には厳密な区分が無く、たとえば大阪府瓜生堂遺跡例のようにある程度盛土による墳丘をもった方形周溝墓は「墳丘墓」と「周溝墓」の両方の概念に属する。したがって、その場合は総称としての「区画墓」を用いることになる。また、墳丘が削平されて周溝によってのみ認識されるものの、他の類似例などから墳丘がかつてあったことが想定される墳墓がある。しかし、本書では想定によってこれらを「墳丘墓」と呼称することは避け、「区画墓」の名称を用いる。ただし、東日本のいわゆる「方形周溝墓」については墳丘が遺存していない例が大多数であるし、低い墳丘があったとしても周溝による区画が第一義的であったと考えられるため、「周溝墓」の名称をそのまま用いることにする。

「古墳」という用語は上記の区画墓とは別次元の用語であると考えている。墓制の形態名称としては「古墳」は「墳丘墓」の一種であるが、古墳時代特有の葬送祭祀の理念下で築造されたものという条件つきで「古墳」の名称を用いたい。したがって、研究史上「発生期古墳」とか「出現期古墳」あるいは「早期古墳」と呼ばれた一群の区画墓<sup>158)</sup>の帰属が問題となるが、本書においてはそれらを近藤義郎のいう「弥生墳丘墓」の概念<sup>159)</sup>と「早期古墳」とに分けうると考えている。その意味で、文中では「早期古墳」と呼んでもよいものについては「～古墳」と呼称することにした。なお本書における「早期古墳」の概念の提唱は第7章第3節にて行なうものとする。

### 註

157) 小島麗逸 1994「序 墳墓学の問題」小島麗逸編著『アジア墳墓考』勁草書房

158) 本書「第1章第1節 古墳出現に関わる研究史」を参照のこと

159) 近藤義郎 1977「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』37

## 第3章 弥生墓制の土器配置と葬送祭祀儀礼

第3～6章にかけて各時代・地域の墳墓における土器配置の実態を確認してゆく。その際になるべく各墳墓の他の要素についてもあわせて略述するようにした。それは土器配置研究が最終的に墳墓の他の要素の研究と組み合わされてこそ、はじめて墳墓の葬送祭祀全体の様相を明らかにし得るものだと考えているためである。そのような理由で記述が多少煩瑣になることをお断りしておきたい。

### 第1節 北部九州の土器配置と葬送祭祀儀礼

北部九州の弥生時代墓制における土器配置は大きく分け三つの様相がある。一つめは前期に時期的中心をおく埋葬施設への土器の副葬行為、二つめは中期から盛行する墓域内に設けられた土坑に、儀礼に使用されたと考えられる土器群を廃棄する方法、三つめは特定の埋葬施設・墓域に対して高杯を中心とする土器群による供献を行なうものである。これらの土器配置について鏡山猛（1952）<sup>160)</sup>、高倉洋彰（1973）<sup>161)</sup>、石橋新次（1982）<sup>162)</sup>、小田富士雄（1982）<sup>163)</sup>、川上洋一（1995）<sup>164)</sup>らによる一連の研究が古くから積み重ねられているため、ここではそれらを参考にしつつ、北部九州の様相を述べてみたい。

#### 註

160) 鏡山 猛 1952「甕棺累考（一）その群団と共有体」『史淵』第53輯

161) 高倉洋彰 1973「弥生時代祭祀の一形態—甕棺墓地における土器祭祀を中心として—」『古代文化』第25巻第1号

162) 石橋新次 1982「佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構」『古文化談叢』第10集

163) 小田富士雄 1982「弥生時代北部九州の墳墓祭祀—近年の調査例を中心に—」『古文化談叢』第10集

164) 川上洋一 1995「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析—北部九州と吉備を中心に—」『考古学研究』第42巻第2号

#### 埋葬施設への土器副葬

埋葬施設への土器の副葬行為は高倉（1973）によればその原型は縄文時代中期にまでさかのぼり、長崎県南高来郡国見町筏遺跡<sup>165)</sup>の最古の甕棺墓（縄文時代中期中葉）に浅鉢が副葬された例を挙げている。

縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭になると埋葬施設に壺形土器を置く例が増加する。佐賀県東松浦郡浜玉町五反田遺跡3号支石墓・6号土壇墓<sup>166)</sup>、長崎県南高来郡北有馬町原山遺跡D地区支石墓群<sup>167)</sup>のうちの17基、熊本県菊池郡大津町水の山遺跡1号配石墓<sup>168)</sup>などに例がある。これらの墓に置かれた土器は夜臼式に属するものである。弥生時代前期にはこれらが普遍的な現象としてあらわれ、福岡県志摩町新町遺跡11号墓（支石墓）<sup>169)</sup>、福岡県春日市伯玄町伯玄社遺跡の12基（土壇墓など）<sup>170)</sup>、福岡県大野城市寺尾遺跡の5基の土壇墓<sup>171)</sup>、などが挙げられる。

器種には小型壺・甕・浅鉢などがあるが小型壺1個体の場合が最も普遍的である。土器が置かれるのは墓壇底が多いが、支石墓の場合は墓壇が埋め戻されたあとに上石の下か、その周辺に置かれる。このような例

は中期にいたっても若干の例があるが、弥生時代前期に時間的なピークがあり、前後の時期に小型壺以外の器種がみられる。これらの土器について高倉（1973）は「副葬された土器」と解釈している。また、「正立して置かれる例の多いことや大半が完形であることなどから、土器それ自体に意味があるのではなく、内容物が本来の副葬物であり土器はその保護物としての性格をもっている」と述べているが、まさに正鵠を得たものであろう。川上（1995）はこれら小型壺1個体を副葬する風習が支石墓にともなうものとして韓半島から渡来したものと捉えている。

#### 註

- 165) 長崎県立国見高等学校社研部・国見町教育委員会編 1969 『筏遺跡発掘調査報告』
- 166) 五反田遺跡：松尾禎作 1955『佐賀県下の支石墓』佐賀県文化財調査報告4
- 167) 原山遺跡：日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会 1960「島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10
- 168) 隅昭志 1964「熊本県水の山遺跡における配石墓群の一例」『考古学雑誌』第50巻第1号
- 169) 橋口達也編 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集 志摩町教育委員会
- 170) 山崎茂孝・桜井康治・高丘泰行・日野秀夫 1967『伯玄社遺跡調査研究報告』  
松岡史・亀井勇 1968『福岡県伯玄社遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書36
- 171) 馬田弘稔編 1977『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第1集

### 「二塚山型土器配置」——いわゆる「祭祀遺構」の土器配置——

さて、中期になると土器の副葬はしだいに行われなくなり、かわって研究史上「祭祀遺構」と呼ばれてきた、墓域中あるいは墓域縁に設けられた土坑から土器群が出土するようになる。このような土器配置の典型として前述の研究者たちに採り挙げられてきたのが、佐賀県三養基郡上峰村・神埼郡東背振村にまたがる二塚山遺跡である。

**二塚山遺跡**<sup>172)</sup>（図版1・2）は弥生時代前期末～後期中葉にかけての墓域全体が発掘され、甕棺墓159基・土壙墓89基・箱式石棺墓6基が検出された。いわゆる「祭祀遺構」は墓域の外縁に8基存在し、墓域を囲うように間隔をあけて分布している。およそ5×3.5mほどの不整楕円形あるいは4.5mほどの不整円形をなし、深さは確認面から40～60cmほどにおさまるものが多く、深いものでも80cm程度であるから、おしなべて浅い皿状の土坑といえよう。底面は平らでなく、場所によって深さに偏りがあり、なかにはいくつもの小土坑のようなくぼみが見られることがある。これらのことから整然とした形を志向したものではなく、場当たり的な掘削という印象が強い。出土遺物は土器が多いが多量の礫が伴うものもあり、他遺跡では金属器や石器が伴う例もある。出土した土器数は遺構によって1個体から42個体と開きがあるが、この最小・最多の遺構2基を除けばあとの6基の土器出土個体数は5～9個体のなかにおさまっている。さて、これらの土器の出土状況は完形品が置かれたのではなく、土器片が無造作に土坑中に廃棄された様相を呈している。土坑底から出土する場合もあるが、覆土中に浮いて出土する場合もあり、複数回の投棄が考えられるケースもある。器種は壺・甕・高杯・鉢・器台が見られ、集落遺跡出土土器の器種構成と変わるところはない。二塚山遺跡の8基の「祭祀遺構」は出土土器の年代によると中期末ごろから形成され始めたようだ。

さて、このような「祭祀遺構」は北部九州の広範囲で確認されている。佐賀県では神栖町四本黒木遺跡<sup>173)</sup>、鳥栖市フケ遺跡（図版4）<sup>174)</sup>、神栖町利田柳遺跡<sup>175)</sup>、北茂安町宝満谷遺跡<sup>176)</sup>などで、福岡県では久留米市安国寺遺跡<sup>177)</sup>、小郡市牟田々遺跡<sup>178)</sup>、福岡市宝台B地区遺跡<sup>179)</sup>、北九州市馬場山遺跡<sup>180)</sup>などで、大分県では宇佐市野口遺跡<sup>181)</sup>などで同様な「祭祀遺構」が見つまっている。これらの例をみると中期中葉から中期後葉にかけてものが最も多いが、前期に遡るものも知られている。四本黒木遺跡<sup>182)</sup>（佐賀県神埼郡神埼町、図版3）では「祭祀遺構 B」の底面から前期の小型壺が8個体出土している。これらは完形で出土していることから前代の埋葬施設に小型壺を副葬する儀礼との過渡的な様相を示しているといえよう。一方、後期の例は非常に少ない、ただし馬場山遺跡のように後期に途絶えたあとに終末期にまた出現するものもある。また、先述した二塚山遺跡のように「祭祀遺構」が墓域の外縁にあるものと、そうではなく墓域内の数箇所に見られる場合と両方がある。

このような「祭祀遺構」の性格について最も妥当な解釈を導き出したのは石橋新次であろう<sup>183)</sup>。石橋は「祭祀遺構」と出土土器について「祭祀行為終了後の土器の廃棄過程を示すものと理解される。しかし、祭祀行為はこの廃棄過程をもって完結するものと理解される。土器に対する意図的破碎や穿孔、祭祀遺構にみる炭化物や焼土の状態がその証左であろう」と述べている。筆者なりの言葉にすれば、葬送祭祀の儀礼に使用された儀器を儀礼終了後に土坑を掘って廃棄したものと思われる。また、土器に対する破壊行為や火の使用がみられることは、これらの儀器に対して穢れを払う行為と考えられ、使用終了後に穢れを払い、即座に廃棄するという流れが想定できる。これらの中にあわせ口甕棺の組み合わせを調整するために打ち欠いた甕棺の口縁部片が含まれることがあり、葬送祭祀にかかわるいっさいの不要なものを最終段階で廃棄したのだろう。そのなかに有機物もあったと見え、火はそれらを焼くために使用されたと考えられる。

さらに石橋は「祭祀遺構」には1回性のものと数回性のものがあるという。その違いについて1回性ものは土坑の規模も小さく、出土土器もせいぜい10個体に満たない土器で構成されるが、数回性のものは規模も大きく土器も40個体近くが出土するという。先に見た二塚山遺跡の8基の「祭祀遺構」における土器の出土数の差はこのことに起因するのであろう。さて、この「祭祀遺構」と埋葬施設との対応関係についてだが、どう見積もっても「祭祀遺構」にみられる儀器・祭器の廃棄の回数よりも圧倒的に埋葬施設の数の方が多い。墓域の中に「祭祀遺構」が設けられる場合、対応する埋葬施設のグループが特定できる場合があり、石橋はそれらの例の分析から「祭祀遺構1基に対し最大6～10基、1回の祭祀行為につき2～4基」という目算をたてているが、このような数の対応ははたして妥当であろうか。おそらく実際には埋葬に際して儀礼行為が行われなかったか、あるいは儀礼が行われても土坑を設けた儀器の廃棄行為を行わなかった埋葬があったと考えた方が無難ではないだろうか。このように考えた場合には、あるていど限られた人物の埋葬についてこのような儀器の廃棄が行われたと考えざるを得ない。また、もうひとつの解釈としては埋葬ごとに儀礼が行われるのではなく、ある決まった時期にあるまとまったグループの墓に対して行われる墓前祭のようなものを想定するならば、このような「祭祀遺構」と埋葬遺構の数の関係をうまく説明できるのではないだろうか。いずれにせよ、対応する埋葬施設を明らかにできない位置で廃棄行為が行われていることは、その廃棄自体までを儀礼の過程として捉える限り、その儀礼をおこなう祭祀の対象は個人というよりある特定の集団と考えてよいだろう。その道具立ての規模から考えても家族とその祖先を単位とした祭祀ではないだろうかと思うが、これ以上は推論の域を出ない。

儀器の廃棄前に行われた儀礼の内容については、出土した土器に一定量甕が含まれることから調理を含んだ行為が想定できるが、それが飲食儀礼なのか、一時的な食物供献儀礼なのかは考古資料からは判断が下しにくいところである。

また、これらの土坑の名称についてであるが本稿では学史的に通有な「祭祀遺構」をカッコ付けで使用してきたが、その土坑において儀礼が行われたわけではなく、これまでの説明どおり儀器を「廃棄」するための土坑であることが明かなため、「**儀器廃棄土坑**」と呼ぶのがふさわしいと考える。

さて、北部九州では中期後葉以降しだいに階級分化が進んだことが副葬品に優劣や、区画や墳丘を持つ墓域が出現することからも明らかになっている。これら特定集団の墓域では対応する埋葬施設が特定できる形で土器配置が行われている。

中期後半の例では**三雲遺跡南小路地区**<sup>184)</sup>（福岡県前原市）では2基の厚葬甕棺墓の付近に土器が多量に出土した溝が確認されている。溝は部分的な調査にとどまっているが、2基の甕棺墓が副葬品の豊富なことから早良地域の王墓・王妃墓と考えられており、周辺の溝は2基の周囲を巡る周溝になる可能性が高いと考えられている。この溝中から多量の土器が出土したため、これらは甕棺墓の埋葬祭祀に関して行われた儀礼に使用されたものが廃棄されたものであろう。

**吉野ヶ里遺跡丘陵地区V区 ST001 墳丘墓**<sup>185)</sup>（佐賀県神埼郡神埼町・三田川町・東脊振村）においても墳丘墓周辺の土坑・溝から土器群が出土し、川上はこれらの土器群が「墳丘墓に特定した葬送儀礼に伴う道具であった土器群の廃棄」として捉えている<sup>186)</sup>。

後期後半の例では**三雲遺跡寺口地区Ⅱ-17 調査区石棺群**<sup>187)</sup>（福岡県前原市、図版5）が挙げられる。4基の石棺と1基の甕棺にともなうと考えられるL字状の区画溝中に土坑をとともなう二ヶ所の土器集中区がみとめられた。区画内の埋葬施設のうち中心主体と考えられるものは南北に直列する他より規模の大きい2基の石棺墓とみられており、二ヶ所の土器集中区はそれぞれこの2基の埋葬施設のちょうど西側にあたる場所に位置する。それぞれの埋葬に伴い儀礼が行われ、使用後に廃棄された儀器であろう。なお、これらの土器群には焼成後穿孔がみられ、後段で述べる吉備の後期後葉における供膳具への穿孔行為との類似性が指摘できる。

以上のような、北部九州において弥生時代中期から後期にかけて盛行した土器配置を、二塚山遺跡の例に代表させて「**二塚山型土器配置**」とする。

## 註

172) 佐賀県教育委員会 1979『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集

173) 神埼町教育委員会 1980『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第6集

174) 石橋新次 1982「佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構」『古文化談叢』第10集

175) 神埼町教育委員会 1980『利田柳遺跡Ⅲ区』

176) 北茂安町教育委員会 1980『宝満谷遺跡』

177) 安国寺遺跡：久留米市教育委員会 1980『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』

178) 小都市教育委員会 1977『牟田々遺跡』

179) 高倉洋彰ほか 1970『宝台遺跡』

- 180) 北九州市埋蔵文化財調査会 1975『馬場山遺跡』
- 181) 野口遺跡：小倉正五 1982「大分県駅館川東岸部における弥生時代中期の埋葬遺跡」『古文化談叢』第10集
- 182) 前掲註173文献
- 183) 前掲註174文献 (石橋1982) 参照
- 184) 福岡県教育委員会 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
- 185) 佐賀県教育委員会 1992『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集
- 186) 川上洋一 1995「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析—北部九州と吉備を中心にして—」『考古学研究』第42巻第2号
- 187) 福岡県教育委員会 1984『三雲遺跡IV』福岡県文化財調査報告書第65集

### 「宮の前型土器配置」—高杯を中心とする供献行為—

終末期（庄内式併行期）になると福岡県の宮の前C地点墳丘墓や公門原石棺などでこれまでと様相の違う土器配置が見られるようになる。

**宮の前C地点墳丘墓<sup>188)</sup>**（福岡市、図版6）は丘陵頂部の自然地形を利用した不整形の墳丘墓である。墳丘規模は南北14.7×東西11.85mを測り、墳頂に6×7mの長円形の平坦部がある。墳頂中央に大型の石棺墓（1号石棺）があり、これが中心埋葬施設である。墳頂平坦面南端には火を炊いた痕跡が検出されている。墳丘北側から西南側にかけての裾に周溝があり、南側の周溝が途切れた部分の外側には3基の石棺墓が周辺埋葬施設として営まれている。

土器は三ヶ所に分かれて出土している。一つめは「土器溜り」とよばれるもので、墳丘西側の溝中土坑に多くの土器片が集積していた。すべて破片の状態なので全体の個体数も不明である。壺・甕・鉢・高杯・器台などが含まれ、器種構成は集落出土土器と変わらない。おそらく前代からつづく儀礼終了後に破碎され廃棄されたものと捉えられよう。位置から墳頂の1号石棺に伴う儀礼に使用されたものと考えられる。壺の底部に煤が付着したものがあり、煮沸をとまなう儀礼であった可能性がある。墳頂の火の痕跡と関連するものだろうか。

二つめは「高杯群A」と呼ばれるもので、南西裾部よりさらに外側に4m離れた平坦面上に1.6×0.6mの不整形土坑が検出され、その中から高杯5個体・埴1個体が出土した。三つめは「高杯群B」とよばれ、南南西裾部に溝中に高杯3個体・壺1個体が集中して置かれていた。

当墳丘墓における三つの土器配置は推定される性格から二つに区分できるものと思われる。土器溜りについては前述したように調理を含む儀礼行為が終了したのちに廃棄された土器群であるが、「高杯群A・B」については調理器を含まないことや、土器が完形品であることから廃棄されたものではなく置かれたものである可能性が強い。したがって、これらは土器の内容物か土器自身を「供献」したものと考えられる。その対象は位置から言って墳丘墓全体に対するものか、あるいは高杯群Bは1号石棺に、高杯群Aは3号石棺に伴うものとするか、二通りの解釈が可能であろう。

**公門原遺跡<sup>189)</sup>**（福岡県田川郡川崎町）では一つの墓壙を共有する二つの石棺墓（1・2号石棺）の間に高杯8個体が置かれていた。これも土器自身の供献なのか内容物の供献なのかはわからないが、他の器種はいっさいなく、供献行為ととらえられる。

これら終末期の事例をみると、多くの器種から構成される土器群を廃棄する方法から高杯を中心とする土

器群による供献行為へと儀礼の内容が変化していることがわかる。また、この供献儀礼に使用されるのは、西新町式に特有な、口縁部が外反し脚部が「ハ」の字に開く長脚高杯が特徴的に使用されている。宮の前、公門原の2例は高い階層の人物の墓と考えられるが、それほど高くない階層の人々の埋葬に際してもこれらの供献行為が行われ始めたことが、福岡市野方塚原遺跡<sup>190)</sup>などで確認できる。また、高杯自体を供献したことがわかる例がある。大分県宇佐市野口遺跡 107 号土壙墓<sup>191)</sup>では棺の両側短辺脇に脚部を折り取った高杯の杯部をそれぞれ3・2個体ずつ伏せて置き並べていた。儀礼に使用したのちに置いた可能性もあるが、伏せて置かれていることから土器自身を置くことに主眼があったと考えられる。

以上のような、終末期に行なわれた土器配置を「宮の前型土器配置」とする。

#### 註

188) 下條信行・沢皇臣編 1971『宮の前遺跡 (A～D 地点)』福岡市教育委員会

189) 新原正典 1993『公門原遺跡・真崎遺跡』川崎町文化財調査報告書第3集

190) 福岡市教育委員会 1996『野方塚原遺跡』

191) 野口遺跡：小倉正五 1982「大分県駅館川東岸部における弥生時代中期の埋葬遺跡」『古文化談叢』第10集

#### 小結

さて、以上見てきたとおり、北部九州の弥生時代の土器配置は①個人墓への小型壺の副葬→②集団に対する儀礼行為と儀器の廃棄（二塚山型）→③特定墓域・特定個人墓への高杯を中心とする土器群による供献行為（宮の前型）、という3つの様相が漸移的に変化していることがわかる。それぞれの盛行する時期は①が前期、②が中期中葉～後葉、③が終末期（庄内式併行期）となっている。これらの流れは北部九州社会における共同体の発達と特定首長層の出現過程と密接な関係性をもっていると考えられる。つまり中期には共同体を代表する人物としての首長層が出現してくる時期だが、②の儀礼行為は集団を対象としたものであるため、そうした共同体の靱帯を高める効力があったと考えられる。一方で終末期における「宮の前型」のそれは、共同体の成員からは隔絶した、共同体の支配者としての首長層が台頭してきた時期である。宮の前 C 地点墳丘墓や福岡県前原市平原区画墓<sup>192)</sup>のように階層的にきわめて限定された人物の墓が出現してくる時期であり、供献行為の出現は集団内における階層分化の急激な進展を物語る。祭祀によって共同体の仕組みが発展し、発展した先の階級分化によって祭祀の内容に変容をきたすという図式が描けよう。

このような動きは北部九州独自のものではないが、祭祀の方法については特徴ある墓制と同様に北部九州独自のものである。しかし、終末期（庄内式併行期）は北部九州弥生社会の到達点であると同時に、次代への変化が既に引き起こされている時期でもある。大分県東国東郡安岐町下原古墳<sup>193)</sup>（図版 77）は前方後円形の早期古墳である。全長およそ 23m 前後、後円部径 15m の規模を測り、大きく開く短い前方部を持つ。葺石・周溝があり後円部中央には箱形木棺をおさめる礫擲が存在する。主体部覆土中に畿内系加飾壺・高杯など、周溝中から壺・手焙形土器・支脚形ミニチュア土器などが出土した。主体部覆土中の土器は木棺の腐朽によって落ち込んだ可能性が高く、もともと埋葬施設上に置かれたものかもしれない。時期は庄内式後半と考えられるが、このような墳墓は九州から関東まで分布しているため、明らかに外来の墓制だと言える。この後、布留式併行期には前期古墳が築かれる一方、在地弥生墓制の埋葬施設を採用した方形周溝墓・方形墳丘墓な

ども築造されるが、弥生時代の土器配置が採用されることはなかった。北部九州の弥生時代の葬送祭祀儀礼は古墳の出現と共に放棄されたと結論付けられるだろう。

#### 註

192) 原田大六 1991『平原弥生古墳』平原弥生古墳調査報告書編集委員会編 葦書房

193) 玉永光洋・小林昭彦 1988『安岐城跡・下原古墳』大分県文化財調査報告第76集 大分県教育委員会



## 第2節 畿内における土器配置と葬送祭祀儀礼

弥生時代の畿内は墓制が比較的明らかになっている地域とそうでない地域がある。とくに古墳時代における政治的中枢がおかれたと考えられている大和においてさえ、弥生時代の墓制の動向はきわめて不鮮明である。土器配置が判明する事例がある程度そろそろ地域はさらに少なく、現在のところ河内のみといえる。ここでは河内・摂津地域の方形区画墓のうち土器配置の明らかなものを抽出してその変遷を概観したい。なお、河内・摂津の方形区画墓における土器を使用した祭祀儀礼についてはすでに田代克己（1985）<sup>194)</sup>、辻本宗久（1987）<sup>195)</sup>、田中清美（1988）<sup>196)</sup>、大庭重信（1992・2001）<sup>197)</sup>らのすぐれた研究の蓄積がある。これらを参考にしつつ論を進めたい。

畿内における方形区画墓は前期後半ごろにはすでに出現し、その後、弥生時代を通して主要な墓制として存続し続ける。埋葬施設は箱形木棺や土器棺がほとんどである。畿内では中期のうちは埋葬施設が墳頂に数多く営まれるのが通例で、墳形が長方形を為すことは、関東地方の方形周溝墓が正方形で中心に1基の墓壙をもつことを原則とする点で大きく異なるといえよう。それはともかく畿内墓制の土器配置は、これら方形区画墓の墳丘各所から出土する土器を分析することでその様相が判明する。

先学の分析を参考にすれば河内における方形区画墓の土器配置は大きく分けて二つに分けられる。すなわち辻本が指摘した、儀礼に使用された後に周溝などに投棄された土器群と、墳丘の各所に意図的に配置された土器群の二者である（辻本 1987）。前者については田代によってそれまでの「供献土器」という呼称が否定され、飲食儀礼に使用された後に廃棄されたものであると主張されたものである（田代 1985）。後者については墳丘のコーナーなどに胴部下半を埋めて立て置かれた壺や、埋葬施設上に置かれた供膳具などが土器配置として明確なものだが他にも墳丘の各所に配置され、時には破碎される土器などがある。これらのことから畿内の方形区画墓における土器配置が複雑な系統をもっていることがわかるが、時間的な推移に注意しながらなるべく系統立てて述べてみよう。

### 註

194) 田代克己 1985「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』鳥越憲三郎博士古希記念論文集  
雄山閣出版

195) 辻本宗久 1987「弥生時代の墳墓祭祀について—大阪湾沿岸地域の資料を中心として—」『花園史学』第8号

196) 田中清美 1988「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2 考古学を学ぶ会

197) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』第26号

大庭重信 2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号

### 「東奈良型土器配置」—廃棄された土器群—

辻本宗久は区画墓から出土する土器に墳丘各所に配置された土器とは別に、「多量の土器がバラバラの破片となり、周溝内などに一面にわたって堆積している」土器群を認識し、それらが儀礼に使用された後に破碎し、破棄されたものと推定した<sup>198)</sup>。このような状況を示す例として辻本は、大阪府池田市宮之前遺跡第8号「方形周溝墓」<sup>199)</sup>、茨木市東奈良遺跡F-4-N地区第1号「方形周溝墓」<sup>200)</sup>、東大阪市瓜生堂遺跡（近自）

11・21・22「方形周溝墓」<sup>201)</sup>、瓜生堂遺跡 A 地区土城群<sup>202)</sup>、などの資料を挙げている。また、同様に廃棄された土器群の例として大庭(1992)が大阪市城山遺跡 19 号「方形周溝墓」<sup>203)</sup>を挙げている。城山遺跡の例は破碎ではなく、焼成後の穿孔がみられる土器が多い<sup>204)</sup>。

辻本(1987)はこれらの土器群の器種構成が壺約 40%・甕約 30% (東奈良遺跡 F-4-N 地区第 1 号・瓜生堂遺跡(近自) 11 号)となり、配置された土器群にくらべ、壺が少なく甕が多いという違いを指摘し、また集落出土土器の器種構成とも異なることから単に集落で使いおえた土器群を墓域に廃棄した可能性を否定している。また、これらの土器群が墓域の特定の墳墓にしかみとめられないことや、多量の灰、炭化米をもなうこともある(瓜生堂遺跡(近自) 11 号)ことから、これらの土器群は「特定有力世帯内部の家長層」の葬送祭祀にともなう「共食」・「供膳」などの儀礼に使用されたものだと推察した。そして、墳丘各所に配置された土器群とこれら廃棄された土器群は「各々異なった意識下のもとに執行された儀礼行為の所産として、厳しく峻別されねばならない」としている。これらは異なる土器配置として捉えるべきなのだろう。

さて、このように儀礼終了後に使用した儀器を廃棄することは河内では中期前葉からみとめられ、その後ずっと継続する。これらを東奈良遺跡 F-4-N 地区第 1 号「方形周溝墓」の様相を代表させて、「**東奈良型土器配置**」とする。おそらく北部九州の「祭祀遺構」へ土器を廃棄した儀礼と同じく、共同体の紐帯を強める意図・効果があったものと思われる。また、大阪府八尾市久宝寺南遺跡 3 号墓<sup>205)</sup>は突出部をもつ区画墓であるが、周溝下層から古墳時代初頭に比定できる甕 34 個体、壺 6 個体、小型丸底土器 13 個体、高杯 4 個体、鉢 7 個体、器台 4 個体という多量の土器が出土している。このような儀礼が古墳時代前期まで継続すると考えられる。

## 註

198) 辻本宗久 1987「弥生時代の墳墓祭祀について—大阪湾沿岸地域の資料を中心として—」『花園史学』第 8 号

199) 宮之前遺跡調査会 1970『宮之前遺跡発掘調査概報』

200) 田代克己・奥井哲秀編 1979『東奈良 I』東奈良遺跡調査会

201) 堀江門也・中西靖人 1980『瓜生堂』(財)大阪文化財センター

202) 前掲註 201 文献

203) 杉本二郎ほか 1986『城山(その 1)—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』

(財)大阪文化財センター

204) 大庭重信によると城山遺跡 19 号区画墓から出土した土器群は壺の占める割合が高いが、煤が付着したものが多く、煮沸に使用されていたと考えられている。

大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26

205) 赤木克視ほか 1987『久宝寺南(その 1)—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

(財)大阪文化財センター

## 「瓜生堂型土器配置」、その他 —墳丘に配置された土器—

墳丘の各所から土器が出土する場合、それらがその場所を意識して置かれた物なのか、二次的な移動を被っているのか、あるいは無意識的に廃棄されたものなのかを見極めることは、土器を使用した祭祀儀礼を復

原する上で欠かせないことである。

確実にその場所を意識しておかれていると判断できるのは、地面を掘りくぼめ、胴下半を埋めて立て置かれている土器である。

**亀井遺跡 ST1701「方形周溝墓」**<sup>206)</sup>（大阪府八尾市、図版 7）では広口長頸壺 2 個体、頸部が欠失した壺 1 個体、甕 2 個体の計 5 個体の土器が墳丘裾のコーナーに一系列に、胴下半部を埋め、立て並べられていた。この土器群のうち大型の甕の中からイノシシの下顎骨が出土しており、また、穿孔などもみられないことから、大庭はもともと内容物を入れて供献するための容器だったと考えている<sup>207)</sup>。

この他、穴を掘って据え置かれる土器のうち特徴的な一群は、区画墓の墳丘コーナーに立て置かれる一群である。瓜生堂 2・9・14 号「方形周溝墓」<sup>208)</sup>、大阪市加美 KM95-14 次調査地 1・2 号墓<sup>209)</sup>、大阪市長原遺跡 SX801<sup>210)</sup>などで確認されている。コーナーに立てるという点では亀井遺跡 ST1701 と変わりはないが、こちらの例は口縁部の打欠や胴中位～下半への穿孔行為がみとめられ、内容物の供献ではなく土器を立て置くことに意味があったと考えられる。**瓜生堂遺跡 2 号墓**（図版 8）では墳頂に多数の埋葬施設があり、それらの埋葬儀礼に伴い配置された土器が墳丘各所から出土しているが、コーナーに立て置かれた壺は他の土器よりも型式的に古いことが田中清美によって指摘されている<sup>211)</sup>。また、**加美 KM95-14 次調査地**は大庭自身によって調査され土器の出土状況について祭祀の復原を前提とした詳細なデータを得られている例であるが、**1・2 号墓**（図版 9）においてコーナー部に検出された立て置かれた壺は両方とも墳丘拡張の際の盛土下から出土し、拡張前の墳丘に伴うことがわかっている。これらのことから墳丘コーナーに立て置かれる壺は墳丘の完成か、第 1 回目の埋葬に伴う何らかの呪的な儀礼の一環として据え置かれた可能性が高い。このうち瓜生堂 2・14 号墓、加美 KM95-14 次 1・2 号墓の 4 例はいずれも北東コーナーあるいはその付近に壺を据え置いており、北東という方角を意識していた可能性がある。後世では北東は鬼門といわれるが、弥生時代に同じ意識を持っていたかどうかは別として、北東方向に対して何らかの思想があった可能性があろう。そうのように考えるならば穿孔した仮器としての壺を一定の方角に置くことは辟邪の呪的効力を期待された壺だったのではないだろうか。古墳時代になって本格化する圍繞配列と弥生時代に見られるこうしたコーナー部配置がどのような系譜関係をもっているのかは現在のところ明らかではないが、墓域を呪的に防御するという思想上の系譜関係はあった可能性が強いと思われる。北東という方角はともかく、コーナー部に穿孔壺を立て据え置く土器配置を「**瓜生堂型土器配置**」として認定しておきたい。

それではこうした供献土器あるいは据え置く土器のルーツはどこから来るものなのであろうか。今のところ古く状況が良い例として、弥生時代中期初頭の八尾市**山賀遺跡第 1 号「方形周溝墓」**<sup>212)</sup>（図版 10）が挙げられる。7.6×7.2m の方形の区画墓で高さ 1.14m の方台部が良好に遺存している。墳丘北西部分が墳頂平坦面よりも一段低い祭場的な平坦面になっており、その中央に口縁部を打ち欠いた広口壺が 1 個体胴下半を穴に埋め置かれていた。田中清美はこれを土器棺とせず、供献された土器と判断している<sup>213)</sup>。口縁部が打ちかけられていることから象徴的に仮器化されたものと思われ、やはり呪的な効果をねらったものだろうか。いずれにせよ中期中葉から後半に盛行するコーナー部に壺を立て置く土器配置の原型と考えられる。畿内ではこのように中期初頭というかなり早い段階から、象徴化された土器を配置する儀礼が行われていたということが指摘できよう。

## 註

- 206) (財)大阪文化財センター 1986『亀井(その2)―近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』
- 207) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』第26号
- 208) 瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 209) 大庭重信 2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号
- 210) 趙 哲済ほか 1995『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ 大阪市文化財協会編
- 211) 田中清美 1988「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2 考古学を学ぶ会
- 212) (財)大阪文化財センター 1983『山賀(その2)』
- 213) 前掲註211文献 (田中1988)参照

## 墓壇内に置かれた土器

墓壇内に土器が置かれた例では次のようなものがある。東大阪市鬼虎川遺跡12調査<sup>214)</sup>では墓壇底に接した状態で、外面に煤が付着した完形の直口壺が1点出土している。大阪市城山遺跡17号「方形周溝墓」4号主体部<sup>215)</sup>で木棺直下から完形の広口壺1点出土した。また、中期前葉の例で八尾市恩智遺跡木棺墓<sup>216)</sup>では木棺の下から壺5個体、甕1個体、鉢1個体、木製鋤1点出土した。壺5個体のうち2個体の胴部下半、鉢の底部に焼成後の穿孔がみとめられ、穿孔土器を含む壺3個体の外面に煤が付着していた。

大庭重信は、これらの土器は木棺の下層から出土すること、煤や穿孔がみとめられる事などから、副葬品ではなく儀礼に使用された土器が埋葬に先立って墓壇内に納められたと解釈している<sup>217)</sup>。

## 註

- 214) 上野利明ほか 1987『鬼虎川遺跡12次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 215) 杉本二郎ほか 1986『城山(その1)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』  
(財)大阪文化財センター
- 216) 田代克己・今村道雄ほか 1980『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会
- 217) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』第26号

## 墓壇上の土器

大庭重信によると墓壇上あるいはその周辺に置かれる土器は畿内では二系統みられるという<sup>218)</sup>。ひとつは中期にみられるもので瓜生堂遺跡2号区画墓、加美遺跡Y1号区画墓でみとめられている。瓜生堂遺跡2号「方形周溝墓」<sup>219)</sup>では3号木棺の墓壇埋土中に高杯1個体、5号木棺付近の盛土中から小型碗形土器、6号木棺付近の平坦面上から台付無頸壺が出土し、加美遺跡Y1号「方形周溝墓」<sup>220)</sup>では2号木棺の墓壇埋土中から高杯、3号木棺の墓壇埋土中から甕、5号木棺の墓壇上から水差し、9号木棺の墓壇上から甕、21号木棺の墓壇上から高杯、23号木棺の墓壇上から水差し・高杯がそれぞれ出土した。これらのほとんどに打欠・穿孔がみとめられることから、儀礼に使用した後に打欠・穿孔を行い仮器化し、埋葬終了後に墓壇上付近に供献したものと考えられる。

一方、終末期になると比較的高く大きい墳丘を持ち、突出部(あるいは前方部)を有する墳丘墓が出現し、

その墓壙上あるいは墓壙内（棺上？）から土器が出土する例がある。畿内およびその周辺では京都府園部町園部黒田古墳<sup>221)</sup>、加茂町砂原山墳丘墓<sup>222)</sup>、城陽市芝ヶ原古墳<sup>223)</sup>、奈良県榛原町大王山9号地点墳丘墓<sup>224)</sup>、桜井市ホケノ山古墳<sup>225)</sup>などであり、いずれも穿孔のある畿内系加飾壺が使用されていることが注意される。これらの墳丘墓は副葬品の無い中期段階のものとは葬送祭祀の系譜から言えばまったく別系統で、副葬品をおさめる儀礼と関係を持って出現する土器配置であり、大庭はそのような観点から終末期あらわれる加飾壺を使用する土器配置の系譜は畿内独自のものではなく、吉備を中心とした中国地方にその系譜が求められるとした<sup>226)</sup>。このような加飾壺の土器配置については第4章第4節で詳述したい。

## 註

- 218) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26
- 219) 瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 220) 田中清美 1986「大阪府大阪市加美遺跡の調査—弥生時代中期後半の大型墳丘墓を中心に—」『日本考古学年報 37（1984年度版）』日本考古学協会
- 田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『加美遺跡の検討』古代を考える 43 古代を考える会
- 221) 園部町教育委員会 1991「園部黒田古墳」『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第8集
- 222) 加茂町教育委員会 1983「砂原山古墳試掘調査速報」『京都考古』28
- 223) 城陽市教育委員会 1987『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 224) 榛原町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1977『大王山遺跡』
- 225) 奈良県立橿原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社
- 226) 前掲註218文献（大場1992）参照

## 小結

以上、畿内の弥生土器の土器配置を概観してきたが、弥生時代中期以降、様々な系譜の土器配置が交錯した状態で行われていることが判明した。その中で重要な二系統は儀礼に使用された調理器・供膳具を多量に廃棄する土器配置（東奈良型）と、穿孔土器を墳丘のコーナーなどに立て置く土器配置（瓜生堂型）であろう。前者の東奈良型土器配置のような儀礼の廃棄行為は北部九州や吉備でも行われ、その中の限定された土器だけが墓壙上など特別な場所供献・埋置されるようになるらしい。その意味においては墓壙上出土の供膳具は同じ儀礼の最終段階で廃棄場所をたがえただけなのかもしれないが、このことは畿内では類例に乏しく詳述できない。吉備地域の事例の方がより説明しやすいと思われる。

後者の瓜生堂型土器配置は先述したとおり、もともと破壊・廃棄していた土器をある時から破壊ではなく穿孔によって象徴的に仮器化し、呪的な器物として辟邪のために墳丘コーナーなどへ据え置くようになったとおもわれる。古墳時代の圍繞配列の思想上の萌芽がすでにみられると考えていいだろう。

このように畿内においては、古墳時代にみられる主体部上集中配置の土器群と圍繞配列された土器群の代表的な二系統の土器配置の萌芽的な段階が読み取れるものの、後期段階の資料が少なく、弥生時代の系譜が古墳時代のそれにスムーズに移行するのかが不鮮明である。その移行が吉備において行われたのか、畿内において行われたのかは大変重要な問題であろう。

### 第3節 四国北東部の土器配置と葬送祭祀儀礼

四国北東部の弥生時代の墓制には土壙墓・方形区画墓・土器棺墓などと併行して、中期から「集石土壙墓」と呼ばれる墓制が成立し、この地域を特色付けている。「集石土壙墓」の詳細は後述するが、この墓制では破碎した多量の土器と礫で土壙を覆う行為が行われており、ひとつの土器配置として抽出できよう。また、後期から終末期にかけて積石塚を含む墳丘墓が発達してくるが、これらの主体部上において供膳具が出土する例がある。したがって、四国北東部の弥生墓制においては現在のところ大きく分けて二つの土器配置が抽出できる。以下にその様相をまとめてみたい。

なお、当地域の墓制の研究は近年とくに盛んに行われている。その中でも葬送祭祀の儀礼については石川直章（1990・91）<sup>227)</sup>、菅原康夫（2000）<sup>228)</sup>、大久保徹也（2000・02）<sup>229)</sup>、近藤玲（2002）<sup>230)</sup>、栗林誠治（2003）<sup>231)</sup>らの研究があるため、それらを参考にしつつ論を進める。

#### 註

227) 石川直章 1990・91「火を伴う葬送についてのノート1・2」『徳島県埋蔵文化財センター年報』1・2

（財）徳島県埋蔵文化財センター

228) 菅原康夫 2000「萩原墳丘墓をめぐる諸問題」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14会大会研究発表要旨集

229) 大久保徹也 2000「四国北東部地域における首長層の政治的結集—鶴尾神社4号墳の評価をめぐる—」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14会大会研究発表要旨集

大久保徹也 2002「四国北東部地域における地域的首長埋蔵儀礼様式の成立時期をめぐる」『論集 徳島の考古学』徳島の考古学論集刊行会

230) 近藤 玲 2002「徳島県の弥生時代における墓制について」『論集 徳島の考古学』徳島の考古学論集刊行会

231) 栗林誠治 2003「弥生時代・東四国における墓制の様相」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』

#### 「桜ノ岡型土器配置」—集石土壙墓の土器配置—

「集石墓」や「集石土壙」などと呼ばれる遺構は、実は墓制としての認定があいまいな状況であるというのが現状である。そのような中で、弥生時代中期に比定される事例が確認された徳島県桜ノ岡遺跡は、遺構の状況がもっとも詳細に明らかにされている例であろう。はじめに、「集石土壙墓」の遺構の実態を把握するために当遺跡の状況をやや詳しく述べておきたい。

**桜ノ岡遺跡**<sup>232)</sup>（徳島県阿波郡阿波町、図版11）の発掘調査報告書において報告されている「集石遺構」10基のうち墓として認定されたのは8基である。しかし、認定された遺構においても「土壙」の大きさ・形態、あるいは礫・土器のあり方は様々である。そのうち、「集石土壙墓」という枠にふさわしいものはSK1008・SK1014・SK1016・SK1039の4基であろう。その他は土壙の形が小さかったり溝状を呈していたりしており、典型的な様相を呈していないため、ここでは触れないこととする。

さて、4基の遺構の「土壙」はいずれも隅丸長方形ないし長楕円形を呈しており、規模は最大で4.0×3.0m、最小で2.2×0.75mで、深さは25～20cmと非常に浅いものである。いずれも「土壙」底面ないし覆土中に焼土・炭化物がみられ、火の使用の痕跡がみとめられる。土器の出土状況から判断すると、もともと完形

のままで置かれる場合と破碎したものを置く場合があるが、遺構によって様相が異なる。しかし、総じて「土壙」底面か覆土中に土器が置かれ、その上を 10～15cm の砂岩角円礫によって覆うというのが基本的な構造で、土器や礫は「土壙」検出面より 10cm ほど盛り上がっている程度で、小墳丘を呈すというほどではない<sup>234)</sup>。また、土器のほかに石斧・石包丁・スクレイパー・砥石などの石器各種が出土している。

土器のあり方にいくつかのパターンがあるようである。SK1008 は「土壙」中から壺 5 個体、甕 4 個体、鉢 1 個体、高杯 1 個体が出土しているが、これらは 4 群に分けられ、土器は完形のまま横倒しに安置されていた。また、出土状況から壺や甕はあわせ口状に、高杯や鉢は蓋に使用されていたと考えられ、これらが土器棺であると想定されている。土層観察から、「土壙」内において数度の再掘削の跡がみとめられたという。

SK1014 では「土壙」が部分的な検出にとどまったにもかかわらず、壺 20 個体以上、甕 9 個体以上が出土している。多くは破損しているものの報文中ではこれらがもともと完形で置かれていたと推察している。壺の内の 1 個体は中央付近から出土した超大型品でこれが中心主体の土器棺として捉えられる。その他の土器が棺なのかどうかについては記述が無い。SK1039 でもこれとほぼ同様な状況で、大型壺 1 個体を中心に 10 個体前後の壺が置かれていた。

SK1016 ではやや様相が異なり、壺・甕・高杯・鉢などが数個づつあるが、破碎された状態で砂岩角円礫と折り重なるようにして出土しており、土器棺墓ではないと考えられている。完形近くに復原できるのは 5 個体のみで、他の多くの個体は全体の 2 分の 1 から 10 分の 1 程度の破片の集合体であるという。なお、土器棺墓ではないことと関連して、前述の三つの遺構よりも土器の年代が 1 段階新しいことは注目される。

報告書ではこのような状況から次のような儀礼過程の様子を復原している。土器棺墓である SK1008 では、①土壙の掘削→②土壙内で火を使用→③いったん土壙を埋め戻す→④土壙内に小土壙を再掘削→⑤土器棺を安置する→⑥礫で覆う、という過程が復原されている。しかし、SK1014 では底面に焼土が無いが、土器や礫が被熱しており、これらを含む層に焼土・炭化物が含まれることから、「土壙」外で火を使用し、被熱したものを「土壙」内に入れたことがわかる。また、土器棺墓ではない SK1016 では、①「土壙」掘削→②火の使用→③「土壙」の埋め戻し→④土器片と礫で覆う、という過程が復原されている。「土壙」底に焼土・炭化物がみとめられることから、「土壙」内の火の使用が考えられ、土器は完形に復原できるものと一部の破片しかそろわないものがあるため、その場で割ったものと他から破片の状況で運ばれた物の両方が想定されている。ただし、この遺構は削平により部分的な調査にとどまっているため、本来ならば未調査部分に埋蔵されていた遺物も考慮に入れるべきであろう。しかし、調査部分の出土状況から土器が破碎されたことは確かなことと受け止められる。このような儀礼の過程からこれらはほぼ同一系統の葬送祭祀儀礼として捉えられるが、はじめ土器棺墓として出発したものが、しだいに土器棺を伴わない墓に変容したと考えられる。

以上が桜ノ岡遺跡にみる「集石土壙墓」の様相である。栗林誠治は他に中期に比定できる例として、徳島県椎ヶ丸～芝生遺跡 SK1003（覆石、土壙墓）、香川県前田遺跡 SK1004・SK1060（覆石、土壙墓）、徳島県北原遺跡東区集石土壙墓 1～3（覆石・集石、土壙墓・土器棺墓）、香川県庵の谷 ST01（覆石・土壙墓）などを挙げている<sup>235)</sup>。この限りでは中期には栗林分類の「集石」は少なく「覆石」がほとんどであることがわかる。また、栗林は後期以降では徳島県土成前田遺跡土坑 3（覆石・土壙墓）、徳島県北原～大法寺 SK1006（覆石・土壙墓）、徳島県足代東原遺跡集石墓群（集石・土壙墓）、香川県稲木遺跡 C 区 ST11～14・16～19（集石・土壙墓）などを挙げている。

稲木遺跡C区<sup>236)</sup>(香川県善通寺市)では報告書において第1～9号墓(ST11～19)の9基を「集石土壙墓」として報告しているが、その内容は様々なものが含まれている。基本的な構造としては、下部に浅い土坑があり、上部に礫と土器片による「墳丘」が構築されるというものであるが、下部構造の土坑の形態は4.6×1.2mと非常に細長いものから(2号)、3.5×2.5mの不整円形と呼べるようなもの(1号)とまちまちであり、9基のうち3基においては土坑が検出されず(4・5・9号)、1基についてはそれらしき土層の堆積はあるものの人為的な土坑であるかどうかの判断はつかないという。また、土器の出土量にも多寡があるようだ。

このように報文を参考にする限り、墓の可能性の低いものが含まれている反面、一方で墓の可能性が高いものも存在する。稲木C区8号集石墓(図版12)は自然石や花崗岩角礫とシルト質の土壌によって平面形17.5×7.5m、高さ0.47mの長楕円形の「墳丘」を構築しているが、下部から2基の主体部と考えられる土壙が検出されている。1号主体部は平面4.5×1.66m、深さ42cm、2号主体部は平面1.93×0.78m、深さ10cmで、両方とも長方形を呈しており、浅いことを除けば通有の墓壙として認識できる形態を有している。墳丘のほぼ中央部を鞍部として頂部が二ヶ所に存在し、主体部はそれぞれの下から検出されているので、もともと連接して築かれた2基の集石墓と考えられる。墳丘中や上面からは膨大な弥生土器が出土したが、これらの出土状況の詳細は報告書中に記載が無い。また、これらの土器とは別に主体部埋土に伴う土器がある。1号主体部では二次的な被熱を受けた高杯1個体と鉢1個体が墓壙埋土中から出土しており、墳丘中の土器とは異なる土器配置として認識できよう。これら主体部に伴う土器のありかたからも当遺構が墳墓である可能性が高いと考えられる。

このように稲木遺跡で検出された「集石遺構」は墓としての認定が困難なものもあるようだが、確実に集石墓として認定できるものも含まれていると思われる。そして、それらからわかることは、後期に入り、8号墓のように規模が10m前後の「墳丘」と呼ぶべきものを備えるものが出現してきたということである。中期の桜ノ岡遺跡SK1016の様相を量的に拡大したものが後期の稲木遺跡C区8号墓に相当すると考えられよう。墳丘に含まれる土器の量も墳丘規模の大型化に伴って増加したと考えられる。

これら「集石土壙墓」の「覆石」・「集石」あるいは「墳丘」に含まれる土器片群を土器配置の一類型として捉えることが可能だと思われるが、それではこれらの土器はいったいどのような性格の儀礼に伴って、どのような意識の下に礫群に混ぜ込まれたのであろうか。

稲木C区8号墓の土器は報告書では142点が図示されている。そのうち壺が42点、甕・甑が44点、鉢が9点、高杯が30点、大型器台が1点、他に小型鉢やミニチュア土器が少々ある。これら図示された土器における器種構成の比率が実際の器種構成を示すわけではないと思うが、おおよそ弥生時代後期の土器群の器種構成としてはバランスの良いものといえる。したがって、これらの土器を使って葬送祭祀に伴う飲食儀礼が行われた可能性もあるが、普段の集落での生活に使用していて破棄された土器群を墓に持ち込んだ可能性もあるということであろう。それぞれの器種の中で形式が統一されていないことも、これらの土器が儀礼のためにセットで製作された土器でないことを示唆している。また、墓へ「配置」する意識についてであるが、多量の土器片が封土内から見つかるということは、単なる廃棄ではなくやはり意図的なものとして捉える必要があろう。土器片を意図的に墳丘封土に混ぜ込むというやり方は他の地域・時期にはみられない特異なものである。これらは明らかに土や石と共に墳丘の構築材として扱われているが、本来、構築材として適さない土器をわざわざ使用することにはそれなりに思想的な背景が存在したのだろう。それらに呪的な効力が期



待されていたとすれば、それらを破砕する行為も儀礼のうちに含まれていたかもしれないが、これ以上は推測に留まらざるを得ない。

#### 註

232) 栗林誠治 2003「弥生時代・東四国における墓制の様相」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』註4参照

233) 湯浅利彦 1993『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3 桜ノ岡遺跡』財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第3集

234) 栗林誠治はこのような石の使用のあり方を「覆石」と呼称し、礫を塚状に盛り上げて水平方向から認識が容易な「集石」とは区別している。前掲註232文献(栗林2003)参照

235) 前掲註232文献(栗林2003)参照

236) 香川県教育委員会ほか 1989『稲木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊

### 「萩原型土器配置」—墳丘墓における主体部上土器配置—

後期から終末期にかけて四国北東部でも墳丘墓が発達してくる。これらの墳墓については大久保徹也が様相を一覧表にまとめている<sup>237)</sup>。これらの中には積石塚とそうでないものがあり、また円形の墳丘墓・周溝墓のなかには突出部を敷設するものも出現している。ここでは主体部上土器配置がみられる代表的な2例について述べる。

**奥10号墓**<sup>238)</sup>(香川県大川郡寒川町、図版14)は、墳丘は積石塚ではなく盛土あるいは地山整形によって構築される、不整長方形の小規模な墳丘墓である。墳裾の一部において列石が検出されている。墳頂に竪穴式石槨があり、主体部上に土器と鉄器が置かれていた。少なくとも吉備系装飾壺2個体、吉備系中型装飾器台1個体、「下川津B類土器」<sup>239)</sup>の細頸壺1個体、在地系高杯2個体、不明鉄器1点がある。吉備系装飾壺は細頸長頸壺と口縁端部を上下に拡張する有段口縁壺の口縁部を結合させたような形態で、胴部下半に打欠による穿孔がある。墳丘構造・埋葬施設・主体部上の土器配置の様相から考えて、吉備の影響の下に構築された墳丘墓であろう。

一方、**萩原1号墓**<sup>240)</sup>(徳島県鳴門市、図版13)は径18mの円丘部に、8.5mの細長い突出部がとりつく前方後円形の積石塚である。墳丘は砂岩角礫・円礫を用い、墳丘の高さは円丘部で80cm遺存していた。主体部は竪穴式石槨内に箱形木棺をおさめるものである<sup>241)</sup>。副葬品に画文帯神獣鏡1面、管玉4個、鉄器片がある。主体部上に白色円礫堆があり、土器片がまじって出土した。土器はすべていわゆる「下川津B類土器」の特徴をそなえており、器種は細頸壺、小型台付埴、直口壺、小型広口壺などが数個体ずつ存在したようだが、本来何個体あったのかは、破片のため定かでない。円礫堆中に混ぜ込まれていたため、意図的に破砕されたと考えられている。なお、当墳墓では主体部外周周辺で大型壺を中心とする土器片集中区が二ヶ所みとめられているが、このことについては囲繞配列と関連させて後述する。

このような後期～終末期における四国北東部の主体部上の土器配置の系譜はどこから来るのであろうか。主体部上に奥10号の例を見れば吉備における土器配置が四国北東部に伝播した実例があることが明らかであるが、置かれる土器の個体数は吉備の諸例と比較すると著しく少なくなっていることは注目する必要があるだろう。また、萩原1号墓では円礫堆中に土器片がまざっていることから、前代の集石土壙墓における土器

配置のあり方とも似た状況であるとも言えるが、主体部上の土器は小型器種の供膳具に限られており、壺や甕を多用した集石土壇墓の土器配置の器種構成とは明らかに異なる。また、吉備においては楯築墳丘墓において主体部上の円礫堆中に同じように碎片化した土器片が混ざっていたので、萩原1号墓の状況をことさら集石土壇墓との関連で位置づけなくとも良いように思える。ただし、使用されている土器は高松平野から搬入されたと考えられる下川津B類土器によって占められるので、吉備からの直接的な影響ではなく、吉備の影響をうけつつ四国北東部の首長層によって新たに創出された葬送祭祀儀礼であったと考えられる。高松平野では萩原1号墓より古く、主体部上に下川津B類土器を置く土器配置は見つかっていないが、布留式最古層に併行すると考えられる香川県高松市鶴尾神社4号墳<sup>242)</sup>(図版137)において同様の土器配置が行われている。当墳墓については第6章第3節で詳述するが、積石塚であり、主体部の竪穴式石室の埋土および主体部の周辺の墳頂から土器が碎片となって出土した。石室内埋土中の土器と墳頂の土器は接合するものがあるため、本来墳頂に置かれたものが棺の腐朽に伴って一部が石室内に落ち込んだものだろう。量的にはやはり多くなく、器種は単口縁壺・二重口縁のほか、頸部にヘラ書きによる三角文・櫛歯文・綾杉文をほどこす大型壺とともに、下川津B類土器に属す細頸直口壺が数個出土している。報告書で図示されているのは壺類だけであるが、本来他の器種があったのかどうかは不明である。報告書に図示されている器種が本来の器種構成を示すのであれば、高杯や器台などが欠落していることになり、一般的な供膳具のセットを具備していないことになる。しかしながら、時期的には主体部上の土器群が実用品から仮器へと変化し儀礼が形骸化した時期に相当するので、萩原1号墓との器種構成の違いはことさら強調する必要は無いように思う。ともに下川津B類土器を使用していることから、別物とするよりは一系統の土器配置の中での緩慢な変化として捉えた方が良いでしょう。このような、四国北東部の墳丘墓における主体部上の土器配置を「萩原型土器配置」とする。

註

- 237) 大久保徹也 2000「四国北東部地域における首長層の政治的結集—鶴尾神社4号墳の評価をめぐる—」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集
- 238) ゴルフ場建設用地内埋蔵文化財調査団 1973『雨滝山遺跡群』
- 239) 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会ほか  
蔵本晋司 1999「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について—下川津B類土器の動向を中心として—」『中間西井坪遺跡Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 240) 菅原康夫編 1983『萩原墳墓群』徳島県教育委員会
- 241) 萩原1号墓の主体部構造について、調査者の菅原康夫はホケノ山古墳の「石囲木槨」の発見をうけて調査資料を再検討した結果、萩原1号墓においても木槨構造がみとめられるとしている。なお、萩原1号墓のような庄内式併行期に出現する突出付円墳あるいは前方後円形の積石墳丘墓の成立については外来の影響が不可欠だが、基本的には在来の集石土壇墓における大型化の延長上に位置づけおく必要があるだろう。先に見た稲木遺跡C区8号墓は明らかに大型化傾向にある。また、足代東原遺跡においては後期からつづく集石墓群において庄内式併行期にいたり突出部が敷設された前方後円形の積石墓(1号墓:全長16.5m、高さ40cm)が築造されているという(菅原1985)。集石土壇墓と積石墳丘墓が共存する例として注目されるが、正式報告書が未刊のため詳細は不明である。

## 小結

以上述べてきたように、四国北東部の弥生墓制では中期からの集石土壙墓における破碎土器の墳丘への混和（桜ノ岡型）と、後期・終末期の墳丘墓における主体部上への土器配置（萩原型）という二種が抽出できた。「桜ノ岡型」は墓制として未だ不明な点が多いものの、他地域で認められる共同体的な葬送祭祀儀礼の痕跡である可能性もあろう。詳細は今後の類例の増加を待つより他は無い。萩原型土器配置についても狭い意味で捉えれば類例は下川津B類土器を使用していることが条件となり、類例は今のところ奥10号墓と萩原1号墓、鶴尾神社4号墳の3基しかない。しかし、後二者は主体部の内容が把握されている当該期の数少ない例にもかかわらず、墓の構造と土器配置に共通性の高さが伺われる。土器配置に関して言えば、ともに葬送儀礼用に特別な土器を選択し、小型器種や壺を破碎し主体部周辺に配置しているのである。儀礼として決まった形があったとみえ、他にも未発見の類例がある可能性が高いと考えられることから、類例は少ないものの、あえて当地域の初期の首長墓の葬送祭祀儀礼を特色付けるものとして、位置づけておきたい。その内容は主体部上に供膳具を置くことから被葬者個人を対象としているのであろう。はじめは実際に飲食儀礼が行われたのかもしれない。儀礼終了後に土器を破碎し、主体部上に配置したその意識は破碎したとはいえ供献に近いものであったと考えられる。また、この四国北東部における主体部上の土器配置の成立に関して、奥10号墓などの事例を参考にする限り、吉備の影響が少なからずあったと推察できる。

## 第4節 吉備の土器配置と葬送祭祀儀礼

吉備における弥生墓制の土器配置は複雑な様相を呈している。それは特に後期後葉以降、儀礼挙行後に使用した土器を配置する位置・方法が遺跡によってまちまちであり、器種構成によって推定される儀礼の分類と、配置位置による分類とが必ずしも相関しないからであろう。このことは何よりも墳丘墓などの様相がかなりバラエティをみせることから推測できるように、葬送祭祀における儀礼の方法についてもかなりの種類がみられる。ただし、それらを全て異なる分類として分けることは、この地域の葬送祭祀儀礼の実態を表現するためには適切な方法ではない。それは一見、多くの種類に見える土器配置は、ある典型例がそれぞれ複数の方向性のもとに変化形態を生み出していると見られるため、大枠で区分した後に系統的に整理するのが好ましい方法だと考える。したがってこの冒頭部分では、吉備の弥生墓制の土器配置が大きく二つに分かれることを示すに留めた方が良いだろう。すなわちそれは、確実なところでは中期からつづく土壇墓の墓壇上に少数の土器を置く土器配置（四辻型）と、後期後葉に確立する、特殊器台を含む多器種・多量の土器群から構成される儀器を使用した儀礼が想定できる一群の土器配置（楯築型）である。

### 「四辻型土器配置」—中期～後期中葉までの主体部上の土器配置—

前期段階においては主体部上の土器配置の有無は定かではない。岡山市百間川沢田遺跡<sup>243)</sup>では前期の土器が出土する土坑がいくつか知られているが、その中で土器が伴う土壇墓として可能性が高いものはP52である。櫛描直線文が施された完形の壺と蓋が墓壇底面から出土したが、おそらく内容物を副葬したものである。土壇は細長く、土器は端から出土したため、枕元か足元に置かれたものと思われる。前期段階に墓壇内に土器を置く例は北部九州の状況と似ているが、類例が多くないため、ここでは土器配置として類型化しない。

土器が墓壇底から浮いて出土する事例は岡山市南方遺跡<sup>244)</sup>において中期前葉からみられる。埋葬直後に完形品の壺などが置かれ、調査者は副葬品・供献土器として位置づけている。南方遺跡の例は土器が墓壇底から浮いて出土するとは言え、出土位置はかなり底に近い。おそらく棺上か遺体の上に置いたのではないだろうか。いずれにせよ、通常「墓壇上」と呼ぶ場合は棺の腐朽に伴って墓壇埋土中から出土するとは言え、もともと置かれた位置が墓壇を完全に埋め戻した地表面であると推察されるもののことを指すので、厳密な意味での墓壇上ではないのだろう。土器の置かれる位置が次第に上がっていく過渡期の現象として捉えられようか。

中期後葉になると**四辻土壇墓群**<sup>245)</sup>（岡山県赤磐郡山陽町、図版16）において確実に墓壇上から土器が出土するようになる。当土壇墓群は中期後葉～後期初頭と庄内式併行期の時期に営まれた総数70基以上の土壇墓群であるが、土器を伴う土壇墓は中期後葉がもっとも多く、そのほとんどが墓域の中央北寄りに営まれた方形台状墓上の埋葬施設（第28・30・33～38土壇）である。一つの土壇墓から出土する土器は1～6個体程度で、完形品はわずかである。器種は高杯が多く、ついで甕・台付壺・埴などがある。出土位置を詳しく見ると墓壇の肩部に寄っているものが多いようで、個体数が少ないことから、おそらく内容物を備えた供献土器であろう。完形品が少ないのは墓壇の肩に置かれたために棺の腐朽に伴う沈下の影響を受けにくく、長い期間地表に露出していたためと思われる。

後期前葉になると類例が増える傾向にある。

**みそのお遺跡**<sup>246)</sup> (岡山県御津郡御津町) では一つの尾根上に 40 基以上の台状墓が後期前葉から古墳時代前期に至るまで累々と営まれており、同一の集団の長期間にわたる造墓活動を知る上でその資料的価値は測り知れないものがある。後期前葉の墳墓は尾根先端近くの **1 区** (図版 17) に築造された 6～12・18 号墓の 7 基である。それぞれの台状墓上の数基の土壇上から土器が出土している。土器の個体数は多くなくほとんどは 1～3 個体程度出土である。高杯・甕がほとんどで、ついで把手付壺などが多い。これらは完形品が多く、やはり内容物の供献に使用されたと考えられる。

**宮山方形台状墓**<sup>247)</sup> (岡山県赤磐郡山陽町、図版 15) は 18.5×13.5m のこの時期では大型の長方形墳丘墓である。墳頂平坦面は広く 7 基の土壇が営まれているが、いずれも偏った位置にあり中心主体と呼べるものは無い。唯一、第 5 土壇のみ墓壇上から土器群が出土した。器種組成は高杯 9 個体、甕 10 個体、台付埴 1 個体の計 20 個体である。報告書に図示された図面をみる限り完形品は無いが、これらが故意に破砕されたものなのか、それとも完形品が置かれた後、棺の腐朽に伴う陥没の過程で破片化したのかは定かではない。また、高杯・甕の組み合わせは上述してきた類例と共通するが、土器量が圧倒的に多く、飲食儀礼が行われた可能性もあるだろう。

**芋岡山遺跡**<sup>248)</sup> (岡山県小田郡矢掛町、図版 24) は尾根の高まりに営まれた、後期前葉から後葉にかけての土壇墓群である。総数 29 基を数えるが、遺構の配置状況から北群 (1・10～19 号、後期前葉～後葉)、中央群 (2～9 号、後期後葉)、南群 (20～29 号、後期後葉) に分けられている。また、南群中に土坑 D・E・F があり、北群のさらに北には墓域の内外を画していると考えられる溝状遺構 C とそれにかかって掘られた土坑 B があり、さらに遺構 C の北にほとんど接するように大型の隅丸方形の大型土坑 A が存在する。このうち、後期前葉から中葉の土器が出土している遺構としては 10 号土壇 (壺 2 個体)、11 号土壇 (甕 1 個体)、12 号土壇 (甕 1 個体)、A 遺構 (高杯片 2 点、甕片 10 数点、鉢 2 個体など)、B 遺構 (高杯片 1 点、甕片 1 点、台付埴片 2 点など) である。10～12 号土壇の土器はどのように出土したかの記述が無いが、これまでの類例からおそらく墓壇上出土と考えられる。A 遺構については覆土中に土器片が上層から下層にわたって出土したことから、土器片の複数回の廃棄が想定できよう。B 遺構についても土器片が廃棄されたものと思われる。後期後葉の状況は後述するが、前葉～中葉の土器配置は総じて個体数が少なく、他の事例と同様に高杯・甕が主体をなすものと思われる。

以上、見てきたように、吉備における後期中葉までの墳墓における土器配置は非常に小規模なものがほとんどである。器種も高杯・甕を主体に少量の壺・鉢などが伴う程度である。これらを使用した儀礼とは、食物の供献か小規模な飲食儀礼が想定できるが、次代の後期後葉段階の様相とは大きく異なるといえよう。このような土器配置を、四辻土壇墓群の様相を代表させて「**四辻型土器配置**」としておく。

## 註

243) 神谷正義・草谷孝典編 1992『百間川沢田 (市道) 遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会

244) 柳瀬昭彦・岡本寛久編 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 40 岡山県教育委員会

245) 神原英朗編 1973『四辻土壇墓遺跡・四辻古墳群 他 方形台状墓発掘調査概報 3 編』山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

246) 椿真治編 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87 岡山県教育委員会

247) 宮山方形台状墓：神原英朗編 1973『四辻土城墓遺跡・四辻古墳群 他 方形台状墓発掘調査概報3編』

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

248) 間壁忠彦・間壁菫子 1967「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告—弥生時代後期の墳墓群—」『倉敷考古館研究集報』第3号

倉敷考古館

### 「楯築型土器配置」—後期後葉に出現した「典型例」の土器配置—

後期後葉になると岡山市楯築墳丘墓に代表される大型の墳丘墓が出現し、そのことと歩調をあわせるかのごとく特殊壺・特殊器台の組み合わせが葬送祭祀儀礼の儀器に含まれるようになる。近藤義郎は特殊器台の出現はまさに楯築墳丘墓の葬送祭祀儀礼を契機にして誕生したと述べているが<sup>249)</sup>、現在の資料状況を総合すると楯築墳丘墓の特殊性は際立っており、妥当な解釈と思われる。そのことはともかく、楯築墳丘墓をはじめとする備中のいくつかの墳丘墓において特殊器台を含む極めて多量の土器群からなる儀器がみつき、大規模な葬送儀礼の存在が推定できる。まずはそれらの遺跡における土器配置をやや詳細に確認しておこう。

**黒宮大塚墳丘墓**<sup>250)</sup>（岡山県吉備郡真備町、図版21）は備中西部に位置する。報告書では「前方後方形」ととらえているが、現在では2基の隣接する方形墳丘墓ととらえられている。本書で述べる「黒宮大塚墳丘墓」とは報文において「後方部」とされた大型の長方形を呈する墳丘を指すものとする。規模は33×28m、高さ5mを測る。墳頂中央には「黒宮様」と呼ばれる大塚八幡神社が鎮座しているが、その社殿の裏、方形の墳頂平坦面の北西部に位置する場所に竪穴式石槨が1基発見され、副葬品として硬玉製勾玉1点・碧玉製管玉1点が出土している。土器は三ヶ所に分かれて出土した。ひとつは墳頂の竪穴式石槨の上面で、木棺の腐朽に伴う陥没坑内の黒色土中に高杯を中心とするおびただしい土器が含まれていた。あとは墳丘西斜面の長楕円形土坑内（A地点）および墳丘北西部裾付近（B地点）においても土器が出土している。

主体部上の土器群は遺存率が良く、多くの土器が完形に復原されている。報告書の図に示された限りにおいての器種構成は、特殊壺2個体、大型装飾器台片1点、細長頸壺4個体、中型器台5個体、外反口縁高杯33個体、内弯口縁高杯14個体、脚付直口埴11個体、台付鉢3個体、大型鉢1個体、甕2個体である。そのほか器種が断定できない破片があることや、発掘前にすでに土器群の一部が地表に出ていたため元々上位に位置していて既に失われた個体も存在すると思われることから、それぞれの器種の個体数は若干多かったと考えられる。しかしながら、遺存していた数量が多量なことから、おおかた本来の儀器の構成を表していると思われ、その意味において非常に重要な資料である。これらはその機能からおおまかに3類に分けられる

（図2）。**1類土器**は壺と器台の組合わせ、**2類土器**は個人食器と考えられる高杯類・脚付直口埴、**3類土器**は鉢類および甕で用途としては調理器としての機能が考えられる。器台以外の器種には焼成後の穿孔がみられ、特に細頸壺には底部中央の焼成前穿孔のすぐ脇に焼成後穿孔を施していることは注目される。このことは第7章第2節で改めて触れる。

また、A地点からは特殊器台3個体、B地点からは特殊壺（通常の特種壺とは異なる加飾壺が主体）5個体（焼成後穿孔）、特殊器台1個体、大型装飾器台4個体、高杯1個体が出土している。興味深いことはA・B両地点における器種構成は先の分類のうちほぼ1類土器で占められ、主体部上→B地点→A地点の順で器種が大型になるという点である。このことはそれぞれの地点で出土した土器群が機能的には重複するものではなく、もともと一つの儀礼の中で使用されたものが、土器の大きさによって別々の位置に配置されたと考

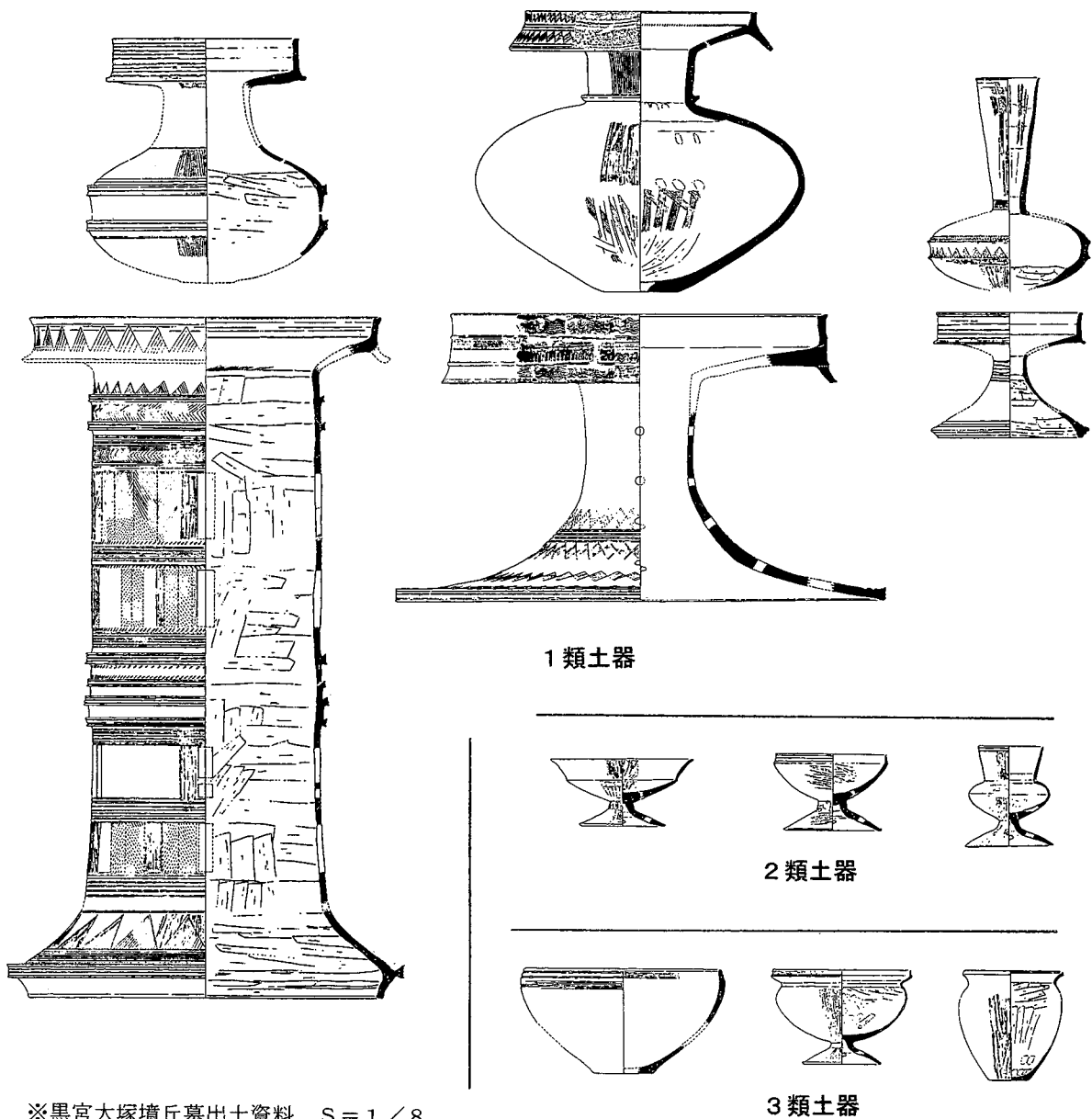


図2 「楕築型土器配置」に使用される儀器の分類

えられるのである。このことが、分析上、配置位置による分類に先駆けて器種構成の検討を行わなければならない理由であり、黒宮大塚墳丘墓出土土器群によってこのことが如実に示されていると言えよう。以下、文中の1～3類土器の区分は、この黒宮大塚墳丘墓出土土器の区分を踏襲するものとする。

さて、このような1・2・3類の器種構成を示す土器群を具備する墓は多く存在するが、それぞれの類間における量的な比率や、使用土器の系統がいわゆる上東式土器に限られ特殊器台・特殊壺を含む、などの条件を兼ね備える事例は極端に少なく、現在のところ楕築墳丘墓、立坂墳丘墓、雲山鳥打1号墓に上述した黒宮大塚墳丘墓を加えた4ヶ所に限られるであろう。

**楯築墳丘墓**<sup>251)</sup> (岡山市、図版 22) は直径約 40m のやや不整形の円丘に北東と南西の二ヶ所に突出部をもつ双方中円形の墳丘墓である。二つの突出部はすでに破壊されているが、推定復原長は約 80m であり、円丘の高さは約 5 m と、弥生墳丘墓の中では最大規模を誇る。墳頂には 9.0×6.25m という巨大な墓壇を持つ中心主体である第 1 主体と、墳頂南東部で発見された第 2 主体とがある。第 1 主体は木棺木槨構造で、副葬品は碧玉製管玉やガラス製小玉などを中心とした多量の玉類と鉄剣一振りが出土した。また、総重量 32 kg 以上の多量の朱が棺底に厚く敷かれていた。第 2 主体は木棺構造で墓壇内からサヌカイト片が 4 点出土している。また、墳丘斜面には墳頂に近いほうから第 1・第 2 列石がめぐり、墳頂平坦面には巨大な立石が数個みられる。列石は土器の出土状況から築造当時のものと判断されたが、立石については確証が無いという。

土器が集中して出土したのは、①第 1 主体上円礫堆、②第 2 主体墓壇埋土内、③円丘部斜面、④北東突出部第 2 列石外方、⑤南西突出部大溝、の五ヶ所である。

①の第 1 主体上円礫堆とは木棺・木槨の腐朽に伴う墓壇上層の陥没坑に落ち込んだ円礫の層である。深さは最深部で 1 m を測るため、陥没以前の状態はおそらく地表面上にうず高く積まれていたと推定されている。この円礫堆中から土器片、土製品各種、鉄器、弧帯石片、種子、朱、炭、灰などが混ぜ込まれた状態で出土したため、儀礼に使用した道具などを一括廃棄したと考えられている。土器は 1 類が特殊器台 2 個体、特殊壺 1 個体と少ないが、2 類は高杯・脚付直口埴の両者あわせて 95 個体以上と多量である。また、大型の装飾高杯片が数個体分出土しているが、これは装飾的な大型器種として 1 類に含めるべきものかもしれない。3 類に相当する鉢・甕などはごく少数の破片が出土している程度であるが、存在することは確かなようだ。土製品には勾玉形・管玉形・人形・家形がある。それぞれの遺物の出土層位には傾向があり、弧帯石は円礫堆最下部に、1 類土器の特殊器台・特殊壺は最上層に偏って出土し、装飾高杯・2 類土器・土製品は上下まんべんなく出土しているという。また、これら円礫堆中の遺物は細片となっていることから破碎され、礫中に混ぜ置かれたと考えられている。おそらく円礫堆の最上部に置かれたと考えられる特殊器台・長頸壺は全形を復原できるほど接合する個体があるが、完形で置かれたのか破碎されたのかは判断できないという。

②の第 2 主体の墓壇内埋土中から装飾高杯 2～3 個体と脚付直口埴の破片が出土しているが、後者については報文中に正確な器種・数については記載が無い。ただしこれら第 2 主体伴うものとされており、第 1 主体にともなう祭祀の儀器が混ぜ込まれたものではないと判断されている。第 2 主体のための儀礼が行われたと解釈してよいだろう。ただし、第 2 主体上に新たに敷かれた円礫堆中の特殊器台小片については第 2 主体に属するものかどうかは不明であるという。

③円丘部斜面から土器片が出土することは、円丘部の北斜面・南斜面で行われたトレンチ調査で明らかにされている。特殊器台、特殊壺、高杯片などが知られており、平坦面近くでは少なく、第 1 列石付近およびその下方斜面に多く見られるという。これらの土器に対しては第 1 主体にかかわる祭祀に使用されたものが、第 1 列石付近にかたづけられたと解釈されている。つまりもともとは第 1 主体上の円礫堆中から発見された土器群とセットで使用されたと考えられ、円礫堆中に混ぜ込まなかった個体を周辺に廃棄したと考えられる。しかし、置かれた場所が第 1 列石付近という場所を意識しているならば「廃棄」という表現は適切ではなく、文字通り置かれた可能性もあるだろう。報告書に図示されたものから判断すると、高杯などの破片はむしろ少なく、円礫堆に少なかった特殊器台・特殊壺が量的に優位を占めるようで、円礫堆中に混ぜられた土器と周辺に置かれた土器の器種組成が対称を成すことは注目できる。



④の北東突出部の東側、円丘部に程近いくびれ部付近の第2列石外方に接する平坦面において、完形の長頸壺が出土し、さらに平坦面外方の斜面から特殊器台・特殊壺の破片が出土した。これらはもともと長頸壺と同じ第2列石外方の平坦面に置かれていたと判断されている。そして、報告書ではこの場で祭祀が行われたとは考えにくく、北東突出部における埋葬に伴う儀礼に使用されたものがこの場に片付けられたと判断している。存非が確認できない北東突出部の埋葬にともなう儀礼に使用されたかどうかは定かでないにしても、くびれ部付近という場所を意識して置かれた可能性は高いと考えられる。

⑤の南西突出部の大溝では特殊壺・長頸壺と大型装飾器台のセットが10セット近く出土した。出土状況から墳丘上方からの転落ではなく裾列石付近に置かれていたと判断できる。また完形に復原できるものが多数あり、出土状況からも、完形のまま置かれていたと考えられる。近藤義郎はこれらが儀式に使用された後にこの場に片付けられたものとしているが<sup>252)</sup>、特殊器台を含まず、壺と大型器台の組み合わせのみが出土していることから、あるいは意識的に配置したものと捉えても良いと思われる。

以上、見てきたとおり楯築墳丘墓では2類土器の大多数は第1主体上円礫堆中にあり、そこに少数しか存在しなかった1類土器の特殊壺・長頸壺・特殊器台・大型装飾器台などがむしろ周辺に置かれている状況が明らかになった。これは無造作に片づけを行ったのではなく、その場所を意識して各器種が計画的に配置された可能性も考慮に入れるべきであろう。本書ではこのような特殊壺・長頸壺・特殊器台・大型装飾器台などの1類土器が主体部上でなく周辺に配置される傾向を、1類土器の「外方配置」と呼ぶことにする。

**立坂墳丘墓**<sup>253)</sup> (岡山県総社市、図版 23) は、東西 17m を測る不整楕円形の墳丘を持ち、高さは約 2m、墳端を示す列石が墳丘をめぐる。墳頂平坦面に中心主体である第3主体 (配石木棺木槨) と並列する第2主体 (配石木棺木槨) があり、平坦面から斜面にかけて6基 (配石木棺4・土壙1・箱形石棺1)、墳丘外に2基の箱形石棺がある。

立坂墳丘墓の土器配置は報告書で見る限り、墳丘の各所において広範に出土した状況がうかがえる。報告書に土器出土状況の明確な記述が無く、墳頂の第2・3・11・13主体の主体上から土器片が出土したことがわかる他は、個々の遺物の記述箇所に出土グリッドが記載してあるのみである。しかしこれらの情報を整理すると、墳丘斜面および周辺ではある程度土器片がまとまって出土する場所が見受けられる。すなわち、①墳丘部北東斜面 (4C・5B・5C・6B・6C グリッド)、②墳頂平坦面南側～墳丘部南側斜面 (5E・6E・7E・8E グリッド)、③墳丘部南西斜面～裾 (10E・10F グリッド)、④墳丘西側裾部～墳丘外方斜面 (10B・10C・11B・11C グリッド) の4ヶ所である。①では特殊器台・特殊壺・大型装飾器台・装飾高杯・高杯・鉢・甕が、②では特殊壺・脚付細頸壺・中型器台・高杯が、③では特殊器台・脚付細頸壺・中型器台・高杯・甕が、④では特殊器台・特殊壺・高杯・甕がそれぞれ出土している。ある程度の器種の偏りはあるが、それぞれの間で1・2・3類土器の区別が際立っているわけではない。ところが墳頂平坦面中央部 (7C・8C グリッド) からの土器の出土は希薄で、唯一高杯の7C グリッドからの出土が報告されているだけである。ここでも1類土器の外方配置の傾向は読み取れると考えられる。調査者の近藤義郎によれば立坂墳丘墓の発掘調査で得た土器の器種組成は特殊壺7個体、特殊器台9個体、脚付細頸壺3～4個体、大型装飾器台3個体程度、中型器台7個体ないし9個体以上、高杯16個体以上、装飾高杯4～6個体、壺9個体以上、鉢2個体、甕12個体以上となる<sup>254)</sup>。黒宮大塚・楯築墳丘墓に比べると2類土器の出土量が少なく、より小規模な儀礼であったと考えられるが、使用された器種構成はよく似ている。また、立坂墳丘墓においては明確に置かれ

た状況を示す土器は無く、その配置における意識は不明である。出土状況からは大部分の土器が墳頂平坦面外縁や裾部に遺棄され、それらが下方の斜面に転落し壊れたものと思われる。あるいは廃棄にあたり破碎行為も行われたかもしれないが、推測の域を出ない。

**雲山烏打墳墓群**<sup>255)</sup> (岡山市) は3基の弥生墳丘墓からなる。墳墓群全体の詳細はここでは述べないが、土器の出土量は1号墓が2・3号墓の出土量をはるかに凌駕しているため、1号墓についてやや詳細に述べよう。**1号墓**は20×15mほどの長方形墳で、地山整形および盛土によって墳丘を構築している。墳頂には円礫が敷かれており、その下部から第1～3号の3基の主体部が検出された。このうち第1・3号主体は木槨構造が想定されており、とくに第1主体は木槨の裏込めとして礫を用いている。なお、副葬品は第1・2主体から若干の玉類が出土したのみである。それぞれの主体部上と墳丘斜面・テラス・周溝中などから多量の土器が出土しているが、どの土器がどこからどのように出土したのかという記載が報文中にみられないため、土器配置の詳細を明確にすることはできない。しかし、当墳丘墓から出土した土器群の全体の器種構成およびその個体数は判明している。すなわち、特殊壺15個体、特殊器台14個体、小型特殊器台(=大型装飾器台?)16個体、長頸壺7個体、脚付直口壺(=脚付細頸壺?)14個体、器台(?)6個体、高杯91個体、脚付直口埴15個体、装飾高杯15個体、鉢10個体、台付鉢2個体、甕19個体のほか家形土器2個体、鳥形土器6個体が出土している。全体として1・2類土器の出土量が楯築墳丘墓に匹敵するが、さらに3類土器が少し多めであることが注目できよう。墳頂の主体が営まれるごとに儀礼が行われたとすれば、1回の儀礼の量が楯築・黒宮大塚出土土器の量を凌駕することが無く、妥当な数といえようか。

以上述べてきたように、器種組成に若干の差は見られるものの、総じて楯築・黒宮大塚・立坂・雲山烏打1号の4墳丘墓における土器群のセットが吉備の弥生後期に成立した、ある葬送祭祀儀礼の道具立てをよく表現しているものと考えられる。もう一度まとめると、これらの儀礼群は1類土器とした壺と器台のセットからなる象徴的な大型・中型土器群、2類の高杯・脚付直口埴などからなる多量の個人食器と考えられる小型土器群、3類の大型品を含む各種鉢類と甕など調理あるいは共用の盛り付け器に使用されたと考えられる数個体からなる土器群、の三種の土器群の複合体であり、飲食儀礼に使用されたと想定される。また、儀礼使用後に主体部上あるいは墳丘各所に設置あるいは廃棄されたが、特殊器台・特殊壺など1類土器の中でも大型品は主体部周辺ではなく墳丘の各所に配置される個体の方が多い傾向が伺われる。雲山烏打1号墓の土器配置の詳細が明らかでないもののこれら4遺跡の土器群および土器配置が吉備の弥生後期後葉におけるもっとも整った儀礼の痕跡を留めるものとして「**楯築型土器配置**」として認定する。これら4つの墳丘墓が規模・埋葬施設構造の内容から見ても当時の最上位の階層に属す首長墓であることから、もっとも整備された葬送祭祀儀礼として考えてよいだろう。

そしてこれら4墳丘墓の土器配置を弥生後期後葉に新たに出現した楯築型土器配置の「典型例」として見た場合、同時期あるいは一つ時代の降った庄内式併行期の他の墳墓における儀礼の痕跡がどのように位置づけられるかが明らかになるだろう。以下にその様相を述べていく。

#### 註

249) 近藤義郎 1998『前方後円墳の成立』岩波書店 160頁参照

250) 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館

- 251) 近藤義郎編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会  
 252) 前掲註 251 文献 (近藤編 1992) 参照  
 253) 近藤義郎 1996『新本立坂』総社市文化振興財団  
 254) 前掲註 253 文献 (近藤 1996) 78 頁表 3 参照  
 255) 近藤義郎 1985「雲山鳥打弥生墳丘墓群の調査成果」『弥生墳丘墓の研究』

## 後期後葉における楯築型土器配置の「変容形」とその他の土器配置

後期後葉段階の備中南部において特殊器台を使用した儀礼を行っている代表的な墳墓として、上記の 4 遺跡の他に芋岡山墳墓群、伊予部山墳墓群が挙げられる。

**芋岡山遺跡**<sup>256)</sup> (図版 24) の全体構成はすでに述べたが、後期後葉段階の土器が量的に最も多い。この時期の土器配置を順に挙げれば、①中央土壙群 (2～9 号) から出土した土器群、②北土壙群のうち 15・16 号に伴った土器、③南土壙群 (20～30 号) に伴う土器群、④E 遺構から出土した土器群、⑤C 遺構 (溝) 中の土器列である。

報告書によると①・②・③は出土した土器が墓壙それぞれに伴うかどうかを判別できる例はほとんどないということなので、少なくとも墓壙内ではなく、墓壙上面および墓壙外に広がって検出されたのだろう。ここではグループに対して置かれた土器群として一括して捉える。①中央群では突帯が胴部をめぐる中型壺 (口縁部の形態が不明、おそらく細頸壺)、特殊器台、中型器台、高杯などの破片が出土している。②北土壙群 15・16 号土壙上では、特殊器台・壺・中型器台・高杯・甕などの破片が出土している。③の南群では同じく突帯のある中型壺、大型装飾器台、中型器台、甕片などが出土している。

④の E 遺構は南土壙墓群の西部に位置する地山のくぼみで 2 × 1 m ほどの不整楕円形を呈している。このくぼみに堆積した有機土層中から特殊壺、大型装飾器台、中型壺、中型器台、高杯などの破片がまとまって出土した。報告書によれば土器群は置かれた状況ではないということなので、くぼみ中に破片の状態で廃棄されたものだろう。

①～④の土器配置の各器種の土器量は図版 24 を参照していただきたいが、これまで「典型例」としてみてきた遺跡にくらべ、2 類土器の量が圧倒的に少なく、1 類土器が主体を占めることがわかる。いずれにせよ大規模な儀礼は想定できない。

⑤の C 遺構と呼ばれる墓域の入り口に掘られた溝中に 1 列に並べられた状態で出土した土器群は、上記の墓域内から出土した土器群とは異なる様相を示している。器種組成は壺 2 個体、甕 6 個体、中型器台 1 個体、高杯 5 個体の計 14 個体からなり、ほとんどが完形のまま出土している。溝がある程度埋まった段階で溝中に完形のまま置き並べられ、甕のうち 2 個体は中型器台と高杯の 1 つの上に置かれていたという。壺・甕の底部には例外なく焼成後の穿孔があるため、儀礼に使用された後に墓域の内外の境界となる溝中に置き並べられたものであろう。これらの土器が時期的には上記の①～③の中央群あるいは南群の土壙墓群の葬祭に関連するものであるとすれば、儀礼に使用された土器群のうち 1 類土器全部と 2 類土器の一部を墓域内に遺棄し、2・3 類土器のほとんどを墓域縁の溝中に置いたということになろう。それともそれぞれは別の機会に行われた性格の異なる祭祀だった可能性もあるが、いずれにせよ各器種が配置される場所は先に楯築型土器配置の「典型例」としたものと大きく異なることが明らかであろう。このような「典型例」と比較した場合にい

いずれかの要素が異なるか、あるいは欠落する事例を楯築型土器配置の「変容形」という概念で捉えておきたい。

**伊予部山墳墓群**<sup>257)</sup> (岡山県総社市、図版 25) は尾根の頂部に営まれた一群の墳墓群である。もっとも高いところに並列する 2 基の石槨がいとなまれ、その東と南を石列によって区画している。また、それぞれの区画石列の外方にも数基の埋葬施設が検出されている。土器はそれぞれの埋葬施設に伴う形ではなく、石列付近や斜面から破片の状態で出土している。区画墓周辺では後期前葉～後葉にかけての土器が出土しているが、量的なピークは後期中葉・後葉にあるようだ。土器が比較的多く良好な状態で出土しているのは区画墓の南側を区画している石列を伴う溝状遺構である。この遺構は平面形が鍵の手状になっていることが特徴だが、溝の覆土中から後期中葉・後葉の土器群がまとまって出土した。土器は溝底からかなり浮いた状態で出土したことから、溝掘削後、かなりの期間祭祀が継続したことがわかる。これら溝中から出土した土器群の器種構成は長頸壺、大型器台、中型器台、高杯が多く後期中葉と後葉では器種構成にあまり変化がない。注目されるのはこの区画墓一帯では特殊壺・特殊器台・大型装飾器台など 1 類土器の装飾性の強い一群が全く出土していないことである。それではそれらはどこから出土しているといえ、墳墓群の最南端の斜面地からなのだが、ここから出土した特殊器台の型式は向木見型であり後期末葉から庄内式併行期に比定できる資料である。したがって、伊予部山墳墓群の後期後葉段階の祭祀には特殊器台・特殊壺・大型装飾器台は欠けていることになる。このことは当墳墓群において後期中葉から継続する形式で儀礼が行われたことを示すのであろう。したがって、当墳墓群も「典型例」ではないが、楯築型の変容形ではなく、楯築型出現以前の四辻型の系譜を引くものと思われる。

なお、この時期に例外的な土器配置を行っている例として前述した**みそのお遺跡**<sup>258)</sup>が挙げられる。当遺跡の**2 区墳墓群** (図版 18) のうち 22～24・26・27 号墓がそれで、墓域の各所から装飾高杯および装飾高杯に似た形状の装飾器台が出土している。出土状況から配置状況を復原することは困難だが、他の器種が非常に少ない中で、この 2 器種が主体的に使用されている墳墓遺跡は他に例を知らない。播磨地域との系譜関係を考慮する必要もあろうか。

#### 註

256) 間壁忠彦・間壁菫子 1967「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告―弥生時代後期の墳墓群―」『倉敷考古館研究集報』第 3 号  
倉敷考古館

257) 近藤義郎 1996『伊予部山墳墓群』総社市文化振興財団

258) 椿真治編 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87 岡山県教育委員会

#### 備前・備中南部における終末期（庄内式併行期）の土器配置

当該期は土器型式では才の町Ⅰ・Ⅱ式、下田所式、特殊器台の型式では向木見式・宮山式の段階とする。

この段階で後期後葉の楯築型土器配置の典型例の儀礼を確実にひく土器配置は未発見であるが、可能性の高いものとしては岡山市**鯉喰神社墳丘墓**<sup>259)</sup>が挙げられる。当遺跡は楯築遺跡の北西わずか 450m に位置する、長方形墳丘墓である。平面規模は 40×32m、高さは 4 m を測る大型墳丘墓であり、近藤義郎によって突出部が存在した可能性が示唆されている<sup>260)</sup>。墳頂に鯉喰神社の社殿がのっているが、1916 年の拝殿改築の際に、

南北軸の堅穴式石槨がみとめられ、勾玉1点が出土している。墳丘その他は今日に至るまで未発掘で詳細は知れないが、土器については表面採集されたものの中に向木見型特殊器台・特殊壺・高杯・台付直口埴・甕などが含まれており、さらに弧帯石の残片が発見されている<sup>261)</sup>。時期比定はこの向木見型特殊器台片が決め手となり、備中中枢における終末期の首長墓と目されているが、表面採集土器の器種構成は先に楯築型の「典型例」とした土器群の器種構成を踏襲しているものと思われる。しかしながら、未発掘であることから断定は避けなければならないだろう。あくまでも可能性として紹介しておくに留める。

一方、同じ終末期の墳墓がやはり楯築墳丘墓の南南西わずか250mの地点に存在する。**女男岩遺跡**<sup>262)</sup>（岡山市、図版26・27）という。遺跡付近は耕作などで地形の改変著しいが、遺跡中央部の径20mほどの高所の中心で大型土壇墓が検出されたため、この土壇を中心主体とする中規模の墳丘墓と考えられる。この中心主体は巨大な墓壇を持つ配石木棺構造であるが、棺内から青年～成年男性人骨1体と鉄剣2本が出土したのみで、この埋葬に伴う土器類は見られなかった。しかし、この墳丘墓の周囲をめぐる溝および土坑からおびただしい量の土器が出土している。各遺構の詳細は省略するが、特に墳丘北側の溝状遺構内からは数百点におよぶ土器が出土した。その状況については図版26を参照してもらいたい。器種としては特殊壺、大型壺、小型壺、短頸壺、高杯、脚付直口埴、大型鉢、小型鉢、浅鉢、甕などがみられる。注目されるのは1類土器が異常に少なく、特殊器台と大型装飾器台が皆無で、特殊壺・中型器台が全形がうかがえるものがわずか1個体存在するのみである。際立って多いのが2類土器で特に高杯は膨大な量が出土している。3類土器は甕・鉢ともに多く出土しているが、鉢は大型のものが減り、小型の浅鉢が一定量出土している。短頸壺などは装飾がなく3類に含めるべきであろうか。また、器台の上に家形の土器を載せた「家形土器」が出土している。

女男岩遺跡には墳丘墓の溝をへだてた北側にいくつかの埋葬施設が知られ、さらに土器群には多少の時期幅がみとめられることから、上記の土器群は数回にわたる儀礼に使用されたものがそのつど廃棄されたものと考えられる。したがって、土器の全個体数からももとの儀器のセットを復原することは難しいが、少なくとも上記した全体的な器種構成の比率と大きく変わることはないと思われる。したがって、調理器が存在し、個人食器を多用することから、飲食儀礼が挙行されたことは間違いないであろう。ところが特殊器台・特殊壺・大型装飾器台などの1類土器がほとんど出土しないことから、女男岩遺跡の土器配置は楯築型土器配置の「典型例」ではなく飲食儀礼に重点を置いた「変容形」であることがわかる。なぜ特殊器台に代表される象徴的な土器群を省略したのかは不明であるが、中心主体部の墓壇規模や飲食儀礼の規模から考えても被葬者の地位が高いと判断され、被葬者のステータスを理由に省略されたとも思われぬ。考えられることは被葬者の年齢が若いということと、副葬品に通常含まれるべき玉類がいつさい出土せず、かわりに鉄剣が2本副葬されていることから想定される、被葬者の職掌的な性格に起因する何らかの「制限」であろう。女男岩遺跡は特殊器台が出土しなかったゆえに、特殊器台の性格を考える上で重要な資料を提供しているといえる。

もう一ヶ所、特殊器台が出土していない例として、**便木山方形台状墓**<sup>263)</sup>（岡山県赤磐郡山陽町、図版28）が挙げられる。この台状墓は平面6.8×7m、高さ0.3mを測り、ほぼ正方形の低い方台部をもつ。緊急調査にもかかわらず遺構発掘前から現状保存が決定されたため、墳頂の埋葬施設については西側に偏って存在する土壇1基の他は位置確認さえされずに保存されている。方台部の西・南側のみにL字状に周溝が存在した。土器は墳頂の土壇埋土中と溝底面全面から出土している。土壇内埋土中には破片の状態で高杯・小型器台と

装飾性のある口縁部片（報文中では高杯と判断）が出土している。報告書に図示された限りでは21点を数える。おそらく、棺の腐朽と共に土壌埋土中に落ち込んだもので、本来は墓壙上にかなりの個体数が存在したのだろう。一方、溝底面から出土した土器群は長頸壺片3点、山陰系鼓形器台1個体、脚付直口埴片1点、小型鉢2個体、甕片12点が図示されており、墓壙埋土中の土器群と比べると両者は際立った違いをみせることがわかる。墳頂の他の埋葬施設の存在も考慮に入れなければならないが、これらを見る限りでは2類土器の大半が主体部上に、1類・3類土器の全てと2類土器の一部が溝中に廃棄されたと考えられる。このような各器種の配置位置と特殊器台・特殊壺・大型装飾器台などの装飾性の強い1類土器が出土していない点において、楯築型の「典型例」と際立った違いをみせている。特殊土器類の欠如はもともとそれらの分布が希薄な備前の遺跡であることが大きな要因となっているのだろう。一定量の調理器を含むことから飲食儀礼が举行されたと考えられる。前代からの系譜でも考えられるが、土器量も多いことから、ここでは「典型例」の要素がいくつか省略された「変容形」として捉えておきたい。

前述した**みそのお遺跡**<sup>264)</sup>では後期後葉末から庄内式併行期を経て古墳時代前期に至るまで、墓壙上から少数の高杯を中心とする土器が出土する墳墓がつづく。その中で首長墓と思われる第20号墓第1主体、第42号墓第1主体において多くの土器が出土している。**第20号墓第1主体**（図版19）の墓壙上出土土器の器種組成は、焼成前底部穿孔の小型長頸壺5個体、口縁部が外反する中型器台3個体、鉢1個体、高杯10個体程度である。土器は墓壙上陥没坑内に一列に並んだ状態で出土した。同じ墓壙上に焼土坑が存在することも注目される。墓壙上で儀礼が举行されたと考えられる。これらの土器群は甕を欠くものの、器種構成自体は「典型例」から大きく変容した省略形と言えるだろう。**第42号墓第1主体**（図版20）では長頸壺3個体、壺1個体、直口壺1個体、変形山陰系鼓形器台1個体、高杯6～7個体程度、甕1個体が出土している。こちらも明らかに「典型例」の器種構成の影響を受けていると考えられる。

#### 註

259) 鯉喰神社墳丘墓：近藤義郎 1980「矢喰・鯉喰・楯築」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会

260) 近藤義郎 2002『楯築墳丘墓』吉備考古ライブラリィ8 吉備人出版 56・78頁参照

261) 平野泰司・岸本道昭 2000「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集

262) 間壁忠彦・間壁菫子 1974「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館

263) 便木山方形台状墓：神原英朗編 1973『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群 他 方形台状墓発掘調査概報3編』

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

264) 椿真治編 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87 岡山県教育委員会

### 「中山型土器配置」—中国山地山間部の墳墓における土器配置—

**中山遺跡A調査区**<sup>265)</sup>（岡山県真庭郡落合町、図版29）は数基の区画墓とおびただしい数の土壙墓から構成される墳墓群である。墓域に利用された尾根の南半分は尾根先端付近に無区画の土壙墓群が密集し、北半分は尾根の上方に区画墓が設けられている。出土した土器は吉備系と山陰系と両者の折衷型とも呼べる中国山地山間部の独特の器形が見受けられ、編年上の位置づけが困難なものもあるが、およそ、後期後葉末から庄内式併行期に相当するものだと思われる。土器配置は個々の墓壙に伴うものと、報文中において「B 空間」

と称された、尾根先端近くの無区画土壌墓群中の広場から出土した多量の土器群とがある。このうち特殊壺・特殊器台・大型装飾器台はB空間のみから出土している。

「B空間」では立坂型の特殊器台・特殊壺のほか吉備系の大型装飾器台、吉備系ではない大型器台、壺、山陰系鼓形器台、吉備系高杯、吉備系脚付直口埴、甕など多くの土器が出土しており、吉備系・山陰系が入り混じっている。時期的には後期後葉段階を最古として庄内式併行期に至るまでかなりの幅をもっている。中山遺跡A調査区では墓壇上から土器を出土する埋葬施設は北半の区画墓にともなう土壌墓に多く、南半分の無区画土壌墓群では「B空間」周辺を除けばごく少数からしか墓壇上から土器が出土しない。「B空間」周辺では墓壇上にあたる部分から土器は出土しているもののそこに含まれる土器の量・時期幅と周辺の状況をみれば、それぞれの土壌墓にともなう土器群ではなく長期間にわたり廃棄され続けた土器の集積と考えられる。つまり、「B空間」とは墓域全体に対する祭祀場であり、長期にわたりこの場で土器を使用した儀礼が行われ、使用された土器が周辺に廃棄されたと思われる。特殊器台がB空間のみで出土ということは、個々の被葬者に対するものというよりは、集団全体に対する祭祀という意識が強いのであろう。

また、同じく山間部の西江遺跡<sup>266)</sup>（岡山県阿哲郡哲西町、図版30）においても尾根上に密集する土壌墓群の墓域の一ヶ所に向木見型の特殊器台・特殊壺が4組立て並べられており、墓域全体への祭祀場として捉えられている<sup>267)</sup>。

このような中国山地における集団墓の一隅に特殊土器類を配置するあり方は、楯築型土器配置とは様相が異なるものである。「中山型土器配置」として規定しておきたい。

## 註

265) 山磨康平編 1978『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会

266) 田中満雄・正岡睦夫・二宮治夫 1977「西江遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』10

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20 岡山県教育委員会

267) 西江遺跡では正確には第70号土壌という小規模な土壌墓の上面から特殊器台・特殊壺が4組並べられた状態で出土している。しかし、報告者は出土状況を検討した結果、これらは第70号土壌を意識して置いたものではなく、周辺の土壌墓の共通の祭祀として、たまたま第70号土壌の上に置かれたものとしている。

## 小結

これまで、やや詳細に吉備における弥生時代墳墓の土器配置について説明してきた。他地域に比べて詳細に述べたのは、冒頭でも述べたとおり、吉備における土器配置が複雑な系統を有するからである。

結果を整理すれば中期～後期中葉にかけては、主に墓壇上から少数の土器が出土し、器種構成は高杯・甕が主体を占める。「四辻型土器配置」と総称したこれらの土器配置はその背後に飲食儀礼か食物の供献が想定できるが、いずれにせよ小規模な儀礼と考えられる。

ところが後期後葉になり様相は一変する。おそらく楯築墳丘墓の築造が大きな画期となるのであろうが、特殊器台に代表される装飾性の強い大型器種が出現し、大量の高杯・脚付直口埴と一定量の甕・鉢を伴う土器群が墓から出土ようになる。本稿ではこのような土器群を伴う土器配置を「楯築型土器配置」として、楯築墳丘墓・黒宮大塚墳丘墓・立坂墳丘墓・雲山鳥打1号墳丘墓を「典型例」として捉えた。

さて、楯築型土器配置から復原される葬送祭祀儀礼は、成立当初、備中平野部において確認できるが、大きな影響力をもっていたと見え、同時期あるいは次代の庄内式併行期において備中・備前・美作・三次盆地にその「変容形」が出現することとなった。しかし、「典型例」そのものが継承された可能性があるのは現在のところ鯉喰神社墳丘墓のみであり、この祭祀儀礼が定型化することなく時期が降るごとに変容したことがわかる。土器の穿孔行為にみられる象徴化については後段で詳述するが、庄内式併行期において特殊壺の焼成前穿孔が一般化することからその方向性は「形式化・象徴化」にあったといえる。

庄内式併行期後半から古墳時代初頭にかけての当地域の代表的な首長墓と目される岡山市矢藤治山墳丘墓<sup>268)</sup>、岡山県総社市宮山墳丘墓<sup>269)</sup>では2類・3類土器が無くなり、1類土器のうち特殊器台・特殊壺のみが特に選ばれて残存している。この段階ではすでに「楯築型土器配置」は別なものに変化したと言えるだろう。このことも後述することにする。

吉備における葬送祭祀は、後期後葉に突如として完成された儀礼を創出したということを強調しておきたい。

#### 註

268) 近藤義郎編 1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

269) 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎 1987「宮山墳墓群」『総社市史考古資料編』



## 第5節 山陰・三次地域の土器配置と葬送祭祀儀礼

備後北部の三次盆地は中国山地山間部において、河川が日本海側に流れるためか、山陰地域との関係が深い。特に山陰に多く分布する四隅突出型墳丘墓の初源形態と考えられる方形貼石墓が複数遺跡において確認されている<sup>270)</sup>。土器配置についても山陰の初源部分と密接に関わるため、以下の記述は三次盆地と山陰西端部の石見における古い様相を述べた上で、出雲・伯耆・因幡などの地域に言及することとする。

### 註

270) 田中義昭・渡辺貞幸編 1992 『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

芸備友の会 1996 『芸備第25集 特集・広島県の弥生時代墳墓』

なお、近年では同様の長方形貼石墓が島根県出雲市青木遺跡において発見され（4号墓）、四隅突出型墳丘墓の初源期の系譜が出雲において追えることが主張されている（桑原隆博 2005「四隅突出型墳丘墓の新展開」『季刊考古学』第92号 雄山閣）。

### 中期後半から後期初頭の三次・石見の土器配置

前述したとおり三次地域では中期後半より墳丘斜面に貼石を伴う長方形の墳丘墓が発達する。広島県三次市宗祐池西1・2号墳丘墓<sup>271)</sup>、陣山墳墓群<sup>272)</sup>などがそれにあたり、四隅突出型墳丘墓の祖形が発見されている。しかしながら、これらの墳墓ではのちに山陰で主要な土器配置となる主体部上に土器を置く行為は見られない。主に周溝から塩町式の脚付壺など少数の土器が出土するようだ。

後期前葉になると三次・石見の両地域において長方形貼石墓の突出部が次第に発達し、石見では順庵原1号墓のように突出部が完全に発達した四隅突出型墳丘墓が出現している。この時期において、墳墓における土器配置において甕が主体を占めるようで、特に墳丘裾に甕が置かれる事例がいくつかある。

**田尻山1号墓**<sup>273)</sup>（広島県庄原市、図版31）は9.5×7.0m、高さ0.8mの長方形貼石墓で、墳頂に主体部と思われる土壇が1基検出されている。この埋葬施設からは遺物は出土しなかったが、墳丘北東辺裾と南コーナー裾の五ヶ所に計10個体ほどの甕が置かれていた。

**佐田谷1号墓**<sup>274)</sup>（広島県庄原市、図版34）の詳細は後述するが、やはり長方形の貼石墓で、墳丘北裾で甕が2個体同じ場所で出土している。

**順庵原1号墓**<sup>275)</sup>（島根県邑智郡端穂町、図版32）は10.75×8.25mの長方形墳丘の四隅に突出部が付く四隅突出型墳丘墓である。墳頂から3基の埋葬施設が検出された。土器は墳丘北東辺裾部および南東辺裾部で見つかった三ヶ所の「ストーンサークル」内から出土している。この遺構は石列で一定の範囲を円形に囲ったもので、この中に破砕された土器が出土している。三ヶ所とも甕の口縁部が複数出土しており、甕を主体とした土器配置である。

**波来浜遺跡**<sup>276)</sup>（島根県江津市、図版33）ではA・B両調査区で計12基の小規模な方形列石区画墓が検出されたが、上記の3墳丘墓とは小規模なためか様相が異なる。発見された区画墓のうち土器配置が明瞭なものはA-2号墓、B-1号墓、B-2号墓である。それぞれの区画内には複数の墓壇が作られているが、A-2、B-2号墓ではそれぞれの埋葬施設に伴う形で土器が出土するのに対し、B-1号墓では墳頂の中心部に多くの土器がかたまって出土し、個々の埋葬施設には伴っていない。このように出土した土器の大多数を占めるのは完形

品の甕である。埋葬施設に伴うものは墓壇底に置かれた状態で出土するので、内容物の副葬・供献と考えられるが、B-2 号墓第 1 主体から出土した 8 個体の土器のうち 3 個体の甕の胴部に焼成後の穿孔がみられるため、土器自身を副葬したとも考えられる。主体部上から土器を出土したのは B-2 号墓第 2・3 主体のみであった。甕 3 個体が出土しているので器種構成は他の埋葬施設に伴う土器と変わらないが、土器を置く位置については後段に述べる主体部上土器配置の影響を受けているかもしれない。波来浜遺跡は後期前葉～中葉に時期的中心を持ち、墳丘裾に甕を置く土器配置と次代の主体部上の土器配置との過渡的様相を表わしている。

#### 註

- 272) 三次市教育委員会 1996『陣山遺跡』  
271) 尾本原勇人 1996「宗祐池西遺跡について」『芸備』第 25 集 芸備友の会  
273) 広島県教育委員会 1978「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(1)  
274) 妹尾周三 1987『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 63 集  
275) 門脇俊彦 1971「順庵原一号墳について」『島根県文化財調査報告』第 7 号 島根県教育委員会  
276) 門脇俊彦 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』島根県江津市

### 「山陰型土器配置」—山陰地方に特有な主体部上土器配置—

山陰を象徴する土器配置が登場するのは後期前葉になってからのことである。それまで、墳丘外の周溝や特定の場所に土器を置くことが多かったが、後期には山陰における決まりであるかのように、ほとんどの事例が主体部上土器配置を行う。これらの山陰に典型的な主体部上の土器配置は「山陰型土器配置」と命名できるほど、他と比較して明瞭な個性を有する。その定義は後段に譲るとして、はじめに個々の事例の内容を確認していこう。

後期前葉の事例は少なく、佐田谷 1 号墓、新井三嶋谷墳丘墓が挙げられる。

**佐田谷墳墓群**<sup>277)</sup> (広島県庄原市、図版 34) は 3 基の長方形墳丘墓からなるが、本格的な調査が行われたのは 1 号墓のみである。1 号墓の墳丘規模は 19×12m、高さ 2.1m である。墳頂に 4 基の土壇が営まれているが、中心主体部は明確で、中央に位置する大型の墓壇を持ち木槨構造を備えた SK 2 がそれである。全ての埋葬施設は箱形木棺をおさめていたと考えられている。土器は主体部上 (SK 1・2・4) と墳丘裾部 (北・西側) から出土した。最も多くの土器が出土したのは中心主体の SK 2 上で、壺片 2 点、高杯口縁片 2 点、脚付短頸壺 (報告書では鉢) 3 個体、注口片 1、高杯もしくは脚付短頸壺の脚片 17 点、鉢 1 個体、甕口縁片 3 点、甕底部片 3 点、が報告書に図示されている。一見して高杯・脚付短頸壺が大多数を占めることは明らかであろう。SK 1 では高杯 1 個体、SK 4 では高杯? 脚片 1 点、西側周溝では大型器台 1 個体と脚端部破片 1 点、大型壺片 1 点 (器台上部に相当か?)、北側周溝では甕 2 個体がそれぞれ出土している。高杯の型式は吉備の鬼川市 I 式の形態に共通し、脚付壺の存在は前代の塩町式期の影響であろう。また、中心主体部の土器量が他を圧倒することは、山陰の主体部上土器配置の基本要素である。したがって、佐田谷 1 号墓の土器配置を大きく評価すれば、山陰の主体部上土器配置が三次地域を媒介にして吉備の影響下に成立したとも考えられようか。なお前述したように、墳丘北側から甕が 2 個体出土したことは田尻山 1 号墓や順庵原 1 号墓に共通する土器配置であろう。

**新井三嶋谷 1 号墳丘墓**<sup>278)</sup> (鳥取県岩美郡岩見町、図版 35) は近年になって発見され、調査された後期前葉の長方形貼石墓である。墳丘は 26×18m、高さ 3m もの規模を有し、この時期においては最大級の墳丘墓と言える。墳頂には 3 基の埋葬施設が確認されているが、掘り下げはされていない。しかし、木棺の腐朽に伴うと考えられる陥没坑の精査が行われており、中心主体部 (第 1 主体) の二ヶ所の陥没坑 (北棺・南棺) から土器の出土をみている。土器はいずれも破片の状態で全形を復原できる資料は無いが、器種構成は壺と器台の組み合わせが数個体ずつあったようだ。本墳丘墓は山陰地域の東端に所在し、佐田谷 1 号墓とはあまりにも遠く離れており、器種構成も異なるので、両者に系譜関係が無かった可能性もあるだろう。

後期中葉以降は典型的な山陰の主体部上土器配置が出現し、出雲・伯耆・因幡地域で事例が増加する。後期中葉では九重 3 号土壙<sup>279)</sup> (島根県安来市)、仲仙寺 9 号墓<sup>280)</sup> (安来市)、泰久寺 4・5 号土壙<sup>281)</sup> (鳥取県東伯郡関金町)、布施鶴指奥 1 号墓<sup>282)</sup> (鳥取市)、門上谷 1・2 号墓 (鳥取市)<sup>283)</sup> など、後期後葉では西谷 3 号墓<sup>284)</sup> (島根県出雲市)、的場土壙墓<sup>285)</sup> (島根県松江市)、来美墳丘墓<sup>286)</sup> (島根県松江市)、仲仙寺 10 号墓などがある。また、庄内式併行期以降の鍵尾式～大木式期では、矢谷 MD 1 号墓<sup>287)</sup> (広島県三次市)、鍵尾 A 区土壙墓群<sup>288)</sup> (安来市)、安養寺 1 号墓<sup>289)</sup> (安来市)、大木権現山 1 号墓<sup>290)</sup> (島根県八束郡東出雲町)、日原 6 号墓<sup>291)</sup> (鳥取県米子市)、泰久寺 1～3・8・11 号土壙<sup>292)</sup>、桂見 1・2 号墓<sup>293)</sup> (鳥取市)、などがある。さらに小谷式期では塩津山 1 号墓<sup>294)</sup> (安来市)、小谷土壙墓<sup>295)</sup> (安来市) など前代の系譜上の墓制のほか、神原神社古墳<sup>296)</sup> (島根県大原郡加茂町)、松本 1 号墳<sup>297)</sup> (島根県飯石郡三刀屋町)、造山 3 号墳<sup>298)</sup> (安来市)、上野 1 号墳<sup>299)</sup> (島根県八束郡宍道町) などの前期古墳に分類される墳墓の主体部上からも土器が出土している。このように山陰では弥生時代後期中葉から古墳時代前期後半に至るまで連綿と主体部上土器配置を続けることが判明している。

後期中葉の**九重 3 号土壙墓**<sup>300)</sup> (島根県安来市、図版 36) は器種構成が明確な例である。墓壙上より壺 4 個体、細頸壺 1 個体、甕 2 個体、鼓形器台 6 個体以上が出土している。壺や甕が鼓形器台と組み合わせる山陰特有の器種構成が出現していることがわかる。

後期後葉の「**的場土壙墓**」<sup>301)</sup> (島根県松江市、図版 38) は周囲に墓域を画す列石が見られ、もともとは長方形の墳丘墓だと思われる。周囲の削平がひどく、想定される墳丘内ではかなり北側に寄っているために他の埋葬施設が存在した可能性が高い。したがって、「的場土壙墓」と呼ばれている埋葬施設が中心主体部でない可能性は高いと思われる。この土壙上から吉備系の壺 (胴部に 3 条の突帯あり、細頸壺か?) 1 個体、吉備系中型装飾器台 1 個体、把手付注口壺 1 個体、把手付広口壺 1 個体、中型広口壺 6 個体、甕 1 個体、鼓形器台 7 個体、高杯 2 個体、低脚杯 3 個体が出土し、さらに棒状の石が標石のように墓壙の中央に立てられている。土壙上から出土したこれらの土器はその多くが完形品のまま配置されたと見え、報文中にその配置状況が詳しく述べられている。主体部上の土器の詳細がわかる貴重な事例なので、簡単に触れておきたい。まず、墓壙中央に標石があり、そのそばには高杯 1 個体、把手付壺 2 個体が置かれている。これらを中央群とすれば他はこれらの北東にあるものと南側にあるものに分けられる。北東群は鼓形器台の上に小型広口壺を載せたもの 2 組に、吉備系の壺+装飾器台 1 組、低脚杯 1 個体が伴う。南群は両脇に中型広口壺+鼓形器台が 1 組ずつ置かれ、その間に中型広口壺+鼓形器台 2 組、甕+鼓形器台 1 組、低脚杯 2 個体が置かれている。そのほか中央群より北西側に小型の高杯が 1 個体横転していた。このように土器群は明らかに配置された状態であり、またそれぞれの土器の口縁部など比較的上部の部位は風化が認められるため、一定期間は外表にさ

らされていたと考えられる。墓壇埋め戻し後に地表面に置かれたのだろう。状況から判断して、本来のセットが良好に保存されていると考えられる。器種構成を整理すれば壺あるいは甕と器台の組み合わせが 7 組ある他、把手付壺 2 個体、高杯 2 個体、低脚杯 3 個体となる。儀礼の内容は、小規模な飲食儀礼挙行後に土器自体を供献したか、あるいは飲食儀礼ではなく、はじめから内容物を供献したかのどちらかであろう。土器が穿孔やその他の意図的な破壊を受けていないことは注目しておく必要がある。また、的場土壇墓の器種組成の段階で山陰の主体部上土器配置が定型化したということが言えるだろう。

**西谷墳墓群**<sup>302)</sup> (島根県出雲市、図版 37) は大型の四隅突出型墳丘墓が複数含まれることで著名な墳墓群である。その中で **3 号墓** は発掘調査によって内容が明らかにされ、山陰地域における代表的な首長墓としての評価が下されているため、この墳丘墓についてもやや詳細に土器配置を述べる必要があるだろう。

その墳丘は 36×28m の方台部の四隅に突出部が付くいわゆる「四隅突出型墳丘墓」であり、墳丘の高さは 4.5m である。墳丘斜面および裾には貼石が施されるが、特に裾部には 2 列の列石の間に敷石を施す入念なつくりをしている。墳頂には 8 基以上の埋葬施設が確認されているが、中心主体は中央に並列する第 1 主体と第 4 主体の 2 基である。いずれも巨大な墓壇をもち、ともに墓壇上からおびたしい量の土器が出土している。これらの土器群に山陰系のほか吉備系と丹後あるいは北陸南西部系の土器が含まれることは興味深い。

第 1 主体は 2 段墓壇に木槨を設け、その中に箱形木棺をおさめる構造である。棺内には多量の朱が一面に敷きつめられ、副葬品として玉類が出土した。墓壇上の土器は 100 個体を越え、報文中にて公表された器種組成は、山陰系が壺 (本書の中型広口壺) 24 個体、鼓形器台 24 個体、低脚杯 19 個体。吉備系が特殊壺 2 個体。丹後あるいは北陸南西部系が把手付短頸壺 13 個体、装飾壺 (小型) 3 個体、器台 8 個体、高杯 9 個体、となっている。土器群最下部の墓壇中央から辰砂のすりつぶしに使用されたと考えられる打痕・磨痕のある円礫が 1 つ出土しており、この石を中心にして土器が置かれたと考えられている。土器の出土状態は報文によれば、「鼓形器台の上に壺形土器が載っていたり、低脚杯小形壺形土器が載っている状況を示す例がいくつかあったが、また一方では、完全に倒立した土器も多く、これらの出土状況が本来の供献状態をそのまま示すとは言えない」としており、意図的な配置ではなく、あくまでも儀礼に使用したあとの廃棄の状況を示すとしている。

第 4 主体も巨大な墓壇をもっており、大小ふたつの箱形木棺の痕跡がみとめられ、やはり朱が敷きつめられていた。大きい方の棺内からは副葬品として胸飾りと思われるガラス管玉と鉄剣 1 本が出土している。大小二つの棺に対応するように、それぞれの上層から円礫が 1 個ずつ出土し、それを覆うようにおびたしい土器群が出土した。第 1 主体よりさらに多く 200 個体に及ぶと言う。器種組成の詳細については公表されていないが、調査者の渡辺貞幸によれば山陰系が 50 セット、吉備系が 10 セット、丹後あるいは北陸系が 30 セットとなっている<sup>303)</sup>。また、墓壇埋め戻し終了後に掘られた大型の柱穴 4 ヶ所とそれらの外側に隣接する支柱のための小型の柱穴 4 ヶ所が確認されており、墓壇上に何らかの建造物を建てたことが判明している。渡辺は、土器の出土状況とこれらの建物跡から墓上における飲食儀礼を中心とした祭儀の挙行を想定している<sup>304)</sup>。

さて、西谷 3 号墓のように他地域の土器も加えた大規模な器種組成を見ることのできる例は西谷墳墓群内の 2・4 号墓<sup>305)</sup> など何基かに可能性はあるものの、他の遺跡においては類例がない。唯一、大木権現山 1 号墓において比較的多くの土器片が出土しているが、西谷 3 号墓第 1・4 主体の土器量には及ばない。したが

って、西谷3号墓は吉備における楯築墳丘墓のような他に類を見ない特殊な事例として把握しておく必要があるだろう。

鍵尾式期（庄内式併行期）以降では後期後葉段階のセットを継承するものと、高杯の割合が増えるものがある。

前者の例では、鍵尾式期（＝庄内式併行期）の**鍵尾A区5号土壙**<sup>306)</sup>（図版39）がある。墓壙上から中型広口壺2個体、甕1個体、台付短頸壺1個体、鼓形器台4個体、吉備系中型器台1個体が出土している。また、大木式（＝布留0式併行期）の**大木権現山1号墓**<sup>307)</sup>（図版41）では時期がかなり降る例ではあるが、中心主体と考えられる第1主体上から広口壺10個体以上、鼓形器台20個体以上、低脚杯7個体以上、高杯1個体以上、とほぼ後期後葉の器種構成を踏襲している。塩津山1号墓第1主体上<sup>308)</sup>（図版72）の土器群も同様な器種構成をとる。

後者の例では安養寺1号墓第1主体<sup>309)</sup>（図版40）、日原6号墓第1主体<sup>310)</sup>（図版42）、などで確認できる。高杯が増えることによって広口壺・鼓形器台・低脚杯が無くなるわけではないので、この違いにどのような意味があったのかは不明である。

山陰の主体部上土器配置の特徴でさらに重要なことは、中心主体やそれ以外の大型墓壙など、被葬者の地位が比較的高いと考えられる埋葬施設ほど出土する土器の量が多いということだ。このことは、佐田谷1号墓（図版34）、矢谷MD1号墓（図版44）、西谷3号墓（図版37）、大木権現山1号墓（図版41）、塩津山1号墓（図版72）、日原6号墓（図版42）、泰久寺土壙墓群、新井三嶋谷1号墓（図版35）、布施鶴指奥1号墓、桂見1・2号墓（図版43）、など山陰において幅広い時期・地域の墳墓にみられる。大型の墓壙の方が陥没坑が大きく、より多くの土器が遺存しやすいことは確かだが、一方で丹後地域の土器配置を見ると墓壙の大きさには関係なく土器量が一定であるので、山陰における墓壙の大きさと土器の出土量の相関性は当地域の祭祀の性質によるものであるといえる。この性質とは被葬者のステータスによって、儀礼規模に大小の差があったということであり、当地域の葬送祭祀が階級分化と密接な関係があったことを伺わせる<sup>311)</sup>。

最後に**矢谷MD1号墓**<sup>312)</sup>（広島県三次市、図版44）について触れておきたい。当墳墓は庄内式併行期に編年され、全長18.5mの四隅突出型前方後方形墳丘墓ともいえるべき得意な形態の墳丘をもっている。墳丘斜面には貼石が施され、周溝が外側をめぐっている。埋葬施設は墳丘内に10基確認されているが中心主体部は明確で「後方部」中央の大型二段墓壙をもつ5号主体がそれである。箱形木棺の痕跡が検出され、棺内から碧玉製管玉・ガラス小玉若干が出土している。土器は、①5号主体上、②「後方部」北辺溝、③「後方部」東辺溝、④東側くびれ部溝、⑤「前方部」南辺溝、の5ヶ所からまとまって出土した。それぞれの場所ごとに器種組成に特色があり、土器が意図的に置き分けられていた可能性が強い。すなわち、①・④には多くの広口壺・甕・鼓形器台に少数の注口土器・低脚杯・高杯がともなう典型的な山陰の主体部上土器配置の器種組成をとり、特殊壺・特殊器台の破片が少数存在する程度である。これらの特殊土器類はほとんど接合することがない。一方、②・③では、ほとんどが向木見型の特殊壺・特殊器台の大型の破片によって占められ、完形品に復原できる資料も少なくない。②・③両方あわせて8～9セットの特殊壺・特殊器台が周溝内に置かれたようだ。③では数個体の山陰系の広口壺が伴っているが、鼓形器台や高杯などは含まれない。⑤では壺が3個体出土しているが、うち2個体の頸部は鋸歯文・列点文が施されている別系統の土器である。矢谷MD1号墳丘墓の土器配置では山陰の主体部上土器配置と吉備の特殊土器類の外方配置が、それぞれ忠実に

われつつも共存しているところが興味深い。墳形も四隅突出形を採用しつつ前方部も敷設するところは、やはり山陰と吉備の中間という地域的特性をよく表しているといえよう。おそらく政治的な背景があってこのような現象が生じたのであり、弥生終末期の首長墓における葬送祭祀儀礼の性格が窺える。

#### 註

- 277) 妹尾周三 1987『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集
- 278) 中野知照・松本美佐子ほか 2001『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第22集 岩美町教育委員会
- 279) 九重3号土墳墓：内田才・東森市良・近藤正 1966「安来平野における土墳墓」『上代文化』36輯
- 280) 近藤 正 1972『仲仙寺古墳群』島根県教育委員会
- 281) 日野琢郎ほか 1984『泰久寺遺跡発掘調査報告書—中峯地区—』関金町文化財調査報告書第1集
- 282) 中村徹・西浦日出夫・小谷修一 1992『東桂見遺跡・布施鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団調査報告書29
- 283) 門上谷1・2号墓：鳥取市遺跡調査団 1989『津ノ井遺跡群』鳥取市教育委員会
- 284) 渡辺貞幸編 1992「西谷墳墓群の調査」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室  
渡辺貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」『島根県考古学会誌』第10集  
渡辺貞幸 1995「西谷三号墓の調査について」『出雲・西谷墳墓群シンポジウム 四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』  
出雲市教育委員会
- 285) 近藤正・前島己基 1972「島根県松江市の場土墳墓」『考古学雑誌』第57巻第4号
- 286) 来美墳丘墓：山本清 1989『出雲の古代文化』人類叢書8 六興出版
- 287) 矢谷MD1号墓：広島県教育委員会ほか 1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』
- 288) 山本 清 1965『島根県安来市鍵尾遺跡調査報告』
- 289) 安養寺1号墓：出雲考古学研究会 1985『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』
- 290) 東出雲町教育委員会 1979『大木権現山古墳群』
- 291) 米子市教育委員会 1978『日原6号墳発掘調査報告』
- 292) 前掲281文献参照
- 293) 船井武彦・杉谷美恵子・平川誠 1984『桂見墳墓群』鳥取市文化財報告書18
- 294) 勝瀬利栄・朽津信明 1997『塩津山古墳群』島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター
- 295) 小谷土墳墓：内田才・東森市良・近藤正 1966「安来平野における土墳墓」『上代文化』36輯
- 296) 前島己基・松本岩雄 1976「島根県神原神社古墳の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号  
加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』
- 297) 島根県教育委員会 1963『松本古墳調査報告』
- 298) 山本 清 1967『造山3号墳発掘調査報告』
- 299) 林健亮・原田敏照 2001『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』島根県教育委員会
- 300) 前掲279文献参照
- 301) 前掲285文献参照
- 302) 前掲284文献参照
- 303) 渡辺貞幸 2000「古代出雲—動乱の時代から「王国」の時代へ」『神々の源流』大阪府立弥生文化博物館

304) 前掲 284 文献 (渡辺 1993・95) 参照

305) 出雲市教育委員会 2000『西谷墳墓群—平成 10 年度発掘調査報告書』

306) 前掲 288 文献参照

307) 前掲 290 文献参照

308) 前掲 294 文献参照

309) 前掲 289 文献参照

310) 前掲 291 文献参照

311) 島根県安来市宮山 4 号墓は非常に発達した突出部をもつ、終末期の四隅突出型墳丘墓として著名であるが、墳頂に設けられた大型の墓壇を持つ主体部上には土器は無く、墳丘各所から漫然と多量の土器が出土した。このように首長墓でありながら主体部上に土器を置くという原則を守らない例は珍しいといえる。

宮山 4 号墓：島根県埋蔵文化財調査センター 2003『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16

312) 前掲 287 文献参照

## 小結

以上、見てきたように山陰・三好地域においては中期後半～後期前葉にかけて墳丘裾に甕を置く土器配置が三次・石見という限られた地域に出現するが、むしろ山陰特有の主体部上の土器配置は後期中葉から後葉にかけて定着する。この出現については佐田谷 1 号墓を最大限に評価すれば吉備地域の主体部上土器配置が三次盆地を媒介にして山陰に伝えられたと考えられることは前述したとおりである。ただし、後期中葉の九重土墳墓以降の主体部上土器配置は山陰独自の要素を持ち、山陰全体を包括する明瞭な共通意識の下に行われたと考えられる。その主な要素は、主体部上に土器を置くことをはじめとして、壺あるいは甕と鼓形器台の組み合わせに、低脚杯、高杯などを加えた山陰系土器からなる土器群を使用し、おそらく被葬者のステータスと儀礼の規模が相関する、という三点であろう。副次的な要素としては朱の精製に使用した石杵をとまなう例が多いことである。また、これらを行う墳墓形態については四隅突出型墳丘墓が多いが、長方形墳丘墓や土壇墓、あるいは後代の古墳も含まれ、四隅突出型墳丘墓に限られるものではない。

さて、このような特色を持つ山陰特有の主体部上土器配置を「**山陰型土器配置**」と呼称する。他地域の土器配置と比べても強烈な個性を有しており、何よりも後の前期古墳の土器配置に大きな影響を与えていることが注意される。この「山陰型土器配置」の性格についてであるが、非常に階層性と密接な関わりがあるが、山陰全域ではほぼ共通した内容をもっていることが大きな特徴である。また、その出現については、吉備の「**楯築型土器配置**」が楯築墳丘墓の被葬者の埋葬儀礼を契機に突如出現したのに対し、「山陰型土器配置」は後期中葉から後葉にかけて緩やかに定型化したと考えられ、決して西谷 3 号墓のような大規模な事例が最古の様相を呈するわけではない。山陰型は地域集団の中で極めて自然発生的に出現し、定着した祭祀儀礼だったと考えられる。その儀礼の内容は儀器の道具立て（器種組成）から飲食儀礼が中心だったと考えられる。しかし、的場土壇墓の配置状況は明らかに内容物か土器自身の供献行為を示している。また、西谷 3 号墓の主体部上の土器出土状況は廃棄された状態であったとはいえ、多量の土器を主体部上に遺棄するということは、それ自体に使用の終わった儀器を被葬者の真上に供献する意識はあったのだろう。古墳時代に至るまで儀器を墓壇上に置き続けるということは、山陰における葬送儀礼において墓壇上は特別な場所であり、その行為

は儀礼の最終段階の作法として決められていた行為だったのではないだろうか。このように考えると、山陰型土器配置とは極めて形式化された葬送儀礼の痕跡ということがいえるだろう。

山陰型土器配置は古墳時代まで継続することはすでに述べたが、古墳時代前期初頭に系統の異なる土器群を使用した土器配置が出現することも重要である。それは鳥取県西伯耆郡大山町徳楽墳丘墓<sup>313)</sup>における伯耆系特殊土器類を使用した土器配置や、神原神社古墳<sup>314)</sup>などにみられる特殊な円筒器台の出現などである。これらの土器配置については後段で詳述することにする。

#### 註

313) 東森市良・花谷めぐむ 1992「徳楽方墳―出土土器を中心として―」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』

島根大学法文学部考古学研究室

314) 加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』



## 第6節 近畿北部の土器配置と葬送祭祀儀礼

ここで言う近畿北部地域とは旧国名で但馬・丹後・丹波の領域を指す。この地域は弥生時代後期には墓制・土器様式において一つの地域圏をなしているが、土器配置においても例外ではない。当地方の墳墓における土器供献行為については肥後弘幸による研究<sup>315)</sup>があるので、以下に肥後の成果によりつつまとめていきたい。

註

315) 肥後弘幸 1994 a 「墓壇内破碎土器供献（上）—近畿北部弥生墳墓土器供献の様相—」『みずほ』第12号 大和弥生文化の会

肥後弘幸 1994 b 「墓壇内破碎土器供献（下）—近畿北部弥生墳墓土器供献の様相—」『みずほ』第13号 大和弥生文化の会

肥後弘幸 2000 「弥生王墓の誕生—北近畿における首長墓の変遷—」広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣

### 「近畿北部型土器配置」—後期における「墓壇内破碎土器供献」と主体部上土器配置—

肥後によれば、「墓壇内破碎土器供献」とよばれる特異な土器配置が弥生時代後期を中心とする時期に盛行するという。ここではまず、「墓壇内破碎土器供献」の説明からはじめよう（図3）。

当地域の墓制は貼石方形台状墓や方形周溝墓などもあるが、ほとんどは丘陵上に階段状に削平して平坦面をつくりだし、数基の埋葬を行うものである<sup>316)</sup>。埋葬施設は長方形の墓壇を掘削し、中に箱形木棺を納めるものである。木棺を納めた後に棺蓋のレベルまで木棺の周囲に裏込め土を充填するが、この土層および棺蓋にかけて破碎した土器の破片が置かれるという。棺の裏込め土はよくしまっており、埋葬行程の区切りを意識したものであろう。この面に朱がまかれている例もあり、破碎土器を置く行為は儀礼の一場面であったと思われる。土器片は接合するとおよそ1～3割程度を残して復原されるということなので、やはり故意に破碎したあとに、そのほとんどのパーツを墓壇内におさめたものであろう。そののち、更に墓壇の掘りこみ面まで埋め戻して埋葬は完了する。

肥後が京都府下の20遺跡114例を検討した結果、墓壇内に破碎供献される土器は76例が1個体のみであり、その約70%が甕であるという。事例全体でも甕が伴う例が約80%であり、主要器種であることはまちがいない。その他では高杯と水差し形把手付壺がこれにつぐ。水差し形壺の半数には煤が付着しているため、甕と共に煮沸に使用された調理器と考えられる。調理器（甕・壺）と食器（高杯）の存在から飲食儀礼が想定されている。

このような「墓壇破碎土器供献」の初源は中期後葉に弥栄町奈具墳墓群にみられる。棺上から破碎土器が出土したという。その後、後期前葉に至って類例が増え、連綿と弥生時代後期を通じて行われる。しかし、後期中葉に変化が見られ、それまで全器種が墓壇内に破碎供献されていたのに対し、しだいに高杯・鉢などの供膳具だけが主体部上から出土するようになり、これらに器台が加わるようになるという。また、「墓壇内破碎土器供献」が行われる頻度は後期前葉では遺跡内の埋葬施設の8～10割という高い頻度で行われていたのに対し、後期中葉以降は減少し、2～3割程度が普通になるという。肥後はこれらの現象について被葬者を前にした飲食儀礼が衰退し、墓壇を埋め戻したのちの供献儀礼への移行を想定している。

以上が肥後論文の要約であるが、以下に比較的多くの埋葬遺構が発掘調査された遺跡例を引いて、肥後の

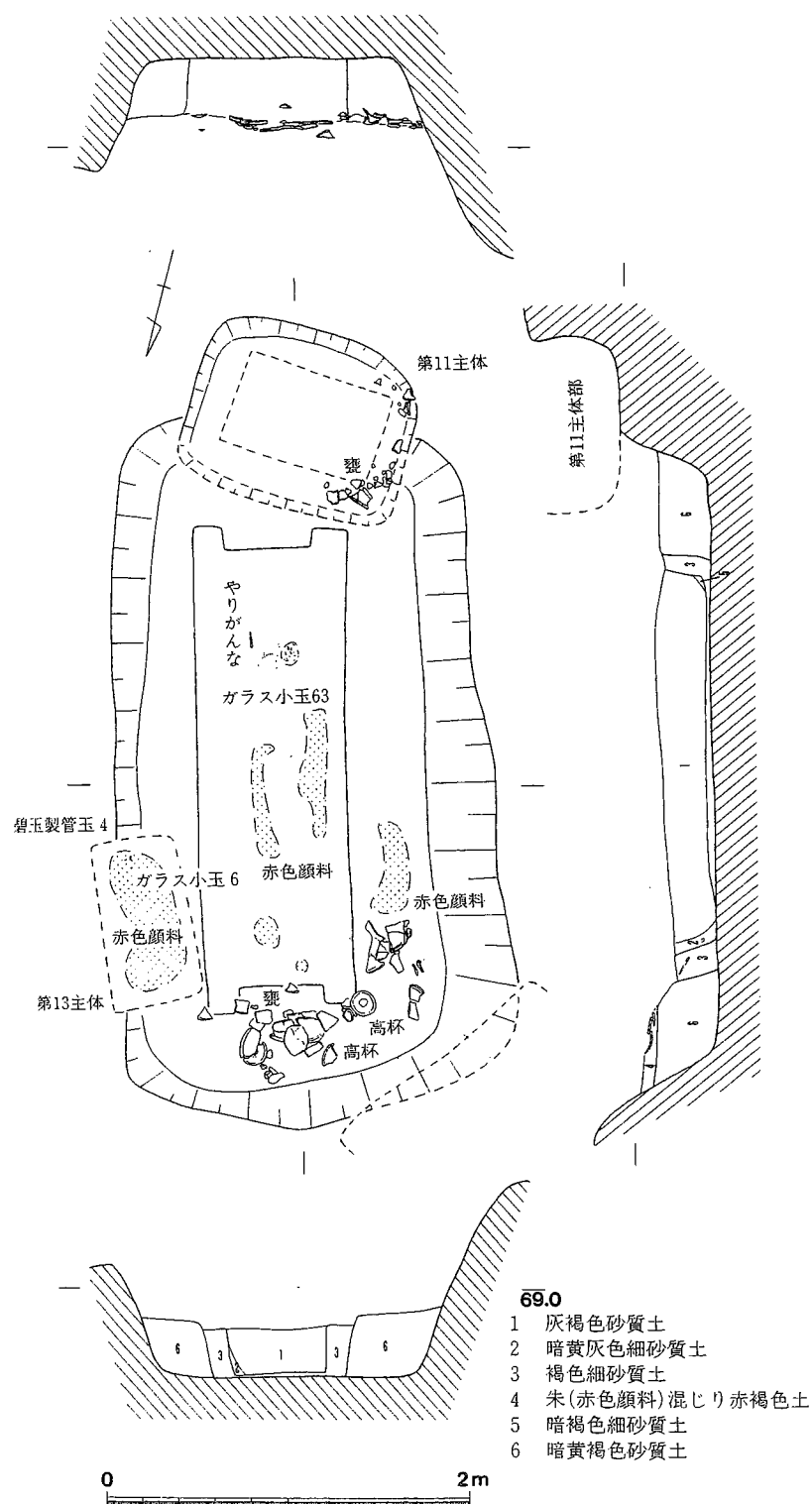


図3 「墓境内破碎土器配置」の一例

※三坂神社8号墓第7主体（大宮町教委 1998）より引用

論点を追認してみよう。なお、本書では「墓壙内破碎土器供献」を「墓壙内破碎土器配置」と呼び変えていることをお断りしておく。

後期前葉の例では、丹後では三坂神社墳墓群、但馬では上鉢山・東山墳墓群の東尾根地区、が好例である。

**三坂神社墳墓群**<sup>317)</sup>（京都府中郡大宮町、図版 45）では尾根線上を階段状に造成し、上下に連なる 6ヶ所の平坦面（3～8号墓）を作り出して墓域を作り出している。各平坦面の広さには大小の格差があるが、最小の 6号墓で 1基、最大の 3号墓で 14基の埋葬遺構がつくられている。墳墓群全体では木棺土壙墓 35基、土器棺墓 4基からなるが、土器配置が見られるのは木棺土壙墓のみである。35基のうち実に 34基に墓壙内破碎土器配置がみられた。また、明確な主体部上土器配置は 1例も確認されていない。

**上鉢山・東山墳墓群**<sup>318)</sup>（兵庫県豊岡市、図版 46）の東尾根地区では後期前葉を中心とする時期で、尾根上に 29基の木棺土壙墓が密集している。このうち土器配置のある 26基のすべてで墓壙内破碎土器配置が行われているが、そのうちの 6基は主体部上土器配置も行われている。

後期中葉から後期後葉にかけての様相は**大山墳墓群**<sup>319)</sup>（京都府竹野郡丹後町、図版 47・48）においてよく観察できる。この墳墓群においても尾根線上に階段状の平坦部を作り出しているが、3号墓・5号墓と呼ばれる 2基については削り出しによって明確な長方形の台状墳丘を意識した墓域を作り出していることから、本来の台状墓あるいは長方形墳丘墓としての認識を当てはめることのできる墳墓である。それはさておき、これらの台状墓の墳頂・平坦面あるいは尾根の斜面地に 35基の木棺土壙墓が営まれている。土器配置の内訳は、主体部上土器配置と墓壙内破碎土器配置の両方見られるものが 12基、墓壙内破碎土器配置のみが 11基、主体部上土器配置のみが 6基、土器配置なしが 6基である。主体部上土器配置の割合が格段に増えており、また、墓壙内は 1～2個体程度の甕を中心とした少数の調理器が置かれ、一方主体部上には高杯を中心として壺・台付壺・鉢・器台など複数の土器群からなる供膳具のセットが置かれていることは肥後が指摘した通りである。

近畿北部地方にみられる主体部上土器配置はおそらく吉備・山陰などの影響もあって、墓壙内に置かれていた土器が主体部上に移ることによって成立したと考えられるが、主体部上に置かれる土器の個体数は多くても 10個体に満たず、吉備・山陰の多量土器配置とは明らかに区別される。したがってあくまでも墓壙内土器配置と併用して行われた近畿北部特有の儀礼と考えてよいだろう。両者あわせて「**近畿北部型土器配置**」と定義しておく。

これらの尾根上に営まれた台状墓は家族単位を基軸とした集団墓であると思われるが、埋葬施設の大小を問わず土器配置の内容が等質なことが大きな特徴となっている。そして、後期後葉以降の首長墓においてもこの原則が貫かれ、いっそう他地域との違いが鮮明になるのである。

## 註

316) これらのほとんどは厳密に言えば台状の高まりを作り出すものではなく、単に平坦面を墓域として意識しているに過ぎないが、地元の研究者は通有の名称として「台状墓」と表現しているので、本書でもそれに従う。

317) 大宮町教育委員会 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町文化財調査報告書第 14 集

318) 瀬戸谷皓編 1992『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書 第 26 集

### 後期後葉以降の大型台状墓・墳丘墓の土器配置

後期後葉および庄内式併行期には、より大きな墓域をもつ台状墓があらわれ、赤坂今井墳丘墓に至って巨大な方形墳丘を現出するに至る。それらの大型墳墓の土器配置をみてみよう。

**大風呂南1号墓**<sup>320)</sup> (京都府与謝郡岩滝町、図版 49) は尾根線上に広い平坦面を作り出した台状墓で、陸橋のある溝によって尾根上方に隣接する2号墳と墓域を分っている。1号墓の規模は27×18mほどとされており、平坦面には4基の木棺土壙墓と、そのうちの一つに付随する1基の小児用土壙墓がつくられている。なお、木棺はすべて舟底状を呈するものである。巨大な墓壙をもつ中心主体部である第1主体部は、多量のガラス製玉類、ガラス釧1、有鉤銅釧13、鉄剣11、鉄鏃4、漁撈具数点など当地方において傑出した内容の副葬品を備えており、相当な有力者の墓と考えられている。ところが、土器配置についてみると、4基の木棺土壙墓全てにおいて等しく墓壙内破碎土器配置のみが行われており、土器数もわずかなものであった。ちなみに第1主体では甕1個体のみである。このことから、当地域の土器配置が被葬者のステータスと如何に関わりなく、等質に行われているかがわかるだろう。

庄内式併行期の京都府中郡峰山町**金谷1号墓**<sup>321)</sup>、京都府竹野郡網野町**浅後谷南墳墓**<sup>322)</sup>、などもこれまでの台状墓の形式を踏襲しつつ規模の大きい墓域を作り出している。これらにおいても墳頂の複数の主体部のうち中央に中心主体と目される大型の墓壙を持つ埋葬施設が存在するが、土器配置については他から傑出することなく墓壙内にわずかな破碎土器を配置するのみである。

**赤坂今井墳丘墓**<sup>323)</sup> (京都府中郡峰山町、図版 50) は、それまでの台状墓と異なり、明らかに周囲よりも高い整美な方形墳丘を作り出している。規模は39×36m、高さ3mという堂々たるもので、吉備や山陰の後期後葉における大型墳丘墓の主丘におとらない規模であるといえる。墳頂には6基の埋葬施設が確認されており、墓壙の配置や規模から第1主体(14×10.4m)が中心主体、第4主体(4.6×1.3m)がそれにつぐ副主体であることが分かる。唯一墓壙の掘り下げ調査が行われた第4主体では多量の碧玉・ガラス製の管玉・勾玉によって構成される頭飾りが出土している。土器は棺上と思われる付近から破碎された甕1個体、主体部上から円礫とともに壺片、有段口縁高杯2個体、高杯片、丹後系器台1個体が出土している。また、第1主体部は墓壙上の陥没坑までは調査が及んでおり、その結果、多数の円礫とともに壺片7点、鉢底部片1点、把手片1点、大型有段口縁高杯片1点、小型高杯脚部1点、鼓形器台片?1点、器台片5点が出土している。

赤坂今井墳丘墓の土器配置は主体部上配置と墓壙内破碎土器配置の両方がみられる。このことは「近畿北部型土器配置」の形式を踏襲したものであるが、一方で主体部上の土器に櫛描波状文を施した、外来系と考えられる土器が出土している。赤坂今井墳丘墓の段階に至って墳丘形態や土器配置に外来の要素を取り入れるようになったと思われるが、土器配置については土器量がさほど多くなく、その性質はあまり変化していないと捉えられる。

#### 註

320) 岩滝町教育委員会 2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告 15

321) 石崎善久 1995「金谷古墳群(1号墓)」『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 322) 竹原一彦 1998「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 323) 岡林峰夫・石崎善久ほか 2001『赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要報告』

## 小結

以上、述べてきたように「近畿北部型土器配置」は、他地域と異なる著しい特徴をもっている。墓壙内に破碎土器を置くこともそうだが、なによりも墓域内におけるあらゆる階層の埋葬施設において等質なあり方をみせることである。このことは前述したとおり、当地域の土器を使用した葬送儀礼が被葬者の階層とかかわりなく均質に行われたことを示しているのであろう。その意味においては共同体的な祭祀儀礼と言えるが、土器は個々の墓壙に属する事から対象はあくまでも被葬者個人である。儀礼の内容は肥後が指摘したとおり、調理器をとまなう飲食儀礼であると思われるが、しだいに墓壙上への供献行為に重点が移ったと考えられよう。庄内式併行期における首長墓においても墓壙内から甕が破碎されて出土するが、この段階においては形式化された儀礼行為である可能性も考慮しなければならないだろう。しかし、その是非は確かめるすべが無い。

## 第7節 播磨の土器配置と葬送祭祀儀礼

播磨は吉備と畿内の中間に位置するためか、弥生時代から古墳時代前期にかけて、葬送祭祀儀礼を述べるためには重要ないくつかの墳墓がある。しかし、その様相はこれまで見てきた西日本各地と異なり一貫した様相が無い。ここでは、そうした播磨における諸例を概観し、その地域的特性を述べておきたい。

**川島遺跡南五反田B地区土坑5**<sup>324)</sup> (兵庫県揖保郡太子町、図版51) は長さ3.85m、幅1.05m、深さ25cmの舟底形をした土坑である。東西に長く、西端に小さなピットが付随している。墓壇中央付近から合計8個体の壺が二列に並べられて出土した。壺は7個体が完形品で、穿孔等はみられない。報文では土器が廃棄された状態ではなく意図的に並べられた状態であること、墓壇の壁面に崩落が見られず人為的に埋められたと考えられること、土器が全て壺であること、などからこれを土壇墓と判断している。平面形態からも土壇墓である確立が高いといえよう。壺は内容物の供献に使用されたのだろう。時期は土器から中期中葉と考えられ、北部九州や吉備における弥生時代前半期の墓壇内への土器配置の系譜に位置づけられると考えられる。

**半田山1号墓**<sup>325)</sup> (兵庫県揖保郡揖保川町、図版53) は尾根上に立地する長径20mほどの長楕円形の墳丘を持つ、後期中葉に比定される墳丘墓である。墳頂平坦面に箱形木棺5基(第1～5主体)と土器棺1基(第6主体)が検出された。第1・2・4・5主体は一つの大型墓壇内に設置されており、第1・2主体が築造時の主体部、第4・5主体は前2基の上層に設けられた追葬時の主体部である。副葬品は第1主体から鉄剣1本、第3主体から鉄鏃1点、第4・5主体墓壇埋土中から小型倣製鏡1面・銅鏃1点が出土している。後二者は報文中では第1主体の棺上遺物と解釈している。

土器は墓壇内から出土したものと、墓壇上から出土したものがある。第1・2主体が掘られた旧墓壇からは甕1個体が出土している。第4主体に付随して掘り込まれた土坑2基それぞれに土器があり、土坑2(棺上)からは長頸壺1個体、土坑3(小口外側)からは頸部から上を打ち欠いた壺が出土している。第5主体にも小口に接して掘られた土坑1があり長頸壺・大型器台・高杯などが出土している。また、第1・2・4・5主体が設置された大型墓壇の埋土上層から長頸壺・大型器台・高杯・甕などの破片が数個体分出土している。いずれの埋葬に伴うものかは判断できないが、主体部上の土器として捉えてよいだろう。

このように半田山1号墓では墓壇上に長頸壺・大型器台・高杯・甕などを置いており、吉備の土器配置の影響が想定できるものの、棺付近に掘り込まれた小土坑に土器を埋置する独自の方法も見られることも注目される。小土坑から大型器台の破片が出土するということは、内容物の供献というよりも儀礼に使用した儀器を破砕して供献したものであろう。近畿北部地域の影響を想定すべきかもしれない。

**有年原・田中遺跡**<sup>326)</sup> (兵庫県赤穂市) は扇状地に営まれた遺跡である。**1号墓**(図版52) は直径19mの円丘の周囲に幅4～5mの周溝をめぐらせている。墳丘は削平されており、もともとの高さは不明である。周溝内の墳丘寄りから人頭大の河原石が出土していることから、墳丘斜面の貼石の存在が推定されている。墳丘の南東方向に陸橋があり、その対向する方向には小さな突出部が存在する。また、周溝内には木棺墓が1基検出されている。土器は周溝中からの出土で、非常に装飾性の強い特殊長頸壺・大型円筒器台・大型装飾高杯などがある。文様は鋸歯文を主要モチーフに横線文・刻み列点文・小円形スカシ・縦長長方形スカシなどを配している。また、壺と器台の口縁部に双頭渦文が見られることは注目される。明らかに吉備の影響はみられるものの、全体の装飾構成は吉備的ではなく、「播磨型特殊土器類」とも呼ぶべき内容を備えている。

時期は後期後葉と考えられ、播磨独自の儀器を使用した葬送祭祀儀礼が存在したことが伺えるが、現在のところ当遺跡のみの事例であり、その様相は不明である。

**西条 52 号墓**<sup>327)</sup> (兵庫県加古川市) は径 15m 程の円丘に突出部<sup>328)</sup>が敷設された墳丘墓である。墳丘の周囲には列石がめぐらされていた。墳丘中央部に竪穴式石槨が検出され、副葬品として石槨底面から鉄剣 1 本が出土し、また主体部上の陥没坑から長宜子孫銘内行花文鏡が 1 面出土している。土器は石槨内底面よりやや上方の埋土中から破片が、主体部上の陥没坑から鋸歯文のある口縁部片及び高杯片若干が出土、さらに主体部周辺に計 5 個体の壺が埋められていたという。主体部上に装飾性のある土器が配置されているようなので吉備の影響が見て取れる。主体部周辺に壺を配置する方法は後の囲繞配列と関連するかもしれない。公表された壺の実測図をみる限りでは、畿内第五様式の系譜上にある壺であるが、垂下口縁など、畿内系加飾壺の祖形と関連するような特徴を持っている。胴部下方に焼成後の穿孔が施されており、仮器化した上で配置されたことが分かる。第五様式末～庄内式併行期初頭に位置づけられる、土器配置の研究上重要な墳丘墓である。

## 小結

以上、播磨の四つの墳墓について述べてきた。事例が少ないものの、およそ墓域内の土器配置から主体部上土器配置へ移行することは吉備と同様であり、とくに装飾性の強い大型の土器群を使用していることから西隣の吉備の影響は大きなものがあつたと思われる。また、西条 52 号墓は囲繞配列の初源とも関わる底部穿孔壺の配置状況を示しており、興味深い。布留式併行期古段階に至ると当地域でも大型の前方後円墳、前方後方墳が築かれるが、それらの土器配置で吉備系特殊器台形埴輪を使用するものと、伯耆系特殊土器類を使用するものの両方が見られ、各地の様相が交錯して存在する。おそらく播磨は畿内・中部瀬戸内・四国北東部・近畿北部・山陰などの地域間交通の要衝であり、その結果各地域の祭祀の要素が混在するのだと思われる。

## 註

324) 太子町教育委員会 1971『川島・立岡遺跡』川島・立岡遺跡調査報告書刊行会

325) 岡田章一ほか 1989『半田山―山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』兵庫県文化財調査報告 65

326) 兵庫県教育委員会 1991『有年原・田中遺跡発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告書第 87 冊

327) 西条古墳群調査団 1964『西条古墳群調査略報』

加古川市 1996『加古川市史』四

328) 近藤義郎 2001『前方後円墳に学ぶ』山川出版社 96・97 頁参照

## 第8節 北陸の土器配置と葬送祭祀儀礼

北陸地方は日本海を通じて山陰地方との関係が深く、土器様式や墓制の様相にその類似性がみられる。弥生時代後期にはさかんに弥生墳丘墓が作られ、西日本的な後期弥生墳丘墓文化圏の東端と評価しても差し支えないだろう。土器配置については後期前葉段階には確実に越前でみられる。その後、後期中葉から後期後葉（法仏式期）、あるいは庄内式併行期（月影式期）まで北陸独自の土器を使用した土器配置が盛行するが、その後白江式（庄内末～布留式最古段階）にいたって東海西部系の土器群の流入があり、土器様式・墓制についても変容をきたすことになる。また、土器配置についても変化がおこる。これら北陸における墓制と土器配置の様相については古川登の整理<sup>329)</sup>のあとを受けて、筆者<sup>330)</sup>も整理したことがあるが、ここではその内容を要約して記述し、詳細は前稿にゆずることとする。なお、ここでは越前・加賀・能登・越中の例について扱い、様相のこととなる越後は次節の東日本の項で触れることとする。

### 註

329) 古川 登 2003「北陸地方における古墳の出現」『風巻神山古墳群』清水町文化財発掘調査報告VII

330) 古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷―東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として―」『駿台史学』第120号

### 後期（猫橋式～法仏式併行期）における北陸の土器配置

北陸における弥生時代後期墳墓の土器配置は越前に事例が集中する。

後期前葉では**王山墳墓群**<sup>331)</sup>（福井県鯖江市、図版54）に類例が知られる。当墳墓群は独立丘陵上に弥生時代後期から古墳時代中期までの小規模墳40基あまりが密集して展開している。そのうち弥生時代の墳墓は、方形の低墳丘の台状部の周囲に周溝をめぐらしたものである。ここでは方形台状墓と呼称する。後期前葉の1号墓（方形、11m）では周溝底から高杯1個体、甕・壺などの破片が出土した。高杯1個体は南側周溝底に故意に置かれ、他の土器は南東コーナー付近に破碎された状態で出土したという。おそらく儀礼使用後に廃棄されたのだろう。台状部に設けられた墓壇から出土した遺物は無かった。

一方、同じく後期前葉の王山4号墓（方形、11.7m）でも土器が出土しているが、周溝中ではなく主体部からの出土である。2基ある主体部のうち中心主体である第1主体部では墓壇内から壺片が出土し、さらに墓壇上の陥没坑から土器片が出土した。第2主体部も墓壇上から土器片が出土したという。また二つの主体部上には礫が存在した。

王山墳墓群の二例から、同じ墳墓群の同じ時期に、周溝に廃棄する方法と主体部上に土器を廃棄する方法の両者が存在していたことが分かる。

後期中葉から後葉にかけての事例は**小羽山墳墓群**<sup>332)</sup>（福井県丹生郡清水町）において観察される。小羽山墳墓群は小羽山丘陵上に展開する総数59基からなる墳墓群で、このうち弥生時代の墳墓とされたものは四隅突出型墳丘墓・方形台状墓からなる35基である。最古の土器配置として、後期中葉古相の17号墓において主体部上土器配置が見られる。

後期中葉新相に比定できる**30号墓**（図版55）は33×28mの長方形墳丘の四隅に突出部が付く、北陸最大級の弥生墳丘墓である。主体部は墳頂に1基のみで墓壇に箱形木棺をおさめている。副葬品は碧玉製管玉103



点、ガラス製管玉 10 点、ガラス製勾玉 1 点、鉄製短剣 1 本が出土し、玉類はばらまかれたと考えられている。また、朱が使用されている。主体部上の陥没坑から 40 個体におよぶ土器群が出土し、それらにガラス製管玉 1 点と石杵 1 点がともなっている。土器類は赤彩されており、器種は高杯を多く含むようだ。

後期後葉の **26 号墓** も 34×32m の方形墳丘の四隅に突出部を持つ、北陸最大級の墳丘墓である。30 号墓と異なるのは主体部上に 6 基の埋葬施設が存在することである。3 号埋葬のみ割竹形木棺で他は箱形木棺を墓壇におさめている。副葬品には若干の玉類・鉄鏃・土器などであるが、30 号墓に比べると量的に少ない。主体部上の陥没坑から土器が出土したのは 1・2・3 号埋葬であるが、中心主体の 1 号埋葬からは 50 個体に及ぶ土器群が出土した。

小羽山墳墓群の詳細は公表されていないが、40 個体以上の土器が出土している 30 号墓の主体部と 26 号墓の中心主体の 2 基をのぞけば、他は 10 個体に満たない土器量であるという。この多量の土器を主体部上に配置する儀礼は、器種組成が半明していないものの、石杵が伴うことから山陰や吉備の葬送祭祀儀礼の影響を色濃くうけたものと想像される。

上記の主体部上における土器配置のほか、当墳墓群では 36 号墓において墓壇内破碎土器配置がみられた。近畿北部地域との交流も伺われる。

小羽山墳墓群以外にも片山鳥越 5 号墓、王山 3 号墓、西山 1 号墓など後期後葉の小規模方形台状墓において主体部上土器配置が行われている。

**片山鳥越 5 号墓**<sup>333)</sup> (福井県丹生郡清水町、図版 56) は 3 方向に周溝が存在する、16.5×14.0m の方形台状墓である。墳頂に直列する 2 基の主体部がある。両者とも墓壇に箱形木棺をおさめたものであるが、中心主体の第 1 埋葬では木棺の裏込めに礫を使用している。第 1 埋葬上の陥没坑から礫と共に高杯および器台の破片が出土した。個体識別の結果あわせて 5～9 個体ほどが存在したようだが、すべて破片状になっており全形を伺えるものは無い。また脚柱部の破片が著しく少ないことから、他の場所で破碎され一部の破片のみを墓壇上に置いたと考えられる<sup>334)</sup>。

**王山 3 号墓**<sup>335)</sup> (図版 54) では主体部上から壺・高杯の破片が出土したほか、周溝から壺、高杯、器台、甕など 10 個体以上の土器が出土している。主体部上の土器が細片化しているのに対して、周溝中のとくに北溝から出土した一括の土器群はほぼ完形に復原でき、器種組成を良好に表していると考えられる。それらによると壺、小型壺+器台、高杯、甕といった供膳具および調理具がセットをなしていたと考えられる。儀礼に使用した土器の一部を破碎して墓壇上に置き、あとは完形のまま溝中に遺棄したのだろう。

#### 註

331) 斉藤優・相山林継・武藤正典編 1966『王山・長泉寺山古墳群』福井県教育委員会

332) 古川 登 1995「発掘調査と問題意識—小羽山墳墓群の調査から—」『長野県考古学会誌』75

古川 登 1997「北陸南部における弥生時代首長墓の認識—北加賀・越前北部地域の事例から—」『考古学研究』第 43 巻第 4 号

333) 古川登ほか 2004『片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址』清水町教育委員会

334) 古屋紀之 2004「片山鳥越 5 号墓 埋葬施設上における祭式土器の出土状況・埋葬施設出土土器の問題」『片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址』清水町教育委員会

335) 前掲註 331 文献参照

## 庄内式併行期（月影式～白江式古段階）の様相

月影式期の越前では、原目山墳墓群や袖高林墳墓群において引き続き主体部上の土器配置が見られる

**原目山墳墓群**<sup>336)</sup>（福井市、図版 57）は丘陵上に展開する総数 64 基の墳墓群であるが、そのうち北西に張り出した尾根上に立地する 3 基の方形台状墓と 1 基の自然丘を利用した墳丘墓からなる支群において主体部上土器配置がみられた。I 号墓は 25×20m、高さ 4 m で埋葬施設は墳頂に 1 基のみ確認された。2 段墓壇に木棺を収め、青い砂が敷き詰められていたという。副葬品は碧玉製管玉 323 点、ガラス小玉 728 点、鉄刀 1 本、鉄短刀 1 本、鉄片 1 点が出土した。主体部上から台付無頸壺・有段口縁壺・高杯・器台など多くの土器が出土した。

II 号墓は 20×30m ほどの不整形方形台状墓で、墳頂に 5 基の木棺土壇が存在する。副葬品はガラス小玉・鉄製武器・銅鏃・鉄製工具などであるが、5 号埋葬の素環頭大刀が特筆される。盗掘を受けた可能性のある 3 号埋葬以外の墓壇上から土器が出土し、それぞれ土器群に標石が伴うようだ。

III 号墓はひとつの台状墓の平坦面に 3 基の小形方形周溝墓と 10 基の土壇墓が立地する。土壇のうち 3 基は方形周溝墓の主体部としてつくられたものと見られる。副葬品はいくつかの土壇から鉄刀が出土している。墳頂平坦面の表土下には土器群のまとまりが 10 ヶ所存在し、そのうちいくつかは墓壇上土器群である。5～7・9・10 号土壇および 2 号方形周溝墓主体部（11 号土壇）が主体部上土器配置を行っていた。

V 号墓は不定形の自然丘の頂部に 2 基、斜面に 1 基の土壇が存在する。このうち斜面につくられた 3 号土壇に主体部上土器配置がみられた。

原目山墳墓群の主体部上土器配置の器種組成の詳細は明らかにされていないが、I 号墓の器種組成をみる限りでは壺類+器台という組み合わせに高杯が伴っている。また、I 号墓がもっとも階層の高い人物の墳墓であることは明らかであるので、墓の階層性と主体部上の土器量が相関すると言えよう。これらの特徴から山陰型土器配置の影響を受けていることが考えられる。

**袖高林墳墓群南支群**<sup>337)</sup>（福井県吉田郡永平寺町、図版 58）は 4 基の台状墓が尾根線上に連続して築造されており、**1 号墓**（方形、10.4m）に土器配置が見られる。1 号墓は墳頂に 5 基の埋葬施設が造られているが、そのうち第 2 主体の墓壇内から器台の受部が出土し、出土状況から棺蓋の上面に置かれたと考えられている。一方、墳丘の南東隅に存在する陸橋部の地山直上に土器片の集積がみられ、この中の破片が第 2 主体部内から出土した器台片と接合した。墓壇内の破片が意図的に置かれたかどうかは問題であるが、葬送儀礼における土器の扱われかたを具体的に知る好例であろう。このことは後段であらためて問題にする。

このように越前では主体部上土器配置、墓壇内土器配置、墳丘周辺土器配置が前代に引き続いて存続しているが、次の白江式の段階にはこのような伝統的な土器配置の類例が途絶える。一方、月影式期には加賀や越中において主体部上土器配置がみられるようになり、越中では白江式期まで継続する。

加賀の例では**セツ塚墳墓群**<sup>338)</sup>（石川県金沢市）が挙げられよう。6 基の方形台状墓、9 基の方形周溝墓、無区画の埋葬施設群 38 基からなる。埋葬施設は墓壇に箱形木棺をおさめるもので、副葬品は玉類・鉄製武器類・鉄製工具類が散発的に出土している。そのうち主体部上から土器が出土する例は 1 号墓第 3 主体（壺 1）、18 号墓第 2 主体（高杯 4・器台 1）、18 号土壇墓（器台 1）である。すべて月影式期である。

越中では富山県婦負郡婦中町千望山遺跡群<sup>339)</sup>および北接する富山市杉谷墳墓群<sup>340)</sup>において弥生時代後期から古墳時代前期を通して、四隅突出型墳丘墓や前方後方墳など当時の有力な首長墓が連綿と築造された。

その系列を追えば、富崎3号墓（四隅突出形、法仏新）、六治古塚（四隅突出形、月影）、鏡坂1号（四隅突出形、月影）、富崎2号（四隅突出形、白江）、杉谷4号（四隅突出形、白江）、勅旨塚（前方後方形、古府クルビ）など多数の墳墓があげられる。ただし、これらの墳墓について十分な調査が行われているわけではないので、土器配置についてもその様相は不鮮明と言わざるを得ないが、そのなかでも六治古塚や杉谷4号墓では主体部上土器配置の存在が判明しており、越前から伝播し白江式期にいたるまで四隅突出形という墳丘形態と共に持続されたと考えられよう。

#### 註

- 336) 大塚初重 1986「原目山墳墓群」『福井県史』資料編13 考古 福井県  
大塚初重 1990「原目山墳墓群」『福井市史』資料編1 考古 福井市
- 337) 赤澤徳明・御嶽貞義 1999『袖高林古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告 46
- 338) 石川県教育委員会 1976「金沢市七ツ塚墳墓群」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』I
- 339) 大野英子 2002『千望山遺跡群試掘調査報告書』婦中町教育委員会
- 340) 藤田富士夫 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』富山市教育委員会

#### 小結

以上に述べてきたように、北陸の弥生時代後期には主体部上土器配置が主流であるが、周溝などに遺棄する場合もあった。また、儀礼に使用された器種組成は壺・小型壺・高杯・器台・甕など飲食儀礼に使用された土器のセットを具備していたようだが、その全てを主体部上に配置せず、墳丘の周囲に遺棄する場合もあったようだ。

北陸の主体部上土器配置を概観したとき、小羽山30号墓主体部、小羽山29号墓1号主体部、原目山I号墓主体部の3基の埋葬施設が他にぬきんでて土器量が多いのが注目されるが、他の大多数の墳墓ではごく少数の土器を土器を置いているにすぎない。多量配置を行う3基について器種組成が必ずしも明らかにはなっていないのが残念ではあるが、原目山I号墓の器種組成を見る限りでは壺と器台の組み合わせに高杯をとまなっており、山陰や吉備地方の土器配置の影響を受けていると考えられる。主体部上に標石や礫を伴う例があることからこのことは言えるだろう。北陸ではまず首長墓において山陰・吉備の葬送祭祀儀礼を導入・模倣してそれを挙行し、その影響をうけてより下位の墳墓において小規模に変容させて行われたと考えられるだろう。本書では、山陰・吉備の直接的な影響のもとに行なわれた土器配置を「小羽山型土器配置」と定義し、その他を「変容形」という概念で捉えておきたい<sup>341)</sup>。

白江式期になると、それまでの北陸南西部の土器様式は大きく変容し、東海系の土器群を多く受容するようになる。それとともに前方後方形の墳墓が普及し、越中以外の地域では四隅突出型墳丘墓が造営されなくなる。越中では先に述べたとおり杉谷4号墓が白江式期に築造されているが古府クルビ式期には前方後方墳に変わる。白江式期の土器配置は不明な点が多いが確実に新しい要素はみられ、石川県加賀市小菅波4号墳<sup>342)</sup>では加飾壺を中心とした土器配置が登場している。次代の前方後方墳や前方後円墳においても主体部上土器配置は行われているが、それはむしろ東日本の広い地域で共通して行われた土器配置の系譜で考える必要があり、北陸の弥生後期からの伝統上では捉えることができないと考える。庄内式併行期以降のことは、ま

た後段で触れる。

#### 註

342) 小菅波遺跡発掘調査団 1978『小菅波遺跡発掘調査ニュース』

## 第9節 東日本における墳丘墓の土器配置と葬送祭祀儀礼

北陸南西部以外の東日本において、丘陵上に墳丘墓・台状墓が造られる地域は一般的ではない。ここでは弥生後期段階のそうした墳丘墓・台状墓のうち土器配置が判明しているものを概観しておきたい<sup>343)</sup>。

**高松墳丘墓**<sup>344)</sup> (三重県津市、図版 59) は山中Ⅰ式に比定できる、伊勢における後期中葉の墳丘墓である。10×6mの楕円形で、墳頂に営まれた2基の墓壇から多くの土器が出土している。器種組成は高杯が多く、その他に直口壺、器台、台付鉢などがある。これまで述べてきた西日本の墳丘墓の主体部上に置かれた供膳具のセットと共通した要素が伺われるが、甕を伴っていない。

**端龍寺山山頂墳**<sup>345)</sup> (岐阜市) は、山頂において岩盤を掘り抜いた墓壇が2基検出され、そのうちのひとつから長宜子孫銘雷雲文帯連弧文鏡が出土したことで著名であるが、この鏡に後期中葉(山中Ⅰ式)の高杯・鉢が伴っている。出土状況の詳細は知れないが、主体部内もしくは周辺に置かれていたものと思われる。

**加佐美山墳丘墓**<sup>346)</sup> (岐阜県各務原市、図版 60) は15m以上の方丘墓とされている。主体部は未確認であるが、墳丘東側に敷設された竪穴状遺構の床面直上から儀礼に使用されたと考えられる土器群が出土した。高杯・甕・鉢などから構成され、後期後葉(山中Ⅱ式)に位置づけられる。

**根塚遺跡墳丘墓**<sup>347)</sup> (長野県下高井郡木島平村、図版 61) は径20mの円形を呈する。墳丘斜面には葺石があり、墳丘の周囲を周溝がめぐる。墳頂平坦面は径15mほどもあり、その中央に箱形木棺をおさめた墓壇がある(6号木棺墓)。副葬品は墓壇内より鉄剣1本・管玉79点・ガラス小玉134点が出土している。主体部の周囲には径7mほどの馬蹄形を呈する外周溝が存在する。土器は主体部上から小型壺1個体、主体部周囲の墳頂平坦面(外周溝中あるいは周溝内側・外側)から壺12個体、甕4個体、高杯4個体、鉢4個体が出土している。また、後者には砥石や玉類若干が伴っている。いずれもほぼ完形品で破碎することなく遺棄されたものと思われる。壺中心の器種組成であるが、底部などに穿孔された痕跡は無く、仮器化された土器ではない。その意味で関東地方の方形周溝墓から出土する壺類との関連性は無いと考えられる。おそらく内容物を入れて儀礼で使用されたものであり、独特な儀礼の存在が想定できる。

**屋鋪塚遺跡方形台状墓**<sup>348)</sup> (新潟県三島郡寺泊町、図版 62) は4方向にそれぞれ独立した溝を配置する区画墓で、一辺8.7m、高さ1.2mを測る。墳頂部中央に箱形木棺をおさめた墓壇があり、副葬品として凝灰岩製管玉2点が出土した。土器は墓壇内から出土したものと、墳丘および周溝から出土したものがある。墓壇内の土器は破片の状態で、墓壇底直上から棺を取り囲むように出土した。直口壺1個体の破片と考えられており、近畿北部の墓壇内破碎土器配置の影響を受けたものであろう。ただし、近畿北部は棺側でも棺蓋の高さに配置するが、屋鋪塚の例では墓壇底直上である点がことなる。墳丘・周溝から出土した土器には、長頸壺、甕、器台などがある。器台の口縁部には櫛描波状文・円形竹管文が施され、装飾的である。土器の器形や墓壇内破碎土器配置から近畿北部地域の強い影響が伺い知れる。時期は後期中葉から後葉に比定できる。

### 小結

以上に概観してきたが、東日本ではこのような丘陵上の墳丘墓は珍しく、貴重な例だといえる。分布も東海西部・信濃・越後と北西側に偏り、東海東部・関東・東北南部にはほとんど知られていない。それぞれの土器配置は、高松・端龍寺山・加佐美山は西日本の、屋鋪塚は近畿北部の影響を受けていると考えられるが、

根塚のみは独自の様相を伺わせる。今後、このような後期段階における山上墓の土器配置の新事例が増加する可能性を考慮しなければならないが、現在のところ類例は少なく、また時代への系譜関係も明らかではない。西日本の後期弥生墳丘墓の影響が、東日本にわずかに及んだ結果営まれた墳墓という評価が下せるだろう。

#### 註

343) 拙稿でまとめたことがあるので、詳細はそちらを参照のこと。

古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷―東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として―」『駿台史学』第120号

344) 谷本鋭次 1970『高松弥生墳丘墓発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告

345) 荻野繁春 1985『端龍寺山山頂遺跡』岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書

赤塚次郎 1992「端龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』1

346) 渡辺博人 1990『加佐美山1号墳発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書7

347) 吉原佳市 2002『根塚遺跡』木島平村埋蔵文化財調査報告書No.12

348) 八重樫由美子 2004『屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』寺泊町教育委員会

## 第10節 関東の土器配置と葬送祭祀儀礼

東日本における弥生墓制は、丘陵上に台状墓を盛んに造営した北陸をのぞくと、ほとんどの地域では前半の再葬墓から後半の方形周溝墓への移行というおおまかな流れの中で捉えられる。方形周溝墓が弥生時代のうちに及んだ範囲の東端は関東地方の北東部を除いた地域であった。関東地方ではいまや 3,000 基を越す検出例があり、様々な角度からの研究の蓄積がある。土器の出土状況と葬送祭祀との関わりについても言及している研究はいくつかあり、この分野では東日本の他の地域の方形周溝墓研究に抜きん出ていると言えよう。このような理由から本書では関東地方における方形周溝墓の土器配置について述べておく。なお、本節は伊藤敏行（1986・88）<sup>349)</sup>・立花実（1996・2000a・b）<sup>350)</sup>・福田聖（1996・2004）<sup>351)</sup>らの研究成果によりつつ記述を進める。

### 註

349) 伊藤敏行 1986「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集』Ⅳ （財）東京都埋蔵文化財センター

伊藤敏行 1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集』Ⅵ （財）東京都埋蔵文化財センター

350) 立花 実 1996「「方形周溝墓」出土の土器 南関東①神奈川県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社

立花 実 2000a「方形周溝墓の常識」『西相模考古』第9号

立花 実 2000b「第Ⅴ章第3節 方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団

351) 福田 聖 1996「方形周溝墓の死者儀礼」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社

福田 聖 2004「方形周溝墓と土器Ⅱ—概観 その1—」『研究紀要』第19号 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

### 方形周溝墓という遺構の特質

方形周溝墓の土器配置を述べる前に、遺構の構造について把握しておかなければならない。それは方形周溝墓のほとんどが本来の構造を留めずに検出されるために、もともとの構造を復原しなければならないのである。

方形周溝墓はその名の通り方形に溝をめぐらした遺構であるが、近年これらの中に周溝をもつ建物跡と判断される遺構が含まれることが指摘され<sup>352)</sup>、大きな問題となった。ここでその詳細を述べることはしないが、現在では方形に周溝をめぐらした遺構を無批判に墓として認定するのでは無く、墓として認定するための要素を抽出するための再検討が行われつつある<sup>353)</sup>。

確実に墓と考えられるものとは、まず埋葬施設が発見されたものであろう。関東の方形周溝墓では方台部において埋葬施設が発見されることはそう珍しいことではなく、たいていは中央に1基の土壙が見つかる。また、周溝内に埋葬施設が設けられる例もある。ところが、埋葬施設が全く見つからない場合も多い。これらが墓であるのかその他の遺構であるのかが問題である。そのほか出土土器については墓の場合には一般的に壺が占める割合が高く、また底部などに穿孔が見られることが多い。このように溝中から出土した土器の特徴から墓と見分けられることもあり、また周溝を有する建物跡に比べて方形周溝墓の溝は総じて幅広いということも目安になろう。このようにしてみると埋葬施設が発見されない遺構についても方形周溝墓の可能性が高いものもある。ではなぜ埋葬施設が発見されないのだろうか。それはおそらくもともと方台部には盛

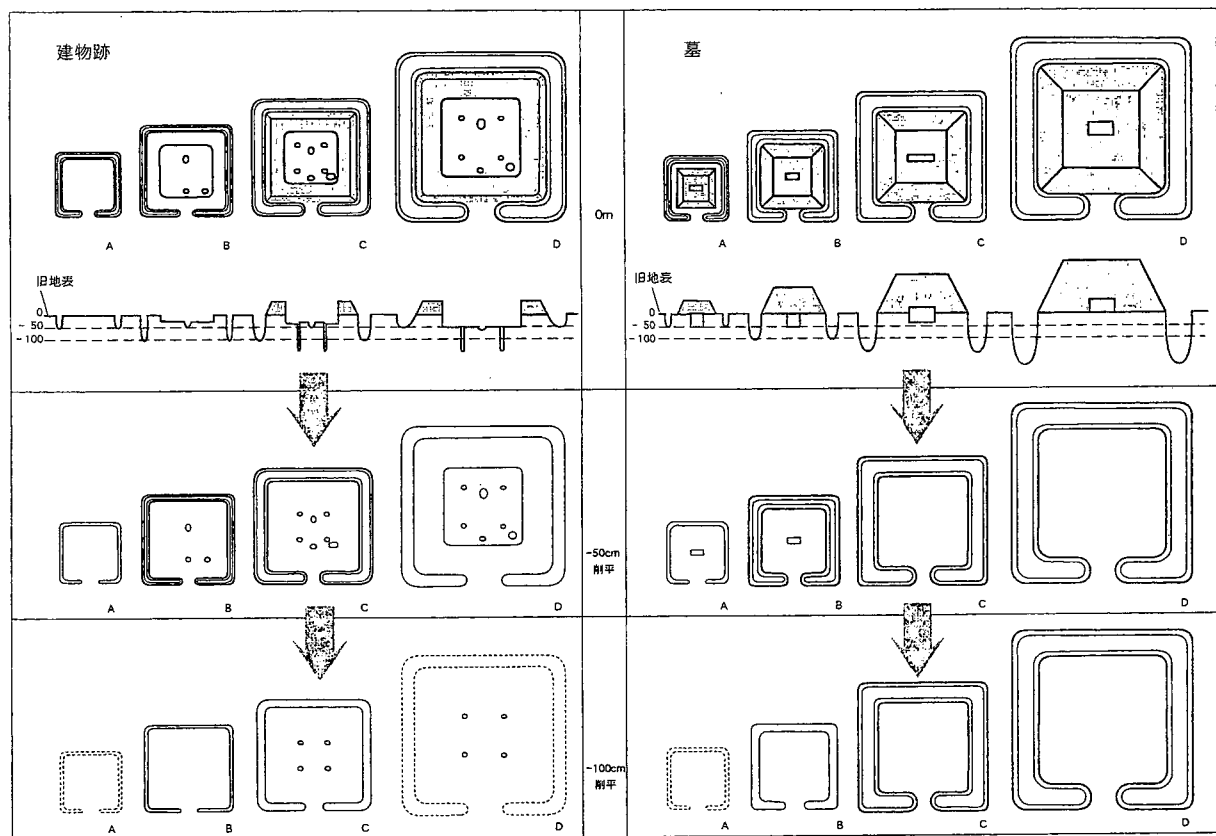


図4 「周堤・周溝を有する建物跡」と方形周溝墓の旧地表面と削平模式図

※（及川 2004）より引用

土による墳丘があり、方台部に掘り込まれた墓壙が結果的に遺構検出面に達していなかった場合は調査者によって発見されることはない。つまり後世の削平によって埋葬施設が検出されない例もあるということだ（図4）。この問題は方形周溝墓の方台部にどの程度の盛土がなされたかという問題と密接に関わっている。福田聖<sup>354)</sup>は方台部に盛土が遺存している例として、埼玉県坂戸市中耕遺跡S R21・41・42<sup>355)</sup>、坂戸市広面遺跡S Z 9<sup>356)</sup>、東京都八王子市神谷原遺跡S X B・C<sup>357)</sup>などを挙げている。したがって、類例は少ないものの、少なくとも方形周溝墓に墳丘が存在したものがあるということは認めなければならず、埋葬施設が検出されない例についても墓である可能性を消去することはできない。しかし、立花実が神奈川県の方形周溝墓を集計した結果、主体部が発見された例は114例もあり<sup>358)</sup>、このことからおよそ大多数の方形周溝墓は盛土がなされていたにしても低墳丘であったことが知れる。さて、なぜここでこのようなことにこだわるのかといえば、それは方形周溝墓の方台部における遺構上面がほとんどの場合は削平されて無くなっているという事実を確認したかったためである。このことは方形周溝墓の土器配置を考えるときに、方台部における土器配置の情報が皆無であり、また主体部に配置された土器についても主体部そのものあるいは主体部上層が削平されてしまったものについてはその情報が得られないということをまず前提として受け入れておく必要がある。これらのことは、方形周溝墓出土土器から葬送儀礼の問題にアプローチしようとする研究者にとっては、まさに「泣き所」であろう。方形周溝墓の土器配置は、その情報の大部分を溝中出土土器の出土状況から類推するしかないのである。



## 註

- 352) 及川良彦 1998「関東地方の低地の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』第15号 青山考古学会
- 及川良彦 2004「関東地方の低地遺跡の再検討（5）—墓と住居の誤謬—」『シンポジウム 宇津木向原遺跡発掘40周年記念 方形周溝墓研究の今 資料集Ⅱ』方形周溝墓シンポジウム実行委員会
- 353) 福田 聖 2000『方形周溝墓の再発見』同成社
- 354) 福田 聖 1996「方形周溝墓の死者儀礼」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
- 355) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集
- 356) 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告第89集
- 357) 吉廻純・大村直 1981『神谷原Ⅰ』八王子市梶田遺跡調査会
- 358) 立花 実 1996「「方形周溝墓」出土の土器 南関東①神奈川県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社

## 方形周溝墓の土器配置

以上の点をふまえながら、まず主体部上の土器配置についてその有無を確認してみよう。

立花実によれば神奈川県の方形周溝墓で検出された全主体部114基のうち土器が出土したのは5基で、そのうち4基について詳細が不明であったり、土器片が小さく墓壇埋土内に混入した土器と考えられている<sup>359)</sup>。その中で唯一、平塚市王子ノ台5号方形周溝墓<sup>360)</sup>では墓壇上層から東海西部の山中式系の高杯が1個体出土している。この方形周溝墓では周溝中から多くの焼成後底部穿孔壺が出土し、また墓壇底面から鹿角装の鉄剣が出土していることから、階層が高いか、あるいは特別な職掌にあった人物の墓と考えられる。主体部上から高杯が出土したことも、何か特別な葬送儀礼に伴うものと思われる、今のところ関東で弥生時代の方形周溝墓の主体部上から意識的に置かれたと思われる状態で土器が出土したのがこの一例だけであることと関係するのであろう。

その他には、福田が埼玉県戸田市南町Ⅰ遺跡第1号方形周溝墓<sup>361)</sup>の主体部覆土中層から土器片が出土した事例をあげ、「主体部上に供献した土器が落ち込んだ可能性がある」としている<sup>362)</sup>。しかし、方形周溝墓の検出総数に比較してあまりにも類例が少ないため、基本的に関東地方では弥生時代には主体部上土器配置は行われなかったと捉えてよいだろう<sup>363)</sup>。

それでは方形周溝墓ではどのような土器配置が行われたのであろうか。福田聖は関東において方形周溝墓が造営された当初から、①周溝底面に置かれる、②周溝埋没開始後に土器が入られる、③壺棺、④周溝底で破碎される、⑤方台部で使用されたものが流れ込む、など様々な土器使用方法が既にみられ、①は再葬墓の影響が考えられるとしている。また、中期後半には、⑥埋没終了直前（上層）に土器を置く方法が出現するという。そして後期後半には⑥の部分が打欠土器から焼成後底部穿孔土器に、庄内式併行期から古墳時代前期にかけては焼成前底部穿孔土器に変わるという<sup>364)</sup>。

関東地方の方形周溝墓出土土器において出土する土器量はどのくらいなのであろうか。立花実が神奈川県の方形周溝墓出土土器の個体数を分析している<sup>365)</sup>。それによると集落遺跡に重複あるいは近接して存在している周溝墓において生活に使用された土器を多量に廃棄されたと考えられる資料を除くと、大半の場合は1

～5個体と少数の土器が出土する例が一般的で、庄内式併行期以降になりようやく10個体を越える土器が出土する事例が増えてくる。このようにしてみると弥生時代中期から後期にかけては西日本の弥生墓制にみられる多量の供膳具を使用した祭祀儀礼は行われなかったと判断できる。

それではその少数の土器はどのように置かれるのであろうか。平面的な位置を問題にした場合、福田によると比較的コーナー部分から出土するものが多く、また陸橋がある場合は入り口部分付近で出土する例が少なからずあるという<sup>366)</sup>。

**井沼方9号方形周溝墓**<sup>367)</sup> (埼玉県浦和市、図版63) はそのような事例の好例としてあげられる。12.8×12mを測り、南西コーナーのみはブリッジ状に周溝が途切れている。墳丘は遺存していないが方台部の中央には埋葬施設である土壇が1基検出され、副葬品としてガラス小玉13点が出土した。周溝からは土器とガラス製勾玉1点が出土している。土器は赤彩された装飾壺が5個体、甕3個体、片口鉢1個体があるが、それらがコーナー部に集中して出土している。特に壺は南西コーナーのブリッジ両脇と北西・北東・南東コーナーにおいてそれぞれ1個体ずつ出土しており、意識的な配置として捉えて良いだろう。このうち、ブリッジの南側で出土している壺は胴部に焼成後の穿孔が見られ、底部が欠損している。

このようにコーナー部から土器が出土する事例から想起されることは、近畿地方においてみられた長方形区画墓のコーナー部に壺が胴下半を埋め立て置かれる事例があったことである。両者が系譜的につながるのかどうかは不明であるが、関東の例も墳丘の要所に、墓域を守るために呪的な効力を期待して置かれたものと思われる。

さて、後期後半以降このような機能を期待されたと思われる底部穿孔壺を置く事例が増えるが、問題はそれらが上層から完形で出土するという点だ。このことは伊藤・福田・立花らが指摘していることでもある<sup>368)</sup>。とくに立花は王子ノ台5号方形周溝墓出土土器の事例を詳細に分析している。やや詳しく触れておこう。

**王子ノ台遺跡**<sup>369)</sup> (神奈川県平塚市) では弥生時代後期に属する4群19基の方形周溝墓が調査された。そのうち問題となるのは**5号方形周溝墓** (図版64) である。この方形周溝墓の方台部の中心に設けられた主体部上から高杯1個体が出土していることは既に述べたが、周溝中からは壺17個体前後、甕3個体という多量の土器群が出土おり、これらの遺存状況から本周溝墓の祭祀儀礼に使用されたものと判断されている。そのうち甕2個体や大型壺2個体と底部が穿孔されていない中型壺2個体については溝の底面か下層から出土しているが、他の土器は上層からの出土で、なおかつ遺存状況が非常に良い。また、壺はいずれも焼成後底部穿孔が行われている。

ごく少数の壺が上層から出土するようであれば、検出しづらい周溝内埋葬に伴うものとの判断も可能であるが、これほど多くの底部穿孔壺が周溝の各所の上層から出土することは、やはり何らかの理由があるのだろう。先に述べた井沼方9号方形周溝墓の場合も、5個体中4個体の壺が上層からの出土であり、下層の1個体も、底面に正立した状態ではなく、底面からは若干浮いて逆位で出土している。これらの土器がもし方台部上に並べられていて、周溝埋没後に転落したのであれば、土器はかなりの期間外表にさらされていたことになり、風化や破壊の痕跡がみとめられてもいいはずであるが、両遺跡ではそのような痕跡は無い。立花はこのような理由からこれらの底部穿孔壺は方形周溝墓が造られてから一定期間経て、周溝がほとんど埋没してから置かれたものと判断している。また、置かれた場所については周溝覆土上を想定し、またそのような行為を行う儀礼の契機として、方形周溝墓の廃絶に関するものとしている (立花2000b 640～641頁)。

しかし、厳密に考えるともう一つの案が提出される。それは方形周溝墓の築造が被葬者の死を契機とせず生前に作られた場合である。生前に作られる契機としては、家父長以外の家族が亡くなり周溝内の土壌に先に葬ったり、あるいは通過儀礼の一環としてある年齢で造墓が行われるようなこともあったかもしれない。そして本来、墓の中心的な被葬者である人物の死に際して盛大な葬送儀礼が行われ土器が置かれたが、そのころには造墓からかなりの期間が経っており、周溝がほぼ埋まりかけていたということは可能性としてはありうることである。廃絶儀礼説か、はたまた生前造墓説かという二案は今後発掘事例の検討から具体的に検証されなければならないだろう。ここではいずれも推定の域を出ない。

## 註

- 359) 立花 実 1996「「方形周溝墓」出土の土器 南関東①神奈川県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
- 360) 東海大学校地内遺跡調査団編 2000『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』
- 361) 福田 聖 1987『南町遺跡Ⅰ』戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会
- 362) 福田 聖 1996「方形周溝墓の死者儀礼」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
- 363) 静岡県において弥生時代の周溝墓の主体部内から土器が出土した例がある。浜松市瓦屋西A3号墓（不整円形）主体部や、磐田市新豊院山C地点1号方形周溝墓第1主体部などである。前者は主体部上から胴下半部に焼成後の穿孔が施された中期後半の壺が出土している。後者も胴下半部に焼成後穿孔を施した壺であるが、「主体部内」のどこから出土したのかは不明である。
- 磐田市教育委員会 1980『新豊院山遺跡（A-2・3地点）』
- 鈴木敏則 1988「瓦屋西A2・A3・B14・B15号墓」『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制 一再葬墓と方形周溝墓』
- 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
- 364) 福田 聖 2004「方形周溝墓と土器Ⅱ—概観 その1—」『研究紀要』第19号 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 365) 前掲註359文献 （立花1996）参照
- 365) 前掲註362文献 （福田1996）参照
- 367) 浦和市遺跡調査会 1994『井沼方遺跡発掘調査報告書（第12次）』浦和市遺跡調査会報告書第185集
- 368) 伊藤敏行 1986「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集』Ⅳ （財）東京都埋蔵文化財センター
- 立花 実 2000a「方形周溝墓の常識」『西相模考古』第9号
- 立花 実 2000b「第Ⅴ章第3節 方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団
- 前掲註362文献 （福田1992）参照
- 369) 前掲註360文献参照
- 370) 前掲註369文献 640～641参照

## 小結

以上、述べてきたとおり関東における方形周溝墓の土器配置は方台部の情報が欠如していることからその具体相を捉えることは困難である。しかし、周溝中出土土器を分析した結果、コーナー部や入り口部に土器が置かれる例があり、底部穿孔壺が出土することが多いことから、象徴化された壺形土器の意識的な配置があったことは確かであろう。王子ノ台5号墓のようにのちの囲繞配列を髣髴とさせる多量配置は他には見られないが、象徴化された土器で呪的に墓域を守るという意識は存在したと考えられる。ただし、畿内におけ

る同様な行為と関東の事例がどのような系譜関係をもっていたのかについては不明である。また、大規模な飲食儀礼が行われた痕跡は見当たらないが、壺以外の器種が存在することの説明として小規模な飲食儀礼を想定する必要があるかもしれない。しかし、現時点では積極的な根拠に欠けるのが実情であろう。関東の方形周溝墓の土器配置は西日本における弥生墳丘墓で行われた土器配置とは大きく異なる。このことは当然ながら背景にある葬送儀礼の思想の違いに起因するものと思われる。東日本の葬送儀礼に使用される土器の器種組成が西日本のそれに近くなるのは、庄内式併行期における東海西部系土器の拡散を待たなければならない。

## 第4章 移行期の儀器・祭器

本章では弥生時代と古墳時代のちょうど変わり目の時期に登場する、四種の儀器・祭祀について採り挙げる。これらの儀器・祭器の使用状況は残念ながら明確でないものが多いが、両時代の土器配置の変遷を考える上で重要な資料である。

### 第1節 吉備系特殊器台の変化—宮山墳丘墓と矢藤治山墳丘墓—

ここで宮山墳丘墓と矢藤治山墳丘墓という、庄内式併行期後半に編年される、吉備における二つの重要な墳丘墓についてその内容に触れておきたい。なぜなら二つの墳丘墓は内容が似通っており、ともに後期後葉の弥生墳丘墓とのちの定型化した前方後円墳の過渡的特徴を有しており、吉備における土器配置の大きな画期を確認できるからである。

**宮山墳丘墓**<sup>371)</sup> (岡山県総社市、図版 65) は全長 38m の前方後円形の墳丘墓である。直径 23m、高さ 3m の円丘に突出部がつく。墳丘斜面には「葺石」がみとめられたという。円丘頂部に竪穴式石槨が 1 基あり、副葬品として飛禽鏡 1 面、ガラス小玉、銅鏃、鉄鏃 3 点、大刀、鉄剣が出土している。墳丘裾および約 50m ほど西方に離れた地点で特殊器台・特殊壺が出土した。西方地点において出土した 3 個体は 1 個の器台棺の棺材として使用されていたものだが、これらが宮山墳丘墓の裾から出土した破片と接合したため、もともと宮山墳丘墓に置かれていたものを棺材として転用したものと考えられている。特殊土器類以外の土器については出土したという報告がない。

**矢藤治山墳丘墓**<sup>372)</sup> (岡山市、図版 66) は楕築墳丘墓の東約 1.2km の「吉備の中山」中の一丘陵上に立地する。全長 35.5m の前方後円形の墳丘で、直径 23.5m、高さ 3m の円丘に突出部がついている。突出部は撥形に開き「前方部」という表現のほうが正しいかもしれない。墳丘裾には列石がめぐらされている。埋葬施設は円丘部頂に竪穴式石槨 1 基、突出部に木棺土壙が検出されている。両方とも箱形木棺をおさめていた。円丘部主体部から方格規矩鏡 1 面、硬玉製獣形勾玉 1 点、ガラス小玉 50 点、袋状鉄斧 1 点が出土している。墳丘の各所からは向木見型の特殊器台・特殊壺が出土しているがその他の土器類はみられない。また、円丘部主体部上には「角礫堆」が陥没坑内に落ち込んでいるが、この中からも土器類は出土していない。

さて、庄内式併行期も後半になると吉備系特殊器台に三つの変化がおこり、それまでとは異なる環境下にこれらの儀器が使用されるようになったと考えられる。

変化のひとつは文様などにみられる型式学的な変化である。庄内式併行期を通じて消長すると考えられる向木見型は、宇垣匡雅によれば文様帯に施される「連続型文様」の型式から 4 つに区分され、その後半期は「あたご山型」あるいは「丸山型」と呼ばれる、より簡略化した文様を施す一群によって占められるようになる<sup>373)</sup>。そして、矢藤治山墳丘墓から出土した特殊器台形土器はあたご山型の最も簡略化されたものであり、全体の印象はむしろ「丸山型」に近いものである。さらに、宮山型が出現したのも庄内式後半期と考えられ、この時期、向木見型の文様が退化した系列と宮山型が並存していたと考えられる。宇垣は特殊器台に伴う特

殊壺の型式変化を基軸にすることによって、宮山墳丘墓の宮山型特殊土器類よりも矢藤治山墳丘墓の向木見型特殊土器類のほうが後出するという結論に達している<sup>374)</sup>。

次に分布の変化である。立坂型・向木見型の分布範囲は備中平野部を中心として備前・美作・三次にひろがり、一部、山陰地方にも達していたが、宮山型になると吉備では宮山墳丘墓が唯一の例となり、かわりに大和盆地東南部において箸墓古墳・中山大塚古墳・西殿塚古墳・弁天塚古墳で類例が知られる。明らかに分布の中心が大和盆地東南部に移っているといえよう。

そして、土器配置にも変化が起っている。前章で確認したとおり、もともと吉備における特殊土器類の使用はあくまでも他の多くの器種と組み合せて祭祀儀礼用の土器群を形成していたが、庄内式併行期後半の矢藤治山墳丘墓・宮山墳丘墓の段階では先に確認したとおり、墳丘の各所から特殊器台・特殊壺が出土するものの、その他の供膳具や調理器は出土しない。つまり前章で述べた儀器群のうち1類土器を特殊壺・特殊器台に限定させた形で使用し、2類・3類土器を省略するようになった。このことははからずも飲食儀礼の省略を意味し、象徴化された大型儀器のみを墓域に立て並べることになったのだろう。これは1類土器の「外方配置」の延長あるいは特化と言えるかもしれない。また、さらにこの延長上に囲繞配列が登場すると考えられるが、囲繞配列の出現については吉備系特殊器台から円筒埴輪へのベクトルの中だけで捉えられるほど簡単な問題ではないので、第6章第2節においてあらためて述べたい。

ここでは、宮山墳丘墓、矢藤治山墳丘墓において、すでに弥生後期後葉に成立した「吉備型」の土器配置が終焉を迎え、囲繞配列への動きが胎動していることを確認しておけばよいと思う。なお、両墳丘墓における特殊土器類の配置状況の詳細は不明で、これらが囲繞配列されたかどうかは確かめることができない。

#### 註

371) 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎 1987「宮山墳墓群」『総社市史考古資料編』

近藤義郎 1988『前方後円墳の成立』岩波書店 84～86頁参照

372) 近藤義郎編 1995『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

373) 宇垣匡雅 1992「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』山陽出版社

374) 宇垣匡雅 1997「特殊器台形埴輪の文様と編年」『考古学研究』第43巻第4号

## 第2節 伯耆系特殊土器類

庄内式の後半段階から布留式0～1式併行期の山陰・播磨・摂津において「伯耆系特殊土器」<sup>375)</sup>と呼ばれる特異な土器群が存在する。山陰における弥生終末の墳丘墓や播磨・摂津の最古相の前期古墳の何基かに類例が見られ、移行期の葬送祭祀儀礼に使用された土器と思われる。使用状況が明らかなものが無いため、その土器配置の内容は不明であるが、使用された時期と分布を見るに山陰と畿内を結ぶ重要な位置を占めていると考えられるために、一節を設けて詳述したい。

伯耆系特殊土器の標識資料は**徳楽墳丘墓**<sup>376)</sup>(図版67)から出土している。徳楽墳丘墓とは鳥取県西伯郡大山町に所在する、一辺約18～21mのやや不整な方形を呈す墳丘墓で、墳頂平坦面には敷石があったようである。発掘調査は大正年間と昭和10年代初頭に行われている。昭和の調査は京都大学の小林行雄によって墳頂平坦面の調査が行われたようだが、埋葬施設の確認には至っていないようだ。ただし、ボーリングによって石材を使用した埋葬施設ではないことが確かめられている。これら2回の調査によって多量の土器が出土しており、現在は鳥取県立博物館や京都大学に保管されている。これらの経緯については東森市良・花谷めぐむの報告に詳しいのでここでは詳述しないが、現在把握されている当遺跡出土の土器はすべて東森・花谷報告<sup>377)</sup>に掲載されているので、それらをもとに内容を見ていきたい。なお、当墳丘墓は「徳楽方墳」の名称で知られているが、墳丘や出土土器の特徴から当墳墓を古墳とすることに抵抗があるため、「墳丘墓」と呼称する。

出土した土器は伯耆系特殊土器類といわゆる一般的な山陰系土器、そしてわずかに畿内の布留式土器がある。山陰系土器は広口壺あるいは甕、注口土器、鼓形器台、高杯、低脚杯がある。大型の低脚杯が存在することが注目される。これらは大木式～小谷式古段階の特徴をもつ。布留式土器は直口壺1点、布留型甕1点が出土している。布留1式の特徴を備えている。

伯耆系特殊土器は全形を伺えるものが存在しないが、およそ大型円筒器台の円筒部と思われる破片と壺形土器の口縁部および胴部の破片が存在する。これらは文様の特徴と胎土から二群に分けられている<sup>378)</sup>。A類は頸部の直径が著しく大きく、肩部から頸部を経て口辺部まで緩やかに外反し、やや内傾して立ち上がる口縁部を有する。口縁部外面および頸部から肩部にかけて貝殻縁押圧による斜線文を施し、胴部片では斜線文、横線文がみられるが、多くの個体は円形・半円形・C字形の竹管文は施されない。胎土はにぶい黄褐色～橙褐色系で軟質である。山陰地方各地で検出されている壺棺の主体となっている大型壺と共通しているという。一方、B類は普通かやや細めの頸部を持つ形態にバリエティをもつ壺と円筒器台からなり、貝殻縁押圧による斜線文・綾杉文や櫛描横線文などに円形・半円形・C字形の竹管文を加えた文様を特徴的に施している。胎土は淡褐色系で硬質である<sup>379)</sup>。

徳楽墳丘墓の土器配置はどのようなものであったのだろうか。京都大学の調査の際には墳頂の敷石の下から多量の土器が出土したという。調査範囲は狭いものだったというし、敷石が築造当時の墳頂平坦面上を覆っていたものとすれば、土器は主体部上から出土した可能性は高いと考えられる。いずれにせよ墳頂に多量の土器が遺棄されていたことは間違いない。土器群の構成は通常山陰型土器の組み合わせに伯耆系特殊土器類を加えたものである。伯耆系特殊土器は飾られた円筒器台と壺の組み合わせなので、全体としては象徴化された土器群と供膳具が組み合わさっていると理解すればよいだろう。なお、壺類の底部が遺存していないため穿孔の有無が確認できないのが残念である。

他の墳墓では徳楽墳丘墓ほど多量に類例が知られているものはない。山陰では島根県安来市**宮山Ⅳ号墓**で A・B 類 1 個体ずつが出土している。当墳墓では通常の山陰系土器が多量に出土しており、伯耆系特殊土器類はごく客体的であるといえる。播磨では**丁瓢塚古墳**(図版 68)、**伊和中山 4 号墳**(図版 69)において上すばまりの頸部をもつ特殊壺片が知られている<sup>381)</sup>。丁瓢塚例は C 字形と円形、伊和中山例は円形の竹管文を多様しており、両者とも胴部と頸部の間に突帯を一条めぐらしている。このような突帯を持つ上すばまりの頸部をもつ特殊壺は徳楽墳丘墓出土品のうち関西大学所蔵資料の中に類品が見られる。播磨の 2 例は 1 形式のみであるが、徳楽墳丘墓出土資料と直接的な関連を想起させる土器であり、なんらかの情報の行き来が想定できる。一方、摂津では**西求女塚古墳**<sup>382)</sup>(図版 95)、**処女塚古墳**<sup>383)</sup>(図版 70)において C 字形あるいは円形の竹管文を施す二重口縁壺が出土している。このような二重口縁壺自体は徳楽墳丘墓からは出土していないが、摂津において一般的でないこれらの文様はおそらく播磨の伯耆系特殊土器類の影響を受けたものと思われる。その変容形として捉えておくべきであろう。西求女塚古墳の主体部上からは後段で述べるような山陰系土器の影響が極めて強い土器群が出土している。また、一方で徳楽墳丘墓においてもわずかとは言え布留式土器がみられることは両地域の何らかの交流があったと考えられる。

伯耆系特殊土器のほぼ全容が知れる資料が徳楽墳丘墓に限られている現状ではこれ以上の推察は意味を為さない。ただし、気になる点は吉備系の特殊器台形土器あるいは特殊器台形埴輪が吉備・播磨・大和の有力な古墳に採用されている段階において、播磨・摂津の前期古墳において伯耆系特殊土器類が採用されている点である。特に播磨では丁瓢塚古墳・伊和中山 4 号墳は伯耆系、**権現山 51 号墳**<sup>384)</sup>では吉備系(都月型特殊器台形埴輪)を採用し、一つの地域で両者が別々の古墳に分かれて存在することは、決して同居しない二者だったのかもしれない。このことは畿内の中における各地域と地方との複雑な政治関係に起因していると思われる。とにかく伯耆系特殊土器の問題は資料の増加を待ち、確実な土器配置が明らかな事例を蓄積するほかはない。

## 註

375) 岸本道昭 2000「前方後円墳の多様性―揖保川水系を素材として―」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会研究発表要旨集

376) 倉光清六 1932「古墳発見の伯耆弥生式土器」(上)・(下)『考古学』第 3 巻第 4・7 号

東森市良・花谷めぐむ 1992「徳楽方墳―出土土器を中心として―」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』  
島根大学法文学部考古学研究室

377) 前掲 376 文献 (東森・花谷 1992) 参照

378) 前掲 376 文献 (東森・花谷 1992) 参照

379) A・B 類の胎土の違いについては鳥取博物館蔵資料を実見させていただき確認した。

380) 島根県埋蔵文化財調査センター 2003『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16

381) 丁瓢塚古墳・伊和中山 4 号墳：岸本直文 1988「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』71 巻 6 号 史学研究会

382) 安田 滋ほか 2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課

383) 神戸市教育委員会 1985「史跡 処女塚古墳」『昭和 57 年度神戸市埋蔵文化財年報』

384) 近藤義郎・新納泉ほか 1991『権現山 51 号墳』権現山 51 号墳刊行会



### 第3節 山陰系特殊器台形土器・特殊器台形埴輪

「山陰系特殊器台」は布留式前半併行期に主に出雲で使用された大型の円筒器台であるが、その形態は著しい特徴がある。類例が少ないためそれぞれの様相を確認しておきたい。

**塩津山1号墓**<sup>385)</sup> (島根県安来市、図版 72) は尾根上の高まりを加工した 25×20mほどの長方形墳丘墓であるが、北辺裾の貼石は弓なりにカーブし北東コーナーが突出するように造られている。墳丘墓全体の構造からすれば当墳丘墓は四隅突出型墳丘墓の系統上にあると考えられる。埋葬施設は墳頂に土壇4基(第1～4主体)に器台棺1基(第6主体)・土器棺1基(第5主体)の計6基が確認された。4基の土壇のうち墓壇基底面まで調査されたのは第3主体のみで、割竹形木棺を河原原礫で包み込む「砂礫擲」ともいうべき構造をもっている。副葬品は匏1点のみで他に朱の使用がみとめられた。中心主体部は他より大型の墓壇をもつ第1主体である。主体部上の陥没坑内から山陰系土器が出土し、少なくとも壺6個体、甕3個体、鼓形器台5～7個体、高杯5個体、低脚杯5個体があり、計20個体以上の土器が置かれていたとみられる。山陰型の土器配置に分類できよう。

さて、問題の「山陰型特殊器台」は第6主体部器台棺の棺材として使用されていた。高さ83cm、胴部最大径38cmの大型品で上端は受け口状の垂直に立ち上がる口縁部を持ち、下端にはハの字に開く脚台部を備えている。円筒部は頸部よりやや下がった位置に最大径をもち、下方に行くに従い緩やかにすぼまる形態をもっている。全体として「円筒器台」というべき形態を呈している。調整は外面が縦方向のハケメ、内面は横方向のケズリであるが、よく観察すると螺旋状に施されていることが分かる<sup>386)</sup>。文様は口縁部外面に上下2段にC字形竹管文を異なる向きに列状に施している。また頸部には1条の横線文を中心に綾杉文が施されている。文様構成は伯耆系特殊土器類の影響がみられる。円筒部最大径の位置に縦長長方形のスカシが4方向に穿たれている。外面は赤彩が施されている。以上のような特徴から埴輪的なものではなく弥生時代の特殊器台の形態・製作技法を踏襲しているものと考えられる。この円筒器台の破片が墳丘各所から出土することはなかったため、少なくとも塩津山1号墓においてこれらを立て並べた痕跡はない。しかし、器台の形状からして始めから棺材として製作された可能性は低いであろう。どこか別の墳墓の祭祀に使用するために製作されたものを転用したものかと思われる。

**神原神社古墳**<sup>387)</sup> (島根県大原郡加茂町、図版 71) は約30m弱の方墳で高さは6.9m前後と推定されている。列石・葺石などは確認されていないが周囲に周溝がめぐる。墳丘中央に竪穴式石室1基が検出された。玄武岩質安山岩板石を長手積みし、徐々に持ち送って天井石を乗せる構造で、粘土床に割竹形木棺を設置していたと考えられる。副葬品は三角縁景初三年銘同向式神獸鏡1面、素環頭大刀1本、大刀1本、鉄剣2本、鉄鏃36点のほか鉄製工具・農具類が出土している。土器は主に二ヶ所から出土した。ひとつは墓壇内の石室裏込めの外側に埋納坑が掘られており、その中から壺4個体、甕1個体が坑内に一列に並べ置かれ、さらに土器間の1ヶ所から赤色顔料がまとまって検出された。その範囲は20×30cmほどであり、分析の結果多量のベンガラと少量の朱であるという。この埋納坑は石室が2～3段積み上げられたところで掘られているようなので、遺骸埋葬に関わる儀礼に使用され、それが終了した段階で埋納されたものであろう。

さて、山陰型特殊器台は主体部上から出土している。当古墳の石室には天井石があるため、いわゆる主体部上の陥没坑は存在しないが、天井石の上方、数センチから20cmまでの面で多量の土器片が出土している。

これらは天井石との間に土層が存在していることから、天井石を置き、土を敷いてからその上面に破碎して置かれたものと思われる。さらにその上方に盛土が為されたかどうかについては不明だが、土器片の遺存状況から外表にさらされていたとは思えず、土器片上の盛土は存在したと思われる。土器は石室上面中央部 2.6×2.0mの範囲にまとまっているが、その南北に分布が見られないのは古墳上に建てられていた社殿にかかわる工事のために削平されて失われたと考えられている。したがって、発掘調査で得られた土器が本来の組成の全てを表してはいない可能性が高い。

天井石上面の土器群の器種組成はほとんどが山陰型特殊器台とそれにとまなう割合に頸部が細めの壺の二種で占められる。山陰型特殊器台は全形を伺える1個体を参考にすれば、高さ約 64cm、口径約 24cm、底径約 32.5cm である。受け口状の口縁部をもち、底部は裾広がりには開いている。外面はタテハケあるいははいないナデ調整、内面は縦方向のケズリである。底部は一度倒立させてから、強いヨコナデによって丁寧に調整している<sup>388)</sup>。円筒部には縦長長方形のスカシを2～4段にわたって4～6方向に開けている。文様は4パターンほどみられ、スカシの上下に横線を施すだけのもの、頸部に綾杉文を施すもの、円筒部上方に平行線を充填する連続三角文を施すもの、スカシの間に背中合わせの弧線文を施すもの、などがある。また、口縁部に連続三角文を施すものもある。少なくとも14個体が出土している。

これらに伴う壺は複合口縁を持つ中型品で頸部および肩部に横線文と綾杉文が施されるものがある。また、底部は丸底に近いが焼成前の穿孔が施されている。有文・無文双方合わせて20個体程度が出土している。

他に若干の鼓形器台、高杯、吉備系特殊壺などの破片が出土しているがごくわずかであり、主体部上の土器が特殊器台と底部穿孔壺の組み合わせでほとんどが占められていたことがわかる。象徴化された壺と器台の組み合わせが中心の儀礼であり、供膳具の量は縮小している。また、壺と器台はずっと立て置かれたのではなく使用後に破碎して、石室上に埋納していることから、いわゆる圍繞配列ではなく一時的な使用と捉えられる。ちなみに、器台類を天井石上面に破碎埋納する例は中山大塚古墳でも見られる。

**大成古墳**<sup>389)</sup> (島根県安来市、図版 73) は東西 58m、南北 44m、高さ 7 m 程度の大型方墳である。墳頂部中央に竪穴式石室があり、副葬品として三角縁唐草文帯二神二獣鏡1面、素環頭大刀1本、鉄刀2本、鉄剣2本、小型丸底土器3個体、低脚杯2個体が出土している。石室外の土器の出土位置は①石室上、②墳頂平坦面 C・F 区土器溜、③墳頂平坦面 F 区、④墳丘北斜面である。①主体部上では神原神社古墳に見られたような頸部に綾杉文を施す壺と鼓形器台、低脚杯のセットが何組か置かれていたようである。山陰系特殊器台は⑤の斜面で小片が出土したのみであるが、想定される全形は塩津山1号墓出土の特殊器台に似たものと考えられ、下すばまりの円筒部に脚台が付き、口縁部には C 字形の竹管文が施されている。使用状況は不明であるが、主体部上にこれらの破片が見られないことは注意しておく必要がある。

**造山1号墳**<sup>390)</sup> (島根県安来市、図版 74) は大成古墳と同じく荒島墳墓群中の前期大型方墳で、墳丘規模は一辺約 60m、高さ約 10mを測る。墳頂に2基の竪穴式石室が確認されている。中心の第1石室からは倣製方格矩鏡1面、倣製三角縁三神三獣鏡1面、ガラス管玉2点、大刀残欠が出土、第2石室からは倣製方格矩鏡1面、碧玉製紡錘車1点、ガラス製管玉、鉄剣残欠、刀子残欠が出土している。山陰型特殊器台は墳丘各所から数個体分出土しているという。受け口状の口縁部をもち、裾広がり円筒部を有する。口径は 35～45cm ほどもあり、神原神社古墳出土資料よりもはるかに大きく、塩津山1号墓出土例とほぼ同程度か、やや大きいものと思われる。頸部のすばまりが小さく、型式学的には退化傾向にあるといえる。文様は頸部に綾

杉文を施しており、口縁部に短い斜線文を施す例もある。円筒部外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリである。脚端部の破片の存非は不明だが、神原神社例と同じく裾広がり呈すものと思われる。

**温江丸山古墳**<sup>391)</sup> (京都府与謝郡加悦町、図版 76) は径 65m、高さ 8.5m の楕円形墳で、墳頂に箱形石棺を内蔵した竪穴式石室 1 基が確認されている。墳丘が大きく削平されたために、埋葬施設も破壊を被った。副葬品は削平された崖下から採取された三角縁神獣鏡片 1 点、方格規矩変形獣文鏡 1 面、鉄刀片 1 点がある。そして、当古墳のすぐ東側に隣接する**谷垣遺跡**で合計 3 基の埴輪棺が発見されており、これらに使用された埴輪がいわゆる「山陰型特殊器台形埴輪」と呼ばれているものであった。3 基の埴輪棺で合計 10 個体が使用されていたという。

谷垣遺跡出土資料は裾広がり円筒部をもち、縦長長方形のスカシを開け、口縁部外面に竹管文、頸部に綾杉文を施すこと、あるいは内外面の調整技法はこれまでの事例と変わらないが、異なる点として高さが約 1 m 弱もあり大型品であること、口縁部が受け口状ではなく二重口縁状に外反すること、円筒部に 3 条の突帯を有することが挙げられる。これらのことからより埴輪に近い特徴を有していると言える。山陰系特殊器台の流れを組みつつそれまでになかった突帯を付加することで、畿内では既に成立していたであろう円筒埴輪の影響を受けていたことがわかる。これら谷垣遺跡の円筒器台棺は、もともと温江丸山古墳に樹立されていたものを転用したと考えられている。ただし、そのことを確認するための発掘調査は行われておらず、使用状況は不明である。

## 小結

以上見てきた「山陰型特殊器台」の 5 例は大枠では同種の器台群と思われるが、若干異なる要素も見受けられる。大きく異なるのは脚端部の形状で塩津山 1 号墓例と大成例が脚台部を呈すのに対して、他の三例は裾広がりである。前 2 者は口縁部が直立し、C 字形の竹管文を施すことで共通するため、型式学的に古く位置づけられ、伯耆系特殊土器類との関連が考えられる。また、5 例のうち神原神社例のみは小形品でそのため製作技術も他とは異なっているようだ。報文中で「円筒形土器」として呼称している通り、通常の土器に近い位置づけが正しいのかもしれない。実見した限りでは「埴輪」や「特殊器台」というよりも「器台形土器」の名称の方がしっくりいく資料である。また、谷垣遺跡出土例は大型であることと突帯が付加されたことで、反対に「埴輪」という印象が強い資料であり、「山陰型特殊器台形埴輪」の呼称がふさわしいといえる。このように「山陰型特殊器台」とされたものの中にはある程度のバラエティがあることは既に指摘されているが<sup>392)</sup>、私見ではこれらを他と区別してまとめるだけの共通した要素は存在すると考え、「山陰型特殊器台形土器・埴輪」として総称しておくのが良いと考えている。

さて、これらの土器配置については本来の使用状況が判明しているのが神原神社古墳のみであるので、確定的なことは述べることができない。しかし、神原神社例では既に器台に伴う壺に焼成前の穿孔が施されており、象徴化が進行していたことが伺われる。これらは埋葬儀礼に伴って一時的に立て置かれたもので、使用後に石室上に破碎して埋納している。この段階では圍繞配列は行われていない。ところが、大成古墳・造山 1 号墳では墳丘斜面から破片が出土し、石室上からは検出されなかった。この段階ではおそらく圍繞配列に近い配置状況ではなかっただろうか。このように考えると山陰型特殊器台の使用方法の変遷は吉備系特殊器台と変わるところはなかったと思われる。両者の大きな違いは、吉備系が大和の超大型前方後円墳におい

て採用されたのに対し、山陰系が日本海側に限定された分布を示すことと、である。これは瀬戸内地方の影響を受けて、山陰において首長墓における葬送祭祀儀礼に大型器台を導入するにあたって、山陰独自の様式を保持するために新たに山陰系の大型円筒器台を創出したものと思われる。それでは、これらの円筒器台の起源がどこにあるかと言えば、それは徳楽墳丘墓<sup>393)</sup>出土の伯耆系特殊土器類に求めるのが妥当ではないだろうか。徳楽墳丘墓出土資料の大型円筒器台は全形が伺えないものの、縦長長方形スカシが存在し、山陰系特殊器台にみられる C 字形竹管文や綾杉文といった要素も伯耆系特殊土器類の主要な文様であることは前述したとおりである。現在、両者を型式学的に埋める資料は未発見であるが、ここでは可能性としてその系譜関係について肯定的に言及しておく。

#### 註

- 385) 勝瀬利栄・朽津信明 1997『塩津山古墳群』島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター
- 386) 八雲立つ風土記の丘資料館にて資料を実見させていただいた。
- 387) 前島己基・松本岩雄 1976「島根県神原神社古墳の土器」『考古学雑誌』第 62 巻第 3 号  
加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』
- 388) 島根県埋蔵文化財調査センター・島根県立博物館にて資料を実見させていただいた。
- 389) 島根大学考古学研究室・安来市教育委員会 1999「大成古墳第 4・5 次発掘調査報告書」『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書第 27 集
- 390) 造山 1 号墳：出雲考古学研究会 1985『古代の出雲を考える 4 荒島墳墓群』
- 391) 温江丸山古墳（谷垣遺跡）：佐藤晃一 1992『加悦町の古墳』加悦町文化財調査報告第 16 集
- 392) 赤澤秀則 1999「出雲地方前期古墳の系譜と階層性」『田中義昭先生退官記念文集 地域にねざして』田中義昭先生退官記念事業会  
東森市良・大谷晃二 1999「山陰の円筒形土器について」『島根考古学会誌』第 16 集 島根考古学会
- 393) 東森市良・花谷めぐむ 1992「徳楽方墳—出土土器を中心として—」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』  
島根大学法文学部考古学研究室

## 第4節 畿内系加飾壺

畿内系加飾壺とは櫛描直線文・櫛描波状文・円形浮文などで装飾を施す壺のことで、とくに「加飾壺」と呼ばれてきた。この土器は古くからその系譜をめぐる議論がある。田中琢が「庄内式」を提唱したとき、その標識資料としてあげた庄内遺跡出土土器の中に「加飾壺」は存在し、田中は庄内式の一形式としたが<sup>394)</sup>、その後これを東海系<sup>395)</sup>もしくは東海地方の影響をうけて畿内で成立した<sup>396)</sup>という意見が相次いだ。しかし、筆者は田中や関川尚功<sup>397)</sup>と同じくこれを畿内第五様式の系譜上にある、れっきとした畿内系の土器と考えている。集落遺跡の報告書をあたってみると、破片資料が大多数を占めるが、大和・河内・摂津・播磨などの畿内地域に集中して分布する。その加飾性の強さゆえ、たとえ小片でも報告書に実測される可能性が高いので、その分布の偏在性はかなり実態に近いものと思われる。

### 註

394) 田中 琢 1965「布留式以前」『考古学研究』第20巻第4号

395) 置田雅昭 1974「大和における古式土師器の実体」『古代文化』第26巻第2号

赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7

396) 小嶋芳孝 1982「装飾壺と初期古墳」『考古学と古代史』同志社考古学シリーズ

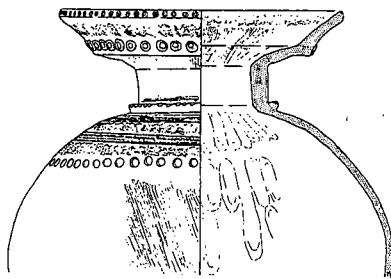
397) 石野博信・関川尚功 1976『纏向』榎原考古学研究所編

### 畿内系加飾壺の特徴

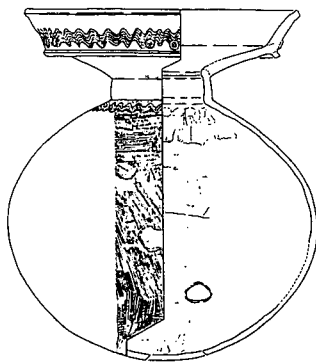
ここで畿内系加飾壺の特徴を述べておこう(図5)。まず、形態であるが、口縁部は筒形の頸部から外方に広がり端部を拡張して面取りするものと、二重口縁を呈すものがある。前者はかつて筆者が「有段口縁壺」<sup>398)</sup>と呼称したもので、たいていは細い筒形の頸部をもち、頸部と口辺部の境は明瞭に屈曲する。そして、口縁部の端部に粘土帯を付加して上か下あるいは上下に端部を拡張して文様を施文するスペースを作り出している。その形態的特徴から「有段口縁」という名称はふさわしくなく、今ここで撤回したい。ではどのような名称がふさわしいのであろうか。「拡張口縁」という名称も考えられるが、それは本来、二重口縁のような大きく発達した口縁部にこそふさわしいだろう。ここでは二重口縁やその他の複合口縁との違いを明瞭にするために「狭帯口縁」という名称を用いたい。広義の複合口縁壺はいずれも装飾的な外観を作り出すために口縁部を拡張するのがその意図と思われ、その最たるものが二重口縁であろう。「狭帯口縁」も文様帯を確保するための措置として口縁部を上下に拡張したものだが<sup>399)</sup>、その拡張の程度は他の複合口縁に比較してかなり狭いものである。そのような意味で「狭帯口縁」という名称を使用したい。

畿内系加飾壺のうち狭帯口縁を呈するものは、口縁部への粘土の付加の仕方に次の3種がある。すなわちA：上方に短く立ち上がらせるもの、B：上下に拡張するもの、C：下方に粘土を垂下させるように付加し外面に面を確保するもの、である。A形式は技法的には二重口縁壺と同じ方法であるが、明らかに立ち上がり短い一群があり、二重口縁壺との識別は比較的容易なものが多い。B形式については口縁端部を面取りするためにわずかに上下に拡張するものから、拡張部が幅数センチに及ぶ板状を呈するものまでであるが、類例は少ない(園部黒田古墳、加美14号墓)。C形式については広義の垂下口縁という意味で定義している。本

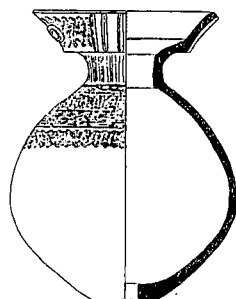
二重口縁



大阪 美園

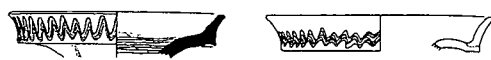


福岡 博多 62 次



長野 中山 36 号

櫛描波状文のみ施す例



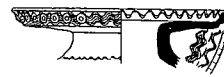
大阪 東奈良

兵庫 播磨長越

※博多遺跡例のみ 1 / 8 他は 1 / 6

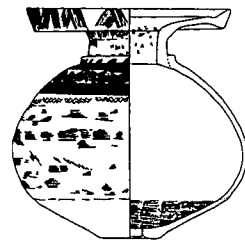
狭帯口縁

A 形式



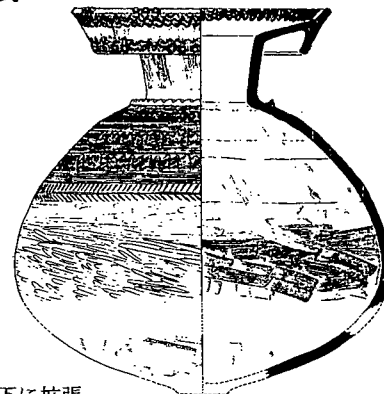
奈良 纏向

上方に短く立ち上げる



千葉 白井南

B 形式



上下に拡張

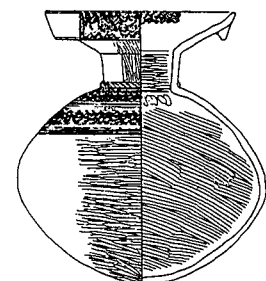
京都 園部黒田

C 形式

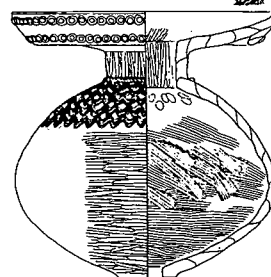


奈良 纏向

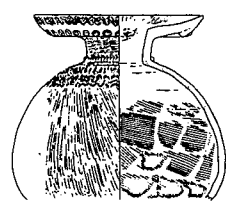
①いわゆる「垂下」



岐阜 四郷

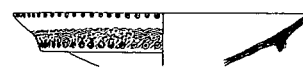


愛知 西上免



長野 弘法山

②口縁に沿って付加



奈良 纏向

③下方に僅かに付加



奈良 布留 (山口池地点)

図 5 「畿内系加飾壺」の形式分類

来の垂下口縁のように、実際に大きく垂れ下がったように粘土帯を付加し断面が逆三角形を呈する資料もあるが、口辺部外面に沿うように付加させるものや（西上免S Z 01、弘法山古墳）、口縁端部から数センチ頸部より離して付加し、見かけ上、二重口縁壺に似せているものがある（布留遺跡山口池地点Ⅲ層、纏向遺跡東田南溝南部上層）。このような資料のうち粘土帯が付加される段部より上方が大きく外反するようであれば二重口縁壺の範疇で捉えるべきであろう。

胴部については長胴化傾向にあるものではなく、球胴よりはむしろ扁平な印象をもつ胴部が多い。東海系のパレススタイル壺のような著しい下膨れの胴部は少なく、最大径を中位にもつものが主流を占めている。底部は小さなものが多く、不安定な尖底や丸底を呈するものが多い。また、墳墓出土資料では多くに焼成後の穿孔が施されている。

文様は畿内系加飾壺を規定する重要な要素である。典型的な三要素として円形浮文・櫛描波状文・櫛描横線文が挙げることができる。円形浮文は小さな円盤状の粘土を貼り付け、その中に円形竹管文を押圧し、見かけ上同心円文を作り出すものである。時期が降ると粘土の貼り付けを省略し、直接、器面に円形竹管文のみを施す例が増える。この3種の文様の組み合わせと施文位置は個体によってかなりのバリエティがあるが、およその傾向はある。口縁部外面には櫛描波状文および円形浮文の両方か、どちらかが施される。口縁部に横線文を施す例がわずかにあるが、一般的な傾向とはいえない。二重口縁の場合、円形浮文は口縁部の下端に施される例が多い。また、口縁部に櫛描波状文のみを施文する例は播磨・摂津地域に多い（東奈良遺跡、播磨長越遺跡）といえる。口縁部の内面に文様が施される場合は櫛描波状文のみであることがほとんどである。肩部の文様帯は櫛描波状文と櫛描直線文を2段ないし3段づつ交互に配置するのが基本パターンであるが、まれに円形浮文を貼り付ける場合もある。また、肩部文様帯の最下段に斜状列点文や綾杉文を施す例がある（黒田古墳、芝ヶ原古墳）、これらは南丹波・山城・近江などの地域の特色といえる。このように文様においては若干の地域性が伺えるものの、以上に述べてきた特徴を有する一群の壺形土器は、総じて他の装飾壺から区別できる特徴を有しているため、これを「**畿内系加飾壺**」と定義する<sup>400)</sup>。「畿内系」を冠するのは前述したとおり、集落遺跡出土資料が大和・河内・摂津・播磨などの地域に集中するとみられることがその根拠である。

#### 註

398) 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本における古墳時代の開始」『駿台史学』第104号 駿台史学会

399) 文様帯を作り出すための措置と言えるのは、この種の口縁部をもつ壺に無文のものはごく少数であることからわかる。そして、土師器が全般的に無文化する布留式併行期にはこれら狭帯口縁壺は姿を消すことから、このことは支持されるだろう

400) なお、二重口縁壺の口縁に円形竹管文のみを施した退化形式のものが奈良県矢部遺跡溝304、岐阜県象鼻山1号墳、福島県堂ヶ作山古墳など、布留1式併行期以降にみられる。本書ではそのような例は本来の加飾壺とは区別し、以下の分析からは除外する。

#### 加飾壺出土墳墓の検討

加飾壺が出土した墳墓を集成し、各要素を表2のようにまとめた。筆者個人による集成なのでかなりの遺漏が想定されることは否めないが、それでも32例が集まったのでおよその傾向は導き出せられると思われる。

分布範囲は北部九州から関東地方に至る非常に広範囲に及んでいる。このように、墳墓の祭祀において1

表2 「畿内系加飾壺」出土墳墓要素表

墳墓名	所在	墳形	全長	埋葬施設構造	土器配置
	副葬品				
西一本杉ST008	佐賀県東脊振村	不整円	約15m	箱形石棺	B3:加飾壺1
	鈍1				
博多62次周溝墓	福岡県福岡市	長方	16.4m	木棺直葬	B3:加飾壺1・二重口縁壺・埴など
	鉄剣1				
下原	大分県安岐町	前方後円	約23m	礫櫛・箱形木棺	A1:加飾壺・高杯 B3:手焙・壺など
唐子台2丘	愛媛県今治市	?	?	箱形石棺	B3:加飾壺
雉之尾1号	愛媛県今治市	前方後方	30.5m	木棺直葬	
	重圈文鏡1・大刀2・鉄剣1・鉄鏃13・鈍1				
中出勝負峠8号	広島県千代田町	円	約15m	箱形木棺直葬	B3:加飾壺2
	内行花文昭明鏡1・碧玉管玉5・ガラス小玉3・鉄槍2・鉄鏃12・袋状鉄斧1・鈍1				
萩原1号	徳島県鳴門市	前方後円	推定26.5m	竪穴式石櫛	A1:細頸壺など A2:大型壺 B3:加飾壺など
	画文帯神獣鏡1・管玉4・鉄器片				
加美14号	大阪市	前方後方	約16m	—	B3:加飾壺・二重壺・直壺・手焙・甕
ホケノ山	奈良県桜井市	前方後円	80m	石囲木櫛・舟形木棺	D2:加飾壺数個体・埴3～
	画文帯神獣鏡・内行花文鏡・素環頭大刀・他刀剣類・銅鏃・鉄鏃・鈍・鏝など				
大王山9号地点	奈良県榛原町	長方	17m	木棺直葬	D2:加飾壺2
	鉄鏃1				
内場山下層	兵庫県西紀町	方	20m	割竹形木棺直葬	A1:加飾壺・台付短頸壺など
	素環頭大刀1・鉄鏃17・袋状鉄斧1・鈍1・針1・不明鉄器1				
赤坂今井	京都府峰山町	方	39m	舟形木棺直葬	A1:加飾壺・高杯・器台
寺ノ段1号	京都府福知山市	方	11m	—	B3:加飾壺
砂原山	京都府加茂町	円	25m	土壇	D2?:加飾壺1・台付長頸壺1
黒田	京都府園部町	前方後円	52m	礫櫛・木棺	主体部上盗掘坑:加飾壺3
	双頭龍文鏡1・碧玉製管玉6・鉄鏃18・不明鉄製品・不明木製品・漆塗製品				
芝ヶ原12号墓	京都府城陽市	前方後方?	21+αm	箱形木棺直葬	A1:加飾壺・高杯
	四獣形鏡1・銅釧2・勾玉8・管玉187・ガラス小玉1276・鈍1・不明鉄器7				
皇子山	滋賀県大津市	円	22.8m	土壇	B3:加飾壺数個体・高杯若干
小松	滋賀県高月町	前方後方	60m	—	A3:装飾壺5・手焙1・高杯20前後など
	内行花文鏡1・方格規矩鏡1・銅鏃4・鉄鏃13～・刀子・ヤス				
小菅波4号	石川県加賀市	前方後方	16.6m	箱形木棺直葬	A1:装飾壺 B3:加飾壺・装飾壺
	ガラス小玉5・鈍1・鉄片1				
宇気塚域1号	石川県宇ノ気町	前方後方	約19m	木棺直葬	B3:加飾壺・壺・直壺・高杯など
	ガラス小玉1・鉄鏃1・鈍2				
東町田SZ10	愛知県大垣市	前方後方	約16m	—	B3:加飾壺・パレス壺・高杯・甕など
西上免	愛知県西尾市	前方後方	40.5m	—	B3:加飾壺・パレス壺・高杯・甕など
弘法山	長野県松本市	前方後方	66m	竪穴式石櫛	A1:加飾壺・パレス文壺・手焙・高杯など
	斜縁四獣鏡1・ガラス小玉738・鉄剣3・銅鏃1・鉄鏃24・鉄斧1・鈍1				
中山36号	長野県松本市	円	20m	粘土床	D1:加飾壺1
	斜縁六獣鏡1・鉄鏃?				
川島8号	千葉県富津市	方	19.85m	—	B3:加飾二重壺・二重壺・直壺
山王辺田2号	千葉県袖ヶ浦市	前方後方	36m	—	B3:加飾壺・二重壺・手焙など
神門5号	千葉県市原市	前方後円	42.5m	木棺直葬	B3:加飾壺・装飾壺・高杯など
	鉄剣1・鉄鏃2・ガラス小玉6				
神門4号	千葉県市原市	前方後円	33m	木棺直葬	A1:加飾壺1・壺2・高杯2・小型器台1
	棺内:鉄剣1・鉄鏃41・管玉31・ガラス小玉394 棺外:鉄槍1 墓埴埋土中:鈍1・破碎玉類				
神門3号	千葉県市原市	前方後円	47.5m	木棺直葬	A1:手焙 A2:加飾壺・二重壺・高杯など
	棺内:管玉10・ガラス小玉103・鉄剣1・鉄槍1・鉄鏃2・鈍1 棺外:管玉2				
星久喜2号	千葉市	方	11.6m	—	B3:加飾壺2・甕2
臼井南第1	千葉県佐倉市	方	15.2m	—	B3:加飾壺2
下道添13号	埼玉県下道添	方	21.5m	—	B3:加飾二重壺・直壺・高杯・小器台など



種の儀器がこれほど広域で使用されたことは、弥生時代後期までにはありえない事であった。また、分布をよく見ると、吉備・山陰には及んでいないことが分かる。これら伝統的な儀器を保持している地域では加飾壺を受け入れない土壌があったということは拙稿ですでに指摘した<sup>402)</sup>。

墳形は前方後円形・前方後方形・円形・方形と様々であるが、弥生墓制の伝統上にある墳墓が多いが、これらの墳墓の年代が降ってもそのほとんどが布留0式併行期の中でとらえられるので、当然かもしれない。ただし、小規模な墳墓が目立つことは注目できよう。32例中、全長が50m以上の墳墓は4基、30m以上50m未満が7基、30m未満が20基、不明1基という内訳である。墳墓の大小を問わずこれらの土器が使用されたと考えられる。

埋葬施設については竪穴式石槨・礫槨・木棺直葬などがあり、本格的な板割り石を小口積みした長大型竪穴式石室は皆無である。また、副葬品については豊富な例も存在するが、鏡については岡村秀典のいう「漢鏡7期」<sup>403)</sup>までの中国鏡が多く、三角縁神獣鏡を伴うものが無いことは注意する必要があるだろう。このことは時期的に畿内系加飾壺が先行することもあると思われるが、竪穴式石室の問題も含めて、葬送祭祀の系統の違いを考慮する必要があるかもしれない。

これらの加飾壺の配置状況も様々であるが、主体部から出土するものと、周溝から出土するもの(B3)がある。主体部から出土するものはいわゆる墓壙上(A1)から出土するものと、墓壙内棺外(D2)に置かれたとされているものがある。棺外の場合は棺上などが想定されている(大王山9号地点)。このことから使用状況がまちまちであるということも言えようが、主体部が調査されている22例中、主体部から出土する事例は10例に達するので、主体部付近に配置されることの多い器種と言えるだろう。また、手焙形土器を伴うものが6例あり、注目される。

さて、これら畿内系加飾壺を使用した葬送祭祀とはどのようなものであったのだろう。まず畿内系加飾壺自身が、吉備における特殊土器類と異なり葬送祭祀のためだけに作られた器種ではないことを確認しておかなければならない。出土量は確実に集落遺跡に多いので、祭祀的な土器であったにせよ割合に身近な器として普段から使用されていたものであった。もちろん、墳墓から出土するものの中には葬送祭祀用に製作されたものもあったと思われるが、何か特別な機能を付している訳ではないだろう。ここでは内容物の供献に使用された祭祀土器という位置づけをしておきたい。ところで、畿内系加飾壺の墳墓出土資料の多くに焼成後に底部や胴下半部を穿孔した事例があるが、これは次代の無文の二重口縁壺のほとんどが焼成前底部穿孔が施されることと対称的である。畿内系加飾壺の段階では実際に内容物を入れて儀礼を行い、使用後に穿孔して墓に埋置・遺棄したものと思われる。内容物の存在を推定する根拠は、もともと集落で穿孔されずに使用されていた土器だからである。ただし、次代の焼成前穿孔に移行する萌芽はすでにみられる。それは西上免古墳出土例では、図上では焼成前穿孔と見まがうほど、底部中央に極めて丁寧に焼成後穿孔を施しており、廃棄直前に穿孔したとは考えられないことである。おそらく製作後、使用する前に丁寧に穿孔し、仮器化された状態で儀礼に使用されたのだろう。象徴化された壺としての機能が既に生まれていたものとする。

加飾壺は庄内式併行期から布留式古段階にいたる短い期間に、なぜか広範囲で使用された。その使用状況は一様ではないが、葬送祭祀儀礼における壺の役割が象徴化される過渡期の様相を表しているといえよう。また、西条52号墓・ホケノ山古墳例は後段で述べるとおり、圍繞配列の初源と関わりがあると考えられるが、その他の例は圍繞配列されてないことも重要である。これらの加飾壺は単独で出土することもあるが、東日

本では手焙形土器・高杯・小型器台などとともにセットをなし、主体部上に置かれる場合もある。このことは、西日本の弥生墓制で盛んに行われた主体部上に供膳具を置く土器配置が形を変えて東日本に伝播する際に、畿内系加飾壺を使用した儀礼がその媒介役になったことを示している。この問題は東日本の出現期古墳の起源に深く関わると考えられるため、第5章第2節で改めて触れる。

#### 註

- 401) 佐賀県教育委員会 1983「西一本杉遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集  
博多遺跡群62次調査方形周溝墓：福岡市教育委員会 1995『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集  
玉永光洋・小林昭彦 1988『安岐城跡・下原古墳』大分県文化財調査報告第76集 大分県教育委員会  
今治市教育委員会 1974『唐子台墳墓群』  
八木武弘 1988「雉之尾1号墳」『今治郷土史』考古資料編  
中出勝負峠8号：佐々木直彦編 1986『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』（財）広島県埋蔵文化財調査センター  
西条古墳群調査団 1964『西条古墳群調査略報』  
加美14号墓：大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会 1984『加美遺跡現地説明会資料』  
樞原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社  
榛原町教育委員会・樞原考古学研究所 1977『大王山遺跡』  
兵庫県教育委員会 1993『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告書第126冊  
岡林峰夫・石崎善久ほか 2001『赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要報告』  
寺ノ段1号：福知山市教育委員会 1987『駅南地区発掘調査概要—寺ノ段古墳群、広峯古墳群—』  
加茂町教育委員会 1983「砂原山古墳試掘調査速報」『京都考古』28  
園部町教育委員会 1991「園部黒田古墳」『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』  
城陽市教育委員会 1987『芝ヶ原古墳』  
林紀昭・山崎秀二 1974『皇子山古墳群』大津市教育委員会  
小松古墳：高月町教育委員会 2001『小保利古墳群第1次確認調査報告』  
小菅波遺跡発掘調査団 1978『小菅波遺跡発掘調査ニュース』  
石川県教育委員会 1973『河北郡宇の気町塚越遺跡』  
東町田SZ10：鈴木 元 1996「東町田遺跡第6次調査」『大垣市埋蔵文化財調査概要』平成6年度  
赤塚次郎 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書73  
斉藤忠ほか 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会  
直井雅尚ほか 1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会  
原嘉藤・小松虔 1972「長野県松本市中山第36号古墳（仁能田山古墳）調査報告—上方作銘三角縁獣帯鏡の発見」『信濃』第24巻  
第4号  
（財）君津郡市文化財センター 1991『川島遺跡発掘調査報告書』  
酒巻忠志ほか 1999「山王辺田遺跡群」『袖ヶ浦市史・資料編1』  
田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望—神門5号墳の調査と関連して—」『古代』第77号  
田中新史 1976「神門4号墳の調査」『上総国分寺台調査報告』上総国分寺台遺跡調査団

田中新史 1977「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号

(財)市原市文化財センター 1988「神門3号墳」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』

星久喜2号:千葉市教育委員会 1984『千葉市文化財調査報告書』第8集

伊札正雄・熊野正也編 1975『臼井南』佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987『下道添』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第67集

402) 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号

403) 岡村秀典 1990「卑弥呼の鏡」都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』木耳社

岡村秀典 1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録—』

出雲考古学会

## 第5章 前期古墳の土器配置

本章では前期古墳の土器配置について述べるが、囲繞配列についてはその性質上、他の土器配置と区別されるので、次章にて詳述することにする。ここで扱うのは主に主体部上の土器群であるが、主体部上以外の特定場所に意図的に配置している事例なども採り挙げることにする。

### 第1節 西日本における前期古墳の土器配置

西日本の前期古墳の土器配置は大きく二つに分けられるだろう。それは弥生時代の在地の墳墓の伝統上に行われているものと、畿内で成立した大型古墳で行われた土器配置の系譜上にあるものである。両者の違いは器種組成に主に現れるが、後者は山陰型土器配置にその起源が求められると考えられる。順に見ていくことにしよう。

#### 各地の弥生墓制の延長にある土器配置

西日本の中でも中国地方および近畿北部などにおいては在地の弥生墓制の系譜をひく墳墓が、古墳時代前期になっても尾根上に造られているところが多く、そうした墳墓では小規模ながら主体部上土器配置を行っている。岡山県御津郡御津町みそのお墳墓群<sup>404)</sup> (図版 17～20)、京都府福知山市広峯古墳群<sup>405)</sup> (図版 86) などがそれに該当する。また、これらの尾根上に小円墳あるいは方墳をつくる造墓活動は大和の宇陀地域でも庄内～布留式併行期にかけて行われ、それらの主体部あるいは周溝から出土する場合がある。主体部から土器が出土する例は、奈良県宇陀郡榛原町キトラ墳墓群<sup>406)</sup> (図版 87)、榛原町大王山9号地点墳丘墓<sup>407)</sup> (図版 88)、宇陀郡菟田野町見田・大沢古墳群<sup>408)</sup> (図版 89)、榛原町野山墳墓群丸尾支群<sup>409)</sup> (図版 90)、菟田野町胎谷墳墓群<sup>410)</sup> (図版 91) などで見られる。主体部から出土する器種は壺が多く、主体部上よりも墓壙内からの出土が多い。丹波をはじめとする地域の後期弥生墳墓文化の影響を受けていると考えられるが、壺を主体部内に入れる行為は独自なものかもしれない。他には高杯や小型丸底土器、小型器台などが周溝から出土する。これらを総称して「宇陀型土器配置」として定義しておこう。

山陰では弥生時代以来の主体部上土器配置を前期古墳でも連綿と行っていることは既に述べた。具体的な事例としては、松本1号墳<sup>411)</sup> (図版 93)、大成古墳<sup>412)</sup> (図版 73)、造山3号墳<sup>413)</sup> (図版 75)、上野1号墳<sup>414)</sup> (図版 92) などが挙げられる。特に上野1号墳は第Ⅱ期の円筒埴輪<sup>415)</sup> が伴う前期後半の古墳であるが、小型壺・鼓形器台・高杯に標石が伴っており、驚くべきことに弥生時代の「山陰型土器配置」がこの時期まで変わることなく行われていたことがわかる。山陰型土器配置は後述するとおり、畿内型の大型古墳の主体部上土器配置にも影響を与えていたと考えられ、背後にある祭祀・信仰が大きな影響力を持っていたことが想定できる。

## 註

- 404) 椿真治編 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87 岡山県教育委員会
- 405) 福知山市教育委員会 1987『駅南地区発掘調査概要 ―寺ノ段古墳群、広峯古墳群―』
- 406) キトラ墳墓：前園実知雄・伊藤勇輔 1974「奈良県榛原町の古墳時代初頭の墳墓」『古代学研究』第 71 号
- 407) 榛原町教育委員会・橿原考古学研究所 1977『大王山遺跡』
- 408) 橿原考古学研究所 1982『見田・大沢古墳群』
- 409) 橿原考古学研究所 1989『野山遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 59 冊
- 410) 亀田 博 1982「古市場胎谷古墳」『見田・大沢古墳群』橿原考古学研究所
- 411) 島根県教育委員会 1963『松本古墳調査報告』
- 412) 島根大学考古学研究室・安来市教育委員会 1999「大成古墳第 4・5 次発掘調査報告書」『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書第 27 集
- 413) 山本 清 1967『造山 3 号墳発掘調査報告』
- 414) 林健亮・原田敏照 2001『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』島根県教育委員会
- 415) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 4 号

## 畿内型前期古墳の土器配置

ここでいう畿内型前期古墳とは大和盆地東南部で成立したと考えられる、大型の前方後円墳・前方後方墳を指したもので、典型例は外表施設として段築・葺石・埴輪などを備え、埋葬施設には長大型の竪穴式石室あるいは粘土槨を構築し、副葬品は中国鏡をはじめとする豊富な装身具・石製宝器類・鉄製武器・鉄製農工具などをおさめるものである。狭義の古墳と言っても良いだろう。これらの中にも供膳具を配置する古墳が知られているが、それは全体の中から言えばごくわずかである。それは弥生墳丘墓に比べて格段に盗掘される割合の多い大型古墳では主体部上が攪乱されてしまう場合が多いことが理由として挙げられる。また、長いこと埴輪や副葬品研究が主座を占めてきたために、早い時期の調査では土器については十分な注意が払われなかった可能性もあろう。また、墳丘が大型なために主体部以外の場所に配置されている場合は、その発見が困難であることも類例が少ない要因であろう。以下に数少ない好例を挙げていきたい。なお、奈良県天理市中山大塚古墳も主体部上土器配置があるが、それは大型の円筒器台であり第 6 章第 2 節で述べるのでここでは触れない。

まず布留式の古相（布留 0～1 式）併行期の例として西求女塚古墳・東殿塚古墳・双水柴山 2 号墳を挙げる。

**西求女塚古墳**<sup>416)</sup>（兵庫県神戸市、図版 95）は全長推定 98m、後方部辺 52m、高さは推定で 8.5～9 m 前後の前方後方墳である。1596 年の「伏見地震」によって古墳の基盤層が地すべりをおこし、古墳の一部が崩されている。後方部墳頂の竪穴式石室も大きく破壊を受け、旧状を留めていなかった。しかし、慎重な調査により、安山岩・玄武岩の板石を小口積みし短辺の片側に副室を備えた長大型の竪穴式石室が推定されている。副葬品は三角縁神獣鏡 7 面、浮彫式獣帯鏡 2 面、画文帯環状乳神獣鏡 2 面、画像鏡 1 面のほか豊富な鉄製武器類、鉄製工具・漁具が出土している。土器は後方部墳頂から出土したものと、墳丘各所の斜面および裾から出土したものがある。後方部墳頂の土器は「墳頂部の陥没した墳丘の落ち込み上層から出土したこと

から、石室中央上の墳丘上面近くにあった」(報告書 361 頁)と考えられている。これらの土器の器種組成は、竹管文複合口縁壺 2 個体以上、直口壺 3 個体以上、有稜小型丸底埴 20 個体前後、山陰系鼓形器台および小型鼓形器台が多数、低脚杯 4 個体以上、高杯 2 個体以上、円筒型土器 1 個体以上、などである。注目されるのは山陰系土器の多さと、小型丸底埴が山陰系土器の影響をうけて稜をもっていること、また、それらが焼成前に底部穿孔されていることであろう。竹管文の壺は墳丘各所からも出土しているが、これらは第 4 章第 3 節で述べたとおり播磨の伯耆系特殊土器類の影響を受けたものと思われる。多量の供膳具があるにもかかわらず、それらが仮器として製作されていることはどのように理解すればよいのだろうか。このことは第 7 章で考察する。

**東殿塚古墳**<sup>417)</sup> (奈良県天理市、図版 96) は 250×90m の大規模な長方形区画の上に、全長 175m の形態が判然としない墳丘下段を築き、さらにその上に全長 139m の前方後円形の墳丘上段を築く特異な墳丘をもっている。長方形区画の外側には一部掘割が存在し、墳丘斜面には葺石が葺かれている。埋葬施設は明らかにされていないが、後円部墳頂には盗掘坑と思われる大きな凹みが存在し板石が散乱することから、竪穴式石室の存在が予想される。前方部西側裾に設けられた調査区において、下段墳丘裾列石よりさらに外側に張り出す突出部が発掘され、その上面から埴輪および土器の集中区が発見された。埴輪は都月型文様の退化したものを施す、鰭付の器台形埴輪を中心にして、背の低い朝顔形埴輪や鰭付楕円筒埴輪など 15 個体前後を扇形に配置してある。そして、その周辺には埴輪配置に伴うような位置で伊勢型二重口縁壺 4 個体、小型丸底鉢 11 個体、小型鼓形器台 2 個体以上、柱状脚高杯 2 個体、布留型甕 4 個体、近江系受口甕 4 個体、近江系小型鉢 4 個体が出土している。胎土分析から近江系土器は全て搬入品で、鼓形器台のうちの 1 個体も因幡からの搬入品であることが指摘されている。また、東海西部の廻間様式の影響を受けた土器が 1 点も無いことが注目される。穿孔は全て焼成後で伊勢型二重口縁壺、小型丸底鉢、近江系受口甕、近江系小型鉢の 4 器種に施されている。甕が伴うことから調理を伴う儀礼が行われたと思われるが、定かではない。儀礼終了後に穿孔を行って仮器化し埴輪群に供献されたものであろう。様相としては古い儀礼の要素が保存されているといえよう。

**双水柴山 2 号墳**<sup>418)</sup> (佐賀県唐津市、図版 94) は全長 33.7m、後円部径 22.8m、高さ 4.4m を測る前方後円墳である。葺石や埴輪は無い。埋葬施設は後円部墳頂に設けられた割竹形木棺直葬土壇で、両者とも上下に重なっているという。第 2 主体といわれているものが第 1 主体部上の陥没坑という指摘もある。この第 2 主体覆土中より二重口縁壺 1 個体、直口壺 1 個体、柱状脚高杯 1 個体、小型器台 1 個体、甕片 3 点が出土している。壺類底部には穿孔が見られる。墳丘裾から直口壺・高杯の他、多量の甕片が出土している。甕の全てが儀礼に使用されたかどうかは不明だが、一定度甕が器種構成に含まれていたことは明らかであろう。直口壺も数個体出土しているため、調理を伴った儀礼が行われ、使用後に穿孔し、その一部を選んで主体部上に、残りは墳丘斜面へと廃棄したと考えられる。土器は畿内系布留式土器で占められており、布留式古相の主体部上土器配置として貴重な事例である。

このように布留式古相併行期にける土器配置は西求女塚古墳のように土器の象徴化が進行している例もあれば東殿塚古墳・双水柴山 2 号墳のように実用品を使用後に仮器化したと考えられる例もある。また、畿内では山陰・近江など外来系土器が葬送儀礼に使用されていることになり、当時の首長間の交流関係を示す考古資料として重要な意義があると考えられる。なお、当該期に比定できる備前車塚古墳<sup>419)</sup> (岡山市) におい

ても主体部上に土器を配置していることが明らかになっていることを付記しておく。

前期中相以降の事例でも鼓形器台を器種構成に含む土器配置が畿内・丹後地域で見られる。

**平尾城山古墳**<sup>420)</sup> (京都府相楽郡山城町、図版 164) は全長約 110m、後円部径約 70m、高さ約 11.5m の前方後円墳である。墳丘は後円部 3 段、前方部 2 段に築成され、葺石・円筒埴輪列を備えている。また、家形・鶏形などの形象埴輪が知られている。明治 36 年に開墾によって倣製方格規矩鏡 1 面、勾玉 3 点、車輪石片多数、石釧 3 点以上、鉄剣数十点が出土した。その後の調査で後円部墳頂に竪穴式石室 1 基、粘土槨 2 基が並んで見つかった。副葬品は竪穴式石室より三角縁神獣鏡片 2 点、石釧 6 点、鉄剣 13 本以上、鉄鏃 44 点、鉄斧 1 点、鏝 8 点、鉋 7 点、錐 1 点、が出土している。土器は竪穴式石室の墓壇東肩付近で長頸壺 2 個体・小型丸底土器 1 個体・鼓形器台 2 個体 (大・小) などが比較的まとまった状態で出土した。鼓形器台は結合部上下の突帯が無い、形式的に省略化されたものである。長頸壺は胴部が欠失しており、完形で置かれたかどうかが分からない。これらの土器群の年代は小型丸底埴の型式観から布留 2 式と考えられている。

**蛭子山 1 号墳**<sup>421)</sup> (京都府与謝郡加悦町、図版 166・167) は全長 145m、後円部径 100m、高さ 16m の前方後円墳である。墳丘は 3 段に築成され、葺石・埴輪列を備える。後円部墳頂平坦面に 3 基の埋葬施設が確認された。中央に舟形石棺直葬 (第 1 主体)、その東に竪穴式石室 (第 2 主体)、前方部寄り木棺直葬 (第 3 主体) があり、舟形石棺と竪穴式石室はそれぞれ埴輪による方形区画配列で囲われていた。舟形石棺内からは長宜子孫銘内行花文鏡 1 面、三葉環式鉄剣 1 本が、棺外から大刀 6 本、鉄剣 15 本、鉄槍 4 本が出土している。舟形石棺の主体部上から土器群が出土した。器種構成は二重口縁壺・直口壺・小型丸底埴・小型鉢・高杯・器台・小型器台・甕などである。総じて畿内系の影響が強いと考えられるが高杯などに山陰系土器の影響が見られ、布留式土器そのものではない。布留 2 式に併行する時期であろう。供膳具のセットが具備されており甕が存在することから、古い形式を残した儀礼が行われていたと考えられる。また、埴輪の方形区画列に接した位置で猪形・犬形の土製品が、第 3 主体の埋土を掘り込んでいる柱穴の脇から鶏形土製品が出土している。

このほか**神明山古墳**<sup>422)</sup> (京都府竹野郡丹後町、図版 165) では前方部墳頂において山陰系二重口縁壺 2 個体、直口壺 1 個体、小型丸底土器 1 個体、山陰系鼓形器台 4 個体、高杯 1 個体などの供膳具が出土している。やはり鼓形器台を伴い山陰系土器の占める位置が大きいことが注目される。

前期中相までの土器集中配置の様相を見てきたが、山陰系土器の影響が多く見られる。器種組成などから考えても、畿内型古墳における供膳具の集中配置は山陰型土器配置の影響を強く受けていると考えられるだろう。ところが、同じ前期中相に比定できる寺戸大塚古墳から出土した土器は少々異なる様相を見せる。

**寺戸大塚古墳**<sup>423)</sup> (京都府向日市、図版 163) は全長 98m、後円部径 57m、高さ 9.8m の前方後円墳である。墳丘は後円部 3 段、前方部推定 2 段で築成されており葺石・埴輪列を備える。後円部・前方部のそれぞれの墳頂に竪穴式石室がある。後円部竪穴式石室からは三角縁神獣鏡 2 面、勾玉 1 点、管玉 19 点、石釧 8 点のほか鉄刀・鉄剣・鉄製農工具類が、前方部竪穴式石室からは半肉彫獣帯鏡 1 面、倣製方格規矩四神鏡 1 面、倣製三角縁獣文帯三神三獣鏡 1 面、管玉 9 点、琴柱形石製品 1 点、紡錘車形石製品 1 点のほか鉄製武器類、銅鏃鉄製農工具類などが出土している。後円部竪穴式石室は埴輪の方形区画配列によって圍繞されており、そのすぐ外側に土器が集中して出土する区画があった。土器は小型二重口縁壺・小型丸底壺・器台・甕・ミニチュアの高杯などが見られる。器台の受部内面には鋸歯文や突帯が見られ、また脚部には小円孔が開けられ

ている。山陰にはみられない装飾的な特徴を持ち、おそらく弥生時代後期の吉備や播磨の装飾的な土器の影響を受けていると思われる。また、ミニチュア土器は前期後半の土器配置へと繋がる要素として評価できようか。

前期後半には柱状脚高杯と笊形土器という組み合わせが成立する。

**金蔵山古墳**<sup>424)</sup> (岡山市、図版 168) は全長 165m、後円部径 110m、高さ 18m の前方後円墳である。後円部墳丘は 3 段で、それぞれの上面縁辺に円筒埴輪列が存在する。後円部墳頂に 2 基の竪穴式石室があり、それぞれ埴輪方形区画配列によって囲まれている。二つの石室から多量の装身具・鉄製武器・鉄製農具類が出土しているが、品目に筒形銅器と短甲が加わっていることが特筆できる。土器は中央石室に伴う埴輪方形区画短辺の外側に集中区があり、柱状脚高杯 35 個体以上、笊形土器 3 個体が置かれていた。また、これらに方格八乳鏡 1 面が伴っている。また、おなじく中央石室の埴輪方形区画の反対側の短辺の外側から滑石製刀子が 8 点出土している。多量の高杯が飲食儀礼を示すのか供献儀礼を示すのかが問題であるが、笊が土器として製作されていることは象徴化と見てよく、ある程度形式化された儀礼と考えられ供献儀礼が行われたと考えられる。このことは次にのべる昼飯大塚古墳の例をみれば明らかである。西日本の例ではないが、重要な調査例なので触れておくことにする。

**昼飯大塚古墳**<sup>425)</sup> (岐阜県大垣市、図版 161) は全長約 150m、後円部径約 96m、高さ約 12m を測る前方後円墳である。葺石・埴輪列を備えている。後円部墳頂において同一墓壙におさめられた竪穴式石室 1 基と粘土槨 1 基が検出され、石室の盗掘坑内からは玉類・石製模造品 (刀子形・斧形・埴形)・石釧・鉄剣・刀子・針などが出土している。墳頂平坦面からは形象埴輪片と共に柱状脚高杯 34 個体以上、笊形土器 10 個体以上のほか食物形土製品が出土している。土器の構成は金蔵山古墳に共通するが食物形土製品 (アケビ形・モチ形) が組み合わさっているところが興味深い。食物供献儀礼が象徴化されたものであろう。このような事例は中期の兵庫県加古川市行者塚古墳<sup>426)</sup>・奈良県北葛城郡河合町乙女山古墳<sup>417)</sup>においても見ることができる。両古墳の場合は造り出しに配置されており、とくに行者塚古墳の場合は造り出しの家形埴輪群の手前に置かれていたようで、形象埴輪群への供献行為とみなせそうである。昼飯大塚古墳の墳頂でも家形埴輪の破片が出土していることから、場所は違えど同じ儀礼が行われていたと判断できるだろう<sup>418)</sup>。もうひとつ注意すべきことは、昼飯大塚古墳において柱状脚高杯が通常よりも小型に作られていることである。このことは寺戸大塚古墳の墳頂に置かれていた土器群にミニチュア土器が含まれていたことと無関係ではないだろう。儀礼に使用される儀器がミニチュア化するということは、儀礼そのものが象徴化されたことを示しているのだろう。供献行為を永続化させるねらいもあっただろうか。形象埴輪も墓域を守る行為を武器・武具を器財形埴輪として表現することで、その永続化をねらったとすれば、土器のミニチュア化や食物形土製品の創作は形象埴輪と同じねらいの下に儀礼が変化した結果生まれたと考えられる。

#### 註

416) 安田 滋ほか 2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課

417) 天理市教育委員会 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第 7 集

418) 唐津市教育委員会 1987『双水柴山遺跡』

419) 鎌木義昌 1962『備前車塚古墳』『岡山市史 古代篇』岡山市



- 鎌木義昌 1969「備前車塚」『考古学研究』第14巻第4号
- 420) 近藤喬一ほか 1990『京都府平尾城山古墳』山口大学人文学部考古学研究室研究報告第6集
- 421) 佐藤晃一 1985『蛭子山古墳』加悦町教育委員会
- 佐藤晃一 1992『加悦町の古墳』加悦町教育委員会
- 佐藤晃一 1997「蛭子山古墳について」『日本海三大古墳がなぜ丹後につくられたのか』第3回加悦町文化財シンポジウム  
加悦町教育委員会
- 422) 小沢和義 1969「神明山古墳実測調査報告」『同志社考古』第7号
- 丹後町教育委員会 1983『大山墳墓群』
- 丹後町教育委員会 1991『丹後町の古代遺跡』京都府丹後町文化財調査報告第7集
- 423) 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群発掘調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳」『史林』第54巻第6号
- 國下多見樹・中塚良 2000『寺戸大塚古墳―後円部墳丘の調査―』向日市埋蔵文化財調査報告書50
- 梅本康広・森下章司 2001『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ』(財)向日市埋蔵文化財センター
- 近藤喬一・都出比呂志 2004「寺戸大塚古墳」『向日丘陵の前期古墳』向日市文化資料館
- 424) 西谷真治・鎌木義昌 1989『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊
- 425) 阪口英毅・林正憲・東方仁史 2003『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 426) 加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告15
- 427) 木下 亘 1988『史跡 乙女山古墳 付 高山2号墳―範囲確認調査報告―』河合町文化財調査報告書第2集
- 428) 中條英樹 2003「土製品からみた墳頂における儀礼について」『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 429) 前掲註423文献 (近藤・都出2004) 参照

## 小結

以上のように概観すると、西日本における畿内型古墳の土器配置は東殿塚古墳や西求女塚古墳、あるいは蛭子山古墳のように山陰系土器の影響が強い段階と、金蔵山古墳や昼飯大塚古墳に見られる笊形土器と高杯の組み合わせに、時には食物形土製品が加わる土器配置とがある。前者はその内容がバラエティに富んでおり、今のところ類型化はできない。後者は中期まで系譜が続くため「**金蔵山型土器配置**」として類型化できるだろう。その内容は食物供献儀礼の象徴化・形式化させた姿であり、今のところ初源の形態を寺戸大塚古墳例に見ることができる。

## 第2節 東日本における前期古墳の土器配置

東日本の前期古墳では主体部上に土器を置く例が非常に多く、その特徴的な器種構成から「東日本型主体部上土器配置」として捉えることができる。その内容については後述するが、これら東日本の前期古墳の土器配置についてはすでに先学の研究の積み重ねがあり、筆者の研究もその延長上にある。研究史についてはすでに第1章第2節で述べているので、ここでは時期別にその系統を整理していこう。

### 「弘法山型土器配置」—東日本における古墳出現期の主体部上土器配置—

まず、古墳出現論とも関わるかもしれないが、東日本の古墳の始まりをどこに置くかという問題があるだろう。筆者は、古墳の定義はともかく、墳墓における土器配置の系譜という視点から見れば、それは畿内系加飾壺を伴った、廻間Ⅱ式段階<sup>430)</sup>の東海西部系の供膳具を母体にした土器群が主体部上に配置される土器配置の成立に画期を求めたい。つまり、第3章第9節で述べた弥生時代後期の墳墓群とこれから述べる庄内式の後半に併行する時期からの墳墓は系譜関係上、区別できると考えている。ともかく、東日本の初源期の事例を確認していこう。

廻間Ⅱ式併行期（庄内式後半～布留Ⅰ式併行期）での標識的な資料は高部古墳群、弘法山古墳、神門古墳群、小松古墳などに求められる。

**高部古墳群**<sup>431)</sup>（千葉県木更津市、図版 97）は廻間Ⅱ式前半段階に編年できる、いわゆる東日本的な主体部上土器配置を行う墳墓では現在のところ最古であり、前方後方形の墳墓としても古い例の一つである。主体部上土器配置がみられたのは 32 号墳・30 号墳の 2 基の前方後方形墳である。この種の小型の前方後方形墳は、関東では通常墳丘が削平され墳頂の埋葬施設が遺存していないことが普通だが、当墳墓群では幸運にも墳丘が良好に遺存し、墳頂埋葬施設の調査が行われた貴重な例である。

**高部 32 号墳**は全長 31.9m、後方部長 16.8m、同幅 20.5m、高さ 3.6mの前方後方墳である。墳丘の周囲に周溝がめぐり、周溝中には複数の土壙（周辺埋葬）が存在する。中心主体部は後方部墳頂中央に営まれた箱形木棺直葬施設で、墓壙は確認されていない。墳丘構築過程で埋葬されたとされている。副葬品は斜縁半肉彫四獣鏡片 1 点（破鏡）、鉄槍 2 本が出土している。土器は主体部上から東海西部系高杯 6 個体（高杯 A<sup>432)</sup> が 3 個体、高杯 B が 3 個体）が出土している。破片の状態であったが脚部に正立したものがあり、完形もしくはそれに近い状態で置かれたものと思われる。これらの高杯が置かれたのは墳丘盛土最上層中で、最終的な儀礼行為の後に墳丘が完成されたものと思われる。高杯のみの出土から、内容物の供献行為か、儀礼に使用した儀器自体の供献であろうと考えられる。なお、周溝中の A 土壙の主体部上からは底部に焼成後の穿孔を施した手焙形土器が出土している。

**高部 30 号墳**は全長 33.8m、後方部長 23.8m、同幅 21.9m、高さ 2.7mの前方後方墳である。墳丘の周囲には周溝がめぐり、やはり周辺埋葬の土壙がみられる。中心主体部は後方部の墳頂に営まれた墓壙に箱形木棺をおさめたものである。副葬品は斜縁二神二獣鏡 1 面、鉄剣 2 本が出土している。土器は主体部上から手焙形土器が 1 点出土している。底部付近に焼成後の穿孔がみとめられる。また、主体部の脇には焼土が検出され、手焙形土器との関連性が示唆されている。

**神門古墳群**（千葉県市原市）は古墳出現期の 3 基の前方後円墳が調査されたことで著名である。3 基は 5

号→4号→3号の順に築かれたとされ、若干の時期差を有しており3世代の首長墳として捉えられると考える。

**神門5号墳**<sup>433)</sup> (図版99) は全長推定42.5m、後円部径31.5m、高さ5.9mの前方後円墳である。後円部の平面形は不整円形を為す。また、前方部は未発達で、短い突出部を敷設した円径墳丘墓という印象が強い。墳頂中央に墓壙が検出され、ガラス小玉6点、鉄剣1本、鉄鏃2点が出土した。主体部上からは畿内系加飾壺1個体、高杯1個体などが出土し、また墳丘や周溝から畿内系加飾壺1個体、二重口縁壺1個体、北陸系小型埴、南関東系装飾壺2個体、高杯、甕などが出土している。装飾壺を中心とした器種構成といえるだろう。

**神門4号墳**<sup>434)</sup> (図版101) は全長49m、後円部径33m、高さ4.9mの前方後円墳である。後円部中央に木棺をおさめたと考えられる墓壙が検出された。副葬品は管玉31点、ガラス小玉394点、鉄剣1点、鉄槍1点、鉄鏃41点が出土し、また、墓壙埋土中からは鉈1点と破碎玉類が出土している。主体部上から壺5個体(畿内系加飾壺、在地系壺、直口壺など)、高杯7個体(東海西部系高杯A・Bなど)、小型器台7個体が出土した。これらは通有の東日本における主体部上土器群の組み合わせとと言えるだろう。このほか墳丘下の旧地表面において装飾壺・手焙形土器・鉢・高杯・甕などおびただしい量の土器群が出土している。墳丘築造前の祭祀に使用されたものだろう。

**神門3号墳**<sup>435)</sup> (図版100) は全長47.5m、後円部径33.5m、高さ5.2mの前方後円墳である。後円部中央に木棺をおさめたと考えられる墓壙が検出され、副葬品として管玉12点、ガラス小玉103点、鉄剣1本、鉄槍1本、鉄鏃2点、鉈1点が出土している。土器は主体部上から手焙形土器1個体、主体部上脇から畿内系加飾壺1個体、二重口縁壺4個体、ひさご壺1個体、東海西部系高杯A3個体、小型鉢1個体が出土している。手焙形土器の底部付近は焼成後に穿孔されている。また、二重口縁壺も底部を欠失しており、焼成後に打欠によって故意に底部を欠失させたものと思われる。壺が中心のだが器種組成としてはバランスの良い構成となっている。時期は廻間Ⅲ式初頭(布留1式)併行期に位置づけられる。

**弘法山古墳**<sup>436)</sup> (長野県松本市、図版98) は全長66m、後方部辺47m、高さ7.1mの前方後方墳である。墳丘斜面には墓石が存在する。後方部墳頂中央に竪穴式石室が1基検出された。内法で長さ5.0m、幅1.3m、深さ1.1mのいわゆる長大型の石室であるが、天井石は無く、河原石のみを使用して構築されており、見かけ上は割石板石積みの精美な竪穴式石室とは印象が大きく異なる。しかし、報文でも指摘されているとおり、9×6mの巨大墓壙の壁と石室輪郭との間は多量の河原石を控え積みとして充填しているため、弥生墓制の埋葬施設の影響とは考えられない。その規模の大きさ、入念さから西方の前期古墳の竪穴式石室の影響を受けたものと解釈したい。副葬品は斜縁四獣鏡1面、ガラス小玉738点、鉄剣3本、銅鏃1点、鉄鏃24点、鉄斧1点、鉈1点が出土している。土器は主体部上からパレススタイル文二重口縁壺1個体、畿内系加飾壺2個体、ほか装飾壺片4点、壺頸部片2点、東海西部系高杯A6個体、東海西部系開脚高杯6個体、手焙形土器1個体などが出土している。パレススタイル文二重口縁壺の底部は焼成後に穿孔されたと判断されている。また、畿内系加飾壺は2個体とも胴下半部を欠失しており、意図的な打欠と考えられる。これらの土器は破片の状態で石室に充填していた黒色土中から出土しているため、当初石室上にあったものが棺および石室蓋の不朽に伴う陥没により下方に移動したものと思われる。いくつかの土器は完形に復原されるものもあるので、破壊されずに置かれた土器があったことは確かだろう。器種構成は畿内系加飾壺・東海西部系高杯・手

焙形土器が含まれるので、東日本における前期古墳の主体部上に配置される土器群として典型的な姿を現していると言えよう。神門古墳群と比較すると、高杯の量が多いことが注意される。

**小松古墳**<sup>437)</sup> (滋賀県伊香郡高月町、図版 102) は全長 60m の古保利古墳群中最大の前方後方墳である。後方部長 37m、同幅 29m、高さ 5 m を測り、後方部は 2 段築成である。主体部構造は明らかにされていないが、墳頂の盗掘坑より雷雲文帯内行花文鏡 1 面、方格規矩鏡 1 面、銅鏃 4 点、鉄鏃 15 以上、ほか鉄製工具、不明鉄器片多数、土器片が出土している。これらが小松古墳の副葬品として推定されている。また、墳頂で検出された土坑 A からおびただしい量の土器が出土している。その器種組成は畿内系加飾壺の影響を受けた独自性の強い装飾壺が 6 個体、直口壺が 2～3 個体、台付大型広口埴 2 個体、東海西部系高杯 A15 個体前後、東海西部系開脚高杯数個体、手焙形土器 1 個体が出土している。装飾壺は畿内系加飾壺の狭帯口縁の影響を受けたものが 1 個体、東海西部系のパレススタイル壺の影響を受けた口縁部を持つものが 1 個体、あとの 4 個体は二重口縁である。底部に焼成前穿孔を施している。ほかにも直口壺の底部、台付大型広口埴の胴下半部や高杯の結合部にも焼成前の穿孔が施されている。これら土坑 A の土器片群がどのような来歴でこの土坑に入れられたのかは不明といわざるえないが、筆者は土坑 A 自体が未検出の主体部の陥没坑である可能性も考慮に入れるべきだと考える。いずれにせよ、少なくとも小松古墳の葬送祭祀儀礼に使用された儀器であることは、土器・古墳の年代から明らかである。だが、これだけ多量の土器群であるにもかかわらず、ほとんど全ての土器に焼成前穿孔が施されており、土器群全体が仮器として製作されていることは興味深い。弥生時代後期から古墳時代前期にむけて儀礼の形式化が進行すると、儀器が仮器化されるようになると共に土器量が減少することが通例だが、小松古墳出土土器群の場合は土器量を保持したまま、製作段階から仮器化が行われた珍しい例といえる。

以上、東日本における布留 0 式併行期までの良好な主体部上土器配置の類例について述べてきた。これらは畿内系加飾壺と東海西部系高杯を中心に、手焙形土器や直口壺・小型器台などを組み合わせた器種構成が特徴的である。これらの器種構成は「東日本型主体部上土器配置」の初源期の姿を代表していると言えよう。本書ではこれらの廻間Ⅱ式段階に特徴的な東日本型主体部上土器配置をとくに「弘法山型土器配置」として認定する。厳密に言えば高部古墳群などは、器種の欠落が著しいが、最も初源的な姿として捉えておきたい。

それではこのような土器配置がいったいどのような経緯で出現したのだろうか。この問題は冒頭で触れたとおり、東日本の古墳出現に関わる重要事項であるが、現在のところ確定的な答えは見出せない。ただし、土器の系譜から考えれば畿内から近江・東海西部とその周辺地域が候補地として挙がるだろう。「弘法山型」においては小松古墳のように多量の高杯を使用している例があることから、吉備の弥生後期から庄内式併行期に盛行した吉備型土器配置の影響を間接的にしろ受けていると考えられる。このことについて、後期中葉段階において伊勢の高松墳丘墓に高杯中心の器種構成を示す主体部上土器配置が存在することから、古い段階に東海西部地方に伝播していた可能性がある。しかし「弘法山型」のもう一つ重要な要素は畿内系加飾壺の存在であろう。この加飾壺自体は九州から関東まで分布することは既に述べたが、東海西部系の高杯と組み合わせるのは近江・北陸も含めた東日本に限られ、畿内以西には見られない。したがって、「弘法山型」の成立は畿内諸地域や南丹波において醸成された畿内系加飾壺を使用する儀礼にあらたに東海西部系の供膳具を加え、変容してできた儀礼と考えられる。ここまで考えるとその誕生の候補地は、やはり東海西部地域である可能性が高いといえる。この地域では未だ出現期の主体部上土器配置が未発見であるが、その可能性をもつ

た墳墓として、西上免古墳が挙げられる。

**西上免古墳**<sup>438)</sup> (愛知県尾西市、図版 103) は全長 40.5m、後方部辺 25m の前方後方墳である。墳丘は削平を受け遺存しておらず、埋葬施設のデータが得られていない。古墳の周囲を幅広の周溝が巡り、周溝中の広範囲から多くの土器が出土した。これらの土器は出土状況からいくつかのグループとして捉えられ、そのうち墳丘から転落したと考えられているのは A (後方部後方)、B (後方部西側)、C (西側くびれ部)、および J (前方部東側コーナー) の一部の土器である。これらの器種構成をみると畿内系加飾壺 3 個体、パレススタイル壺 3 個体以上、および少量の甕・高杯などがある。これらの土器群がはたして主体部上に置かれていたかどうかについては、むしろ可能性は低いのではないと思われるが、墳頂で儀礼に使用された土器の一部である可能性は高い。土器型式から廻間Ⅱ式でも前半に相当する時期で、庄内式後半段階に併行する可能性が高い。先の高部 32 号墳の方がわずかに古い型式の高杯が出土しているため、西上免古墳を東日本型の最古例とすることはできないが、おそらく当地域で廻間Ⅰ式後半からⅡ式初頭にかけての時期に成立した祭祀と考えられるだろう<sup>439)</sup>。

なお、当該期において上記の土器配置とは様相が異なる例を挙げておく。

**北平 1 号墓**<sup>440)</sup> (長野市、図版 104) は 11.5×9.5m の方形台状墓である。一方の短辺中央部に突出部とみられる高まりがあり、前方後方形を意識したとも考えられるが、定かではない。墳丘の高さは 1.1m と低く、遺存していた盛土はわずかで、ほとんどが地山削りだしによって構築されたと考えられる。墳頂に 2 基の直列する埋葬施設が検出された。両者とも墓壙内に角礫によって竪穴式石槨を構築し、箱形木棺をおさめたと考えられている。副葬品は第 1 主体部からガラス小玉 2 点、第 2 主体部から勾玉 1 点、管玉 5 点、ガラス小玉 8 点が出土している。それぞれの主体部上から土器が出土している。第 1 主体部上では箱清水系壺 7 個体 (大 3・中 3・小 1)、箱清水系台付広口壺 1 個体、東海西部系ヒサゴ壺 1 個体、箱清水系内弯口縁高杯 5 個体、三河系受口状口縁甕 1 個体が、第 2 主体部からは箱清水系中型壺 1 個体、箱清水系内弯高杯 4 個体 (うち 2 は脚部に突帯があり、他の 1 は片口)、東海系と考えられる外反口縁高杯 1 個体、箱清水系甕 1 個体が出土している。全体的に在地の後期弥生土器様式の箱清水式土器の系譜をひく土器群と東海西部系の土器群の組み合わせで成り立っている。東海西部系の土器群は尾張の廻間様式の影響はほとんど無い。時期の判定は難しいが、全体的に古い様相を残していることから廻間Ⅱ式でも前半段階 (庄内式後半段階) に併行する時期までは遡るのではないだろうか。在地の系譜の土器群を多用しており、その他の要素からも質的には弥生系の墳墓として認識すべきである。穿孔行為については第 2 主体部上から出土した高杯の 1 個体のみに焼成後穿孔がみられたのみであるが、口縁部などを意図的に打ち欠く個体もあり、部分破壊行為の方法としては、墳墓資料としては古い要素を保存しているといえよう。なお、第 1 主体部上の土器群は報文中で配置状況の詳細が明らかにされているので触れておきたい。まずヒサゴ壺を最も下に置き、その上を打ち割った甕破片で囲むように塞ぐ。そしてさらにその上に口縁部を打ち欠くなどした壺類を置き、さらにその外側を打ち割った高杯の破片で取り囲んでいる。これら 16 個体の土器群がすべて儀礼に使用されたかどうか定かではないが、その廃棄の方法は極めて丁寧で意識的である。また、おそらくヒサゴ壺のみは内容物の容器として埋納されており、その他の土器はそれを取り囲む被覆材として機能しているといえよう。主体部上の意識的な土器埋納行為の良好な調査事例といえる。

もう一例は、**秋葉山 3 号墳**<sup>441)</sup> (神奈川県海老名市、図版 105) である。本古墳は現状で 34×41m の不整円

形を呈しているが、もともと短い前方部があったことが知られており、本来は約 50m ほどの前方後円墳であった。埋葬施設は後円部墳頂にて墓壇が検出されているが、墓壇底部までは調査が及んでいないため副葬品は不明である。主体部上から東海西部系高杯 A 2 個体、台付片口鉢 2 個体が出土している。このうち台付片口鉢 2 個体と高杯 A 1 個体の杯部内面に水銀朱が検出された。片口鉢は集落遺跡から出土する場合でも水銀朱が検出されることが多く、朱と密接な関わりのある土器だといえる<sup>442)</sup>。これらの土器が朱の容器としてのみ機能したのか、あるいは朱と関わりのある儀礼が行われ、その儀器として使用されたのかは不明と言わざるを得ない。また、本古墳では墳丘裾付近の各所から壺形土器が出土している。このことは後段にて圍繞配列と関連させて述べるが、主体部上の土器配置と共に同時期の東日本の墳墓とは様相が異なるという点を指摘しておきたい。

## 註

- 430) 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
- 431) 西原崇浩 2002『高部古墳群 I—前期古墳の調査—』千束台遺跡発掘調査報告書Ⅳ 木更津市教育委員会
- 432) 東海西部系高杯の形式分類については赤塚次郎(1990)に従う。すなわち、高杯 A は口縁部が杯底部から内湾しながら大きく開き、脚部は内湾してふんばる型式(廻間Ⅰ式=欠山式)から次第に屈折してハの字に開く形態(廻間Ⅱ式)へ、さらにきれいな裾広がり呈す形態(廻間Ⅲ式)へと変化する。高杯 B は杯底部と口縁部との境に稜をもたずに内湾して立ち上がる杯部を持ち、脚部は廻間Ⅰ式段階から裾広がりである。次第に杯部が小さくなり、脚端部径が口縁部径を凌ぐようになる。高杯 C は、高杯 B の脚部が広がった形式に類似するが、口縁部と杯底部の境に稜をもつものである。B・C 両者を含めて開脚高杯と呼称する場合もある。
- 433) 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して—」『古代』第 77 号
- 434) 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第 63 号
- 435) 市原市文化財センター 1987「神門三号墳」『市原市文化財センター年報 昭和 62 年度』
- 436) 斎藤忠ほか 1978『弘法山古墳』弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編 松本市教育委員会  
直井雅尚ほか 1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会
- 437) 黒坂秀樹 2001「小松古墳」『小保利古墳群第 1 次確認調査報告書』高月町教育委員会
- 438) 赤塚次郎 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集  
赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集
- 439) 東海西部における古相を示す前方後方形墳墓として廻間 SZ01 が著名である。廻間Ⅰ式に遡る土器群が出土しているが、それらは周溝外縁に設けられた土坑中や、周溝外側から投棄された土器群である。墳丘から周溝に投棄された土器群は廻間Ⅲ式に編年される土器群であり、こちらは柳ヶ坪型壺を除くと、東日本型土器配置の標準的な器種構成を示している。  
赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
- 440) 長野県教育委員会ほか 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 7 大星山古墳群・北平 1 号墳』  
(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 20
- 441) 押方みはる・山口正憲ほか 2002『秋葉山古墳群第 1・2・3 号墳発掘調査報告書』海老名市教育委員会
- 442) 押方みはる 2002「祭祀について」『秋葉山古墳群第 1・2・3 号墳発掘調査報告書』海老名市教育委員会 95～97 頁

### 「北ノ作型土器配置」—廻間Ⅲ式併行期の主体部上土器配置—、その他

廻間Ⅲ式併行期の土器配置は次第に畿内系加飾壺が無くなり、総じて無文の土器によって構成される。先述した神門 3 号墳は廻間Ⅲ式併行期の初頭に位置づけられると考えられるが、畿内系加飾壺が残存しているものの無文の二重口縁壺に比重が移っていることがわかる。しかし、東海西部系の供膳具が主体を占めることには変わりなく、先に述べた廻間Ⅱ式併行期の弘法山型土器配置と同一系譜上にあるものと理解できる。以下に、廻間Ⅲ式併行期の好例を挙げておきたい。

**駒形大塚古墳**<sup>443)</sup> (栃木県那須郡小川町、図版 106) は全長 64m の前方後方墳である。後方部長 32m、後方部幅 30m、高さ 6.5m を測る。主体部は後方部中央に設けられた木炭槨で、副葬品として画文帯吾作銘四獣鏡 1 面、ガラス小玉 53 点、鉄刀 2 本、鉄剣 2 本、銅鏃 6 点、袋状鉄斧 1 点、鉈 1 点、蕨手状刀子 1 点が出土している。広義の主体部上土器群はその層位から、①墳頂に置かれた土器群と、②墓壙内に埋置された土器群、の二者がある。①は墳頂の土俵造成の際に出土した土器群で、直口壺 2 個体、東海西部系高杯 A8 個体、高杯 B 2 個体、高杯 C 2 個体、小型器台 1 個体、焼成前底部穿孔鉢 1 個体などがある。これらは②の土器群より破片の遺存率が高く、完形のまま置かれたものと思われる。②は主体部発掘調査の際に表土下 70cm ほど、墓壙上面より 10cm ほど下位付近の墓壙埋土内から出土した。直口壺 1 個体、東海西部系高杯 A 1 個体のみは比較的破片がそろっているが、他は細片のみである。細片には高杯各種・小型器台・鉢があり、墳頂の土器群と同じ構成である。おそらく、儀礼に使用された土器の一部を破砕して、槨上に置き、さらにその上に盛土をして主体部上の墳頂に残りの土器を完形のまま配置したと思われる。墳頂の土器群の遺存状況がよいのは棺槨の腐朽に伴う陥没により、早い段階で埋没したためと考えられる。器種構成は多量の高杯と少量の直口壺・小型器台・鉢から成る。中型の複合口縁壺が欠けることが駒形大塚古墳出土土器群の特徴と言えるだろう。

**北ノ作 1 号墳**<sup>444)</sup> (千葉県東葛飾郡沼南町、図版 108) は 15×17m の方墳で一辺の中央に陸橋をもつ。陸橋部を含めた規模は 21.5m で墳丘の高さは 2m である。埋葬施設は墳頂で検出された、木棺を置いたと考えられる粘土床ある墓壙で、副葬品は大刀 1 本、銅鏃 1 点、鉄鏃 3 点、鉄斧 2 点、鉈 1 点である。土器は層位的には墓壙上面と表土の間から出土しており、いわゆる主体部上の出土ではあるが、土器群のさらに上層には祭祀に関係があると思われる厚さ 10cm 程度の焼土層がみられる。このことから土器は墓壙の埋め戻し後に置かれ、さらにその上に盛土が為され、焼土が置かれた（あるいはその場で火を使用した）という状況が復原でき、土器は最終的には地表からは見えないように埋置されたことが分かる。器種組成は複合口縁壺 1 個体、二重口縁壺 1 個体、直口壺 4 個体、東海西部系高杯 A 2 個体、高杯 B 1 個体、小型器台 3 個体、鉢 4 個体で、計 16 個体中 12 個体に赤彩が施されている。また、直口壺・高杯 A・鉢には焼成前の底部穿孔（高杯は結合部穿孔）が施されており、小松古墳と同じく供膳具にも穿孔が施されている。遺存率が良く、完形のまま埋置されたと考えられる。

**能満寺古墳**<sup>445)</sup> (千葉県長生郡長南町、図版 107) は全長 73m の大型前方後円墳である。後円部径 43.2m、高さ約 7m を測る。後円部中央で木炭槨が検出され、副葬品として獣形鏡 1 面、鏡式不明鏡 1 面、ガラス小玉 10 点、大刀 1 本、鉄剣 2 本、銅鏃 8 点、鉄鏃 3 点、ほか鉄製工具・農具類が若干出土している。主体部上の陥没坑内から壺・高杯・小型器台などの細片が出土している。報文によれば陥没坑内に充満していた厚さ 40cm の黒色土中の全域からおびただしい量の土器細片が出土したとされているので、完形のまま置かれてい

たとは考えにくく、破碎し細片化してから、主体部上に散布したものである。公表されている図面からは、二重口縁壺、東海西部系高杯 A・B、小型器台が含まれていることがわかる。なお、壺には底部穿孔が施されたものがある。

**原 1 号墳**<sup>446)</sup> (茨城県稲敷郡桜川村、図版 109) は全長 29.5m の前方後方墳である。後方部長 16.5m、同幅 11.5m、高さ約 2m を測る。主体部は後方部中央の木棺を直葬した墓壇で、副葬品は管玉 4 点、ガラス小玉 11 点、鉄槍 1 本、剣状鉄器 1 点、ほか鉄製工具・農具類が出土している。土器は主体部上とその周辺から出土している。厳密に主体部上出土といえるのは器台か高杯の脚部が 1 個体あるだけである。墓壇両脇の肩部では直口壺が 1 個体ずつ出土している。これらは焼成後穿孔されている。また、墓壇東側短辺の外側には二重口縁壺 1 個体、複合口縁壺 1 個体の破片が出土した。この 2 個体の壺は全形を復原するだけの破片がそろわず、報文では破碎し散布されたものと捉えている。全体的に壺中心の土器配置であるが、主体部周辺に意図的な配置状況が読み取れる例である。

主体部上における配置状況が分かるものを選んで述べてきたが、同じ主体部上土器配置でも、その様相が様々である。とくに土器の配置・廃棄の段階の方法は定まった方式があったわけではなさそうである。この時期になると焼成前穿孔が一般的となり、初めから仮器として製作されたことがわかる。また、古段階の駒形大塚古墳より後出する墳墓では土器量が減少し、土器を使用した儀礼が形式化・省略化の方向に推移したことがわかる。

一方、同時期であるにもかかわらず主体部以外の場所に儀器を集中して配置する例もある。長野県佐久市瀧の峯 2 号墳<sup>447)</sup> (前方後方形、18.3m、図版 110) では後方部後方周溝中から壺・高杯・小型器台などが出土し、群馬県前橋市荒砥北原 1 号墳<sup>448)</sup> (陸橋付方、12.5m、図版 147) では囲繞配列された二重口縁壺以外の土器は周溝中の 1 ヶ所から出土している。大型壺・高杯・結合器台・小型器台・小型鉢などである。埼玉県東松山市諏訪山 29 号墳<sup>449)</sup> (前方後方墳、56m、図版 111) では周溝を渡り後方部に取り付くブリッジが 1 ヶ所存在し、その付近から壺類・小型器台類が出土している。また、栃木県宇都宮市茂原愛宕塚古墳<sup>450)</sup> (前方後方、約 50m、図版 112) ではくびれ部に壺・埴などが配置されていた。このように主体部上以外の場所に土器を置く例が存在することが指摘できよう。

また、主体部上に置く場合でも当該期に異なる系譜の土器を使用する例もある。

**象鼻山 1 号墳**<sup>451)</sup> (岐阜県養老郡養老町、図版 113) は全長 40.1m の前方後方墳であるが、後方部中央の墓壇埋土内から二重口縁壺・小型器台・S 字状口縁台付甕などとともに畿内系柱状脚高杯が出土した。この時期の東日本では畿内系の高杯は珍しく、また S 字状口縁台付甕が主体部上から出土することも同様である。土器は破碎されて埋土内に混ぜ込まれていたというので、本例は「東日本型主体部上土器配置」の典型例とはいえない。

#### 註

443) 三木文雄 1986『駒形大塚古墳』吉川弘文館

444) 金子浩昌・中村恵次・市毛勲 1959「千葉県東葛飾郡湘南村片山古墳群の調査」『古代』第 33 号

糸川道行 1993『沼南町北ノ作 1・2 号墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会

445) 大塚初重 1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第 1 巻第 3 号 東京考古学会



萩原恭一 1998「能満寺古墳」『総南文化財センター年報』No.10

446) 原1号墳：茂木雅博 1976『常陸浮島古墳群』浮島研究会

447) 林幸彦・三石宗一 1987『長野県佐久市瀧の峯古墳群発掘調査報告書』佐久市教育委員会

448) 石坂茂ほか 1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会

449) 増田逸郎・坂本和俊・江口尚史 1986「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室

450) 久保哲三ほか 1990『茂原古墳群』宇都宮市教育委員会

451) 宇野隆夫ほか 1997～99『象鼻山1号古墳—第1～3次発掘調査の成果』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

### 「国分尼塚型土器配置」—白江式期以降の北陸地方の様相—

北陸地方の土器配置の様相は太平洋側・中部高地と異なる様相を示しているので、項目を変えて述べてみたい。なお、詳細については拙稿にまとめたことがあるので、そちらを参照していただきたい<sup>452)</sup>。

月影式(＝廻間Ⅰ式・庄内式前半併行期)以前の様相についてはすでに弥生時代の土器配置で述べた。月影式期までの「小羽山型」とした北陸南西部の土器配置は多分に西日本諸地域の弥生後期墳丘墓の影響が強かった。ところが白江式期以降は土器配置の様相に変化が見られる。このことはそれまでの北陸南西部独自の土器様式が崩壊し、東海西部系土器の流入が顕著になることや、四隅突出型墳丘墓にかわり、前方後方形・前方後円形の墳墓が登場してくることと関連するものと思われる。

白江式期(廻間Ⅱ式＝庄内後半～布留Ⅰ式併行期)に属するものは**小菅波4号墳**<sup>453)</sup>(石川県加賀市、図版114)が挙げられる。全長16.6mの前方後方形の墳丘をもち周囲を周溝がめぐっている。主体部は墳頂に2基存在し、両者とも墓壇に箱形木棺をおさめる。副葬品は1号主体よりガラス小玉5点、鉈1点、鉄片1点が、2号主体より鉄鏃2点、鉈1点が出土した。土器は主体部上から有文二重口縁壺1個体、周溝から畿内系加飾壺を含む装飾壺などが複数個体出土している。壺の形式はバラエティがあり、穿孔の有無も定かではないので圍繞配列とは認定できない。しかし、供膳具が皆無であり、明らかに前代までの土器配置とは系統的に異なる。

古府クルビ式期(廻間Ⅲ式＝布留Ⅰ～Ⅱ式併行期)では国分尼塚1号墳、宿東山1号墳、谷内16号墳などが挙げられる。

**国分尼塚1号墳**<sup>454)</sup>(石川県七尾市、図版115)は全長52.5m、後方部辺28m、高さ2.7mの前方後方墳である。主体部は後方部中央に1基存在する。構築墓壇に割竹形木棺をおさめているが、棺床を囲む特殊な木組み施設が検出されている。副葬品は豊富で、棺内から鳳鏡1面、勾玉1点、管玉10点、鉄刀1本、鉄短剣3本、鉄短刀1本、鉄槍1本、靱1点(銅鏃57点)、鉄鏃4点、鉄斧3点、鉄鑿3点、鉈2点、鉄鍬先1点、簀5点以上、棺外から鉄槍1本、黒漆塗り小品などが出土している。土器は主体部上から底部・口縁部を打ち欠かれた二重口縁壺1個体が出土。「主体部上の溝状遺構」から出土したとされるが、この遺構は木棺の腐朽に伴う陥没坑と考えられる。そのほか後方部墳頂平坦面の南東隅から土器が集中して出土した。壺・高杯などで「粉碎された」と考えられている。また、両くびれ部からは二重口縁壺・高杯・甕など多くの土器が出土している。これらの中に形態は東海西部系の開脚高杯ではあるけれども通常よりも大型に製作され、結合部に穿孔が施されているものがある。象徴的な儀器として製作されたものだろう。

**宿東山1号墳**<sup>455)</sup>(石川県羽咋郡押水町、図版116)は全長21.4m、後円部径15.8m、高さ2.9mの前方後

円墳である。周囲には周溝がめぐる。主体部は後円部中央に掘り込まれた2段墓壇で箱形木棺をおさめていたと考えられる。副葬品は棺内から方格規矩四神鏡が1面出土しており、鏡付近に朱・炭化物が出土している。主体部上中央付近の大部分は盗掘坑によって破壊されていたが、底部付近に焼成後穿孔のある直口壺1個体が攪乱をまぬがれて残されていた。また、後円部平坦面の東よりの所に土器片が集中する地点が1箇所あるが、報告者はかたづけの跡と解釈している。儀礼に使用されたと考えられる土器のほとんどは北西～西の墳丘斜面から周溝内にかけて出土している。器種は広口の大型二重口縁壺・中型二重口縁壺・高杯などがある。二重口縁壺はすべて焼成後に底部を穿孔している。

**谷内16号墳**<sup>456)</sup> (富山県小矢部市、図版117) は全長47.56m、後円部径23.05m、高さ3.6mを測る前方後円墳である。主体部は後円部墳頂に掘り込まれた墓壇に木棺を直葬したと推定されている。副葬品は棺内と推定される位置から鉄剣1本・鉈1点・鉄製鉄先1点が出土している。土器は後円部墳頂から壺1個体が出土している。報告書によれば「土師器細片が47点出土している。主体部東端の南東約3m(中略)付近で約2m平方の範囲から出土した。出土層位は主体部を被覆する粘土混りの黄褐色粘土質より上の盛土中からであり、比較的まとまった状態で埋積している。破片はすべて細片となっており棺を埋めた後、墳丘を完成する過程で祭祀に用い破砕して埋めたと想像することが可能である。これらの土師器は細片であるが、壺形土器1個体分と推定でき、口縁部、頸部、底部の破片を確認できる」と、されている。

以上に見てきた事例から北陸の前期前半の古墳における土器配置の特徴を挙げてみると、まず主体部上およびその周辺から壺1個体のみが出土するというパターンが抽出できる。このような例は他に石川県七尾市国分岩屋山4号墳<sup>457)</sup> (方墳、14.6m、図版118) でも確認できるので、北陸地方の特徴といえると思う。また、国分尼塚1号墳、宿東山1号墳では墳頂平坦面の一隅に土器の集積あるいはその跡が検出されている。儀礼に使用された多くの土器は一度墳頂平坦面の一ヶ所に集められ、そこで穿孔や破砕などが行われたのであろうか。壺1個体のみを主体部上に置き、他は墳丘斜面や周溝に投棄したというのが実情であったようだ。また、両方とも口縁部の打ち欠きや焼成後の底部穿孔が見られ、同時期の太平洋側の墳墓がすでに焼成前底部穿孔が一般的であるのに対して、古い要素を残しているといえよう。このような特徴をもつ土器配置を「**国分尼塚型土器配置**」として定義する。

なお、同時期の越後の例を2例挙げておこう。

**山谷古墳**<sup>458)</sup> (新潟県西蒲原郡巻町、図版119) は全長38.2m、後方部幅22.4m、高さ4.8mの前方後方墳である。埋葬施設は後方部中央で検出された墓壇で、割竹形木棺を直葬していた。副葬品は碧玉製管玉6点、ガラス小玉21点、鑿3点が出土している。土器は①主体部上、②前方部北側、③南側くびれ部から出土している。①の主体部上からは小型壺・埴・高杯・小型器台などの破片が出土しているが、どれも小片であるという。②前方部北側では転落した状態で甕2個体が、③南側くびれ部では複合口縁壺2個体がそれぞれ出土している。壺の底部は欠失しているが、穿孔行為であるかどうかは不明である。

**三王山11号墳**<sup>459)</sup> (新潟県三条市) は全長23m、円丘径21.6m、高さ3.9mの造出し付円墳で、墳丘は二段築成である。墳頂平坦面において箱形木棺をおさめた墓壇が検出され、副葬品として倣製四獣鏡1面、管玉67点、ガラス製丸玉34点、鉄剣1本、短冊形鉄斧1点が出土した。土器は主体部上およびその周辺から出土している。二重口縁壺・壺・小型器台の破片があるが、全て細片である。

以上の越後の2例を見る限りでは北陸南西部の壺1個体のみを主体部上に配置する方法とは異なっている。

太平洋側の「北ノ作型」の影響の下に主体部上土器配置が行われたものと思われる。

註

- 452) 古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」『駿台史学』第120号
- 453) 小菅波遺跡発掘調査団編 1978『小菅波遺跡発掘調査ニュース』
- 454) 富山大学人文学部考古学研究室 1983『国分尼塚古墳群発掘調査報告』第43回富山大学考古学談話会発表資料
- 455) 北野博司ほか 1987『宿東山遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 456) 宇野隆夫ほか 1988「谷内16号墳」『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』23
- 457) 土肥富士夫 1985『国分岩屋山古墳群』七尾市文化財調査報告1
- 458) 新潟大学考古学研究室・三条市教育委員会 1993『越後山谷古墳』
- 459) 甘粕健・川村浩司・荒木勇次 1989『保内三王山古墳群測量・発掘調査報告書』新潟大学考古学研究室編 三条市教育委員会

「釈迦山型土器配置」—前期中相～新相の土器配置—

古墳時代前期後半（＝松河戸Ⅰ式前半併行期）は東日本において圍繞配列の事例が増える一方で、供膳具を配置する古墳は減少する。また、集落出土土器の器種構成の変化と連動して、典型的な東海西部系の高杯が姿を消し、その変化形や畿内系の柱状脚高杯を配置するようになる。事例としては千葉県市原市釈迦山古墳<sup>460)</sup>（前方後円墳、93m、図版120）、茨城県行方郡玉造町勅使塚古墳<sup>461)</sup>（前方後方墳、64m、図版121）、茨城県新治郡八郷町佐自塚古墳<sup>462)</sup>（前方後円墳、58m）、福島県双葉郡浪江町本屋敷1号墳<sup>463)</sup>（前方後方墳、56m）などが挙げられる。いずれも主体部上に配置される土器量が減少しているため、前代の「北ノ作型」と区別し、「釈迦山型土器配置」としておきたい。また、岐阜県大垣市昼飯大塚古墳<sup>464)</sup>（前方後円墳、150m、図版161）では墳頂平坦面から小型の柱状脚高杯・箆形土器・食物形土製品が出土しており、畿内の西日本の大型古墳と共通した「金蔵山型土器配置」に含めて捉えておくことは既に述べた。

さて、東日本の前期後半段階においてさまざまな供膳具の中でも柱状脚高杯が中心的役割を担うようになるということは、供膳具を仮器化し供献することから、高杯の上に食物を盛って供献するという儀礼の姿に移行したと思われる。これは西日本の影響を受けたと考えられるが、昼飯大塚古墳では食物を土製器物で代用していることからすでに形式化しているということは既に述べた。東日本の中期古墳では長野県長野市・更埴市土口將軍塚古墳<sup>465)</sup>、東京都世田谷区野毛大塚古墳<sup>466)</sup>、群馬県前橋市舞台1号墳<sup>467)</sup>のように柱状脚高杯を配置した古墳があるが、それは前期後半段階の上述した例の系譜上にあると考えられる。とく舞台1号墳例は高杯に団子型の土製品が造り付けられていることから、先の昼飯大塚古墳や行者塚古墳と同じように、食物供献を土製品として表現しているものだろう。前代の「釈迦山型」の時期に実物の食物を供献していた儀礼を象徴化したといえる。したがって東日本においても前期後半に至って、弥生時代的な飲食儀礼の系譜から、古墳時代的な供献儀礼へと移行したものと考えられる。

註

- 460) 小久貫隆史 1996『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 461) 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第2巻3号 東京考古学会

- 462) 佐自塚古墳調査団 1963『佐自塚古墳調査概要』  
大塚初重 1972「古墳出土の土師器Ⅰ 佐自塚古墳出土の土器」『土師式土器集成』本編2
- 463) 伊藤玄三ほか 1985『本屋敷古墳群の研究』法政大学文学部考古学研究報告第1冊
- 464) 阪口英毅・林正憲・東方仁史 2003『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 465) 長野市教育委員会・更埴市教育委員会 1987『土口將軍塚古墳』
- 466) 野毛大塚古墳調査会 1999『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会
- 467) 西田健彦 1991『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会

## 第6章 围绕配列

围绕配列という配置方法はこれまでの述べてきた大多数の土器配置とは質的に異なる。それは使用される器物が規格性をもって製作された円筒器台（特殊器台や円筒埴輪など）と底部穿孔壺に限られ、他の供膳具や調理器をその配列の中に加えないのである。つまり、围绕配列された器物は、儀礼に使用された儀器ではなく、被葬者の眠る区域を囲むために配置された、葬送祭祀の舞台装置としての役割を演じた器物といえる。その意味において围绕配列された円筒埴輪や底部穿孔壺は「祭器」として規定されるべきであろう<sup>468)</sup>。

筆者はこれまで围绕配列は古墳時代になって出現するものであり、ある意味「古墳時代的な土器配置」であることを強調してきた<sup>469)</sup>。それは被葬者の眠る区域を神聖化することで、首長層の権威を高める役割をもっていたと思われ、そのような要請のもとに生み出されたもので、弥生時代の共同体的な葬送祭祀儀礼では行われなかったと考えたからである。

围绕配列の意義については既に古くから円筒埴輪の機能論争によって論じられてきた<sup>470)</sup>。それが、その初源問題に関わるものとして底部穿孔壺にも議論が及んだのは桜井茶臼山古墳における底部穿孔二重口縁壺による主体部方形区画列の発見を契機としてであろう<sup>471)</sup>。しかし、近藤義郎・春成秀爾によって円筒埴輪の起源が、弥生時代後期の吉備において盛んに使用された特殊器台に求められることが明らかにされてから<sup>472)</sup>、研究者の問題意識が埴輪と围绕配列の関係性からむしろ遠ざかったといえる。それは、埴輪の型式学上の起源が判明したという点では大きな成果ではあったが、著者の意図とは別に、埴輪の機能面の起源についても研究者の目を吉備系特殊器台という一系統の儀器に限定させてしまう効力もあったと言うことだ。このことは「埴輪」と「土器」という器物の形状によって二分されていた当時の研究姿勢が濃厚に反映している。

筆者は围绕配列の起源問題はひとり吉備系特殊土器・埴輪類と円筒埴輪だけの問題ではないと思っている。東日本では底部穿孔壺を数多く出土する古墳が早くから注意され、土器配置論からこれを围绕配列として捉える観点が培われてきたが<sup>473)</sup>、これらを弥生墓制から出土する底部穿孔壺との関わりの中でとらえる視点はやはりなかなか生まれてこなかった。これまで弥生時代から古墳時代前期にかけて東西の土器配置の様相を整理した結果、古墳時代前期古相段階において規格的なつくりをした底部穿孔壺や大型円筒器台によって围绕配列を行っていると考えられる事例は各地域にあり、吉備系特殊土器・埴輪類を使用している墳墓は吉備から大和にかけてのごく限られた地域であり、先に述べた数ある地域的な围绕配列のうちの一つにすぎないことが明らかになりつつある。このことから古墳時代前期古相段階においては「埴輪」のみを特別視するのではなく、数ある土製器物の配置の中でその位置づけを行うことが肝要であると考ええる。本章では围绕配列の全体の様相を埴輪・土器にかかわらず、初源問題も含めて整理してみたい。

### 註

468) 「儀器」と「祭器」の定義については、本書第2章第1節参照。

469) 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第104号

古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号

470) 橋本博文 1988「埴輪の性格と起源論」『論争・学説日本の考古学 第5巻古墳時代』雄山閣

- 471) 中村春寿・上田宏範 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊
- 472) 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号
- 473) 小林三郎 1972「古墳出土の土師器」『土師式土器集成』本編2
- 岩崎卓也 1973「古式土師器再考」『史学研究』91 東京教育大学文学部
- 塩谷 修 1983「古墳出土の土師器に関する一試論―関東地方の古式土師器を中心として」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編  
前掲註469文献 (古屋1998) 参照

## 第1節 围绕配列の初源問題

古墳時代の围绕配列に使用された器物は「円筒埴輪」（一部器財埴輪を含む）と「底部穿孔壺」の二者に限定されるので、弥生時代にその起源を探すとすれば、まず底部穿孔壺の配置状況に注目する必要がある。围绕配列の初源はおそらく主体部周辺に壺を配列したものと考えられ、その完成された姿が桜井茶臼山古墳の主体部方形区画列<sup>474)</sup>だと考えられる。長らくこの前段階の姿が明らかにされていなかったが、1999～2000年にホケノ山古墳の中心主体部の発掘調査が行われてようやくその初源の姿が浮かび上がってきた。

**ホケノ山古墳**<sup>475)</sup>（奈良県桜井市、図版131）は奈良盆地東南部の纏向古墳群中の1基で全長80mの前方後円墳である。径60mの後円部に短い前方部が付く。円丘は正円に近く3段の段築を備えていることから、構造上古墳と呼んでも差し支えない墳丘を有する。中心主体部は後円部墳頂中央に設けられた「石囲木槨」であり、槨内から画文帯神獣鏡・内行花文鏡・素環頭大刀・ほか刀剣類・銅鏃・鉄鏃・鉈・鏝などの副葬品が出土した。土器は槨内から小型丸底埴3個体、畿内系加飾壺8個体が出土している。問題なのは加飾壺で、槨内の壁面沿いに一定間隔で出土している。これらの土器の破片の一部はかなり上方からも出土しているため、報文ではもともと槨上部に一定間隔で配置されていたと想定している。つまり原位置からの出土ではないが、状況から槨上部での方形围绕配列が想定でき、これが後の主体部上における方形区画配列の原型であると捉えておきたい。ただし、重要なことはホケノ山古墳中心主体部では棺槨が腐朽してできた墓壇内の空間に多量の礫が充満しており、当初それらは、楯築墳丘墓の円礫堆のように、主体部上にある程度の高さまで積まれていたと考えられることである。つまり槨底面近くで出土した加飾壺は直接ではないにしても、主体部上の礫堆によって覆われ外部からは見えなかったと思われることである。後の围绕配列は、器物が外表に置かれ、埋葬区域を外部から視覚的に隔離する意識もあったと思われるが、ホケノ山例では内部に封じ込まれるために、呪的な効力を実質的に期待された配列であったのだろう。また、胴部下半に焼成後穿孔が確認されている例もあり、弥生時代の儀器的呪的な性格を多分に残していると考えられる。

桜井茶臼山古墳の主体部方形围绕配列とホケノ山古墳の槨上方形围绕配列の間にはおそらく未発見の数例が介在すると思われるが、系譜的には同一のものと考えられる。では、ホケノ山例以前に围绕配列は存在したのだろうか。ホケノ山古墳の年代は庄内式後半期から、降っても布留0式の間で捉えられる可能性が高いので、庄内式前半期にさかのぼる纏向古墳群中に類例があった可能性があるが、現在のところは未発見である。直接的な源流はホケノ山以前は不明といわざるを得ない。しかし、围绕配列につながるような壺の配置行為はこれまで述べてきた弥生墓制の土器配置の中に充分見出せると考えている。

そのうちの一つは、畿内の方形区画墓に見られた穿孔壺を墳丘コーナーなどに立て置く行為である。先述したとおり明らかにその場所を意識して埋め据えているので、呪的な効力を期待して墓域守護のために配置されたものであろう。配置される土器量は少ないが、その役割は圍繞配列に通じるものがある。ただし、両者の系譜をつなぐ資料は今のところ明らかではない。

より主体部に近い位置に複数の壺を配置したと考えられる例は、兵庫県加古川市西条 52 号<sup>476)</sup>が挙げられる。詳細が報告されていないものの、壺 5 個体を主体部周辺に埋め据えていたようで、圍繞配列の初源に関わる可能性は充分ある。また、徳島県鳴門市萩原 1 号墓<sup>477)</sup> (図版 13) では主体部周辺の二隅に大型壺の破片を集積している。のこりの二隅は削平されているので、もともとは四隅に置いていたのかも知れない。壺の破片は同一個体のものが分かれて出土しているため、完形ではなくあらかじめ破碎して置かれたことが明らかになっている。その意味では上記の圍繞配列の祖形とは考えにくい、大型壺の破片を主体部周辺に置いていることから何らかの系譜上の関わりがあるかもしれない。この二つの墳墓は時期が弥生後期末～庄内式前半に位置づけられ、突出部の付く前方後円形墳丘墓の初源形態を有することも共通しているため、注意しておく必要はあるだろう。

また、関東地方の方形周溝墓においても底部穿孔壺がよく出土するが、これらの中に量的に他を大きくしのぐ例がいくつかある。代表例はたびたび触れた王子ノ台 5 号方形周溝墓<sup>478)</sup> (神奈川県平塚市、図版 64) である。底部に焼成後穿孔を施した壺 16 個体前後を周溝上層に配置している。平面的には偏ることなく各所に配置していることから、方台部を囲むように配置したことは間違いないようだが、前期古墳における畿内系底部穿孔二重口縁壺を使用した圍繞配列の祖形としての位置づけはできないだろう。土器の系譜もことなるが、後段で述べるとおり後者は築造直後に方台部縁辺に配列していたと考えられるためである。

おそらく、在来の底部穿孔壺の配置を量的に拡大した結果、取り囲むように配置したものと思われる。ただし、古墳時代になって西方から新たに圍繞配列を行う風習が到来したときに、思想的にはそれらを受け入れやすい土壌がすでに関東地方にあったと考えられることは重要であろう。東日本において底部穿孔壺の圍繞配列が盛んに行われるのは、こうした弥生時代から醸成された環境がその背景にあるとも思われる。

## 註

474) 中村春寿・上田宏範 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 19 冊

475) 檀原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社

476) 西条古墳群調査団 1964『西条古墳群調査略報』

477) 菅原康夫編 1983『萩原墳墓群』徳島県教育委員会

478) 東海大学校地内遺跡調査団編 2000『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』

## 第2節 吉備系特殊器台形埴輪の使用状況

吉備系特殊器台形土器・特殊器台形埴輪は原位置を保って出土する例は極めて少なく、圍繞配列の研究上重要な位置を占めるにも関わらずその使用状況は謎に包まれた部分が多い。ひとつひとつの遺跡の状況について確認してみよう。

吉備における宮山型およびそれに併行する向木見型の使用状況は先に述べた。宮山墳丘墓・矢藤治山墳丘墓がそれにあたり、特殊器台の「外方配置」の傾向は見られたものの、圍繞配列が行われたかどうかは定かではない。ただし、この段階で他の供膳具が出土しなくなる。

都月型特殊器台形埴輪の段階に至ると分布の比重が備中から備前へと移る。

**都月坂1号墳**<sup>479)</sup> (岡山市、図版 122) は尾根上に立地する、全長 33mの前方後方墳である。二段築成で葺石を備える。主体部は後方部中央に設けられた竪穴式石室で副葬品として碧玉製管玉・鉄剣1本・鉄斧1点が出土した。調査者の近藤義郎によると当古墳の特殊器台形埴輪は原位置を示すような出土状況ではなかったが、その破片の分布状況によっておおよその配置状況が推定できるという(近藤 1986)。それは墳頂周縁、段と段上斜面との接点に原位置が求められ、出土個体数は 20～30 本と墳丘規模に比して多いため圍繞配列が行われたと考えて良いだろう。

**七つ丸1号墳**<sup>480)</sup> (岡山市、図版 123) は全長 45.1mの前方後方墳である。段築は無く、葺石は流出が激しく残存する範囲は少ない。埋葬施設は後方部に2基の竪穴式石室、前方部に1基の竪穴式石室がつくられており、それぞれ割竹形木棺を内蔵していた。中心主体の後方部第1石室は古銅輝石安山岩の板石を小口・長手積みする丁寧なものだが、大戦中の陣地構築により攪乱されていた。石室内に残存していた副葬品は板状鉄斧を中心とする鉄製工具・農具類のみであったが、攪乱土中から方格規矩四神鏡・夔鳳鏡の鏡片、碧玉製管玉1、大刀・鉄剣・鏃など鉄製武器の残片、針2などが出土した。また、後方部第2石室からは平縁変形獣形鏡1面のほか鉄製工具・農具類が出土している。前方部石室には副葬品はなかった。墳丘斜面から都月型特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が出土している。くびれ部・後方部北斜面に多く、墳丘裾の配置は考えられない。おそらく墳頂に配置されていたものと思われるが出土量は多くなく、圍繞配列かどうかはわからない。

この他、吉備において都月型特殊器台形埴輪を出土する古墳としては岡山市浦間茶臼山古墳<sup>481)</sup> (図版 129)、宍甘山王山古墳<sup>482)</sup>、網浜茶臼山古墳<sup>483)</sup> (図版 129)、操山 109 号墳<sup>484)</sup>、中山茶臼山古墳<sup>485)</sup>などが挙げられるが、これらは表面採集による破片資料に留まり、配列状態を推定できるものではない。

播磨では**権現山 51 号墳**<sup>486)</sup> (兵庫県揖保郡御津町、図版 124) が特殊器台形埴輪を出土した古墳として著名である。当古墳は全長 42.7mの前方後方墳で段築は無く、裾に列石をめぐらしている。主体部は後方部中央に墳丘主軸に直交して設けられた竪穴式石室で、凝灰岩の長方体状の割り石を小口積みするものである。木棺は舟形木棺が想定されている。副葬品は5面の三角縁神獣鏡をはじめとしてガラス小玉 220 点、鉄製武器類、石突、銅鏃、鉄製工具・農具類、砥石のほか、紡錘車形石製品1点、不明貝製品1点なども含まれ豊富な内容である。特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の破片は墳丘の各所から数百点にも及ぶ量が出土している。主に主体部の攪乱埋土中、墳丘斜面の盛土流出土層などからの出土が多いのでおそらくは後方部墳頂に配置されていたのだろう。墳頂平坦面は削平を受けているため、これらが



樹立されていた痕跡は発見されなかったが、圍繞配列されていた可能性が高いと考えられる。

大和においては宮山型特殊器台形土器と都月型特殊器台形埴輪が複合して使用される例があり、またこれらに普通円筒埴輪が加わる例もある。

**箸墓古墳**<sup>487)</sup> (奈良県桜井市、図版 125) は全長 280m の最古の巨大前方後円墳である。後円部径は 150m を測り、撥形に開く前方部をもっている。後円部の段築は 5 段と推定され葺石を備えている。埋葬施設に関わるデータは無いが、裾部の発掘により前方部における基壇の存在と、後円部東側における周溝をわたる土橋の存在が明らかにされている。箸墓古墳では、従来から宮山型特殊器台形土器・都月型特殊器台形埴輪・特殊壺・底部穿孔二重口縁壺の存在が知られていたが、1998 年の台風による風倒木の被害調査を宮内庁書陵部が実施したことにより、多くの埴輪・土器類が風倒木の根起きから採集され、それらの形式的な内容と分布状況のおおよそが明らかになった。この時調査された根起き地点は全 29 地点に及ぶが、それらはおおよそ 3 グループに分けられる。すなわち①No.1～19 の前方部頂部および前端斜面にかけて、②No.20・22 の南側くびれ部斜面、③No.22～29 の後円部第 5 段斜面から第 4 段上面のテラスにかけてである。①の前方部墳頂ではそのほとんどが無文の焼成前底部穿孔二重口縁壺によって占められる。破片の数から相当数の個体が配置されていたものと思われる。前方部頂部前端は前方部の最高所で他から土器片が崩落することは考えられない。そのような場所で破片が出土したことから、この前方部平坦面前端頂部に配置されていたことは間違いないとされている。一方③の後円部墳頂円丘壇(第 5 段)付近では宮山型特殊器台形土器・都月型特殊器台形埴輪の破片がほとんどを占め、逆に無文の二重口縁壺の破片は見られない。風倒木は古墳の高い位置に集中しているため、その他の場所の破片の分布状況は不明であるが、一応これらの様相から後円部墳頂付近には吉備系特殊土器類・特殊器台形埴輪が配置され、前方部墳頂付近には無文の底部穿孔二重口縁壺が配置されていたとみて良いだろう。なお、前方部墳頂から伯耆系特殊土器類<sup>488)</sup>に伴う長頸壺に類似した形態の長頸壺片が出土しており注意を引く<sup>489)</sup>。伯耆系に特徴的な竹管文・綾杉文などは見られないが、頸部突帯に斜状刺突を連続して施している。このように箸墓古墳では吉備系・畿内系のほか他地域の土器が若干含まれている可能性がある。

**中山大塚古墳**<sup>490)</sup> (奈良県天理市、図版 127) は全長 132m の前方後円墳である。後円部径 73m、高さ 13m を測り、後円部は 2 段築成、葺石をもつ。後円部中央に巨大な墓壇があり、輝石安山岩を小口積みした竪穴式石室が検出された。副葬品は半肉彫獣帯鏡片 1 点と大刀・鉄刀・鉄槍・鉄鏃など鉄製武器類が出土しているが、石室の大半は攪乱されており、もともとの副葬品の全容は不明である。埴輪・土器類は①石室被覆石材上、②後円部墳頂および斜面、③後円部裾、④前方部前端から出土している。①は天井石を覆う石材上に直接散布された破片であり、宮山型特殊器台形土器 1 個体、特殊壺 1 個体、中山型とも言うべき特異な大型円筒器台 2 個体の計 4 個体の特殊土器類で構成されている。②はもともと出土量が多く、有段口縁円筒埴輪、普通円筒埴輪、都月型特殊器台形埴輪、特殊壺、二重口縁壺で構成される。報文によれば円筒埴輪・器台形埴輪の個体数はあわせて 50 個体にも及び、後円部墳頂において圍繞配列が行われていた可能性は強いだろう。ただし、墳頂は中世の城郭遺構によって攪乱を受けており、もともとの配列状態は確かめられていない。また、③・④のごとく墳丘裾においても円筒埴輪の配列があったと考えられる。③・④の埴輪は後円部墳頂のものと胎土が異なるため、墳頂からの転落とは考えられないという。

**葛本弁天塚古墳**<sup>491)</sup> (奈良県橿原市、図版 126) は墳丘の遺存状況が良くないが、およそ全長 68m ほどの前方後円墳とされ、径 50m ほどの後円部に短い前方部がとりつく形態が推定されている。墳丘裾部の一部が発掘調査され、埴輪・土器類が出土した。宮山型特殊器台形土器 10 個体以上、特殊壺 8 個体以上、底部穿孔二重口縁壺 5 個体、底部穿孔広口壺 1 個体があり、都月型特殊器台形埴輪の破片が若干伴っている。これらは細かい破片ではあるが、個体ごとにまとまっており、よく接合するものもある。円筒器台の脚台部片が少ないため、もともと墳頂において脚台部を土中に埋める形で立て置かれていたものが、周溝中に崩落したものと考えられている。しかし、出土状況はあくまでも器台と壺がセットのまま組み合った状態を示しているため、報文では組み合った状態のうちに人為的に破碎・散布されたと解釈している。このような行為が儀礼として行われたものか、葬儀終了後に心無い輩によって行われたのかについては述べられていない。いずれにせよ限られた面積の調査に関わらず、多くの個体が出土していることから、圍繞配列に使用されたものと思われる。

**西殿塚古墳**<sup>492)</sup> (奈良県天理市、図版 130) は全長 230m、後円部径 140m、高さ 16m を測る巨大な前方後円墳である。墳丘内の発掘調査は行われていないが、測量図から判断する限りは自然地形の斜面下方となる西側において後円部 4 段、前方部 2 段に築成され、後円部と前方部の墳頂にそれぞれ方形壇を設けている。埴輪類については宮内庁書陵部による立ち入り調査による表採品と、天理市による古墳周辺の発掘調査で出土した資料でその内容が知れる。墳丘内の調査では後円部を中心にして宮山型特殊器台形土器・都月型特殊器台形埴輪・特殊壺の破片がおよそ 100 点あまり表採された。また、墳丘周辺の調査区からは円筒埴輪片が出土している。これらは受け口状の口縁部を持つものが多く含まれ、古式の様相を呈すが、文様は口縁部に施された鋸歯文のみで、これがない個体も多い。これらのことから、後円部の中心部付近において装飾性の強い特殊器台形土器・埴輪を配置し、墳丘の周縁に円筒埴輪を配置したものと考えられる。両者には厳密な使い分けが為されていたことになる。

吉備・播磨・大和以外の地域では山城の元稲荷古墳、近江の壺笠山古墳において吉備系特殊器台形埴輪が確認されている。

**元稲荷古墳**<sup>493)</sup> (京都府向日市、図版 128) は全長 94m、後方部辺 54m、高さ 7 m の前方後方墳である。後方部墳頂に竪穴式石室があり、鉄製武器類・銅鏃・鉄製工具類・土師器壺 1 個体などが出土したが、盗掘を被っており本来の副葬品の全てではない。埴輪類は墳丘各所からは出土せず、唯一前方部墳頂に特殊器台形埴輪と壺形土器が集中して置かれた区域があった。置かれていたのは都月型特殊器台形埴輪の最終型式ともよぶべきもので、文様が省略された個体もある。また、これらに底部穿孔二重口縁壺がともない、それぞれ 6～7 個体ずつ置かれていたようだ。

**壺笠山古墳**<sup>494)</sup> (滋賀県大津市) は径 48m、高さ 5 m の大型円墳である。都月型特殊器台形埴輪の破片が出土しているが、少量で配置状況は不明である。

## 小結

これまで述べてきた様相を整理すれば、都月型特殊器台形埴輪は原位置を保って出土した例は全く無いものの、量的に多く、また墓域の中で広域にわたって出土する例が多いので圍繞配列に使用された可能性が高いと考える。また、大和においては宮山型特殊器台形土器・底部穿孔二重口縁壺・円筒埴輪な

どと併用して用いられる例があり、中山大塚古墳では独自の形態の大型円筒器台を使用している。宮山型特殊器台と円筒埴輪の中間型式としての位置づけが可能ではないだろうか。それはさておき、宮山型・都月型などの装飾性の強い一群は、箸墓・西殿塚などの巨大古墳あるいは中山大塚などの大型古墳では後円部埴輪頂付近のみに配置されたようだ。そして、中山大塚古墳・西殿塚古墳において裾付近から出土しているのは円筒埴輪のみであるから、両者の使い分けは明瞭であろう。裾に囲繞配列する場合は後円部埴輪の何倍もの量を必要とする。大型古墳・巨大古墳ではそれこそ膨大な量となるために装飾の省略が行われた。このことが円筒埴輪の成立の背景ではないかと思われる。装飾性の強い、より呪力の高い祭器は埋葬施設に近い部所に限定して配置されたのだろう。

また、畿内では各古墳によって配置方法に個性が見られる。箸墓では後円部に特殊器台形埴輪、前方部に二重口縁壺という使い分けがなされていたし、中山大塚古墳では宮山型と「中山型」を主体部上に破砕して配置し、埴輪平坦面では都月型と円筒埴輪が配置されていた。元稲荷古墳では囲繞配列せずに前方部埴輪頂に都月型と二重口縁壺の組合わせで置かれていた。このように様々な使い分けがされており、円筒埴輪成立前夜の畿内の囲繞配列はその配置方法が確立していなかったと言える。吉備系円筒器台(特殊器台形土器・埴輪)を使用しない、二重口縁壺のみの囲繞配列もあったようなので、かなり複雑な様相をもっていたといえる。本書では、このような特殊器台形土器・特殊器台形埴輪・円筒埴輪・特殊壺・二重口縁壺などのいずれかを組み合わせて使用した囲繞配列を「吉備・大和型囲繞配列」と総称しておきたい。ただし、二重口縁壺のみの囲繞配列はこれに含めないこととする。

## 註

- 479) 近藤義郎 1986「都月坂1号墳」『岡山県史』
- 480) 近藤義郎・高井健司編 1987『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査団
- 481) 近藤義郎・新納泉編 1991『岡山市浦間茶臼山古墳』真陽社
- 482) 宇垣匡雅 1988「吉備の前期古墳Ⅱ 宍甘山王山古墳の測量調査」『古代吉備』第10集
- 483) 宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査」『古代吉備』第12集
- 484) 前掲註483文献参照
- 485) 近藤義郎 1986「中山茶臼山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
- 486) 近藤義郎・新納泉ほか 1991『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会
- 487) 笠野 毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号  
白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集  
徳田誠志・清喜裕二 1999「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業(復旧)箇所調査」『書陵部紀要』第51号  
寺沢薫・堀大介ほか 2002『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第89集 橿原考古学研究所
- 488) 東森市良・花谷めぐみ 1992「徳楽方墳―出土土器を中心として―」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』  
島根大学法文学部考古学研究室  
本書第4章第2節参照
- 489) 前掲註487文献 (徳田・清喜1999) 第13図42土器参照
- 490) 橿原考古学研究所編 1996『中山大塚古墳 附篇 葛本弁天塚古墳・上の山古墳』奈良県教育委員会

- 491) 前掲註 490 文献
- 492) 天理市教育委員会 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集
- 493) 元稻荷古墳：京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号
- 494) 丸山竜平 1987「巨大古墳の発生—近江壺笠山遺跡と埴輪の起源」『東アジアの古代文化』大和書房

### 第3節 底部穿孔壺の圍繞配列

圍繞配列が出現してからしばらくの間、特殊器台形埴輪・円筒埴輪類による「吉備・大和型圍繞配列」はごく限られた地域でしか行われなかった。そのころ、北部九州・四国北東部・関東・東北などの地域では底部穿孔壺を使用した圍繞配列が行われていたと考えられる。それらの様相を以下にまとめてみよう。

#### 畿内における底部穿孔壺の圍繞配列

前期古相段階には畿内では、とくに大和を中心として特殊器台形土器・特殊器台形埴輪・円筒埴輪・特殊壺などを使用した「吉備・大和型圍繞配列」が行われたことは前節で既に述べたが、これらとは別に畿内系二重口縁壺を使用した圍繞配列の系列を別に追うことができる。この系列は「吉備・大和型圍繞配列」から二重口縁壺だけを取り出した省略形ではなく、ホケノ山古墳にみられるように穿孔を施した加飾壺の系列上にあるものであろう。箸墓古墳において両者の系列が前方部と後円部にそれぞれ区別して配列されていたことは、このこれを別系列とする大きな根拠となったといえよう。以下に年代順に類例を見ていきたい。

**ホケノ山古墳**<sup>495)</sup> (図版 131) の詳細はすでに第1節の圍繞配列の初源問題の項で述べたとおりである。後円部墳頂の埋葬施設内に、上方から落ち込んだ状態で畿内系加飾壺8個体が出土した。加飾壺は一定間隔を保って方形に出土しているため、槨上および主体部上方での方形圍繞配列が想定できる。加飾壺は胴部などに焼成後の穿孔が施されている。

**加美14号墓**<sup>496)</sup> (大阪市、図版 132) は全長 13.9m以上、後方部幅 11m、後方部長 9.5mの区画墓である。周囲を周溝が巡っており、約 40cm 前後の盛土が確認されているが、方台部からは埋葬施設が見つからないため、本来はさらに高い墳丘があったと思われる。周溝から畿内系加飾壺(狭帯口縁B形式)・畿内系無文二重口縁壺・山陰系二重口縁壺・直口壺・手焙型土器、庄内型甕が出土している。土器の型式的特徴は纏向遺跡におけるいわゆる「辻土坑4下層」出土一括資料に近いものであり、寺沢薫編年で布留0式期に相当すると考えられている。実測図が公表されているのは出土土器の一部であるが、その中に底部が穿孔された中型畿内系二重口縁壺が2個体が含まれている。調査者によればこれらは焼成後に底部穿孔されており、同様な二重口縁壺が全部で10点以上出土しているという。出土位置や出土状況などの詳細な情報は知れないが、圍繞配列の可能性は高いといえよう。

**椿井大塚山古墳**<sup>497)</sup> (京都府相楽郡山城町、図版 134) は全長推定約 190m、後円部径約 110m、高さ約 20mの前方後円墳である。典型的な丘尾切断型の造墓方法によって築造されているが、前方部前端は宅地化され、その形状の詳細はわからないところが多い。後円部は多いところで4段に築成され、葺石が存在する。また、後円部を鉄道路線による切り通しが横切っており、1953年にその切り通し斜面の法面傾斜緩和工事中に竪穴式石室と多量の鏡を含む副葬品が発見されたことは著名である。竪穴式石室は後円部墳頂中央部に設けられた、長大なものである。副葬品は、三角縁神獣鏡 32面以上、画文帯対置式神獣鏡 1面、方格規矩四神鏡 1面、内行花文鏡 2面をはじめとして、冠と思われる花卉形装飾付鉄製品 1点、鉄製刀剣類、鉄鏃 200点以上、銅鏃 16以上、小札革綴冑 1式、有機質短甲の引き合い板と思われる鉄板、鉄製農工漁具類、が出土しており大変豊富なものである。これまでの墳丘各所の調査では埴輪片が全く出土していないが、後円部墳頂及び斜面において二重口縁壺の破片が出土しているため、後円部墳頂に二重口縁壺による圍繞配列がなされ

ていた可能性がある。前期古相新段階に編年される。

**桜井茶臼山古墳**<sup>498)</sup> (奈良県桜井市、図版 133) は全長 207m、後円部径 110m、高さ 22m以上の前方後円墳である。後円部 3 段、前方部 2 段に築成し、葺石をそなえる。前方部が細長くのびるいわゆる柄鏡形の前方後円墳である。後円部墳頂中央に長大な竪穴式石室を設けている。石室内は盗掘されていたが、内行花文鏡・神獸鏡・半円方格帯鏡などの鏡片若干、碧玉製玉杖 1 式、腕輪形石製品片、玉類、鉄製武器類、銅鏃などが出土している。竪穴式石室の周囲に底部穿孔二重口縁壺が方形に圍繞されていた。この方形圍繞配列の規模は 10.6×13m である。壺形土器同士はほとんど触れ合うぐらいに近接して置かれていたようで、短辺に 24～25 個体、長辺で 29～30 個体が確認されている。この方形土器圍繞配列は石室直上を覆う方形土壇の外側の裾にあり、土壇周辺の排水のため敷設されたと考えられる帯状の小砂利層に下腹部を埋めていたと推測されている。個体ごとの破片は比較的まとまっていることから完形品が置かれていたと考えられている。また、底部の穿孔は焼成前に施されたものである。この通称「茶臼山型」壺が方形圍繞配列された状態が 1949～50 年の発掘調査によって発見され、圍繞配列が円筒埴輪だけではなく底部穿孔においても行なわれたことがはじめて明らかにされたという点で、学史上重要な位置を占める資料である。古墳は前期中相古段階に編年できる。

**安威 1 号墳**<sup>499)</sup> (大阪府茨木市、図版 135) は墳長 45m、後円部径 30m、高さ 5.2mの前方後円墳である。後円部を 3 段に築成し、葺石を備えている。後円部墳頂に 2 基の粘土槨があり、調査された 1 号槨から碧玉製石釧 1 点、車輪石 1 点が出土している。埴輪は存在しないが、墳丘各所から焼成前底部穿孔二重口縁壺片が多数出土している。墳丘の全域から出土しているということなので、圍繞配列に使用されたと考えて良いだろう。古墳は壺の型式観から前期中相に比定できよう。

以上が、畿内における底部穿孔壺による圍繞配列を行っていると考えられる墳墓であるが、円筒埴輪を使用する古墳の数に比べ極端に少ないことが分かるだろう。しかしながら、椿井大塚山古墳や桜井茶臼山古墳のように巨大な前方後円墳も含まれることから、決して下位の墓制において規制を受けて行なわれたものではなく、別系統の祭祀的思想の下で行われたものと捉えておきたい。しかしながら、そのメカニズムの詳細は今後の課題である。なお、加美 14 号墓のような小型墳墓の墓域における前方後方形墳墓において圍繞配列が行われている様相は後段で述べる関東・東北地方の初期様相と共通する。これら初期の壺による圍繞配列が畿内と東日本で系譜上何らかの関わりがあった可能性が高いと考えられよう。

一方、前期中相以降は奈良県天理市上殿古墳<sup>500)</sup>、大阪府羽曳野市御旅山古墳<sup>501)</sup>、茨木市将軍山古墳<sup>502)</sup>、八尾市美園古墳<sup>503)</sup>などにおいて底部穿孔壺が円筒埴輪とともに使用されている。廣瀬寛によれば、前期中ごろに編年される御旅山古墳以降、畿内の壺形埴輪は東四国地域の影響を強く受けるという<sup>504)</sup>。その時期はちょうど底部穿孔壺の頸部が発達し長胴化しはじめる時期と重なるので、円筒埴輪に伴いはじめることともあわせて、それ以前の底部穿孔壺の圍繞配列とは一線を画していると言えよう。

## 註

495) 樞原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社

496) 田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『加美遺跡の検討』古代を考える 43 古代を考える会

497) 近藤義郎ほか 1986『椿井大塚山古墳』山城町埋蔵文化財調査報告書 3

- 京都大学文学部考古学研究室 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部博物館
- 樋口隆康 1998『昭和 28 年椿井大塚山古墳発掘調査報告』山城町埋蔵文化財調査報告書 20
- 中島正ほか 1999『椿井大塚山古墳』山城町埋蔵文化財調査報告書 21
- 498) 中村春寿・上田宏範 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 19 冊
- 499) 奥井哲秀 1982「茨木市安威 0 号墳、1 号墳の調査」『大阪文化誌』第 15 号 (財)大阪文化財センター
- 廣瀬 覚 2005「安威 1 号墳出土の壺形埴輪」『将軍山古墳群 I』新修茨木市史 史料集 8 茨木市
- 500) 伊達宗泰 1966「和邇上殿古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 23 冊 奈良県教育委員会
- 501) 大阪府教育委員会 1968『羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』
- 大阪府教育委員会 1971「羽曳野市壺井御旅山古墳の調査」『南河内石川流域における古墳の調査』大阪府文化財調査報告第 22 輯
- 502) 茨木市 2005『将軍山古墳群 I』新修茨木市史 史料集 8
- 503) 渡邊昌宏編 1985『美園』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
- 504) 廣瀬 覚 2005「壺形埴輪の大型化とその背景—将軍山古墳出土壺形埴輪の検討から—」『将軍山古墳群 I』
- 新修茨木市史 史料集 8 茨木市

## 吉備における底部穿孔壺の圍繞配列

吉備における底部穿孔壺の圍繞配列については君嶋俊行がまとめているので<sup>505)</sup>、ここではその成果によりながら記述することにする。

君嶋は前期古墳で該当する例として以下の 4 古墳を挙げている。

**川東車塚古墳**<sup>506)</sup> (岡山県真庭郡落合町、図版 136)。全長 59m の前方後円墳。墳丘の各所から底部穿孔二重口縁壺が 80 個体以上出土していることから、圍繞配列と考えられる。配置位置は墳頂平坦面周縁と考えられる。壺は若干長胴化傾向にある。

**田邑丸山 2 号墳**<sup>507)</sup> (岡山県津山市)。墳頂 40m の前方後方墳。墳丘各所のトレンチから底部穿孔二重口縁壺が出土。頸部や肩部に円形竹管文が施されたものがある。墳丘上に配列されていたと推測できる。

**殿山 8 号墳**<sup>508)</sup> (岡山県総社市)。13×12m の方墳。周溝から底部穿孔二重口縁壺が複数個体出土している。肩部に円形竹管文を有する個体がある。また、若干長胴化傾向にある。

**西山 1 号墳**<sup>509)</sup> (岡山県真備町)。径 24m の円墳。周溝からやや長胴化しているとおもわれる底部穿孔壺片が出土した。口縁部に円形竹管文が施されている個体がある。

以上の 4 古墳であるが、年代的には前期中相以降のものに限定され、すでに円筒埴輪がある程度普遍化した段階ではじめて底部穿孔壺の圍繞配列が定着していることが注目できる。君嶋はこの現象について、九州や関東など底部穿孔壺の圍繞配列が盛んな地域からの影響もみとめ難いとし、上位の首長によって円筒埴輪の使用が規制された結果と判断している。このような開始時期の問題や、4 古墳中 3 基から出土した底部穿孔壺に円形竹管文による装飾が見られることも、吉備の壺による圍繞配列を特徴付けている。よってこのような底部穿孔壺の圍繞配列を「**美作型圍繞配列**」として呼称する。備中に含まれる資料もあるが、おおそ吉備の山間部に分布が偏っているため、「美作型」としておく。

註

- 505) 君嶋俊行 2004「川東車塚古墳における二重口縁壺形土器の圍繞配列」倉林眞砂斗・澤田秀実・君嶋俊行編『川東車塚古墳の研究』吉備人出版
- 506) 倉林眞砂斗・澤田秀実・君嶋俊行編 2004『川東車塚古墳の研究』吉備人出版
- 507) 小郷利幸編 2000『田邑丸山古墳群 田邑丸山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書 67 津山市教育委員会
- 508) 平井勝編 1982『殿山遺跡 殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 47 岡山県教育委員会
- 509) 正岡睦夫・山麿康平・平井勝 1979『西山遺跡』真備町教育委員会

#### 四国北東部における底部穿孔壺の圍繞配列

当地域における圍繞配列は畿内と別系統で出現した可能性がある。それは、萩原1号墓で既に述べたような主体部周辺における壺破片配置が見られたこともあるが、鶴尾神社4号墳をはじめ、伝統的な在地の土器様式の系譜上にある壺を使用して圍繞配列を行っている墳墓ばかりであり、畿内系二重口縁壺を使用した圍繞配列は布留式古段階併行期には見当たらない。

**鶴尾神社4号墳**<sup>510)</sup> (香川県高松市、図版 137) は石清尾山山塊の南側に突出した尾根上に立地する。全長 40m の前方後円形の積石塚である。後円部径 18.7m、高さ 4m を測る。後円部の中央に東西軸の竪穴式石室が構築されている。安山岩板石を小口積みしている本格的な竪穴式石室である。副葬品として獣帯方格規矩四神鏡が1面出土している。この鏡は手ずれが激しく、一度割れた鏡に補修孔を開け、紐でつなぎとめて使用した跡があり、伝世鏡の根拠となったことで著名である。土器は主体部上から出土した土器類と墳丘周囲から出土した多量の底部穿孔壺がある。前者については弥生時代の土器配置の項(第3章第3節)でふれたので詳しくは繰り返さないが、下川津B類の細頸壺を含む一群が主体部上に配置されていたと思われる。墳丘周辺の底部穿孔壺の出土状況については、報文中で「墳裾付近の墳丘内外からは、ほぼ同種の壺のみが多量に出土した。原位置をとどめて出土したものはなかったが、前方部西側墳裾や東西くびれ部付近の墳丘内外に特に多かったことからみて、墳裾部ないしは、墳裾に沿った墳丘上に立て並べられていたものと思われる」と述べられているから、圍繞配列と考えて良いだろう。使用された壺は、肩の張る長胴化傾向の胴部をもち、上方に向かってすぼまる頸部に逆ハの字に開く口縁部が付くという形態を呈しており、下川津B類土器に属する広口壺である。底部には直径1cmほどの小さな焼成前穿孔が施されている。時期は布留0式併行期とみられる。

**野田院古墳**<sup>511)</sup> (香川県善通寺市、図版 140) は全長 44.5m の前方後円形の積石塚である。後円部径 21.0m、後円部高 23.5m、前方部長 23.5m を測り、前方部が細長い四国北東部特有の形態を呈している。後円部墳頂から東西軸の並行する2基の竪穴式石室が検出された。第2主体部からガラス玉・碧玉製管玉・鉄剣などが出土している。また、第2主体部上から小型の畿内系甕や直口壺の破片が出土している。後円部周囲から多量の広口壺が出土しており、概報によれば「その出土状況から、1段目の後円部テラス部に等間隔に並べられていたよう」であり、圍繞配列と見てよいであろう。壺は頸部から口縁部にかけてラッパ状に開く、東四国系土器に特有な広口壺で、底部には穿孔が見られる。報文では正式には焼成後穿孔としているが、焼成前穿孔の可能性も示唆されている。

**宮谷古墳**<sup>512)</sup> (徳島市、図版 138) は全長 37.5m、後円部径 25m、高さ 3m の前方後円墳である。後円部中



央に竪穴式石室があり、重圈文鏡1面と玉類・鉄製武器・鉄製工具などが出土している。また、前方部斜面から3面分の三角縁神獣鏡片が出土している。土器はくびれ部から前方部の墳裾を中心に同種の壺が多量に出土しており、圍繞配列と考えられる。器壁の厚い口縁部が上方に立ち上がり、その外面に横方向の凹線を数条施している。

**前山1号墳**<sup>513)</sup> (徳島市、図版139) は全長17.7m、後円部径9.7mの小さな前方後円墳である。後円部に竪穴式石室が存在するが盗掘により攪乱されており、副葬品は残されていなかった。墳丘の各所から壺が出土している。そのうち後円部平坦面東寄り中央付近で壺の破片がほぼ原位置を動いていないと思われる状態で出土したという。おそらく墳頂の平坦面に並べられていたと考えられる。壺は宮谷古墳のものと同系統のものと思われるが、口縁部の上方へのつまみ出しがやや弱く、外面の凹線も省略されている。前山1号墳においても圍繞配列が行われたものと考えられる。

以上に見てきたように四国北東部では在地の系統の壺を使用した圍繞配列が行われていたと考えられる。讃岐では下川津B類および東四国系の壺を、阿波では独自の複合口縁壺を使用しており、それぞれ「**讃岐型圍繞配列**」、「**阿波型圍繞配列**」と呼称するべきかもしれない。これらは畿内系二重口縁壺を使用しないことから、四国北東部の独自性を保とうとした動きがあったと思われる。円筒埴輪による圍繞配列は前期中相を待たなければならないことからこのことが分かる。

#### 註

510) 渡部明夫・藤井雄三 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市歴史民俗協会

511) 笹川龍一 2000「野田院古墳の発掘調査成果」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集

笹川龍一 2003『史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会

512) 徳島市教育委員会 1990「宮谷古墳」『文化財だより』No.23・24

三宅良明 1991・92「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報』42・43

513) 高島芳弘 2000「前山古墳群の発掘調査成果」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集

### 九州における底部穿孔壺の圍繞配列

九州では円筒埴輪による圍繞配列の開始が遅く、一般的になるのは前期末のことである。しかし、壺による圍繞配列は前期古相段階からみられる。

**津古生掛古墳**<sup>514)</sup> (福岡県小郡市、図版141) は全長33m、後円部径29mの不整形な前方後円墳である。後円部のみに周溝がめぐり、前方部を画する溝は存在しない。後円部墳丘はかなり攪乱されていたが、中心主体部の一部が壊れ残されていた。箱形木棺を納めていた墓壇で、副葬品は方格規矩鳥文鏡1面、ガラス小玉57点、鉄剣1本、鉄鏃27点が出土した。また、周溝内に周辺埋葬が多く見られた。土器は周溝中から多く出土している。もっとも多いのは畿内系底部穿孔二重口縁壺で、およそ20個体ほど出土している。いずれも似たつくりで、筒形の細い頸部に大きく開く口縁部がつく。無文化しているが型式学的には古い要素を持っているため、布留0式併行期に位置づけられる可能性もあると思われる。焼成前に底部穿孔を施しているが、胴部中位に焼成後の小穿孔がみられる個体もある。また、胴部が鶏形を呈すものが3個体程度ある。これらは墳丘から転落した状況を示しており、もともと墳丘に圍繞配列されていたものと思われる。他

に直口壺・高杯・小型器台・鉢・手づくね土器など多くの土器が出土しているが、周溝中の埋葬施設に伴う可能性もあるだろう。これらも全て布留式系統の土器である。

**能満寺 2 号墳**<sup>515)</sup> (福岡県築上郡大平村、図版 142) は墳丘の片側を削平されているものの、一辺 10m 程度の方墳と考えられている。二方向に周溝が確認されており、葺石に使用された礫が多量に出土している。墳頂中央に石蓋土壇墓があり、小型連弧文鏡 1 面、ガラス小玉 40 点、管玉 1 点、鉄剣 1 本が出土している。土器は周溝中から出土した。規格的なつくりの畿内系二重口縁壺が 10 個体程度出土しており、圍繞配列が行われていたものと思われる。筒形の頸部に大きく開く口縁部をもつが、細頸のものと太頸のものがあり、津古生掛古墳よりは若干時期が降るものと思われる。基本的に無文だが頸部突帯を有するものがある。なお、底部が遺存しているものには穿孔がみられず、圍繞配列が行われたと考えられる資料では珍しい。他に布留式の小型器台、山陰系鼓形器台など若干の土器が出土している。

**三国の鼻 1 号墳**<sup>516)</sup> (福岡県小郡市、図版 143) は前期中相の資料の好例として挙げられる。全長 66m、後円部径 38m、高さ 6.3m で、後円部は二段築成である。葺石はない。後円部墳頂に 2 基の割竹形木棺直葬土壇、前方部に粘土槨 1 基が検出されている。後円部中心主体の第 1 主体部は盗掘を被っており、鉄剣片や管玉がわずかに出土したのみである。また、後円部第 2 主体部では鉄剣 1 本、鉄鏃 3 点が出土している。墳丘各所から多量の底部穿孔二重口縁壺が出土しており、報告書には 85 点もの同種の壺の実測図が掲載されている。出土位置はくびれ部・前方部・後円部後端造り出し部の墳丘斜面から裾にかけて多く出土している。また、後円部墳頂縁近くの斜面部においても完形に復原できる個体が出土しているので、後円部と前方部墳頂平坦面周縁および後円部後端造り出し部周縁に圍繞配列されていたものと考えられる。

九州では古墳時代前期末ごろからいっせいに埴輪が波及し、多くの古墳で円筒埴輪による圍繞配列が行われる。壺は長胴化し壺形埴輪というべき大型化したものとなる。九州では円筒埴輪と壺形埴輪が併用されることが多いが、福岡市老司古墳・大分県杵築市小熊山古墳・大野郡三重町立野古墳のように多くの壺形埴輪に少量の円筒埴輪がともなうという特徴的な組み合わせである。円筒よりも壺が重視されるという九州独自の圍繞配列の意識が読み取れる<sup>517)</sup>。なお、豊後では「豊後系大型器台」とも呼ぶべき器台が、大分市野間 1 号墳、大分市小牧山 6 号墳、立野古墳など複数の古墳に見られ、壺形埴輪と組み合わせられて使われていたようだ<sup>518)</sup>。

以上のように九州では畿内系底部穿孔壺を使用した圍繞配列が早くから出現し、その後も圍繞配列の主要器種として底部穿孔壺が使用され続けた。また、円筒埴輪波及後もむしろ壺形埴輪を量的に多く使うといった傾向が見られる。このことは明らかに列島中央部と異なる様相と言えよう。

## 註

514) 宮田浩之 1988『津古生掛Ⅱ』小郡市教育委員会

515) 飛野博文 1994『能満寺古墳群』大平村文化財調査報告書第 9 集

516) 片岡宏二ほか 1986『三国の鼻遺跡Ⅰ 三国の鼻 1 号墳の調査』小郡市文化財調査報告書第 25 集

517) 田中裕介氏に書簡にてご教示いただいた。

518) 田中裕介 1996「九州における壺形埴輪の展開と二・三の問題」『古墳発生前後の社会像—北部九州及びその周辺地域の地域相と諸問題—』古文化研究会第 100 回例会記念シンポジウム 九州古文化研究会

## 東日本の圀繞配列の成立に関する問題

東日本においても円筒埴輪に先がけて、底部穿孔壺による圀繞配列が先に定着し、円筒埴輪が波及したのちも多くの墳墓で底部穿孔壺を使用している。さて、私見によれば、その出現は畿内の影響下に上野・会津にまず出現したと考えているが<sup>519)</sup>、福田聖のように在地の弥生墓制の土器配置の影響を重視する意見もある<sup>520)</sup>。筆者は東日本の、畿内系二重口縁壺を使用した圀繞配列の系譜は畿内からの影響なしには成立し得ないと思うが、そうした底部穿孔壺の土器配置を受け入れる土壌はすでに方形周溝墓の土器配置の中で培われていると考えている点では、福田の意見に同調的である。ここでは、本論に入る前に、弥生墓制の土器配置の中で、のちの圀繞配列に繋がっていくような要素の抽出を試みたい。

ひとつは、先にも触れた**王子ノ台5号方形周溝墓**<sup>521)</sup>（神奈川県平塚市、図版64）の土器配置である。周溝の上層から少なくとも10個体以上の焼成前底部穿孔壺が方台部をとり囲むように出土しており、調査者の立花実は周溝中の配置を考えている。使用されている壺の系統は弥生後期の南関東に特有な、羽状縄文・S字状結節文・棒状浮文などで飾る、赤彩された装飾壺である。壺のつくりは、大きさの違いはあるものの総じて似ており、出土個体数、配置位置などを考慮して、確実に圀繞を意識した配列であることは間違いないと思われる。しかし、土器の系統が異なること、溝が一定程度埋没してから上層に配置したと考えられること、神奈川県で唯一の例で古墳時代例との間をつなぐ資料が無いこと、など古墳時代に始まる畿内系底部穿孔壺を使用した圀繞配列に直接的な影響を与えたとは考えにくい。

一方、吉ヶ谷式土器（埼玉県・弥生時代後期～古墳時代前期初頭）の分布圏において、多くの底部穿孔壺を出土する方形周溝墓がある。**中耕遺跡13号・21号方形周溝墓**<sup>522)</sup>（埼玉県坂戸市）がそれにあたる。

**中耕13号方形周溝墓**（図版145）は方台部規模11.9×11.1mを測り、周溝は全周する。埋葬施設は発見されていない。大型複合口縁壺4個体、直口壺8個体、二重口縁壺1個体のほか、小型丸底土器（平底）、小型鉢1個体、高杯、小型器台などが出土している。壺類のほとんどの個体に焼成後の打欠・穿孔がみられる。

**中耕21号方形周溝墓**（図版144）は方台部規模15.75×13.7mを測り、周溝は全周する。方台部に墳丘の一部が遺存しているが、刀子が1点出土したのみで埋葬施設は検出されなかった。周溝からは大型壺3個体、中型壺12個体前後、小型直口壺5～6個体のほか、高杯12個体以上・小型器台15個体以上・結合器台1個体・台付鉢8個体・小型甕5個体など、多量の土器が出土している。壺に関しては折り返し口縁や、口縁部外面の輪積みを消さずに段を表現するもの、内弯して立ち上がる複合口縁を呈すもの、直口縁などバリエーションがあり、斜縄文による文様帯をもつものと、無文のものがある。直口壺も様々な大きさのものがあり、形態も規格的とは言えない。つまり、壺類には全体を規定する形態上の規格は存在しなかったと言える。ただし、壺類のほとんどには焼成後の打欠・穿孔が施されている。また、これらの壺は他の高杯などと共に周溝中に遺棄されたと考えられる。周溝中には焼土や炭化材なども出土するため、儀礼に使用された木製品や土器などの儀器を周溝内で焼却したものとされる。土器の穿孔は儀礼使用後に廃棄する段階で施されたと考えられよう。13号方形周溝墓においてもほぼ同様な内容であったと思われる。

吉ヶ谷式土器の分布圏ではこのほか広面遺跡（埼玉県坂戸市）においても底部穿孔壺を多く出土する墳墓

が知られている。広面遺跡 9 号方形周溝墓<sup>523)</sup> (図版 146) では二重口縁壺・直口壺が使用されている。これら広面 9 号、中耕 13 号・21 号の出土土器の時期をみると、廻間Ⅲ式の初頭に併行する時期の土器が主体を占め、古墳時代前期前半の所産であることがわかる。したがってこれらは東日本の圍繞配列に影響を与えたというよりは、もともと方形周溝墓の儀礼で使用されていた底部穿孔壺が、すでに上野において成立していた圍繞配列の影響を受けて多量化したと言えるだろう。ただし、その使用状況を見る限りにおいては他の儀器と共に周溝中に遺棄されており、墳丘に永続的に立て並べておく性質のものではない。したがって、吉ヶ谷式分布圏におけるこうした底部穿孔壺を多量出土する例をいわゆる圍繞配列にとらえることは明らかに適切ではないと考える<sup>524)</sup>。

以上、王子ノ台遺跡、中耕遺跡の事例の検討を行ったが、圍繞配列への直接的な影響は在地の弥生墓制からは追えないと結論付けられる。

#### 註

- 519) 古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第 104 号 駿台史学会  
古屋紀之 2004「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質—関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に—」『土曜考古』第 28 号
- 520) 福田 聖 2004「方形周溝墓と土器Ⅱ—概観 その 1—」『研究紀要』第 19 号 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 521) 東海大学校地内遺跡調査団編 2000『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』
- 522) (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 125 集
- 523) 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 89 集
- 524) この問題を考える際に見逃せない資料として三ノ耕地遺跡が挙げられる。当遺跡は 2 基の前方後方墳と数基の方形周溝墓もしくは方墳を含む弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墓域で、墳丘は削平されているものの周溝などから土器が多数出土している。吉見町教育委員会のはからいで出土資料を実見させていただいたが、2 基の前方後方墳からは底部穿孔壺が出土しており、特に 2 号墳では多く出土している。ただし、底部穿孔壺は畿内系二重口縁壺のほか吉ヶ谷式系の縄文を施した複合口縁壺もあり、興味深い。詳細については報告書の刊行を待ちたい。
- 石坂俊郎 2005「埼玉県の古墳の出現—そして三ノ耕地遺跡—」『東日本における古墳の出現』東北・関東前方後円墳研究会編

### 東日本における底部穿孔壺の圍繞配列

東日本の底部穿孔壺による圍繞配列の様相は、まず古相段階のものが関東・東北に見られることが注意される。これらのほとんどは墳丘がすでに削平されている小型墳であるが、大規模な開発の緊急調査にともなって調査されたものが多く、墓のほとんどの面積が発掘対象となった場合が多い。それによって周溝が全面調査され、広範囲にわたり底部穿孔壺の出土をみたために、圍繞配列の可能性を指摘できるものである。以下の記述では、まずそうした墳墓の実例を示し、底部穿孔壺の圍繞配列の内容を確認した後に、墳丘を有する大型墳の検討に入りたいと思う。なお、関東・東北の前期古墳における底部穿孔壺の圍繞配列については拙稿ですでにまとめたものがある<sup>525)</sup>。詳細はそちらを参考にさせていただきたい。

まず、古相を示す事例を挙げる。

**荒砥北原 1 号方形周溝墓**<sup>526)</sup> (群馬県前橋市、図版 147) は方台部 12.5×11.5m の方形周溝墓で、一辺の中央に陸橋を有する。北側周溝は攪乱のため遺存していない。底部穿孔壺は西側・南側溝で 2 個体、東側溝北

寄りで 4 個体が出土しており、この東側溝北寄り付近では儀礼に使用されたと考えられる壺・高杯・鉢・器台などの一群の土器が集中して出土している。これらの土器と異なり、底部穿孔壺のみが広範囲にわたって出土していることは重要である。土器の層位的な出土状況は「いずれも底面より浮いて、横位あるいは逆異に転倒しており、そのあり方から判断する限り、周溝が埋没してゆく過程で、方台部に置かれていたこれらの土器が、その中に転落した」と考えられている。底部穿孔壺は焼成前穿孔の二重口縁壺で、伴出している東海西部系高杯の型式観とも合わせて、古墳時代前期前半でも古段階に比定できよう。

**堤東 2 号周溝墓**<sup>527)</sup> (群馬県前橋市、図版 148) は全長 25m の前方後方形周溝墓である。周溝からは底部穿孔壺のほか在地系の甕や東海西部系高杯・器台、小型丸底壺など多種多様な土器が出土している。底部穿孔壺は二重口縁のものに限定される。平面的な分布状況はくびれ部に遺存状況の良いものが集中するが、破片も含めて考えると後方部の周溝全体にわたって分布することが分かる。出土状態の検討からこれらの底部穿孔壺のほとんどは方台部にあったものが溝中に転落したと考えられているが、南側くびれ部の 3 個体の完形品のみは周溝底面が平坦なことから、溝中に据え置かれた可能性も指摘されている。すべて焼成前穿孔の二重口縁壺で、その型式から古墳時代前期前半に比定できよう。

**松山古墳**<sup>528)</sup> (栃木県佐野市、図版 150) は全長 44.4m の前方後方墳である。後方部の一部に盛土が残存していたが主体部は検出されなかった。周溝が全面調査され周溝中から 16 個体もの底部穿孔二重口縁壺が出土した。平面的な分布状況では後方部西側辺から 6 個体、前方部西側辺から 4 個体、東くびれ部から 5 個体、後方部北東コーナーから 1 個体が出土している。なお、後方部後方中央の「突出部」付近より底部穿孔単口縁壺が出土している。これらの底部穿孔壺は溝中の底面に置かれていたのではなく、土層断面の観察から周溝への盛土の流入に伴って二次的に移動したと評価されており、原位置は墳丘上周縁が想定されている。全て焼成前穿孔であり、二重口縁壺の型式から古墳時代前期前半新段階に比定できよう。

**稻荷塚 6 号周溝墓**<sup>529)</sup> (福島県会津坂下町、図版 151) は全長 23.6m の前方後方形周溝墓である。底部穿孔壺は溝中から、方台部両側辺で 1 個体ずつ、両くびれ部で 5 個体、前方部両側辺で 1 個体ずつ出土しており、報告書で出土位置を特定できない 2 個体を加えて計 11 個体が数えられる。これらは「台状部から周溝部に転落したような状態で堆積土内から検出された」。底部焼成前穿孔二重口縁壺で小ぶりなものが多く、北陸型二重口縁壺の範疇でとらえられよう。その場合漆町 8 群期に相当するため、古墳時代前期前半の年代が与えられる。

**男壇 1 号方形周溝墓**<sup>530)</sup> (福島県会津坂下町、図版 153) は台状部の規模 16.9×21.3m を測る長方形周溝墓である。長辺の中央に陸橋をひとつ有する。底部穿孔壺は単口縁と二重口縁の両者が存在するが、北辺溝をのぞく各辺からそれぞれが出土しており、少なくとも 9 個体が確認されている。出土層位は溝中の底面及び底面近くの堆積土であるが完形品としての出土は無く、ある程度破片が散乱して出土することが多いという。また、平面的には溝中でも方台部寄りから出土することのほうが多く、中には方台部側壁面に破片がへばりついた状態を示すものもあった。これらを総合すると底部穿孔壺は早い時期に方台部から転落したものと思われる。出土した壺はいずれも焼成前穿孔である。二重口縁壺の型式から古墳時代前期前半の年代が与えられる。

このほか古相を示す可能性のある事例として山形県南陽市蒲生田山 3・4 号墳<sup>531)</sup> が挙げられる。尾根上に立地する 2 基の小型の前方後方墳で、尾根線上で互いに前方部を向かい合わせている。3 号墳は墳丘長 29m、

後方部幅 18m、4 号墳は墳丘長同じく 29m、後方部幅約 16mを測る。後方部の高さは約 1 mである。両古墳ともに周溝をめぐらし、周溝中から底部穿孔壺が出土している。完形になる個体は少ないが、出土資料の全てを実見した結果<sup>532)</sup>、多くの底部穿孔壺の破片がみとめられ、圍繞配列と認定できる。

前期古墳中相以降では以下のような資料がある。

**堀ノ内 CK-2 号墳**<sup>533)</sup> (群馬県藤岡市、図版 152) は全長 30.6mの前方後方墳である。後方部南側コーナーと前方部北側コーナーは調査区外のため未調査である。周溝中から 30 個体ほどの土師器が出土しており、そのうち規格的なつくりの底部穿孔壺は中型二重口縁のものが 10 個体、大型の内弯単口縁壺が 1 個体、中型の外反単口縁壺が 5 個体、胴部だけのもので中型が 2 個体、大型が 1 個体で、全部で 20 個体近くに達する。これらは中型の単口縁壺 1 個体が前方部東側コーナーから出土したほかは全て後方部溝中からの出土である。また、ほかにも直口壺、高杯、器台、小型丸底土器、鉢、甕などが出土しているがいずれも後方部溝中からの出土である。規格的なつくりの底部穿孔壺の平面的な分布を細かく見ていくと、器形ごとに配置位置が決められていることがわかる。中型の外反単口縁壺は後方部および前方部の各コーナーに 1 個体ずつ置かれており、大型の壺（おそらく両方とも同じ口縁部形態を採るものと推察できる）は両くびれ部にやはり 1 個体ずつ置かれている。二重口縁壺はその間を後方部全体に置かれていたようで、後方部北溝では一辺に 5 個体が確認できる。底部穿孔壺の層位的な出土状態は溝床面から浮いて出土することが多く、しかも方台部からの転落状況を示してはいないという。報告者によれば底部穿孔壺は完形品のまま置かれたものと破碎して置かれたものの二者が存在するようだが、両者ともある程度堆積が進んだ溝中に置かれたと判断されている。また、破碎されたものに関しては破碎場所を溝中以外の場所に想定している。すべて焼成前の底部穿孔で、二重口縁壺の型式から古墳時代前期中ごろの年代が与えられよう。

**赤羽台第 3 号方形周溝墓**<sup>534)</sup> (東京都北区、図版 149) は一辺 17~18mほどの方形周溝墓で、北側の状況が不明だが、一辺の中央に陸橋を持つタイプと考えられる。周溝から底部穿孔二重口縁壺 5 個体と底部穿孔小型丸底土器 1 個体が出土している。二重口縁壺は南東辺溝で 1 個体、南西辺溝で 4 個体出土しているが報告書の遺物出土微細図を見る限りでは方台部側から転落したような状況と判断できる。焼成前の底部穿孔で二重口縁壺の型式から古墳時代前期中ごろの時期を想定できよう。

**安久東遺跡方形周溝墓**<sup>535)</sup> (宮城県仙台市、図版 155) は現存長 24.5m、方台部の規模 15.5×12.2mの前方後方形周溝墓である。底部穿孔壺は完形品が 3 個体、胴部のみのものが 3 個体のほか底部片・口縁部片が出土している。出土位置は両くびれ部溝中が多いが後方部溝中からも出土している。層位的に周溝底面から覆土中にかけて出土しているが、完形品として出土する例が多い。しかし、出土状況は溝中に据え置いた状況ではなく、方台部内側から溝中に転落したものと評価されている。ちなみに東海西部系高杯 1 個体は周溝外側からの転落とされている。出土した壺は底部焼成前穿孔二重口縁壺で、その型式から古墳時代前期中頃に比定できよう。

**今熊野 1 号方形周溝墓**<sup>536)</sup> (宮城県名取市、図版 154) は三隅において周溝が途切れる方形周溝墓で、溝に囲まれた台状部の規模は 18.4×16.0mである。底部穿孔壺は南東辺溝で 9 個体、北東辺溝で 4 個体、北西辺溝で 1 個体の計 14 個体分が出土している。層位的には「多くの場合横位もしくは斜位の状態で溝底面よりも上部の堆積土中から出土して」いるため、もともと方台部にあったものが溝中に落下したものと捉えられている。出土位置は北側に偏り、特に図示し得た個体は北東辺溝出土品に限られるが、これはこちら側が台地

縁辺の斜面にさしかかっており標高が低いと考えられる。出土したのは底部焼成前穿孔二重口縁壺で、その型式から古墳時代前期後半の年代が与えられよう。

以上の様相をまとめると、方台部における配置状況を示すものは1例も無いが、周溝における破片の出土状況はほとんどの場合方台部側から転落した状況を示している。唯一、群馬県堀ノ内CK-2のみは溝覆土中への配置を想定しているが、平面的には圍繞を目的とした配置であることは明らかである。堀ノ内CK-2の場合は本来の配置位置から出土していることもあって、底部穿孔壺の平面的な分布は整然としたものである。すなわち、後方部を圍繞するように二重口縁壺・単口縁壺を配し、くびれ部に大型直口壺、前方部コーナーに単口縁壺を配しており、各形式の壺を意識的に置き分けていることがわかる。その他の事例については溝中の平面的な分布がどれほど方台部における配置状況を反映しているかは分からないため、調査時点の分布をそのまま方台部における配置状況の復原に反映させるわけにはいかない。傾向としてはくびれ部に多くの個体が集中する例があり、また前方部や後方部後端は総じて分布が希薄になるといえよう。しかし、広範囲において底部穿孔壺が出土していることは確かであり、圍繞配列ととらえて差し支えないものと思われる。

次に墳丘が遺存している例についてであるが、好例として前橋天神山古墳、森北1号墳、辺田1号墳、元島名将軍塚古墳、深長古墳、青塚茶臼山古墳などが挙げられる。

**前橋天神山古墳**<sup>537)</sup> (群馬県前橋市、図版156)は全長129m、後円部径75m、高さ9mの大型前方後円墳である。墳丘は三段に築成され、葺石が施されている。後円部墳頂に巨大な墓壇が掘られ、木棺を納めた粘土槨が検出されている。副葬品は三角縁獣文帯四神四獣鏡2面、二禽二獣鏡1面、半円方形帯三段式神仙鏡1面、振文鏡1面の計5面の銅鏡のほか、紡錘車形石製品4点、素環頭大刀1本を含む刀剣類、靱3点と多量の鉄鏃・銅鏃、短冊形鉄斧を含む鉄製工具類、鉄製漁撈具類などがある。また、赤色顔料を入れていたと考えられる埴形土器1点も副葬品に含まれている。墳頂平坦面からは畿内系底部穿孔二重口縁壺が出土している。その出土状況は松島栄治の報文に拠れば、墳頂平坦面の「北西部分では、底部穿孔の赤色顔料によって塗彩された複合口縁の壺形土器片が、原位置あるいはそれに近い状態で一定の方向性をもって、少なくとも数個体分発見され、この部分がかなりの原状を保っていることがわかった。なお、この面における土器の出土状態は、底部を僅かながら石敷の面に埋めこまれた状態であり、その部分の破片は比較的大きく、他は細かく割れて飛散した状態であった」という<sup>538)</sup>。また、「原位置とみられる土器底部破片は、墳頂部周辺ばかりではなく、かなり中央に寄った場所からも認められ、こちらが周辺部の配列といかに関連するかが問題となる」とも述べている<sup>539)</sup>。この報文からは底部穿孔壺の胴部下半を埋め込んだ形で、墳頂平坦面周縁部と墳頂平坦部中央付近に二重の圍繞配列が為されていた可能性が指摘できよう。その平面形は墳頂周縁のものは平坦面の平面形と同じ円形と考えられるが、当古墳の墓壇は巨大であり、その平面規模は墳頂平坦面のほとんどを占めることから、墳頂周縁に並べられた壺は実は墓壇肩部に沿って並べられた可能性も否定できない。内側の配列については方形に並べられたかどうかは定かではないが、その性質はいわゆる主体部方形圍繞配列と同質のものであるといえよう。出土した底部穿孔二重口縁壺は、箸墓古墳や桜井茶臼山古墳出土土器に似た筒形の頸部をもつものと、二重に外反するものとの二者がみられるが、前者は頸部が細く比較的古式の型式を示している。なお、墳頂からは二重口縁壺のほか、小型丸底埴、高杯、器台などの破片も出土しているが、こちらはどのような配置状況であったのかは不明である。

**森北1号墳**<sup>540)</sup> (福島県河沼郡会津坂下町、図版157)は全長41.4m、後方部長24.6m、後方部幅約36m、

高さ 4.7m の前方後方墳である。葺石は確認されていない。後方部墳頂には舟形木棺を直葬した墓壙が検出され、副葬品として放射状区画をもつ珠文鏡 1 面、管玉 2 点、鉄槍 1 本、鉈 2 点、鉄針 1 点、不明漆塗り製品が出土した。墳丘各所から焼成前底部穿孔二重口縁壺が出土している。筒形の頸部をもち、外方に大きく開く口縁部を呈する。また頸部突帯を有し、扁平な胴部をもつことから、比較的古い型式である。規格的なつくりの壺が数多く、広範囲から出土しているため圍繞配列と捉えられる。出土地点は墳丘斜面から周溝内にかけてで、破片の状態で出土するため、もともとは墳頂平坦面周縁に並べられていたものが転落したと解釈されている。

**辺田 1 号墳**<sup>541)</sup> (千葉県市原市) は径 33.1m の円墳である。墳頂平坦面中央から木棺をおさめた墓壙が検出され、副葬品として小型素文鏡 1 点、管玉 1 点、素環頭大刀 1 本、ほか大刀 1 本、鉄槍 2 本、短剣 1 本、鉈 1 点が出土した。墳頂平坦面周縁および墳丘斜面において、焼成前底部穿孔素口縁壺および同二重口縁壺が複数個体出土している。素口縁壺は口縁端部を上下に拡張しており、棒状浮文で飾るものもある。墳頂平坦面周縁で底部穿孔壺が複数個体出土した好例で、その位置で圍繞配列が行われたものと思われる。時期は前期中相に位置づけられるだろう。

**元島名将軍塚古墳**<sup>542)</sup> (群馬県高崎市、図版 158) は全長 75m、後方部幅 45m、高さ 8.5m の前方後方墳である。葺石が存在する。後方部墳頂の粘土槨から倣製四獣鏡 1 面、石釧 1 点のほか大刀、刀子、鉈が出土した。後方部東辺裾部において焼成後底部穿孔二重口縁壺 11 個体のほか東海西部系高杯・小型丸底土器・S 字状口縁台付甕などがまとまって出土している。二重口縁壺はいわゆる「伊勢型二重口縁壺」の範疇に属するもので、二重に外反して開く口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張して面取りしている。頸部突帯がめぐり、肩部には櫛描波状文・直線文がめぐり、これらの二重口縁壺は規格品であり、数多く出土したのは後方部東辺のみであるが、他にも後方部後方で 1 個体、くびれ部にて 2 個体同種の二重口縁壺が出土している。古墳西側は調査が及んでいないため分布状況は不明であるが、その他の場所で上方から転落した状況で出土しているため、もともとは後方部墳頂平坦面周縁に圍繞配列されていたと解釈されている。

**深長古墳**<sup>543)</sup> (三重県松阪市、図版 159) は直径約 45m の円墳である。墳丘は一部が残存するのみで本来の高さは不明であるが、平面形については周溝が全面にわたって遺存していたことから把握することができた。なお、墳丘部分は未発掘であり埋葬施設に関する情報は無い。周溝全域からおびただしい量の焼成後底部穿孔二重口縁壺が出土している。報告書には破片資料も含めて実に 175 点もの同種の壺の実測図が掲載されており、規格品であることが分かる。これらの壺は周溝中に転落した状況で出土したことから、もともと墳丘裾付近か墳頂平坦面周縁に圍繞配列されていたと思われる。出土量が多いことから、後者かもしくは両方のケースの可能性が強いと思われる。

**青塚古墳**<sup>544)</sup> (愛知県犬山市、図版 160) は全長 123m、後円部径 78m、高さ 12m を測る大型前方後円墳である。墳丘は後円部 3 段、前方部 2 段に築成され、河原石による葺石が施されている。埋葬施設は未発掘である。前方部墳頂に 9 × 7 m の方形壇状遺構が検出され、鉄形石 3 点が出土している。当古墳では、円筒埴輪はこの方形壇状遺構付近でのみ出土し、墳丘格段のテラスにおいては底部穿孔二重口縁壺のみが圍繞配列されていた。壺は底部が若干埋め込まれた状態で据えられていたようで、約 2 m 間隔で配置されていた。壺の原位置が特定された貴重な例である。壺は大型化・長胴化傾向にあり壺形埴輪とも呼ぶべきものであり、前期新相に比定できる。



以上、東日本における围绕配列の好例を見てきたが、調査範囲が限定され底部穿孔壺の出土が限定的ではあるが、墳丘各所から破片の出土が見られ、围绕配列が行われたとみられる古墳は数多く存在する。表3～5は東日本の古墳時代前期の墳墓の土器配置をまとめたものだが、それらを見ると以下のようなことが考えられる。まず、围绕配列の出現は上野、会津盆地にみられ、しだいに各地に広がっていく様相が見て取れる。注意すべき点は東海・北陸・中部高地などの地域では前期古相に比定できる資料は見つかっておらず、それに先がけて上野・会津において底部穿孔壺による围绕配列が行われているということだ。また、古相を示す例を見ると小型の方形もしくは前方後方形の墳墓において底部穿孔壺の围绕配列が行われているが、これらの墳墓はそれぞれの墳墓群のなかでは規模あるいは墳形において優位な位置を占めているということが指摘できる<sup>545)</sup>。このような現象をどのように捉えたらよいであろうか。筆者は上野における前橋天神山古墳の築造が大きな契機になったと考えている。この大型前方後円墳においては、畿内系の埋葬施設とも言うべき粘土槨を採用し、東日本の古相段階の墳墓では比肩しうるものの無いほどの豊富な副葬品をもっている。また、先述したとおり墳頂平坦面には箸墓古墳や桜井茶臼山古墳出土例に近似した底部穿孔二重口縁壺による二重の围绕配列が確認されており、被葬者は大和東南部の政権と密接なつながりをもった人物と考えられる。上野地域にこうした人物を頂点としたヒエラルキーが存在し、その葬送祭祀において底部穿孔壺による围绕配列が行われたと言えるのではないだろうか。関東・東北における小型前方後方墳の被葬者は上野地域におけるヒエラルキーの影響下に葬送祭祀儀礼を行っていたと考えられる。このことは古墳時代前期古相段階における古墳文化の北上と密接な関わりがあるとも解釈できるだろう。そして、前期中相を過ぎたあたりから围绕配列の類例が増え始め、新相段階では爆発的に増加する。この段階では地域が限定されることなく、底部穿孔壺による围绕配列が一般的に普及すると見てよい。この時期には東日本においても円筒埴輪の使用が確認できるが、関東・東北地方では前方後円墳のみに使用され、東海・北陸・中部高地においても前方後方墳に円筒埴輪が使用されない傾向が強い。このことは被葬者の系列にあらたに円筒埴輪を使用できる系列とそうでない系列という区分が成立してきた可能性が高い。ただし、円筒埴輪と底部穿孔壺を併用している古墳も多いことから、東日本においては伝統的な祭器として底部穿孔壺が深く定着していたということも指摘できるだろう。前期新相から中期初頭にかけて、底部穿孔壺は長胴化し、頸部も大きく発達し、全体的に大型化する傾向がある。これはとりもなおさず形態的に円筒埴輪に近づくための変化であり、それでもなお壺という形態を選択するという点に伝統性を保持しようとする志向性が読み取れる。このことは古墳時代前期における東日本の著しい地域性として捉えられる。

#### 註

- 525) 古屋紀之 2004「底部穿孔壺による围绕配列の展開と特質—関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に—」『土曜考古』第28号
- 526) 石坂 茂ほか 1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 527) 松田 猛ほか 1985『堤東遺跡』群馬県教育委員会
- 528) 仲山英樹ほか 2001『松山遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 529) 吉田博行 1995『杵ヶ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第33集
- 539) 和田 聡ほか 1990『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書 男壇遺跡・宮東遺跡・中西遺跡』会津坂下町教育委員会
- 531) 吉野一郎・角田朋行 1993「蒲生田山古墳群について」『1993年度東北史学大会』発表資料 山形史学会・山形史学研究会ほか

表3 東日本の墳墓における土器配置一覧(1)

墳墓名	所在	時期	墳形	規模	配置類型	围绕配列使用器物
青塚	宮城県古川市	③	前方後円	100?m	C	壺
熊野堂	宮城県加美郡中新田町	③	前方後方	36m	C	壺
大塚森	宮城県仙台市	③	円	46.7m	C2・A1	壺
安久東	宮城県仙台市	②	前方後方	22m	C2?	壺
今熊野1号	宮城県	②	方	24m	C2?	壺
雷神山	宮城県名取市	③	前方後円	168m	C	壺
大塚天神	山形県東村山郡山辺町	③	円	51m	C3	円筒・朝顔
蒲生田山3号	山形県南陽市	②	前方後方	21m	C	壺
蒲生田山4号	山形県南陽市	②	前方後方	21m	C	壺
下小松J-1号	山形県東置賜郡川西町	②	前方後方	17.8m	A1	
天神森	山形県東置賜郡川西町	③	前方後方	75.5m	C	壺
稲荷塚6号	福島県河沼郡会津坂下町	②	前方後方	25.3m	C	壺
男壇1号	福島県河沼郡会津坂下町	②	方	22m	C	壺
鎮守森	福島県河沼郡会津坂下町	③	前方後方	55m	C	壺
亀ヶ森	福島県河沼郡会津坂下町	③	前方後円	127m	C	円筒・壺
森北	福島県河沼郡会津坂下町	②	前方後方	41.4m	C	壺
堂ヶ作山	福島県会津若松市	②	前方後円	84m	C・A1	壺
田中舟森山	福島県耶麻郡塩川町		前方後方?	90m	C	壺・円筒
塩川十九壇1号	福島県耶麻郡塩川町	③	前方後方	16m	A?	
塩川十九壇3号	福島県耶麻郡塩川町	③	前方後方	23.8m	A?	
大安場	福島県郡山市	③	前方後方	83m	C2	壺
本屋敷1号	福島県双葉郡浪江町	②	前方後方	36.5m	A1・B3	
桜井	福島県原町市	②	前方後方	74.5m	C2	壺
星神社	茨城県久慈郡金砂郷町		前方後円	92m	C?	円筒?
三ツ塚	茨城県ひたちなか市	③	円	50.9m	C	長胴壺
鏡塚	茨城県東茨城郡大洗町	③	前方後円	106m	C2	円筒・壺
佐自塚	茨城県新治郡八郷町	③	前方後円	58m	A1・C・D2	円筒・壺
勅使塚	茨城県行方郡玉造町	③	前方後方	64m	A1・C	壺
原1号	茨城県稲敷郡桜川村	②	前方後方	29m	A1・A2	
丸山1号	茨城県新治郡八郷町	②	前方後方	55m	A1	
桜塚	茨城県つくば市	②	前方後方	71m	A1	
岩瀬狐塚	西茨城郡岩瀬町	②	前方後方	44m	C	壺
長辺寺山	西茨城郡岩瀬町	③	前方後円	120m	C	円筒
芦間山	茨城県下館市	③	前方後円	141m	C	壺
駒形大塚	栃木県那須郡小川町	②	前方後方	60.5m	A1	
那須八幡塚	栃木県那須郡小川町	②	前方後方	48m	C	壺
下侍塚	栃木県那須郡湯津上村	③	前方後方	84m	C	壺
上侍塚	栃木県那須郡湯津上村	③	前方後方	114m		壺
茂原愛宕塚	栃木県宇都宮市	②	前方後方	50m	B1	壺
松山	栃木県佐野市	②	前方後方	44.4m	C	壺
藤本観音山	栃木県足利市	③	前方後方	116.5m	C	壺
小曾根浅間山	栃木県足利市	③	前方後円	58m	C	円筒
朝子塚	群馬県太田市	③	前方後円	123.5m	C1	円筒・器財・家・壺
太田八幡山	群馬県太田市	③	前方後円	84m	C	円筒
屋敷内B1	群馬県太田市	②	前方後方	28m	C	壺
荒砥東原B2号	群馬県前橋市	②	前方後方	15.5m	C	壺
荒砥北原1号	群馬県前橋市	②	陸橋付方	12.5m	B3・C	壺
堤東2号	群馬県前橋市	②	前方後方	25m	C	壺
前橋天神山	群馬県前橋市	②	前方後円	129m	C	壺
朝倉2号	群馬県前橋市	②	円	23m	C	壺
文殊山	群馬県前橋市	③	円	50m	C	壺
川井稲荷山	群馬県佐波郡玉村町	②	前方後円	43m	C?	円筒?

※時期凡例：0＝弥生時代後期、①＝廻間Ⅰ・Ⅱ式併行期、②＝廻間Ⅲ式併行期、③＝松河戸Ⅰ式併行期

表4 東日本の墳墓における土器配置一覧(2)

墳墓名	所在	時期	墳形	規模	配置類型	围绕配列使用器物
下郷SZ01	群馬県佐波郡玉村町	②	?		C	壺
下郷SZ42	群馬県佐波郡玉村町	②	前方後方	12m	C	壺
下郷天神塚	群馬県佐波郡玉村町	③	前方後円	84m	C	円筒・壺
元島名將軍塚	群馬県高崎市	③	前方後方	96m	C	壺
浅間山	群馬県高崎市	③	前方後円	171.5m	C	円筒・器財
堀ノ内CK-2	群馬県藤岡市	②	前方後方	30.6m	C	壺
堀ノ内DK-4	群馬県藤岡市	③	?	?	C	壺
北山茶臼山	群馬県富岡市	③	円	40m	C	壺
北山茶臼山西	群馬県富岡市	③	前方後円	30m	C	壺
箱石浅間	群馬県佐波郡玉村町	③	方	33m	C	埴輪・壺
諏訪山29号	埼玉県東松山市	②	前方後方	53m	B1	
古凍13号	埼玉県東松山市	②	?		C	壺
熊野神社	埼玉県榑川市	③	円	38m	C2	壺
三変稻荷神社	埼玉県川越市	③	円	25m	C	壺
雷電山	埼玉県東松山市	③	帆立貝	84m	C	円筒
香取神社	茨城県結城郡八代町	③	前方後円	70m	C	長胴壺
上出島2号	茨城県岩井市	③	前方後円	56m	C	長胴壺
鶴塚	千葉県印旛郡印西町	③	円	44m	C	器台形・壺
北ノ作1号	千葉県東葛飾郡沼南町	②	前方後方	21.5m	A1	
杓子塚	千葉県香取郡多古町	③	前方後円	82m	C	長胴壺・朝顔
飯合作1号	千葉県佐倉市	②	前方後方	25m	A1	
能満寺	千葉県長生郡長南町	②	前方後円	74m	A1	
神門5号	千葉県市原市	①	前方後円	38m	A1	
神門4号	千葉県市原市	①	前方後円	47m	A1	
神門3号	千葉県市原市	②	前方後円	47.5m	A1・A2	
今富塚山	千葉県市原市	②	前方後円	110m	C?	壺
根田6号	千葉県市原市	②	円	31m	C2	壺
大厩浅間様	千葉県市原市	③	円	45m	C	壺
釈迦山	千葉県市原市	③	前方後円	93m	A	
高部32号	千葉県木更津市	①	前方後方	31.2m	A1	
高部30号	千葉県木更津市	①	前方後方	33.7m	A2	
鳥越	千葉県木更津市	?	前方後方	25m	A1	
赤羽台3号	東京都北区	③	方	14.5m	C	壺
長柄・桜山1号	神奈川県逗子市・葉山町	③	前方後円	90m	C	円筒・壺
長柄・桜山2号	神奈川県逗子市・葉山町	③	前方後円	88m		円筒・壺
秋葉山3号	神奈川県海老名市	②	前方後円	?	A1	
小金塚	神奈川県伊勢原市	③	円	47m	C	朝顔
岡銚子塚	山梨県東八代郡八代町	③	前方後円	84m	C	円筒
丸山塚	山梨県東八代郡中道町	③	円	72m	C	壺・円筒
甲斐銚子塚	山梨県東八代郡中道町	③	前方後円	169m	C	円筒・壺
大師東丹保	山梨県中巨摩郡甲西町	③	円	36m	C3	壺
根塚6号木棺	長野県下高井郡木島平村	0	円	—	A1	壺
高遠山	長野県中野市	②	前方後円		A1	
和田東山3号	長野県長野市	②	前方後円	46m	A1・B1・C	朝顔
北平1号	長野県長野市	①	前方後方	17m	A1	
川柳將軍塚	長野県長野市	③	前方後円	93m	C	円筒
森將軍塚	長野県更埴市	③	前方後円	96m	C2	円筒・壺
弘法山	長野県松本市	①	前方後方	63m	A1	
三池平	静岡県清水市	③	前方後円	68m	C	壺
松林山	静岡県磐田市	③	前方後円	107m	C	円筒・壺
高根山	静岡県磐田市	③	円	40m	C	円筒・壺
瓢塚	静岡県掛川市	③	前方後円	63m	C	壺

表5 東日本の墳墓における土器配置一覧(3)

墳墓名	所在	時期	墳形	規模	配置類型	圍繞配列使用器物
新豊院山D1	静岡県磐田市	②		34m	A1	
甲山	愛知県岡崎市	③	円	60m	C	円筒
於新造	愛知県岡崎市	②	帆立貝形	42m	C	円筒・器台形
青塚	愛知県犬山市	③	前方後円	120m	C1・C2・C3	円筒・壺
守山白山	愛知県名古屋市	③	前方後円	90m	C	円筒
中社	愛知県名古屋市	③	前方後円	55m	C	円筒・家
白山藪	愛知県名古屋市	③	前方後円	45m	C	円筒
端龍寺山	岐阜県岐阜市	0	?		A?	
加佐美山1号	岐阜県各務原市	0	方	15~m	B3	
象鼻山1号	岐阜県養老郡養老町	②	前方後方	38m	A1	
矢道長塚	岐阜県大垣市	③	前方後円	87m	C	円筒
昼飯大塚	岐阜県大垣市	③	前方後円	150m	A?・C2・3	円筒・家
遊塚	岐阜県大垣市	③	前方後円	80m	C2・C3	円筒
能褒野大塚	三重県亀山市	③	前方後円	90m	C	円筒
高松	三重県津市	0	楕円	10m	A1	
池ノ谷	三重県津市	③	前方後円	86m	C	円筒
西野3号	三重県一志郡嬉野町	③	円	45m	C	壺
向山	三重県一志郡嬉野町	③	前方後方	71.4m	C	壺
深長	三重県松坂市	③	円	45m	C	壺
高田2号	三重県松坂市	③	円	27m	C	円筒
坊山1号	三重県松坂市	③	円	40m	C	円筒
宝塚1号	三重県松坂市	③	前方後円	95m	C	円筒・家・器財
屋鋪塚	新潟県三島郡寺泊町	0	方	11m	A1・B3・D2	
山谷	新潟県西蒲原郡巻町	②	前方後方	37m	A1・B1・B3	
三王山11号	新潟県三条市	②	円	22m	A1・A3	
六治古塚	富山県婦負郡婦中町	①	四隅突出	24.5m	A1	
杉谷4号	富山県富山市	①	四隅突出	25m	A1	
谷内16号	富山県小矢部市	②	前方後円	48m	A3	
関野1号	富山県小矢部市	②	前方後円	65~m	B1・C2	壺
国分尼塚1号	石川県七尾市	②	前方後方	52.5m	A1・A3・B1	
国分岩屋山4号	石川県七尾市	②	方	14.6m	A1	
国分岩屋山6号	石川県七尾市	②	方	11m	A1・A3	
宿東山1号	石川県羽咋郡押水町	②	前方後円	21m	A1・B3・C?	壺
六呂瀬山1号	福井県坂井郡丸岡町	③	前方後円	140m	C	円筒・家・器財
手繰ヶ城山	福井県吉田郡松岡町	③	前方後円	128m	C	円筒・家・器財
袖高林1号	福井県吉田郡永平寺町	①	方	10.4m	B3・D2	
原目山墳墓群	福井県福井市	①	方	30m ほど	A1	
三尾野2号	福井県福井市	②	方	14.6m	A1	
小羽山30号	福井県丹生郡清水町	0	四隅突出	33m	A1	
小羽山26号	福井県丹生郡清水町	0	四隅突出	34m	A1	
片山鳥越5号	福井県丹生郡清水町	0	方	16.5m	A1	
長泉寺西山1号	福井県鯖江市	0	円	13m	A1・D2	
小松	滋賀県伊香郡高月町	①	前方後方	60m	A3	
壺笠山	滋賀県大津市	②	円	48m	C	円筒
日枝社	滋賀県蒲生郡日野町	③	前方後円	31m	C	円筒
安土瓢箪山	滋賀県蒲生郡安土町	③	前方後円	134m	C	円筒
若宮山	滋賀県東浅井郡湖北町	③	前方後円	49m	C	円筒
北谷11号	滋賀県草津市山寺町	③	前方後円	105m	C	円筒
地山2号	滋賀県栗太郡栗東町	③	帆立貝		C	円筒
善所茶白山	滋賀県大津市	③	前方後円	120m	C	円筒

- 532) 南陽市教育委員会の吉野一郎・角田朋行氏の計らいで実見させていただいた。
- 533) 志村 哲 1982『堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会
- 534) 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会編 1992 『赤羽台遺跡—弥生時代～古墳時代前期—』
- 535) 土岐山武 1980「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』IV 宮城県文化財調査報告書第 72 集 宮城県教育委員会
- 536) 丹羽 茂 1985「今熊野遺跡 I」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第 104 集 宮城県教育委員会
- 537) 松島栄治 1981「前橋天神山古墳」『群馬県史 資料編 3』群馬県史編さん委員会
- 538) 前掲 537 文献 (松島 1981) 51 頁参照
- 539) 前掲 537 文献 (松島 1981) 55 頁参照
- 540) 吉田博行ほか 1999『森北古墳群』会津坂下町教育委員会・創価大学
- 541) 辺田 1 号墳：米田耕之助 1986「根田遺跡」『市原市文化財センター年報』昭和 60 年度 (財)市原市文化財センター
- 542) 高崎市教育委員会 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第 22 集
- 543) 三重県教育委員会 1989「松阪市深長町 深長古墳」『昭和 61 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 I』三重県埋蔵文化財調査報告 79
- 544) 赤塚次郎 2001『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会
- 545) 前掲註 525 文献 (古屋 2004) 参照

## 第4節 円筒埴輪の圍繞配列

普通円筒埴輪の使用については前期古相段階ですでに西殿塚古墳（奈良県天理市、図版130）において見ることができ、宮山型特殊器台形土器や都月型特殊器台形埴輪と併用されている状況を確認できる。しかし、全国的に円筒埴輪が古墳の外表を飾る要素として定着するのは古墳時代前期新相段階であり、多くの地域では前節で述べたとおり底部穿孔壺による圍繞配列が行われていたのである。その要因として①各地域での伝統性の保持、②埴輪生産体制の未整備、③地方への情報の不伝達、④葬制における規制、などが考えられるが、おそらく実態はこれらの複数がからみあっていたと思われるし、各地域によってその要因は様々であっただろう。筆者はそのことについて考察するだけの余力が無いので、後段で東日本の状況を述べるだけに留め、まずは円筒埴輪の圍繞配列の実態を明らかにしておきたい。

### 円筒埴輪による圍繞配列の基本構造

円筒埴輪の圍繞配列は特殊器台形埴輪や壺形土器・壺形埴輪と異なり、基部が原位置で遺存している例が多く、その正確な配置状況を知ることができる。墳丘の広い範囲を調査した例で、円筒埴輪の圍繞状況がわかる良好な例として寺戸大塚古墳の事例を挙げ、その基本的な構造を確認することからはじめたい。

**寺戸大塚古墳**<sup>546)</sup>（京都府向日市、図版163）の詳細についてはすでに第5章第1節で述べたとおりであるが、前期中相の古墳であり、すでに完成された埴輪配列状況を窺うことができる。円筒埴輪は後円部（3段築成）では①墳頂石室周囲（主体部方形圍繞配列）、②墳頂平坦面周縁（3段目上縁）、③2段目上縁、④1段目上縁、⑤墳丘裾、というように全部で5重の圍繞配列を構成している。それぞれの平面形は①が墓壇の形に影響されて方形に、②～⑤は後円部の平面形に沿うように円形を為している。したがって、当たり前のことかもしれないが、①のみが主体部を圍繞することを目的としており、他は墳丘を意識したものであろう。寺戸大塚古墳では主体部方形圍繞配列が他に比べて円筒埴輪の間隔が密なことから、埋葬終了後には区画内に人が侵入することを禁じたことが伺える。方形圍繞配列の西側に儀礼に使用されたと考えられる土器が配置されていることから、弥生時代以来の主体部上土器配置とは異なり、主体部の上方を禁足地として神聖視したことがわかる。このような埴輪配列と土器配置の関係が、畿内において発達した古墳の葬送祭祀の典型的な姿として捉えられるだろう。

上記の寺戸大塚古墳の例は、あくまでもよく把握されている好例である。全ての古墳の圍繞配列が寺戸大塚古墳に見られるような①～⑤のすべての配列を具備しているわけではなく、①の方形圍繞配列が省略されたり、格段テラス上の配列が省略されたりと、その様相は様々である。特に主体部方形圍繞配列については、稲村繁の分析<sup>547)</sup>に拠ればごく限られた古墳についてのみ許された配列方法だったようで、その事例は極端に少ない。また、③～⑤については墳丘の立面構造に左右されることが多く、とくに段築が無い古墳については③・④を配列することが無いので、その有無については祭祀的な面から考察するのではなく、墳丘の構造上の問題として扱うべきであろう。筆者は円筒埴輪の配列状況について全国的な集成をしたわけではないが、基本的には②の墳頂平坦面周縁の配列が行われ、そして①や③～⑤については行われたり、行われなかったりというのが実情であろうと考えている。その要因として①は墳頂における祭場としての設計に関する意識の問題の他、被葬者の階層による規制が働いた可能性もあるだろう。また③～⑤については先に述べた墳丘

の構造上の問題や、外表装飾としての景観の問題、また埴輪生産量という経済的な問題など、が挙げられよう。ちなみに、前節で述べた底部穿孔壺の圍繞配列においては、原位置が明らかでないものがほとんどを占めるが、破片の出土状況から類推する限りでは②埴頂縁と⑤埴裾の事例が最も多そうである。

#### 註

546) 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群発掘調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳」『史林』第54巻第6号

547) 稲村 繁 1984「埴頂部に配置された埴輪について—方形埴輪列を中心に—」『史学研究集録』9 國學院大學大学院

### 主体部方形圍繞配列と土器配置

主体部方形圍繞配列に関しては、稲村繁（1984）による集成と分析、さらにその性格についての考察がすでに行われているので、詳細はそちらを参照していただくとして、ここでは土器配置との関わりを論じてみたい。

稲村が挙げた方形区画を持つ古墳のうち前期に比定できるものは奈良県桜井市桜井茶臼山古墳<sup>548)</sup>（前方後円、207m）、桜井市メスリ山古墳<sup>549)</sup>（前方後円、約250m）、京都府向日市寺戸大塚古墳<sup>550)</sup>（前方後円、98m）、京都府中郡加悦町蛭子山1号墳<sup>551)</sup>（前方後円、145m）、岡山市金蔵山古墳<sup>552)</sup>（前方後円、165m）、三重県上野市石山古墳<sup>553)</sup>（前方後円、120m）、奈良市佐紀陵山古墳<sup>554)</sup>（前方後円、203m）の7基である。このうち桜井茶臼山古墳は第6章第3節で述べたとおり、底部穿孔壺で構成された方形区画であり、他の6基が埴輪で構成されている。いずれも大型あるいは巨大前方後円墳である点が注意を引く。さらにこの中で埴頂平坦面において土器が検出されている古墳は寺戸大塚古墳、蛭子山古墳、金蔵山古墳の3基である。この3基の土器配置の詳細については第5章においてすでに述べてあるが、方形区画との位置関係を確認しておくと、**寺戸大塚古墳**（図版163）と**金蔵山古墳**（図版168）の土器配置は方形区画の外側で、**蛭子山1号墳**（図版167）については外側から土製品などが出土してはいるが、中心主体部の舟形石棺上で山陰系土器を中心とする土器群が出土している。つまり、方形区画内における土器配置が行われているということである。前2者と後者における土器の配置位置の違いは何を示すのだろうか。

前者は前述したとおり、方形区画内への人の侵入を拒絶したものであろうが、後者がそうではないとはいえないだろう。それは葬送儀礼の進行の中での土器を配置するタイミングの問題かもしれないのである。すなわち、埋葬行為中には当然のことながら人が墓壇内に入らないと作業ができない。その時に方形区画があるかどうかの問題であるが、寺戸大塚古墳や石山古墳（図版169）の調査例を見る限りでは、方形区画に使用される円筒埴輪は墓壇埋土中に樹立されているので、埋葬儀礼が一通り終了した後に方形区画が設定されるのが通例であったと考えられる。そうした場合、土器を配置する行為が埋葬儀礼の最終段階に位置づけられていた場合は、方形区画設定前に主体部上に土器を遺棄したと考えられ、方形区画の意義自体は、主体部上土器配置を行う蛭子山1号墳と方形区画外に土器を配置した寺戸大塚古墳とでは変わらないといえる。むしろ方形区画設定後にその外側に配置された寺戸大塚古墳の土器がミニチュア土器を含んでいるなど、儀礼が形式化した様子が見て取れる。おそらく土器の供献行為が埋葬儀礼と切り離され、葬送祭祀の最終段階か、もしくは一定期間を経た後に行われる追祭祀として執り行われるようになったと考えられよう。

主体部方形圍繞配列が存在しない場合でも、平尾城山古墳<sup>555)</sup>（京都府相楽郡山城町、図版164）のように

主体部上ではなく墓壇肩部に土器を置く例がある。主体部上を神聖視し、直上を避けて脇に置く意識が存在したと言えるだろう。反対に圍繞配列を行いながらも主体部上に土器を配置する例は弥生時代以来の伝統の下に埋葬儀礼の最終段階に土器を遺棄しているものと思われ、その使用土器に山陰系土器が多く見られることから弥生時代の山陰型土器配置の影響が強く残っているものと思われる。東日本においては主体部上土器配置を行う前期古墳が数多く存在するが、中には長野市和田東山3号墳<sup>556)</sup>や茨城県新治郡八郷町佐自塚古墳<sup>557)</sup>のように円筒埴輪による圍繞配列を行いながらも主体部上に土器を配置しているものもあり、埴輪による圍繞配列という新しい要素を受け入れる一方で、主体部上土器配置という古い要素を存続させているといえよう。

このように墳墓における圍繞配列と土器配置の関係は、葬送祭祀を執り行う集団の祭祀的な志向性を読み解くのに有効な視点と言えるだろう。今後、このような祭祀的研究に、埴輪や底部穿孔壺などの「祭器」の製作技術の系譜関係<sup>558)</sup>を組み合わせると、より立体的な結論が得られると思われる。

#### 註

- 548) 上田宏範・中村春寿 1961『桜井茶臼山古墳 付櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊 奈良県教育委員会
- 549) 伊達宗泰ほか 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会
- 550) 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群発掘調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳」『史林』第54巻第6号  
近藤喬一・都出比呂志 2004「寺戸大塚古墳」『向日丘陵の前期古墳』向日市文化資料館
- 551) 佐藤晃一 1985『蛭子山古墳』加悦町教育委員会  
佐藤晃一 1992『加悦町の古墳』加悦町教育委員会  
佐藤晃一 1997「蛭子山古墳について」『日本海三大古墳がなぜ丹後につくられたのか』第3回加悦町文化財シンポジウム  
加悦町教育委員会
- 552) 西谷真治・鎌木義昌 1989『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊
- 553) 石山古墳：京都大学文学部考古学研究室編 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
- 554) 鐘方正樹 2001「佐紀陵山古墳」『大和前方後円墳集成』橿原考古学研究所編 学生社
- 555) 近藤喬一ほか 1990『京都府平尾城山古墳』山口大学人文学部考古学研究室研究報告第6集
- 556) 明治大学和田東山古墳群調査団 1995『和田東山古墳群一和田東山古墳群第3号墳発掘調査概報』
- 557) 佐自塚古墳調査団 1963『佐自塚古墳調査概要』茨城県教育委員会
- 558) 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号  
廣瀬 覚 2001「茶臼山型二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集』Ⅱ  
廣瀬 覚 2003「埴輪の伝播と工人論」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会

#### 壺形埴輪との関係と地域における円筒埴輪の受容の問題

都出比呂志の研究<sup>559)</sup>以来、底部穿孔壺のみの圍繞配列は特殊器台形埴輪と底部穿孔壺の組み合わせから、特殊器台を省略したものだと捉えられてきた。もともとは桜井茶臼山古墳の調査成果<sup>560)</sup>が世に出たときは底部穿孔壺がむしろ円筒埴輪の起源に関わるものとして考えられたが、近藤義郎・春成秀爾により吉備系特殊器台と円筒埴輪の型式的連続性が明らかにされた<sup>561)</sup>後は、底部穿孔壺による圍繞配列は特殊壺との関連の中



表6 関東・東北の円筒埴輪を出土する前期古墳

墳墓名	所在	埴輪の形式	埴形	規模
大塚天神	山形県山辺町	円筒・朝顔	円	51m
亀ヶ森	福島県会津坂下町	円筒・朝顔・壺	前方後円	127m
田中舟森山	福島県塩川町	円筒・壺	前方後方？	(90m)
星神社	茨城県金砂郷町	円筒・壺	前方後円	92m
常陸鏡塚	茨城県大洗町	円筒・壺	前方後円	106m
佐自塚	茨城県八郷町	円筒・壺	前方後円	58m
長辺寺山	茨城県岩瀬町	円筒・壺	前方後円	120m
芦間山	茨城県下館町	円筒・壺	前方後円	141m
小曾根浅間山	栃木県足利市	円筒	前方後円	58m
朝子塚	群馬県太田市	円筒・朝顔・形象・壺	前方後円	123.5m
太田八幡山	群馬県太田市	円筒	前方後円	84m
川井稻荷山	群馬県玉村町	円筒（特殊器台？）	前方後円	43m
下郷天神塚	群馬県玉村町	円筒・朝顔・壺	前方後円	84m
浅間山	群馬県高崎市	円筒・朝顔・形象	前方後円	171.5m
雷電山	埼玉県東松山市	円筒・朝顔	帆立貝	84m
鶴塚	千葉県印西市	器台・壺	円	44m
杓子塚	千葉県多古町	朝顔・壺	前方後円	82m
長柄桜山1号	神奈川県逗子市・葉山町	円筒・壺	前方後円	90m
長柄桜山2号	神奈川県逗子市・葉山町	円筒・壺	前方後円	88m
秋葉山2号	神奈川県海老名市	円筒形土製品	前方後円	50.5m
小金塚	神奈川県伊勢原市	朝顔	円	47m

で捉えられるようになったのである。ところが、前章まで見てきたとおり、大和における圍繞配列はむしろホケノ山古墳における畿内系加飾壺によるものが最古と考えられるため、底部穿孔壺と円筒の圍繞配列は両者が別系統で誕生したと考えられるようになった<sup>562)</sup>。これらの両者が大和にあり、しかも箸墓古墳においては円筒と特殊壺が後円部に、無文の底部穿孔壺が前方部にと両者が置き分けられた状態で一つの古墳に同居していることは非常に重要な現象であると考ええる。どうも被葬者の性格に起因するものであろうが、その後、底部穿孔壺のみによる圍繞配列が九州や東日本に波及するのに対し、円筒埴輪による圍繞配列は近畿および瀬戸内地域にしばらく留まることは、古墳文化の波及に関与した人々と、中枢に留まった人々が属していた祭祀的系列が異なるということであろうか。結論をすぐに出すことはできないが、両者の違いが単に被葬者の個人的な志向性に基づいたものではないことは明らかだろう。

前期中相以降はこれまで圍繞配列が行われなかった地域（北陸・山陰）や底部穿孔壺のみの圍繞配列しか行われなかった地域（東日本、九州、吉備・播磨以外の瀬戸内地域）にも円筒埴輪による圍繞配列が波及した時期である。特に新相以降は爆発的に類例が増えるが、越前以外の北陸や関東における房総半島など前期中に全く埴輪を受け入れない地域もあるし、九州や東日本では依然として旧来の壺による圍繞配列は残存していくことは前章で述べたとおりである。また、注目されるのは、九州や東日本において、底部穿孔壺と円筒埴輪が併用される古墳において、量的に多いのは底部穿孔壺の方であり、円筒埴輪が限定的に使用される例があるということである。青塚古墳や老司古墳、あるいは大分県の前方後円墳がそれにあたり、伝統性を保持する方に重心を置いたものと言えよう。

さらに東日本では前方後方墳が数多く築造されることは良く知られた事実であるが、前方後方墳において円筒埴輪がほとんど使用されないという状況が見て取れる。特に関東・東北地方では表6にまとめたとおり円筒埴輪を使用している古墳はほとんどが前方後円墳であり、唯一、田中舟森山古墳においてのみ、その可能性が指摘されている。円筒埴輪と前方後方形という二つの要素は東日本においては親縁性のない要素であり、この点は吉備や大和の状況と異なるといえる。東日本の前方後方墳からは三角縁神獣鏡が出土しないということも考え合わせれば、墳形の違いが被葬者の何らかの性格の違いを表している可能性は高いといえよう。

#### 註

559) 都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室

560) 中村春寿・上田宏範 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊

561) 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号

562) 清水久男 2000「東国の初期埴輪」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』大塚初重先生頌寿記念会

### 円筒埴輪による圍繞配列の意義の変遷

前期新相段階で爆発的に類例が増えた円筒埴輪の圍繞配列は、円筒埴輪生産の定着も手伝って、中期にはその全盛を迎えることとなる。ほとんどの大型古墳において円筒埴輪が使用されるようになることから、前期前半に見られた祭祀的な選択による採用ではなく、あくまでも古墳外表を飾る一装備として定着した感がある。一方で墳頂における主体部方形圍繞配列は前期新相以降、円筒埴輪だけではなく器財埴輪を多用するようになり、区画内に家形埴輪を配置するようになる。この段階になって方形圍繞配列およびその内部の家形埴輪が首長の居館である「オホヤケ」を表現したものとする車崎正彦<sup>563)</sup>の説は説得力があるだろう。それは首長の死後の居館を表現したものであり、それ自体が祭祀の対象となったようだ。中期に至ると墳頂の家形埴輪を中心とする埴輪配置が造り出しに再現され、兵庫県加古川市行者塚古墳<sup>564)</sup>において良好な状態が明らかにされている。祭祀の対象となったヤケに対して追祭祀する施設であろうか。三重県松阪市宝塚1号墳<sup>565)</sup>や、奈良県北葛城郡広陵町巢山古墳<sup>566)</sup>で調査され明らかになった陸橋で墳丘と繋がる方形島状施設は、奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡<sup>567)</sup>で発見された政治的中枢施設の構造を簡略化し、古墳脇に再現したものと推測される。埴輪の祭祀性は圍繞配列そのものでは薄れ、家形埴輪を中心とする形象埴輪群へと集約されていたものと思われる。

#### 註

563) 車崎正彦 2000「古墳祭祀と祖霊観念」『考古学研究』第47巻第2号

564) 加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書15

565) 松阪市教育委員会 2001『松阪宝塚1号墳調査概報』学生社

566) 広陵町教育委員会 2005『巢山古墳調査概報』学生社

567) 橿原考古学研究所 2005『御所市極楽寺ヒビキ遺跡の調査』現地説明会資料

## 第7章 考察—墳墓における土器配置の系譜と意義—

第3章から第6章にかけて各地域・各時代の土器・埴輪配置の様相を述べてきたが、本章では土器配置の観点から古墳の出現の問題にどのような言及ができるのか、以下の三節において考察していきたい。

### 第1節 弥生時代から古墳時代前期にかけての土器配置の系譜

これまで、各地域ごと、時期ごとに記述してきた土器配置について、ここではその系譜関係に注目しながらまとめてみよう（図6・7参照）。

#### 弥生時代の系譜

まず、弥生時代においては大きく三時期に分かれる。

弥生時代前半期を中心とする時期には埋葬施設への土器の副葬行為が中心を占めており、全国的な検討はまだ及ぼしていないものの、北部九州や吉備・畿内においてそれがみとめられる（第3章第1・2・4節）。東日本においても弥生時代の前半期に盛んになった再埋葬の壺棺が納められた土坑に、小さな壺や浅鉢・高杯などの土器が埋納してあったり、あるいは長野県塩崎遺跡群 21 号木棺墓<sup>568)</sup>のように墓壙内に多くの土器副葬する例もある。

ところが、弥生時代中期から後期にかけては調理器や供膳具を伴う土器群が各地域の墳墓から出土しているので、飲食儀礼を伴った葬送祭祀が盛んになったものと思われる。第3章でみてきたとおり、北部九州の「二塚山型」（第3章第1節）、畿内の「東奈良型」（第3章第2節）、四国北東部の「桜ノ岡型」（第3章第3節）、吉備の「四辻型」（第3章第4節）、「山陰型」（第3章第5節）、「北部近畿型」（第3章第6節）など、いずれも各地域外に対しては個性的であるが、地域内では一定の方法を共有しており、地域集団内の靱帯を図るような、きわめて共同体的な性格を帯びた儀礼であったと思われる。

それら中期の共同体的な儀礼が、後期から終末期にかけて変質を遂げていく。それは、階級分化の促進にともない、首長層の台頭に葬送儀礼のあり方も少なからず影響されたと考えられるが、その度合いは地域によってまちまちであった。北部九州の「宮の前型」（第3章第1節）のように、供献儀礼に移行したと考えられる地域もあれば、近畿北部地方のように後期の首長層の大型墳墓においてさえ、従来の儀礼のあり方を質的にも量的にも逸脱しない地域もある。山陰地方の「山陰型土器配置」は、より階層の高い埋葬に、より多くの土器が配置されていて質的には変化は無いものの、量的な部分と階層性とは相関関係にある。

しかし、後期における最も大きな変化は、後期後葉の吉備において「楯築型」（第3章第4節）とした、特異な土器配置が突如出現したことであろう。「楯築型土器配置」を遺した葬送祭祀儀礼はかなり大掛かりなものであったらしく、大型の象徴化された儀器（特殊土器類など）や多量の供膳具を使用した大規模な儀礼が行なわれたと考えられる。もう一つ重要なことは、後期後葉に吉備・山陰において隆盛期に達した葬送祭祀が四国北東部・播磨・近畿北部・北陸など周辺地域の葬送祭祀に影響を及ぼしたようで、土器配置のほかに

も埋葬施設の構造、あるいは墳丘の形態・規模などにもその影響がみてとれる。土器配置で言えば、播磨における有年原・田中1号円形区画墓出土の儀器は吉備の特殊土器類の影響を受けたと思われるし（第3章第7節）、四国北東部における「萩原型」の主体部土器配置は奥10号に吉備系土器の影響がみられる（第3章第3節）。また、近畿北部では庄内式併行期前半に築造されたと考えられる赤坂今井墳丘墓の主体部上からは在地の土器群に混じって口縁部に櫛描の組紐状文や波状文を施した土器が出土している（第3章第6節）。播磨や摂津を介して吉備の間接的な影響を受けたものと考えられるだろう。さらに北陸では小羽山墳墓群の30号墓および26号墓で、40個体を越える多量の土器を配置している。山陰型土器配置の影響が考えられるだろう（第3章第8節）。

このことに関連して、主体部上の標石や集石について集成・分析した大谷晃二の研究が参考になる<sup>569)</sup>。大谷によれば弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、主体部上に朱の精製具と考えられる石杵などの何らかの標石を置いたり、同じく主体部上に集石が配されたりする墳墓が中国地方を中心に数多くみられるという。どうも吉備・山陰を中心とする地域の弥生時代後期の葬送祭祀儀礼の特徴とも言える現象のようだが、これが周辺地域の当該期の主要な首長墓においてもみることができるのである。例えば、越前の小羽山30号墓<sup>570)</sup>では石杵に転用されたと考えられる蛤刃石斧が出土し、同じく越前の片山鳥越5号墓<sup>571)</sup>では集石、讃岐の奥10号墓<sup>572)</sup>でも集石、庄内式併行期に降って播磨の西条52号墓<sup>573)</sup>では円礫堆があり、山城の芝ヶ原古墳<sup>574)</sup>においても主体部上に集石がみられた。

このほか、墳丘については北陸において山陰の影響下に四隅突出型墳丘墓が築造されていることは著名な事実であるし、四国北東部の終末期の墳丘墓や近畿北部における後期後葉以降の墳丘墓の築造も、吉備の影響があったと考えられようか。また、越前の片山鳥越5号墓<sup>575)</sup>では箱形木棺の裏込めに塊石を使用して、あたかも石槨のごとき様相を呈している。北陸では山陰と同じく弥生時代には埋葬施設に石材を使用しないのが通有である。吉備の立坂墳丘墓<sup>576)</sup>の埋葬施設に類似例があるので、吉備地域の影響を受けたものと解釈して良いだろう。

このように土器配置ともども山陰・山陽の様々な要素が後期後葉以降、周辺地域に大きな影響を与えていることがわかる。そして、その影響は伊勢の高松墳丘墓や美濃の端龍寺山山頂墳、信濃の根塚墳丘墓、北平1号墓などに、主体部土器配置が見られることから間接的に東日本へと及んでいたものと思われる（第3章第9節）。

ただし、これらの主体部上に供膳具を配置する系譜が弥生時代後期あるいは庄内式併行期において、畿内の墓制にどのように影響があったのかを示す資料は、今のところほとんどない。その一方で、畿内においては中期以降、穿孔壺を区画墓の墳丘の各所に配置する土器配置が行なわれていることに注目しなければならない（第3章第2節）。墳丘の裾付近などに小土坑を設け、土器の胴下半部のみを埋めて据え置く様子は、のちの圍繞配列における底部穿孔壺の据え方と共通している。このように据え置かれた壺は、儀礼に使用された後に廃棄される土器群とはおよそ性格が異なる。これと最も共通した土器配置は関東地方の方形周溝墓に見られる（第3章第10節）。関東地方では墳丘に埋め据え置いた例は知られていないが、コーナー部やブリッジ脇の周溝中に壺が配置されている。たいていは覆土上層から完形品に近い状態で出土するために、ある程度溝が埋まってから周溝中に配置されたと考えられているため、畿内の「瓜生堂型」（第3章第2節）と全く同じというわけではなさそうだが、何らかの関連性はあるのだろう。また、壺を主体部周辺に配置する例と

しては西条 52 号墓（第 3 章第 6 節）や萩原 1 号墓（第 3 章第 4 節）が挙げられる。圍繞配列出現以前に「壺の配置」が行なわれていたことは明らかであろう。これらの現象は先の供膳具の配置が、吉備や山陰などを中心に西あるいは日本海側に偏っているのに対して、壺の配置は畿内を中心として東あるいは太平洋側に偏っているという、おおまかな分布の違いは指摘できるかもしれない。

#### 註

- 568) 長野市教育委員会 1986『塩崎遺跡群Ⅳ』
- 569) 大谷晃二 1995「弥生墳丘墓にける主体部上の祭祀の一形態」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 570) 古川 登 1995「発掘調査と問題意識—小羽山墳墓群の調査から—」『長野県考古学会誌』第 75 号
- 古川 登 1997「北陸南西部における弥生時代首長墓の認識—北加賀・越前北部地域の事例から—」『考古学研究』43 巻第 4 号
- 571) 古川登ほか 2004『片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址』清水町教育委員会
- 572) ゴルフ場建設用地内埋蔵文化財調査団 1973『雨滝山遺跡群』
- 573) 西条古墳群調査団 1964『西条古墳群調査略報』
- 574) 城陽市教育委員会 1987『芝ヶ原古墳』
- 575) 前掲註 571 文献参照
- 576) 近藤義郎 1996『新本立坂』総社市文化振興財団

### 移行期の土器配置の動向

庄内式併行期は弥生時代の土器配置が様々に変化し、多様な系統が入り組んで複雑な様相を呈している（図 6）。わかりやすく、述べるために移行期の土器配置を 4 つの動きに整理して述べてみよう。

まず一つめの動きはそれまでの各地域の土器配置を継承する動きである。これは「山陰型土器配置」のように全く在地の弥生後期の土器配置を変容させることなく堅持するパターンはまれであり、たいていは北部九州における「宮の前型」や吉備における「楯築型」の変容形、北陸における「小羽山型」（第 3 章第 8 節）の変容形のように在地内で変容していくパターンか、四国北東部の「萩原型」（第 3 章第 4 節）や「近畿北部型」のように外来の影響を受けて在地の土器配置が変質するパターンが多いといえる。しかし、これらは基本的には在地の土器配置を継承する動きとしてまとめられる。

二つめは畿内系加飾壺の動きである（第 4 章第 4 節）。この儀器はある決まった土器配置に使用されるわけではないが、畿内系加飾壺は北部九州から関東地方まで分布し、特定の儀器がはじめて広域分布を示したという点で注目される。その分布を見ると、豊後の下原古墳、伊予の雉之尾 1 号墳、阿波の萩原 1 号墓、讃岐の萩原 1 号墓、河内の加美 14 号墓、大和のホケノ山古墳、南丹波の黒田古墳、越前の小菅波 4 号墳、尾張の西上免古墳、信濃の弘法山古墳、上総の神門古墳群など、各地域の成立期の前方後円形あるいは前方後方形の墳墓から出土していることがわかる。もちろん在地系の方形墓にも多いが、むしろ、前方部をもつ墳丘墓の広がりや密接な関わりを持ったことを重視するべきであろう。また、その反面、吉備および山陰に分布しないことが大きな特徴とも言える。庄内式併行期前半から中ごろまでは吉備・山陰と大和はお互いの儀器を受け入れにくい状況にあったといえる。なお、ホケノ山古墳（第 6 章第 1 節）において加飾壺による圍繞配列が出現していることは古墳時代前期の壺による圍繞配列の祖形が畿内において誕生したことを示している

といえよう。その下地には弥生時代中期以来の「瓜生堂型土器配置」（第3章第2節）の影響があったと思われる。

三つめは吉備系特殊器台・特殊壺の象徴化への動きである（第4章第1節、第6章第2節）。後期後葉の立坂型の特殊壺は焼成後底部穿孔であるが、庄内式併行期前半から中ごろに相当する向木見型の特殊壺は焼成前に穿孔され、すでに象徴化が達成されている。使用状況としては、矢谷墳丘墓（第3章第5節）にみる限りでは主体部上に配置される個体はごく少なく、ほとんどが周溝に配置されている。この「外方配置」（第3章第4節）の傾向は立坂型にもすでにみられており、宮山型の段階には供膳具や調理器、あるいは長頸壺と大型装飾器台、細頸壺と中型器台などの他の象徴化された土器類が姿を消し、特殊器台と特殊壺のみが特化して墳墓に置かれるようになる。また宮山型の時期にはこれら吉備系の特殊土器類が大和に持ち込まれ、都月型特殊器台形埴輪とともにそこで巨大な前方後円墳の圍繞配列に使用されるに至る。これは庄内式末期から布留式最古相の時期に急激に興った現象であり、このことと連携して大和に巨大な前方後円墳が築造されるようになると考えられる。この吉備系の特殊器台や特殊壺などを中心とする圍繞配列を「吉備・大和型圍繞配列」（第6章第2節）と呼んだが、この系列の圍繞配列が円筒埴輪を生み、その後、圍繞配列の主系列として古墳時代を通じて継続されていくことになるのである。

四つめは「山陰型土器配置」や「楯築型土器配置」を中心とした他地域の影響下に、あらたな土器配置をつくりだす動きである。庄内式併行期における大和宇陀地域の「宇陀型土器配置」（第5章第1節）は墓壇内や主体部上、あるいは墳丘の特定箇所に土器を配置しているので、おそらく北部近畿地域の影響下に成立した土器配置であろう。また、東日本の「弘法山型」（第5章第2節）は、おそらく弥生時代後期段階に西日本の影響下に東海西部地域で醸成された供膳具の土器配置に、畿内系加飾壺が加わって主体部上に配置されるようになったものと思われる。これが、畿内の影響か、東海西部の影響かは判断がつかないが、東日本に広く広まり、東日本の古墳の出現に大きな影響を与えたことは事実であろう。

また、四つめの動きのなかで最も重要なものは山陰における全く新しい儀器を創出させた儀礼の誕生であろう。この儀礼については土器配置のデータとしては確かなものが無いが、儀器の標識資料としてはいまのところ徳楽墳丘墓出土品が中心的なものとして挙げられる（第4章第2節）。そこでは山陰型土器配置に使用される広口壺・鼓形器台・高杯・低脚杯など装飾性に乏しい普通の供膳具も存在するが、一方で竹管文、綾杉文などで派手に装飾された円筒器台・特殊壺・広口複合口縁壺など「伯耆系特殊土器類」と呼称される、まったく新しい儀器が登場している。円筒器台には縦長長方形のスカシなどがあり、のちの山陰型埴輪の成立に少なからず影響を与えたものと思われる。筆者は、このような徳楽墳丘墓で行なわれた祭祀儀礼から二つの系列がのちに分かれたと考えている。

そのひとつは山陰型特殊器台・山陰型埴輪を使用する系列で、その古いものは神原神社古墳の土器配置に見られる（第4章第3節）。神原神社古墳では供膳具はすでに量的に縮小されており、大規模な飲食儀礼の痕跡は見当たらない。頸部に綾杉文を施す「山陰系特殊壺」と裾広がり基部をもつ山陰型特殊器台形土器を打ち割って、竪穴式石室上に配置している。状況から圍繞配列に使用されたものではなく、儀礼時にのみ象徴的な儀器として立て置き、使用後に主体部上に埋置したものであろう。この系列がのちの大成古墳などの荒島墳墓群の大型古墳の土器配置へとつながっていくものと思われる。いまだ配置状況が明確になっているものが神原神社古墳例しかないために、本書では類型化しなかったが、将来「神原神社型土器配置」として

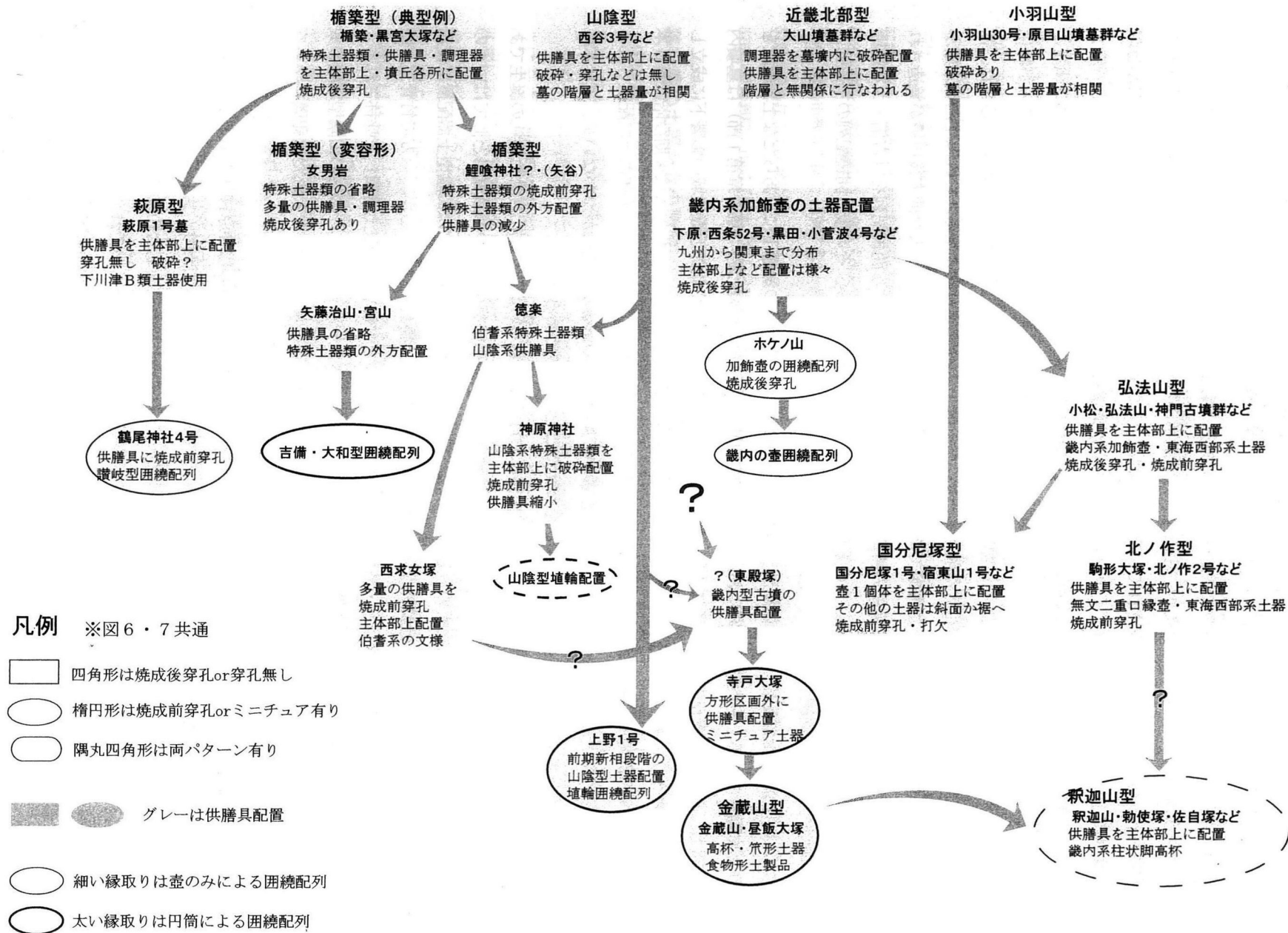


図6 弥生時代後期～古墳時代前期の土器配置の系譜

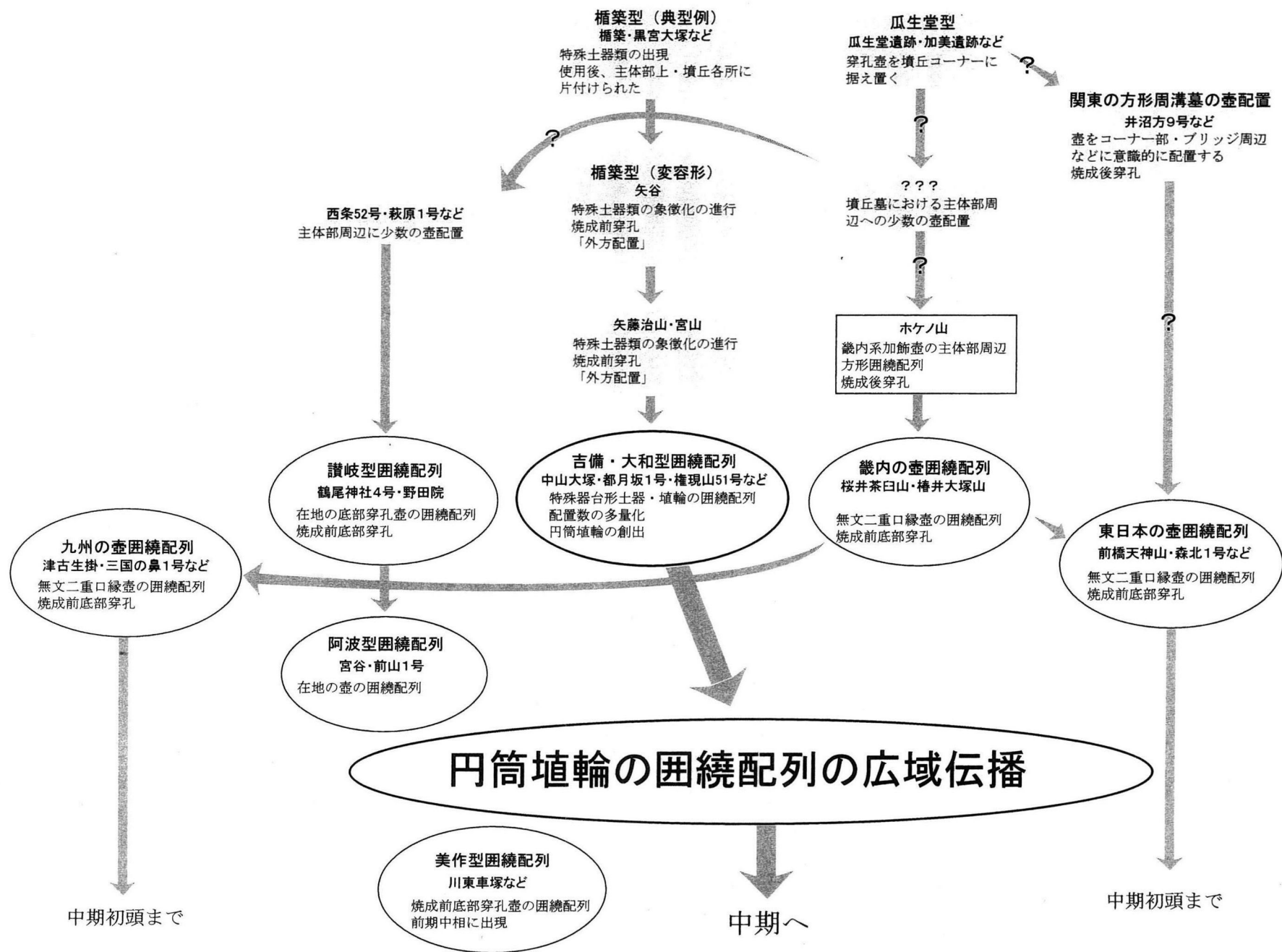


図7 围绕配列の系譜



認定できるかもしれない。

徳楽墳丘墓の祭祀儀礼から分かれるもう一つは、播磨や摂津の前期古墳に通じる系列である（第4章第2節）。播磨では丁瓢塚古墳・伊和中山4号墳において竹管文で装飾され、先ずぼまりの頸部をもつ特殊壺の破片が採集されている。また、摂津では西求女塚古墳・処女塚古墳において竹管文で装飾された二重口縁壺が出土している。土器配置としての実態は不明だが、儀器の系譜上の関係性から何らかの影響があったものと思われる。徳楽墳丘墓の儀礼は不明な点が多いが、山陰と東部瀬戸内地域の前期古墳の儀礼に大きな影響を与えている点で非常に重要である。また、箸墓古墳前方部上からも伯耆系特殊土器の長頸壺の類似品が採集されている（第6章第2節）ことを考えれば、なおさらのことであろう。今後、さらなる発見によって実態が明らかになることが期待される。

### 古墳時代前期前半の様相

古墳時代前期古相段階においては、庄内式併行期の錯綜した状況を経て、各地域において主体部上の土器配置が安定的に残存する反面、新たに圍繞配列が行われるようになる。

この時期の主体部上の土器配置は、在地の台状墓などの系列を引く中国地方や近畿地方・北陸南西部各地の小規模古墳で行われ続ける、いわば弥生系の主体部上土器配置と、あらたに大きな墳丘を備えた墓制として登場する大型古墳において行なわれる、いわば古墳系の主体部上土器配置とがある。後者の例としては、西日本では双水芝山2号墳、西求女塚古墳など類例が少なく類型化できないが（第5章第1節）、東日本では太平洋側の「北ノ作型」や北陸南西部の「国分尼塚型」など、比較的安定的に各地の前期古墳に見ることができる（第5章第2節）。また、山陰では弥生時代以来変化することなく「山陰型土器配置」が続いており、上野古墳に見られるとおり、前期新相段階まで続くことが知られている（第3章第5節）。前期中相段階の西日本の畿内型古墳の土器配置としては寺戸大塚古墳や平尾城山古墳にみられるように、主体部上を避け、主体部脇に土器を置くようになることが注意される（第5章第1節）。これは主体部上が神聖視されことと関係があると思われ、のちの金蔵山古墳の土器配置でも共通している。また、近畿北部地域では蛭子山1号墳や神明山古墳出土土器に見られるように前期中相ごろから山陰系土器の影響が強くなるようだ。

前期古相の圍繞配列は地域的な様相が顕著である。地域によって独自のものを挙げれば、吉備や畿内周辺あるいは西播磨の地域でみられる「吉備・畿内型圍繞配列」（第6章第2節）、四国北東部の「讃岐型圍繞配列」・「阿波型圍繞配列」（第6章第3節）などがある。前者は吉備系の円筒器台・特殊壺あるいは円筒埴輪を使用し、後二者は在地の系譜上にある独自の壺を使用している。また、山陰において山陰型埴輪が圍繞配列されているとすれば、この仲間に入れることができるだろう。この時期に唯一広範囲に広がった圍繞配列用の祭器といえば畿内系の底部穿孔二重口縁壺だけであろう（第6章第3節）。しかし、その分布域も各個的で、現在のところ北部九州、畿内、関東・東北などに限られている。このうち、畿内においてはその後、壺による圍繞配列があまり発達しないが、北部九州と東日本においては円筒埴輪よりも一般的に使用される状況が前期を通じて継続する。また、吉備では山間部を中心に前期中相以降、ようやく二重口縁壺による圍繞配列が行われはじめる。

## 古墳時代前期後半の様相

円筒埴輪の圍繞配列は前期中相ごろに定型化し、しだいに普及してゆくようになる。ただし、九州や東日本では壺の圍繞配列が主体的であることは繰り返し述べたとおりであるし、越前以外の北陸や房総半島など、ついに前期中には埴輪を受け入れなかった地域も存在した。また、近畿北部の「丹後型埴輪」や豊後の「豊後型大型器台」の存在など、前期新相においても各地の埴輪の使用状況は地域性を内包している<sup>577)</sup>。

一方で、本書では触れていないが、新相以降、いわゆる畿内型古墳では家形埴輪を中心とする形象埴輪群が発達し、埋葬施設上の方形区画とその内部の配置を構成するようになる。その結果、埴輪の祭祀性は家形埴輪を中心とする形象埴輪群へ集中し、円筒埴輪が本来そなえていた呪的効果は、前期新相以降は薄れていったと考えられる。古墳時代前期新相から中期にかけて、円筒埴輪の樹立間隔は密になって行き、それを補助するかのようには緒付埴輪が多用されることは、廣瀬覚によって指摘されている<sup>578)</sup>が、このことから円筒埴輪の圍繞配列が呪的性質を薄れさせ、物理的な性質を強めて言ったことがわかるだろう。

墳頂における形象埴輪配列が発達するに及び、主体部方形区画も整備され、主体部上は禁則地として神聖視されるようになったようだ。これに従って、いわゆる畿内型古墳では主体部直上に土器を配置することはしなくなり、変わりに方形区画の外側に土器を置くようになる（第6章第4節）。また、中期以降、形象埴輪群が造り出しにおいても配置されるが、行者塚古墳<sup>579)</sup>にみられるように、その形象埴輪群に対して土器供献が行なわれていることは注目される必要がある。前期における墳頂の土器供献が埋葬施設に眠る被葬者のみならず、埋葬施設上の形象埴輪群に対しても意識されていたことが分かる。

畿内型古墳の埋葬施設上周辺への土器配置は前期中相を境にして、それまでの弥生時代の系譜を引いたものから、古墳時代的なそれへと変化する。それは古相・中相段階のものが弥生時代の主体部上土器配置に使われた儀器の系譜を引き、それらを仮器化したものであったのに対して、新相段階のものはミニチュア化した柱状脚高杯に筭形土器や食物形土製品を伴うという道具立てであり（「金蔵山型」、第5章第1節）、食物供献儀礼が形式化したものへと移行していく。また、東日本では主体部上土器配置が行なわれ続けるが、その器種構成は柱状脚高杯が中心的役割を担うようになり（「釈迦山型」、第5章第2節）、少なからず西日本の影響を受けたものと思われる。これらの土器配置は中期古墳へと引き継がれていくことになる。

## 註

577) 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号

578) 廣瀬 覚 2002「前・中期古墳の埴輪配列—畿内を中心に—」『季刊考古学』第79号

579) 加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告15

## 結論—古墳出現に関わる土器配置の系譜—

以上が、弥生時代から古墳時代前期にいたる土器配置の系譜であるが、ここでさらにその系譜の中で古墳の出現に関わる部分だけを整理してみよう。

結論的に言えば弥生墓制から古墳へと移り変わる過程で、主に三つの系統が大きな役割を演じていることがわかる。それは①「楯築型土器配置」、②「山陰型土器配置」、③「畿内系壺配置」、の三種である。これらがそのまま前期古墳の土器配置に移行するわけではなくさらに、複雑に影響を及ぼしあいながら前期古墳の

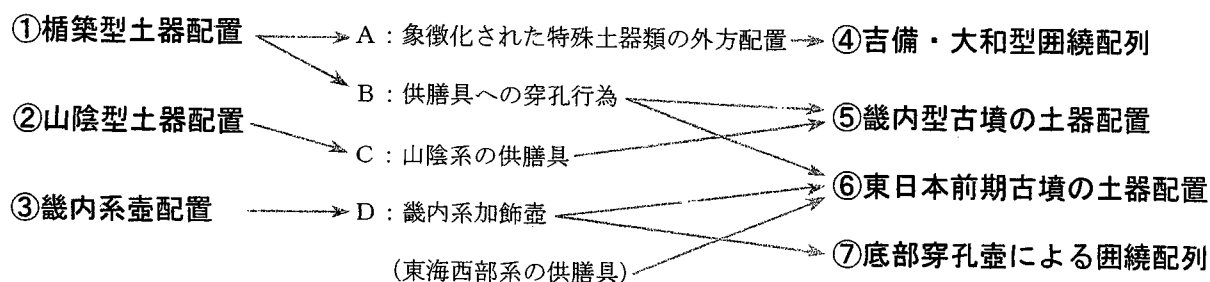


図8 古墳成立にかかわる土器配置の要素

土器配置をしだいに形作っていくといえよう。その様相を図式化したものが図8である。

①「楯築型土器配置」には後につながる二つの重要な要素が含まれている。A「象徴化された特殊土器類の外方配置」と、B「供膳具の穿孔行為」である。前者は④「吉備・大和型圍繞配列」が生じ、円筒埴輪の圍繞配列につながっていく。②「山陰型土器配置」は古墳時代前期まで C「山陰系の供膳具」を保持したという点で重要である。⑤「畿内型古墳の土器配置」の内容は未だ確定的ではないが、西求女塚古墳や東殿塚古墳の土器配置の内容を見る限りにおいては、この C「山陰系の供膳具」と B「供膳具への穿孔行為」とが影響していると考えられる。そして、③「畿内系壺配置」については、その実態がいまひとつ明らかではないが、その初源は「瓜生堂土器配置」など方形区画墓の穿孔壺配置と関係があるのだろう。庄内式併行期には③から D「畿内系加飾壺」という重要な要素が生まれる。ここからは⑥「東日本の前期古墳の土器配置」につながる系譜と、ホケノ山古墳を媒介にして⑦底部穿孔壺による圍繞配列の系譜が生じることになる。⑥には B「供膳具の穿孔行為」と「東海西部系の供膳具」という要素も不可欠である。

もちろん、地域的な前期古墳については、弥生時代からつづく各地域個有の在地的な土器配置の系譜が大きな意味をもっている。例えば四国北東部や近畿北部などもそうであるし、東日本の古墳の出現に関して言えば、上述したように「東海西部系の供膳具」の一項目を付け加えても良いだろう。しかし、広域に影響を与えた要素としては、ここに挙げた①「楯築型土器配置」、②「山陰型土器配置」、③「畿内系壺配置」という三種以上に大きな役割を演じたものは無いのである。

土器配置の系譜から追う限りは、古墳の出現とは上記の三要素が重要であり、それはつまりその土器配置を遺した葬送祭祀の思想・儀礼が弥生時代末から古墳時代の初頭にかけて重要な意味を持っていたということになるだろう。

## 第2節 儀器・祭器の象徴化について—打欠・穿孔行為を中心に—

ここで、墳墓出土土器にしばしばみられる打欠・穿孔などの部分破壊行為について採り挙げてみたい。

まず弥生時代後期の段階で墳墓出土土器において打欠や穿孔行為が見られる地域は、北部九州においてわずかに例があるものの、ほぼ吉備・畿内・東日本などの諸地域に限られていて、儀礼に使用された供膳具となるとほぼ吉備に限定されると言っても差し支えない。したがって、まず吉備における儀器の穿孔の問題から採り挙げてみることにしよう。

### 吉備における儀器の穿孔について

吉備における儀器の穿孔の問題については近藤義郎が考察している。近藤の弥生墳丘墓における葬送祭祀の一連の業績については第1章第2節において述べてあるので、全体を繰り返すことはしないが、そのなかでも土器の象徴化の問題は近藤理論の中核を為していると言えよう。そして、2001年までの著作においては立坂型段階の焼成後穿孔を行う儀器は儀礼使用後に「使用してはならない」あるいは「使用できない」ことを表すために穿孔され、片付けられたと主張していたのに対して、2002年の「象徴化の話（続）」<sup>580)</sup>以降の著作においては、それまでの自説を大きく転換させている。すなわち、「“使用してはならない” “使用できない” ことを土器について示すもっとも確実で容易な方法は、いうまでもなく壊すことである」とした上で、黒宮大塚墳丘墓などにおけるこれらの儀器の出土状態がほぼ完形で、破壊のあとがみられずにただそこに片付けただけという状態であることを指摘し、土器を壊さぬように焼成後穿孔することは大変難しく時間もかかることなのに「“再び使用してはならない” “使用できない” ようにするために、使用後そのような「面倒な」ことを果たしてするであろうか」という疑問を提示した。そして、立坂型の特殊土器類および、それらに伴う儀器は、儀礼の前に丁寧に穿孔され、はじめから象徴化された土器として儀礼に使用された、と考えた。『楯築弥生墳丘墓』（2002）<sup>581)</sup>でもほぼ同様なことを述べており、さらに「象徴化の話（続々）」（2003）<sup>582)</sup>では、その理由として、「亡き首長はもはや、なにも食べることも飲むこともできない。（中略）とすれば、霊前で共飲共食の祭祀を行なおうとすれば、共飲共食を象徴する祭式を行なうほかはない」と説明している。

近藤の一連の思考過程は非常に重要である。それは我々が「焼成後穿孔＝実用の儀器を使用後に穿孔した」、あるいは「焼成前穿孔＝儀礼が省略され、はじめから仮器として製作された」という暗黙の常識を覆したことであろう。重要なのは「焼成後・儀礼前穿孔」という概念を提出したことと、「仮器」による形式的儀礼の存在を指摘したことである。しかし、黒宮大塚古墳の葬送祭祀では本当に飲食儀礼が行われなかったのだろうか。筆者はその点がどうも気にかかる。それは黒宮大塚墳丘墓出土土器を実見した際に観察し得た土器の穿孔方法から、儀礼における穿孔の意味を考え直したときに、近藤の説に疑問を持ったからである。このような儀器の穿孔に関する問題は、弥生・古墳両時代間における墳墓の変遷過程を解き明かす上で非常に重要な意味をもつと考えられるので、以下に黒宮大塚墳丘墓出土土器の観察結果と、そこから復原される儀礼の過程について記しておく。

### 註

580) 近藤義郎 2002「象徴化の話（続）」『古代史の海』28号

581) 近藤義郎 2002『楯築弥生墳丘墓』吉備考古ライブラリィ8 吉備人出版

582) 近藤義郎 2003「象徴化の話(続々)」『古代史の海』32号

## 黒宮大塚墳丘墓出土土器の観察と儀礼の復原

黒宮大塚墳丘墓出土土器は岡山県倉敷市倉敷考古館において所蔵されている。2003年3月に同館に申請して許可され、資料を熟覧する貴重な機会を得た。1977年の発掘調査<sup>583)</sup>において出土した多量の土器のうち、実測図が掲載されている多くの土器が展示室において公開されているが、筆者が実見したのはそれら展示されている土器に限られることをはじめにお断りしておきたい。

この資料調査の成果のうち大きなものは二つある。ひとつは高杯・脚付直口埴などの供膳具の受け部下方に施された穿孔に二種類あり、器種によってその比率が異なること。もう一つは細頸壺のうちの1個体の底部に焼成前穿孔があり、そのすぐ横に焼成後に打撃によって開けられた孔の存在を確認したことである(写真7)。

一つめの供膳具の穿孔については、楯築墳丘墓出土品にも存在することが近藤義郎によって指摘されている<sup>584)</sup>。黒宮大塚墳丘墓においては打撃によって開けられたものと、おそらく錐状の工具によって開けられたものの二種が存在しており、報告書においても両者の違いが指摘されている<sup>585)</sup>。ただ、実測図上ではどちらともとれないものもあるが、実見すると両者の違いは明瞭で容易に見分けることができる。どちらも焼成後穿孔の範疇に入るものだが、ここでは前者を「打撃穿孔」、後者を「錐揉み穿孔」と呼び分けることにする。

「打撃穿孔」(写真1～4)では孔の大きさが10～15mmほどのものが多く、孔の形は不定形である。そして片方の面において周辺の器表が広くはがれていることが特徴である。これは打撃によって、打撃点から放射状に力が抜けるため、打撃面の反対側が広く剥がれる現象によるものと思われる。したがってどちら側から打撃を加えたかが判断できる。観察した結果、高杯の全個体が内側(上側)から打撃を加えている(写真1・2)のに対し、内面から打撃しにくい脚付直口埴では、ほとんどの個体において内側が広く剥がれており、外側から打撃を加えていることがわかる(写真3)。ところが脚付直口埴のうち口縁部の開く23のみは内側から外側へと打撃していることを実見により確かめることができた(写真4)。この観察から、打撃に使用された工具は、口の狭い土器にも入れられる、細長い道具と考えられる。礫などではこの土器を内側から穿孔することは不可能であろう。また、これらの観察から、なるべく土器の内側から穿孔することの方が望ましいと考えられていたことが分かるし、打撃穿孔はこつこつ開けていくのではなく、割れ口の状態の観察から、ほぼ一撃で開けたことが推察される。このことは儀礼の問題と絡めて非常に重要な要素であることを後段で述べる。

「錐揉み穿孔」(写真5・6)は孔の大きさが3～4mmと一定しており、孔の形は一定した円形を呈している。断面は筒形で、若干、器表面が孔径よりも一回り大きく皿状に剥離している。しかし、打撃穿孔に比べればごく小さな剥離であり、両者の違いは一目瞭然である。こちらは穿孔方向を特定することは難しいが、強いて挙げれば先に工具をあてるほうが剥離範囲が小さい傾向がある。これは器形ごとの打撃穿孔の方向性と照らし合わせて観察して得られた結果である。

さて、問題となるのは、なぜ「打撃穿孔」と「錐揉み穿孔」の両者が存在するのかということであろう。この問題を考えるために図9に穿孔方法を特定できた供膳具を分けて示してみた。実測図上において穿孔が

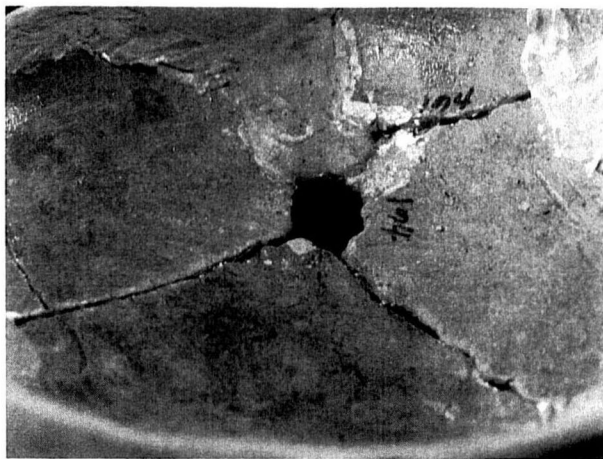


写真1 打撃穿孔 内→外（内弯高杯杯部内面）



写真2 打撃穿孔 内→外（写真1 資料外面）



写真3 打撃穿孔 外→内（脚付直口埴外面）

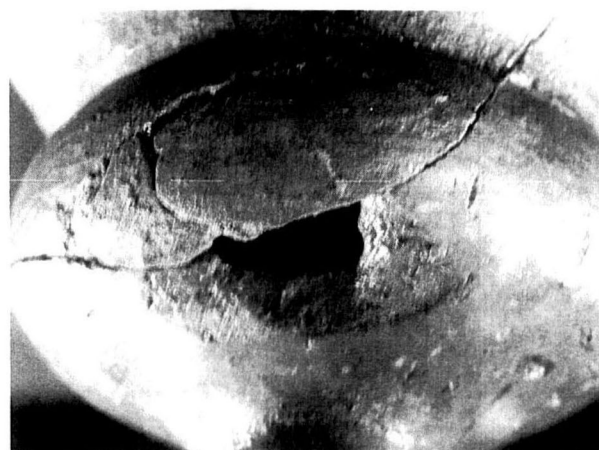


写真4 打撃穿孔 内→外（脚付直口埴外面）

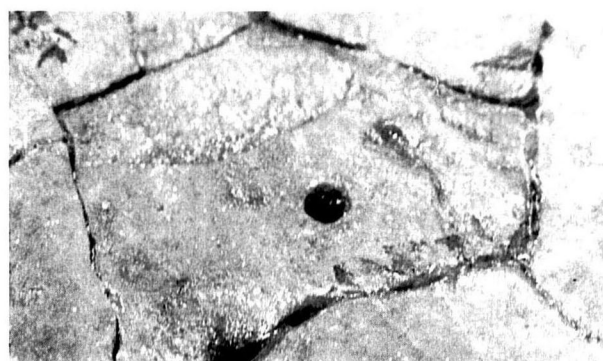


写真5 錐揉み穿孔 内→外（内弯高杯杯部内面）

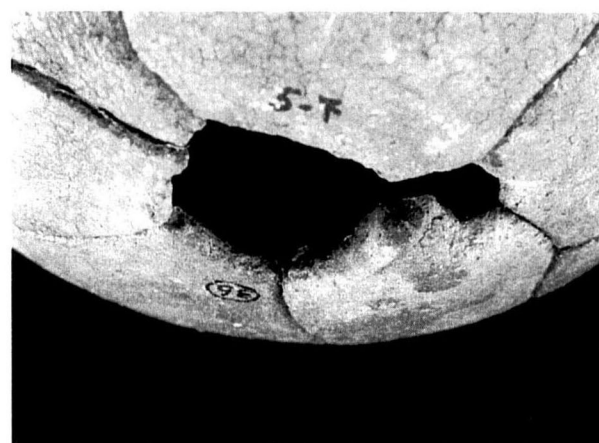


写真7  
細頸壺底部に見られる  
焼成前穿孔（左）と  
焼成後穿孔（右）

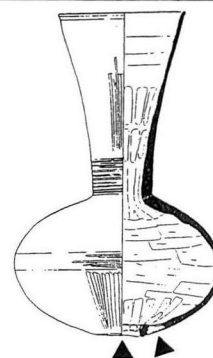
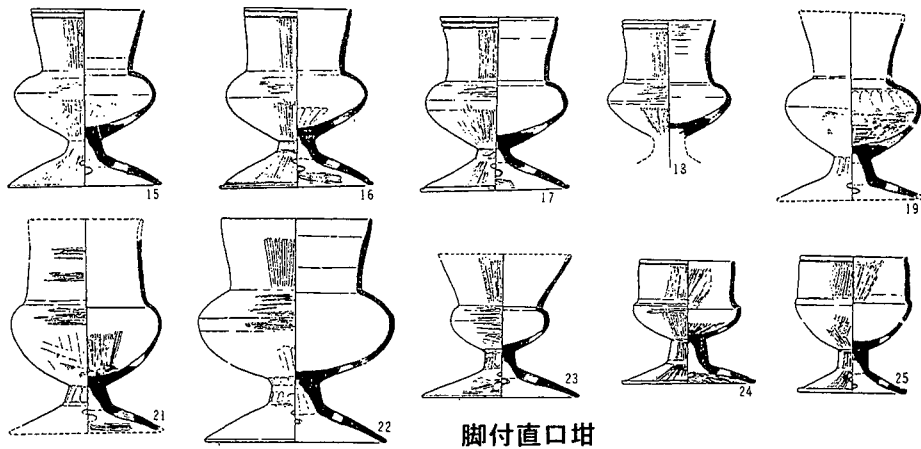


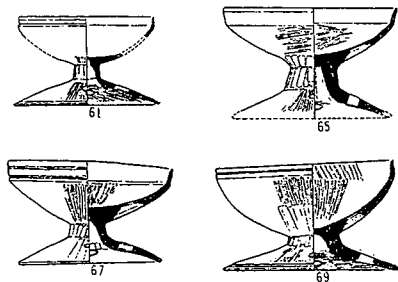
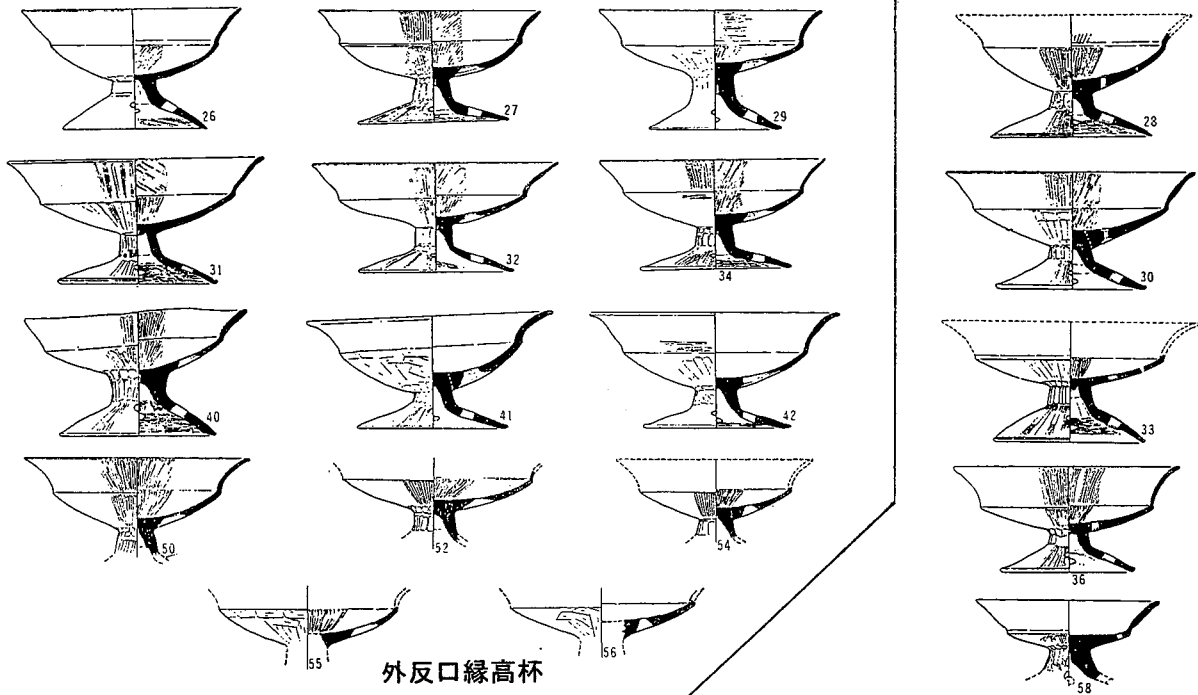
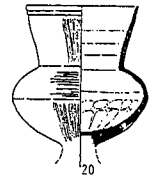
写真6 錐揉み穿孔 内→外（写真5 資料外面）

※写真1～7はいずれも黒宮大塚出土資料（倉敷考古館蔵）

打撃穿孔



錐揉み穿孔



内弯口縁高杯

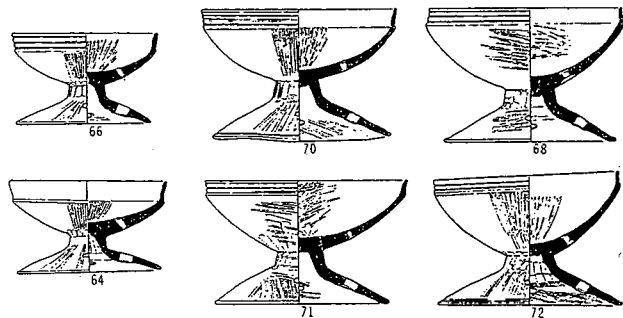


図9 黒宮大塚墳丘墓出土供膳具の穿孔方法 ※S=1/5

表現されていなくても実見によって確かめ得たものは図中に掲載してあるが、実測図上で判断できず実見もできなかった個体は除いてあるため、実際の数を表しているわけではない。しかし、おおよその比率はわかるだろう。以下に見てみると、出土量の多い供膳具3種のうち脚付直口埴は打撃穿孔が10個体を数えるのに対して、錐揉み穿孔は1個体だけである。外反口縁高杯は打撃穿孔が14個体、錐揉み穿孔が5個体。内弯口縁高杯は打撃穿孔が4個体、錐揉み穿孔が6個体である。脚付直口埴→外反口縁高杯→内弯口縁高杯という順に打撃穿孔の割合が減り、錐揉み穿孔の割合が増えるという結果になった。なお、図示していないが、台付鉢に同様な二者の穿孔方法があり、細頸壺は3個体とも打撃しており、1個体の底部には前述したとおり焼成前の穿孔がみられる。甕は2個体のうち1個体(85)だけ観察できたが、打撃による穿孔のようだ。鉢は実見できなかった。このように器種によってその穿孔方法の割合はまちまちであり、その違いが何に起因するのかが難しい。ただし、近藤義郎が指摘するような丁寧な作業による穿孔は錐揉み穿孔にのみ該当し、打撃穿孔は一撃でなされているので、けっして手間のかかる作業とは感じられない。むしろ打撃穿孔によって壊れたと考えられる土器もあるため、少なくとも打撃穿孔は儀礼に使用する予定の土器に対して行われるものではないことが指摘できるだろう。逆に打撃穿孔される土器は穿孔前に儀礼に使用され、廃棄されるときに打撃穿孔されたと考えられる。したがって筆者はこれらの土器を使用して飲食儀礼が行なわれた可能性は高いと判断する。

それでは、錐揉み穿孔によって丁寧に孔を開けられた土器は何に使用したのだろうか。この点については二通りの考え方があるように思う。ひとつは飲食儀礼の際に、その場にはあるけれども実際に使用しない土器であったということ。これは近藤の言う「象徴化」された儀器に相当するもので、死者が使用する儀器、つまり霊前に供えられた仮器ということができるだろう。この案が魅力的なのは、調理器である甕が錐揉み穿孔されていないということと、酒器かと思われる脚付直口埴のうち錐揉み穿孔されたものが1個体しか存在しないという点である。食物を盛る高杯はいくつか必要だが、酒器は一人に一つ属するものなので、死者用に仮器化されたものが一つあればよかったのだろう。

もう一つの考え方としては、基本的に全ての土器が飲食儀礼に使用され、儀礼終了後に半分ほどは錐揉み穿孔され、残りは打撃穿孔されたという案である。なぜ二通りの穿孔方法があるかといえば、打撃穿孔という行為自身が儀礼として一定の重要性があったために、打撃穿孔する予定の土器を除き、あとは打撃穿孔儀礼の前にあらかじめ穿孔しておくということではないだろうか。ここでは二つの意識が働いていると思う。ひとつは儀器の廃棄にあたり、それらが必ず穿孔されていなければならないということ。このことは近藤義郎が「使用してはならない」ことを表すためだと指摘したとおりであるし<sup>586)</sup>、古くは田代克己が「穢れ」除去の概念を提出している<sup>587)</sup>。もう一つは儀器の廃棄にあたり、なるべく土器の原形を保ったままでそれを行ないたいという意識の存在であろう。このことに関連して、立花実が神奈川県王子ノ台遺跡から出土する底部穿孔壺について、

「孔はあるものの周囲の底面は残されているため、土器の自立を妨げるものではない。底部の機能を損なわないように穿孔するには、それなりの技術と細心の注意が必要であったと考えられる。つまりここでいう「底部穿孔」には、穿孔後も土器を立てて使用する必要があったと推察する。そしてもうひとつ、器としては使えないが、外見上は完形土器に見えるという必要性があったのかもしれない。このように、この底部穿孔は穿孔後の使用を想定したものと考えられ、



この点からも「底部穿孔」が土器の破壊や廃棄を目的とした行為であるとする事はできない

立花 実 「第V章第3節 方形周溝墓の分析」<sup>588)</sup>より

と述べているが、まさに卓見であろう。今ここで問題にしている吉備の供膳具の事例と、関東における底部穿孔壺は直接的な関わりはないが、吉備の供膳具への穿孔もおそらく「廃棄」ではなく「供献」・「埋納」に近い意識のもとで行なわれたのではないだろうか。

どちらの案が真実に近いのかは分からないが、もし後者の場合であれば、廃棄までの下準備としての錐揉み穿孔と打撃穿孔儀礼との間にはタイムラグが存在しているように思える。その場合は飲食儀礼は墓地ではなく別の場所で行なわれ、儀器を供献するために使用後に墓地まで運んだことも考慮に入れる必要があろう。いずれにせよ、土器を廃棄するための打撃穿孔とそのあとの配置についても、それらの行為自体が儀礼化していた可能性が高い。

儀礼における穿孔行為のあり方についてもうひとつのヒントとなるのは、先述したように一つの細頸壺に焼成前穿孔と焼成後穿孔の両者が共存している事実である。あらかじめ孔の開いている土器に対して、何ゆえもう一度孔をあけるのか。しかも、すぐ横に開けているので、焼成前の孔に気づかずに開ける可能性はないだろう。このことから以下の三つの指摘ができると思う。

一つめは孔を開ける行為自体が必要だったということであろう。これは打撃穿孔儀礼なるものの存在を証明していると言えそうである。黒宮大塚墳丘墓の主体部上から出土した土器の器台を除く全ての器種に打撃穿孔された個体がみられる<sup>589)</sup>ことから、全ての器種に打撃穿孔することが全ての土器を「使用できなく」したということを表現したのかもしれない。あらかじめ焼成前に孔を開けて作られた細頸壺も、儀礼の進行上参列者の前で「孔を開けてみせる」行為が必要だったのだろう。

二つめは立坂段階における焼成前穿孔の儀器の存在である。このことは近藤の説くとおり、あらかじめ象徴化された土器が儀礼に使用されていたということである。筆者の場合は飲食儀礼の場において、参列者用の実用品とは別に穿孔され、象徴化された土器が死者用に用意されたと考える。これこそが「仮器」の本質的な姿なのだろう。

そして、三つめは黒宮大塚墳丘墓の葬儀のための儀器を製作した人たちは、あらかじめ仮器として製作する器種を知っていたということである。逆に言えば焼成前穿孔を施していない土器は実用の儀器（食器など）として製作したのであろう。このことから飲食儀礼の存在自体を否定することは難しいと思われる。しかし、焼成前穿孔されずに製作されたもののうちから数個体をあとで錐揉み穿孔し、死者が使う仮器とする可能性はありうると考える。

以上、黒宮大塚墳丘墓出土土器の観察結果から、穿孔行為と葬送儀礼の進行過程を復原してきた。結論としては、以下の4点を挙げられる。

- ①土器に見られる穿孔から飲食儀礼の存在自体を否定することは難しい。
- ②飲食儀礼が行なわれたと見る場合、そこに死者用に用意された仮器が存在した可能性が高い。
- ③土器を廃棄する前に行なわれる打撃穿孔行為はそれ自体が儀礼化していた可能性がある。
- ④廃棄する予定の土器はなるべく外形を保つことが腐心されていたと考えられ、使用の終わった儀器を「供献」する意識があったと思われる。

## 註

583) 間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館

584) 近藤義郎編 1992『榑築弥生墳丘墓の研究』榑築刊行会 128頁参照

585) ただし、それぞれの穿孔方法に属する個体数について、報告書における判定結果と、実見による判定結果が異なった。筆者は全ての個体を実見したわけではないが、筆者のカウント数のほうが報告書よりも多くなるケースもあるので、ここでは実見による結果にしたがって記述を進める。

586) 近藤義郎 2000「象徴化の話」『古代史の海』21号

587) 田代克己 1985「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』鳥越憲三郎博士古希記念論文集 雄山閣出版

588) 立花 実 2000「第Ⅴ章第3節 方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』東海大学校地内遺跡調査団  
635～636頁参照

589) ただし、特殊壺は底部が遺存していないので、打撃穿孔の有無は不明である。

## 「位相の移行」と土器の打撃穿孔行為について

次に土器の打撃穿孔行為と、儀礼の過程の関係について考察してみよう。

葬送祭祀のばあい、被葬者の死から、埋葬を経て、喪があげるまで様々な段階とそれにまつわる儀礼が存在する。弥生時代の終わりごろの倭人世界の葬儀の様子は序章に述べたとおり、文献資料として「魏志倭人伝」<sup>590)</sup>にその記述がある。それによれば、

死 → 「喪十日余」（「不食肉」、「喪主哭泣」、「歌舞飲酒」） → 埋葬 → 「水中繰浴」

という4段階に整理できる。竹岡俊樹はこのような祭祀の諸段階を「位相」と呼んでいる<sup>591)</sup>。もっとも竹岡自身の「位相」の定義は、「位相—自己あるいは他者（物を含む）が所属する空間、時、そして社会的集団をさす」というものであり、竹岡の唱える文化の感性的・非言語的側面を研究する上での用語であるが、その中である祭祀の一場面をさす場合もこの「位相」という用語を用いているので、本書においてもそれに習うことにしよう。ここで重要なことは「墳墓における埋葬儀礼」という、葬送の中核をなす位相の前段階に「喪」という位相があり、あとには「水中繰浴」という位相があるということである。

「魏志倭人伝」における「喪」について、和田萃はのちの「殯」の萌芽形態という理解を示している<sup>592)</sup>。死のあと、すぐに葬らずに一定期間ある場所に遺骸を安置し、そのそばで何らかの儀式的行為を行うことが、その位相の内容である。また、後に位置する「水中繰浴」の位相については、「穢れ」を祓う行為とみられ、のちの「<sup>みそぎ</sup>禊」につながるものと解釈されている<sup>593)</sup>。ここでは、それぞれの儀礼の内容について細かく考察することが目的ではなく、このように葬送祭祀には「位相」とよばれる各段階があることを理解すればよい。

そして、竹岡はある位相から次の位相へ移行する際に、二つの位相の境界性をあらわすような儀礼が行なわれることがあるという。例えば、民俗例であるが、婚姻の儀礼では、嫁が実家を出る際に戸口で盃や、あるいはそれまで実家で使用していた食器などを割る行為が行われる。これは娘と実家とのつながりを切ることを目的としていると説明されている。また、婚家に入る際に爆竹や鉄砲を鳴らす民俗例があり、音によっ

て位相を区切る意味をもつことが指摘されている<sup>594)</sup>。葬儀における「音」については世界の民族調査例によく採り挙げられており、音楽の調子などを変えて位相の移行を表現する場合もあるようだ<sup>595)</sup>。筆者は先に、黒宮大塚墳丘墓出土土器の穿孔を観察した結果、打撃によって土器を穿孔すること自体が儀礼として行われていたのではないかという推察を述べた。その理由は、実はその行為が墓地における「埋葬」という位相の終了をあらわす儀礼であり、次の位相への境界を、土器を穿孔する際の打撃音で表したのではないか、という発想があったからである<sup>596)</sup>。

このことはあくまでも仮説ではあるが、黒宮大塚墳丘墓出土の細頸壺に焼成前穿孔と打撃穿孔が共存する事実から、穿孔された孔よりも打撃行為自身に意味があったのではないかと考えられ、この仮説に一定の根拠を与えうると考える<sup>597)</sup>。

#### 註

590) 今鷹真・小南一郎訳 1993『正史 三国志4』ちくま学芸文庫 筑摩書房

591) 竹岡俊樹 1996『日本民族の感性世界—考古学から文化分析学へ—』同成社 15頁参照

592) 和田 萃 1973「殯の基礎的研究」『論集終末期古墳』塙書房

593) 佐原真 2003『魏志倭人伝の考古学』岩波書店

594) 前掲註 591 文献 (竹岡 1996) 102～103 頁参照

595) P・メトカーフ、R・ハンティントン 1996『死の儀礼—葬送習俗の人類学的研究』池上良正・池上富美子訳 未来社

596) 穿孔の際の打撃音については、青山博樹論文の「死者の葬られた古墳の上でにぶい音とともに壺の底が打ち砕かれ、儀式はクライマックスを迎える」という一節にヒントを得た。

青山博樹 2004「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』第18号

597) なお、土器の打撃による穿孔については実験を行っていない。今後、実験によって土器の打撃穿孔の方法と音の関係を追及できればと思っている。

### 儀器の象徴化の進行と葬送祭祀の変化

さらに問題としないといけないのは墳墓から出土する土器に焼成前の穿孔が施され始めるということが、いったい葬送祭祀全体の過程中的のいかなる変化によるものなのかということである。このことが弥生墓制から古墳が出現する過程の葬送儀礼の変化を如実に物語る核心であるといえるだろう。

一般的には出土土器に焼成後の穿孔が見られるときは、飲食などの儀礼使用後に「穢れ」除去のために穿孔され廃棄されたものだとして、反対に焼成前の穿孔が見られるときには、飲食儀礼が省略され、はじめから穿孔された土器を置くことのみを行った、とされている。

まず問題にしたいのは、ここで「実用」とした土器が、「魏志倭人伝」に見える「喪」期間中の「歌舞飲酒」の儀礼に使用された儀器なのか、埋葬儀礼用に別に用意された儀器なのかということである。島根県西谷3号墓の調査では、中心主体の一つである第4主体の墓壇上でおびただしい量の土器が見つかり、また、墓壇埋め戻し後に、墓壇上に仮の建物が建造されたことを示す柱穴が検出されているので、渡辺貞幸は埋葬儀礼終了後に墓上で盛大な飲食儀礼が挙行され、終了後に使用の終わった儀器を墓壇上に片付けたとした<sup>598)</sup>。この説によれば、「喪」の有無はともかくとして、埋葬儀礼終了後に飲食儀礼が挙行されたことになり、墓壇上

の儀器はその儀礼に使用されたことになる。

これがおそらく山陰型土器配置を遺した人々が行なった儀礼の姿であったと思うが、他のほとんどの地域の葬送祭祀が同じような進行過程を備えていたという証拠はない。筆者は、黒宮大塚墳丘墓出土土器にみられた丁寧な「錐揉み穿孔」から、丁寧な作業をするだけのタイムラグの存在を予想した。そして、このことから飲食儀礼は墳墓とは別の場所で行なわれた可能性も考慮すべきだと述べた。すべて、一様に考える必要はないだろう。

それでは焼成前穿孔の段階ではどうだろうか。庄内式併行期の矢谷墳丘墓の事例のように、特殊土器類にのみ焼成前穿孔が施されている場合は飲食儀礼の場において備えられた「仮器」としての性格が考えられ、飲食儀礼そのものを否定する材料とはなり得ないが、のちの前期古墳の主体部上に残された土器群は供膳具にも焼成前穿孔が施されており、問題となる。これには二通りの考え方があるだろう。

ひとつは飲食儀礼で使用する土器とは別個に、墳墓埋納用に「仮器」を製作し、埋葬儀礼の最終段階でそれらを配置するという考え方。この場合は飲食儀礼が墓地において行なわれたとは考えにくい。おそらく飲食儀礼を伴った「喪」にあたるものを集落などで行い、それとは分離された形で埋葬儀礼が行なわれたものと思われる。これを A 案とする。

もうひとつの考え方は飲食儀礼そのものが象徴化され、仮器による象徴化された儀礼をおこなったとする案である。これは近藤義郎の「象徴化の話（続）」<sup>599)</sup>あるいは「象徴化の話（続々）」<sup>600)</sup>に主張されている儀礼の内容と同一のものである。亡き首長はすでに飲食ができない状態であるから、それにあわせて参列者たちも仮器を使用して「飲食の振り」をするというものである<sup>601)</sup>。これを B 案とする。このような儀礼に合う状況証拠としては、西求女塚古墳（図版 95）や小松古墳（図版 102）などの墳頂から出土している、多量の供膳具に焼成前穿孔が施されている事例であろう。A 案のように形式的に仮器を埋納するだけであるならば、このような多量の土器は必要ないと思われる。実際に儀礼に使用されるために人数分用意される必要があったのだろう。

このことを解決するには喪や殯の遺構も含めた検討が必要であり、ここではこれ以上深くふれることはできないが、少なくとも儀器の象徴化の原因を単純に「飲食儀礼の省略」ととらえることは、避けなければならないだろう。それは古墳における墓域の聖域化という志向性から読む限りでは、「聖」と「俗」を厳しく分離した結果、儀礼参加者が使用した実用品とは別に埋納用の「仮器」を製作したという A 案のようなパターンも充分考慮されるべきだと考える。

結論を述べれば、土器の象徴化から古墳の出現を考えた場合、「古墳」とは非日常的な区域としてこれまでにないほど完璧に隔離された墓域の登場という意義付けができる。また、このような志向性を示すものとして、前期新相段階における、「金蔵山土器配置」にみられる食物形土製品の供献行為が挙げられる。集落で「喪」にあたる祭祀が行われても、そこで使用したものは墳墓に持ち込まず、仮器を別途製作して供献したものと想像される。

#### 註

598) 渡辺貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」『島根県考古学会誌』10

599) 近藤義郎 2002「象徴化の話（続）」『古代史の海』28号

600) 近藤義郎 2003「象徴化の話（続々）」『古代史の海』32号

601) なお、近藤はこのような儀礼を立坂段階の墳墓からすでに行なわれていると主張しているが、筆者はもう少しあとのことだと考えている。

### 第3節 葬送祭祀儀礼の系譜からみた古墳の出現過程

最後に古墳の出現について、これまでの土器配置の分析から気がついたことを述べてみよう。

まず、現在「古墳」と呼ばれている墓制は、土器配置の系譜から考えると、多分に弥生墓制の葬送祭祀儀礼の系統を引いているということが言える。それは地域によってはかなり直接的な系統がそのまま古墳時代まで保存されるところもあれば、他地域の弥生墓制の葬送祭祀儀礼の名残を受け入れるところもあった。それゆえ、古墳時代の墓制を「古墳」と呼ぼうとするならば、これらはすべて古墳になるが、もし、質的に分けるとすれば、古墳時代前期前半における大方の墓制は、古墳とは呼べないと思う。

次に、それではどこから「古墳」と呼べるような墓制がはじまり、その内容はどのようなものかという問題であるが、それには二つの考え方があるだろう。

ひとつは全く新しい葬送祭祀のもとに築造された墳墓を「古墳」と呼ぶという考え方であるが、これは本書で見てきたとおり、前期古墳における儀礼が何らかの形で弥生墳墓の儀礼の系譜を引いているので、その境界を質的に決定することは難しい。よく箸墓の出現をもって「古墳」とする向きがあるが、現在判明している箸墓古墳に含まれる要素の中で厳密に考古学的事象において新しい要素といえば、墳丘の「巨大性」という1点のみであろう。そうすると巨大古墳以外の境界が理論的に設定し難くなるのは自明であろう。

もう一つの考え方は、広域に広がる要素をもって「古墳」のはじまりを決めようとするものである。弥生時代後期段階は吉備・山陰の墓制が四国北東部・丹後・北陸南西部などの地域の墓制に影響を及ぼしている状況が確認できるが、九州や東日本にはその直接的な影響は及んでいない。ところが、庄内式併行期になると、畿内系加飾壺を出土する墳墓が北部九州から関東までという非常に広域に出現する。それらの墳墓には前方部をもつ前方後円形・前方後方形の墳墓がみられ、寺沢薫のいう纏向型前方後円墳<sup>602)</sup>も多く含まれている。こうした各地域における初期の前方後円形・前方後方形墳墓は埋葬施設に長大型の竪穴式石室を採用しておらず、漢鏡7期以前の中国鏡<sup>603)</sup>を少数副葬することが多い。また、三角縁神獣鏡が副葬されないことも大きな特徴であろう。このようにはっきりとした基準は決めがたいものの、緩やかな類似性を指摘することができ一群の墳丘墓が、庄内式という時期に北部九州から関東まで広がっている状況は重要だと思われる。この動きはとりもなおさず畿内の影響が始めて広域に及んだ現象として評価できるだろう。筆者はこのような墳墓に対して「**早期古墳**」の概念を提唱したい。畿内系加飾壺の存在はそのメルクマールの一つとして捉えておく。

次に北條芳隆のいう「第2群前方後円（方）墳（真正前方後円墳）」<sup>604)</sup>（第1章第1節参照）について考えてみよう（図10）。これは本書では「畿内型古墳」と称してきたものと、ほぼ同義である。この庄内式併行期末から布留式最古相段階において成立した、巨大な前方後円墳を含む一群の古墳は近藤義郎によって①定型化した前方後円形の墳丘や、②長大な割竹形木棺を納める竪穴式石室、③鏡の多量副葬志向という、三つの特徴によって性格づけられた<sup>605)</sup>。また、そののちに都出比呂志によって、段築の存在と<sup>606)</sup>、北頭位埋葬<sup>607)</sup>の二要素が加えられ、さらに後円部円丘の正円の獲得なども挙げられるだろう。また、近藤は予備的なものとしながらも埴輪を第4の要素に加えているが、埴輪が存在しない場合も多いとしている<sup>608)</sup>。

確かに近藤の指摘どおり、埴輪をもたない「第2群前方後円（方）墳」は多い。例を挙げれば椿井大塚山古墳、西求女塚古墳、雪野山古墳、桜井茶臼山古墳、黒塚古墳、下池山古墳、大和天神山古墳、備前車塚古

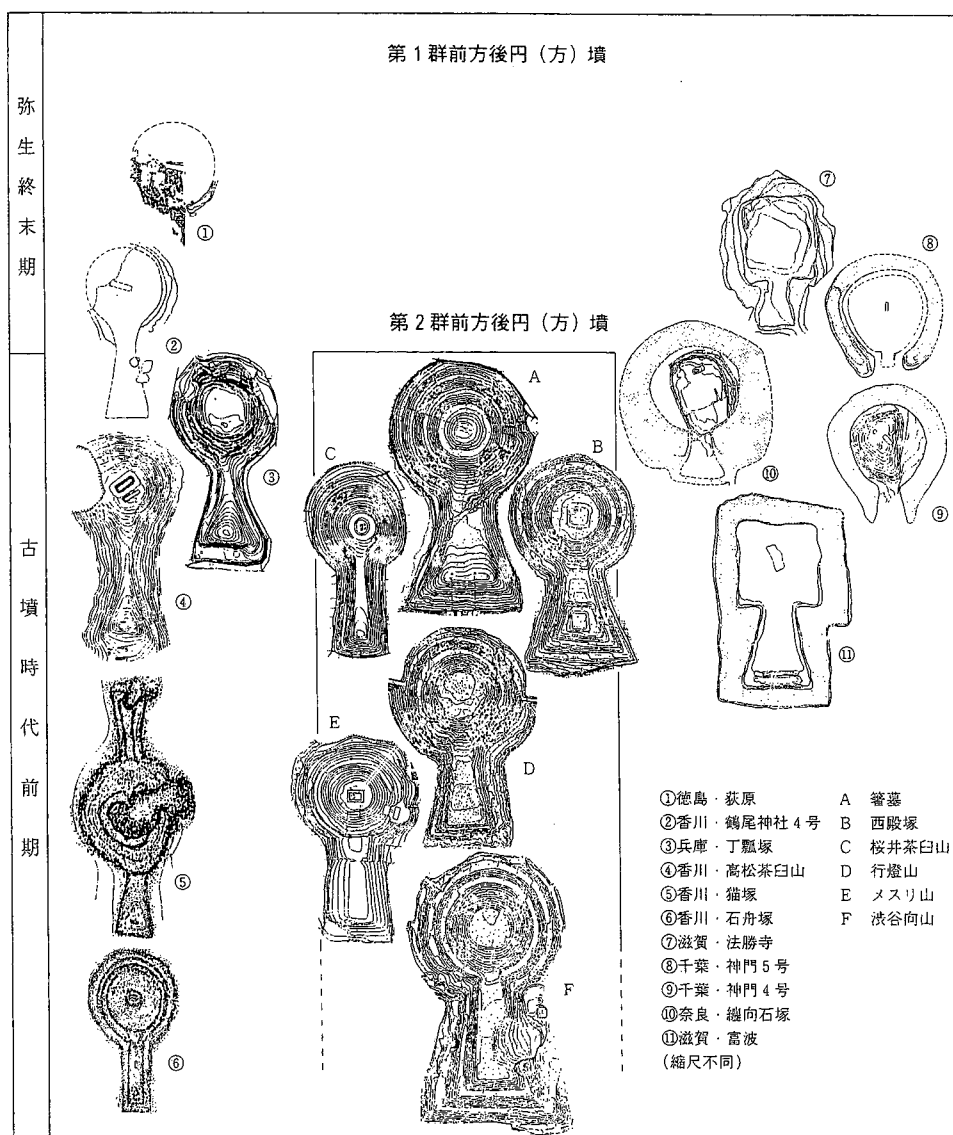


図 10 第 1 群前方後円(方)墳と第 2 群前方後円墳

※北條 (2000) より引用

墳などが埴輪をもたないにもかかわらず、その内容は「第 2 群前方後円(方)墳」として遜色ないものであるし、むしろ鏡を多量副葬するものが目立つ。

土器配置の観点からすれば、北條が「第 2 群前方後円(方)墳」としたものの中核を為すのは「吉備・大和型囲繞配列」を行った墳墓、すなわち埴輪をもつ墳墓ということができるが、その他にも桜井茶臼山古墳・椿井大塚山古墳のように底部穿孔壺による囲繞配列を行っていたり、西求女塚古墳のように山陰系の仮器化された儀器を主体部上配置していたり、雪野山古墳<sup>609)</sup>や黒塚古墳<sup>610)</sup>のように石室内に土器を置いていたり、多様な土器配置の様相がみとれる。

このことはつまり、前期前半段階においては古墳の物理的構造ともいべき墳丘・埋葬施設・副葬品という三要素には、あるていど共通の志向性が働いていたが、古墳の思想面ともいべき土器を使用した葬送祭

祀儀礼については、様々な志向性が働いていたと言う事ができる。このような現象はいったい何を表すのだろうか。およそ次のような二つの考え方があると思う。

ひとつは葬送祭祀の思想面とは関わり無く、舞台装置である墳丘・埋葬施設・副葬品といった物理的構造が用意される可能性である。

もう一つの考え方は、葬送祭祀の思想面に関わらず、そこで行なわれた行為的側面を表す儀礼および儀器的内容はそのつど選択されたという可能性。つまりこの場合、祭祀の思想的側面が儀礼や儀器に表現されていないという考え方である。

上記の二つの考え方は、極端な事例としてあげてみたが、少なくとも本書における分析からは、各土器配置が弥生時代から系統だって古墳時代へと引き継がれている状況が明らかにされているので、後者のような実態は考えにくい。そうかと言って、前者についてもこれまでの古墳の研究成果からはとうてい承服できないものであろう。

振り返ってみると、弥生時代後期までは墳墓祭祀の物理的構造物である墳丘・埋葬施設・副葬品などの舞台装置と、思想面を表現する土器を使用した儀礼はそれぞれがほぼ一対一で対応していたが、庄内式併行期から古墳時代前期古相の時期においては上記に挙げたような、物理的構造と思想面の不一致が起こってくる。本書の分析結果からは、古墳時代前期中相以降は供献儀礼へと移行し、物理的構造と思想面とが再び一致してくるものと思われる。

このような問題は今、ここで結論づけられるものではないが、本書の土器配置の分析によって得られた一つの結論として、箸墓古墳をはじめとする「第2群前方後円（方）墳」の成立当初には、古墳の物理的構造の統一性に比べて、儀礼に代表される思想面は著しい多様性をもっていたということを指摘できるだろう。また、この現象がおそらく「古墳祭祀の政治性」の性質を表現していると考えられる。

602) 寺沢 薫 1988「大和一大和における状況と纏向型前方後円墳の出現と拡散の意義（要旨）」『第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制 第三分冊—発表要旨—』

603) 岡村秀典 1990「卑弥呼の鏡」都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』木耳社

岡村秀典 1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録—』  
出雲考古学会

604) 北條芳隆 2000「前方後円墳における二者」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通著『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革』  
青木書店 95～109頁

605) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

606) 都出比呂志 1989「前方後円墳の誕生」白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館

607) 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号

608) 近藤義郎 1998『前方後円墳の成立』岩波書店 63頁参照

609) 雪野山古墳調査団編 1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会

610) 樫原考古学研究所編 1999『黒塚古墳調査概報』学生社



## あとがき

本書の成果を一言で表せば、それは古墳出現期における葬送祭祀の多様性を描き出したという事であろう。古墳とは、はじめから定まった思想をもって出現したわけではなく、多分に弥生時代の各地域の伝統を濃厚に残しつつ、新しい祭祀を生み出す試行錯誤を経て、しだいに斉一化されていったというのが実情だったと考えられる。

作業をおわって振り返ってみれば、全体としては弥生墓制から古墳が出現してくる過程を、その系譜関係において予想以上に細かく追えたものと思う。このような成果が得られたことは、筆者としては満足すべきことだが、反省点も多い。

土器配置の研究資料は土器の出土状況が命であるため、おのずとその資料数は限られる。盗掘や削平など後世の二次的な破壊を被った墳墓はほとんどの場合、当時の土器配置を遺さない。このため、土器配置の分析に耐えうる資料は実資料数の全体から見れば氷山の一角であろうし、本書で復原し得なかった未知の系統の土器配置がまだまだ存在したと思われるのである。特に、分析する過程で、その存在が予想できても実際の資料でその内容を十分に証明できない土器配置が多く、特に畿内における出現期古墳の土器配置が不明瞭なことが残念であった。このことはちょうどピースが欠けていて埋まらないパズルに似て、大変歯がゆいものであった。

また、序文においても述べたとおり、あくまでも体系化が目的であるために、地域の細かい動向には注意を払うことができなかった。地域に根ざして研究されている方々には、多くの「不満」を感じると思うが、逆に本書における体系化作業によって導き出された、全国的な視野から見た一地域の位置や特徴をくみとっていただければ幸いである。実はそのこと自体が達成されているかどうかとも危惧されるのであるが、それはまったく筆者の力不足のせいで、不明を恥じるばかりである。多くの方々のご批判やご意見をお待ちしたい。

今回、特に手が届かなかった範囲としては、東日本の在地の弥生墓制における土器配置についてであろう。また、中期古墳への動向も今後の大きなテーマである。畿内型古墳における埴輪配置と土器配置の関係もさることながら、地域における小規模墳においてどのような祭祀の系譜が追えるのかも、群衆墳の成立過程を知る上で重要な作業と思われる。今後もしき得る範囲で、研鑽をかさねていきたいと思っている。

## 挿図・表・写真出典

### 図1 土器・埴輪配置位置の分類

古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理—」『日本考古学』第14号 日本考古学協会、より引用 ※古屋(1998)の図を一部改変したもの

### 図2 「楯築型土器配置」に使用される儀器の分類

間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館、より各図を引用、筆者レイアウト

### 図3 「墓壙内破碎土器配置」の1例

大宮町教育委員会 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町文化財調査報告書第14集、より引用

### 図4 「周堤・周溝を有する建物跡」と方形周溝墓の旧地表面と削平模式図

及川良彦 2004「関東地方の低地遺跡の再検討(5) —墓と住居の誤謬—」『シンポジウム 宇津木向原遺跡発掘40周年記念 方形周溝墓研究の今 資料集Ⅱ』方形周溝墓シンポジウム実行委員会、より引用

### 図5 「畿内系加飾壺」の形式分類

(財)大阪文化財センター 1985『美園 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』博多遺跡群62次調査：福岡市教育委員会 1995『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集  
原嘉藤・小松虔 1972「長野県松本市中山第36号古墳(仁能田山古墳)調査報告—上方作銘三角縁獣帯鏡の発見」『信濃』第24巻第4号

東奈良遺跡調査会 1979『東奈良 発掘調査概報Ⅰ』

兵庫県教育委員会 1978『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告書 第12冊

樞原考古学研究所編 1976『纏向』桜井市教育委員会

伊礼正雄・熊野正也編 1975『臼井南』佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会

園部町教育委員会 1991「黒田古墳」『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』

四郷遺跡：赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7

赤塚次郎 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集

直井雅尚ほか 1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会

布留遺跡山口池地点：置田雅昭 1974「大和における古式土師器の実態—天理市布留遺跡出土資料—」『古代文化』181

上記文献より各図を引用、筆者レイアウト

### 図6 弥生時代後期～古墳時代前期の土器配置の系譜 筆者作成

### 図7 囲繞配列の系譜 筆者作成

### 図8 古墳成立にかかわる土器配置の要素 筆者作成

### 図9 黒宮大塚墳丘墓出土供膳具の穿孔方法

間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館、より各図を引用、筆者レイアウト

図 10 第 1 群前方後円（方）墳と第 2 群前方後円墳

北條芳隆 2000「前方後円墳における二者」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通著『古墳時代像を見なおす  
ー成立過程と社会変革』青木書店、より引用

表 1 土器編年併行関係表 筆者作成

表 2 「畿内系加飾壺」出土墳墓要素表 筆者作成

表 3～5 東日本の墳墓における土器配置一覧（1～3）

古屋紀之 2005「土器・埴輪配置から見た東日本の古墳の出現」『東日本における古墳の出現』東北・関東前方  
後円墳研究会編 六一書房、より引用

表 6 関東・東北の円筒埴輪を出土する前期古墳

古屋紀之 2004「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質ー関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心にー」『土曜  
考古』第 28 号 土曜考古学研究会、より引用

写真 1～7 黒宮大塚出土土器穿孔の拡大写真 倉敷考古館の許可を得て筆者撮影

# 図 版

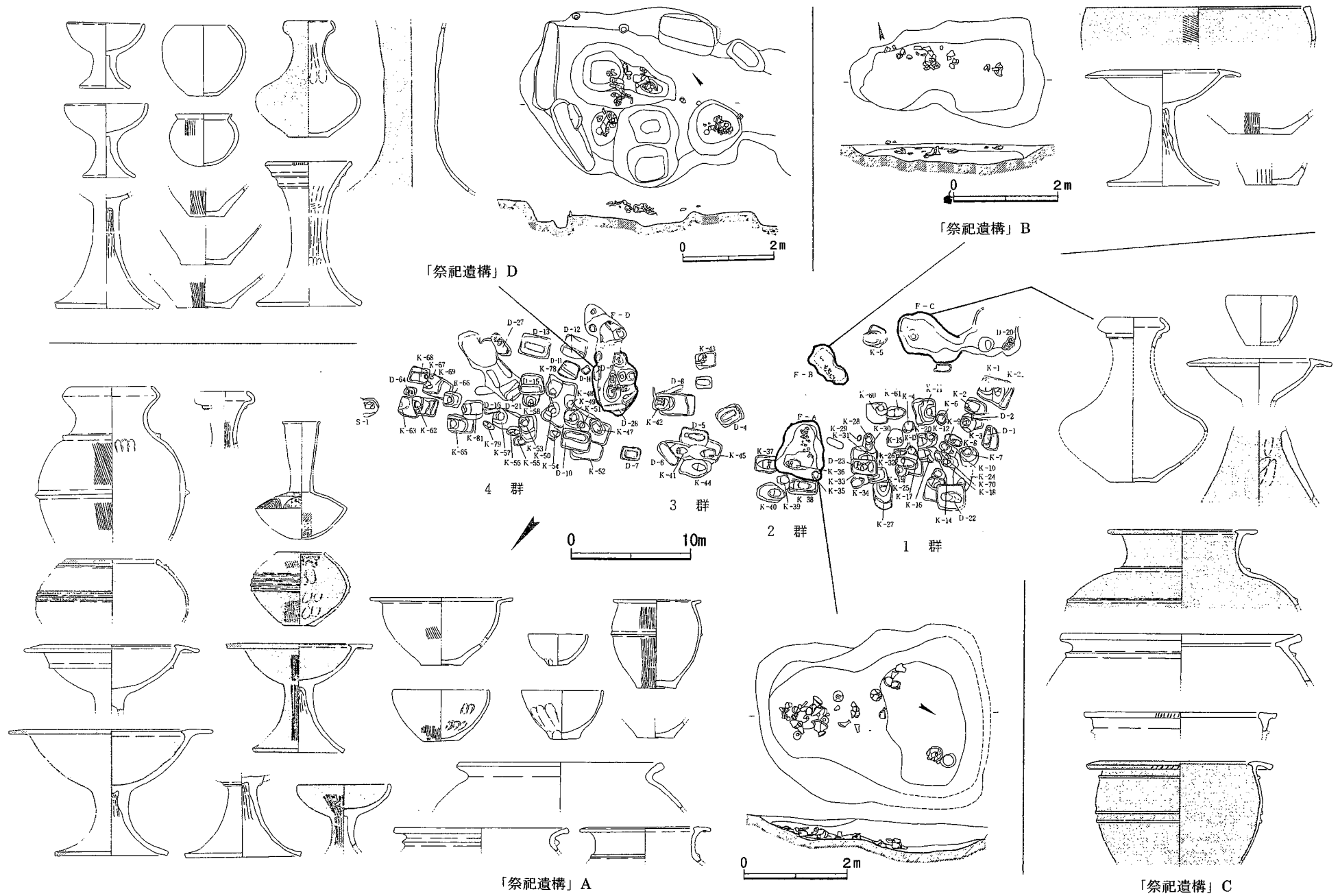
## 図版凡例

- ・図版編は個々の遺跡の土器配置の基本データを提示する意味で作成した。
- ・各図版は基本的に各遺跡の報告書および参考文献より、図を引用し筆者がレイアウトを変更して組み直したものである。各図の引用文献は本文編第3～6章の註文献を参照してもらいたい。なお、レイアウトを原図のまま引用したものについては図版下に引用文献を表示した。
- ・掲載した遺物の縮尺は「▲」印を付したものが1/5、「●」が1/15、「■」が1/20、無印が1/10である。これ以外の縮尺の場合はそのつど表示した。
- ・掲載した遺構の縮尺はスケールにて表示した。
- ・図版番号は本文編の記載順を考慮して付したので、おおよそ地域・時期を反映しているが、必ずしも厳密な順ではない。
- ・図版番号は本文編の文中に「図版●」と示した番号に対応している。

# 図版一覧

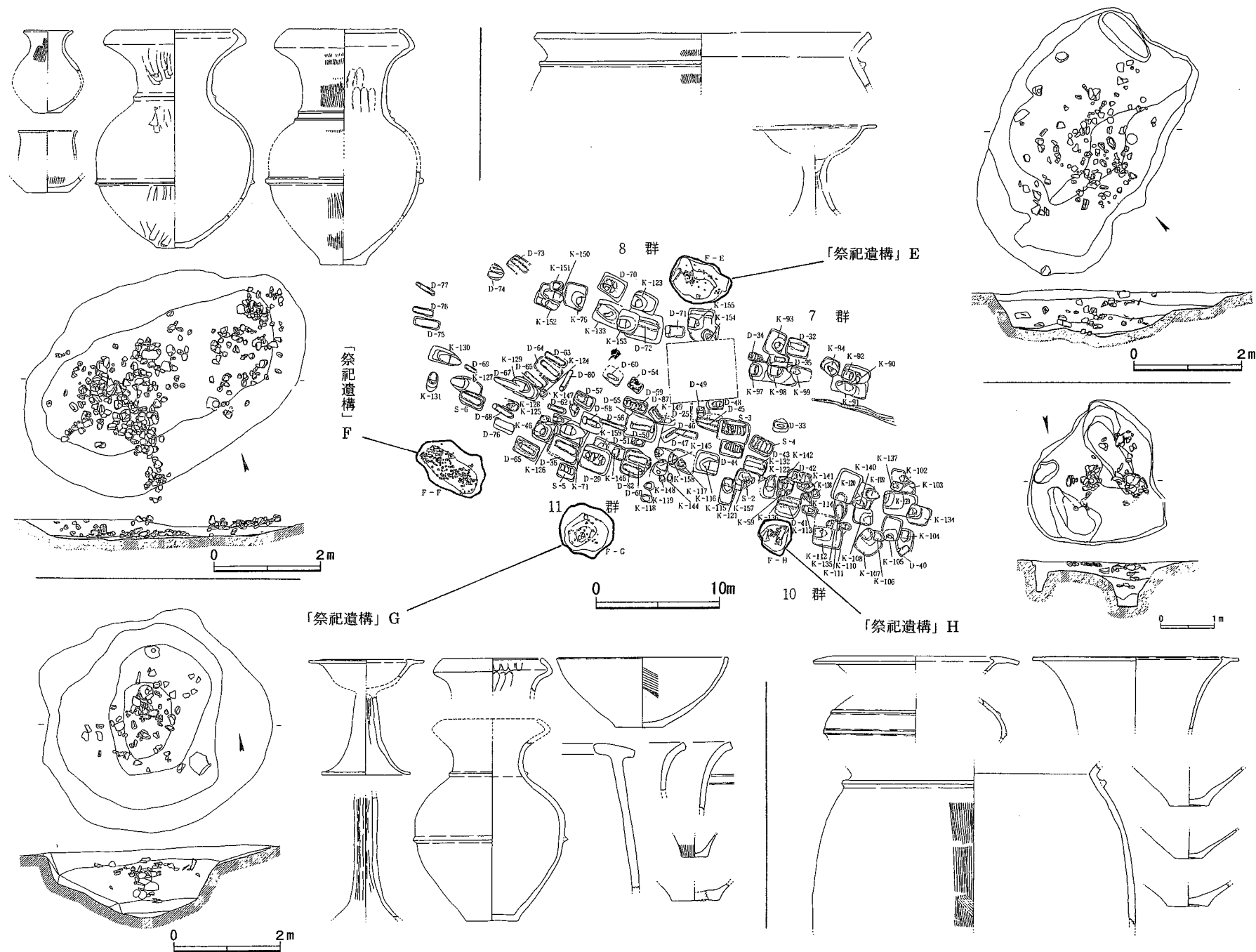
図版1	佐賀県二塚山遺跡(1)「祭祀遺構」A～D	図版44	広島県矢谷MD1号墓
図版2	佐賀県二塚山遺跡(2)「祭祀遺構」E～G	図版45	京都府三坂神社墳墓群
図版3	佐賀県四本黒木遺跡「祭祀遺構」B	図版46	兵庫県上鉢山・東山墳墓群東尾根地区
図版4	佐賀県フケ遺跡2号「祭祀遺構」	図版47	京都府大山墳墓群(1)墳頂埋葬
図版5	福岡県三雲遺跡寺口地区Ⅱ-17調査区石棺群	図版48	京都府大山墳墓群(2)周辺埋葬
図版6	福岡県宮の前C地点墳丘墓	図版49	京都府大風呂南墳墓群
図版7	大阪府亀井遺跡ST1701「方形周溝墓」	図版50	京都府赤坂今井墳丘墓
図版8	大阪府瓜生堂遺跡2・9号「方形周溝墓」	図版51	兵庫県川島遺跡南五反田地区土坑5
図版9	大阪府加美遺跡KM95-14次調査地1・2号「方形周溝墓」	図版52	兵庫県有年原・田中1号墓
図版10	大阪府山賀遺跡1号「方形周溝墓」	図版53	兵庫県半田山1号墓
図版11	徳島県桜ノ岡遺跡「集石土壌」	図版54	福井県王山墳墓群
図版12	香川県稲木遺跡C区8号「集石墓」	図版55	福井県小羽山30号墓
図版13	徳島県萩原1号墓	図版56	福井県片山鳥越5号墓
図版14	香川県奥10号墓	図版57	福井県原目山墳墓群
図版15	岡山県宮山方形台状墓	図版58	福井県袖高林1号墓
図版16	岡山県四辻土壙墓群	図版59	三重県高松墳丘墓
図版17	岡山県みそのお遺跡1区	図版60	岐阜県加佐美山墳丘墓
図版18	岡山県みそのお遺跡2区	図版61	長野県根塚墳丘墓
図版19	岡山県みそのお20号墓第1主体	図版62	新潟県屋鋪塚方形台状墓
図版20	岡山県みそのお42号墓第1主体	図版63	埼玉県井沼方9号方形周溝墓
図版21	岡山県黒宮大塚墳丘墓	図版64	神奈川県王子ノ台5号方形周溝墓
図版22	岡山県楯築墳丘墓	図版65	岡山県宮山墳丘墓
図版23	岡山県立坂墳丘墓	図版66	岡山県矢藤治山墳丘墓
図版24	岡山県芋岡山遺跡	図版67	鳥取県徳楽墳丘墓
図版25	岡山県伊予部山墳墓群	図版68	兵庫県丁瓢塚古墳
図版26	岡山県女男岩遺跡(1)遺構Cとその周辺	図版69	兵庫県伊和中山4号墳 表面採集資料
図版27	岡山県女男岩遺跡(2)全体	図版70	兵庫県処女塚古墳
図版28	岡山県便木山方形台状墓	図版71	島根県神原神社古墳
図版29	岡山県中山遺跡A調査区	図版72	島根県塩津山1号墓
図版30	岡山県西江遺跡	図版73	島根県大成古墳
図版31	広島県田尻山1号墓	図版74	島根県造山1号墳
図版32	島根県順庵原1号墓	図版75	島根県造山3号墳
図版33	島根県波来浜遺跡B調査区	図版76	京都府温江丸山古墳・谷垣遺跡
図版34	広島県佐田谷1号墓	図版77	大分県下原古墳
図版35	鳥取県新井三嶋谷1号墳丘墓	図版78	佐賀県西一本杉遺跡ST008
図版36	島根県九重土壙墓	図版79	広島県中出勝負峠8号古墳
図版37	島根県西谷3号墓	図版80	愛媛県雉之尾1号墳
図版38	島根県的場土壙墓	図版81	兵庫県内場山墳丘墓
図版39	島根県鍵尾A区土壙墓群	図版82	京都府寺ノ段墳墓群
図版40	島根県安養寺1号墓	図版83	京都府砂原山墳丘墓
図版41	島根県大木権現山1号墓	図版84	京都府黒田古墳
図版42	鳥取県日原6号墓	図版85	京都府芝ヶ原古墳
図版43	鳥取県桂見1・2号墓	図版86	京都府広峯古墳群

- 図版87 奈良県キトラ墳墓群  
図版88 奈良県大王山9号地点墳丘墓  
図版89 奈良県見田・大沢古墳群  
図版90 奈良県野山墳墓群丸尾支群  
図版91 奈良県胎谷墳墓群  
図版92 島根県上野1号墳  
図版93 島根県松本1号墳  
図版94 佐賀県双水柴山2号墳  
図版95 兵庫県西求女塚古墳  
図版96 奈良県東殿塚古墳  
図版97 千葉県高部古墳群  
図版98 長野県弘法山古墳  
図版99 千葉県神門5号墳  
図版100 千葉県神門3号墳  
図版101 千葉県神門4号墳  
図版102 滋賀県小松古墳土坑A出土土器  
図版103 愛知県西上免古墳  
図版104 長野県北平1号墓  
図版105 神奈川県秋葉山3号墳  
図版106 栃木県駒形大塚古墳  
図版107 千葉県能満寺古墳  
図版108 千葉県北ノ作1号墳  
図版109 茨城県原1号墳  
図版110 長野県瀧の峯2号墳  
図版111 埼玉県諏訪山29号墳  
図版112 栃木県茂原愛宕塚古墳  
図版113 兵庫県象鼻山1号墳  
図版114 石川県小菅波4号墳  
図版115 石川県国分尼塚1号墳  
図版116 石川県宿東山1号墳  
図版117 富山県谷内16号墳  
図版118 石川県国分岩屋山4号墳  
図版119 新潟県山谷古墳  
図版120 千葉県釈迦山古墳  
図版121 茨城県勅使塚古墳  
図版122 岡山県都月坂1号墳  
図版123 岡山県七つ 1号墳  
図版124 兵庫県権現山51号墳  
図版125 奈良県箸墓古墳  
図版126 奈良県弁天塚古墳  
図版127 奈良県中山大塚古墳  
図版128 京都府元稲荷古墳  
図版129 岡山県浦間茶臼山古墳・網浜茶臼山古墳  
図版130 奈良県西殿塚古墳  
図版131 奈良県ホケノ山古墳  
図版132 大阪府加美14号墓  
図版133 奈良県桜井茶臼山古墳  
図版134 京都府椿井大塚山古墳  
図版135 大阪府安威1号墳  
図版136 岡山県川東車塚古墳  
図版137 香川県鶴尾神社4号墳  
図版138 徳島県宮谷古墳  
図版139 徳島県前山1号墳  
図版140 香川県野田院古墳  
図版141 福岡県津古生掛古墳  
図版142 福岡県能満寺2号墳  
図版143 福岡県三国の鼻1号墳  
図版144 埼玉県中耕21号方形周溝墓  
図版145 埼玉県中耕13号方形周溝墓  
図版146 埼玉県広面9号方形周溝墓  
図版147 群馬県荒砥北原1号周溝墓  
図版148 群馬県堤東2号周溝墓  
図版149 東京都赤羽台3号周溝墓  
図版150 栃木県松山古墳  
図版151 福島県稲荷塚6号周溝墓  
図版152 群馬県堀ノ内CK-2号墓  
図版153 福島県男壇1号周溝墓  
図版154 宮城県今熊野1号周溝墓  
図版155 宮城県安久東周溝墓  
図版156 群馬県前橋天神山古墳  
図版157 福島県森北1号墳  
図版158 群馬県元島名将軍塚古墳  
図版159 三重県深長古墳  
図版160 愛知県青塚古墳  
図版161 岐阜県昼飯大塚古墳  
図版162 奈良県メスリ山古墳  
図版163 京都府寺戸大塚古墳  
図版164 京都府平尾城山古墳  
図版165 京都府神明山古墳  
図版166 京都府蛭子山1号墳(1)墳丘と埴輪  
図版167 京都府蛭子山1号墳(2)後円部平坦面  
図版168 岡山県金蔵山古墳  
図版169 三重県石山古墳  
図版170 奈良県佐紀陵山古墳

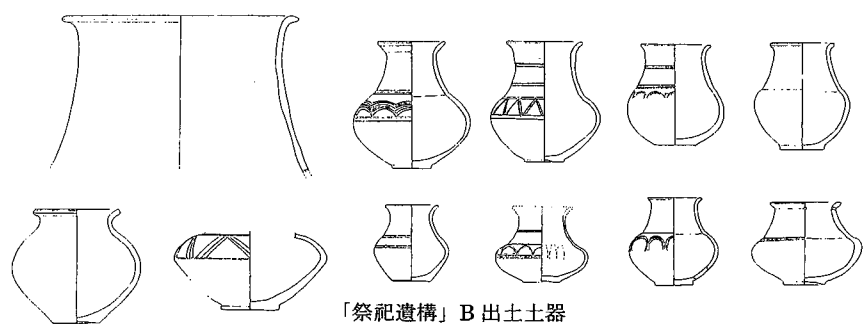
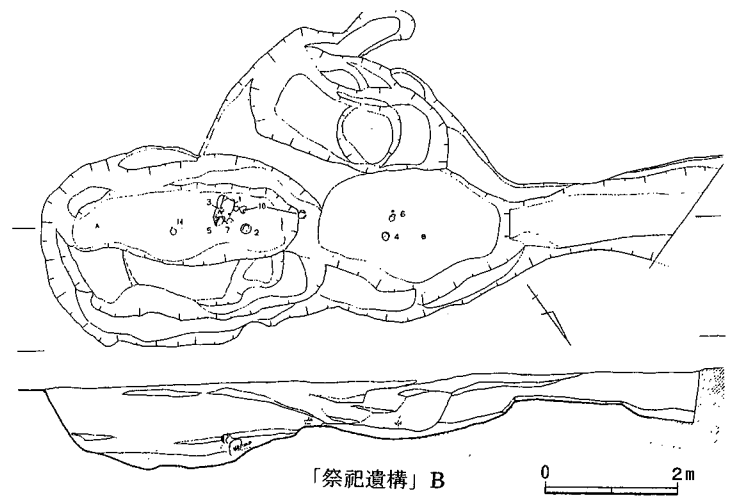
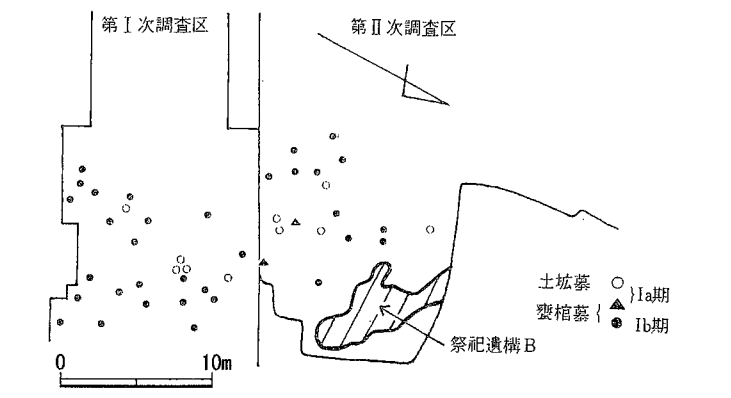


図版1 佐賀県二塚山遺跡 (1) 「祭祀遺構」A~D

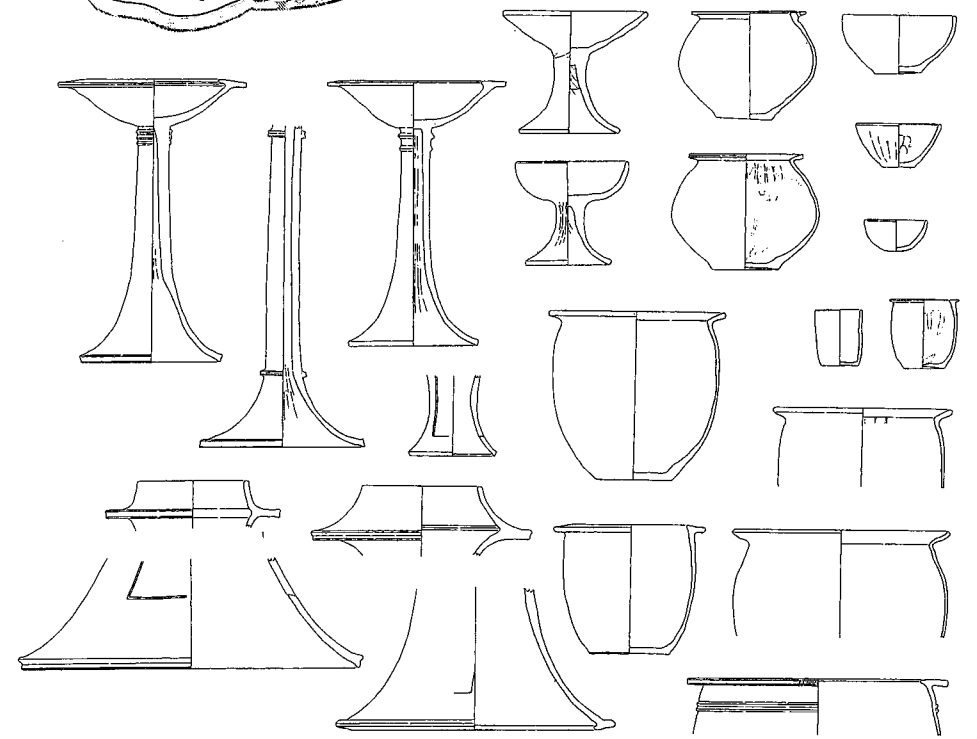
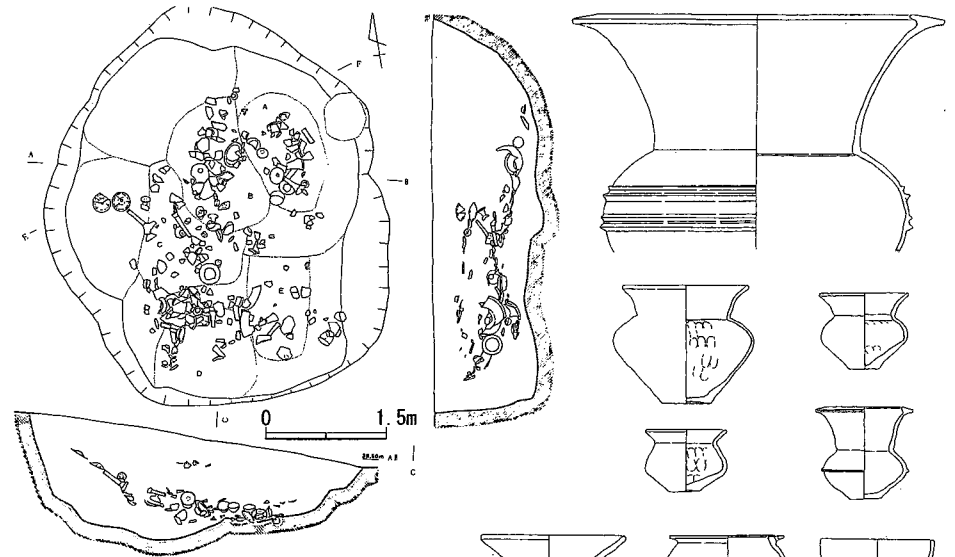




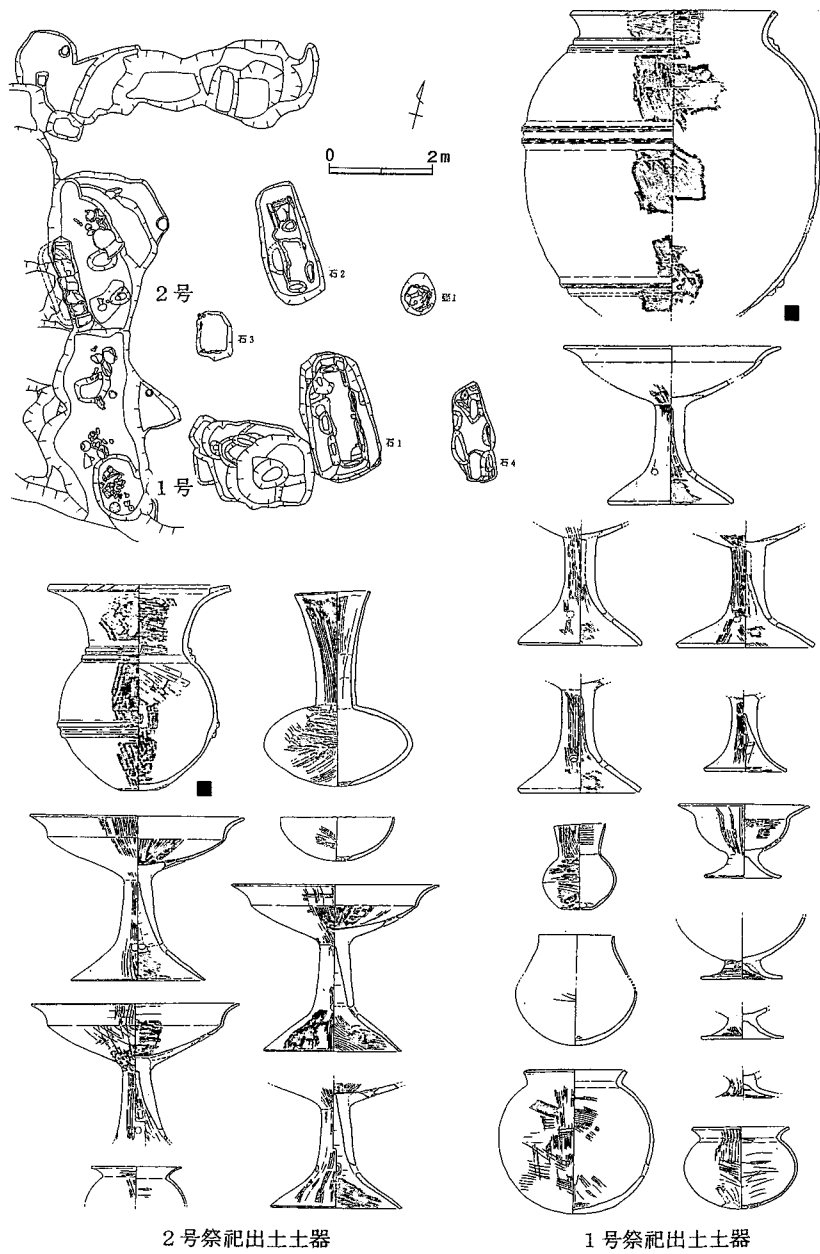
図版2 佐賀県二塚山遺跡 (2) 「祭祀遺構」E~G



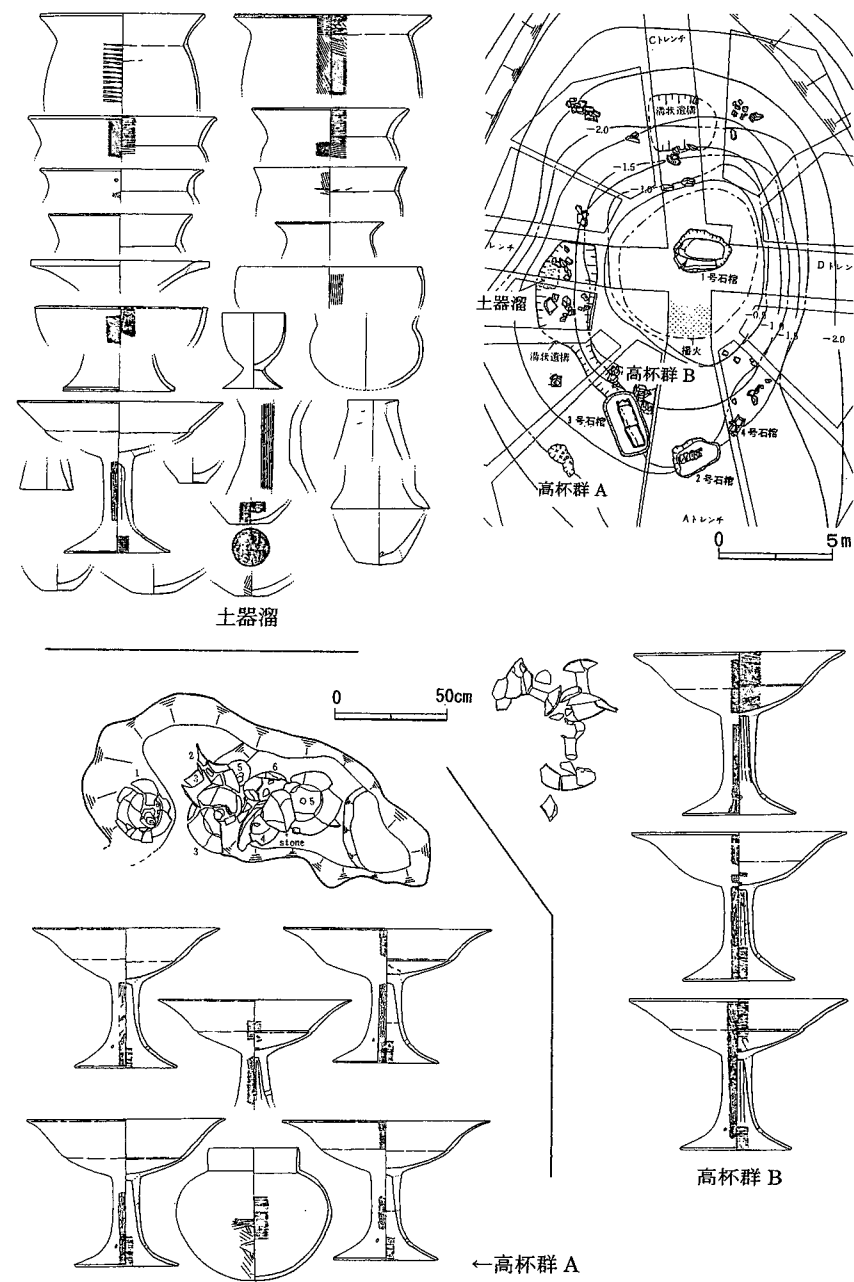
図版3 佐賀県四本黒木遺跡「祭祀遺構」B



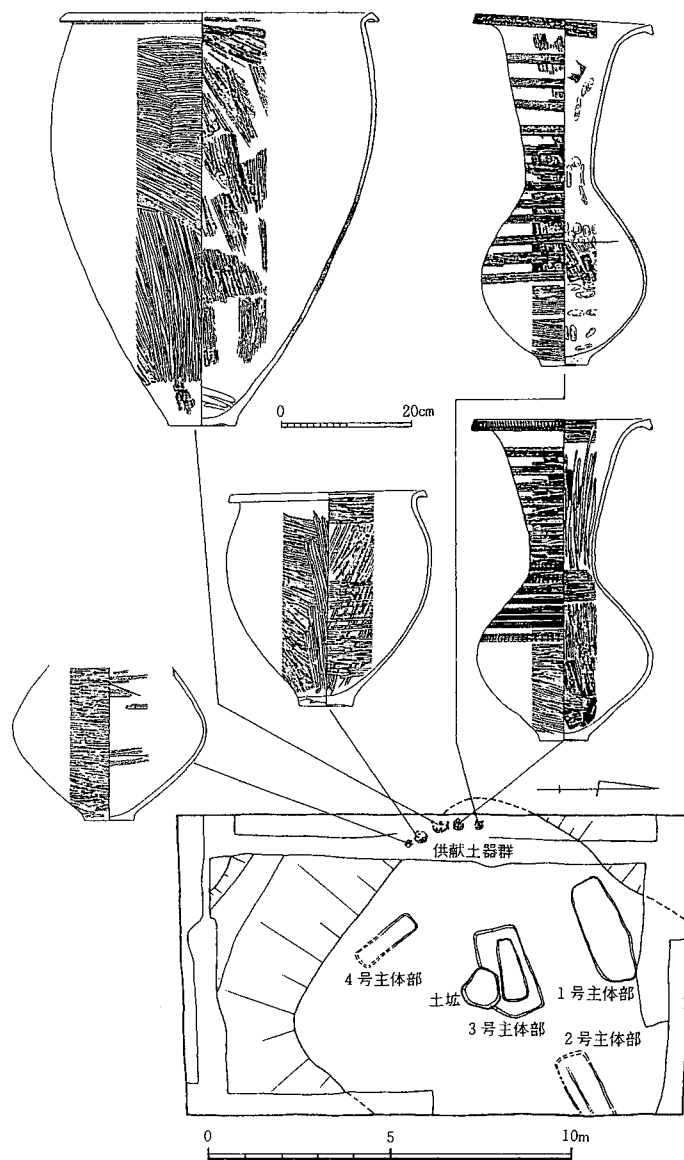
図版4 佐賀県フケ遺跡2号「祭祀遺構」



図版5 福岡県三雲遺跡寺口地区Ⅱ-17調査区石棺群

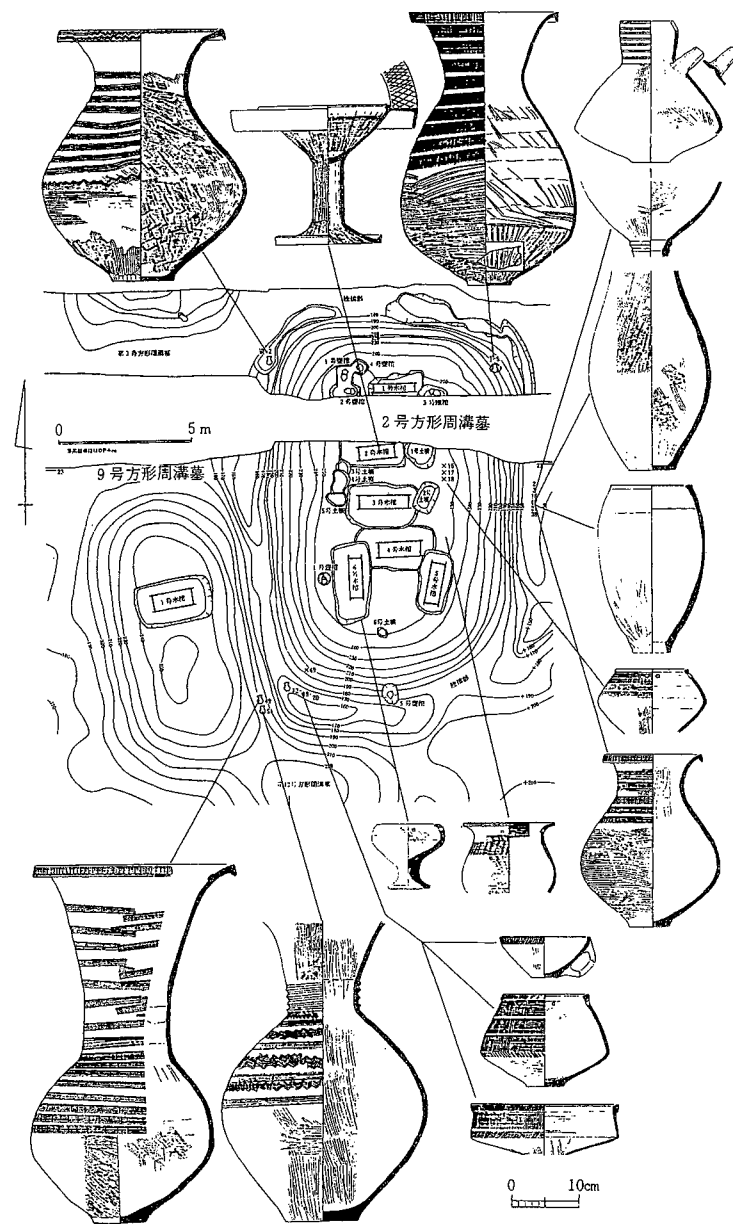


図版6 福岡県宮の前C地点墳丘墓



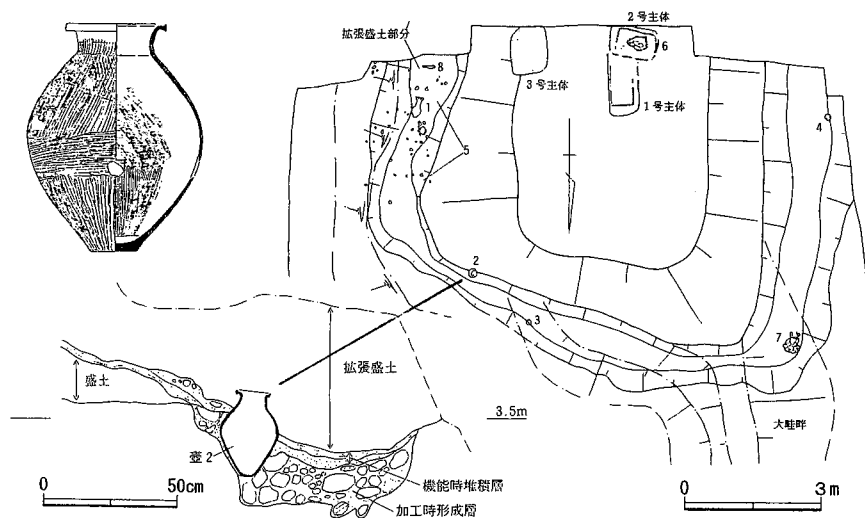
※田中清美 (1988) より転載

図版 7 大阪府亀井遺跡ST1701「方形周溝墓」

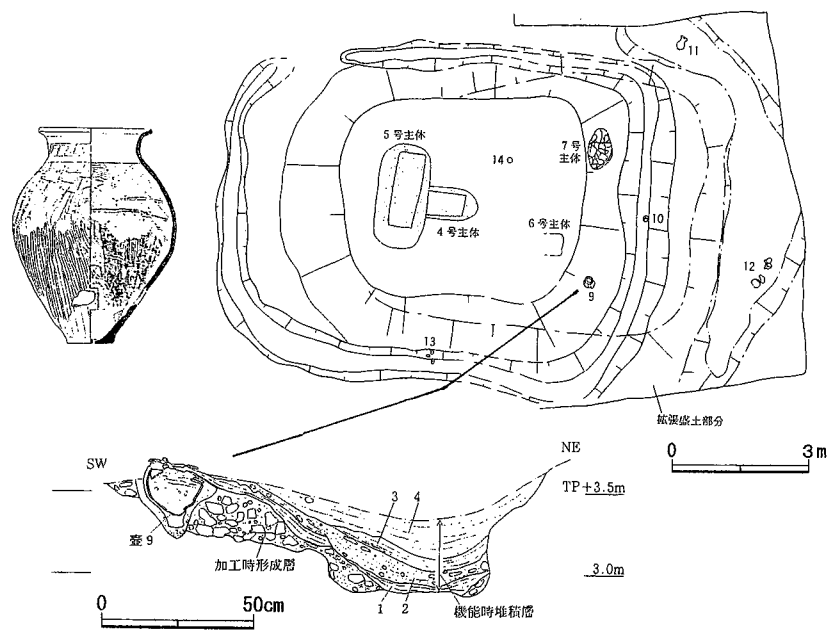


※田中清美 (1988) より転載

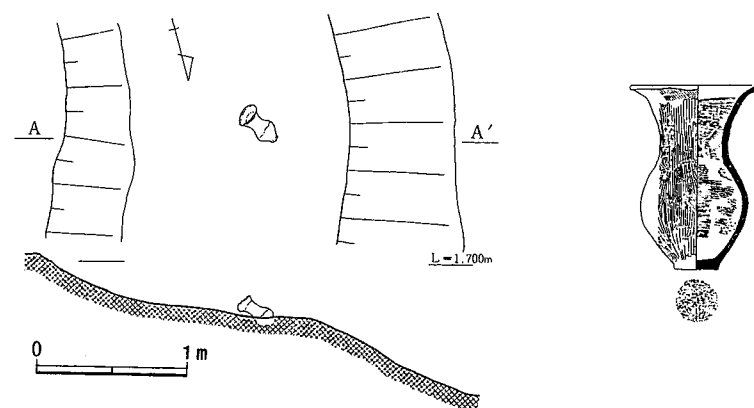
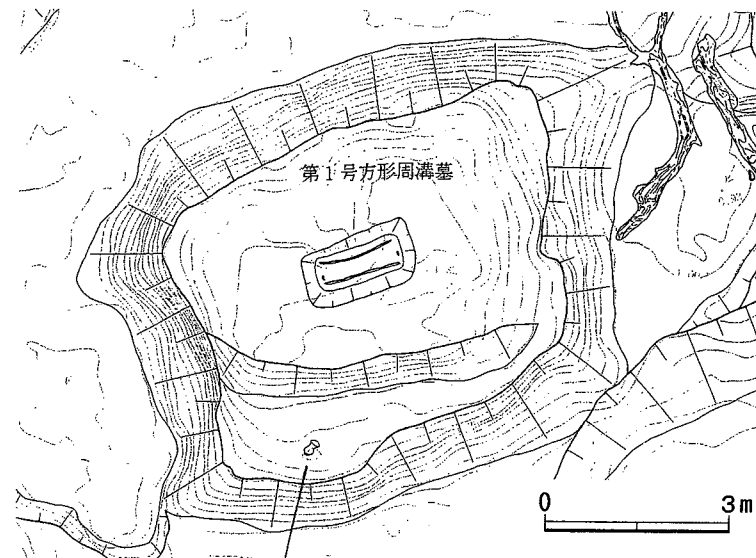
図版 8 大阪府瓜生堂遺跡 2・9号「方形周溝墓」



1号墓コーナー部壺出土状況

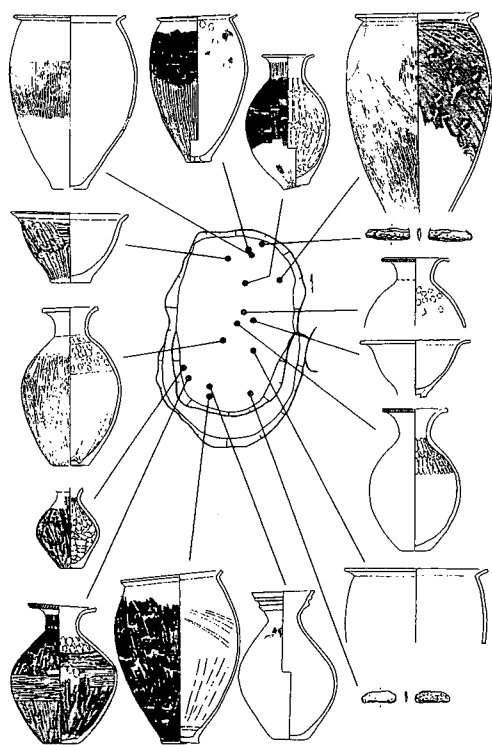
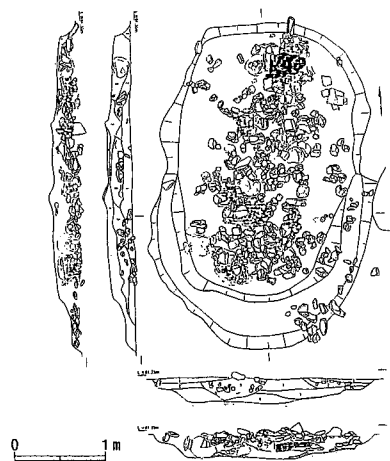


2号墓コーナー部壺出土状況

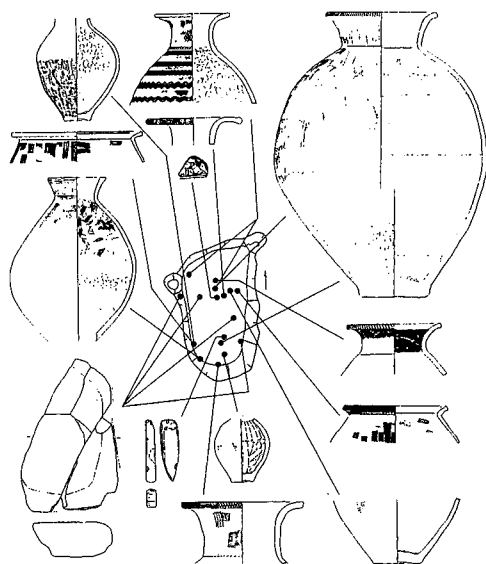
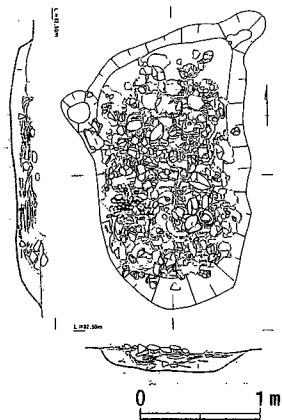


図版10 大阪府山賀遺跡1号「方形周溝墓」

図版9 大阪府加美遺跡KM95-14次調査地1・2号「方形周溝墓」

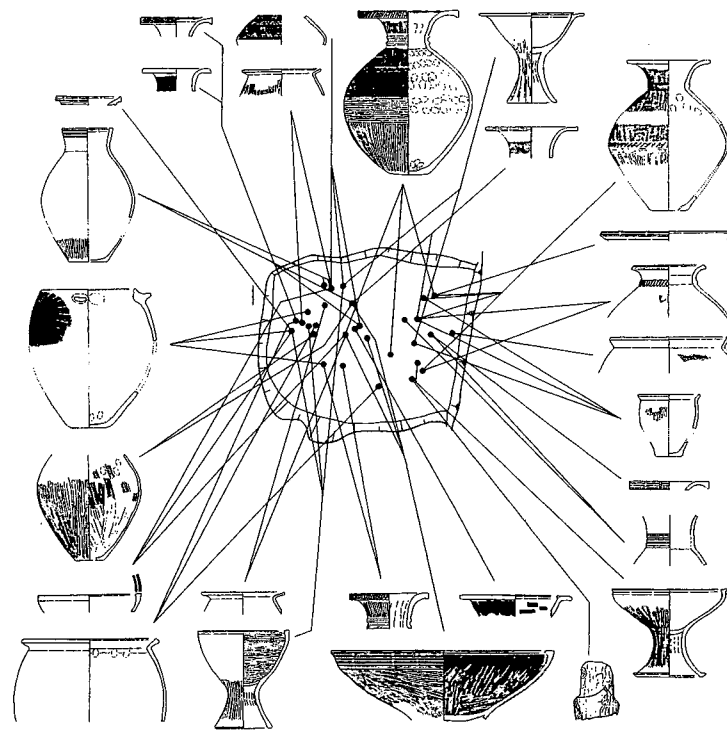
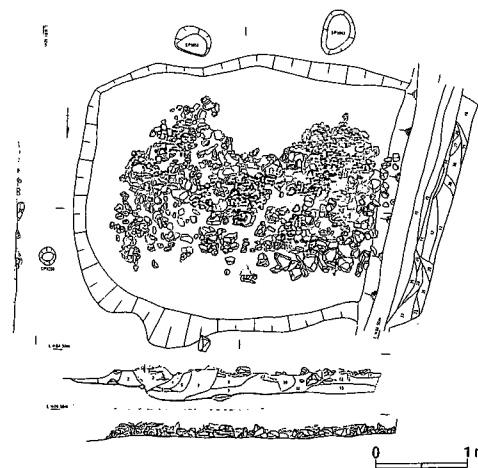


SK1008

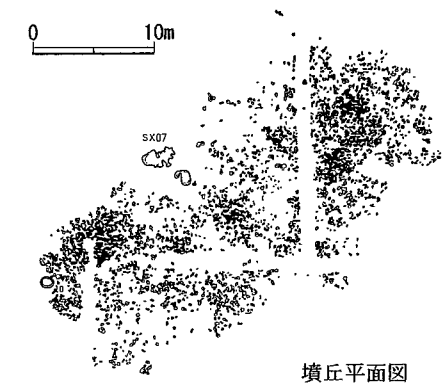


SK1039

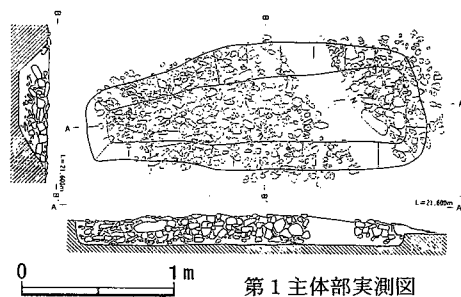
※土器出土状況図は任意縮尺



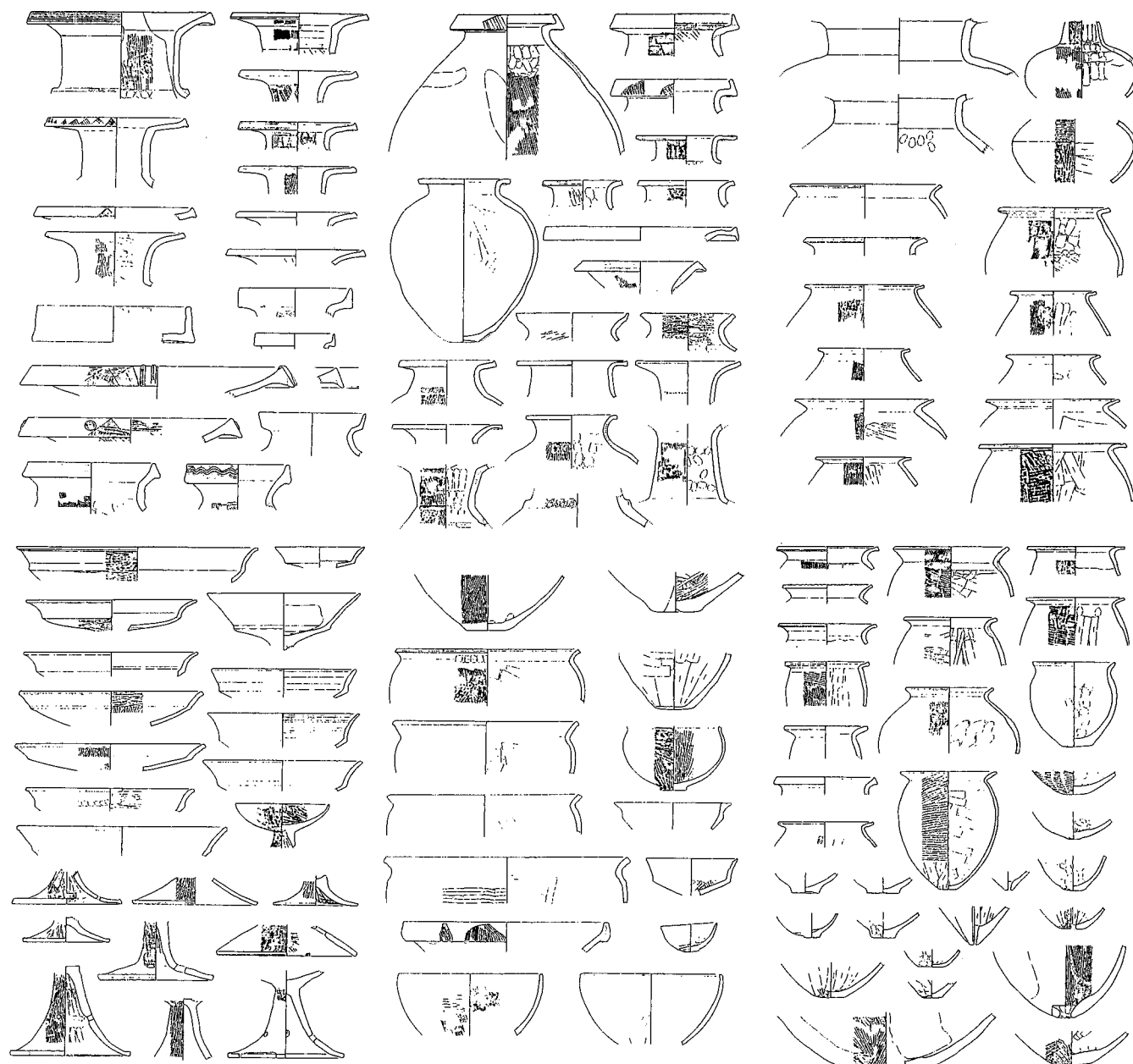
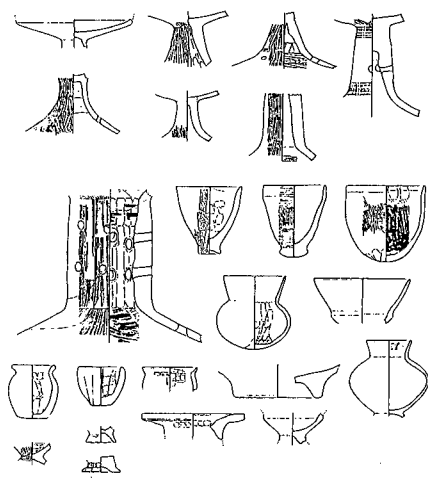
SK1016



墳丘平面図

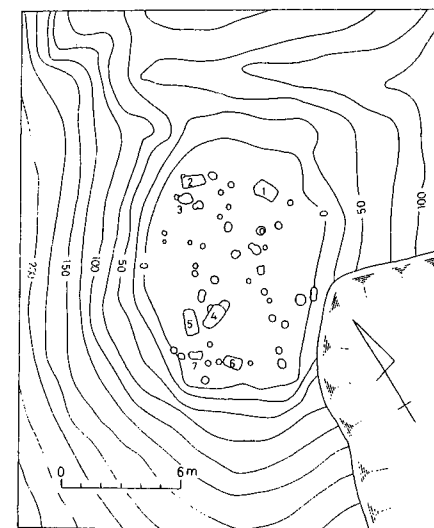
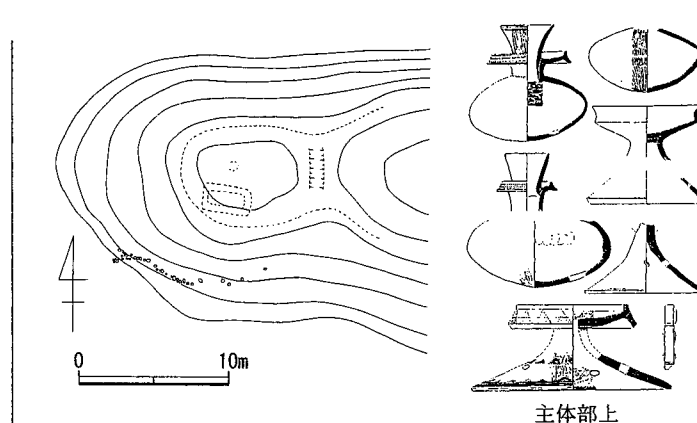
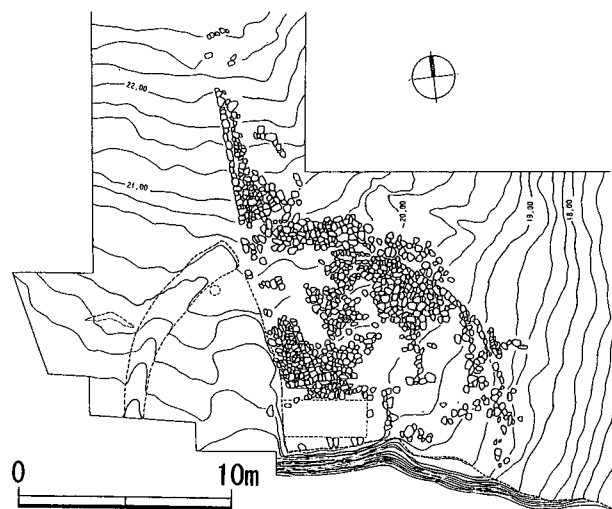


第1主体部実測図

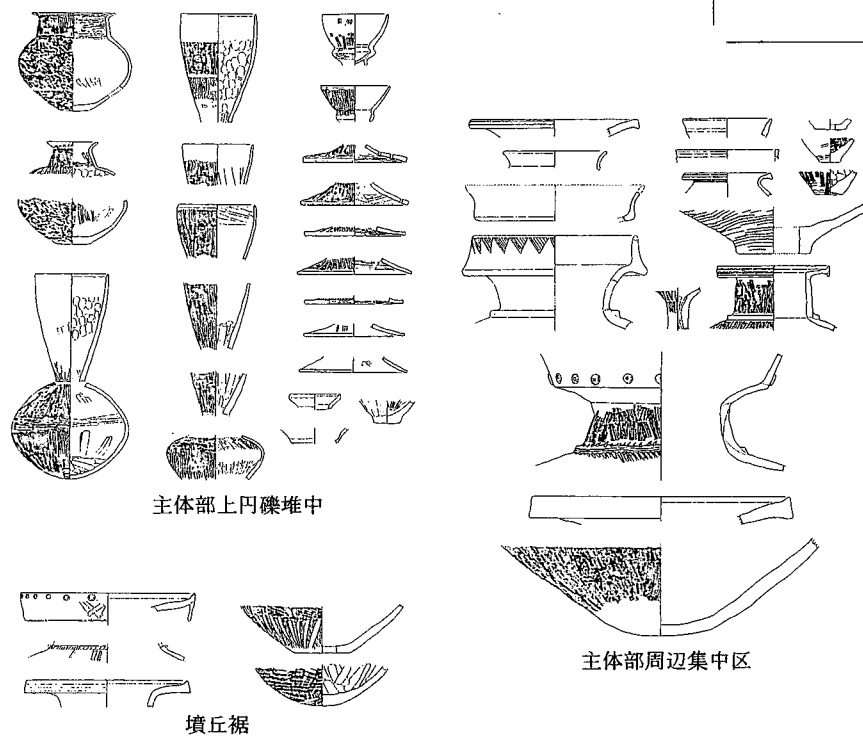


墳丘内混入土器

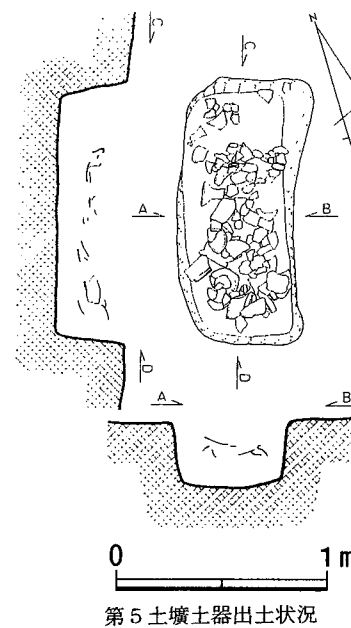
図版 12 香川県稲木遺跡C区8号「集石墓」



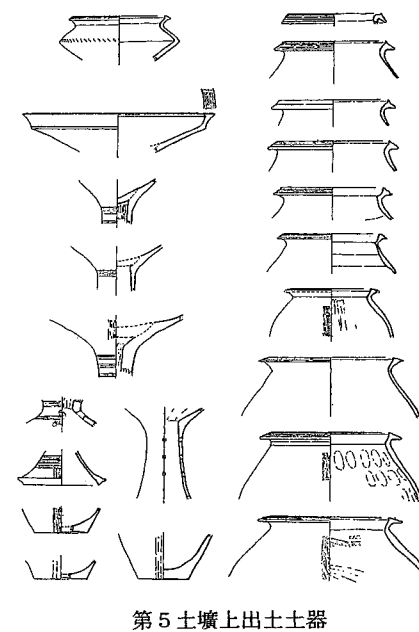
図版 1 4 香川県奥10号墓



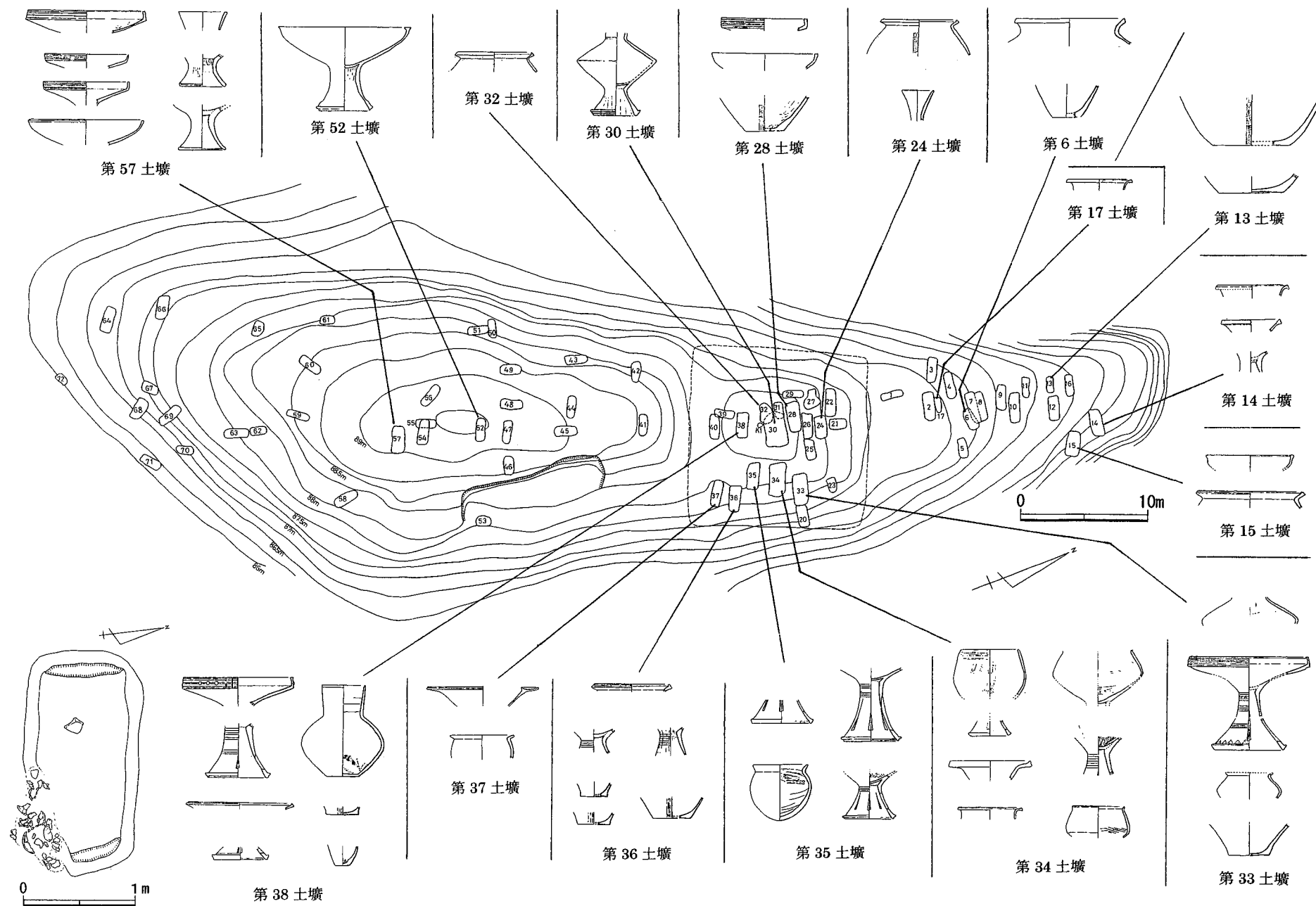
図版 1 3 徳島県萩原 1 号墓



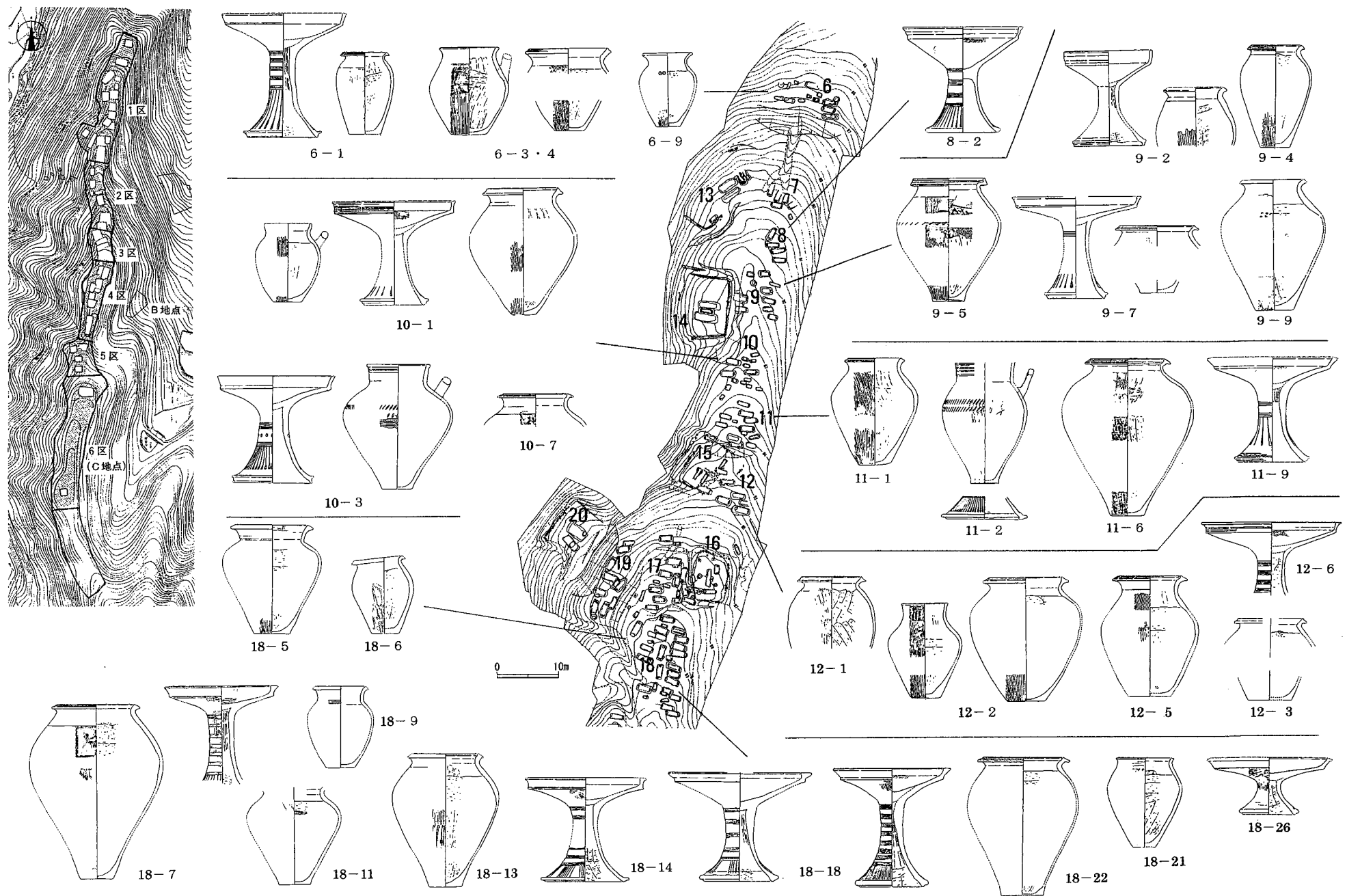
図版 1 5 岡山県宮山方形台状墓





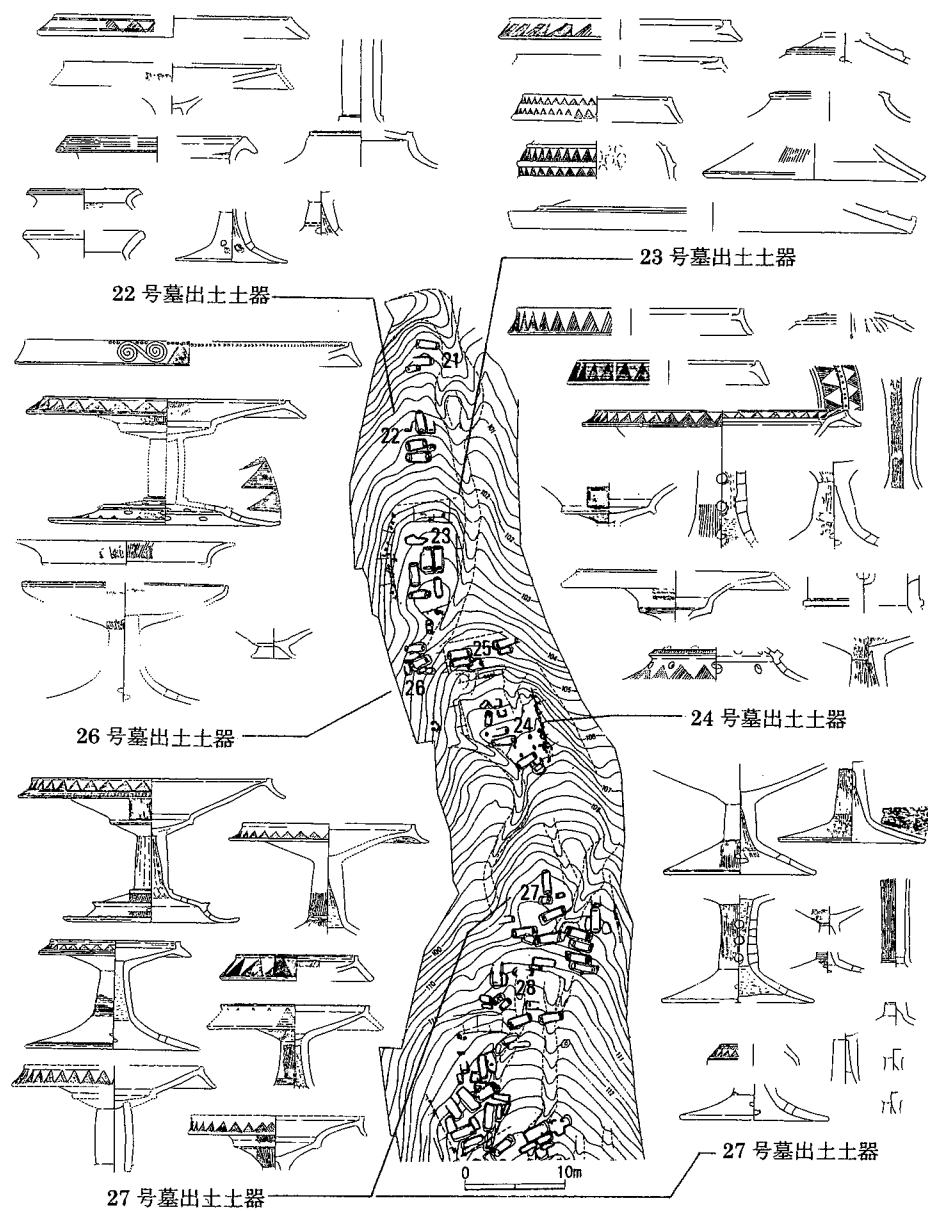


図版16 岡山県四辻土壌墓群

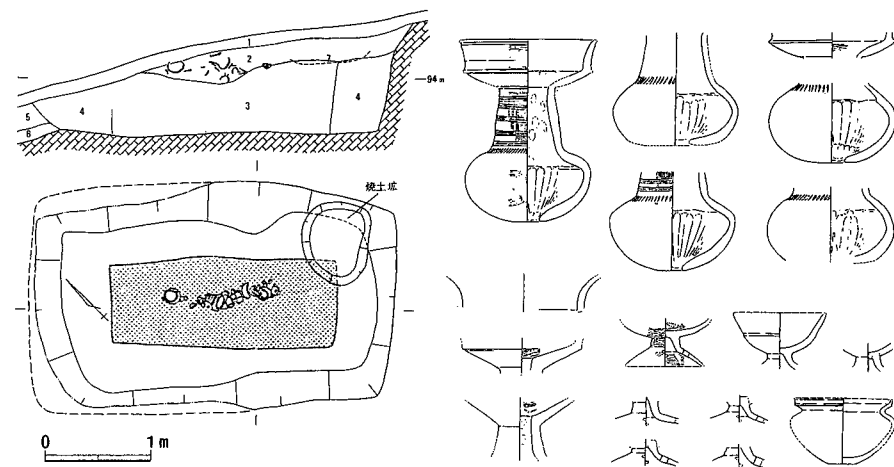


※ 6-1 = 6号墓 1号主体出土

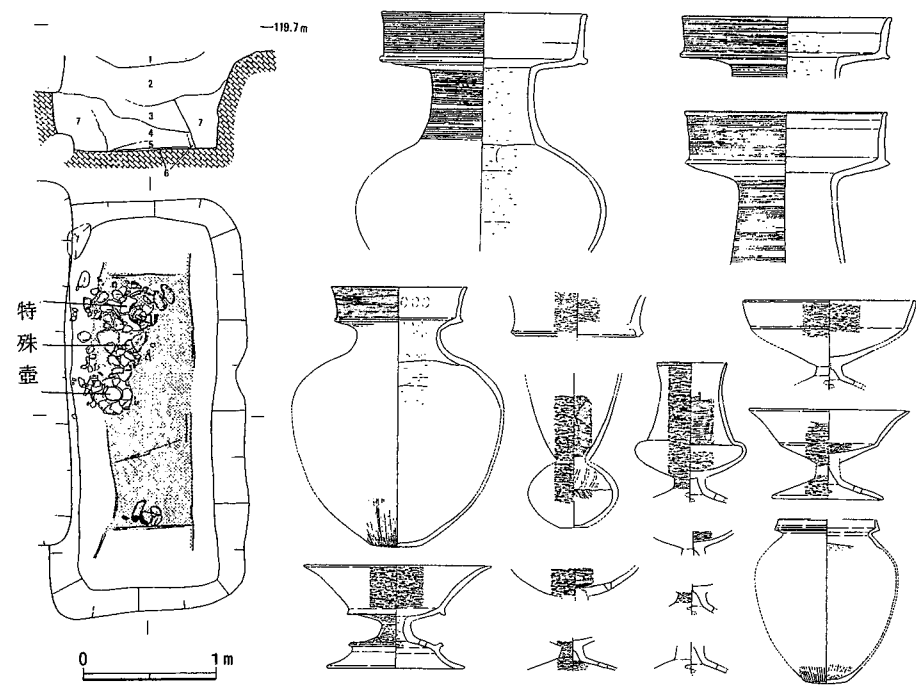
図版 17 岡山県みそのお遺跡 1 区



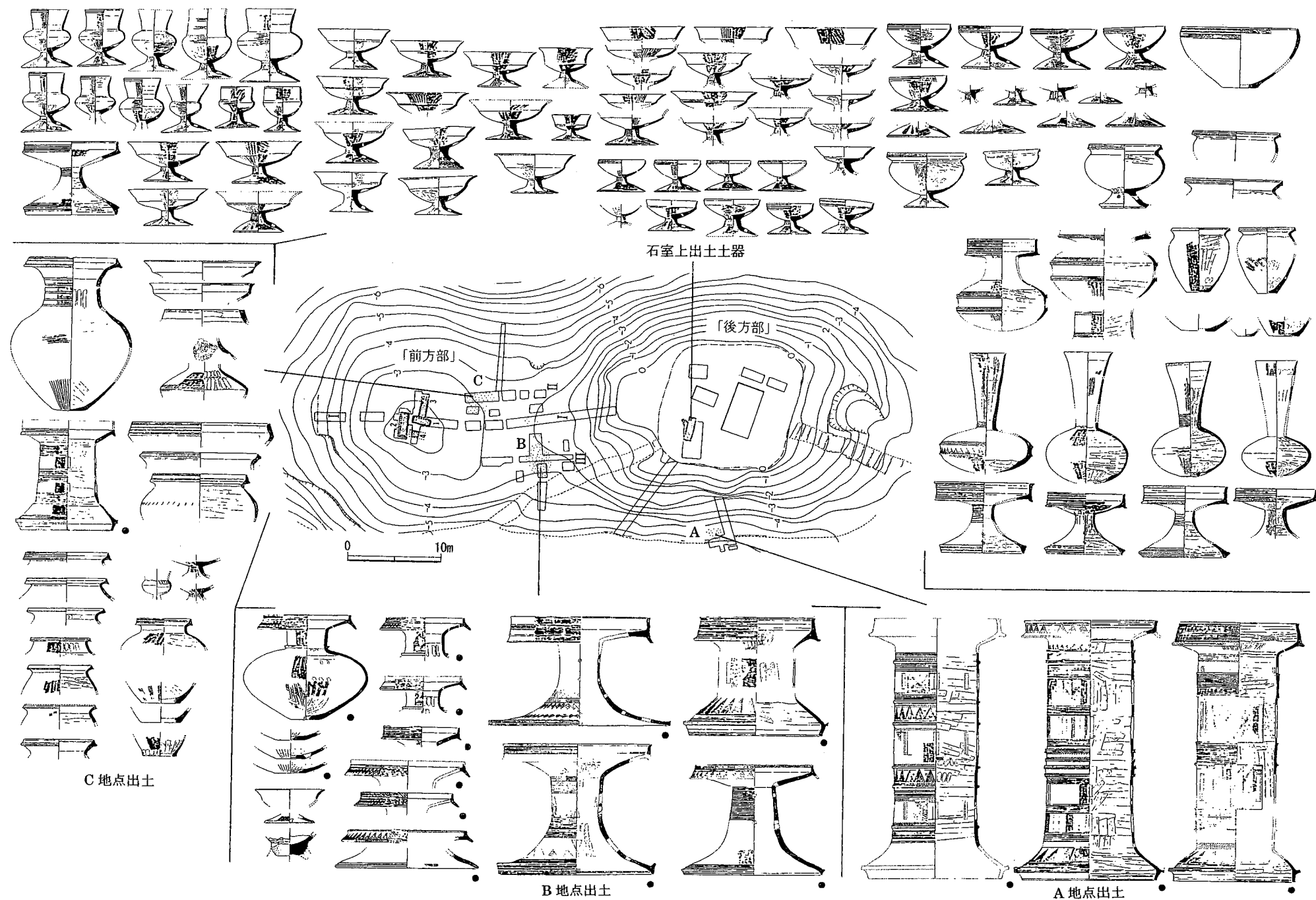
図版 18 岡山県みそのお遺跡 2 区



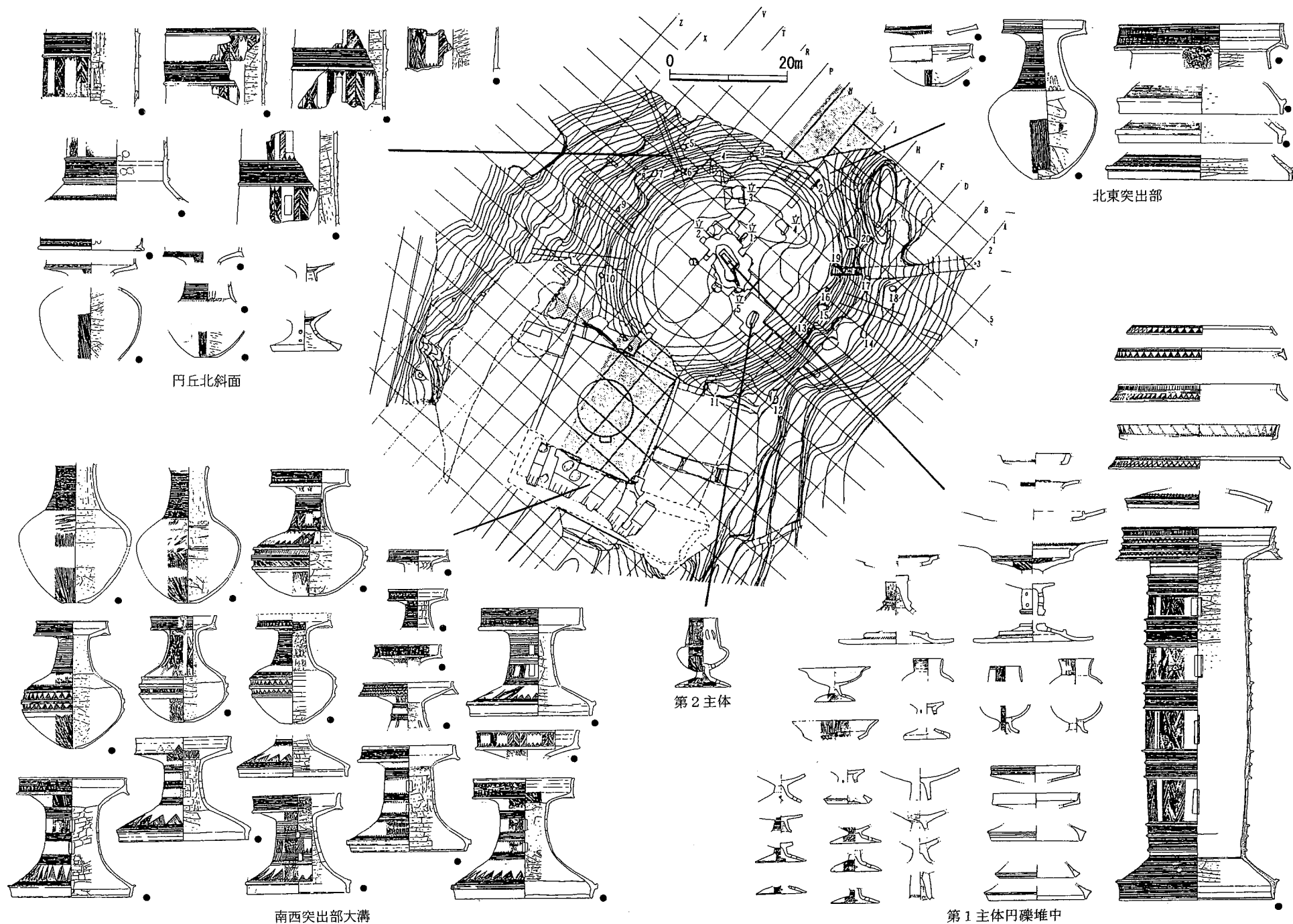
図版 19 岡山県みそのお20号墓第1主体



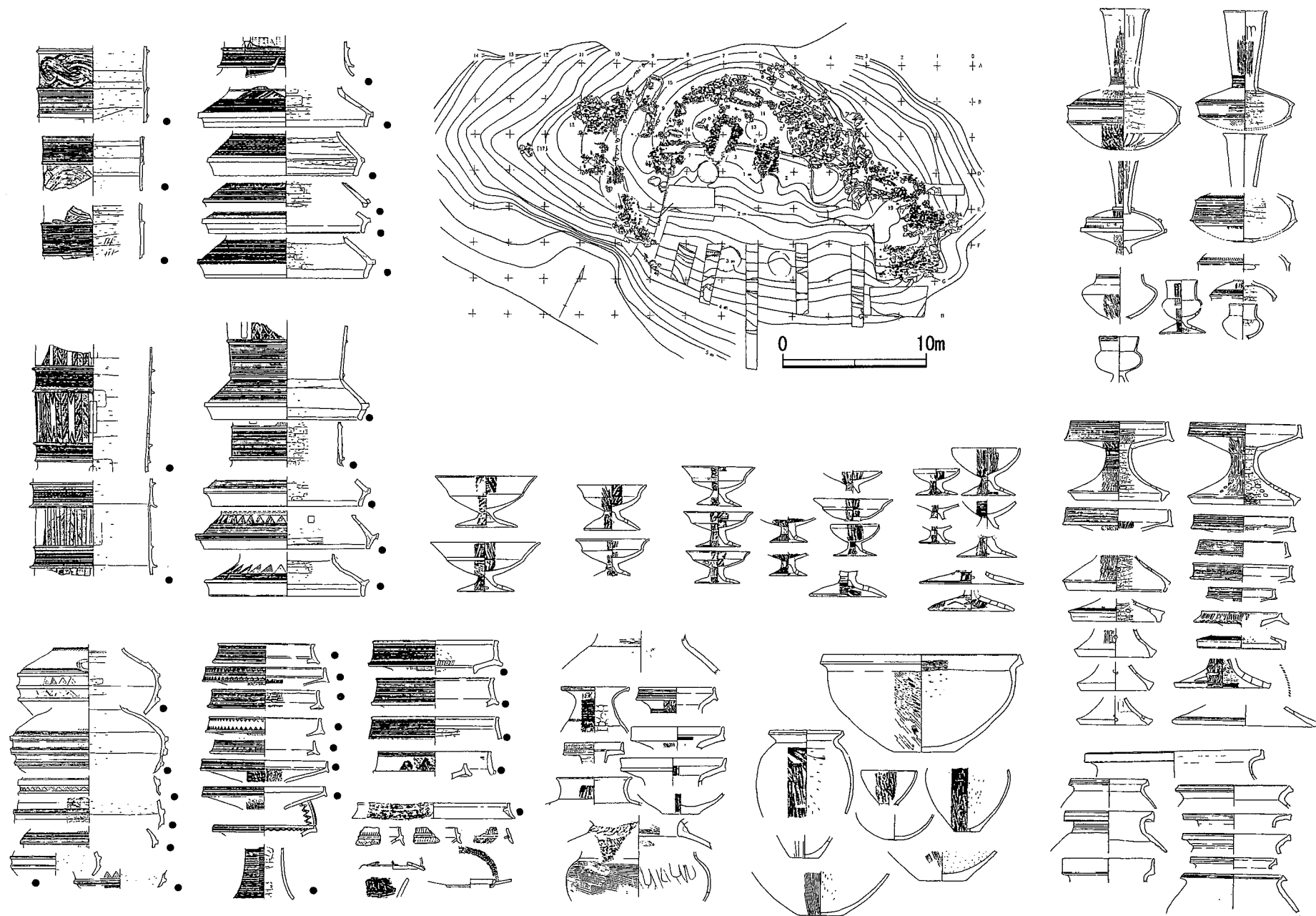
図版 20 岡山県みそのお42号墓第1主体



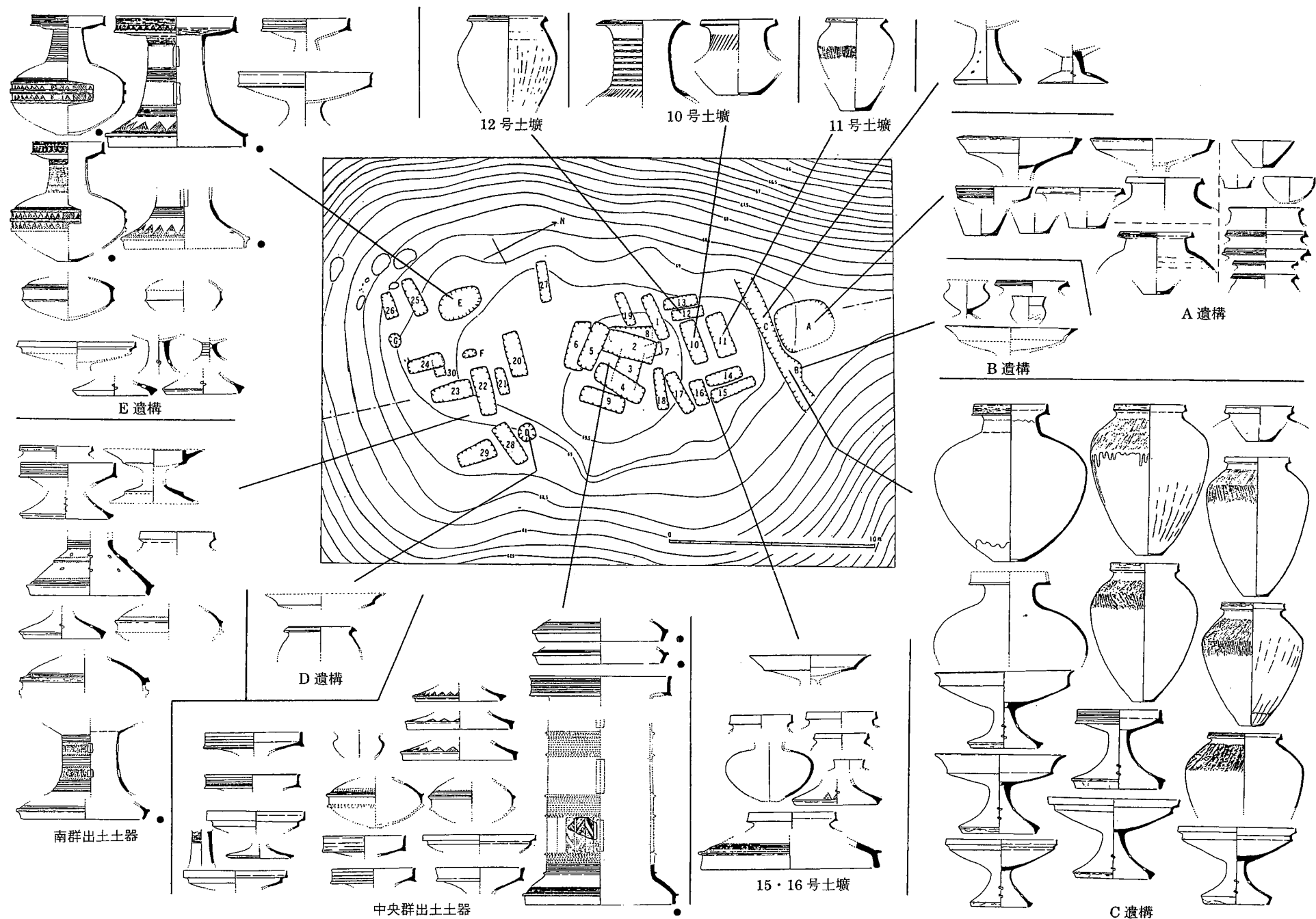
図版 2 1 岡山県黒宮大塚墳丘墓



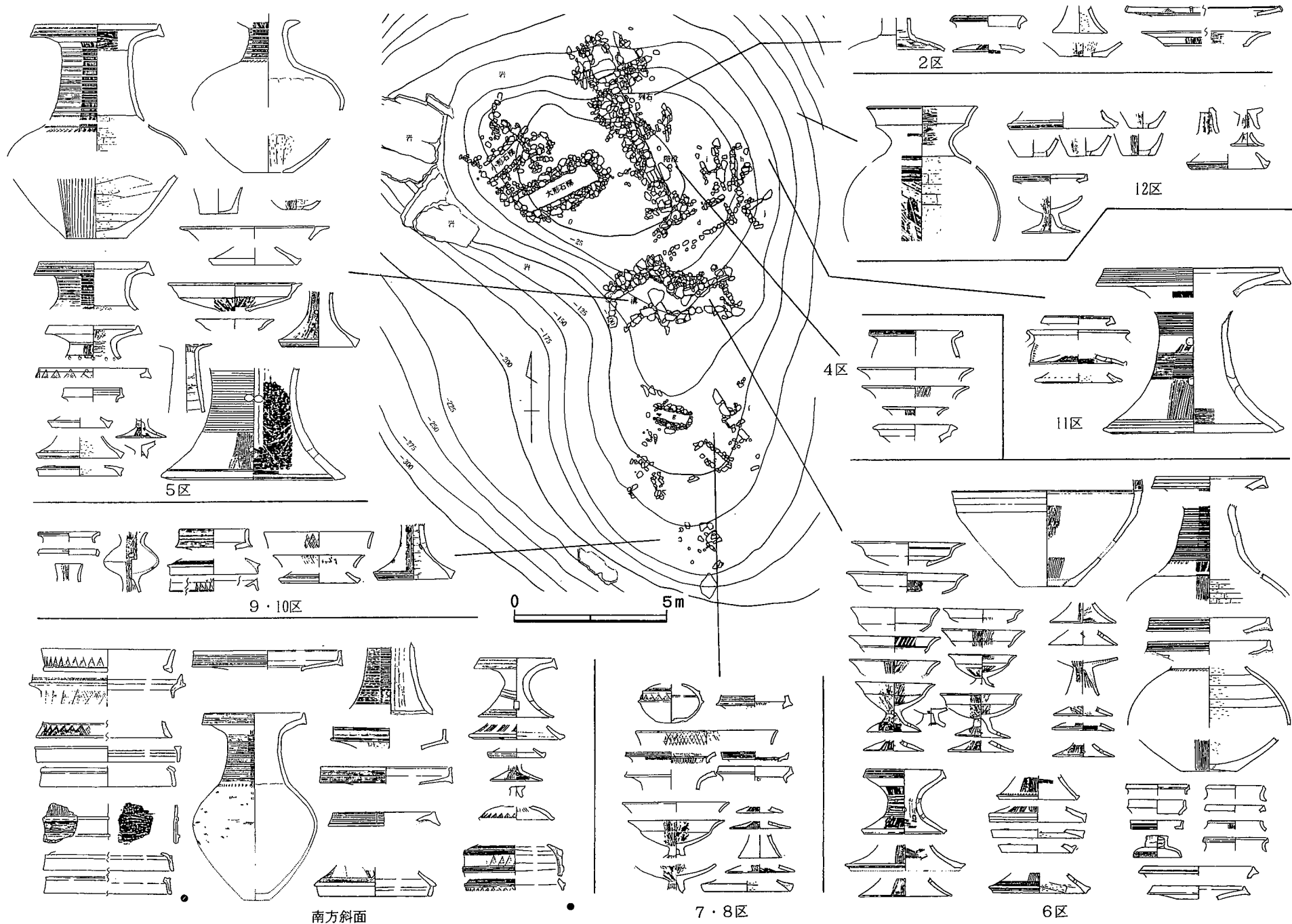
図版2 2 岡山県楯築墳丘墓



図版 23 岡山県立坂墳丘墓

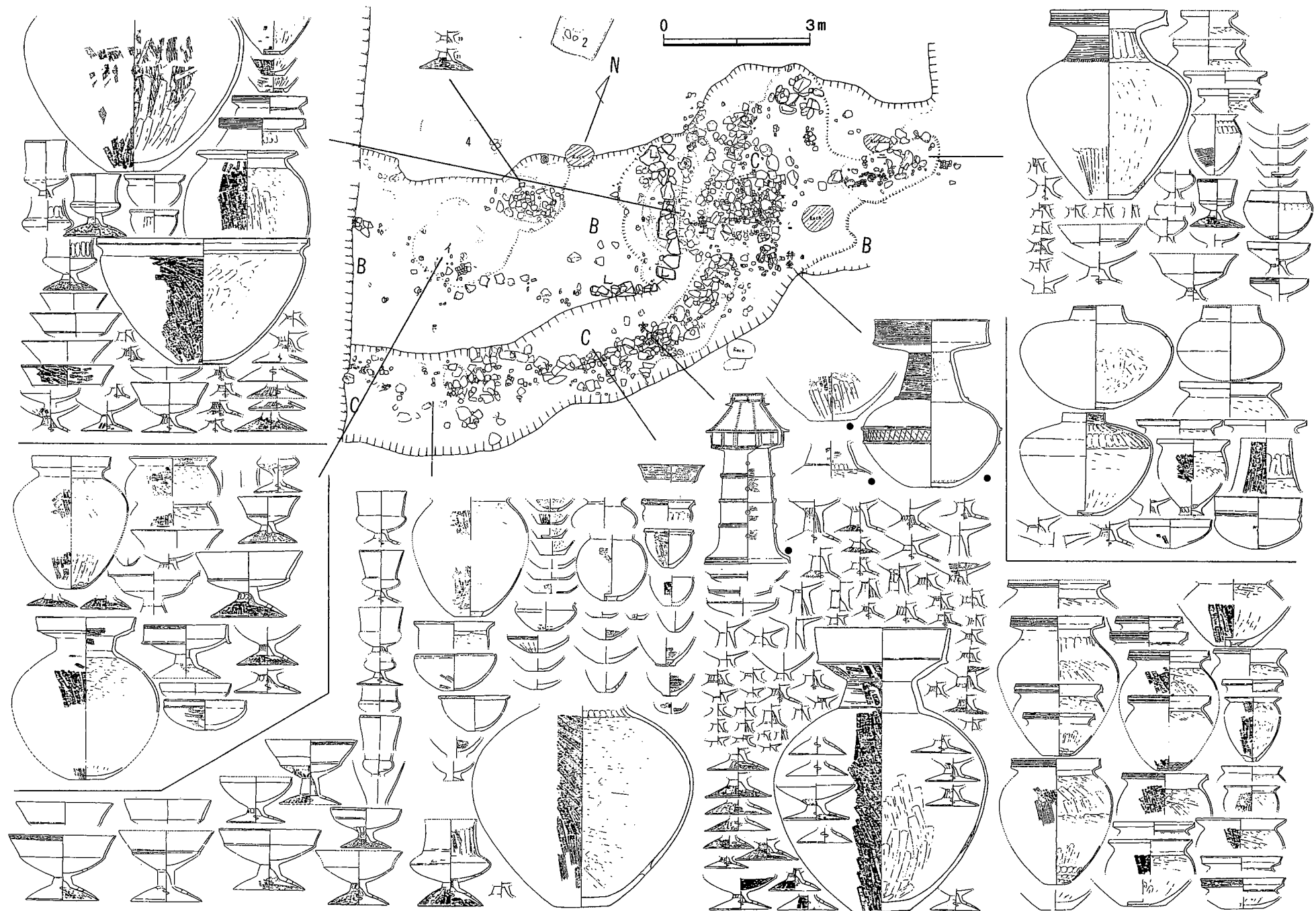


図版24 岡山県芋岡山遺跡

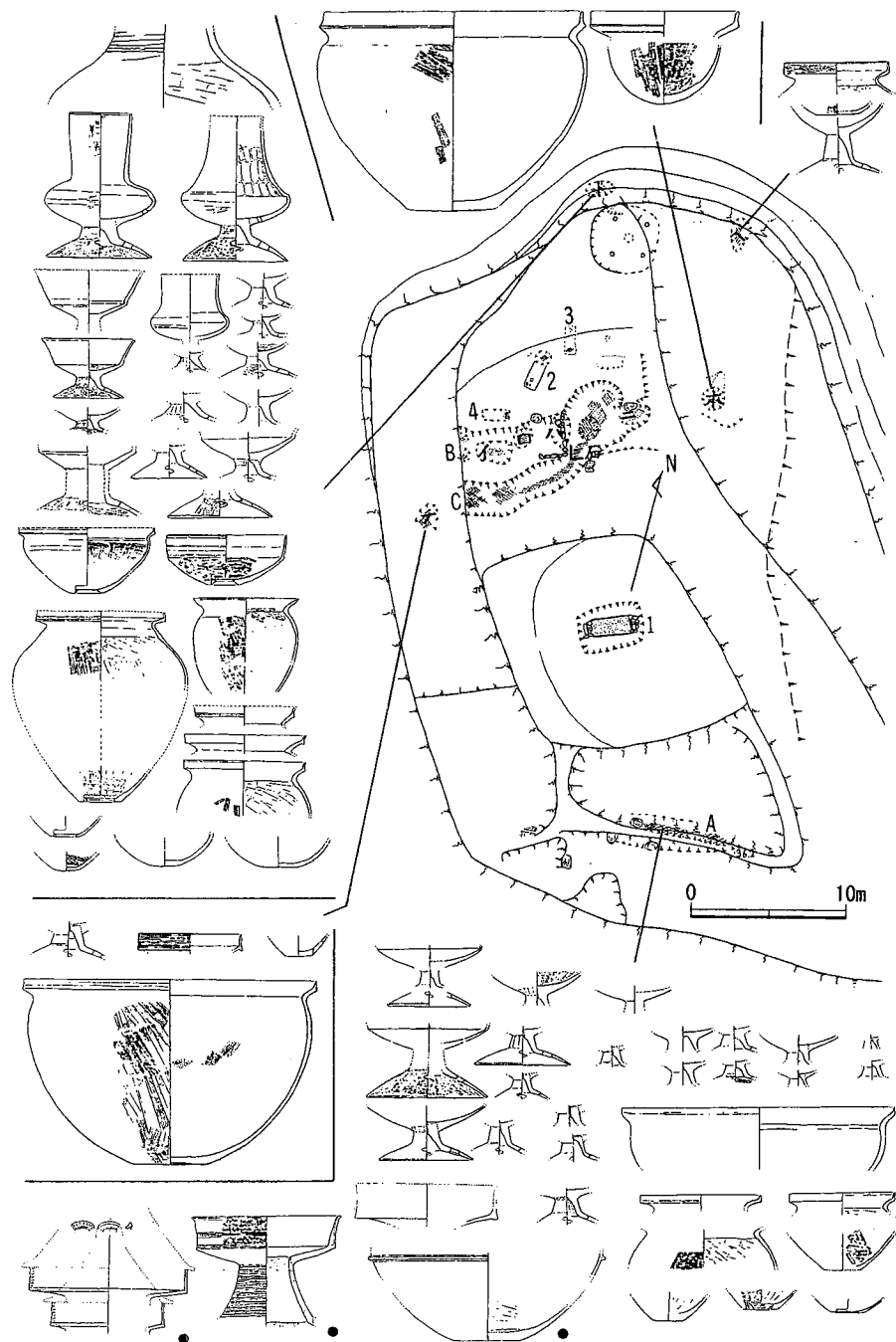


図版 25 岡山県伊予部山墳墓群

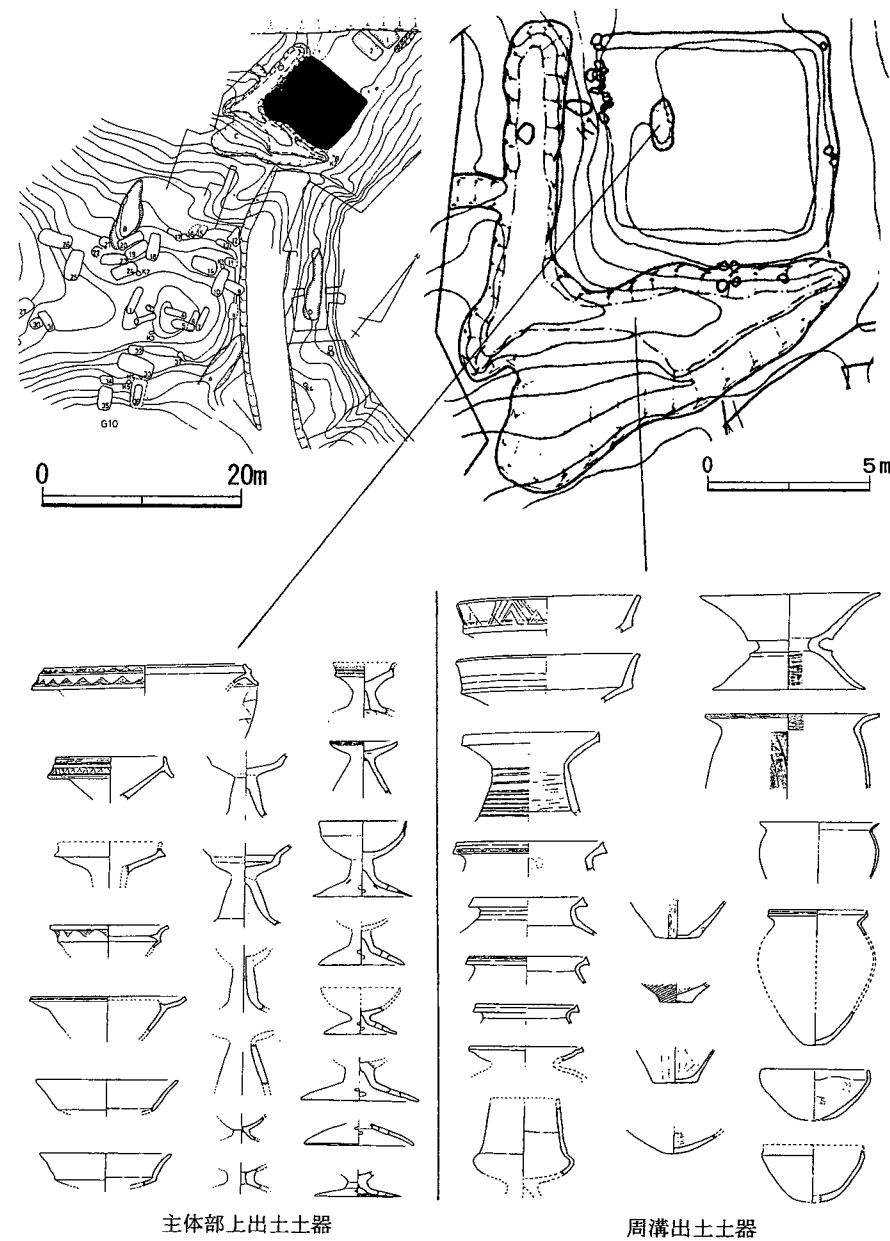




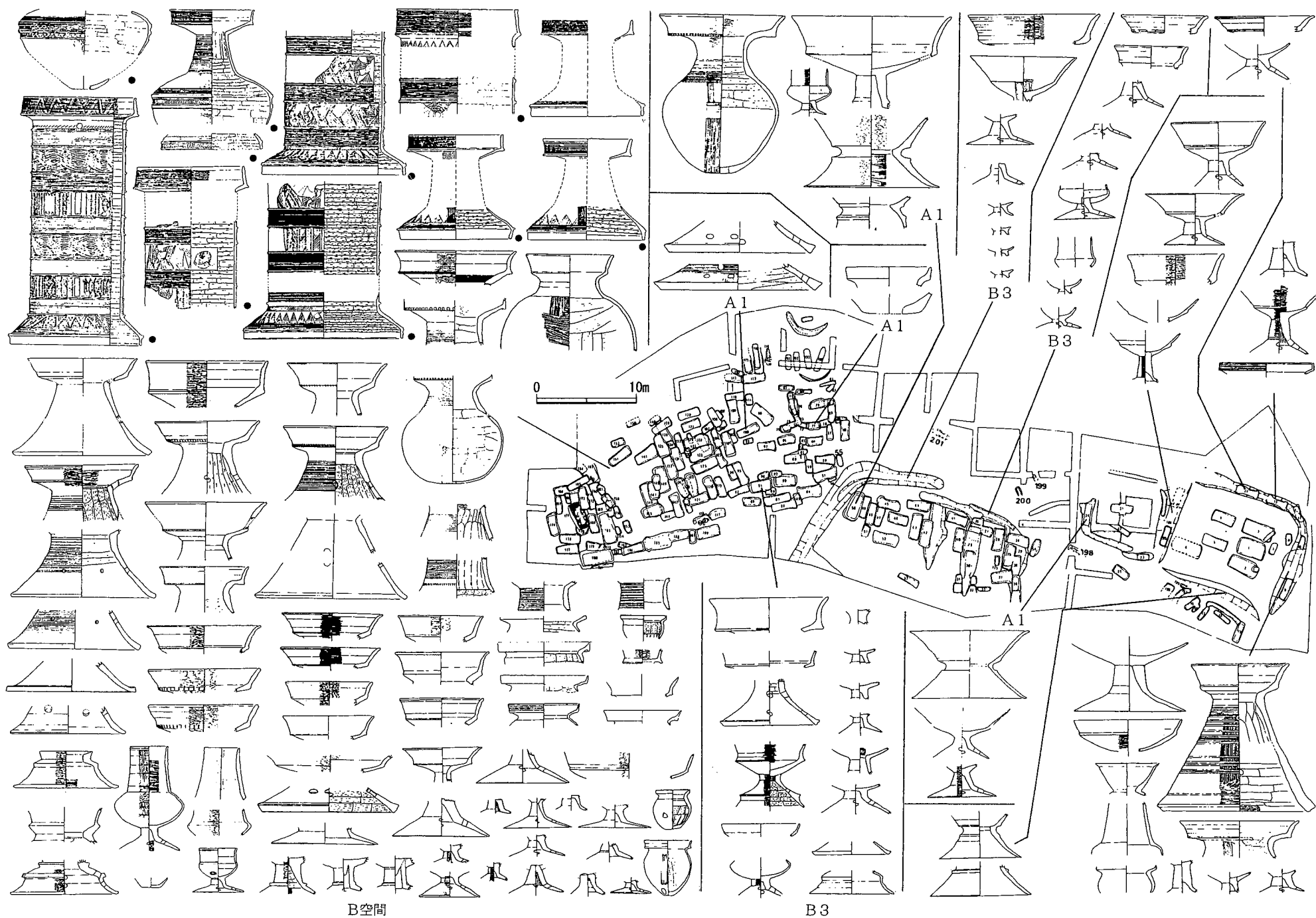
図版26 岡山県女男岩遺跡(1) 遺構Cとその周辺



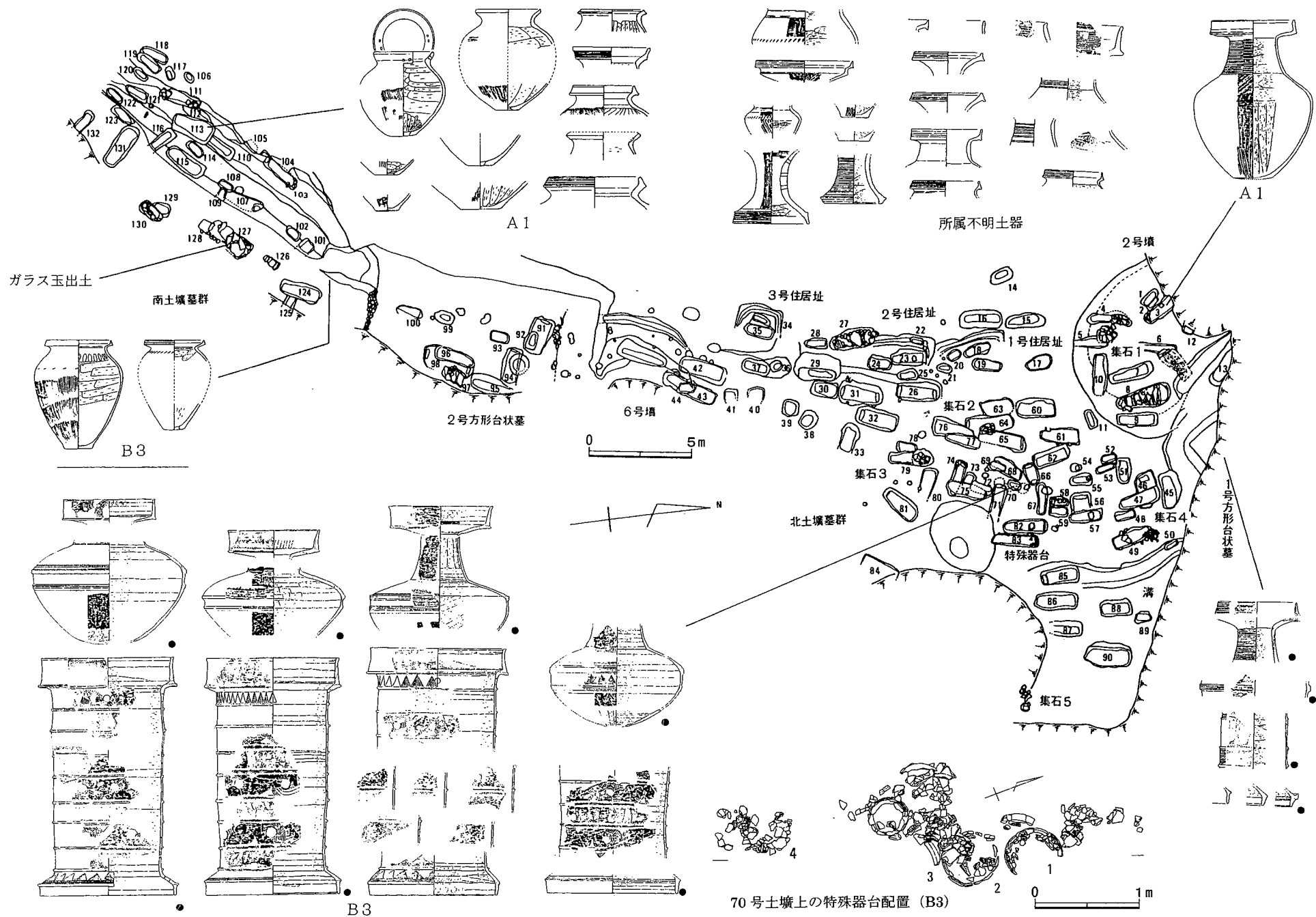
図版27 岡山県女男岩遺跡(2)全体



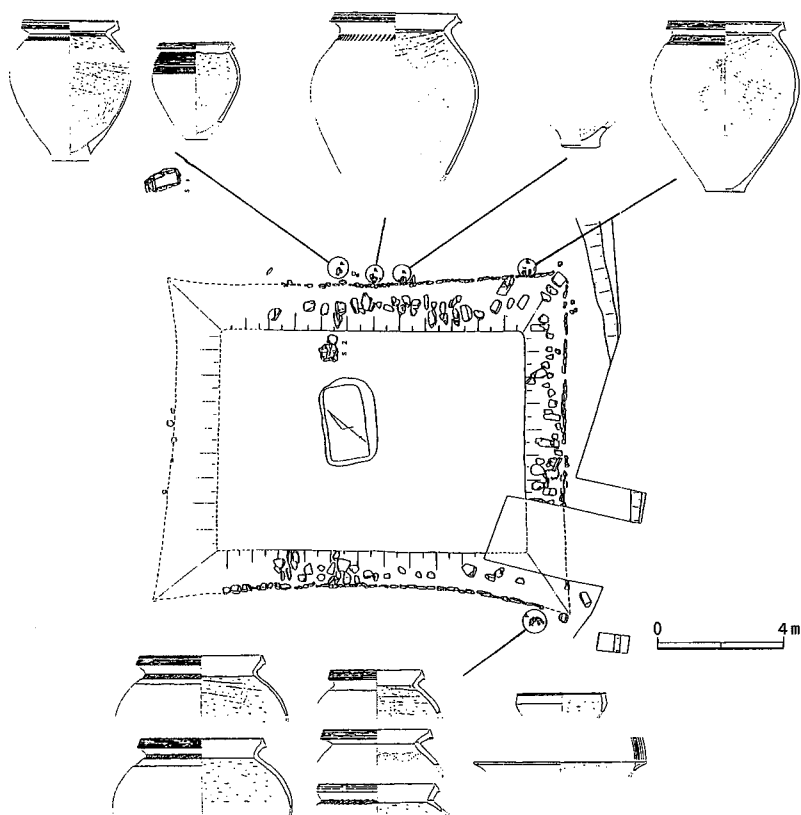
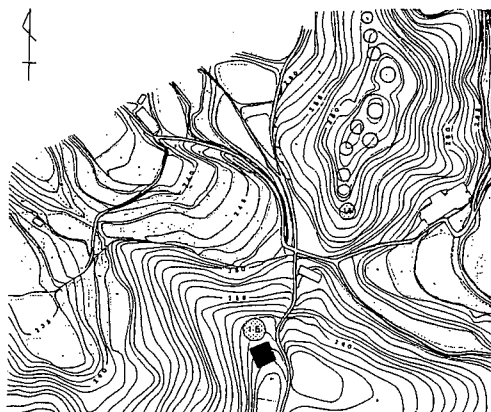
図版28 岡山県便木山方形台状墓



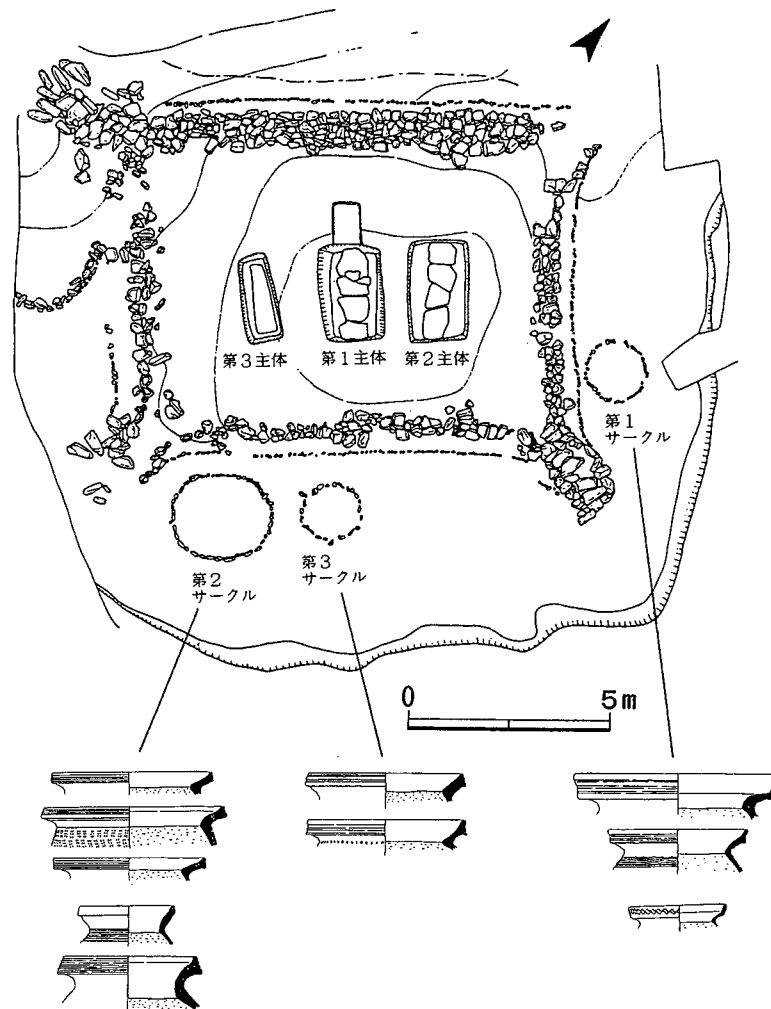
図版 29 岡山県中山遺跡A調査区



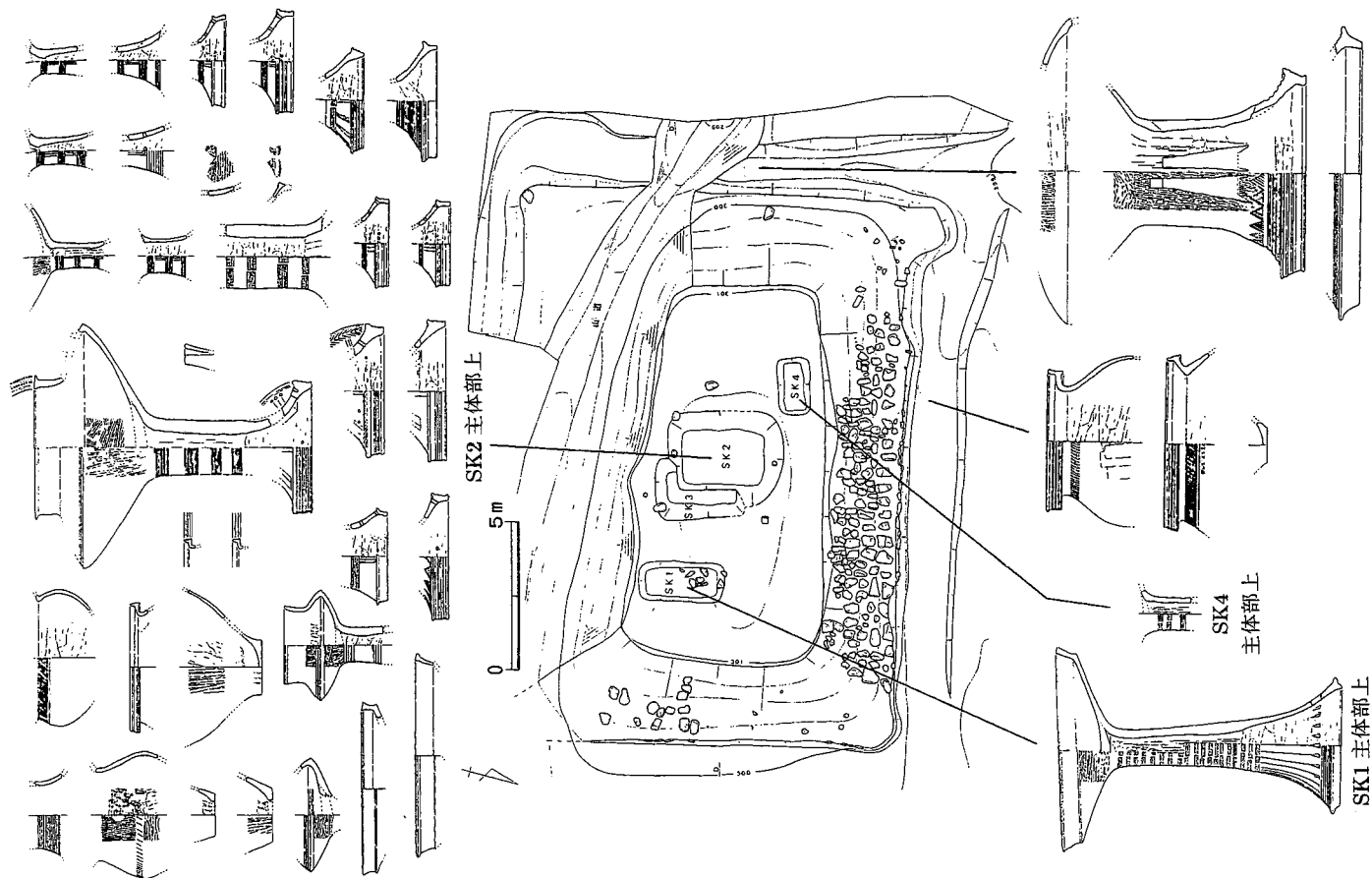
図版30 岡山県西江遺跡



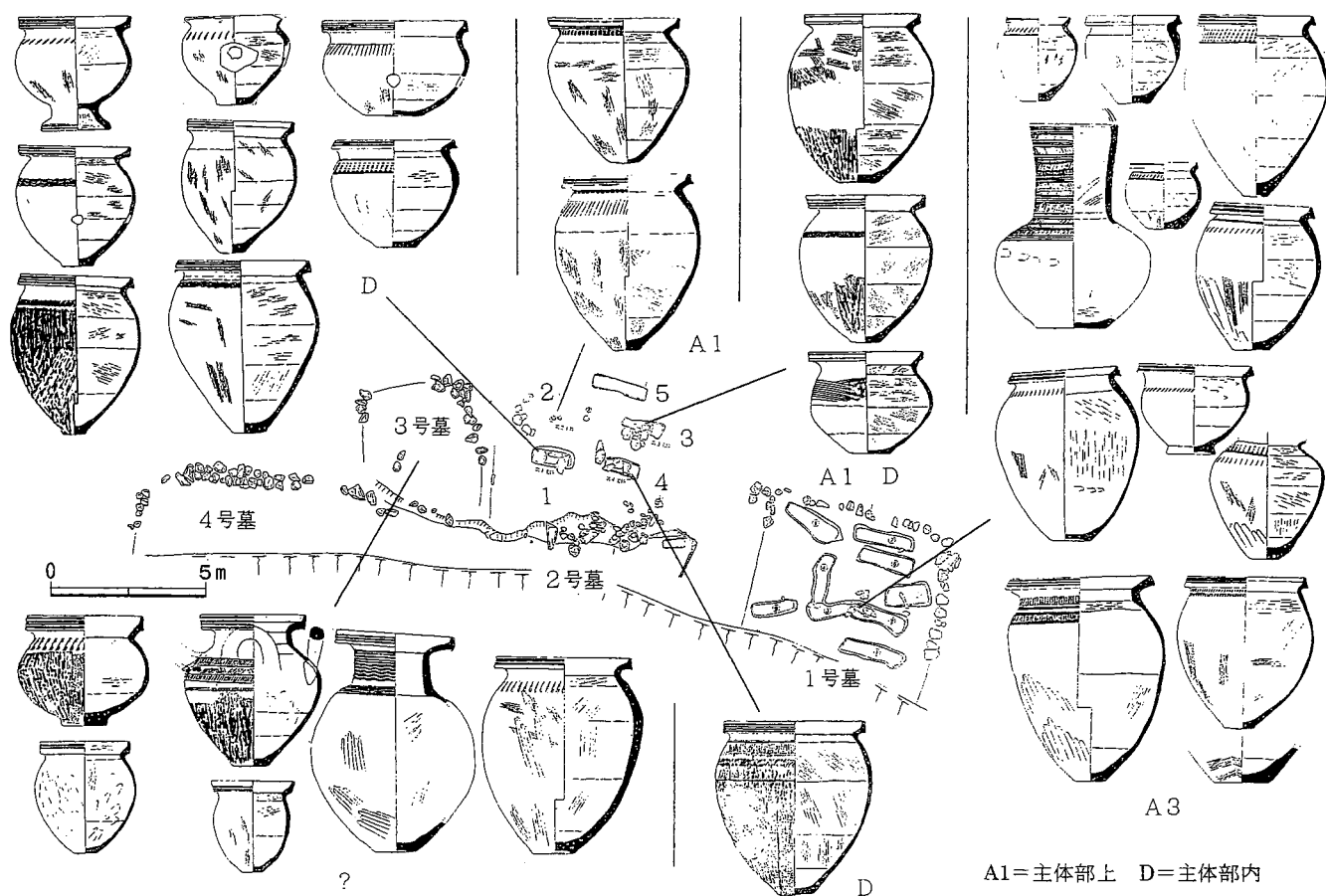
図版3 1 広島県田尻山1号墓



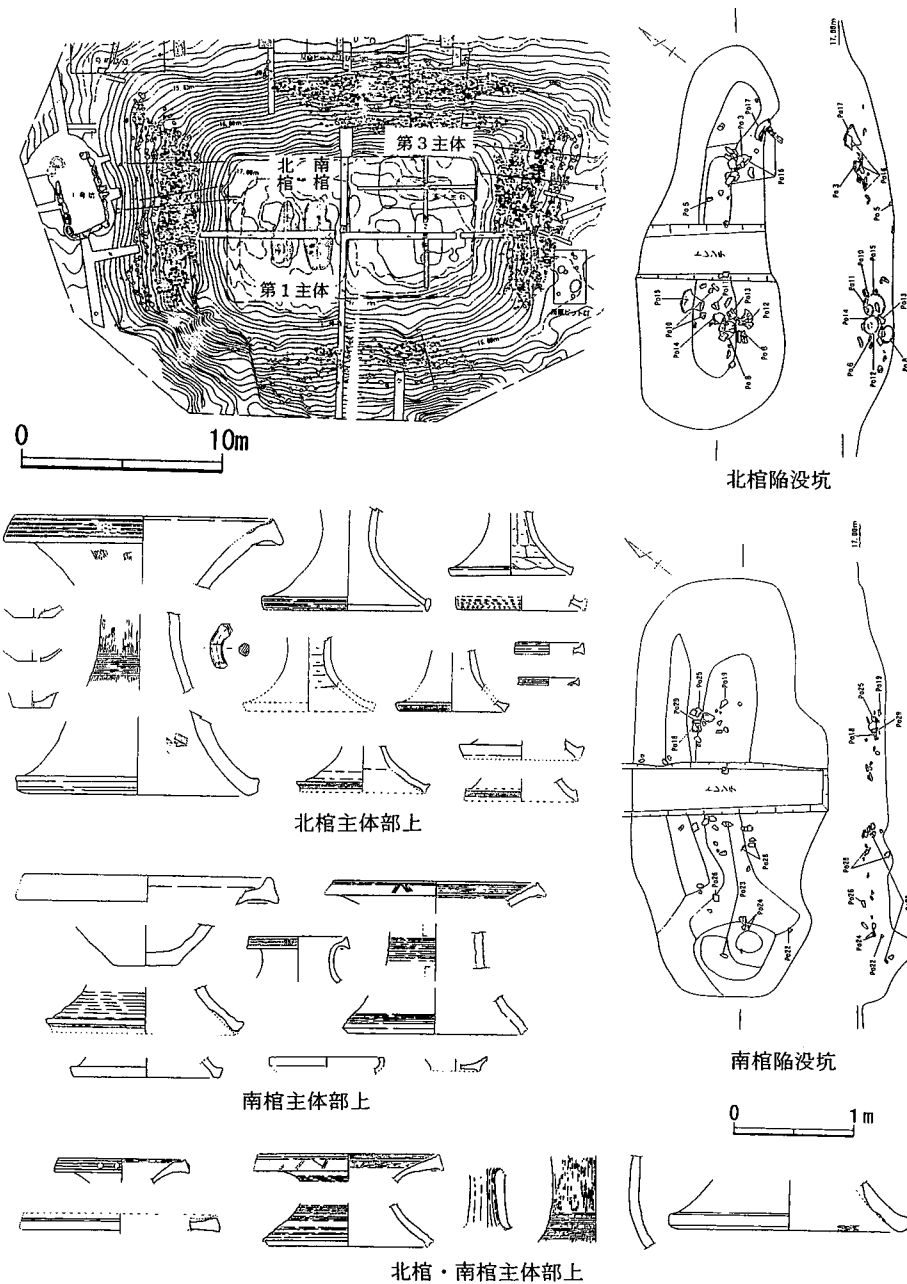
図版3 2 島根県順庵原1号墓



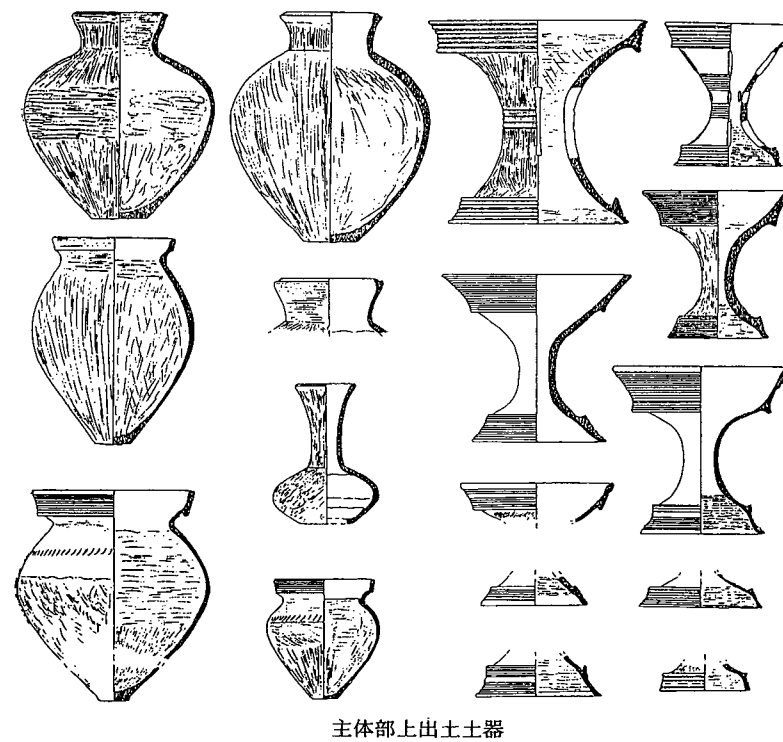
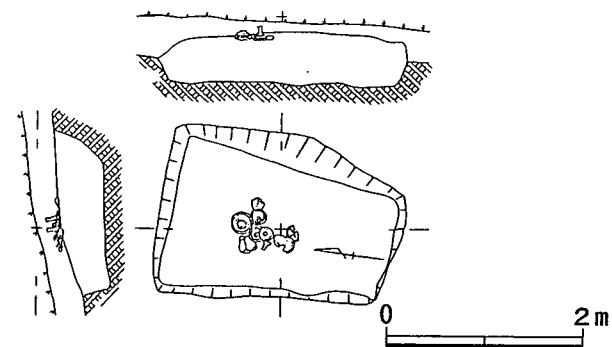
図版 3 4 広島県佐田谷 1 号墓



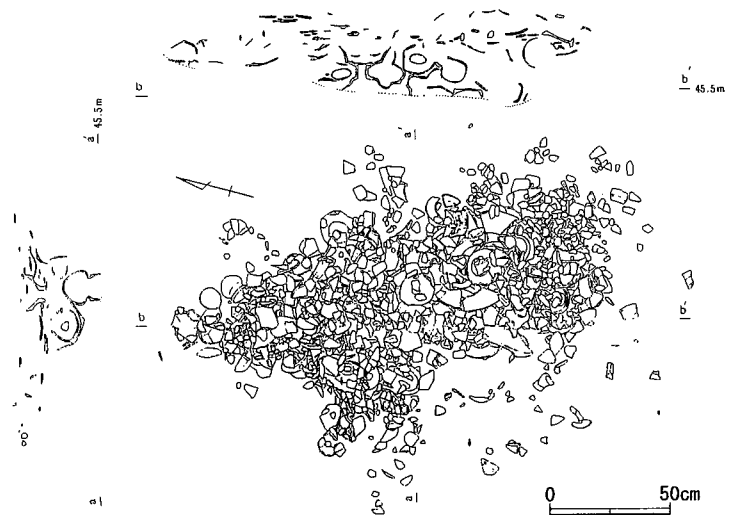
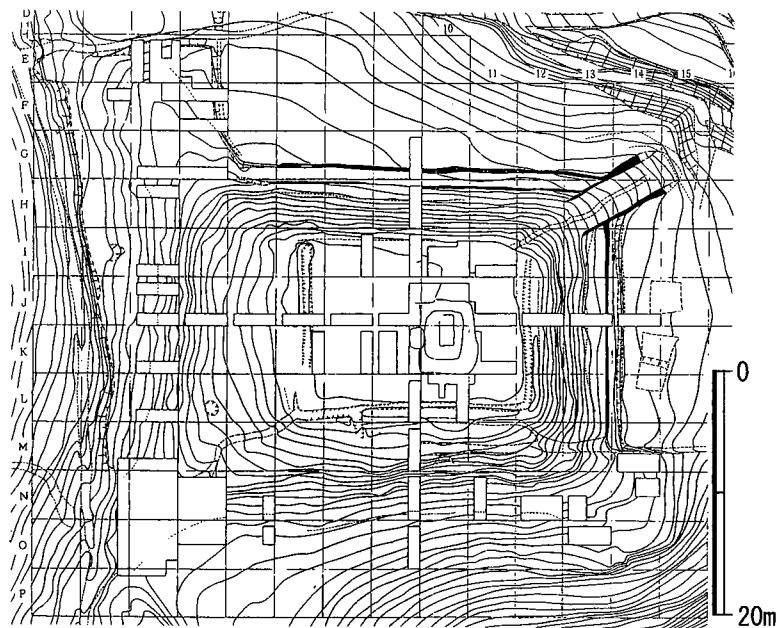
図版 3 3 島根県波来浜遺跡6調査区



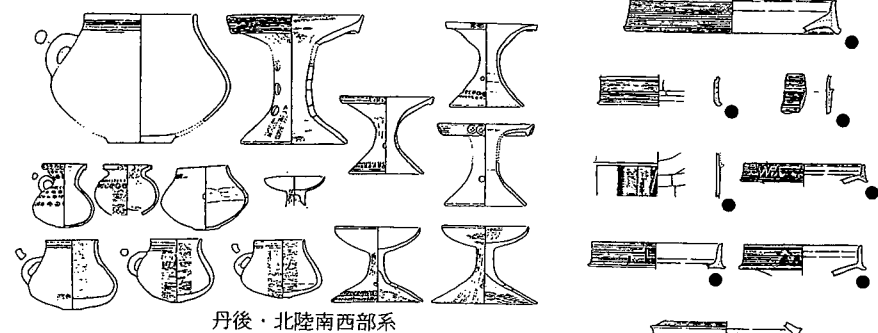
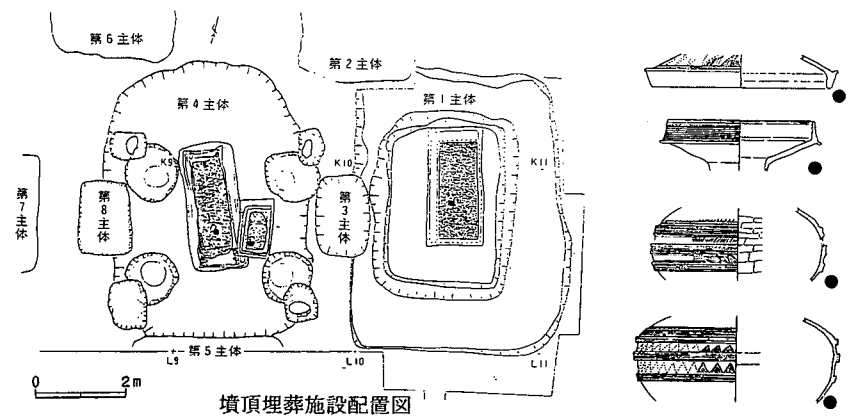
図版35 鳥取県新井三嶋谷1号墳丘墓



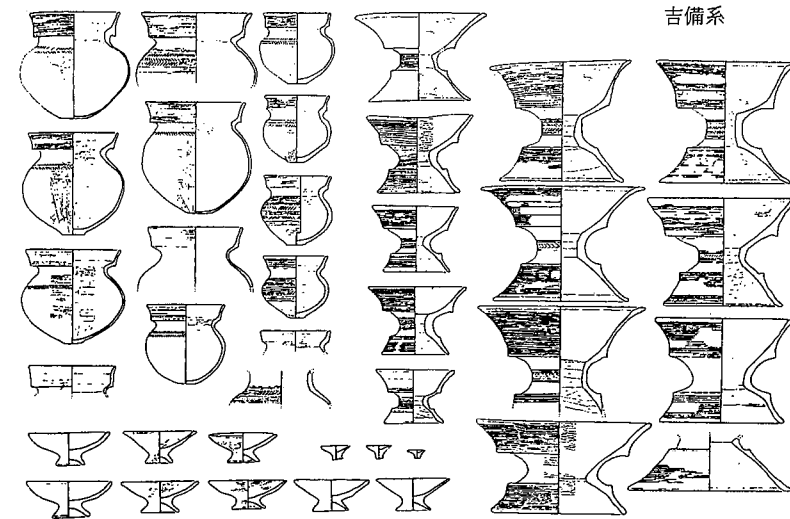
図版36 島根県九重土墳墓



第1主体部上の陥没坑と土器出土状況



丹後・北陸西南部系

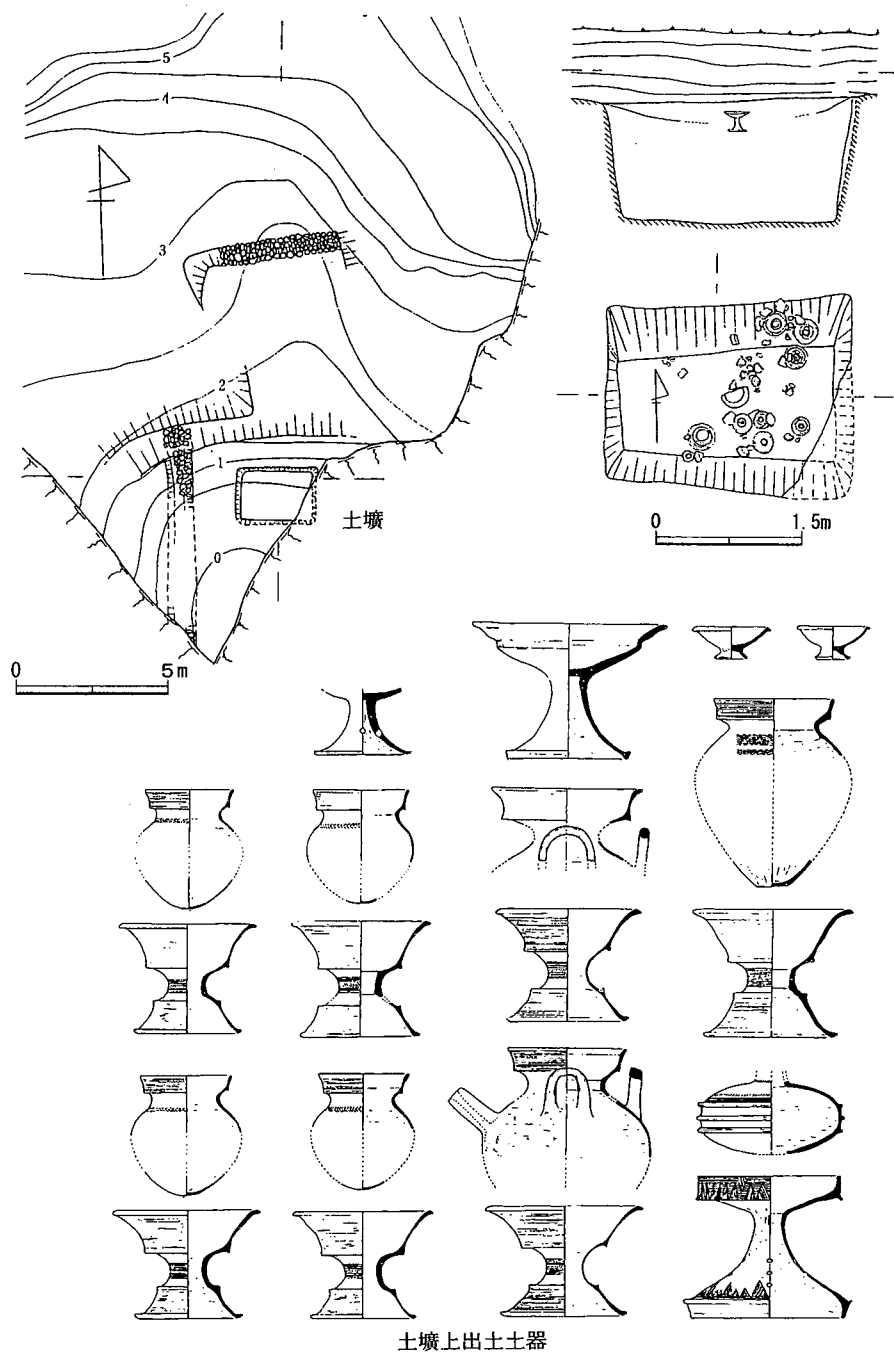


山陰系

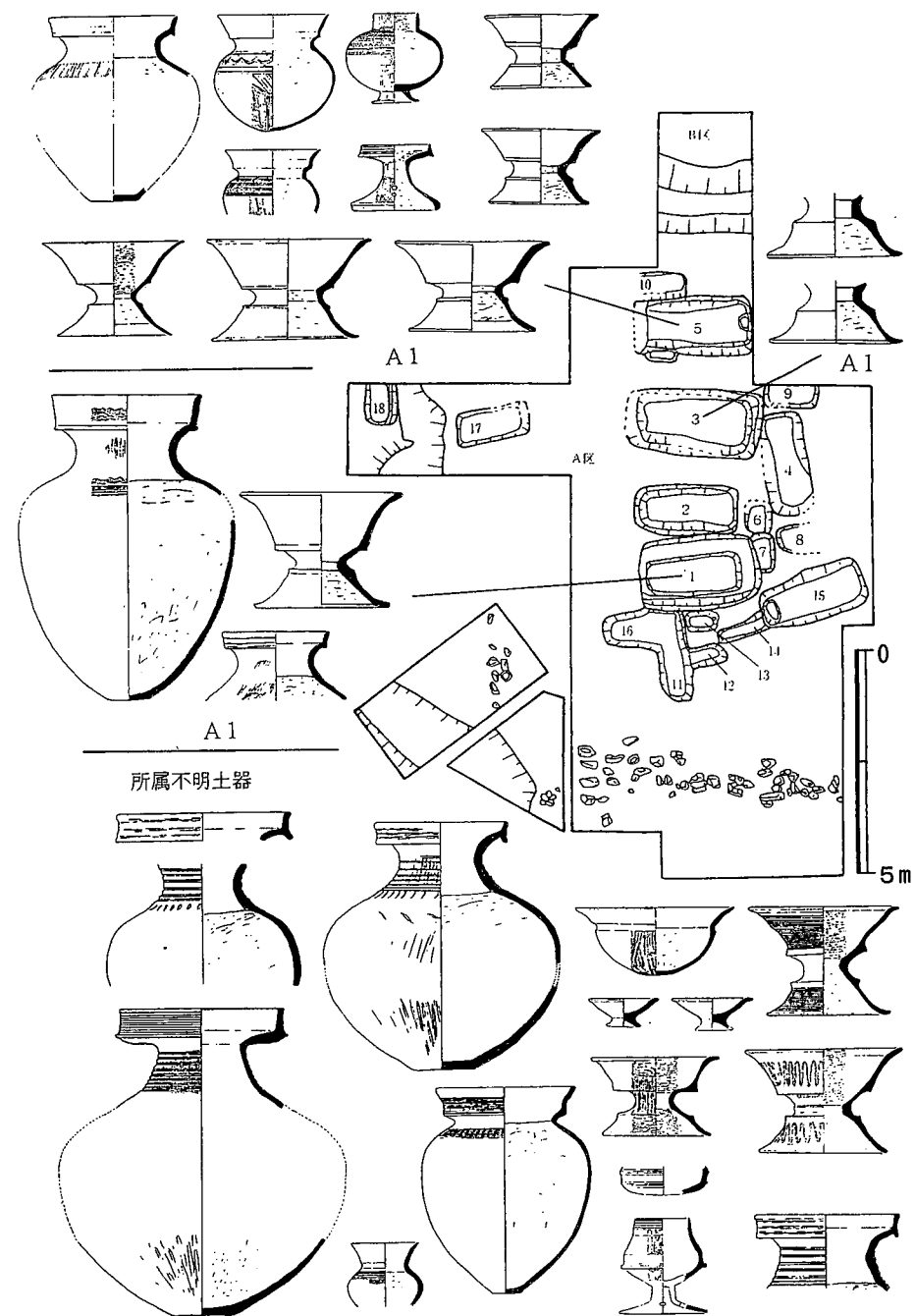
吉備系

第1主体部上出土土器

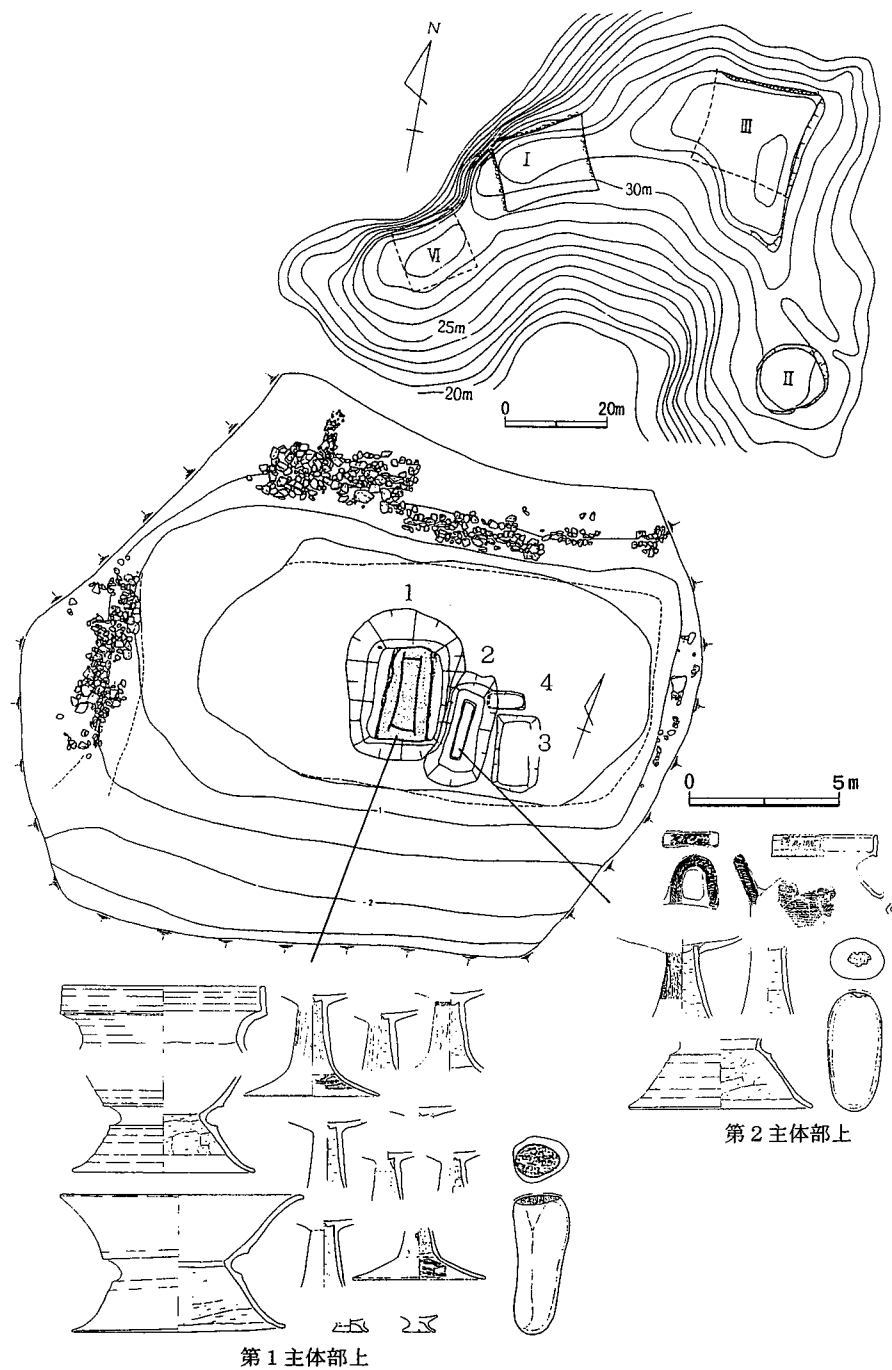




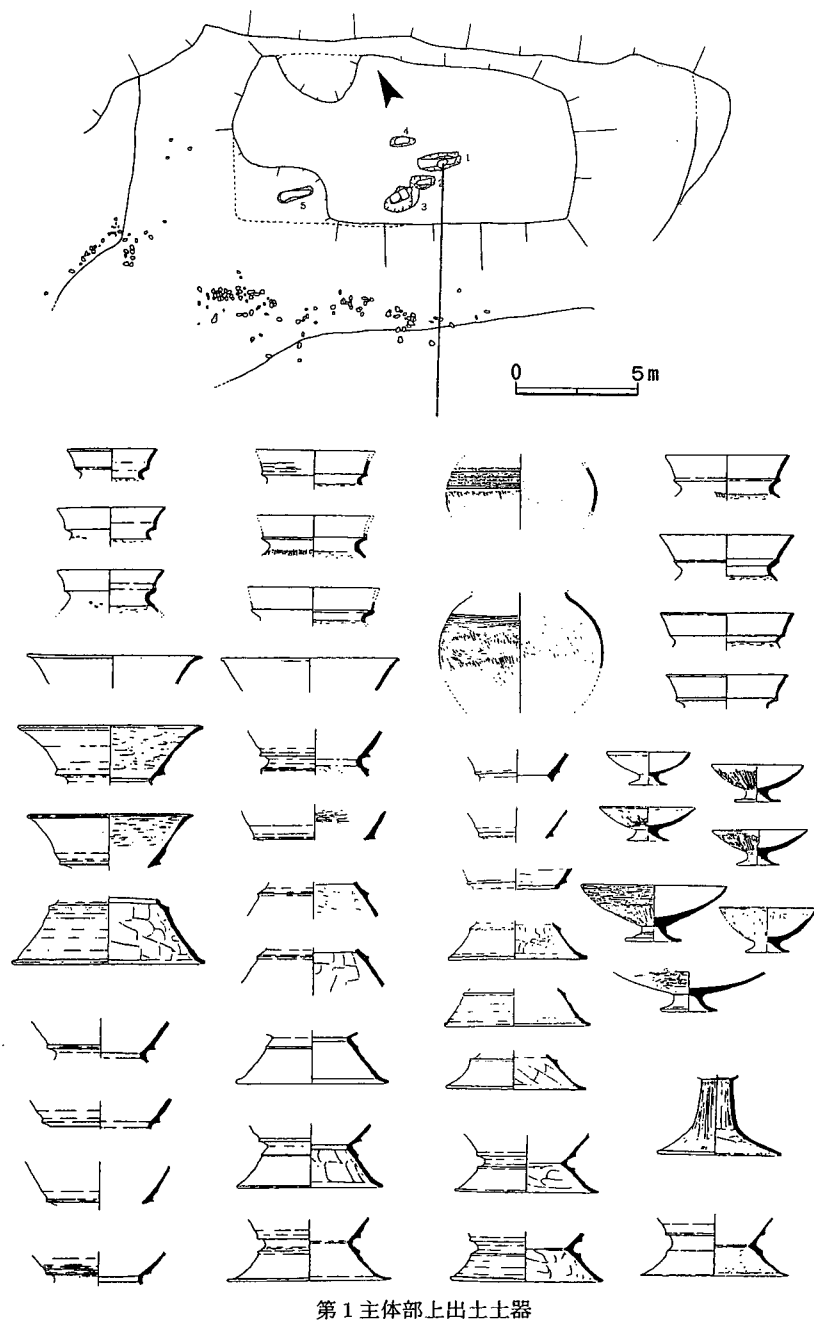
図版38 島根県の場土墳墓



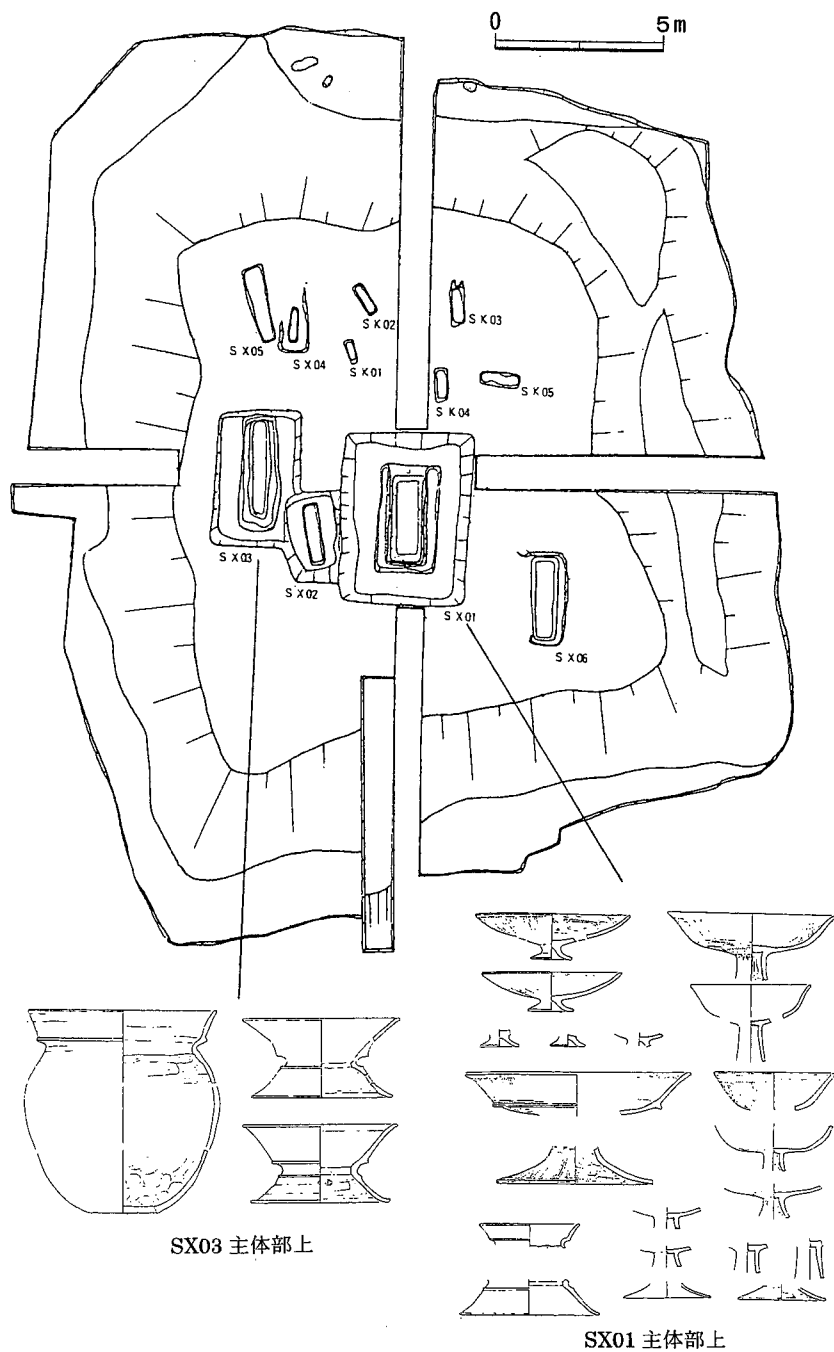
図版39 島根県鍵尾A区土墳墓群



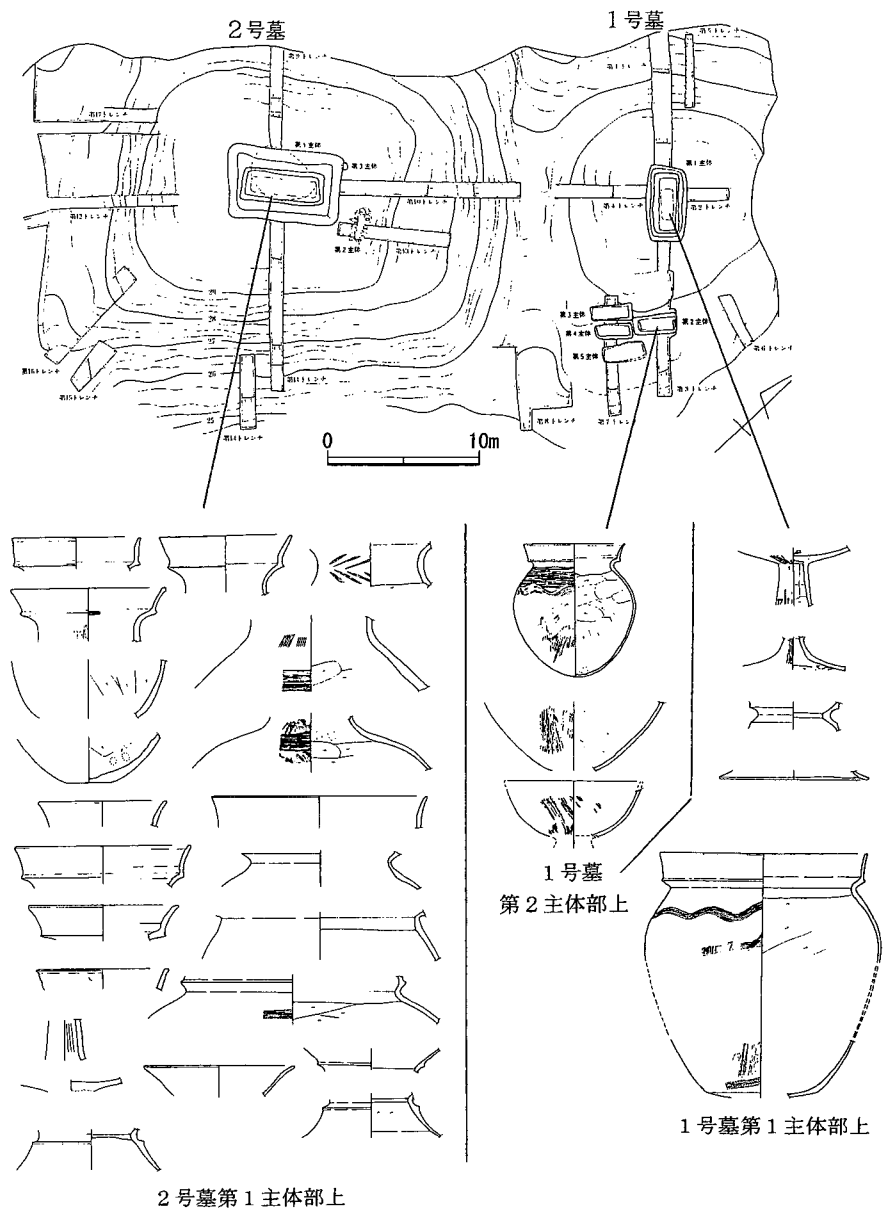
図版40 島根県安養寺1号墓



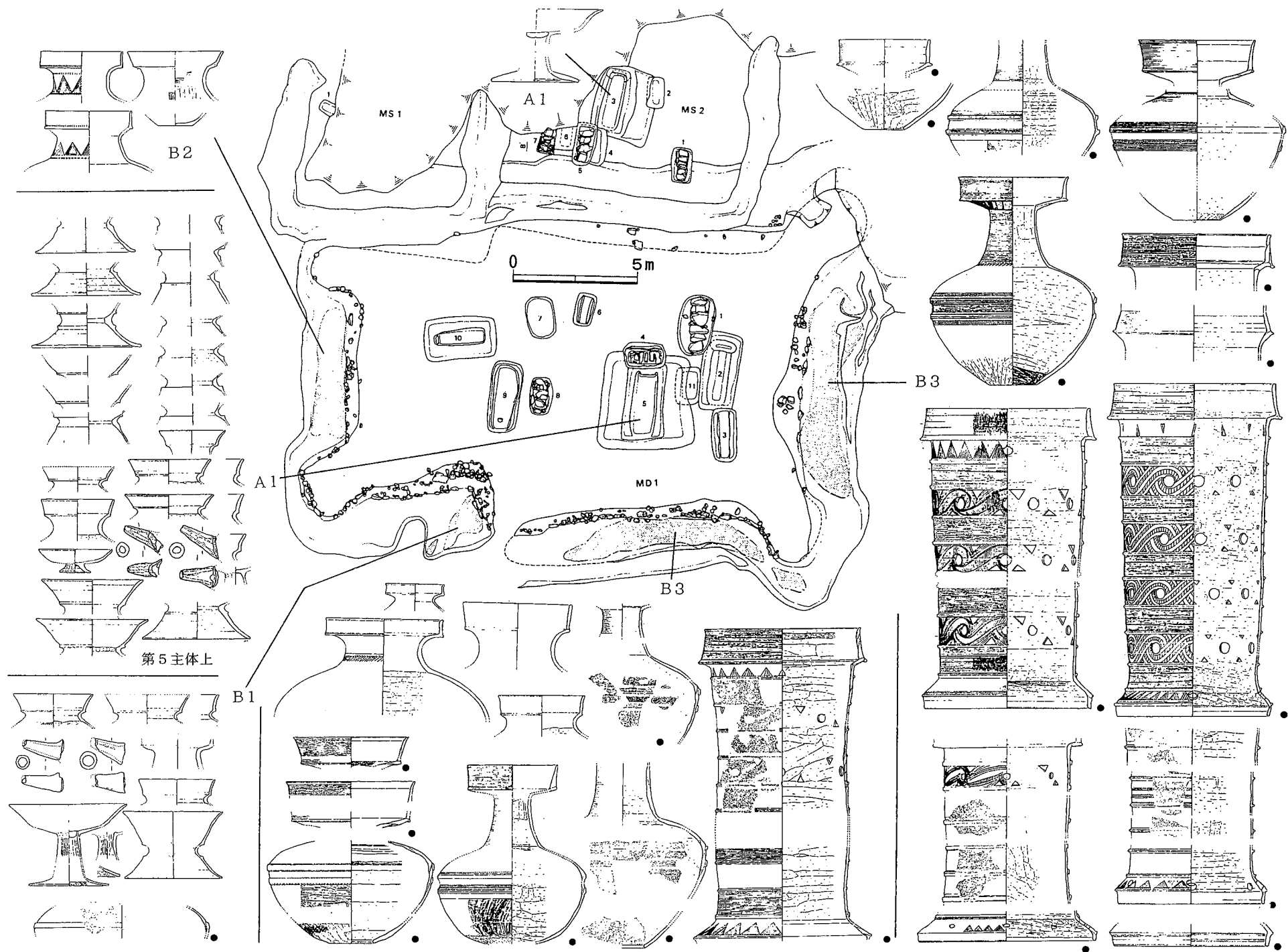
図版41 島根県大木権現山1号墓



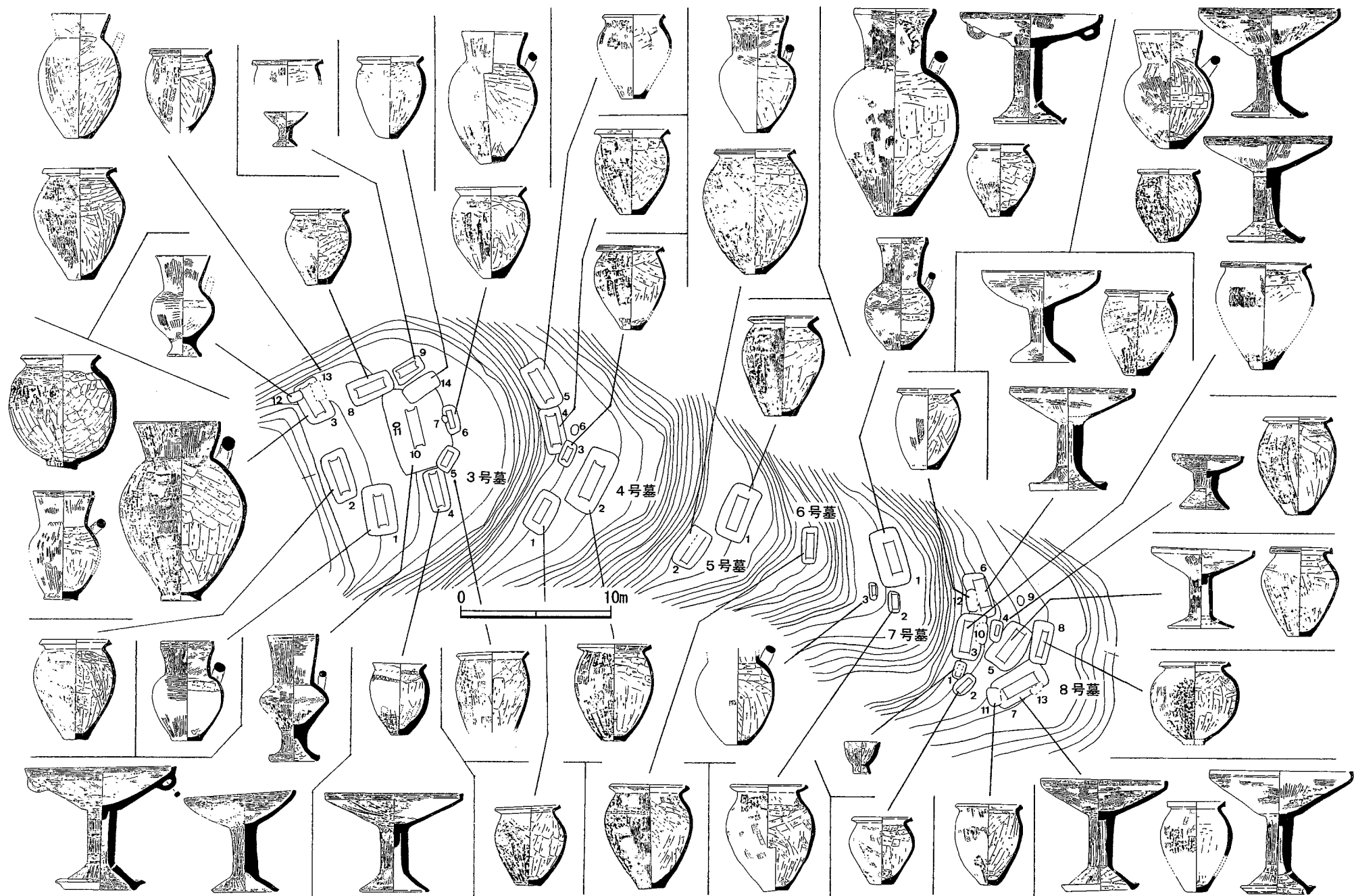
図版 4 2 鳥取県日原 6 号墓



図版 4 3 鳥取県桂見 1・2 号墓

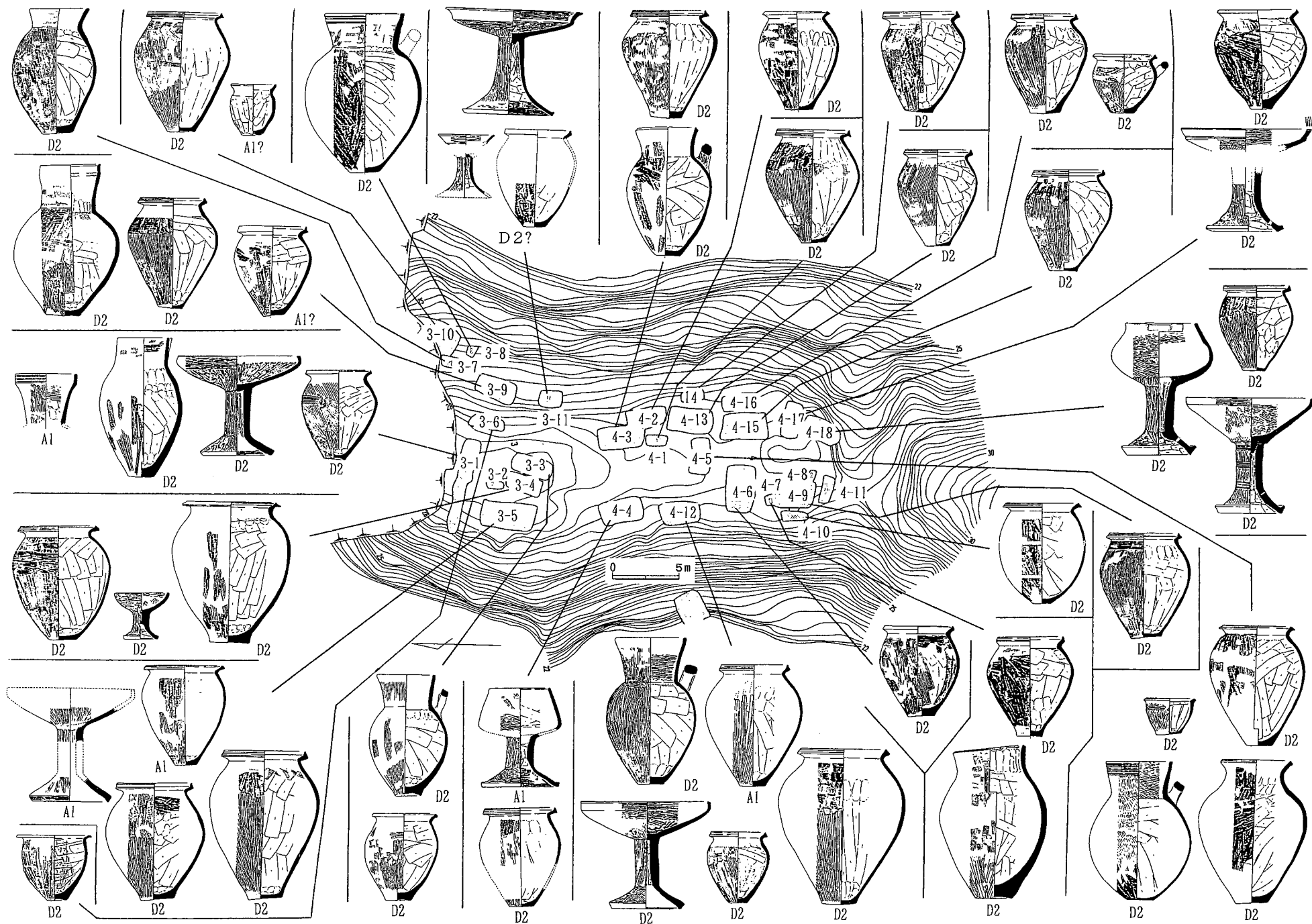


图版 4 4 広島県矢谷MD1号墓



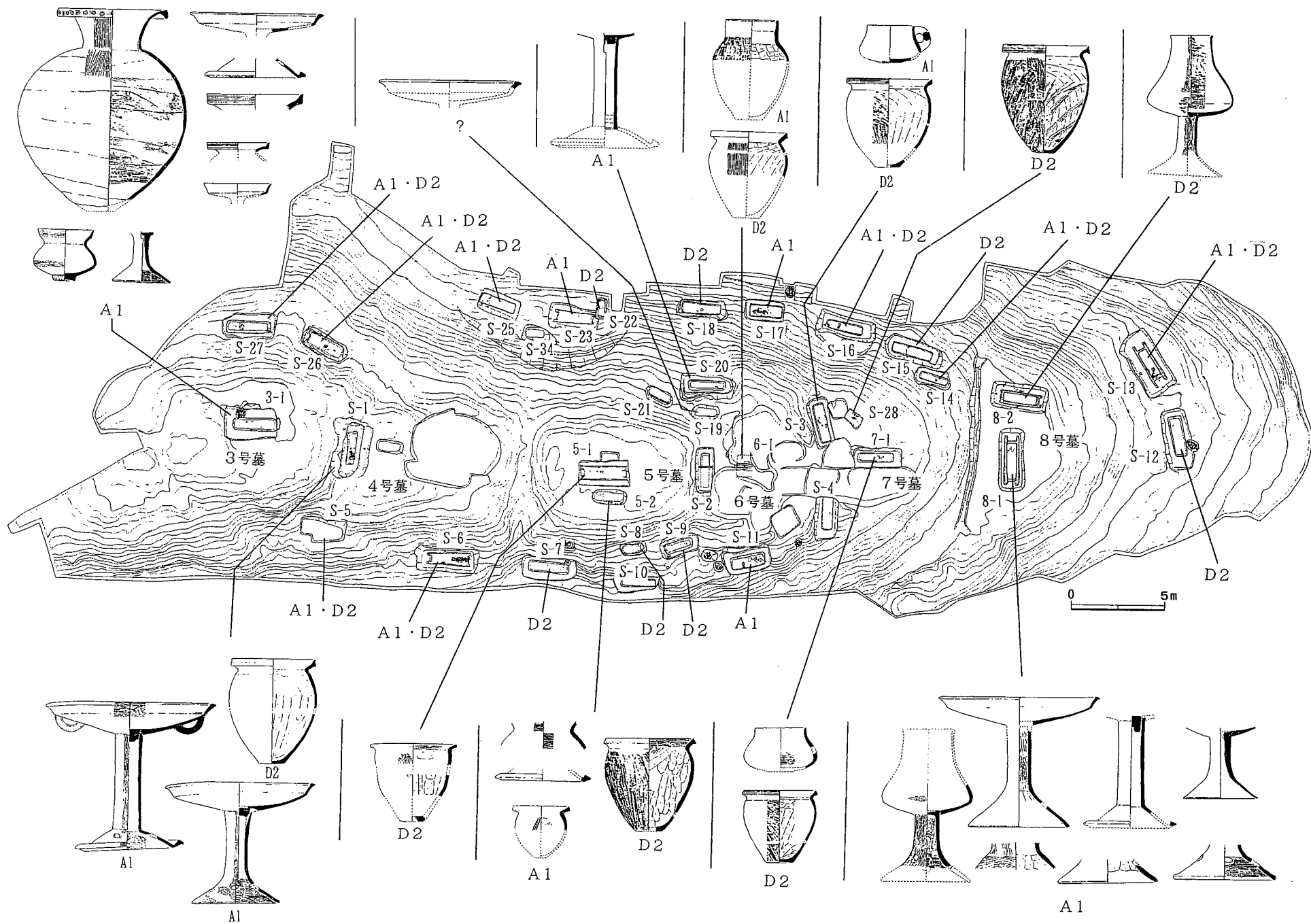
※すべて墓壙内破碎土器配置 (D2)

図版 4 5 京都府三坂神社墳墓群



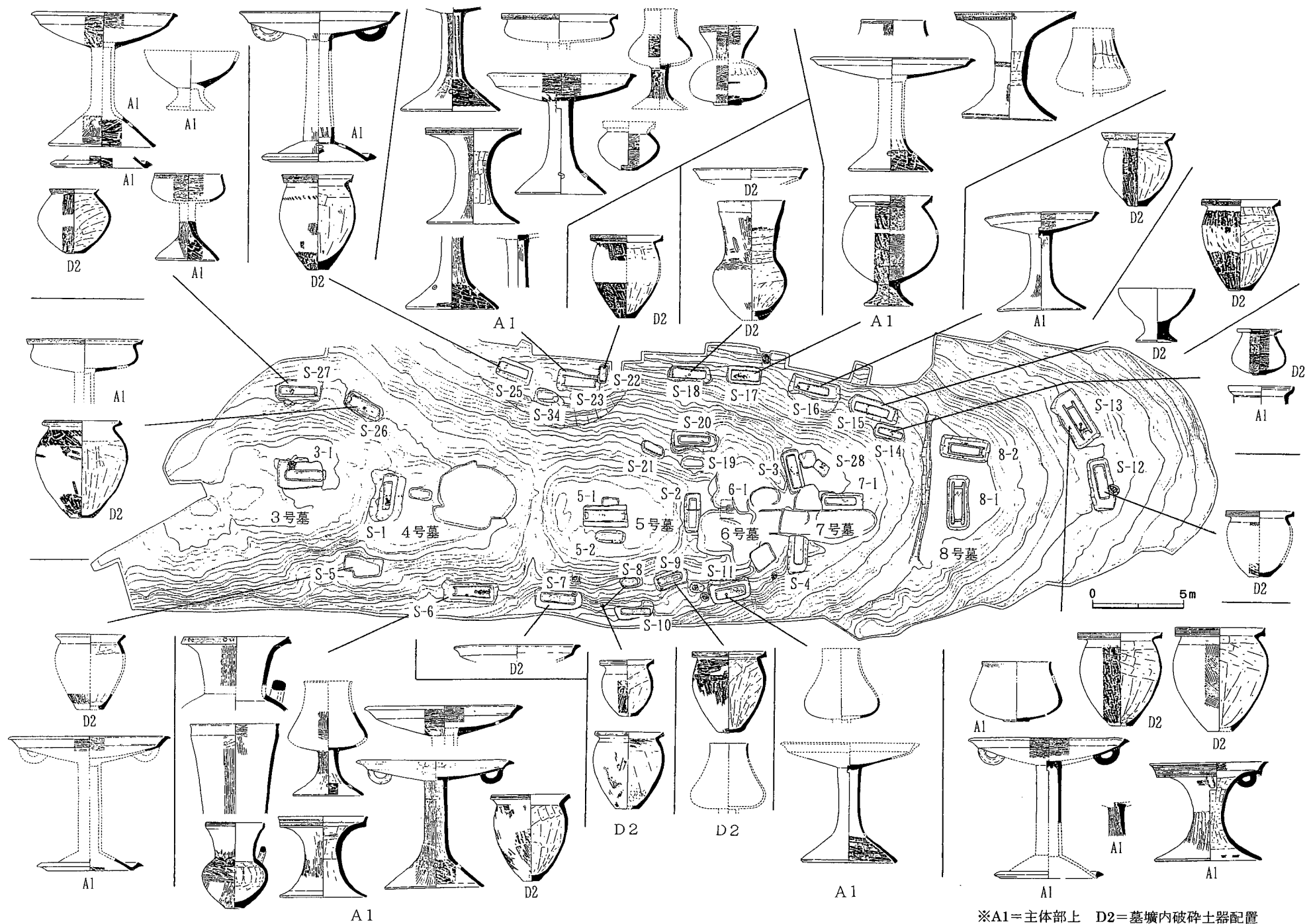
※A1=主体部上 D2=墓坑内破碎土器配置

図版 4 6 兵庫県上鉢山・東山墳墓群東尾根地区



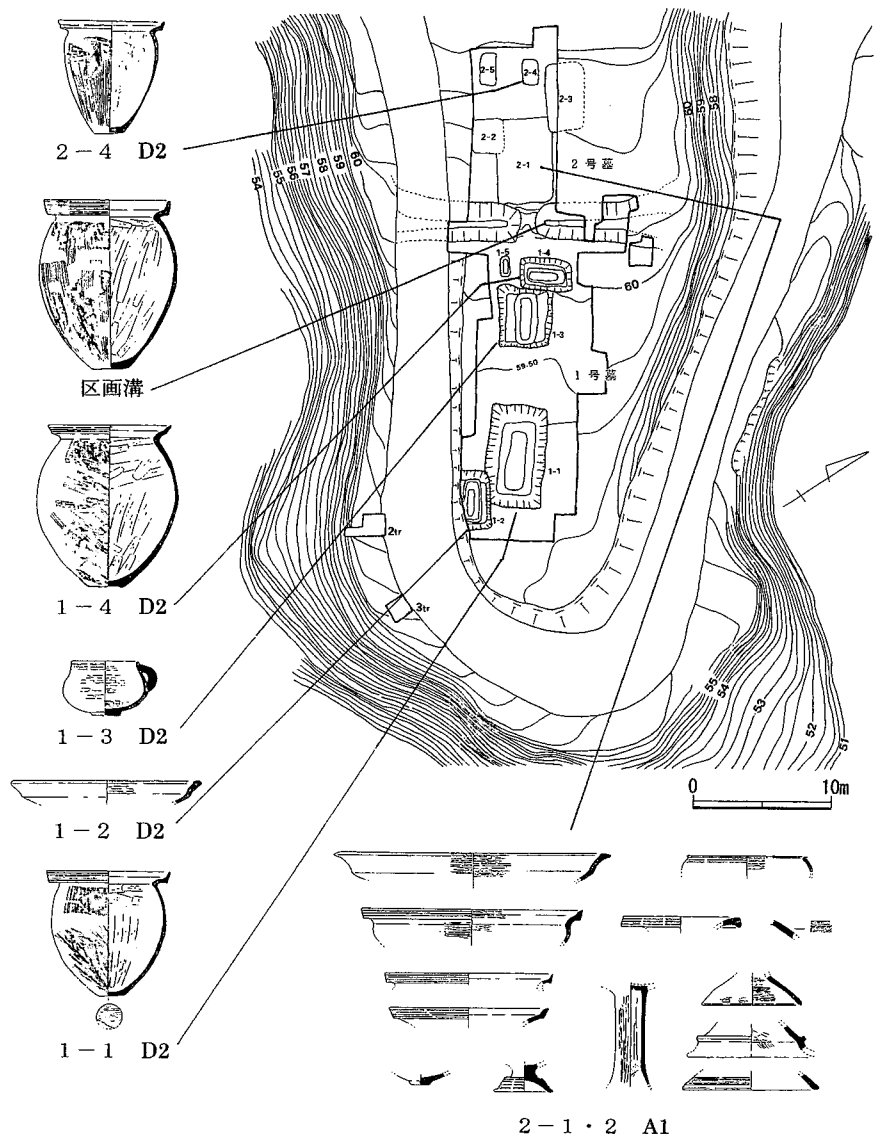
图版 4 7 京都府大山墳墓群 (1) 墳頂埋葬

※A1=主体部上 D2=墓域内破碎土器配置



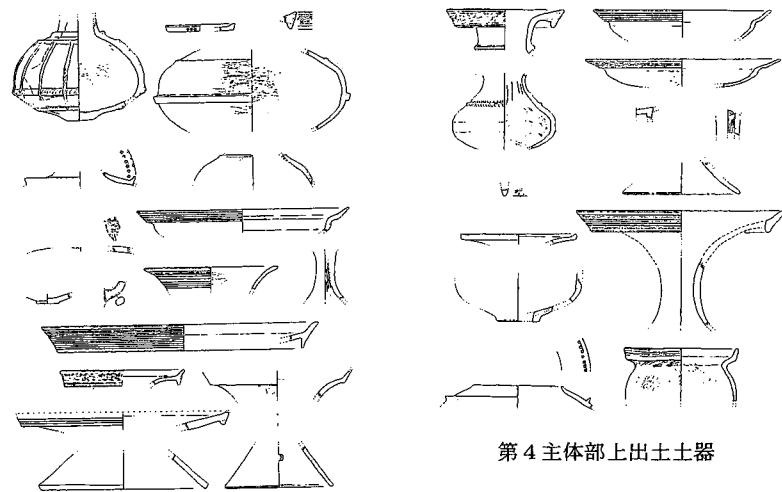
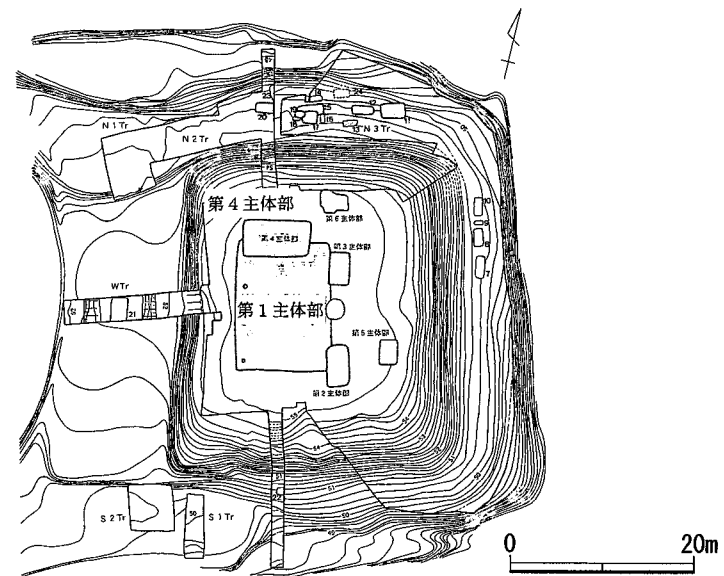
图版48 京都府大山墳墓群(2) 周边埋葬



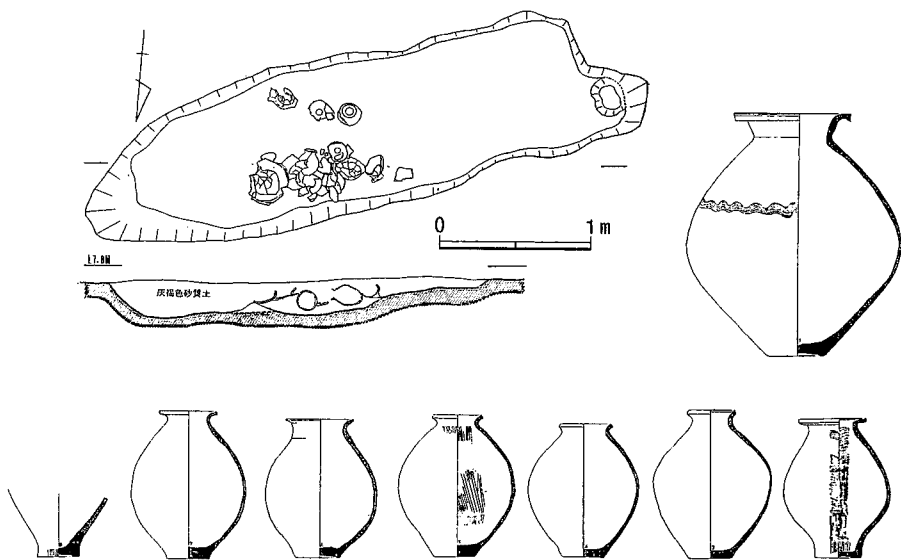


凡例 2-4=2号墓第4主体部 A1=主体部上出土 D2=墓壙内破碎土器配置

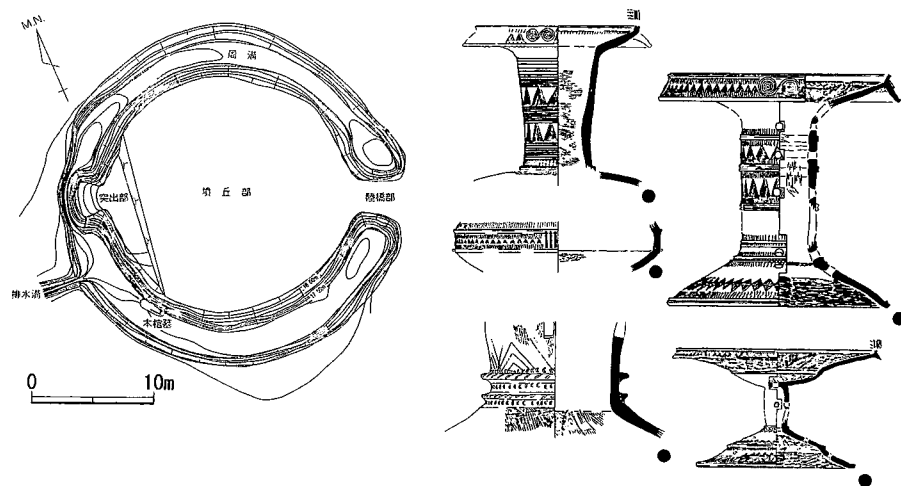
图版49 京都府大風呂南墳墓群



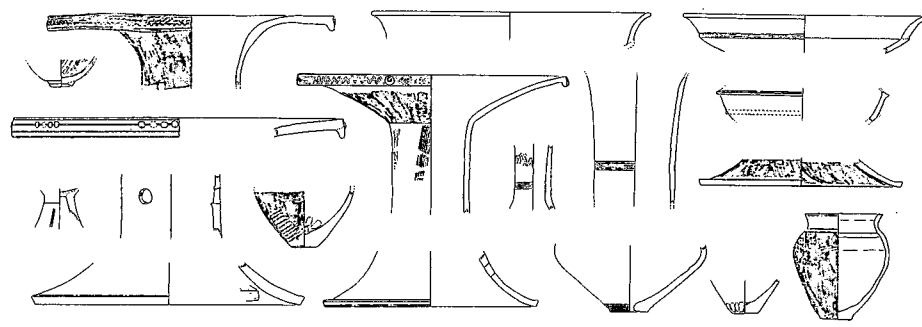
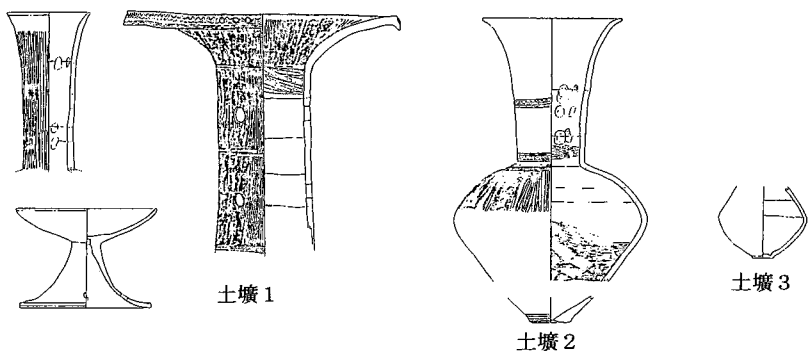
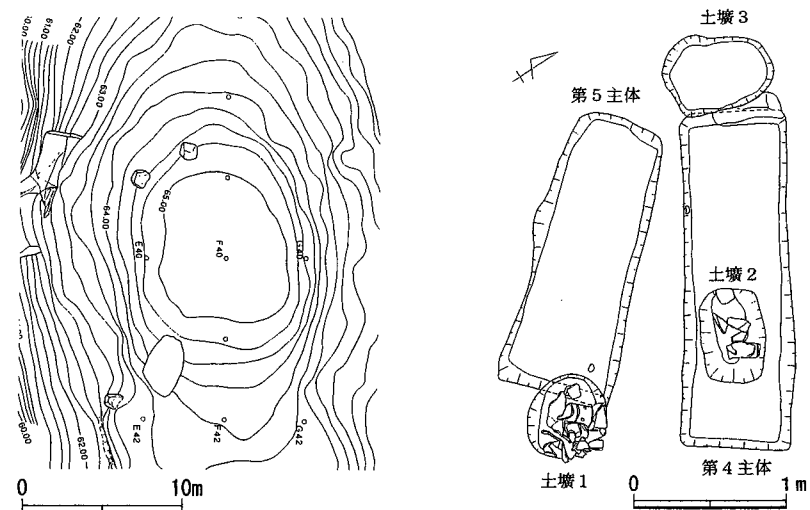
图版50 京都府赤坂今井墳丘墓



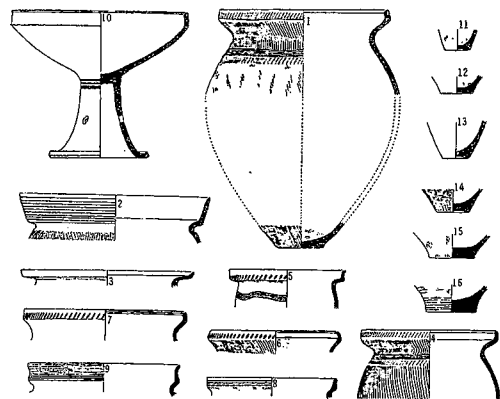
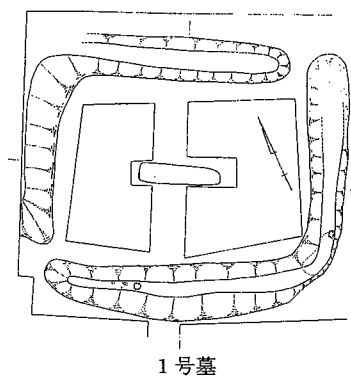
図版 5 1 兵庫県川島遺跡南五反田地区土坑 5



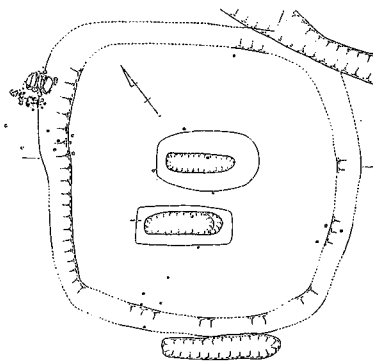
図版 5 2 兵庫県有年原・田中 1 号墓



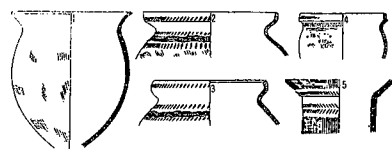
図版 5 3 兵庫県半田山 1 号墓



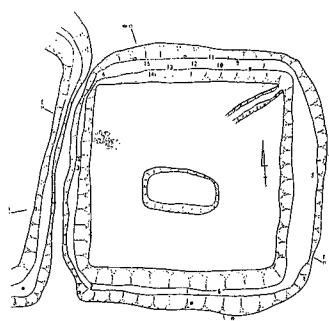
1号墓周溝出土土器



4号墓



4号墓主体部出土土器



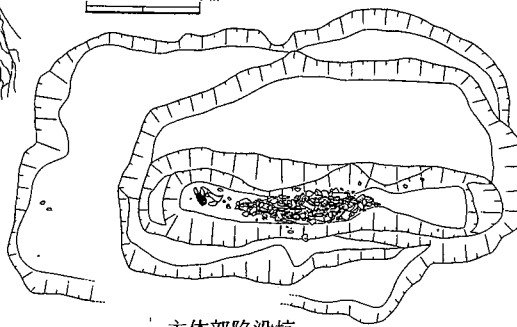
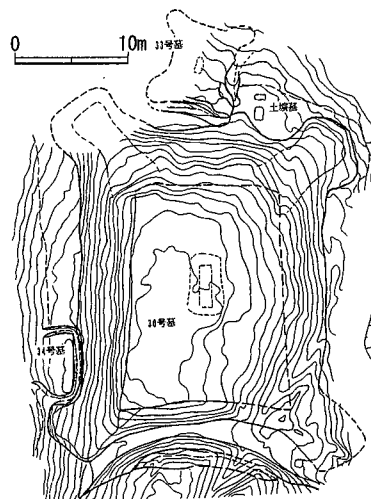
3号墓



3号墓周溝出土土器

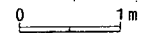
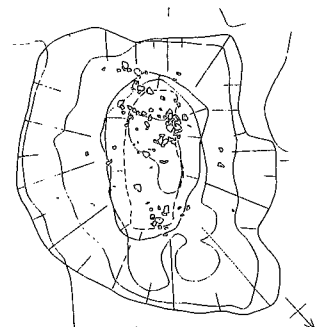
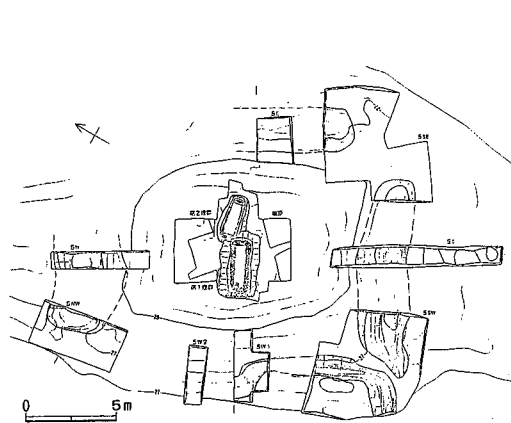


図版 5 4 福井県王山墳墓群

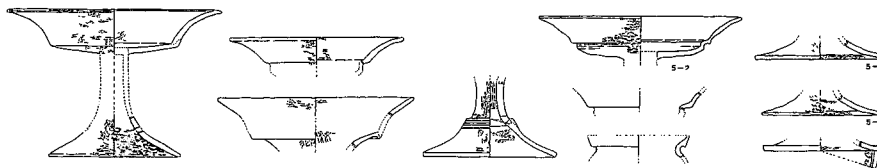


主体部陥没坑

図版 5 5 福井県小羽山30号墓

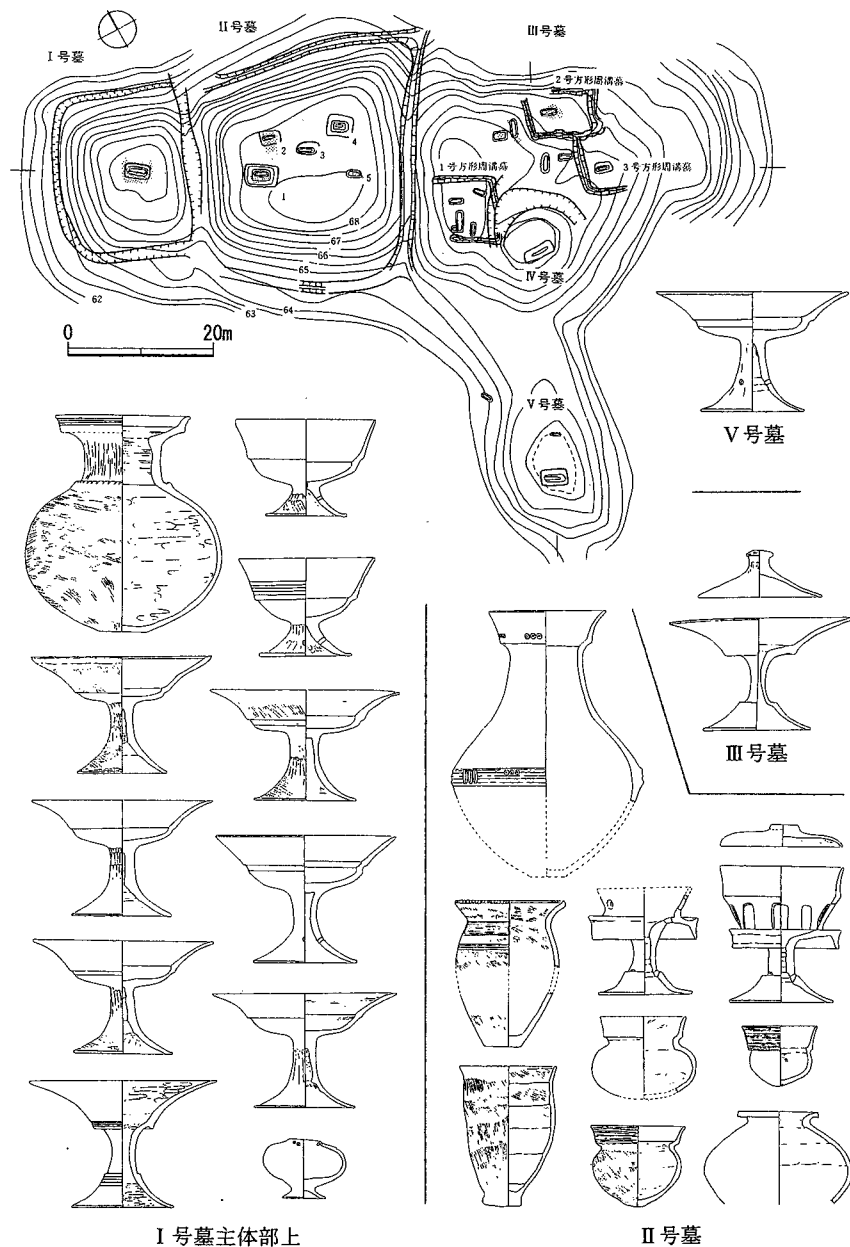


第1主体部の陥没坑と土器出土状況

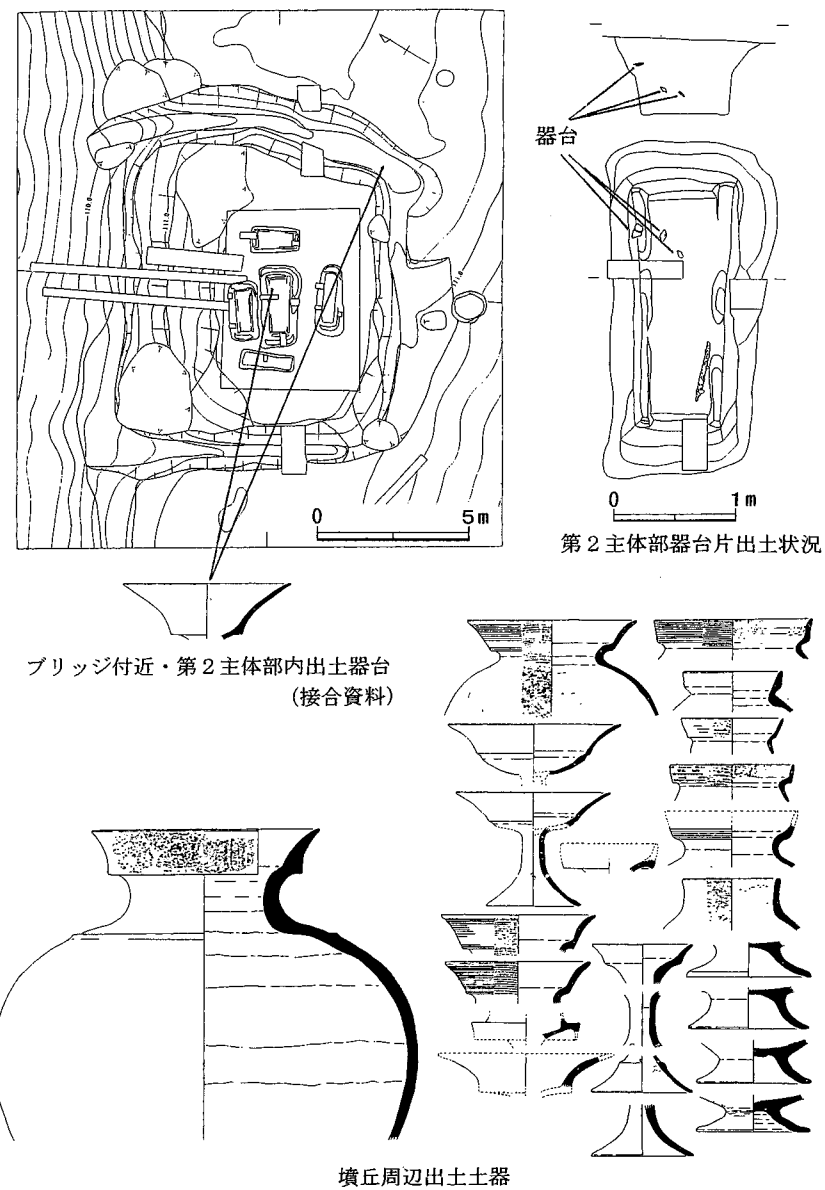


第1主体部出土土器

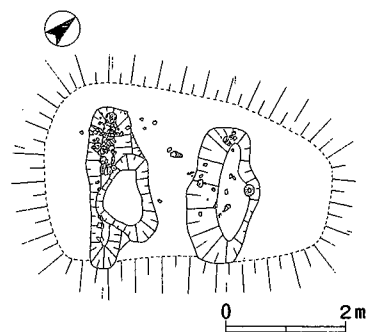
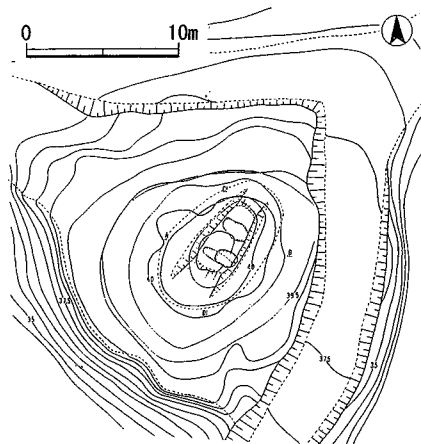
図版 5 6 福井県片山鳥越5号墓



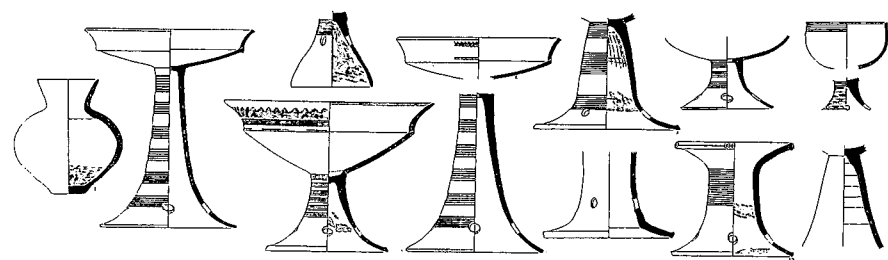
図版57 福井県原目山墳墓群



図版58 福井県袖高林1号墓

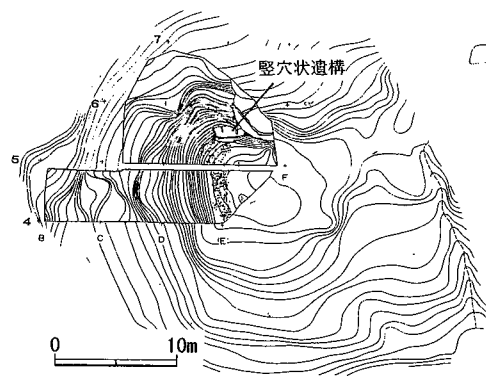


墳頂主体部の土器出土状況

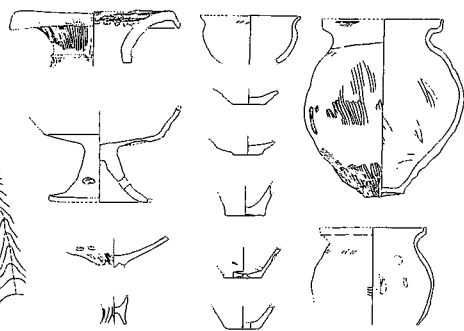


主体部上出土土器

図版 5 9 三重県高松墳丘墓

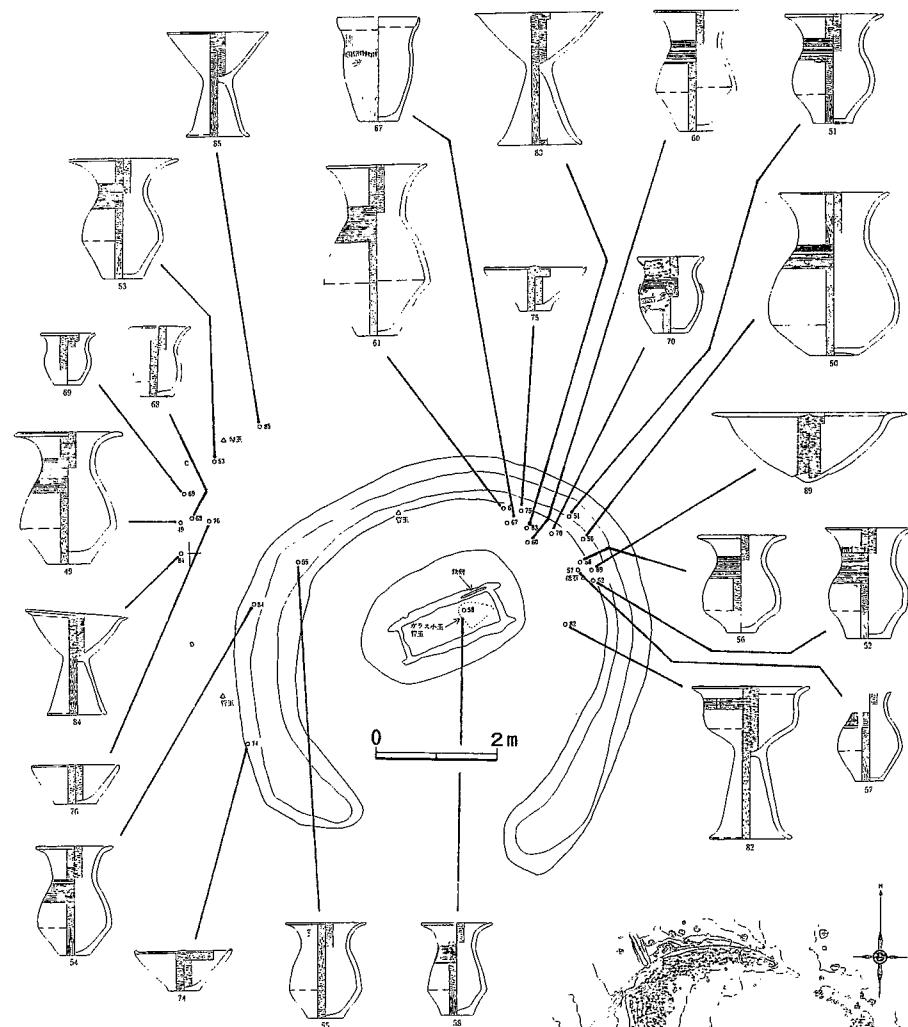


竪穴状遺構

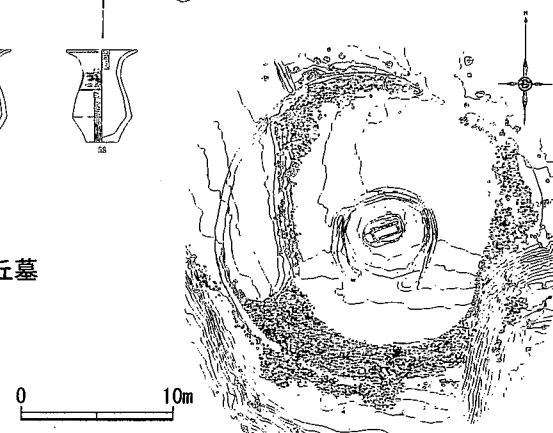


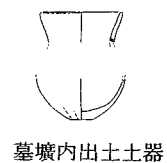
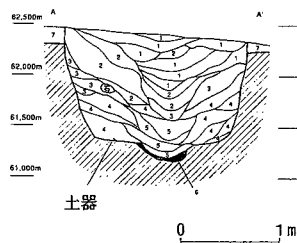
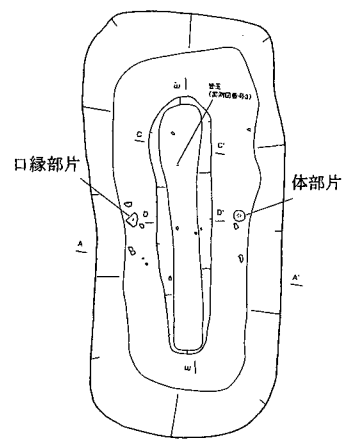
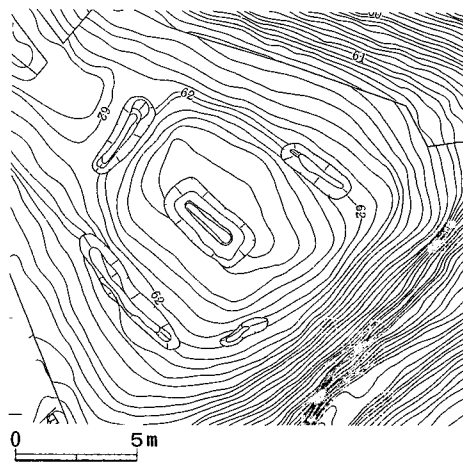
竪穴状遺構出土土器

図版 6 0 岐阜県加佐美山墳丘墓

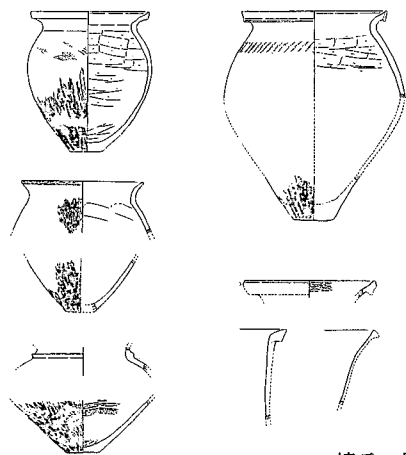


図版 6 1 長野県根塚墳丘墓



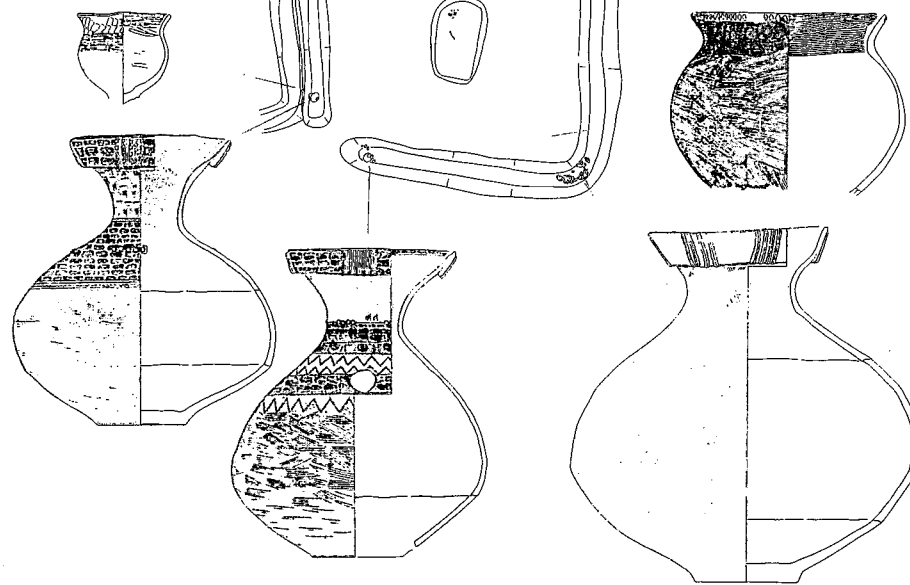
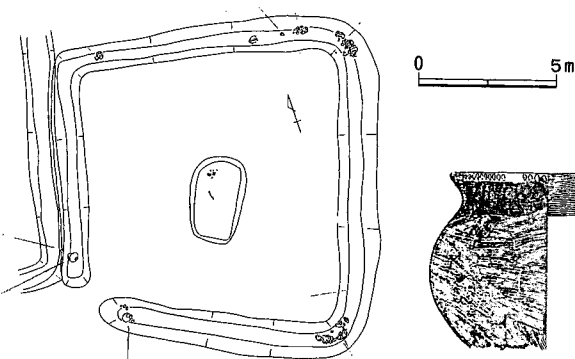
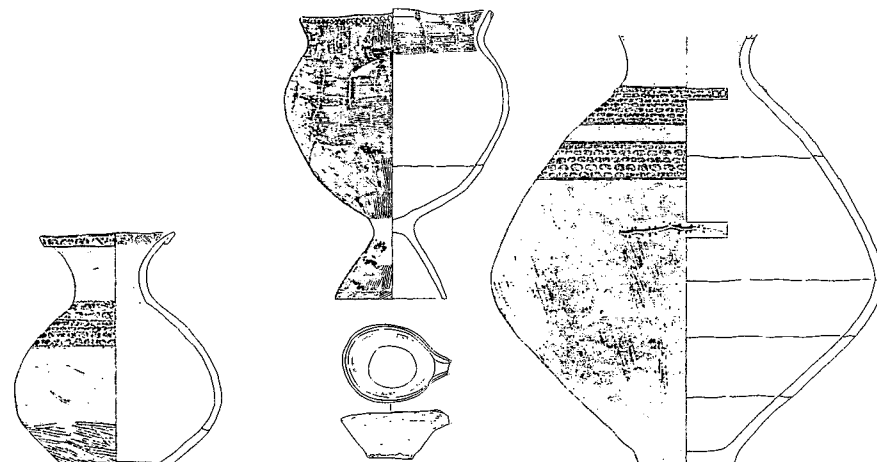


墓壇内出土土器

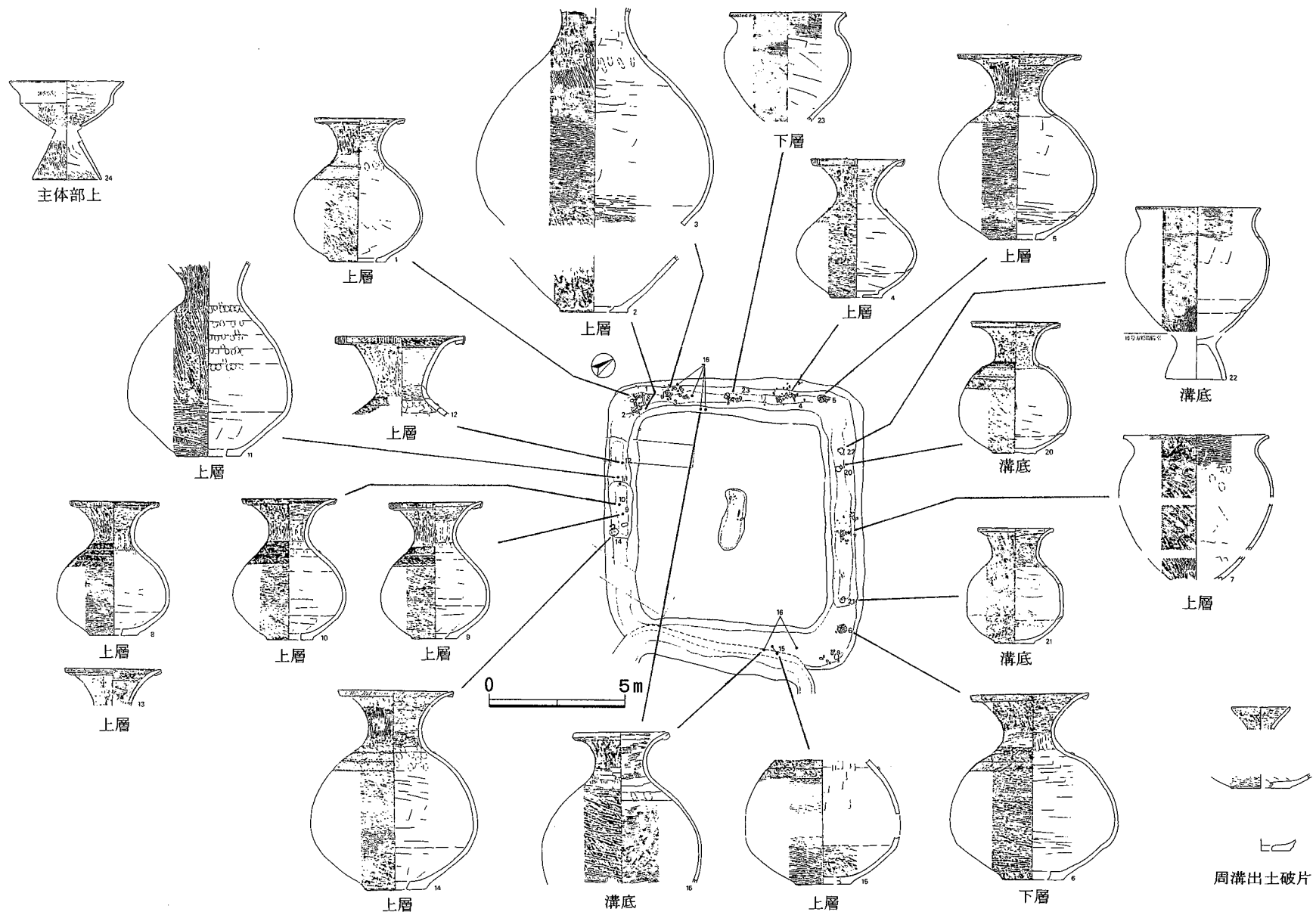


墳丘・周溝出土土器

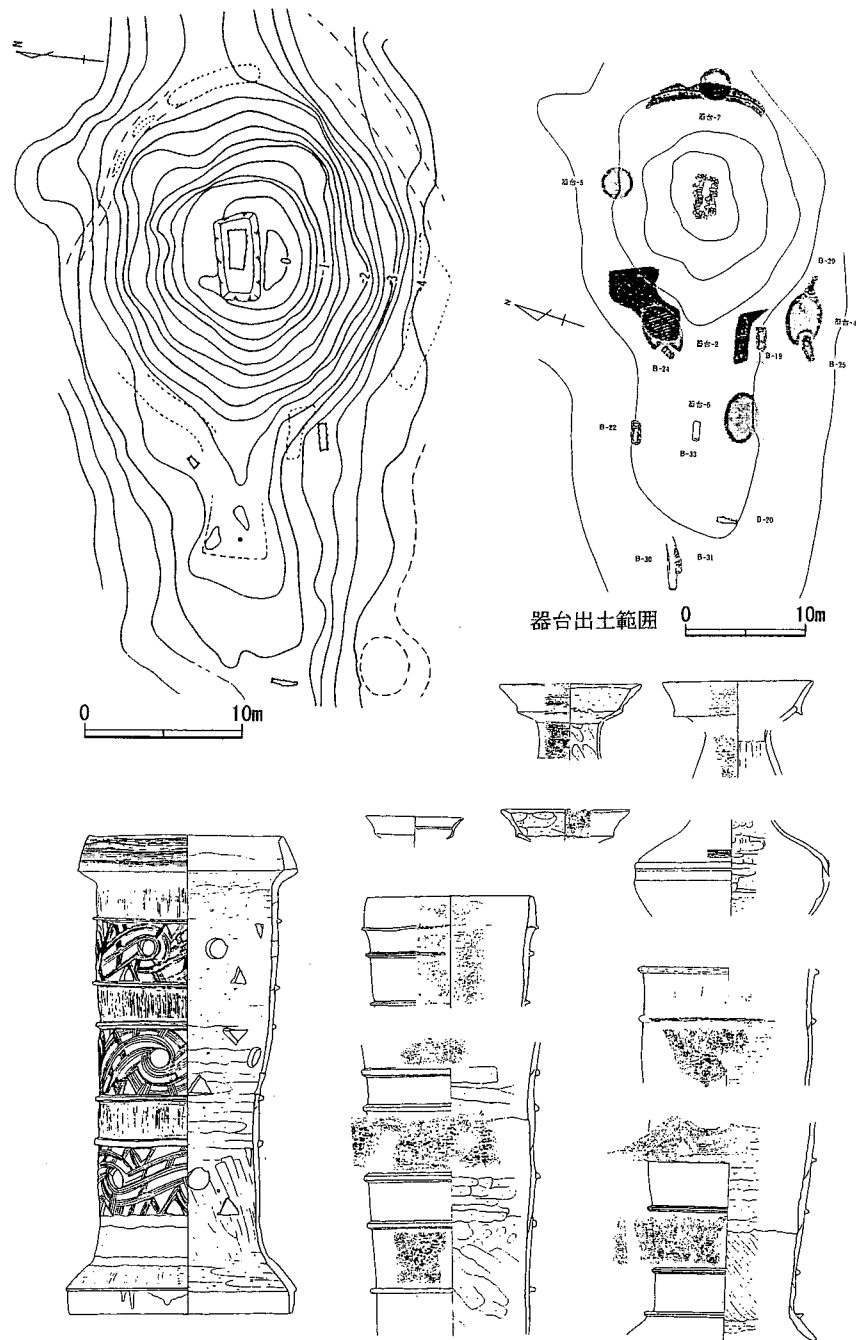
図版 6 2 新潟県屋鋪塚方形台状墓



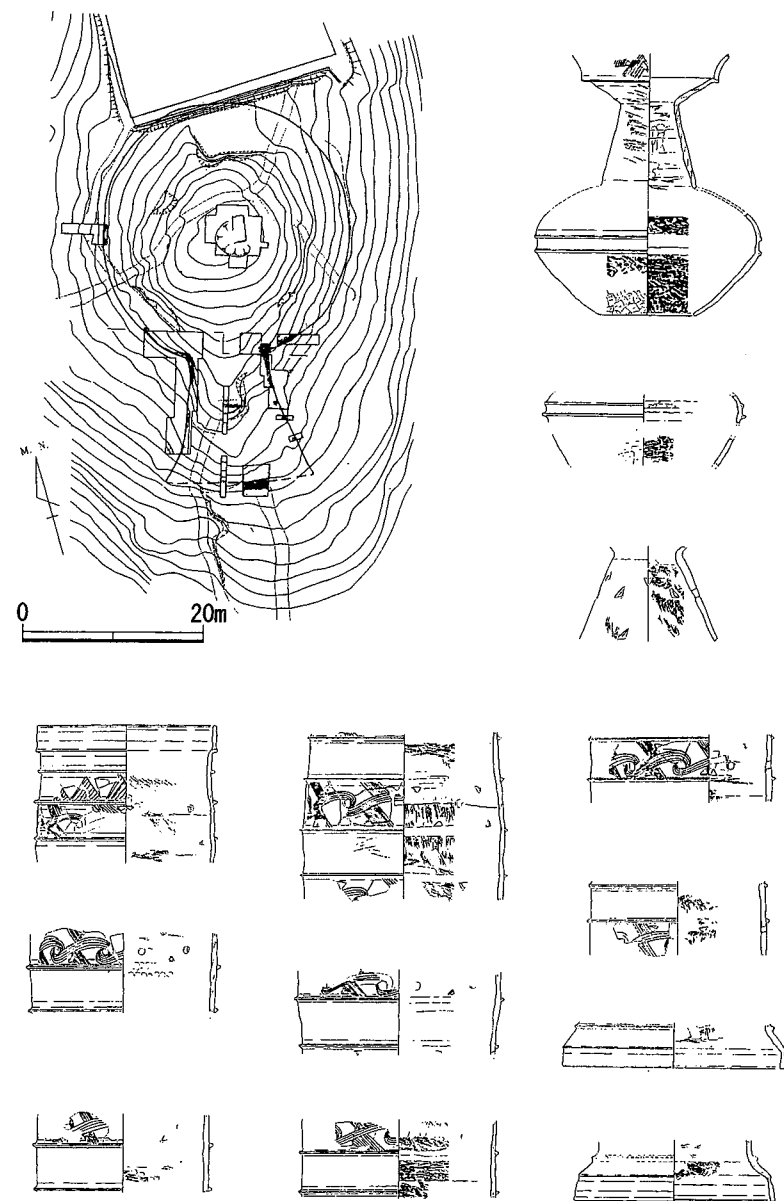
図版 6 3 埼玉県井沼方 9 号方形周溝墓



図版 6 4 神奈川県王子ノ台 5 号 方形周溝墓

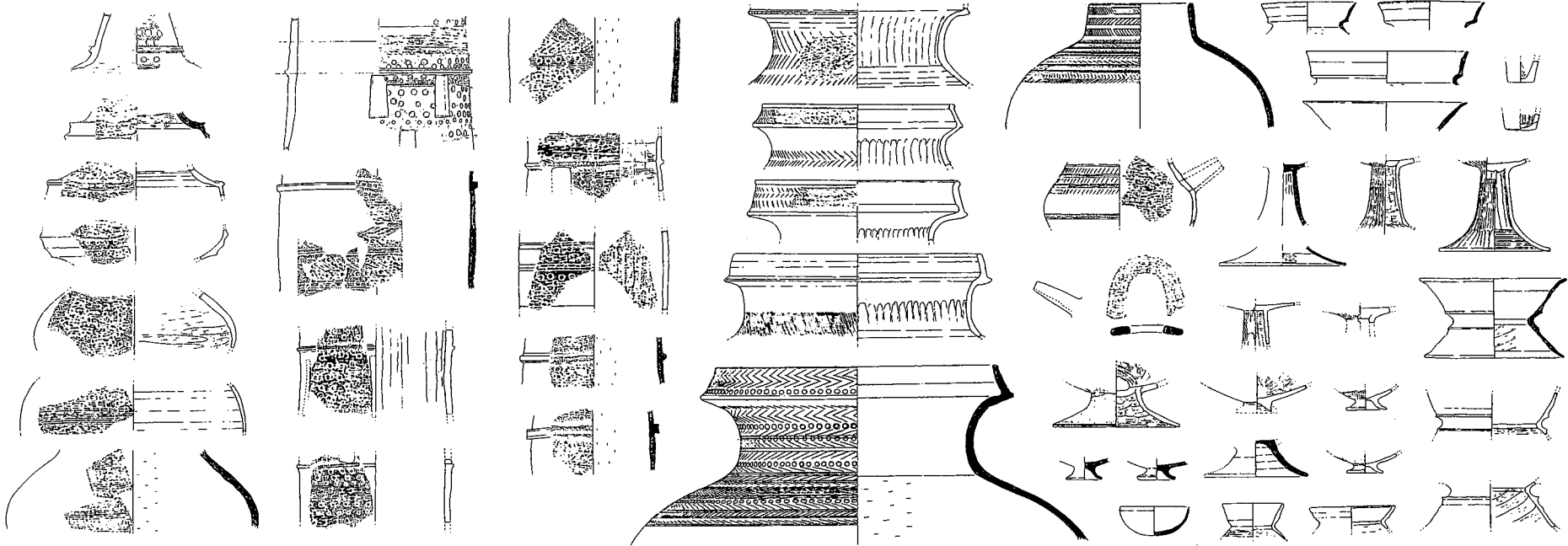
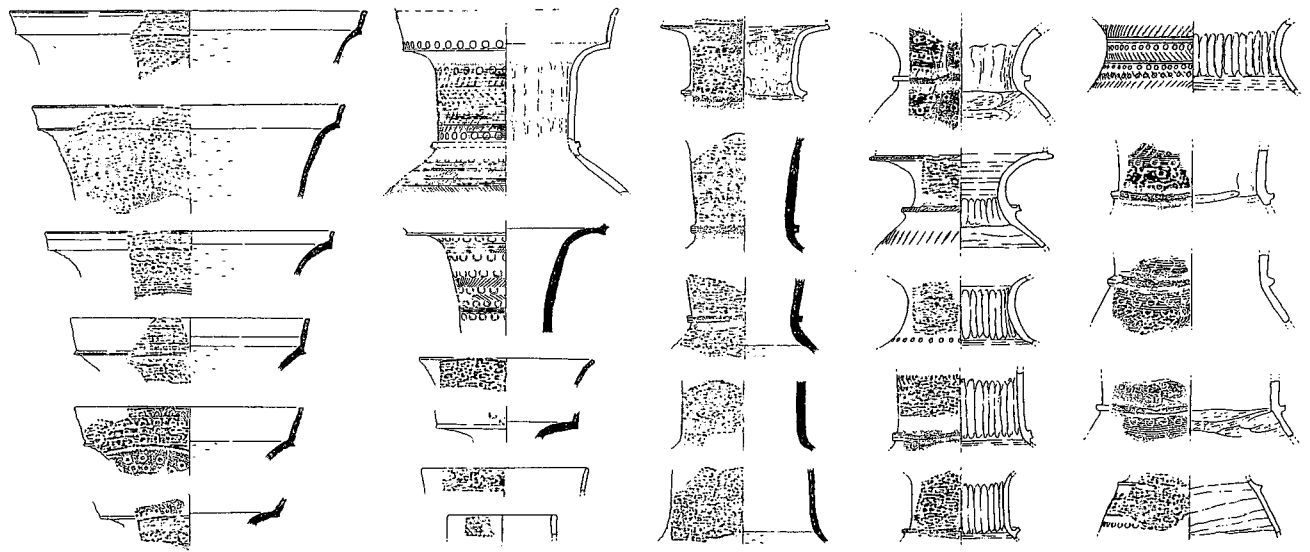
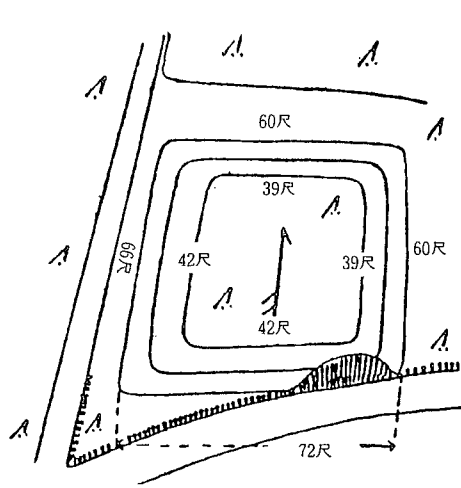


図版 6 5 岡山県宮山墳丘墓



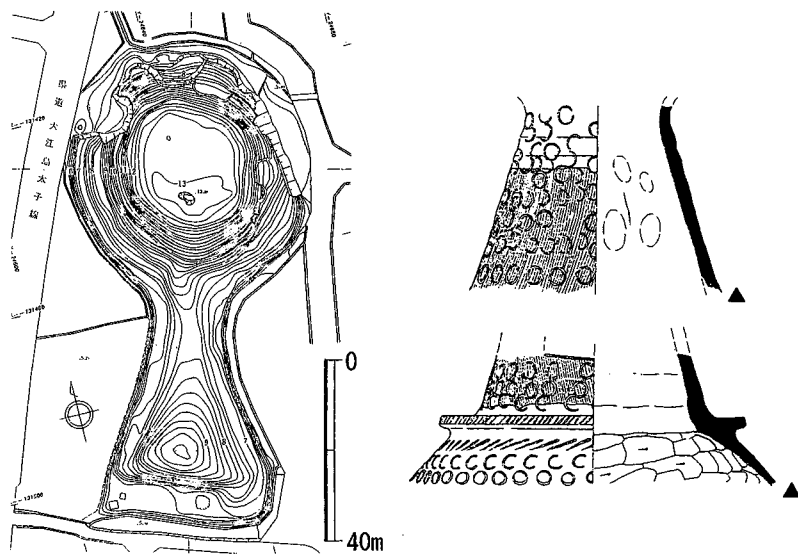
図版 6 6 岡山県矢藤治山墳丘墓



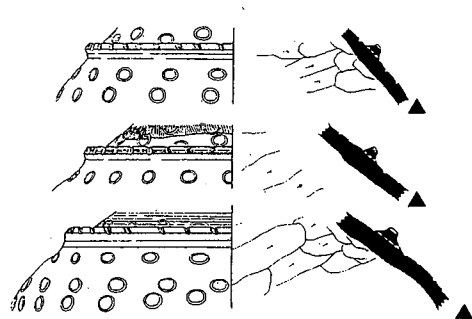


墳頂出土特殊土器類・土器

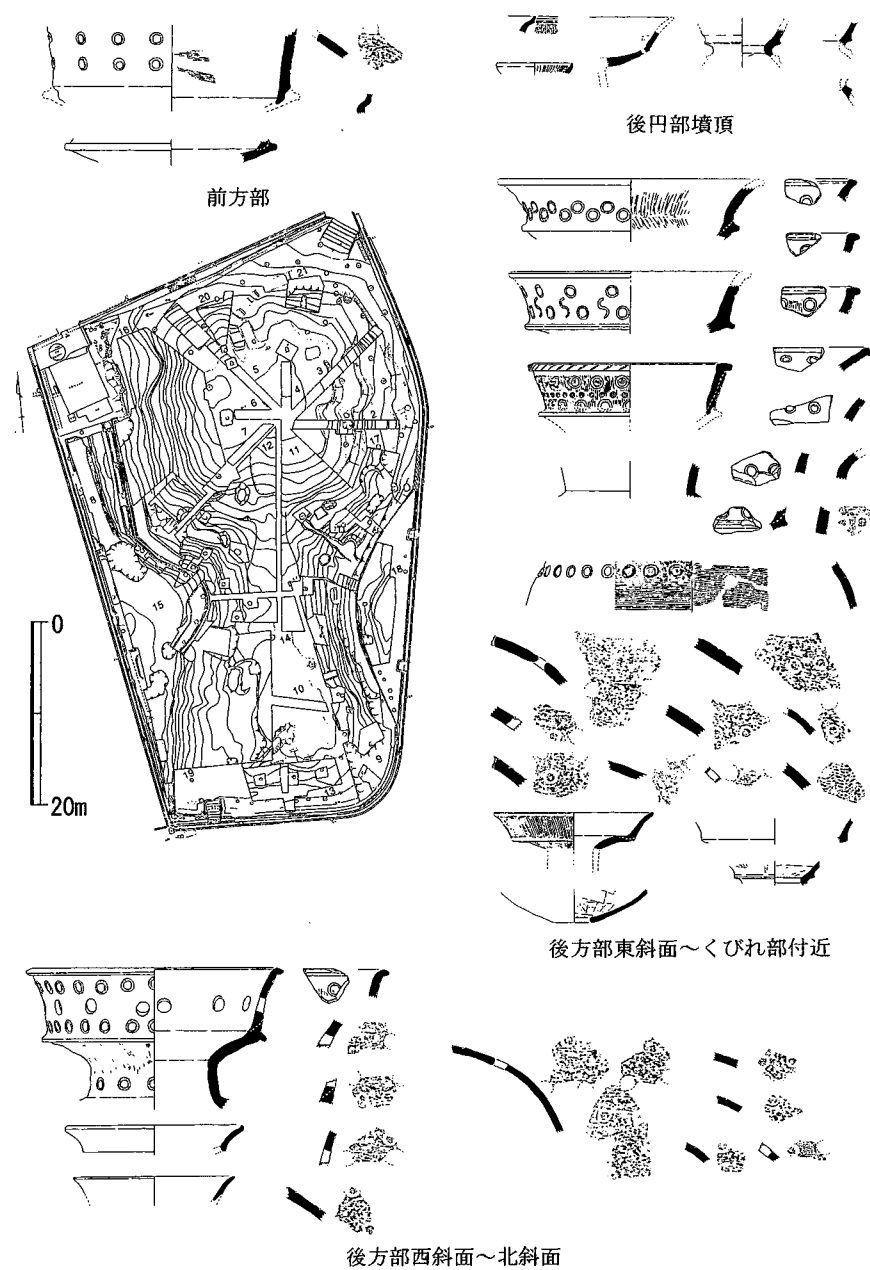
図版 67 鳥取県徳楽墳丘墓



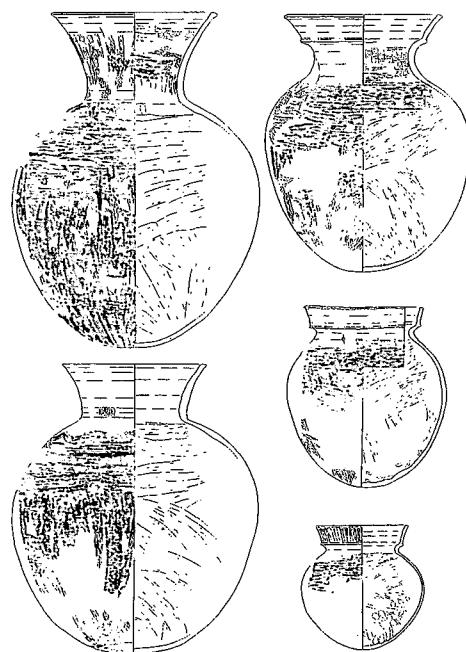
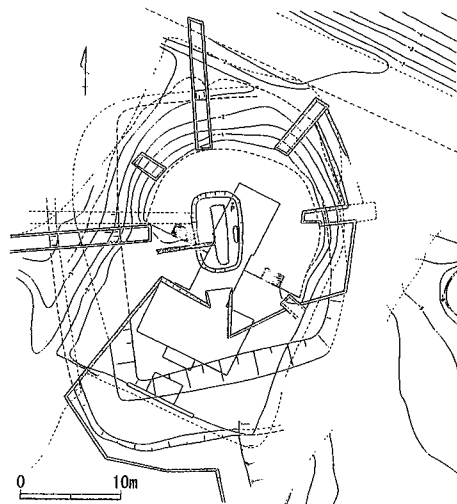
図版 6 8 兵庫県丁瓢塚古墳



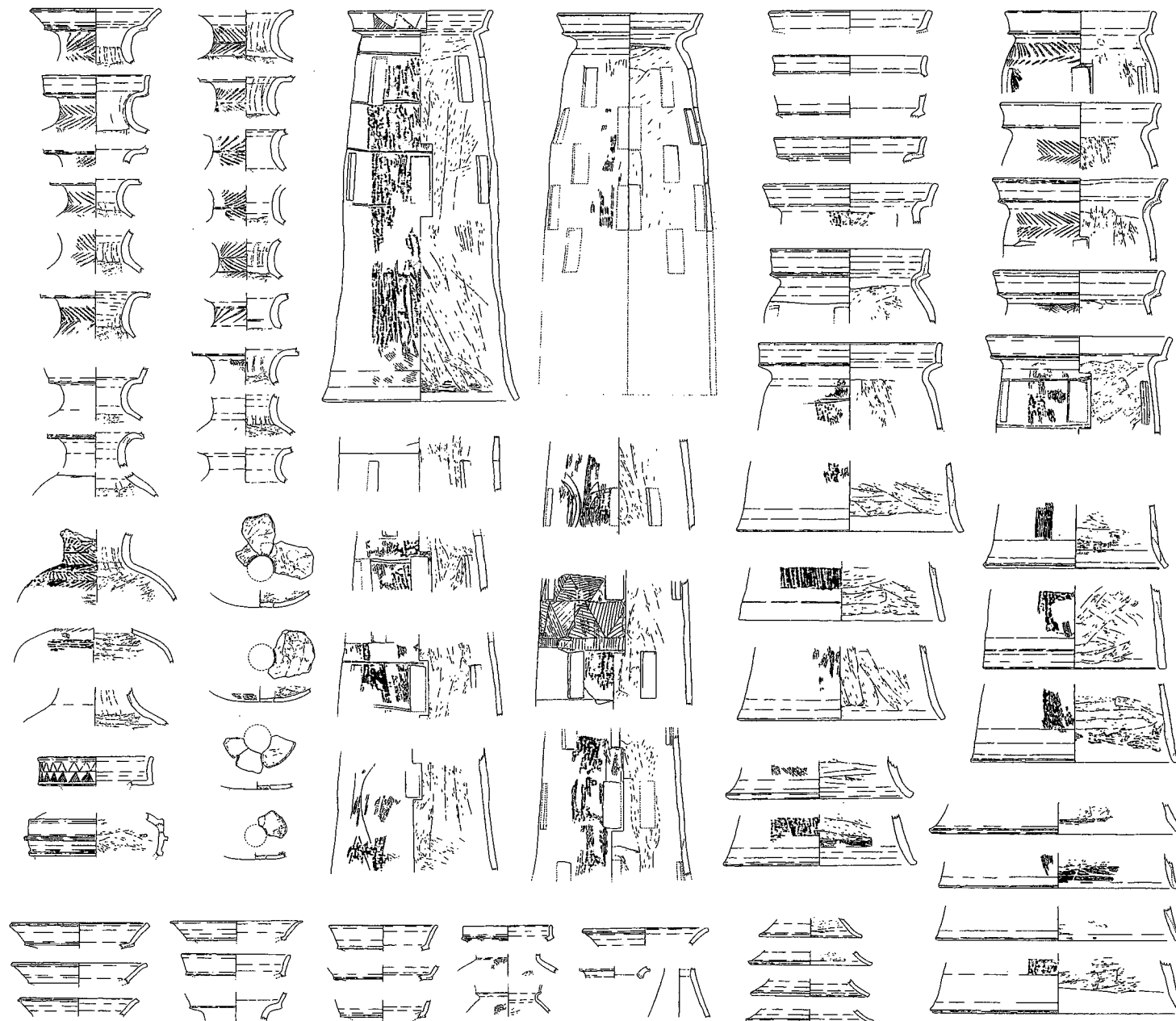
図版 6 9 兵庫県伊和中山4号墳 表面採集資料



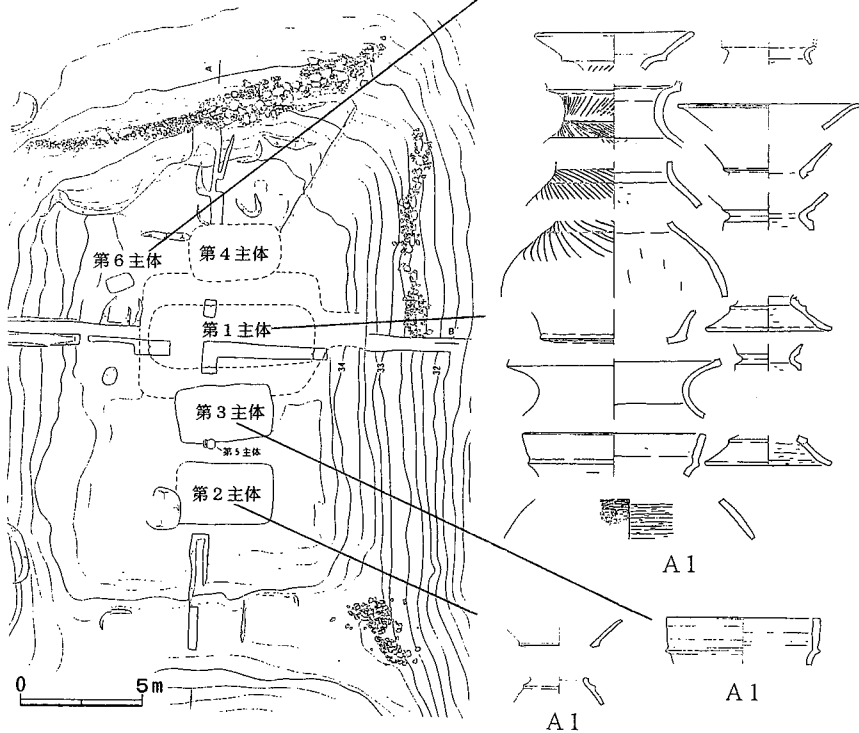
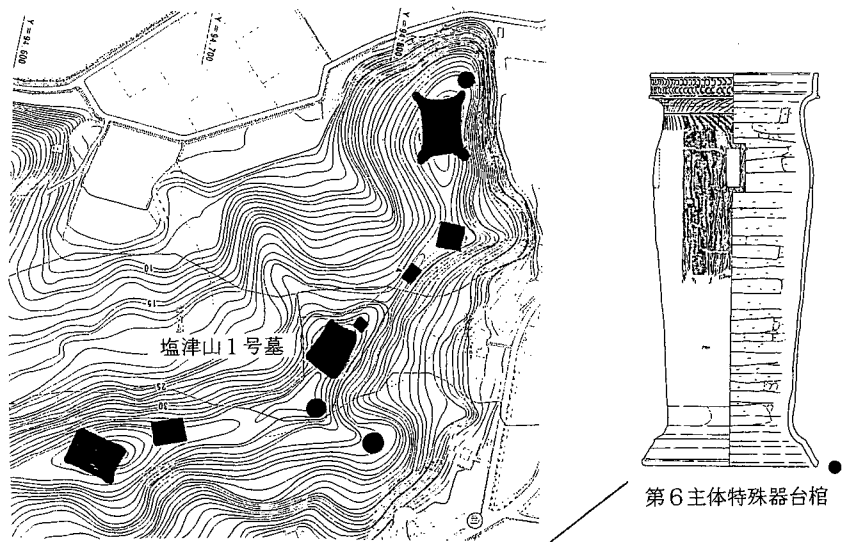
図版 7 0 兵庫県処女塚古墳



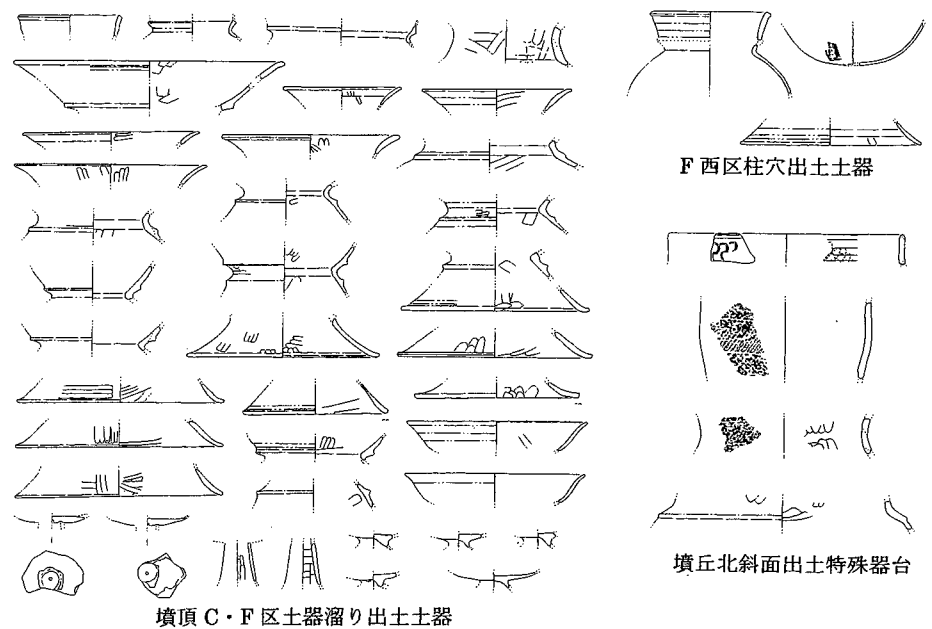
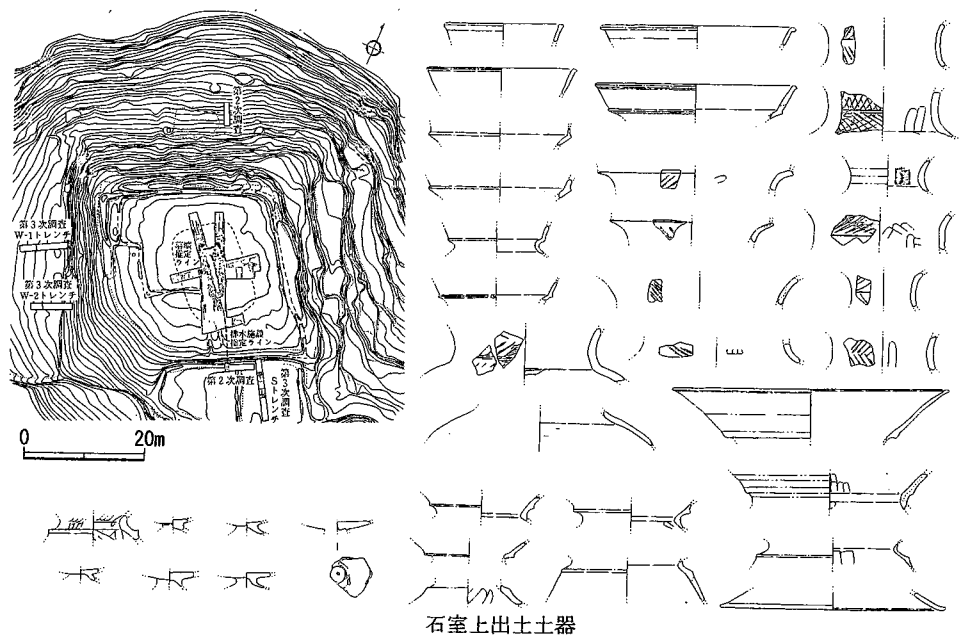
石室裏込下埋納坑出土土器



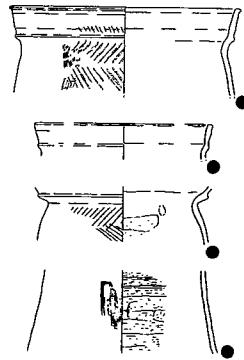
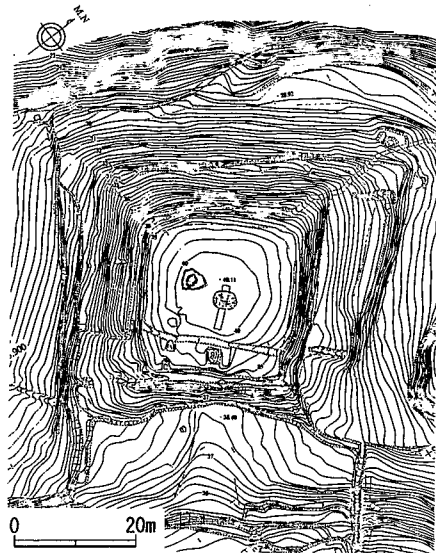
石室上面出土特殊土器類



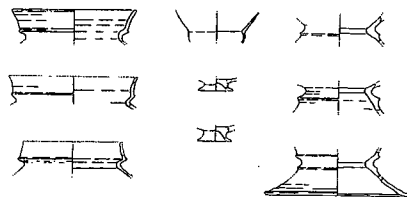
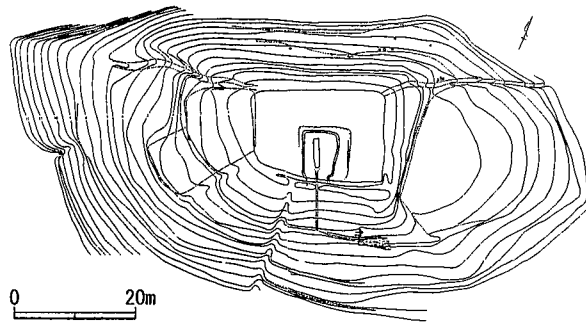
図版72 島根県塩津山1号墓



図版73 島根県大成古墳

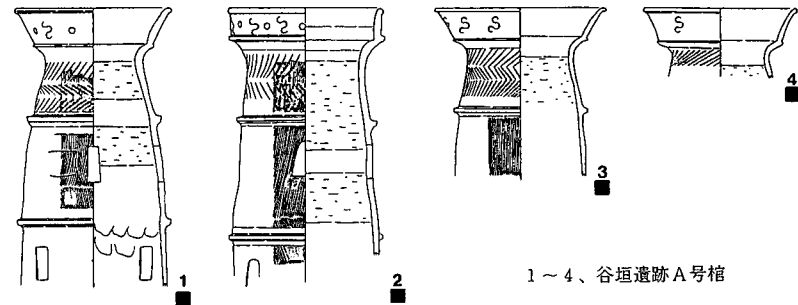
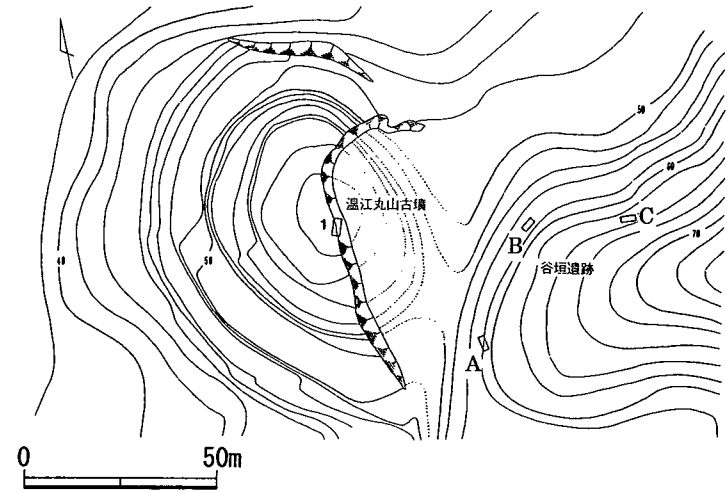


図版 7 4 島根県造山 1 号墳

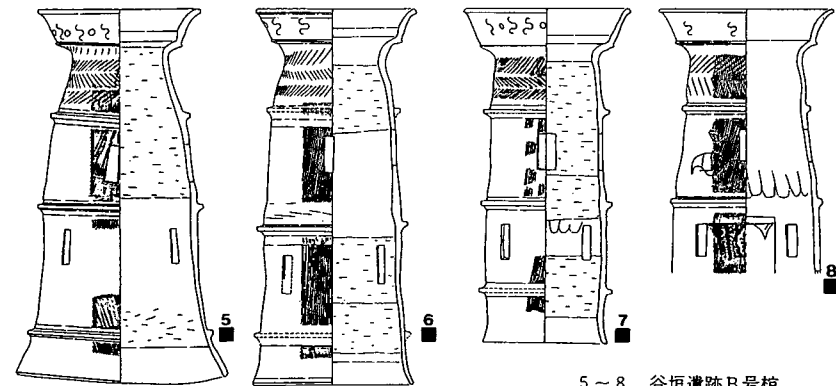


主体部上出土土器

図版 7 5 島根県造山 3 号墳

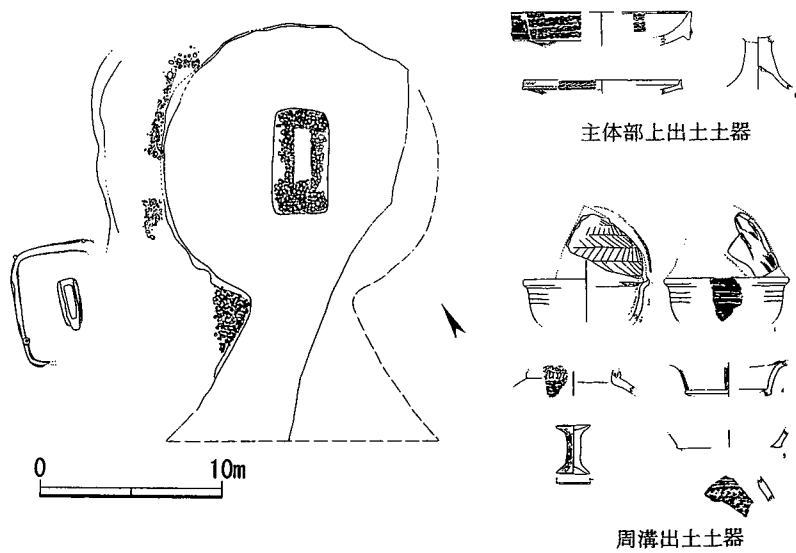


1 ~ 4、谷垣遺跡 A 号棺

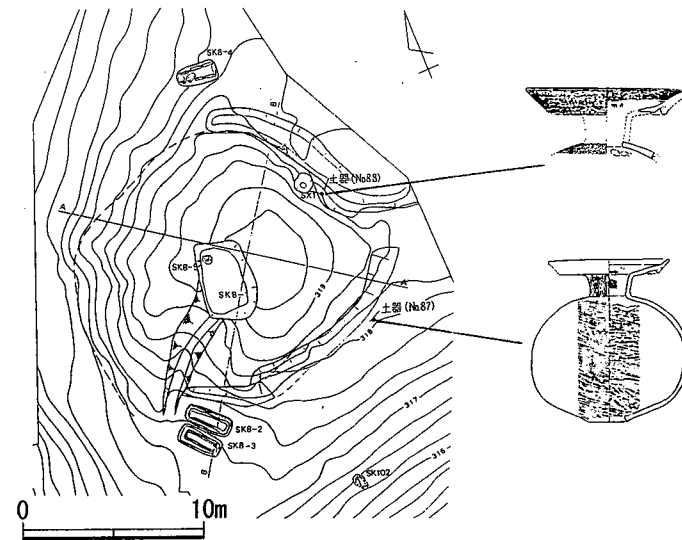


5 ~ 8、谷垣遺跡 B 号棺

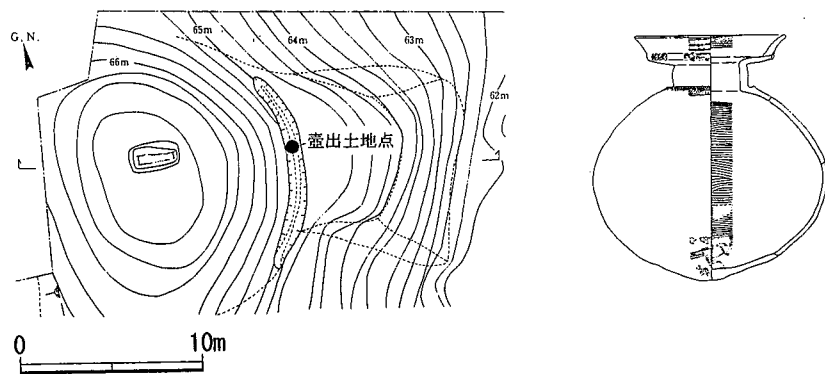
図版 7 6 京都府温江丸山古墳・谷垣遺跡



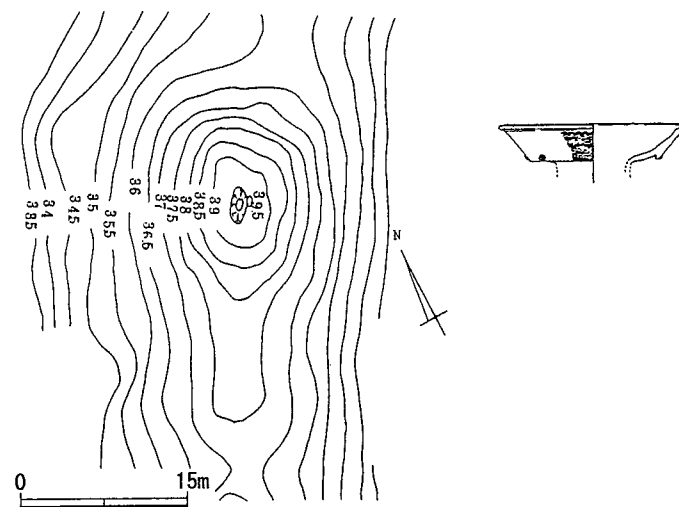
図版 7 7 大分県下原古墳



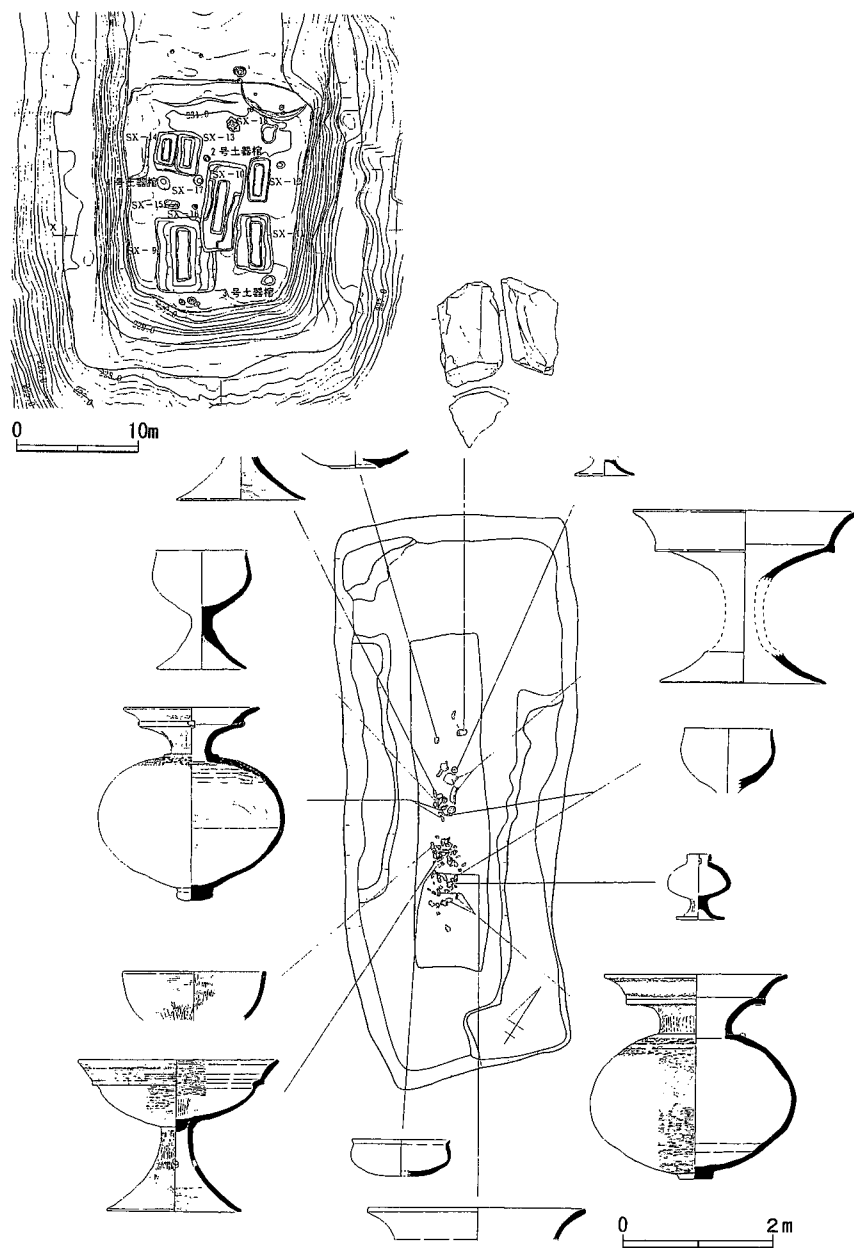
図版 7 9 広島県中出勝負峠8号古墳



図版 7 8 佐賀県西一本杉遺跡ST008

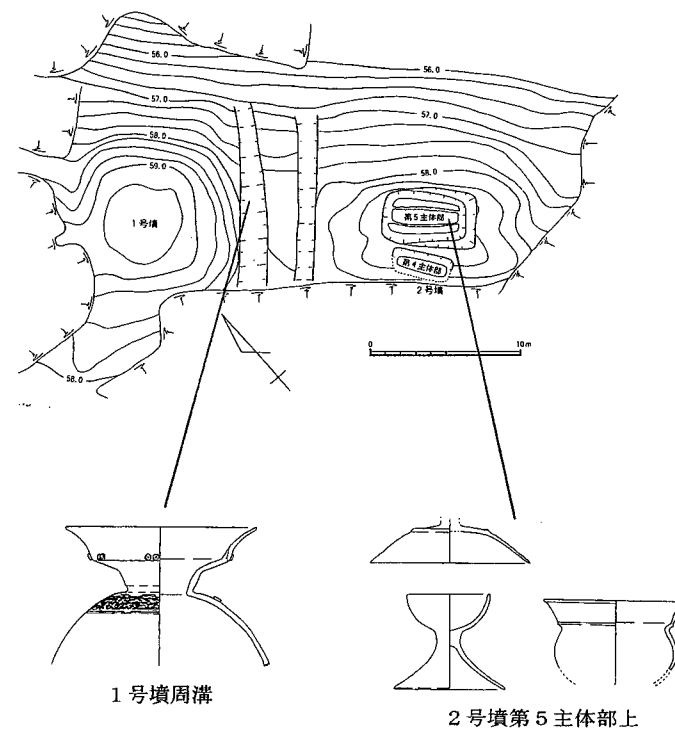
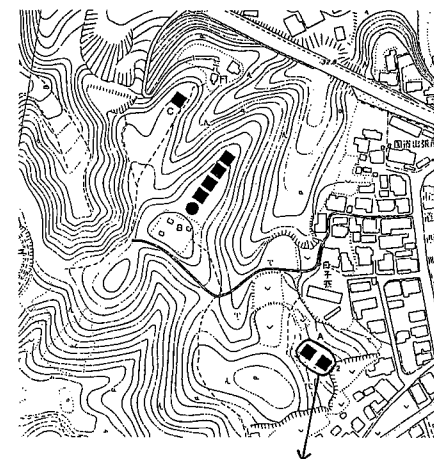


図版 8 0 愛媛県雉之尾1号墳

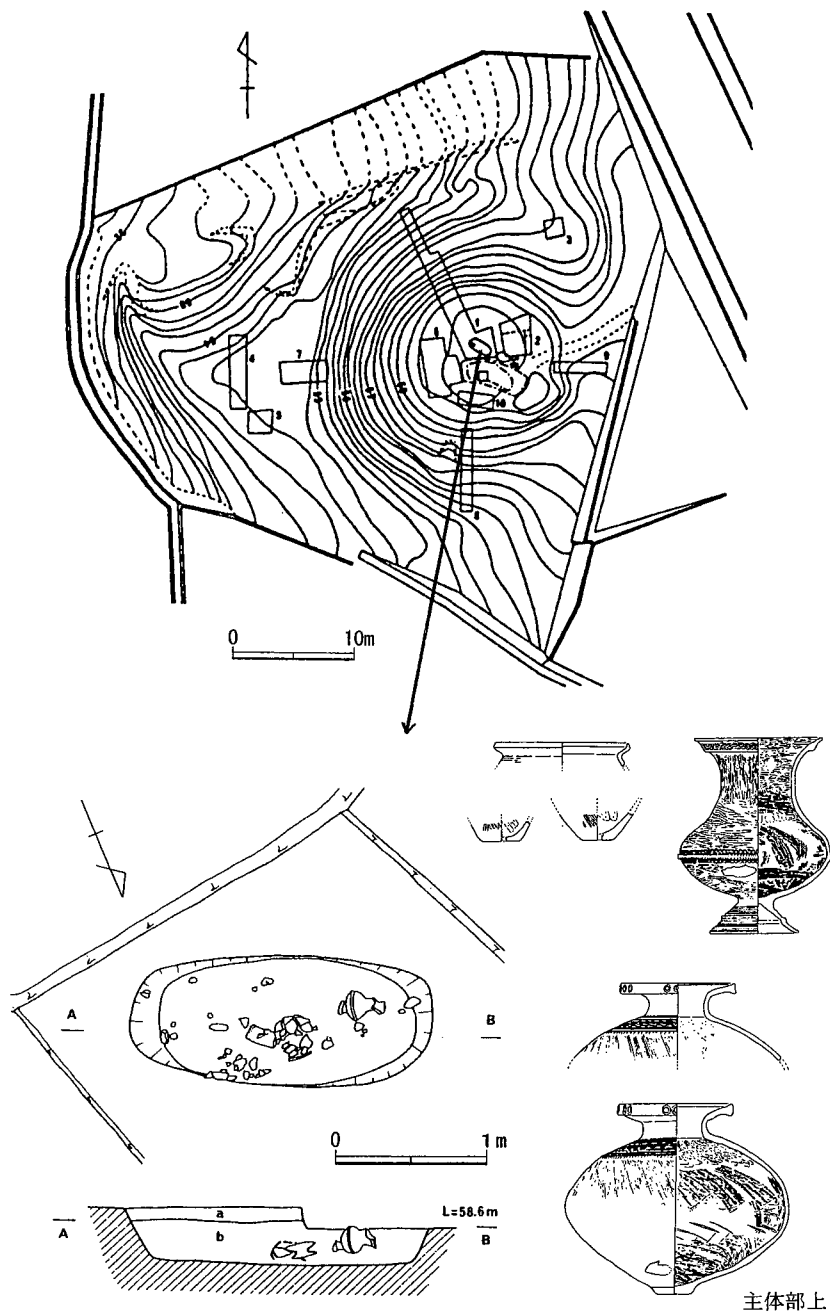


SX-10 (中心主体) 上土器出土状況

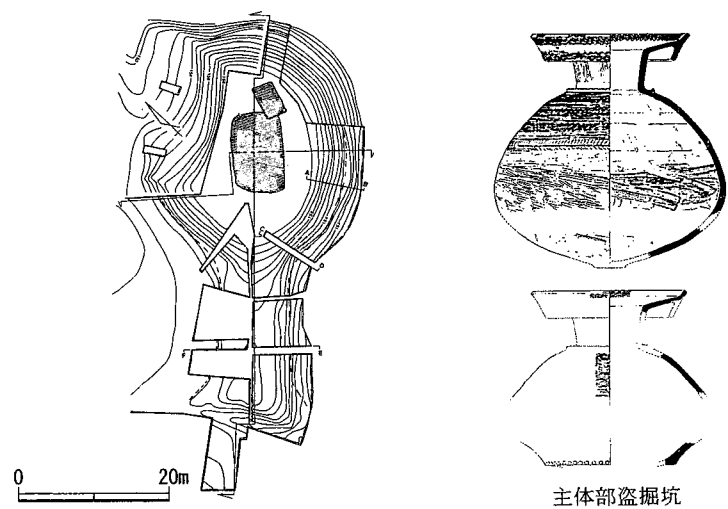
図版 8 1 兵庫県内場山墳丘墓



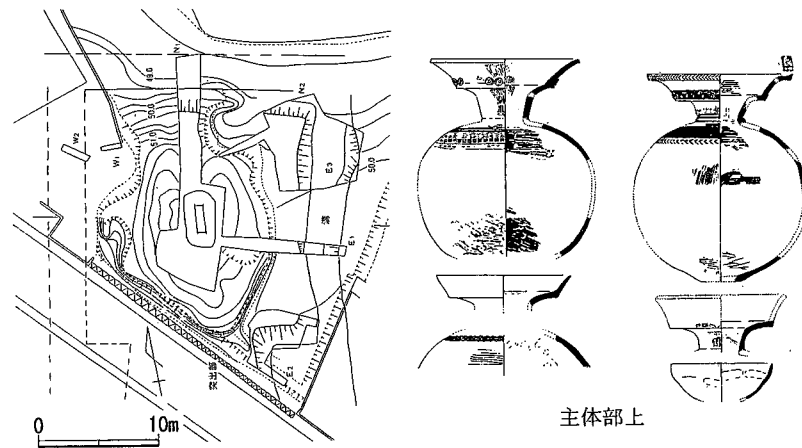
図版 8 2 京都府寺ノ段墳墓群



図版 8 3 京都府砂原山墳丘墓

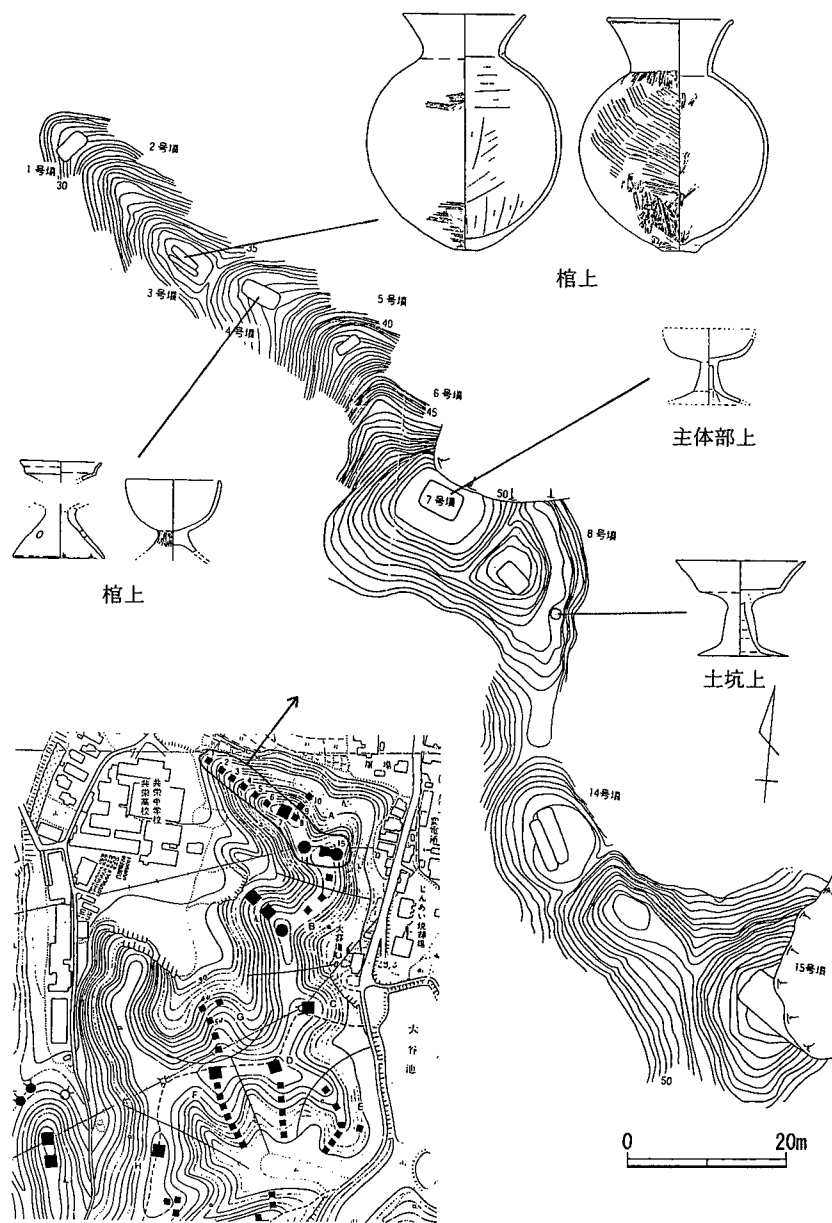


図版 8 4 京都府黒田古墳

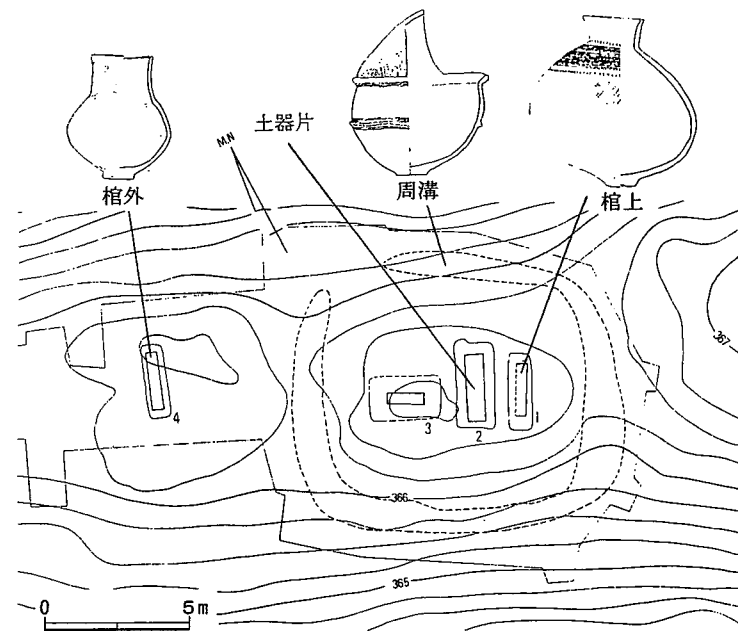


図版 8 5 京都府芝ヶ原古墳

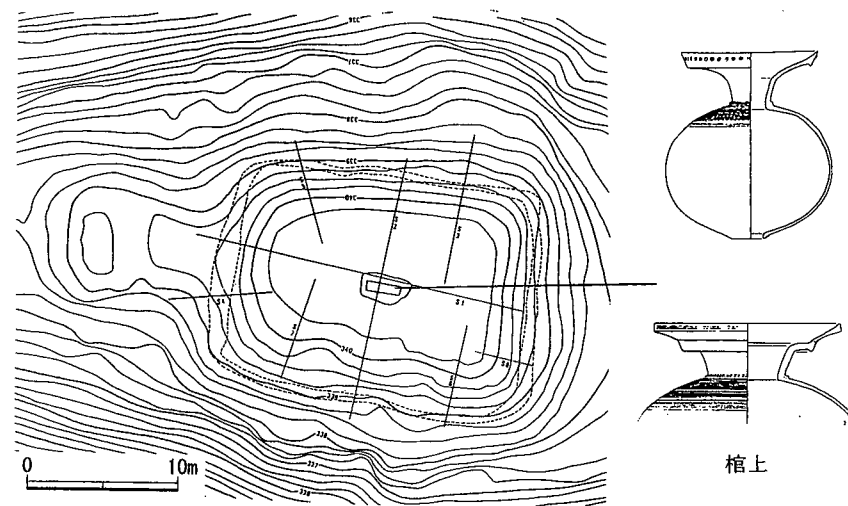




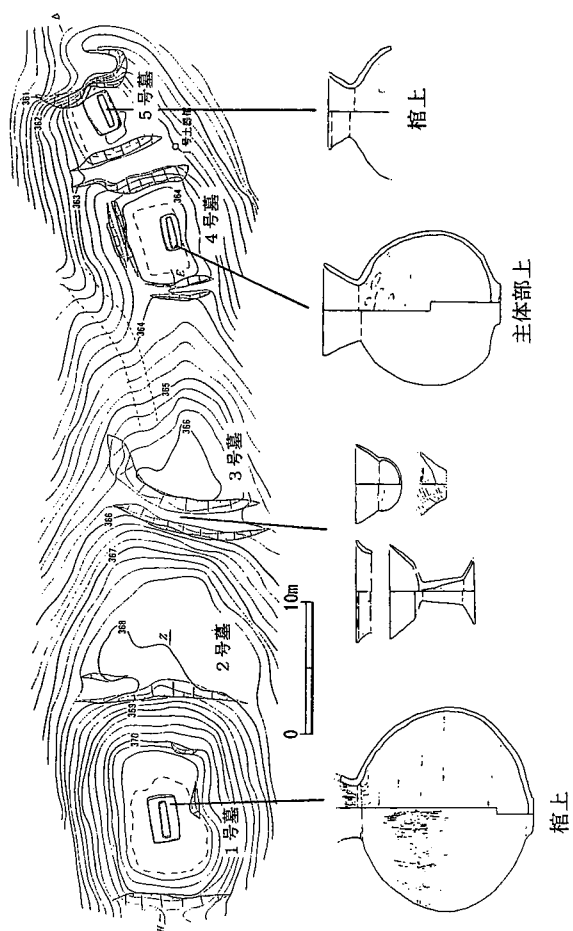
図版 8 6 京都府広峯古墳群



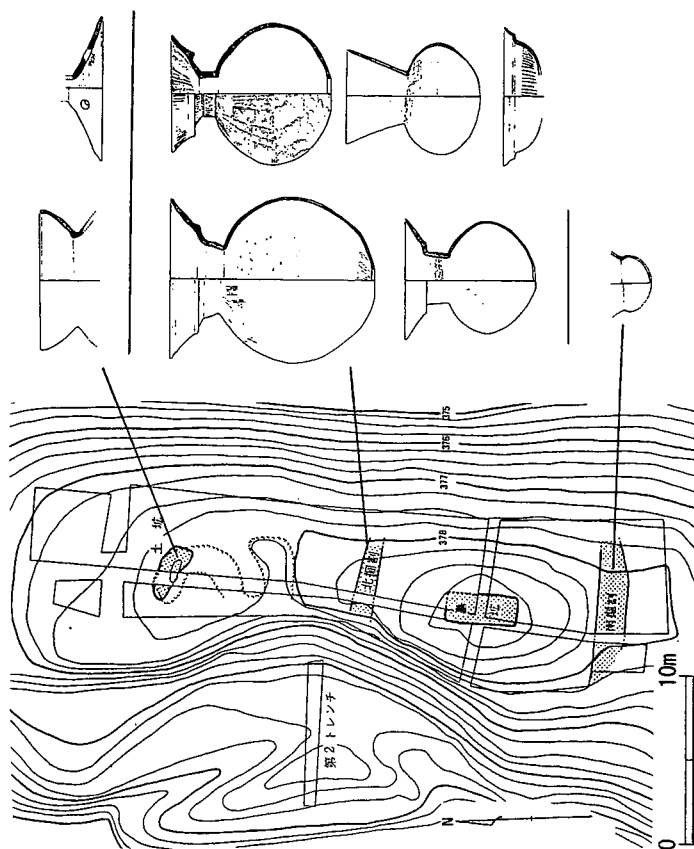
図版 8 7 奈良県キトラ墳墓群



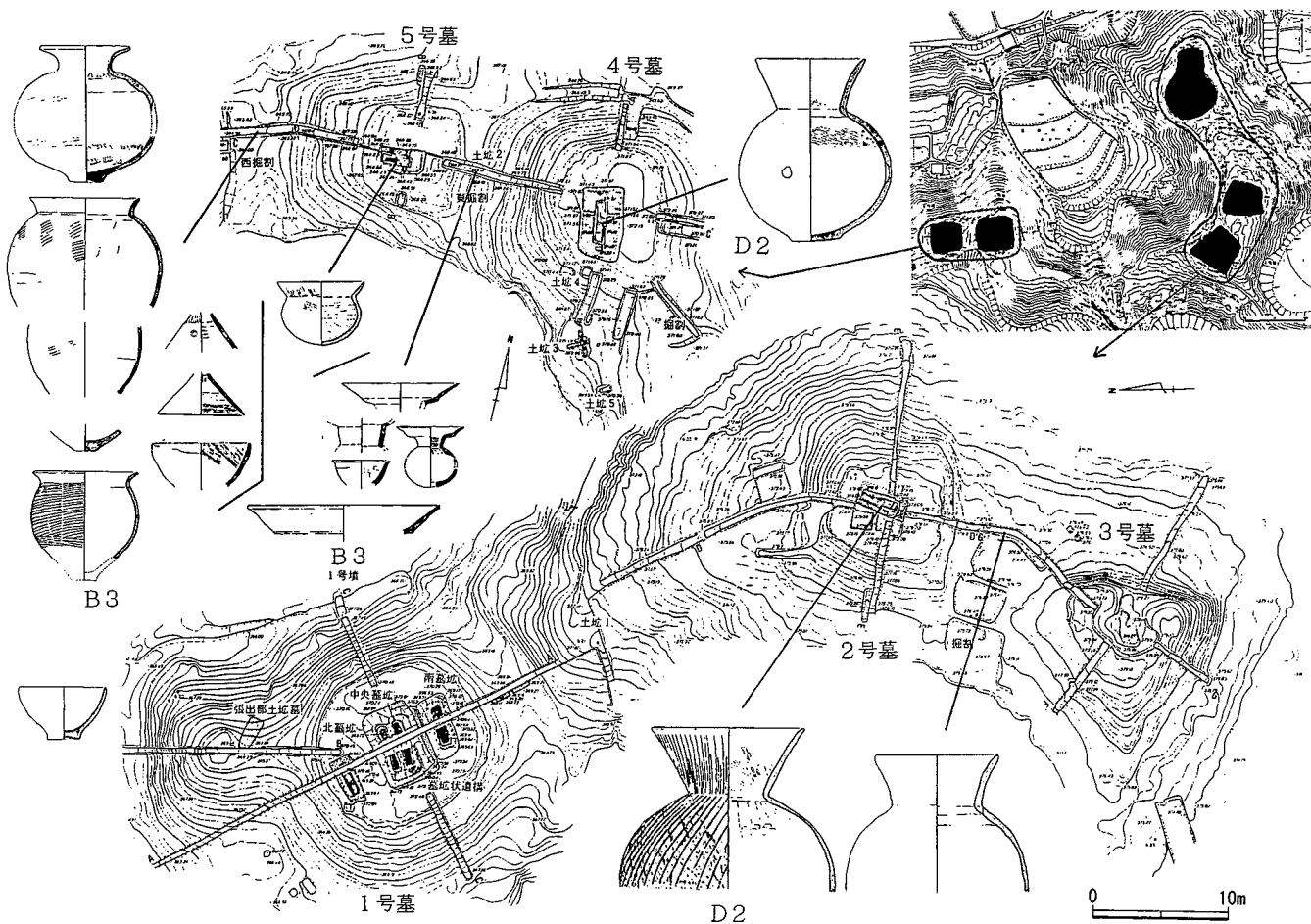
図版 8 8 奈良県大王山9号地点墳丘墓



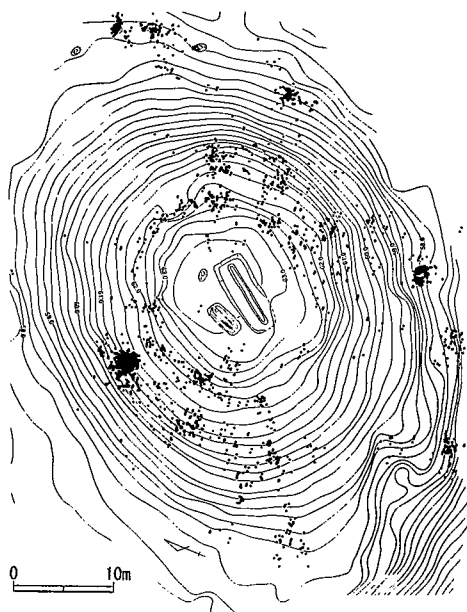
図版90 奈良県野山墳墓群丸尾支群



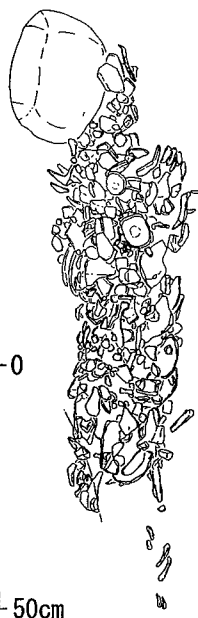
図版91 奈良県胎谷墳墓群



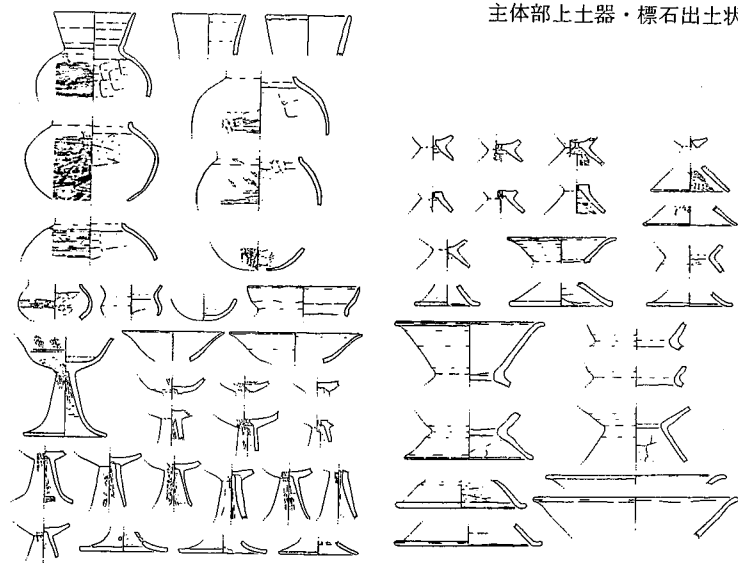
図版89 奈良県見田・大沢古墳群



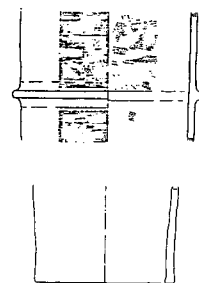
墳丘測量図と埴輪片の分布



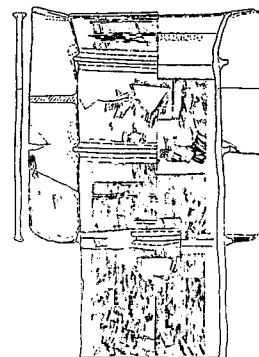
主体部上土器・標石出土状況



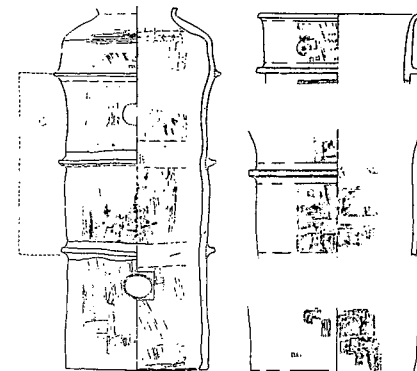
主体部上出土土器



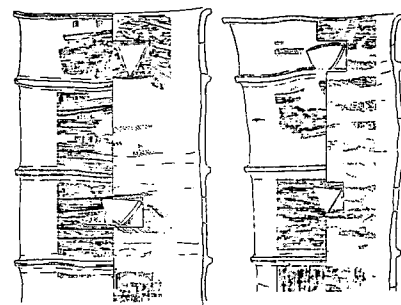
墳丘出土



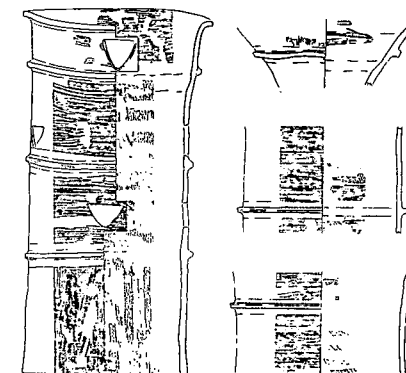
墳頂第3主体埴輪棺



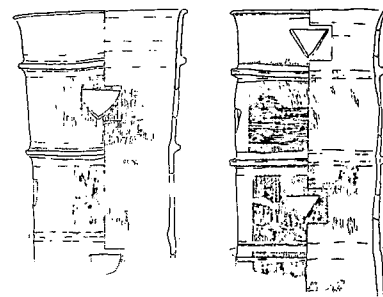
1号埴輪棺



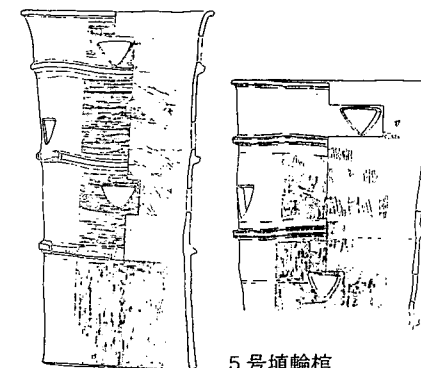
2号埴輪棺



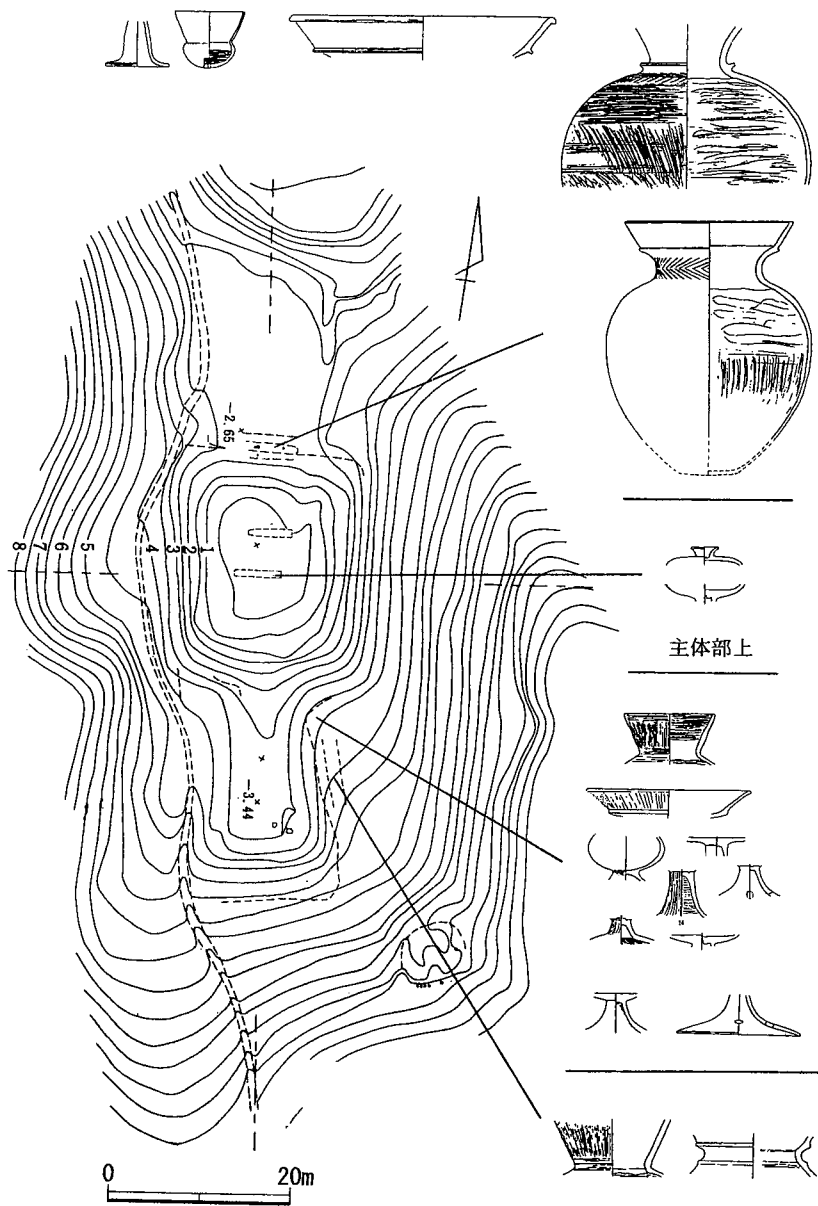
3号埴輪棺



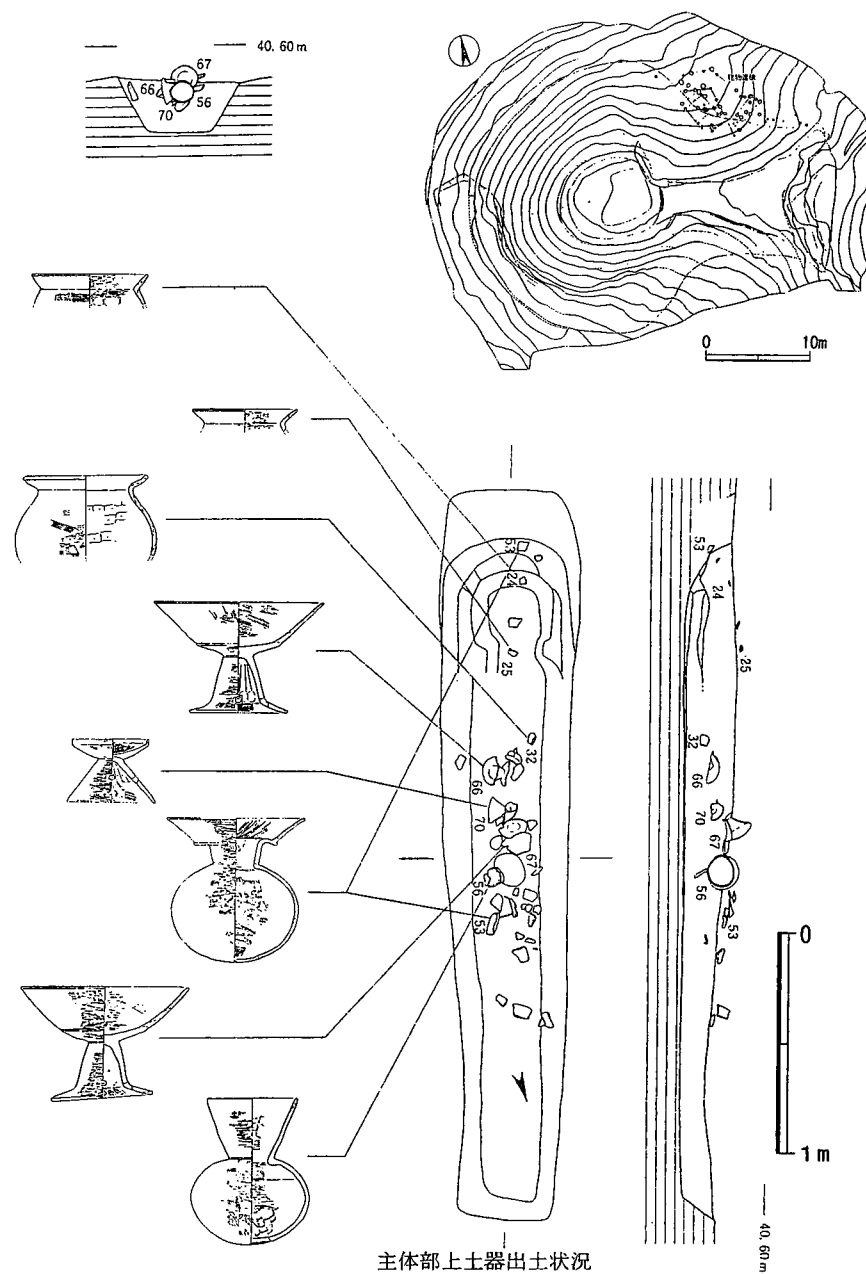
4号埴輪棺



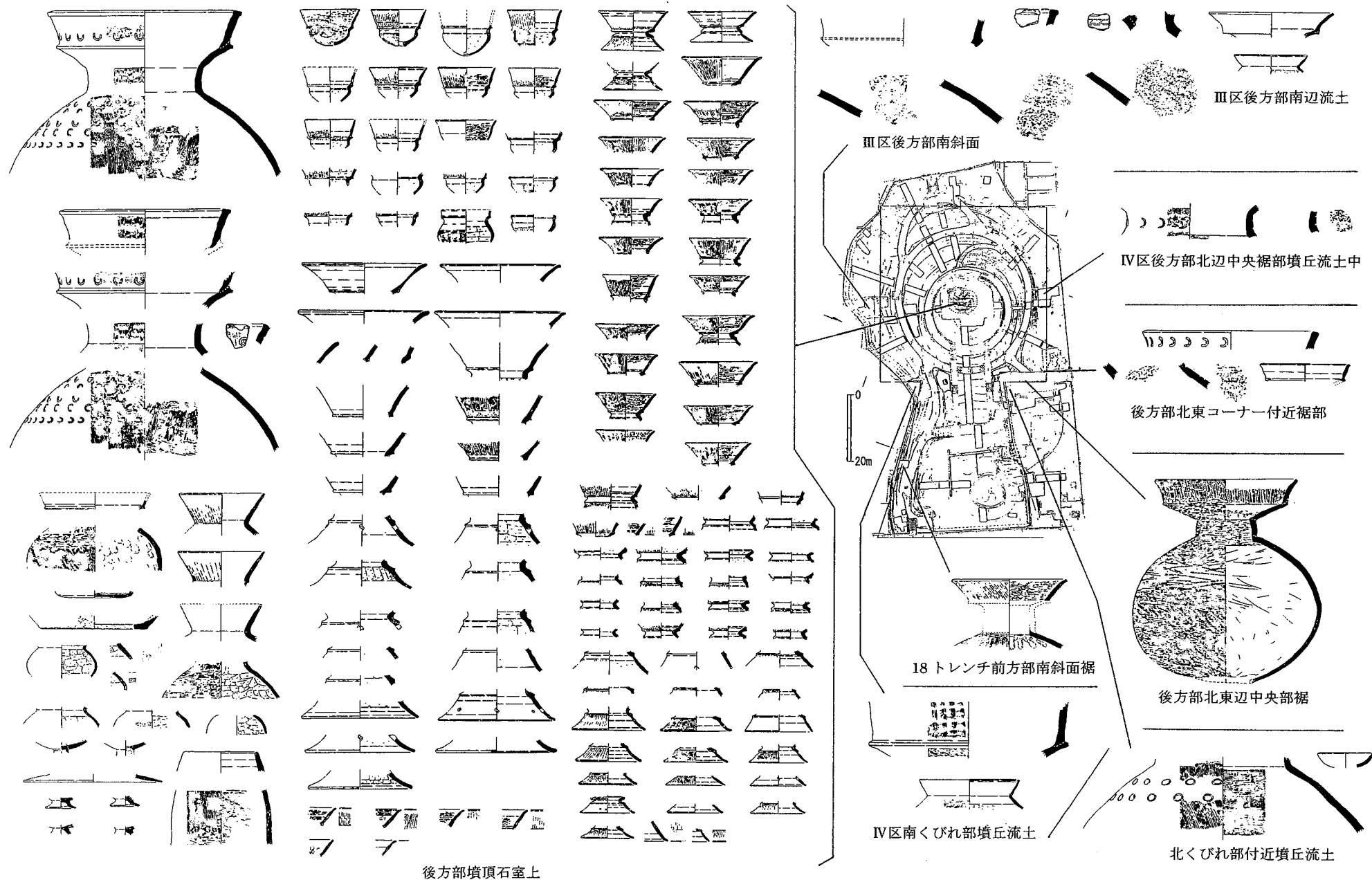
5号埴輪棺



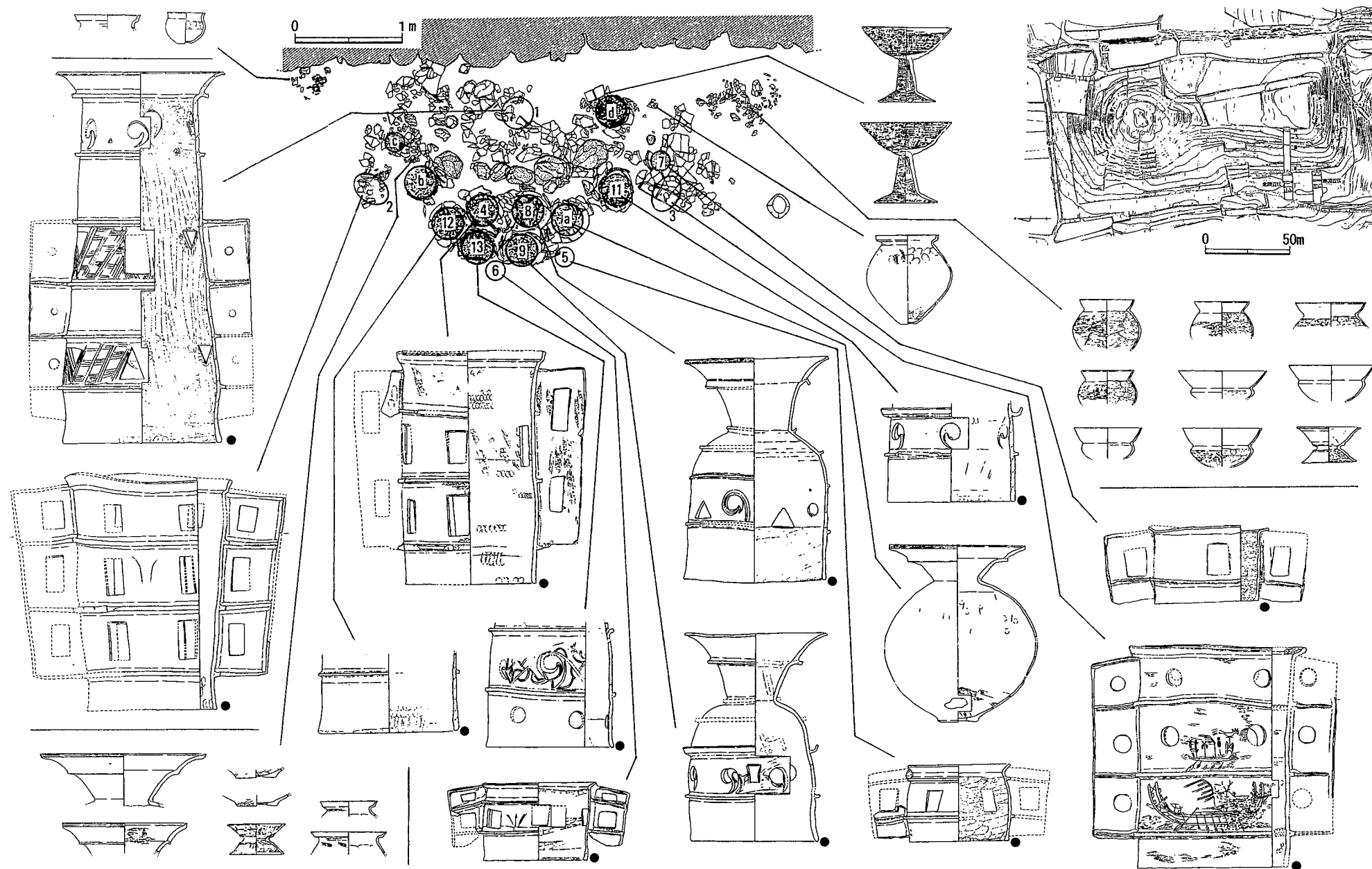
図版 9 3 島根県松本 1 号墳



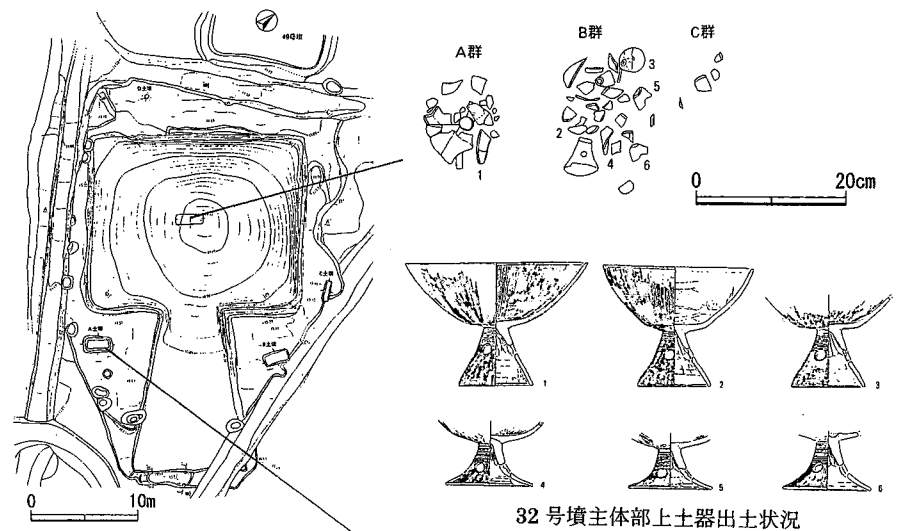
図版 9 4 佐賀県双水柴山 2 号墳



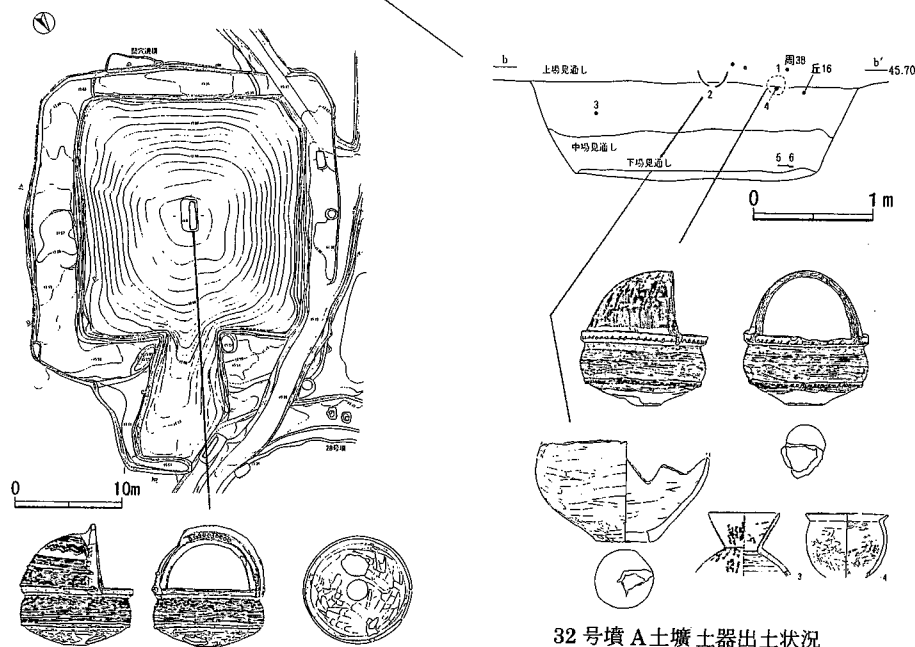
図版95 兵庫県西求女塚古墳



前方部西側側面突出部の埴輪・土器配列状況



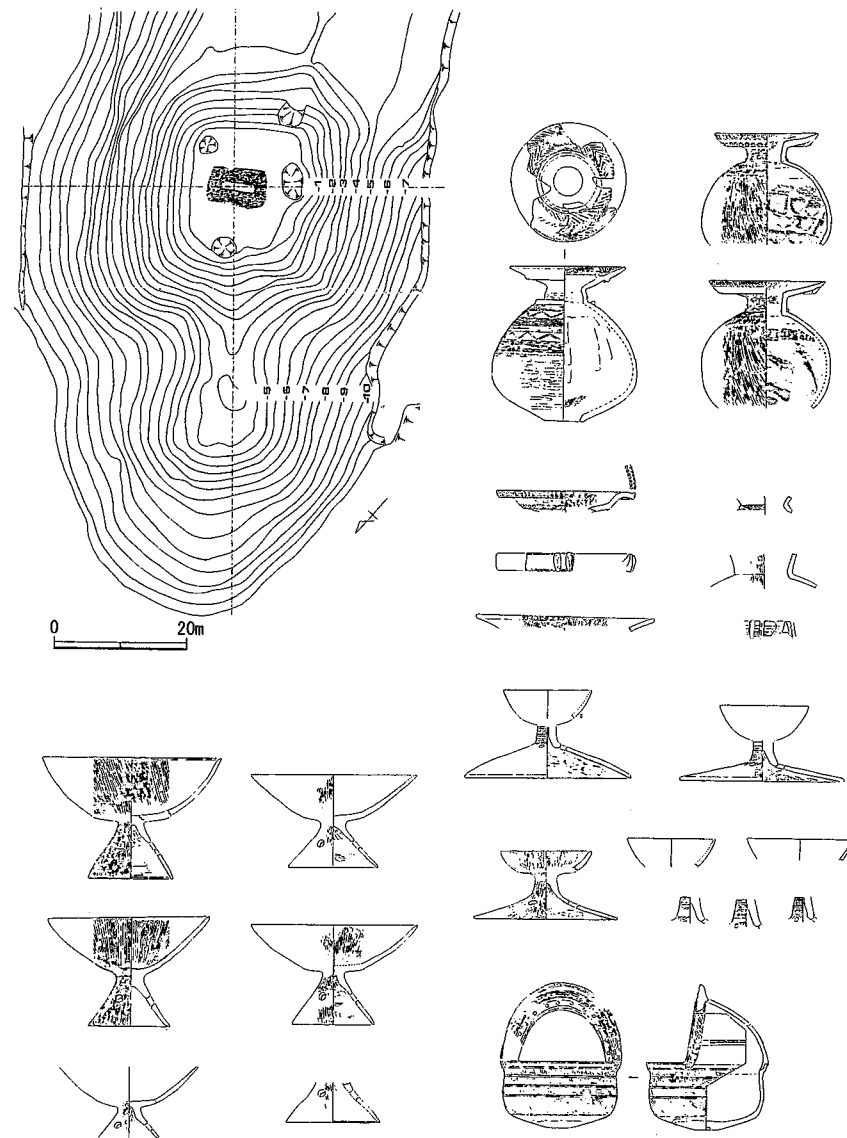
32号墳主体部上土器出土状況



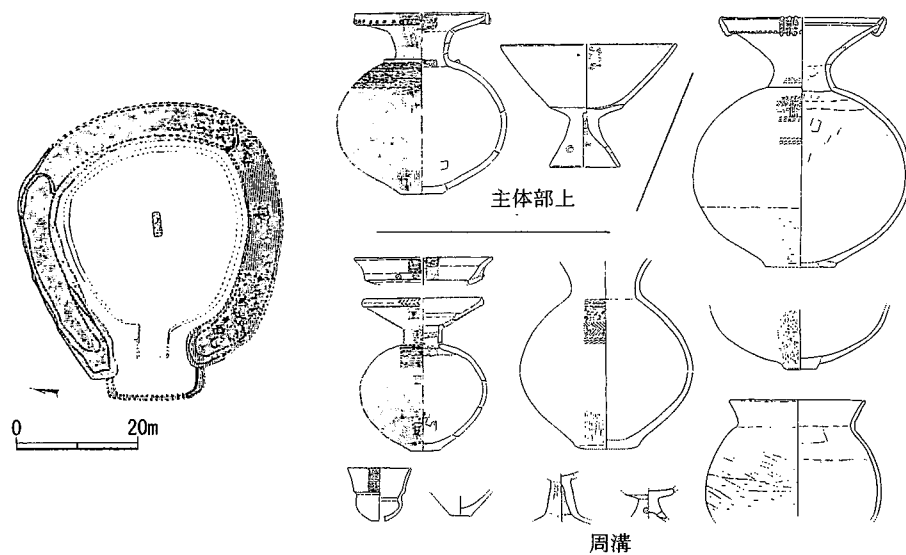
32号墳A土壙土器出土状況

30号墳主体部上出土土器

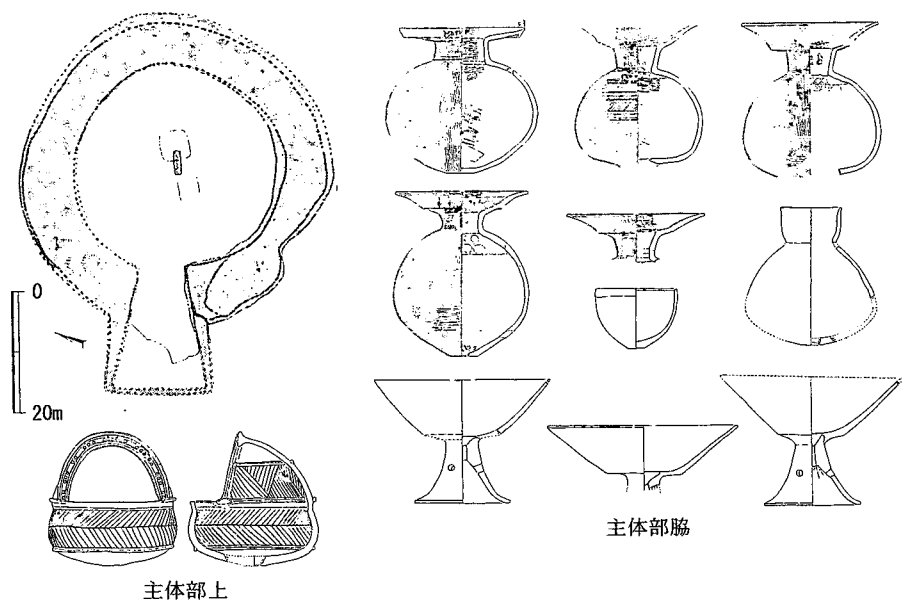
図版97 千葉県高部古墳群



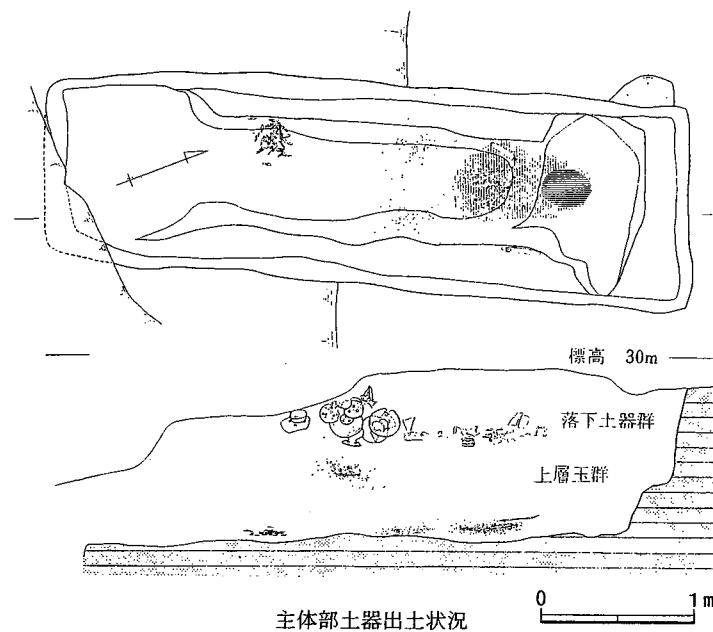
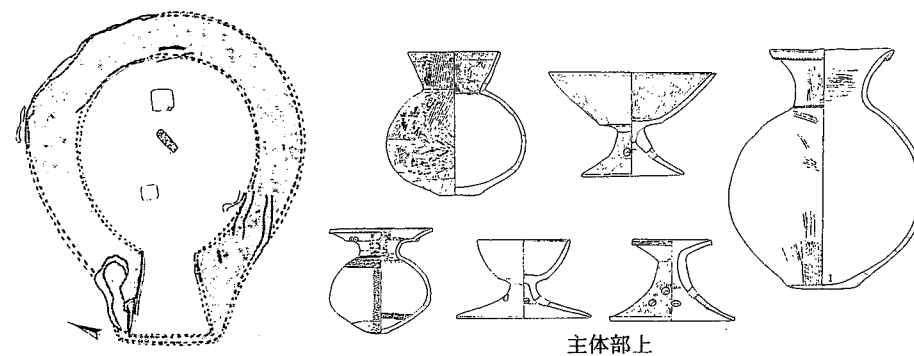
図版98 長野県弘法山古墳



図版99 千葉県神門5号墳

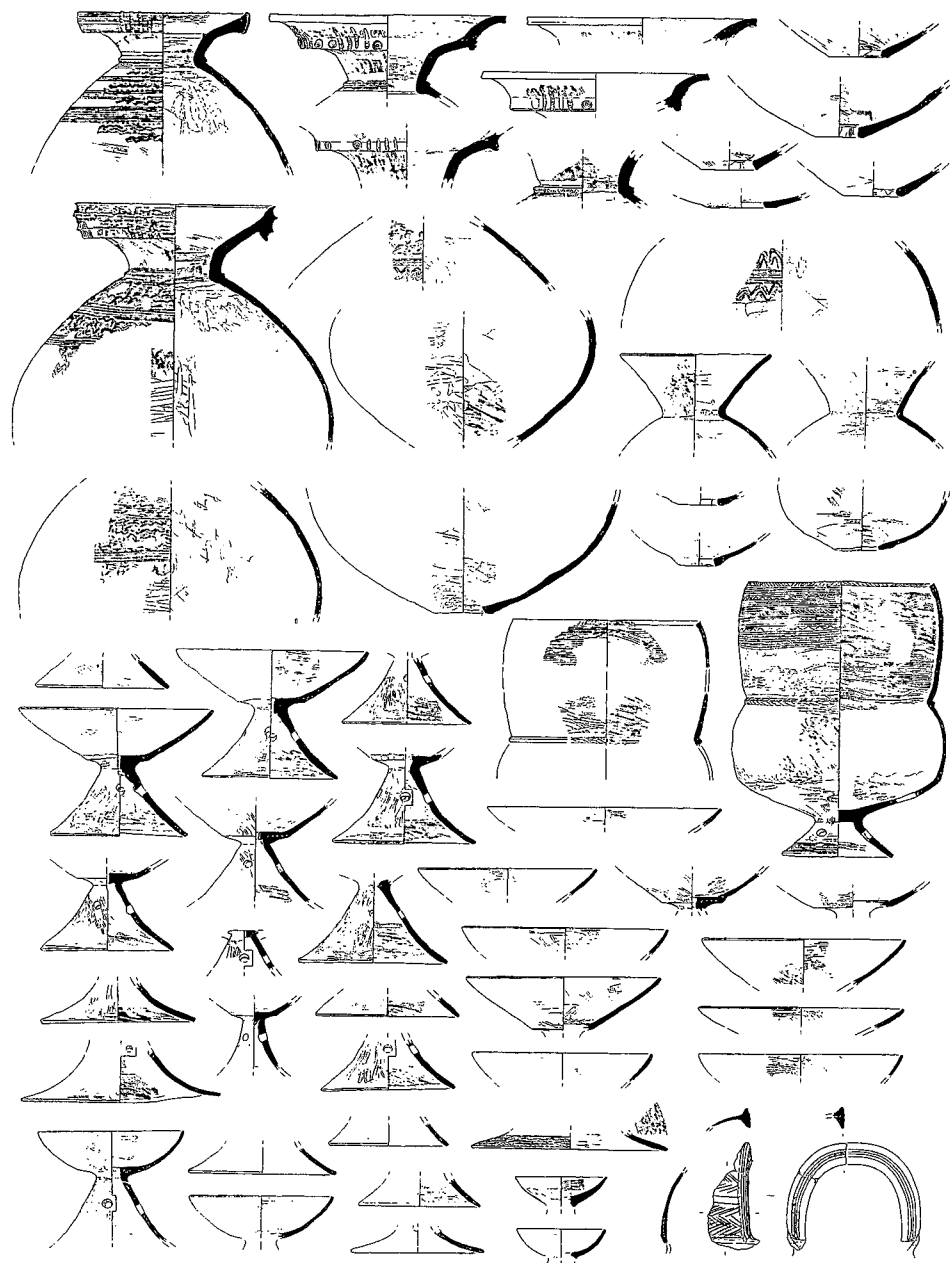


図版100 千葉県神門3号墳

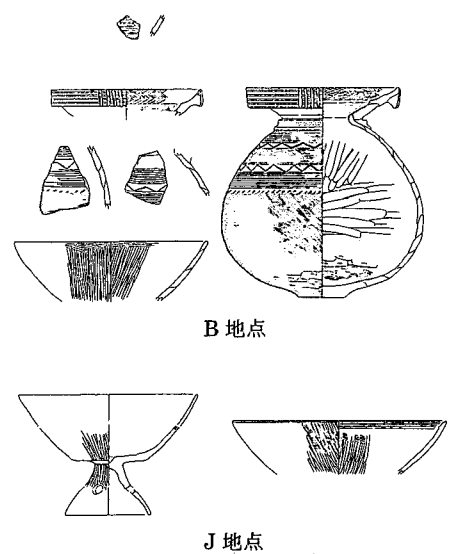
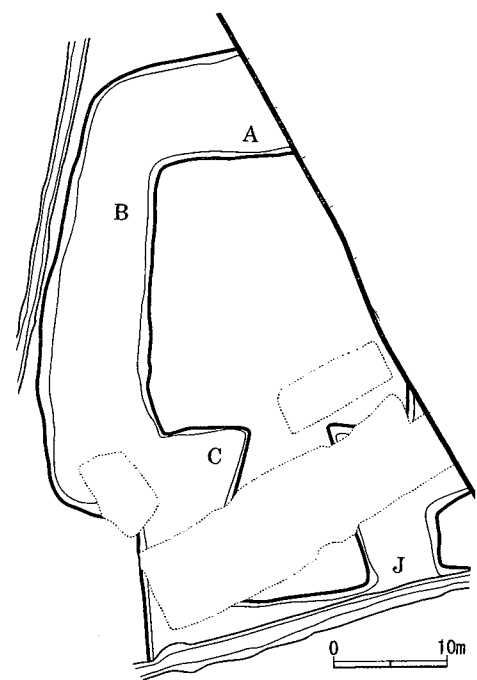


図版101 千葉県神門4号墳



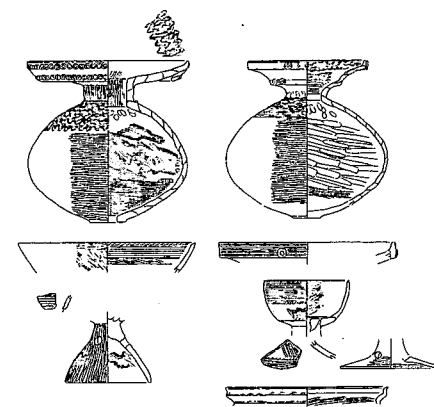


図版102 滋賀県小松古墳土坑A出土土器

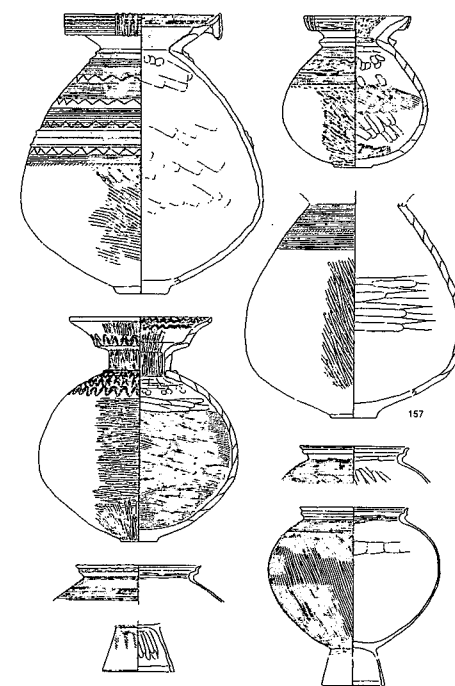


B 地点

J 地点

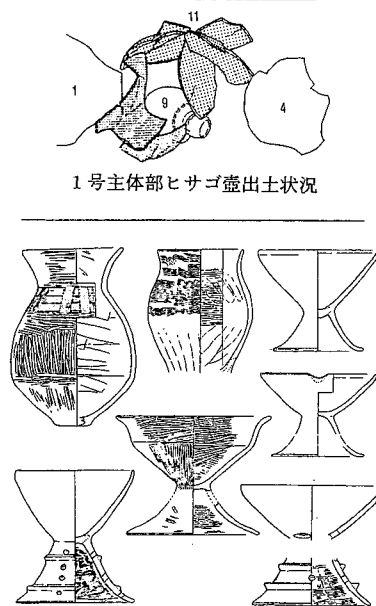
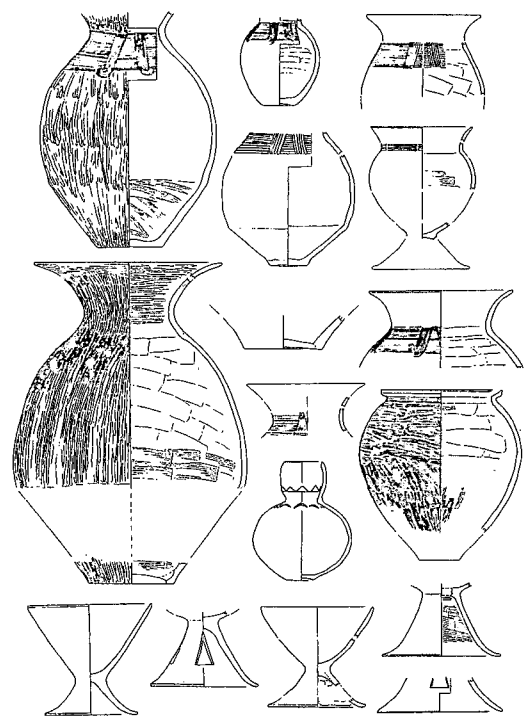
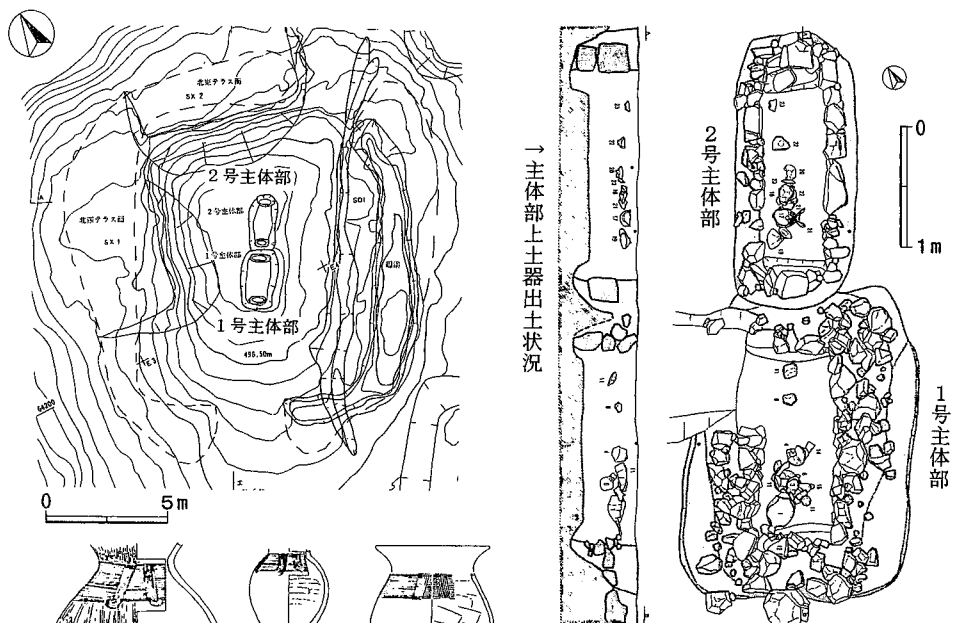


A 地点

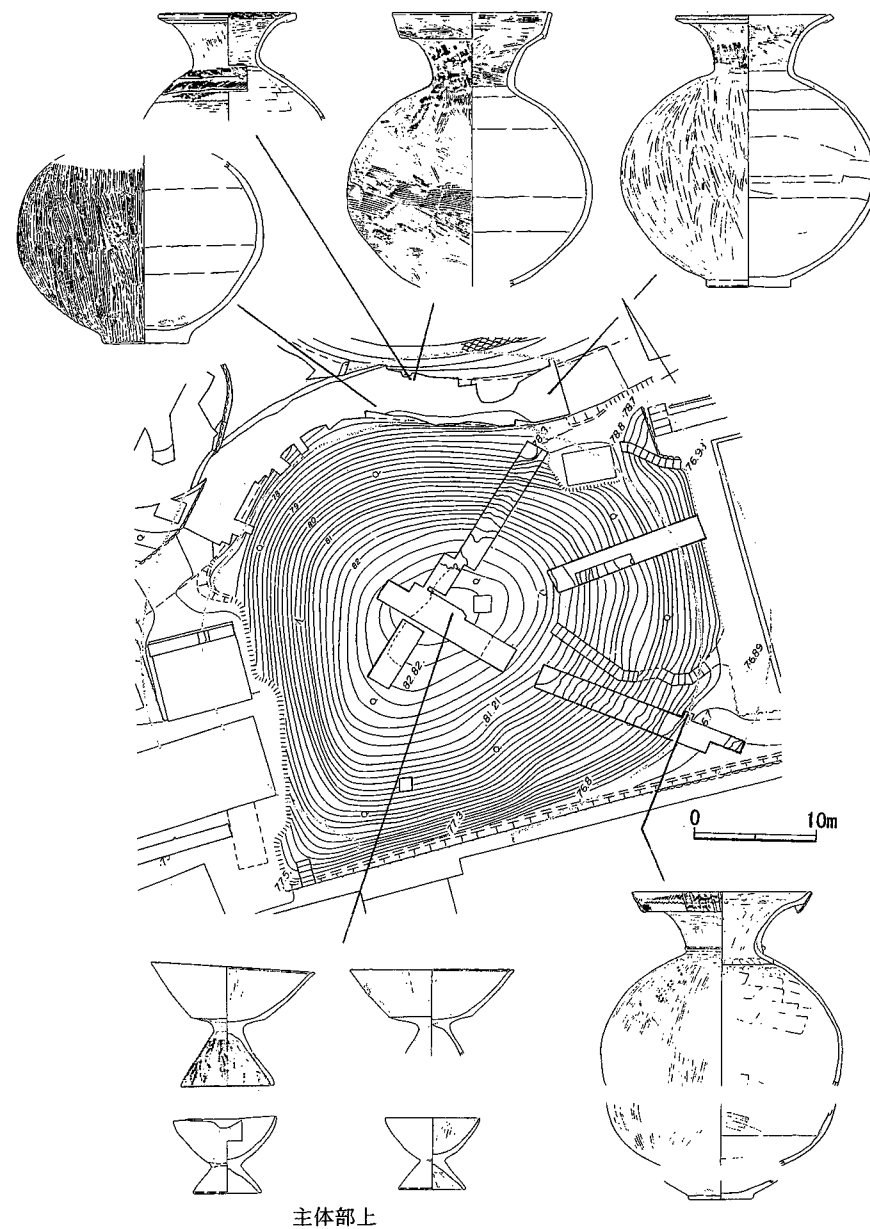


C 地点

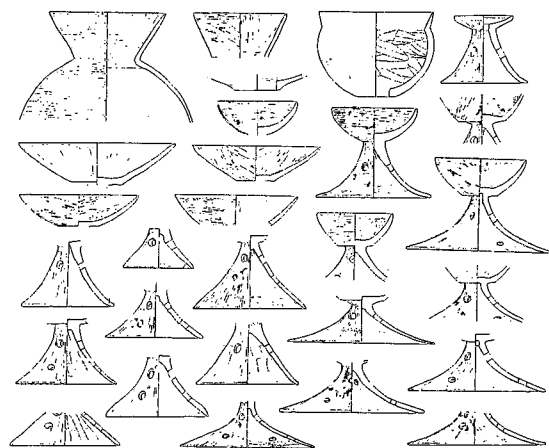
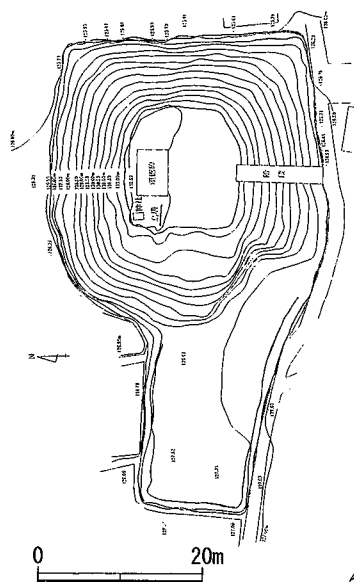
図版103 愛知県西上免古墳



図版104 長野県北平1号墓



図版105 神奈川県秋葉山3号墳

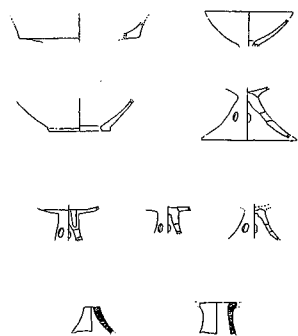
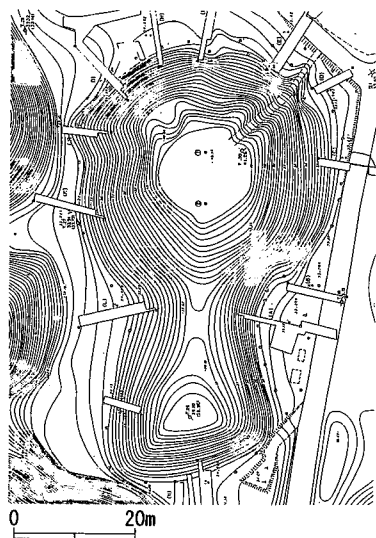


主体部上



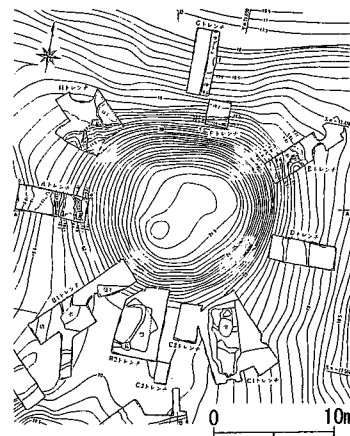
墓域埋土内 (櫛上?)

図版106 栃木県駒形大塚古墳

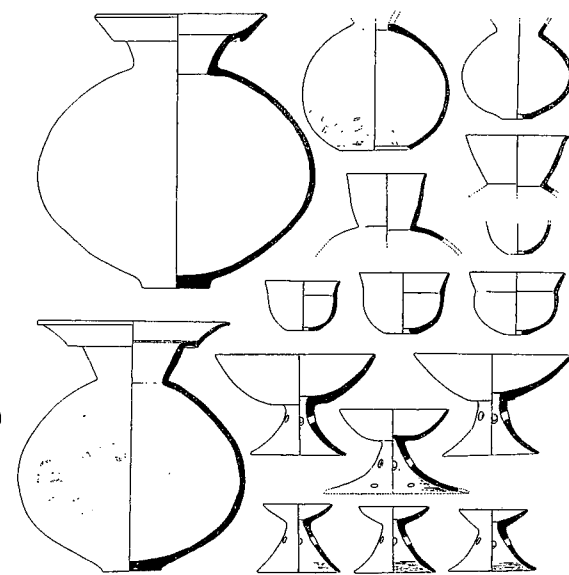


主体部上

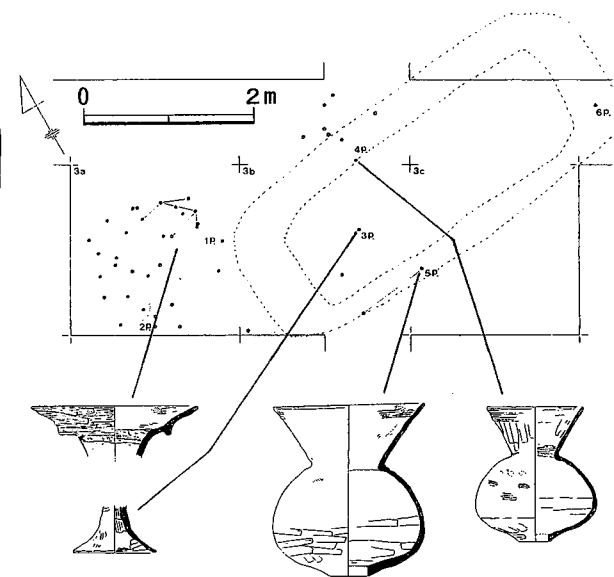
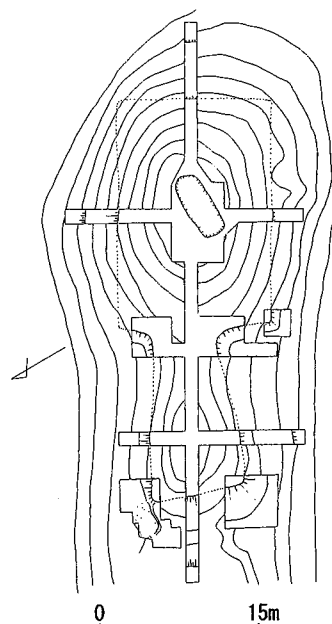
図版107 千葉県能満寺古墳



図版108 千葉県北ノ作1号墳

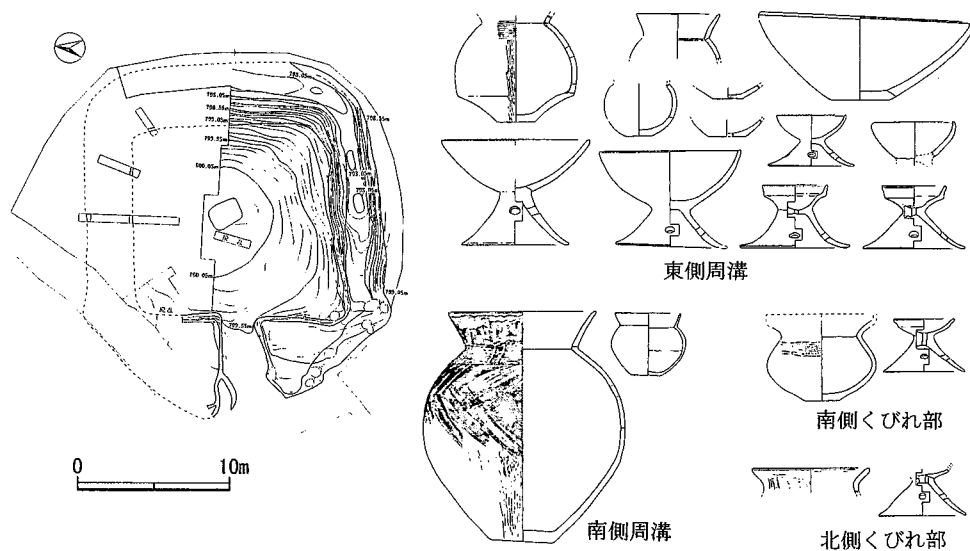


主体部上

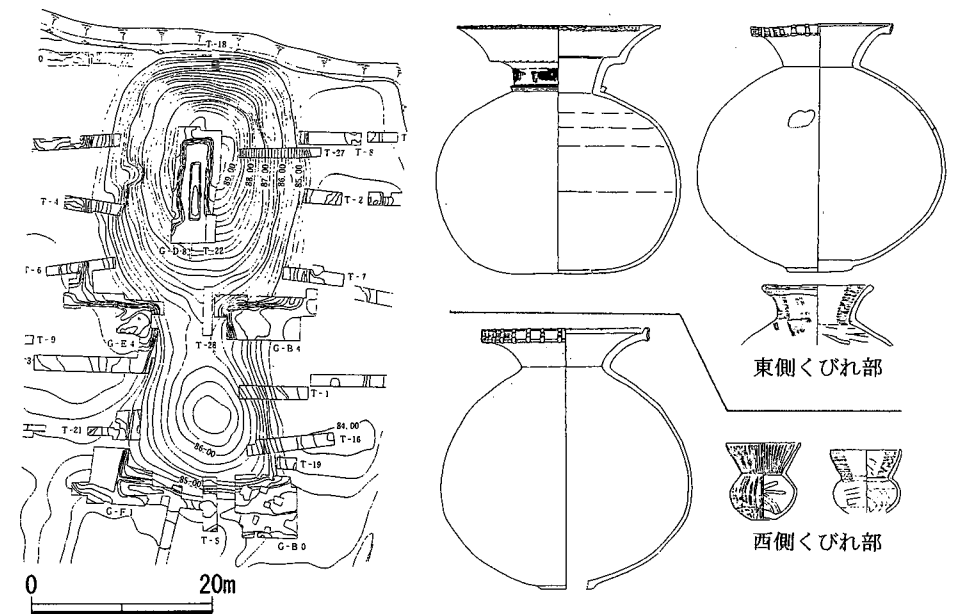


主体部周辺土器出土状況

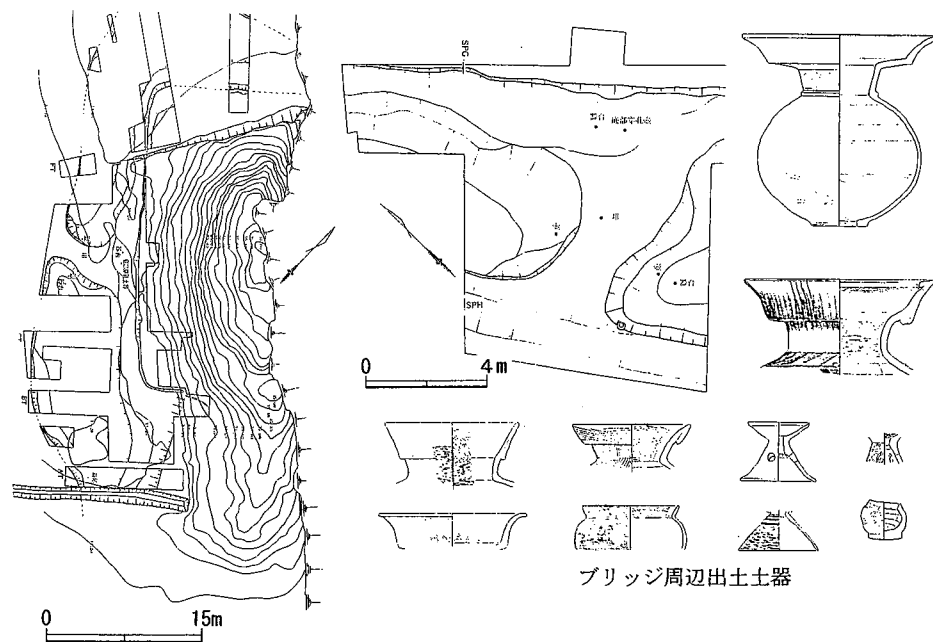
図版109 茨城県原1号墳



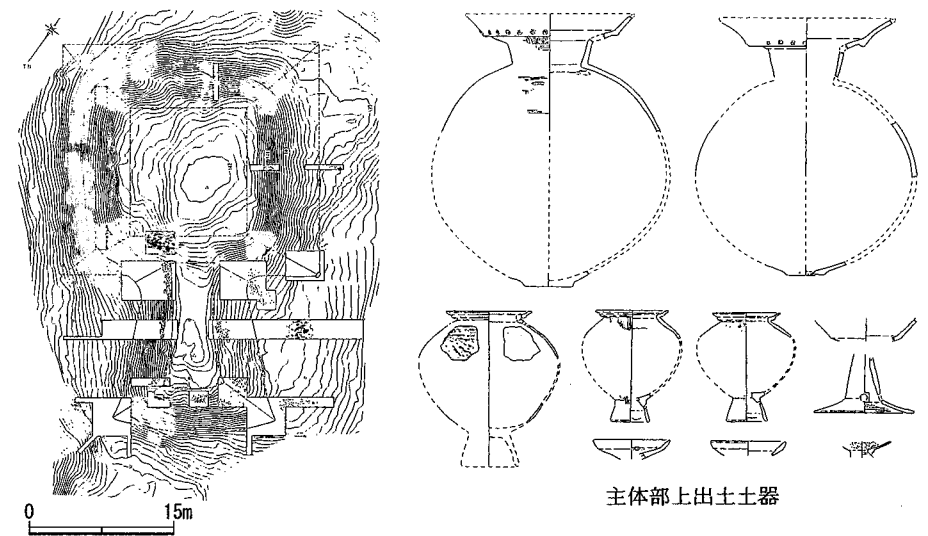
図版 1 1 0 長野県瀧の峯2号墳



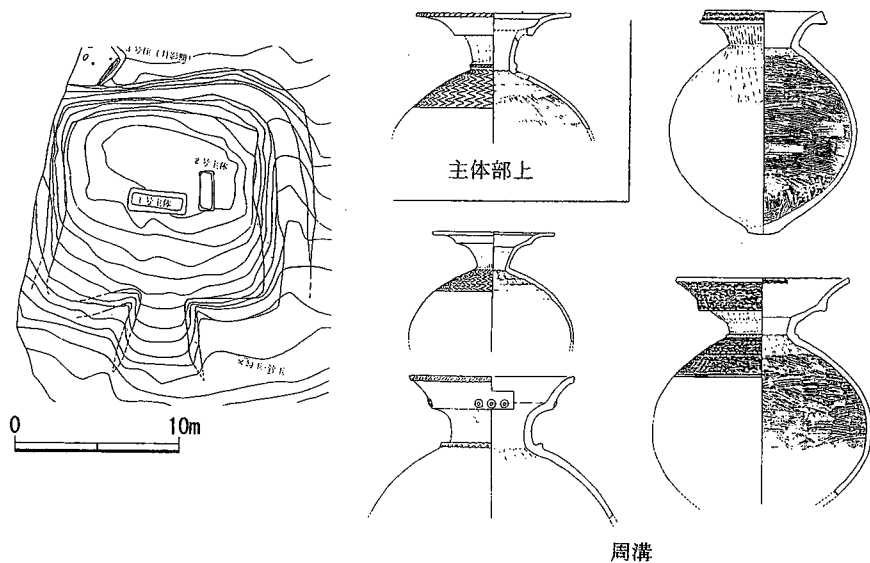
図版 1 1 2 静岡県茂原愛宕塚古墳



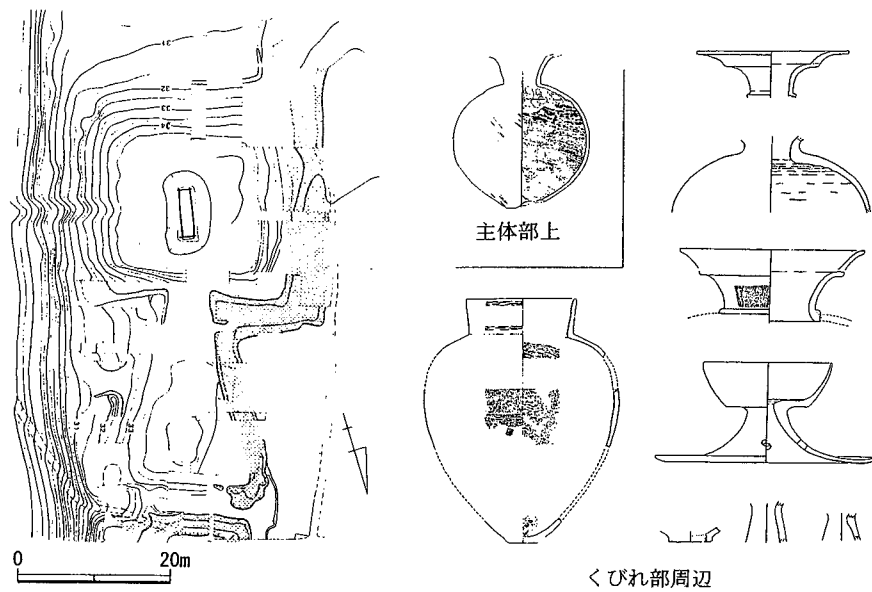
図版 1 1 1 埼玉県諏訪山29号墳



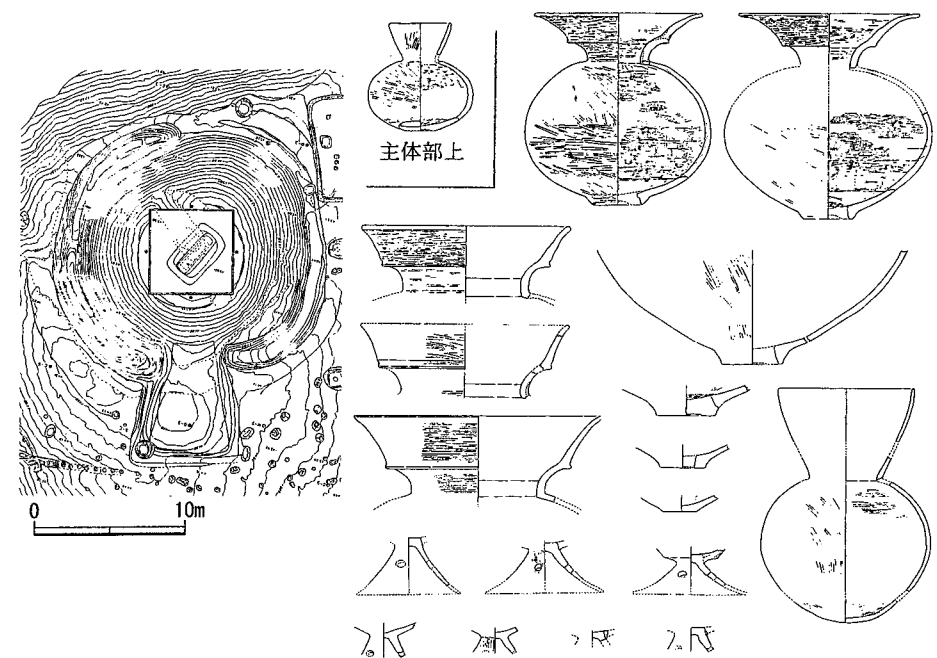
図版 1 1 3 兵庫県象鼻山1号墳



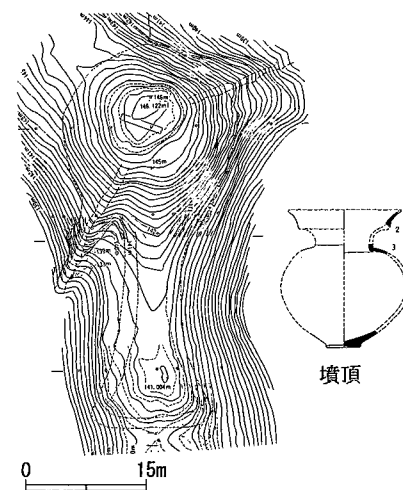
図版 1 1 4 石川県小菅波 4 号墳



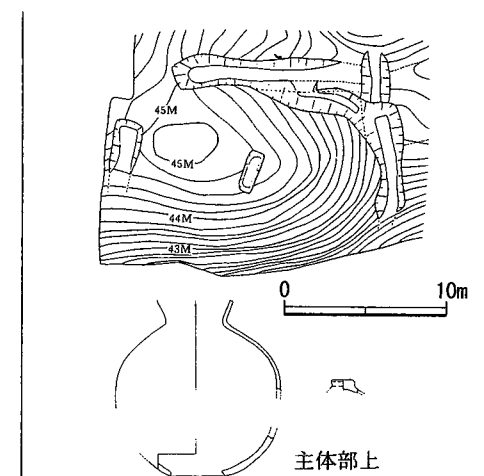
図版 1 1 5 石川県国分尼塚 1 号墳



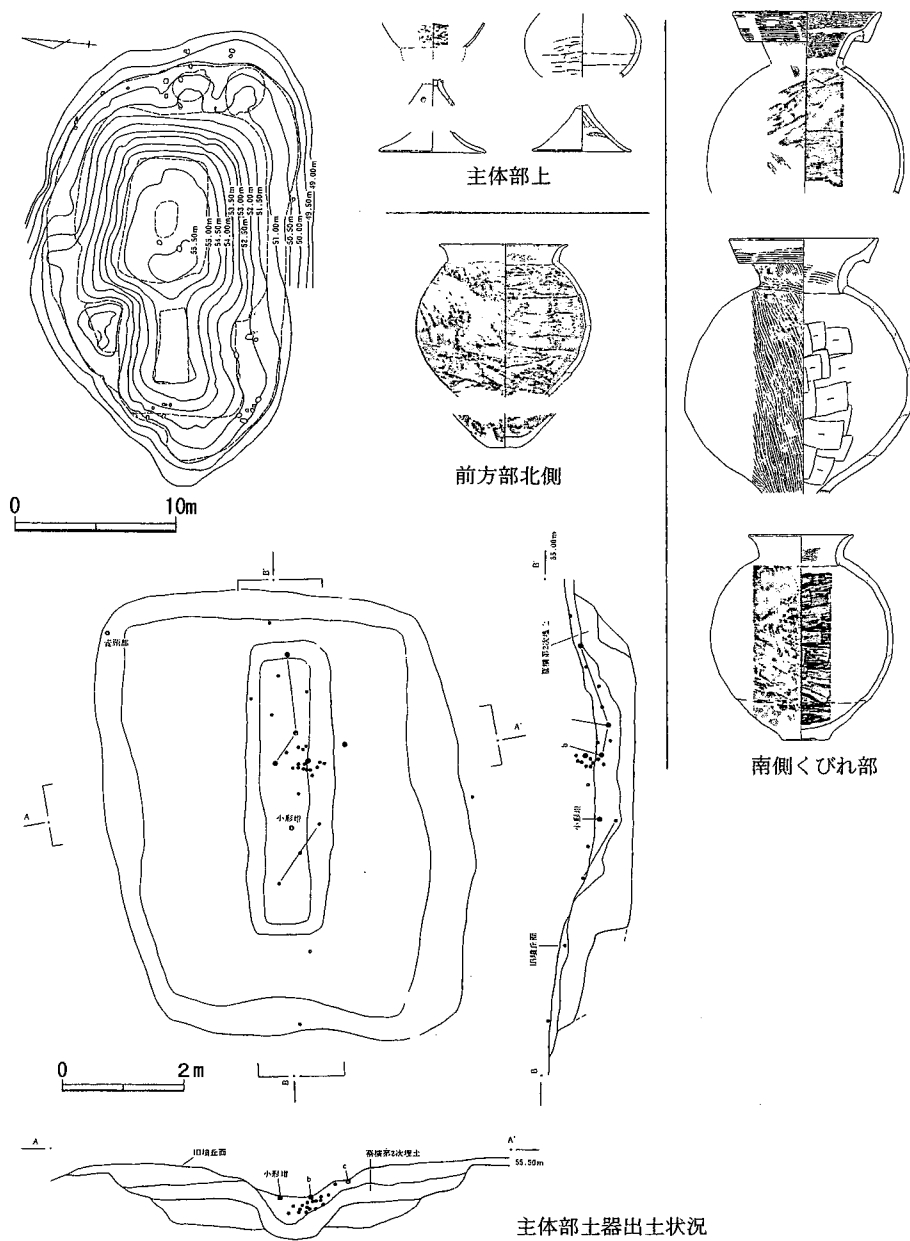
図版 1 1 6 石川県宿東山 1 号墳



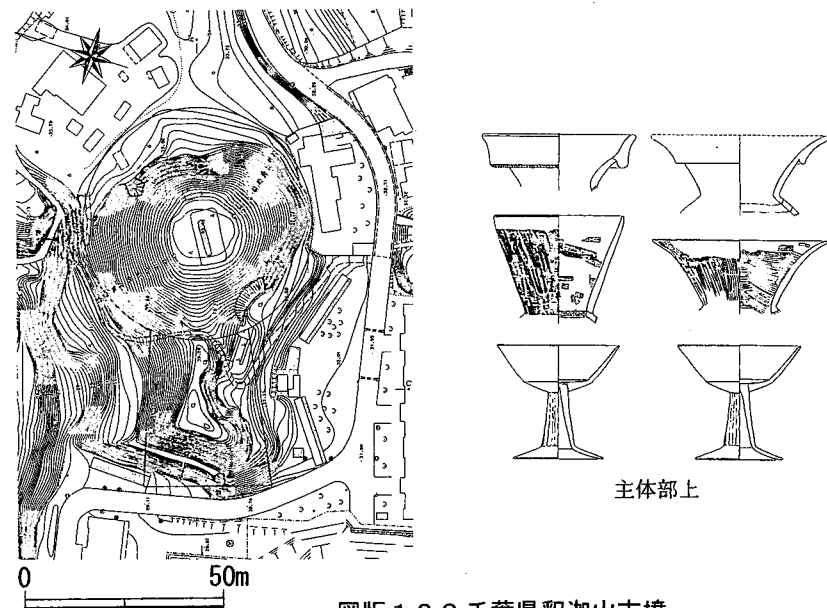
図版 1 1 7 富山県谷内 16 号墳



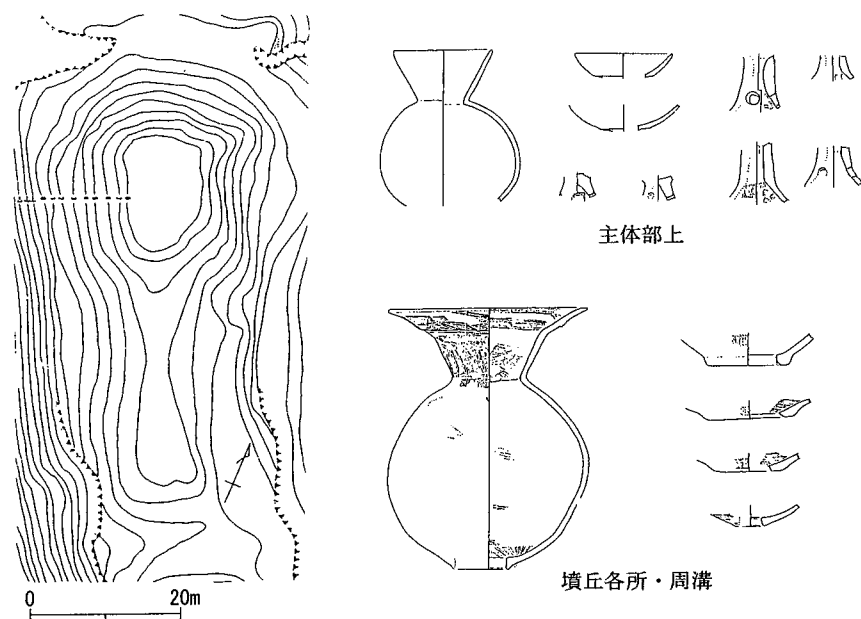
図版 1 1 8 石川県国分岩屋山 4 号墳



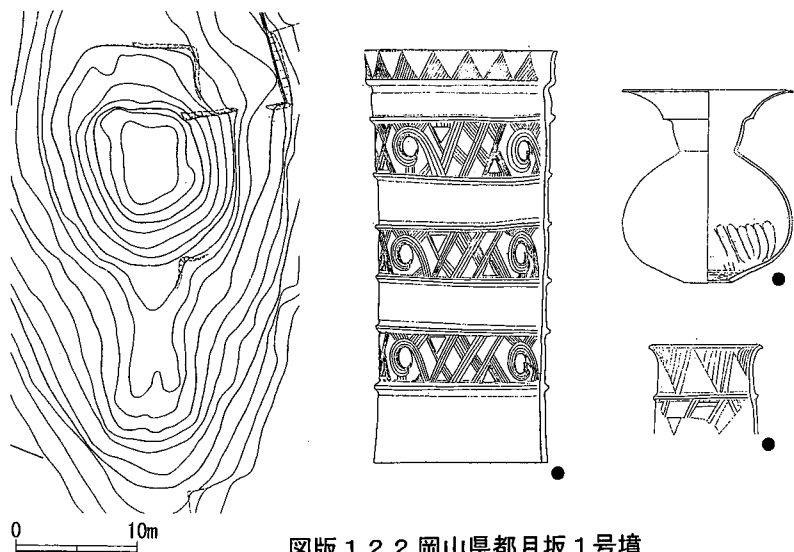
図版 1 1 9 新潟県山古墳



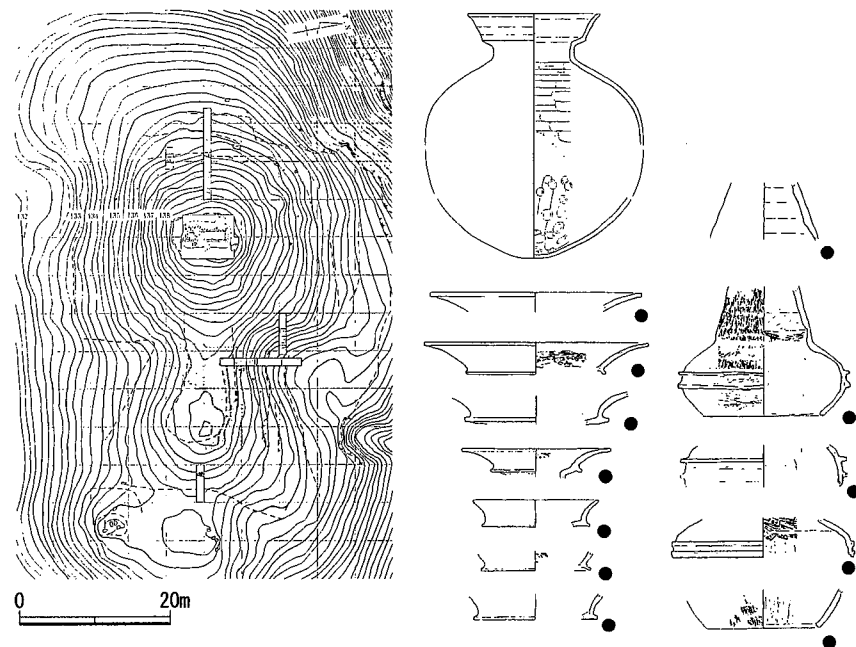
図版 1 2 0 千葉県釈迦山古墳



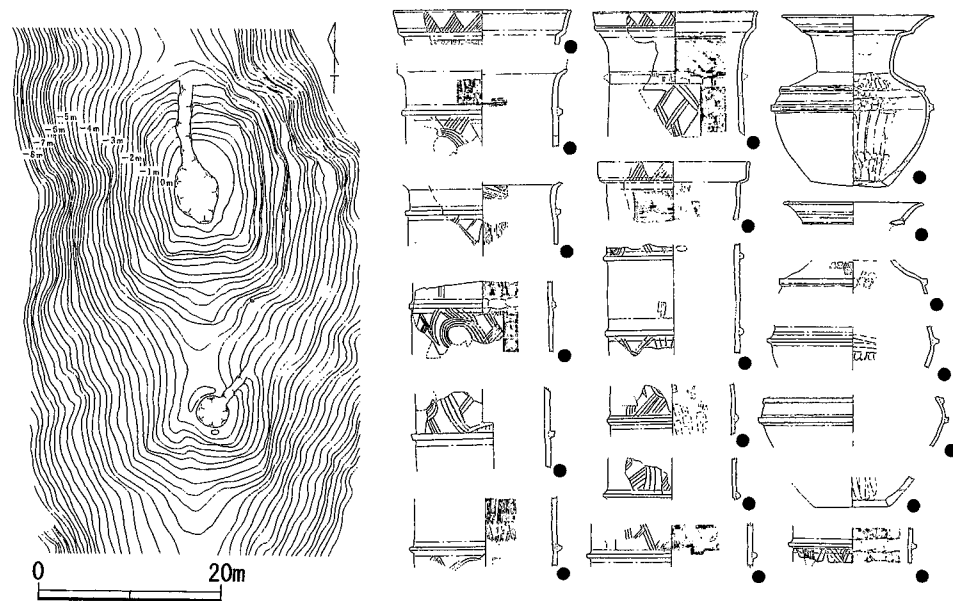
図版 1 2 1 茨城県勅使塚古墳



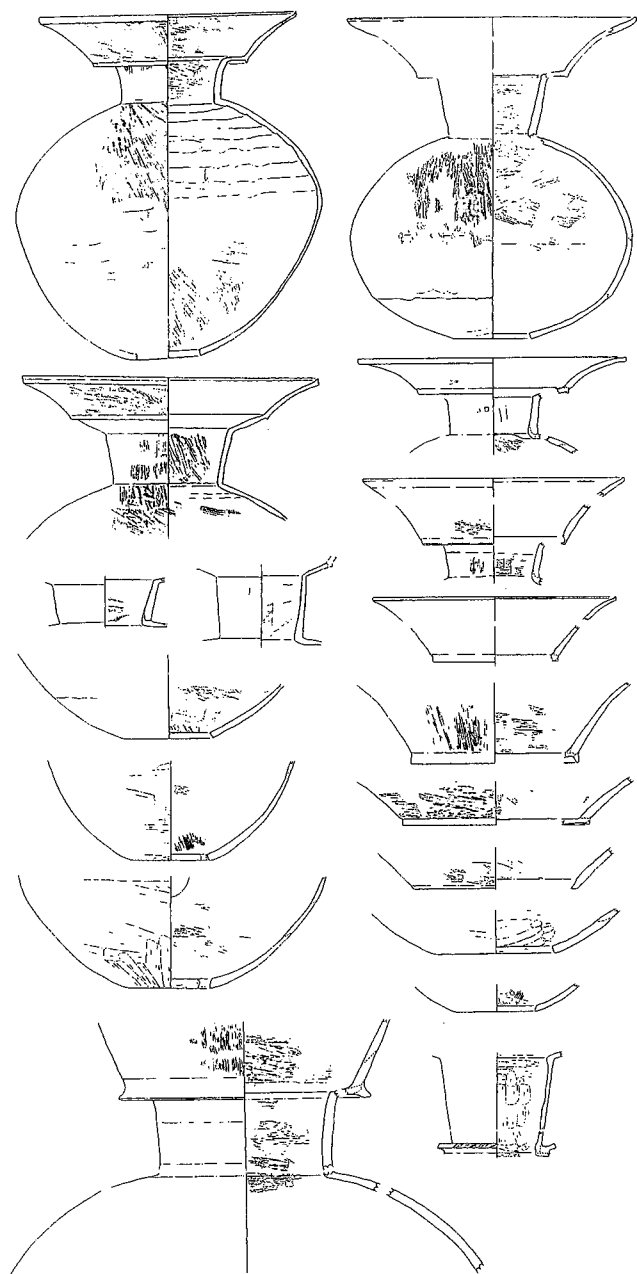
図版 1 2 2 岡山県都月坂 1 号墳



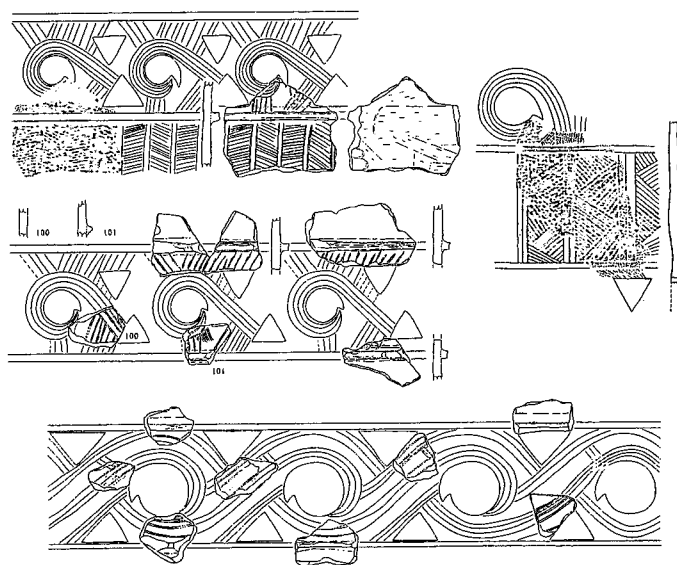
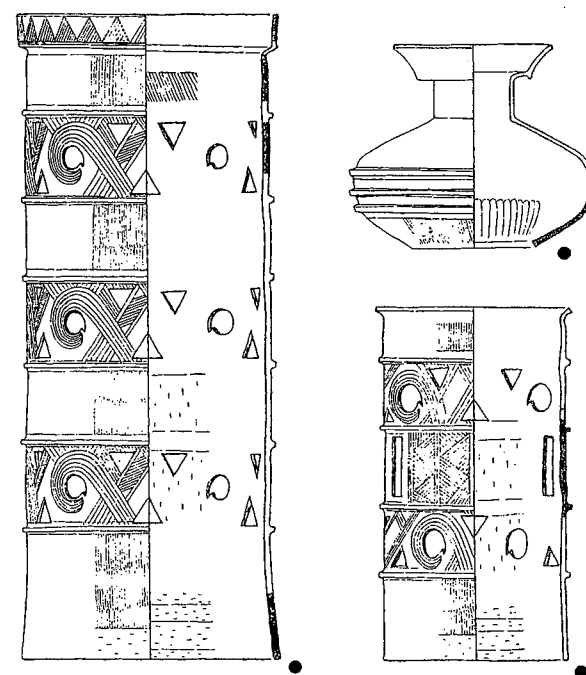
図版 1 2 4 兵庫県権現山 51 号墳



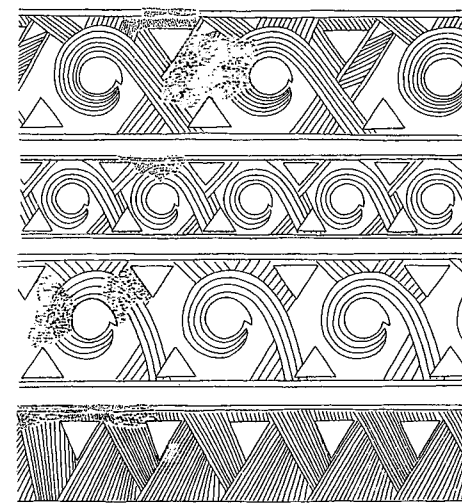
図版 1 2 3 岡山県七つ塚 1 号墳



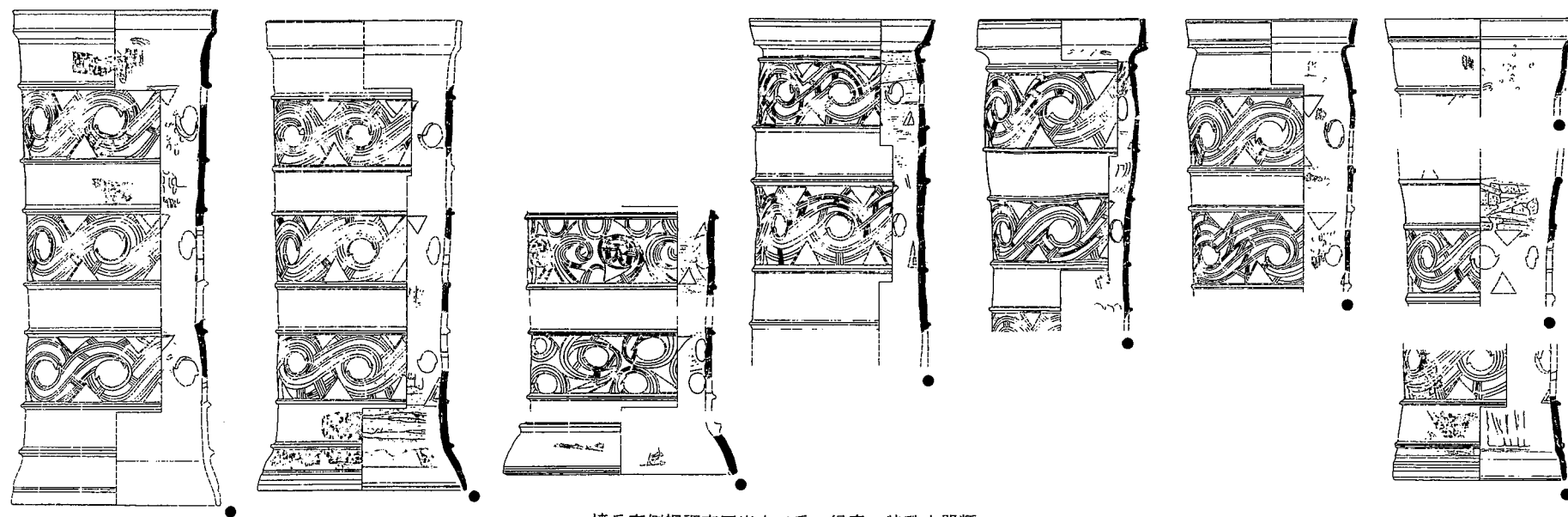
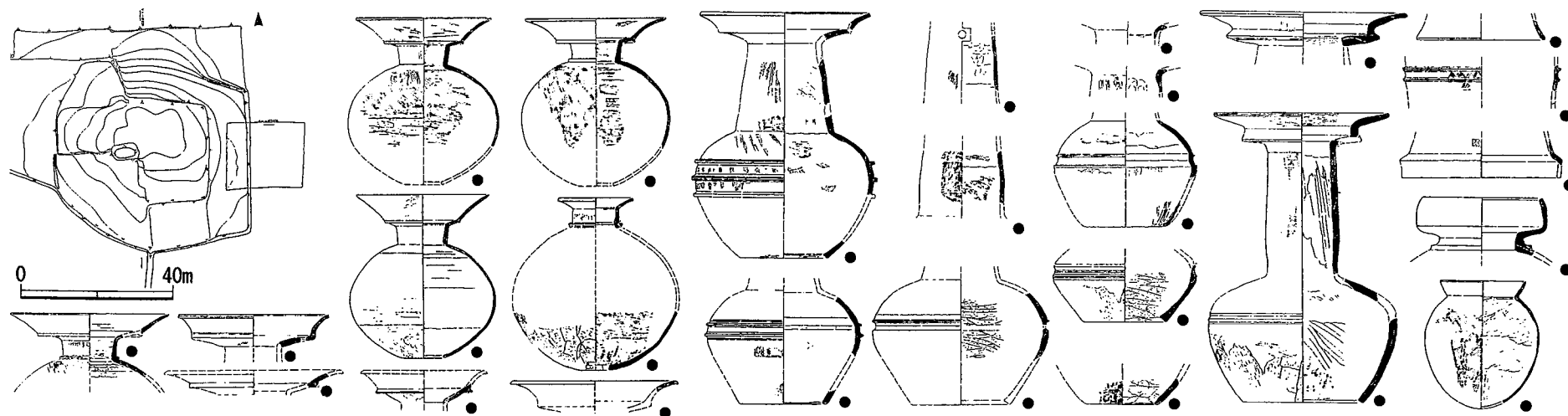
前方部墳頂出土二重口縁壺



後円部墳頂付近出土特殊器台形埴輪

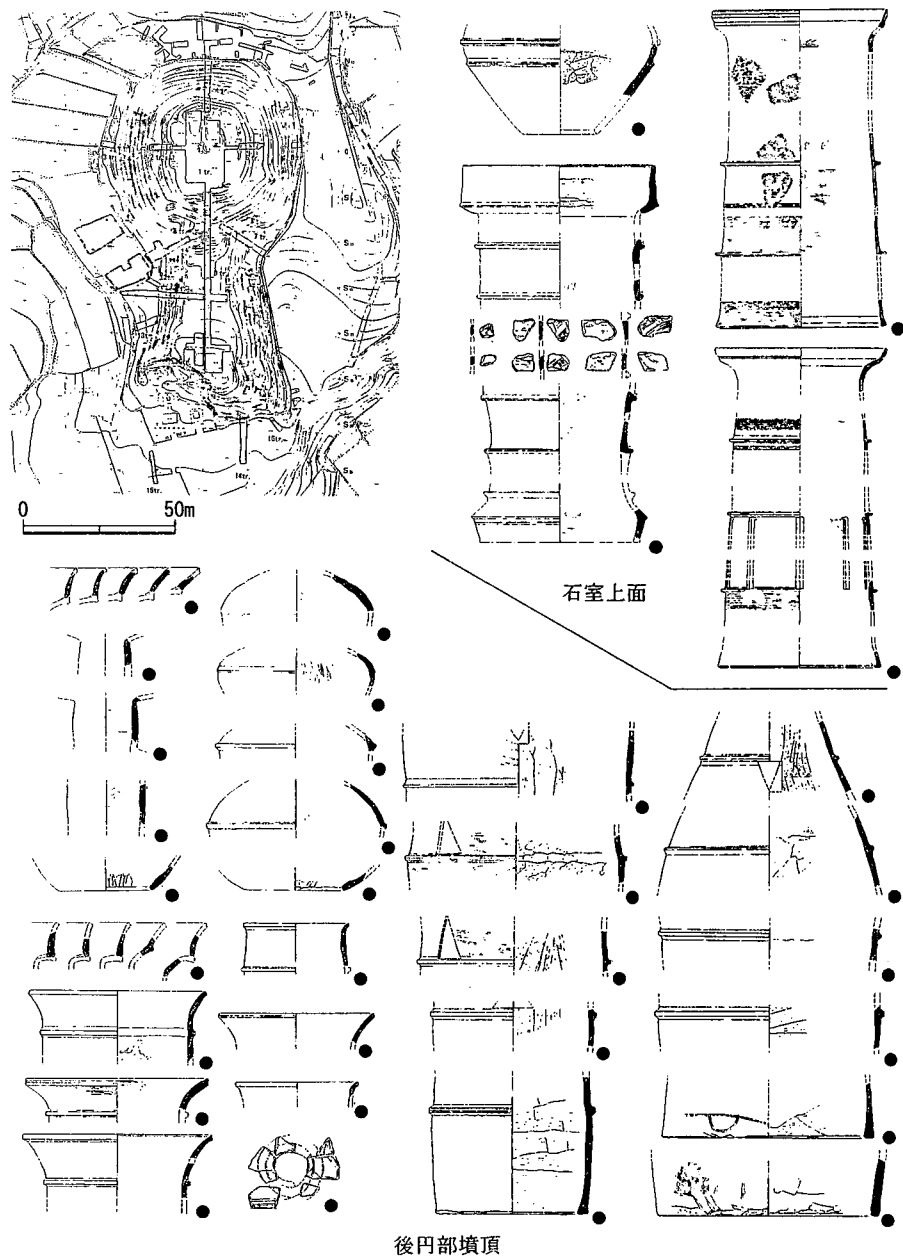




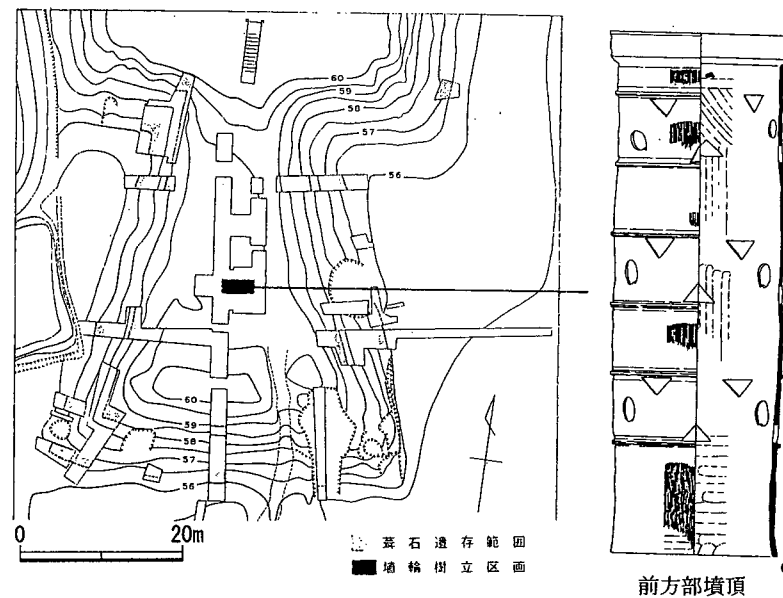


墳丘東側裾調査区出土二重口縁壺・特殊土器類

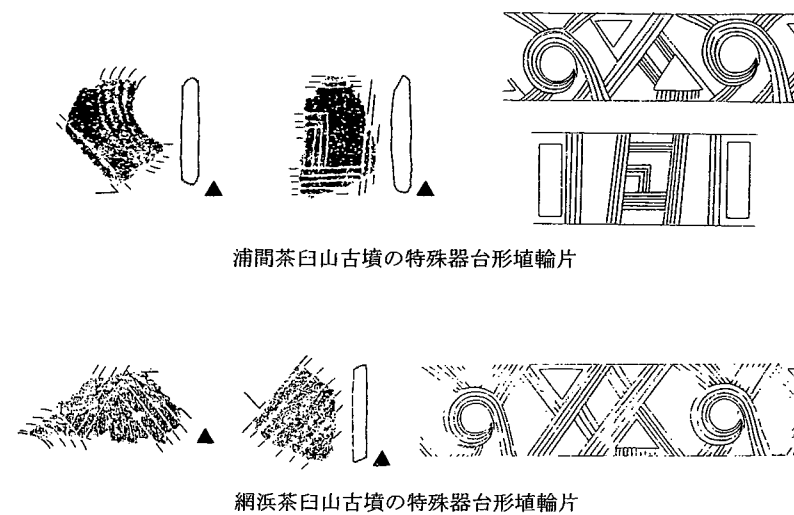
図版 126 奈良県井天塚古墳



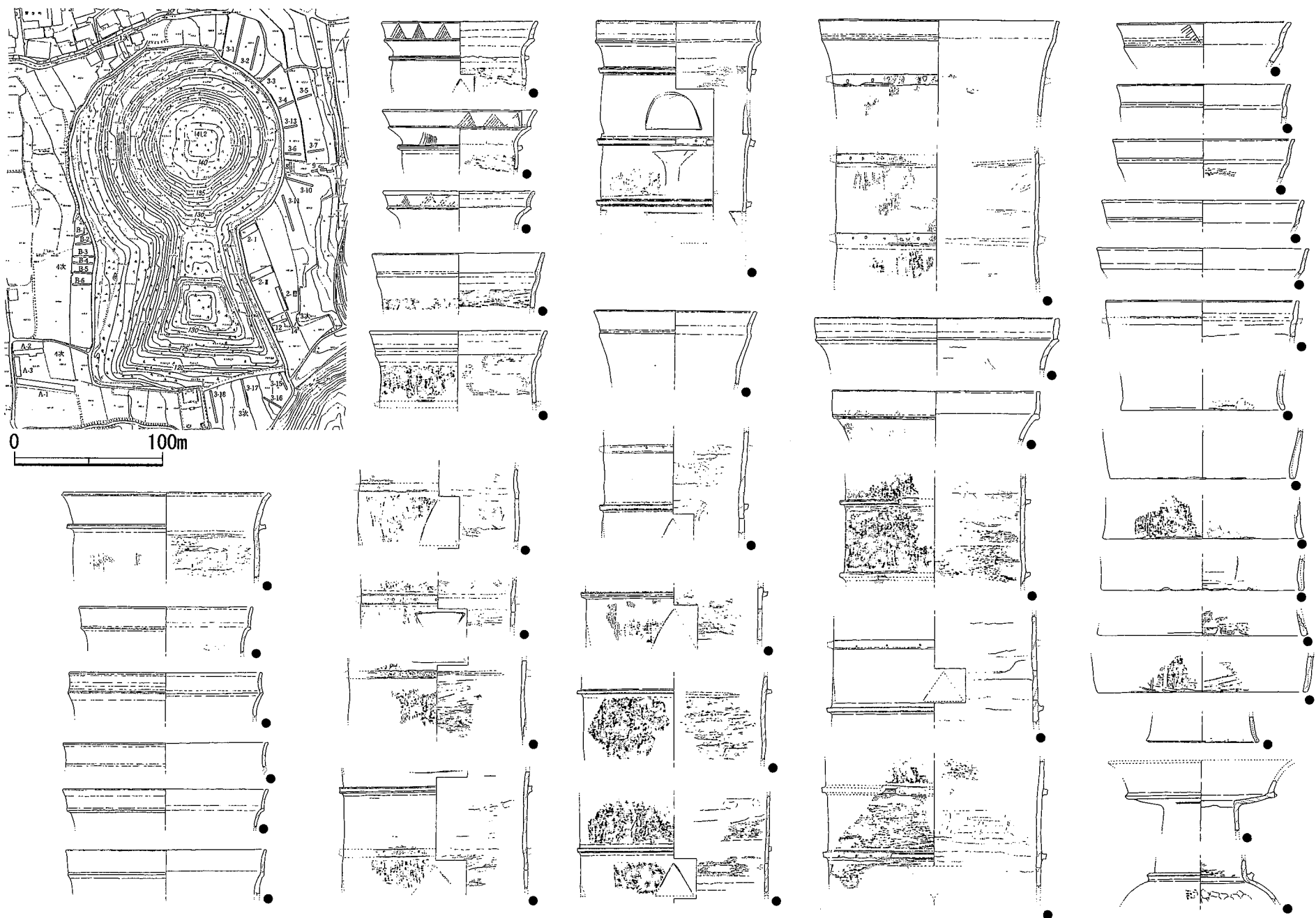
図版 1 2 7 奈良県中山大塚古墳



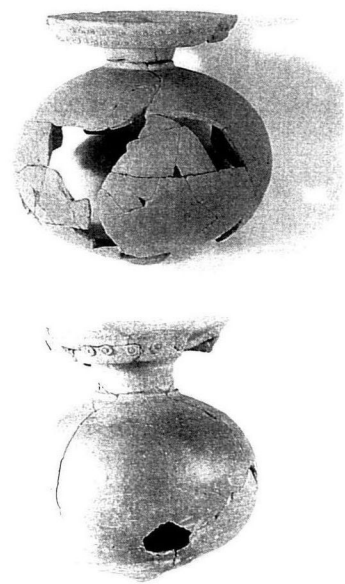
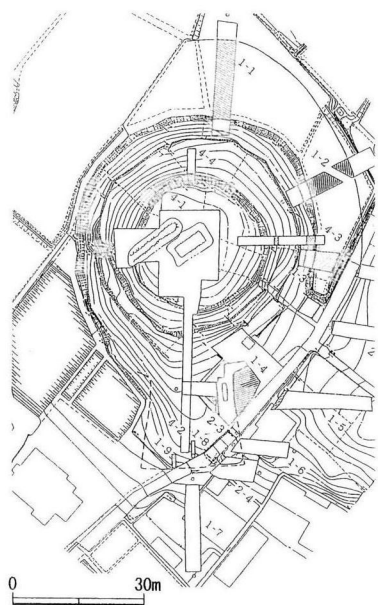
図版 1 2 8 京都府元稲荷古墳



図版 1 2 9 岡山県浦間茶臼山古墳・網浜茶臼山古墳

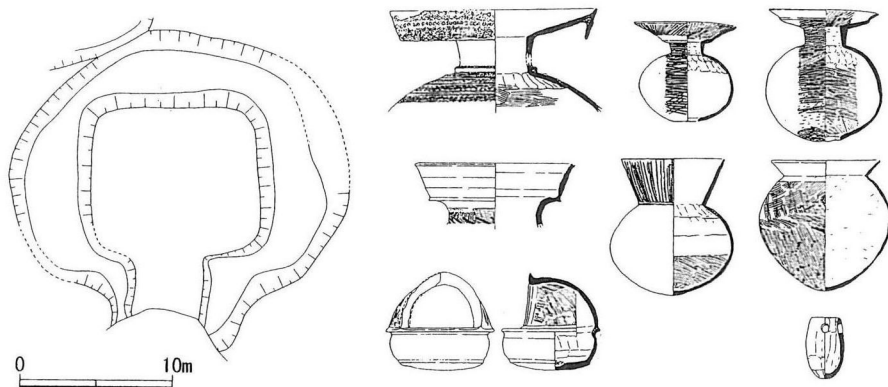


前方部東側調査区出土埴輪

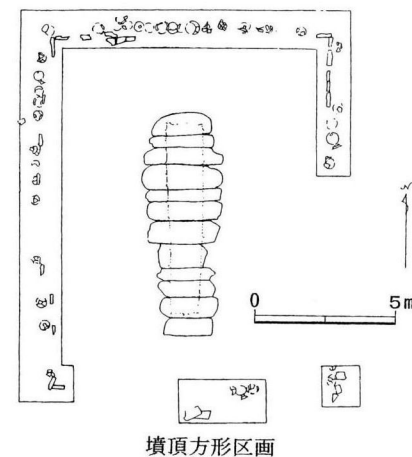
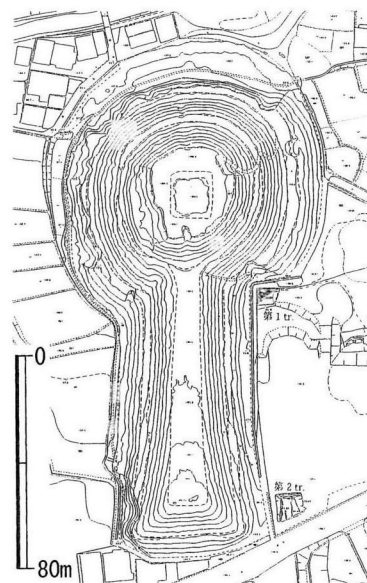


木槨内に落ち込んでいた土器

図版 1 3 1 奈良県ホケノ山古墳

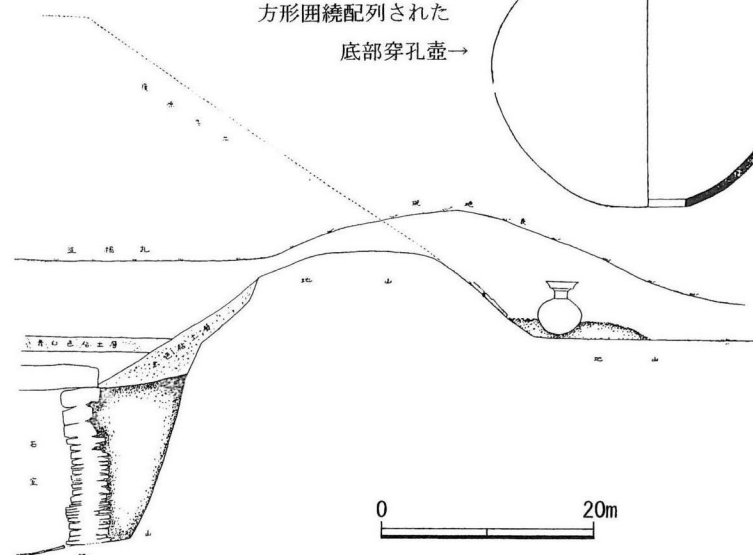
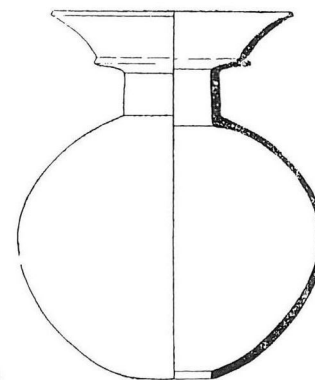


図版 1 3 2 大阪府加美14号墓



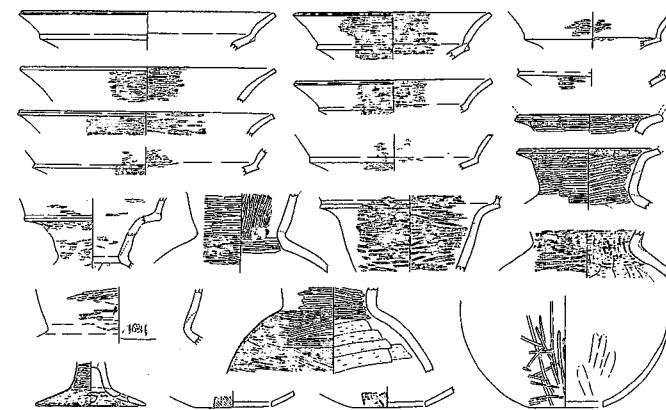
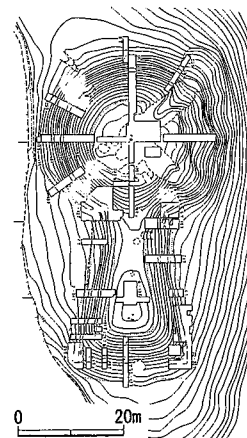
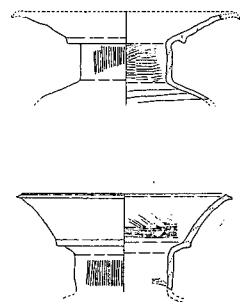
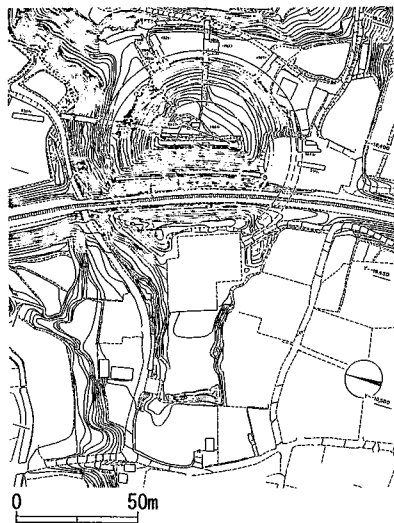
墳頂方形区画

方形圍繞配列された  
底部穿孔壺→



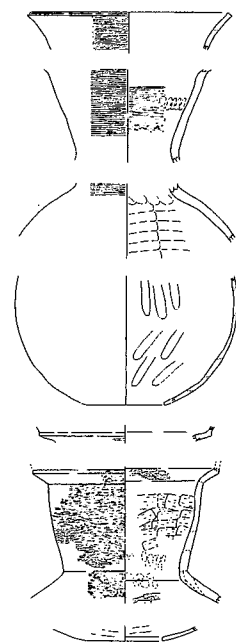
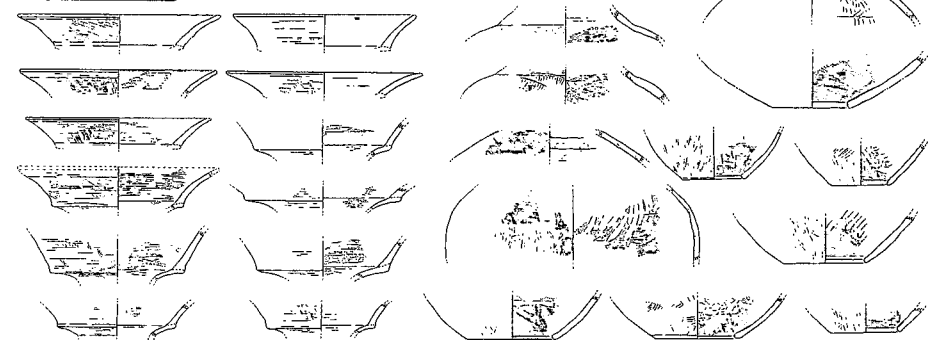
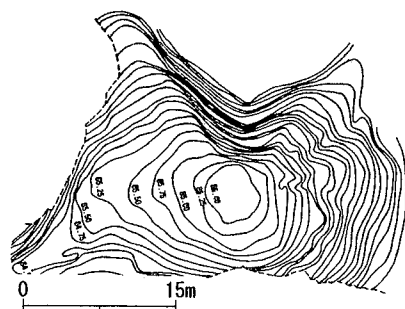
石室外構造断面図

図版 1 3 3 奈良県桜井茶臼山古墳

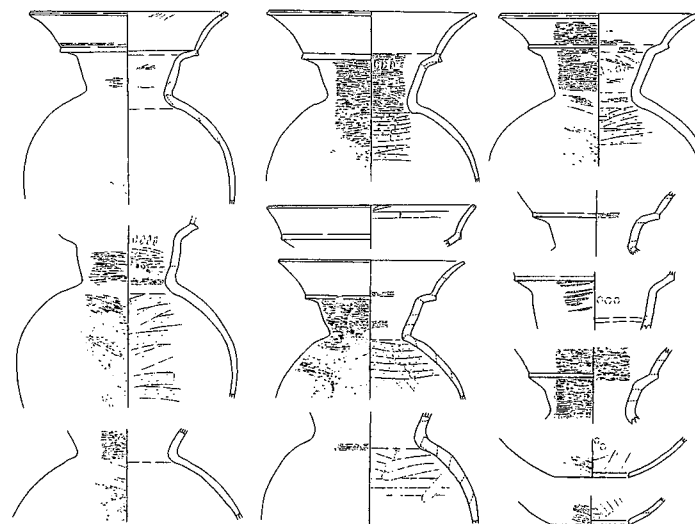


南側くびれ部

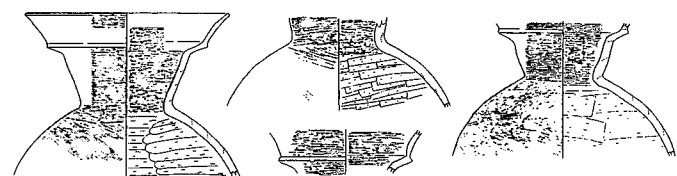
図版 1 3 4 京都府椿井大塚山古墳



後円部墳丘斜面～裾



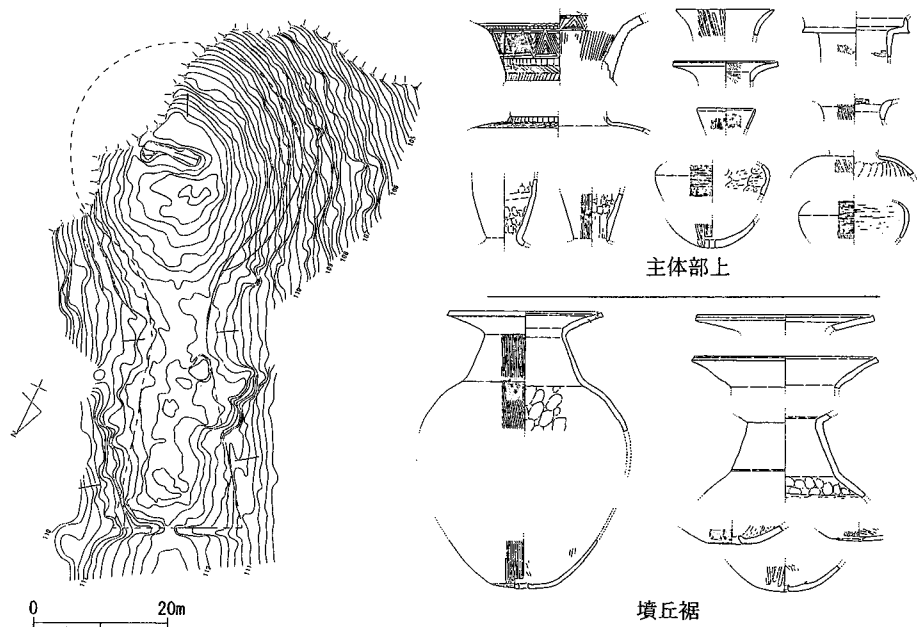
北側くびれ部



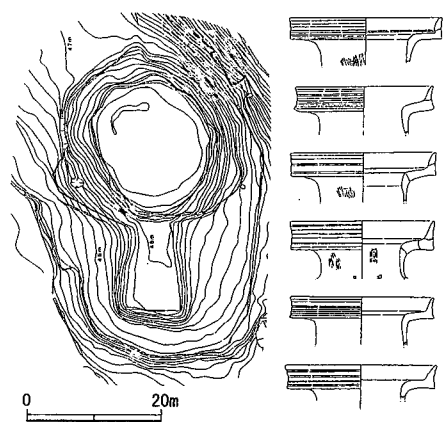
前方部墳丘斜面～裾

図版 1 3 5 大阪府安威 1 号墳

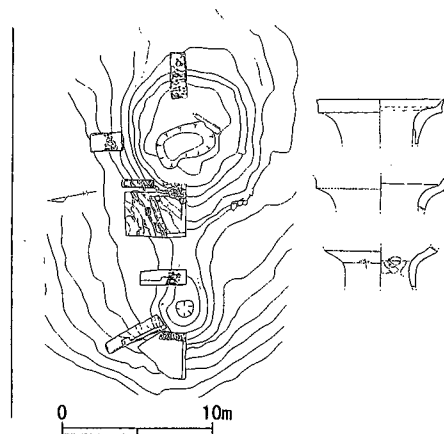
図版 1 3 6 岡山県川東車塚古墳



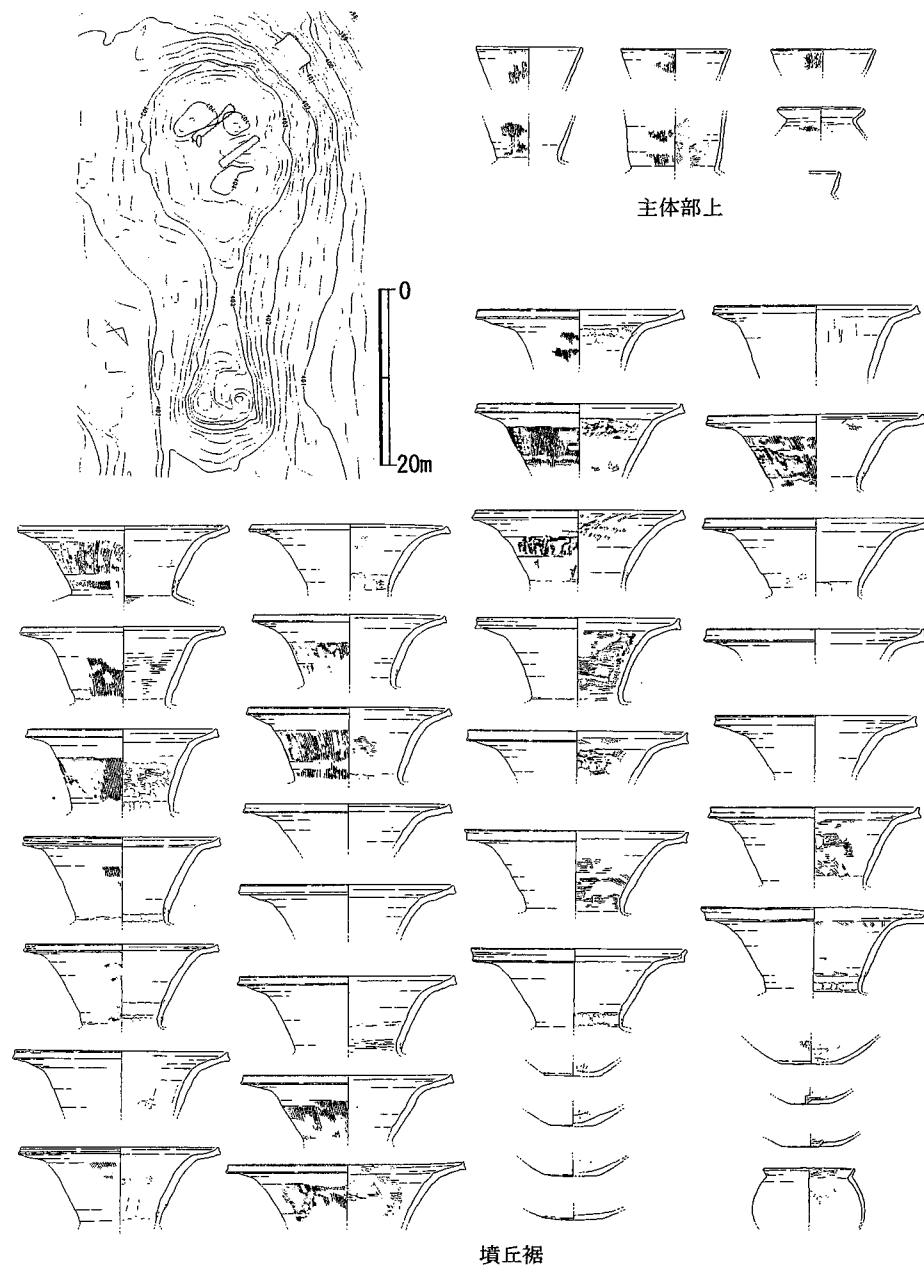
図版 1 3 7 香川県鶴尾神社 4号墳



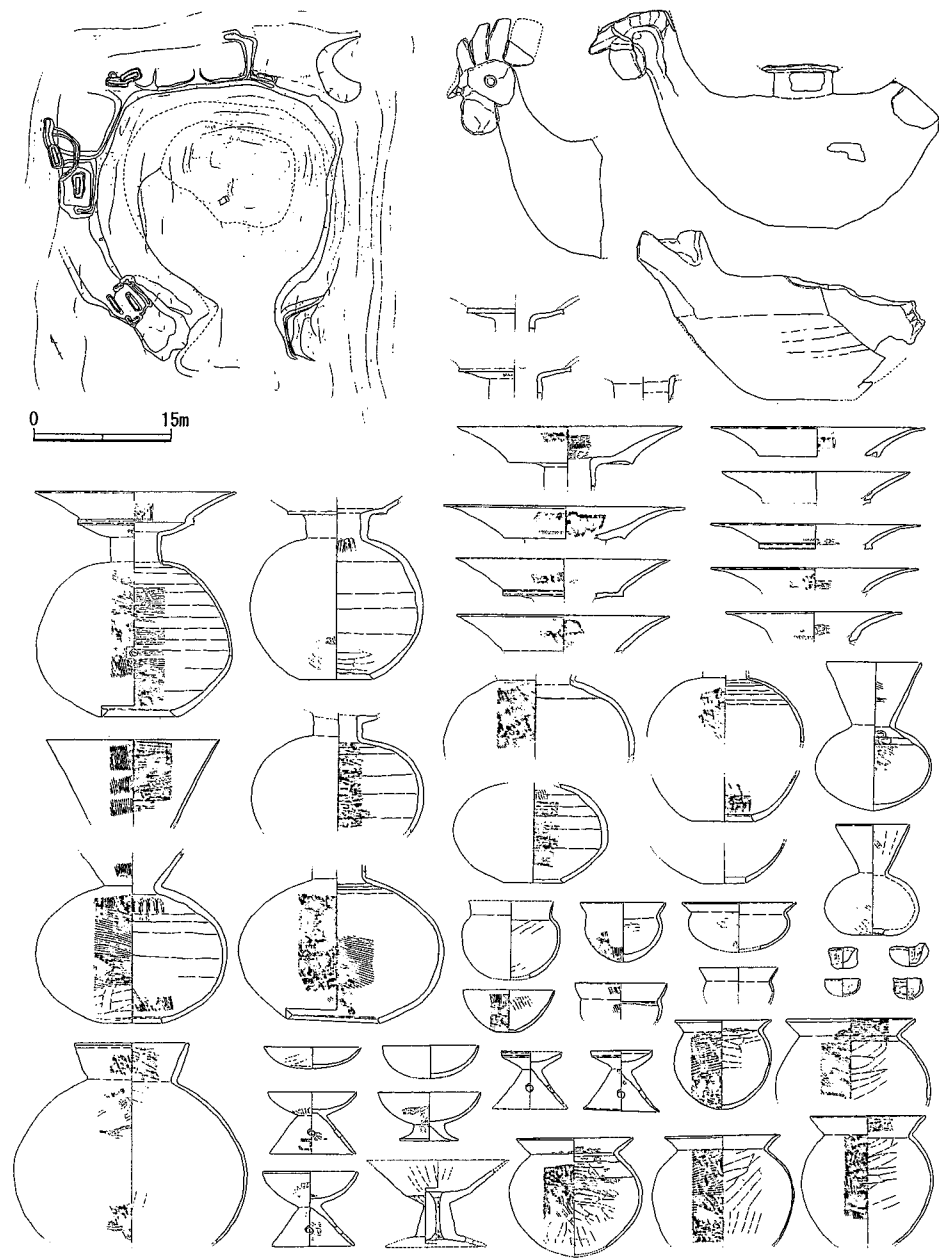
図版 1 3 8 徳島県宮谷古墳



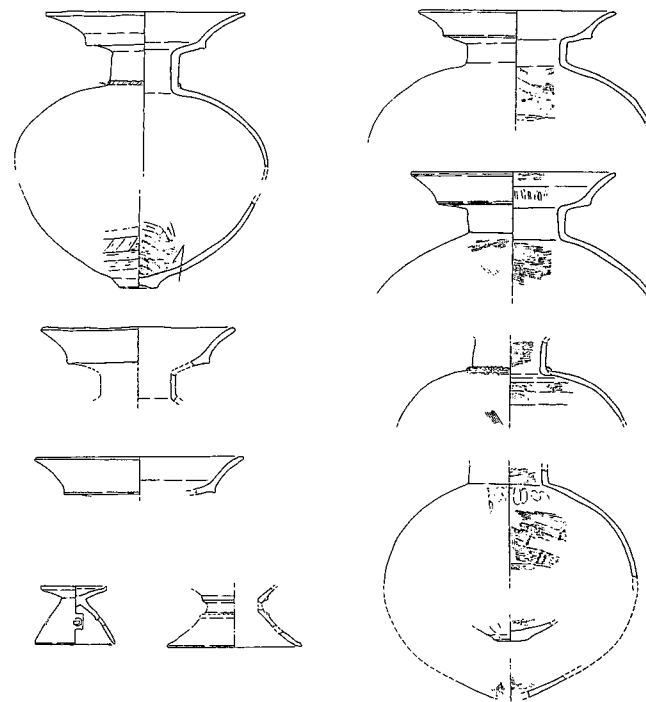
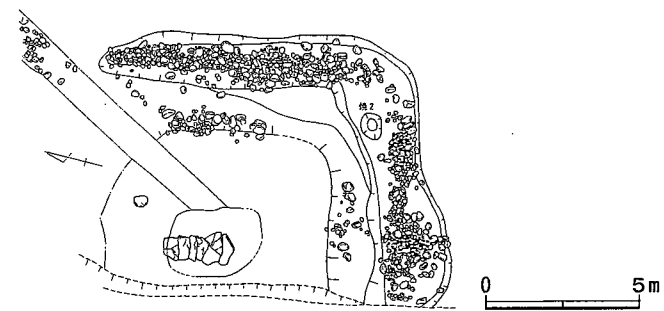
図版 1 3 9 徳島県前山 1号墳



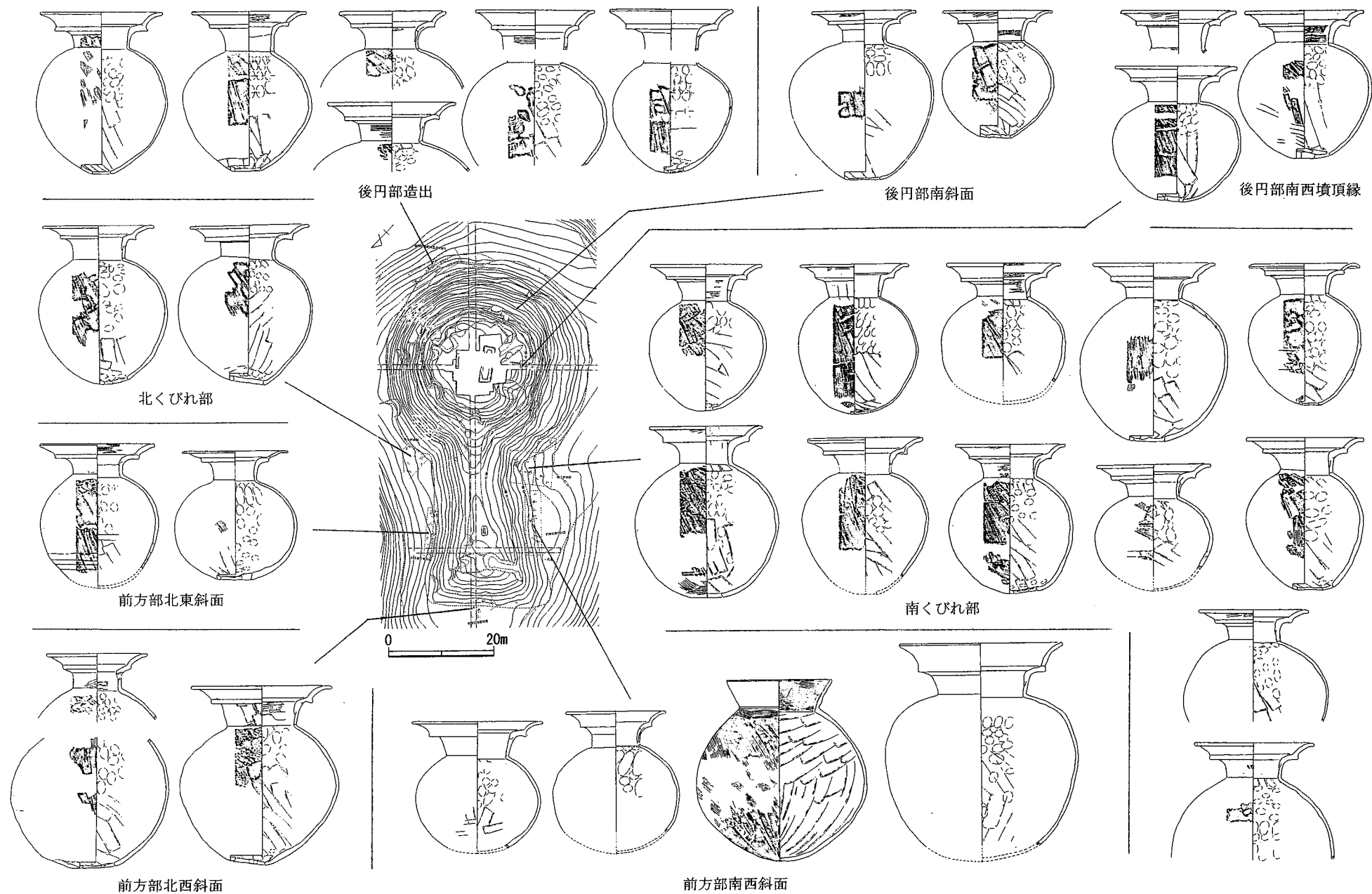
図版 1 4 0 香川県野田院古墳



図版 1 4 1 福岡県津古生掛古墳

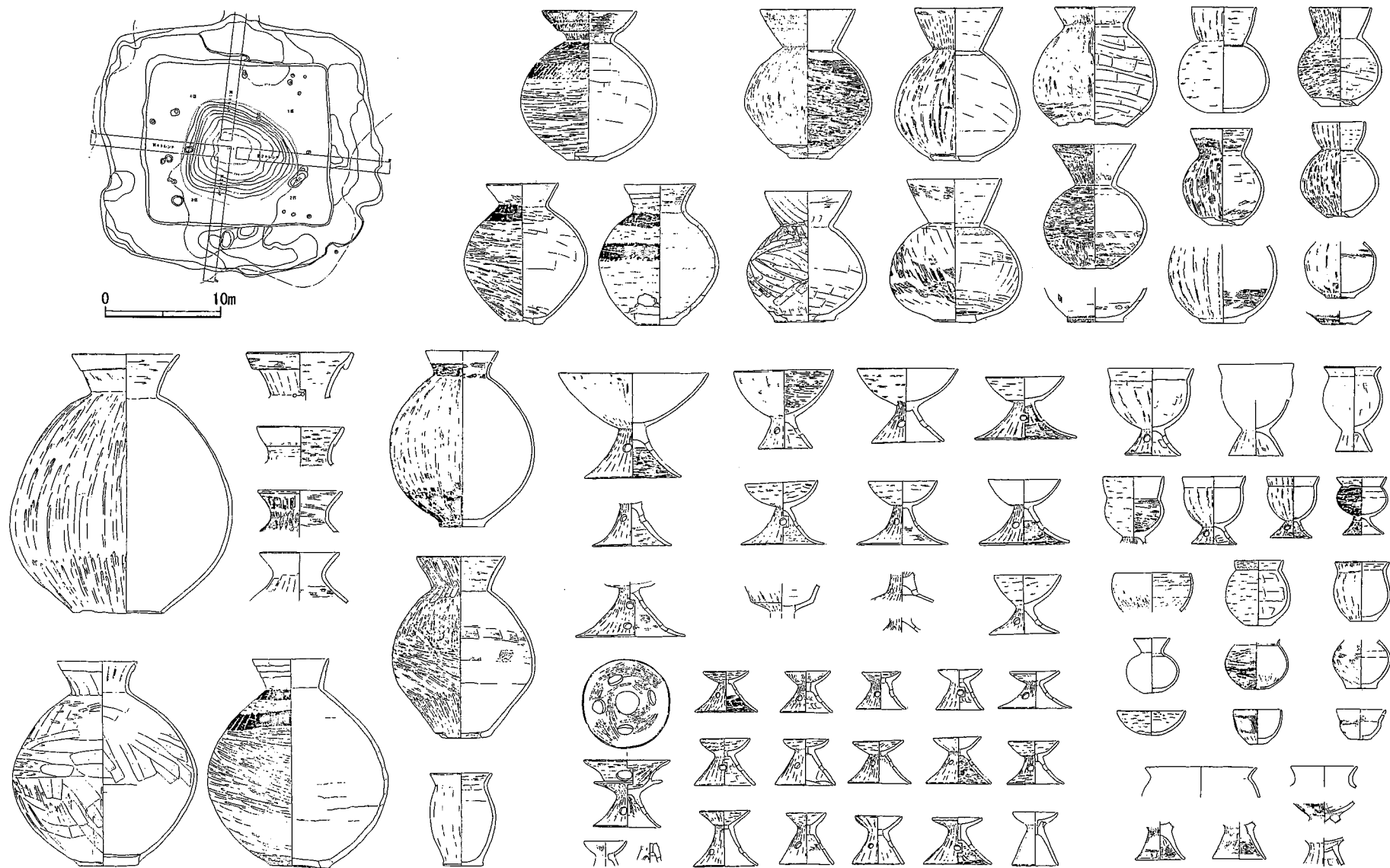


図版 1 4 2 福岡県能満寺2号墳

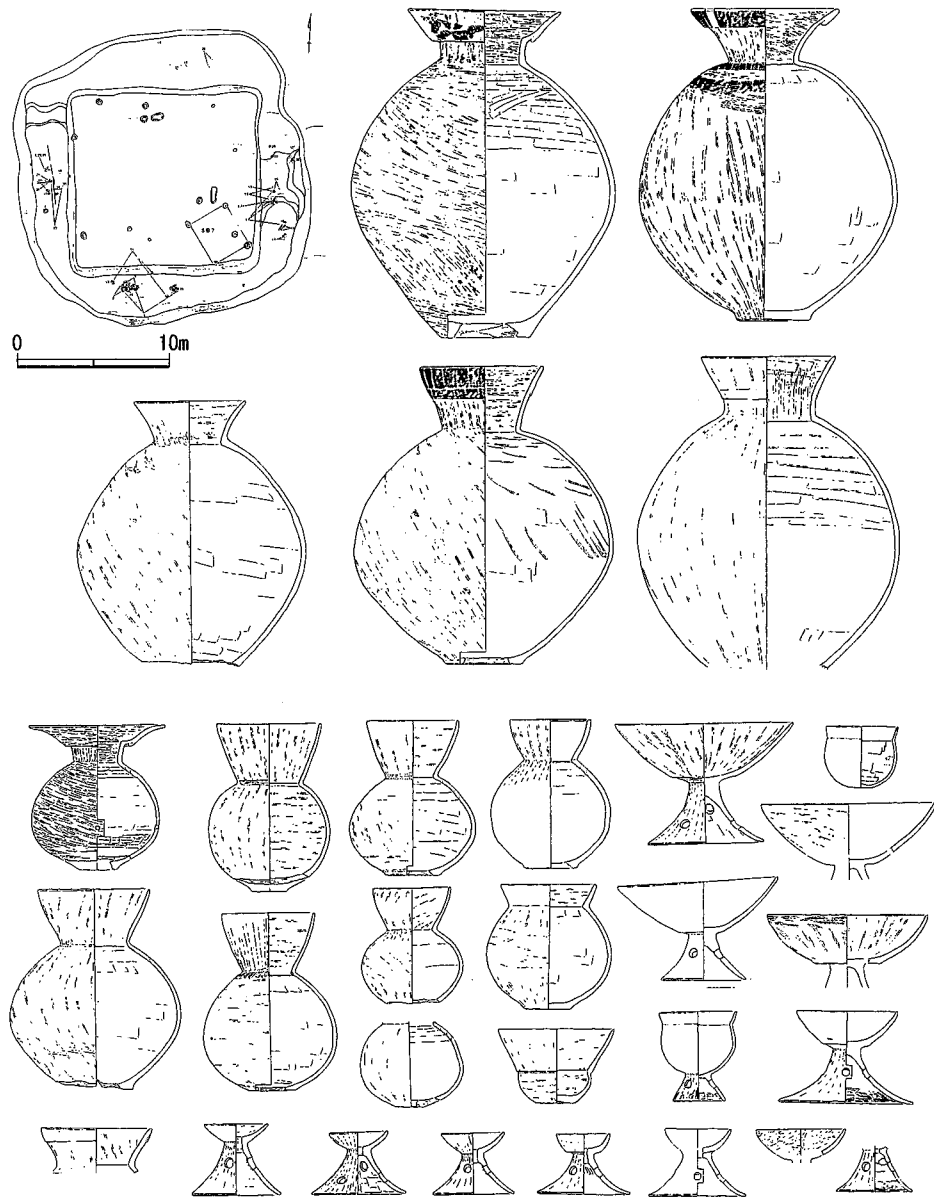


図版 1 4 3 福岡県三国の鼻 1 号墳

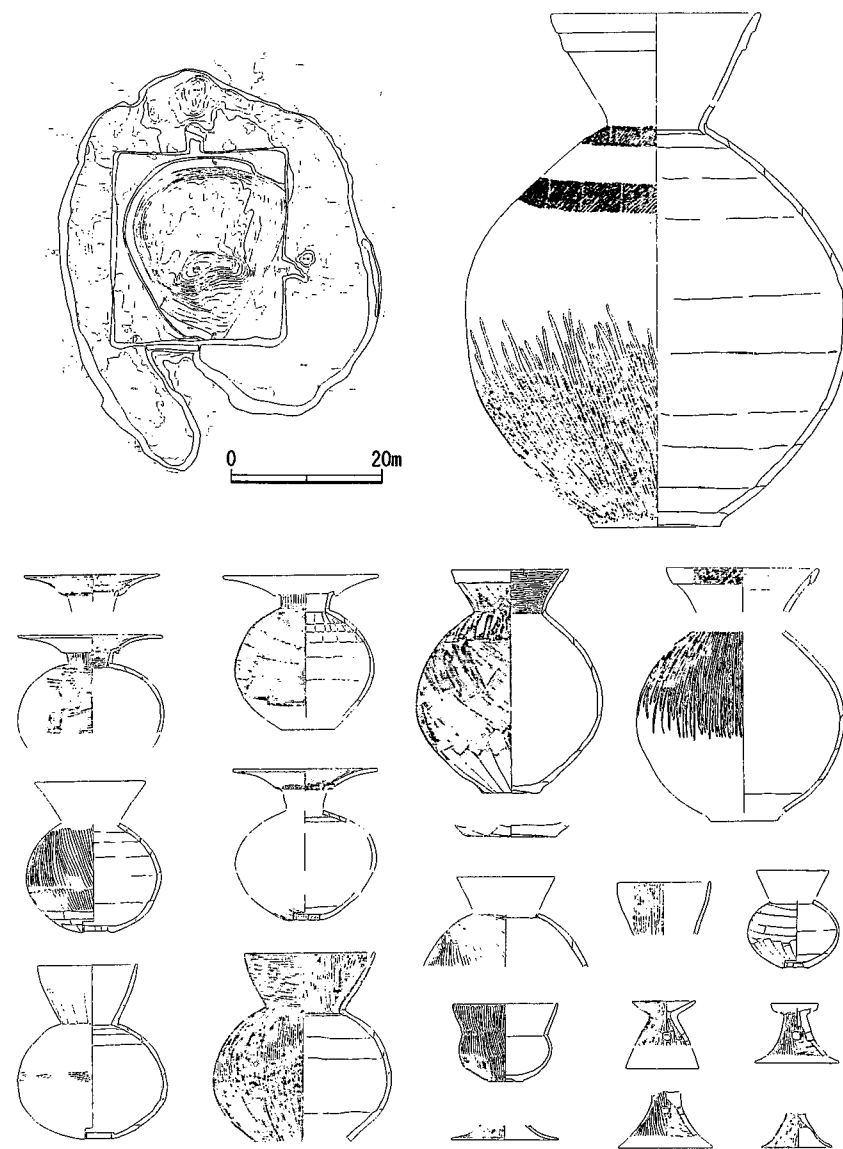




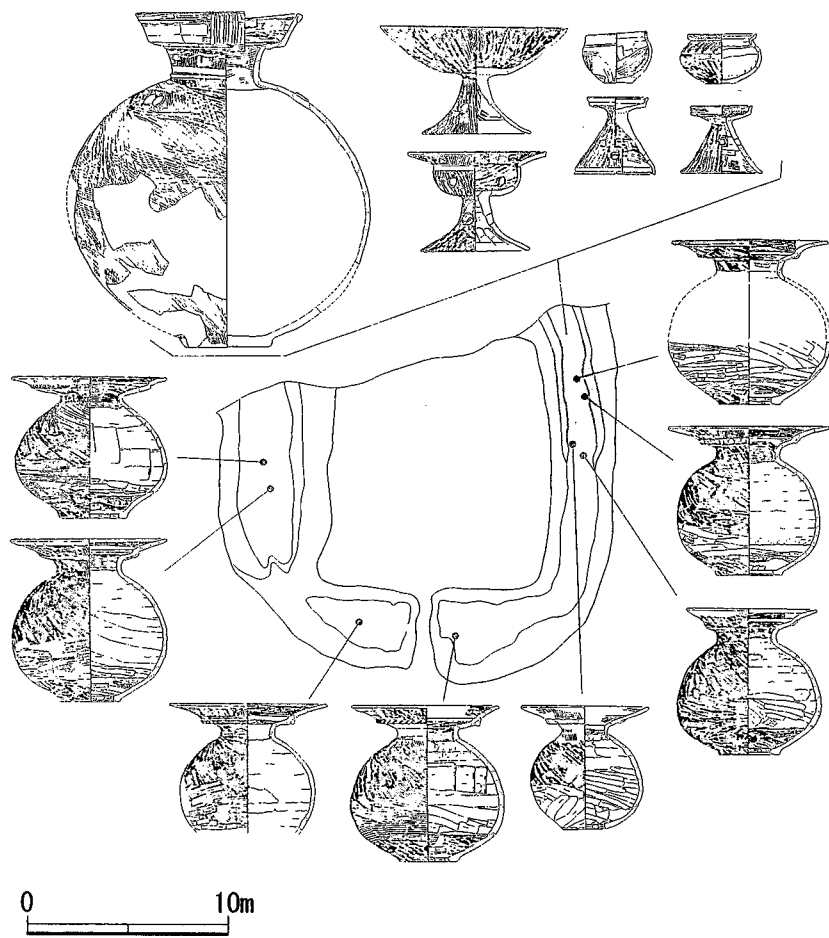
图版 1 4 4 埼玉県中耕21号方形周溝墓



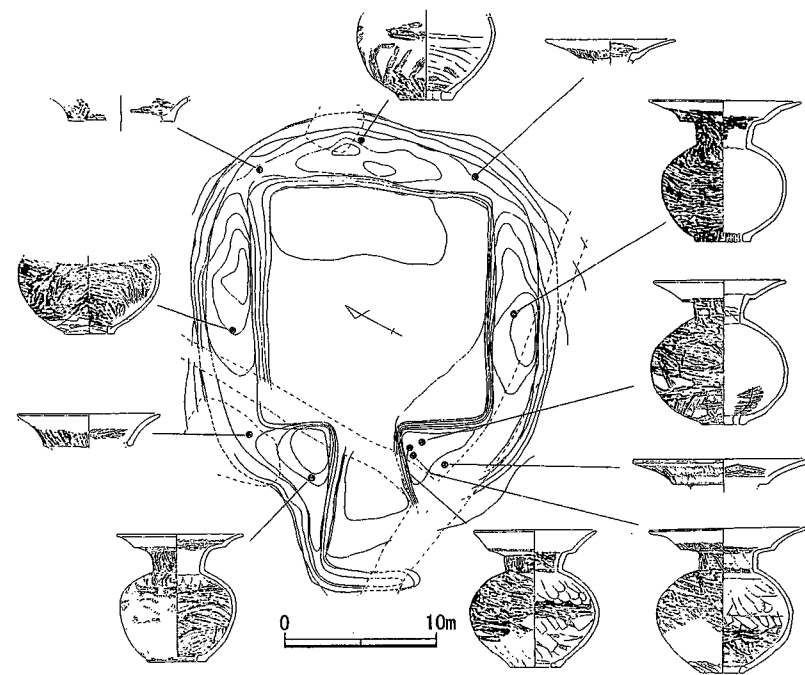
图版 1 4 5 埼玉県中耕13号方形周溝墓



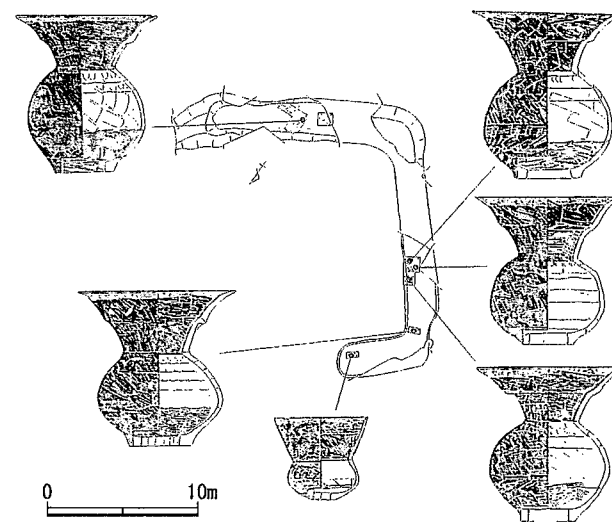
图版 1 4 6 埼玉県広面9号方形周溝墓



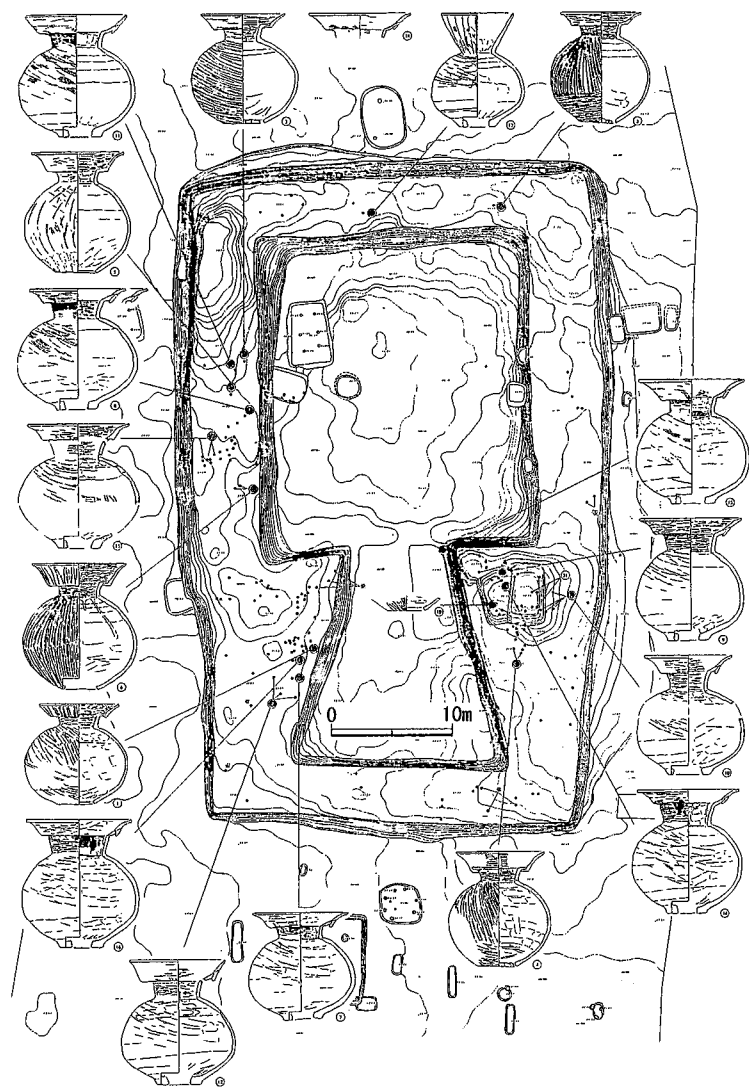
图版 1 4 7 群馬県荒砥北原 1 号周溝墓



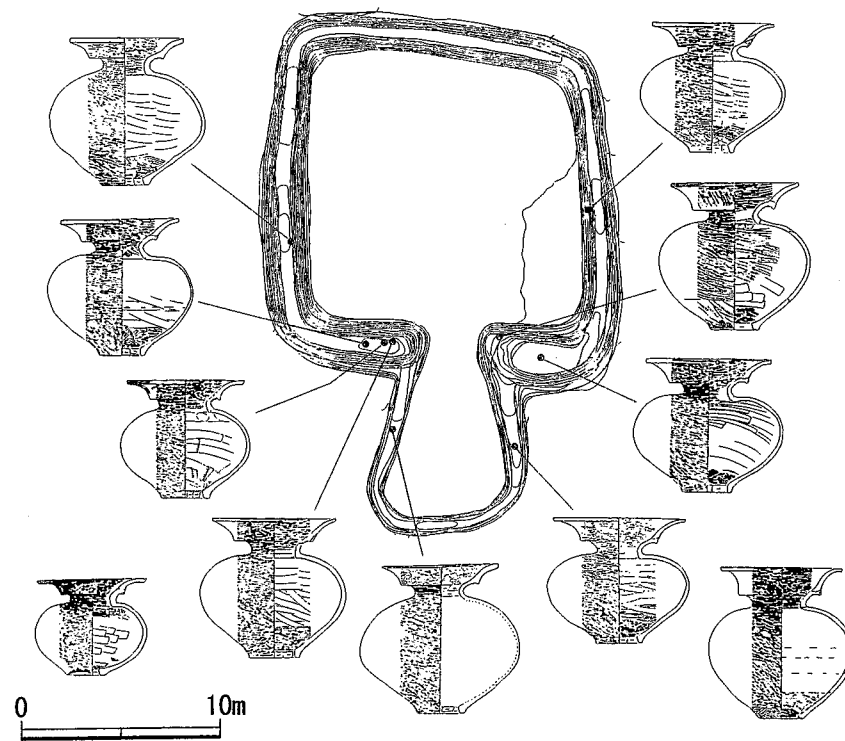
图版 1 4 8 群馬県堤東 2 号周溝墓



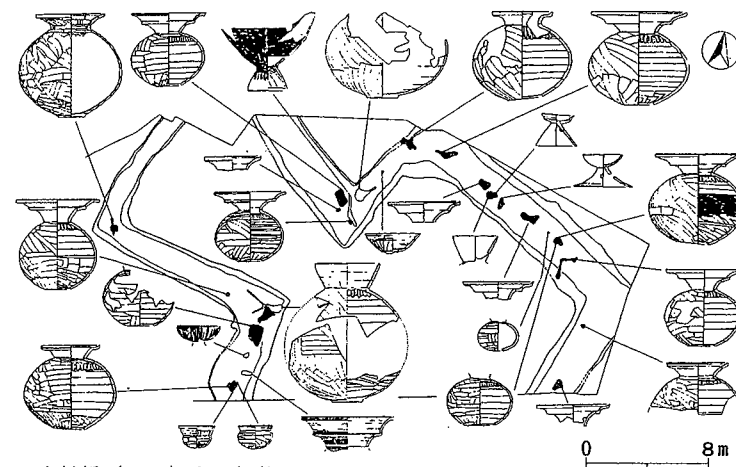
图版 1 4 9 東京都赤羽台 3 号周溝墓



図版 1 5 0 栃木県松山古墳

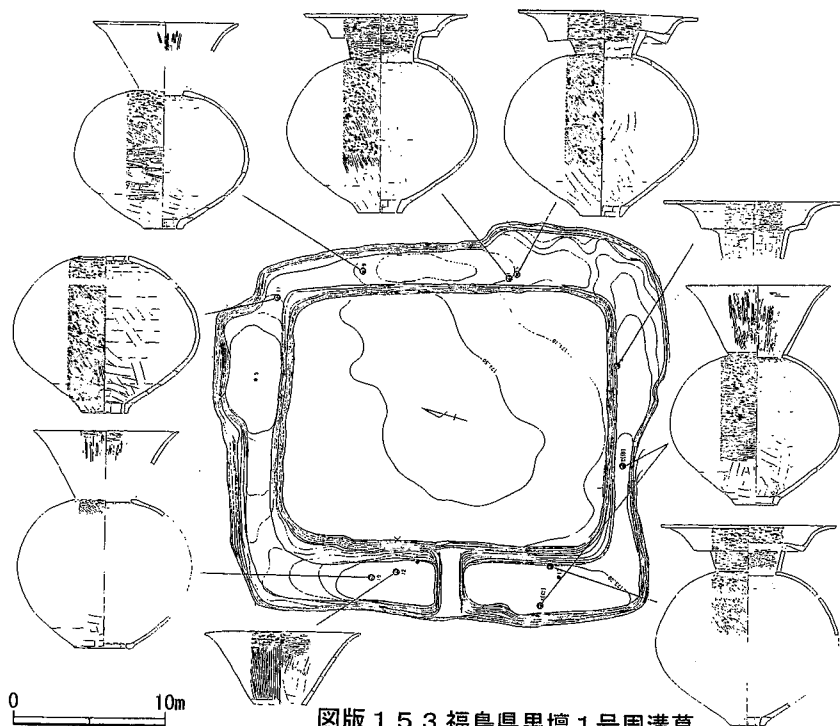


図版 1 5 1 福島県稲荷塚6号周溝墓

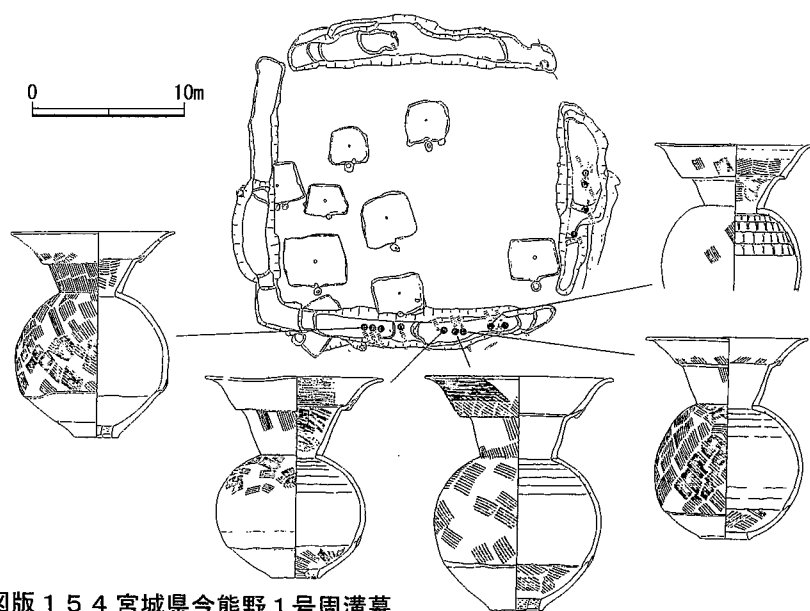


※志村哲（1982）より転載

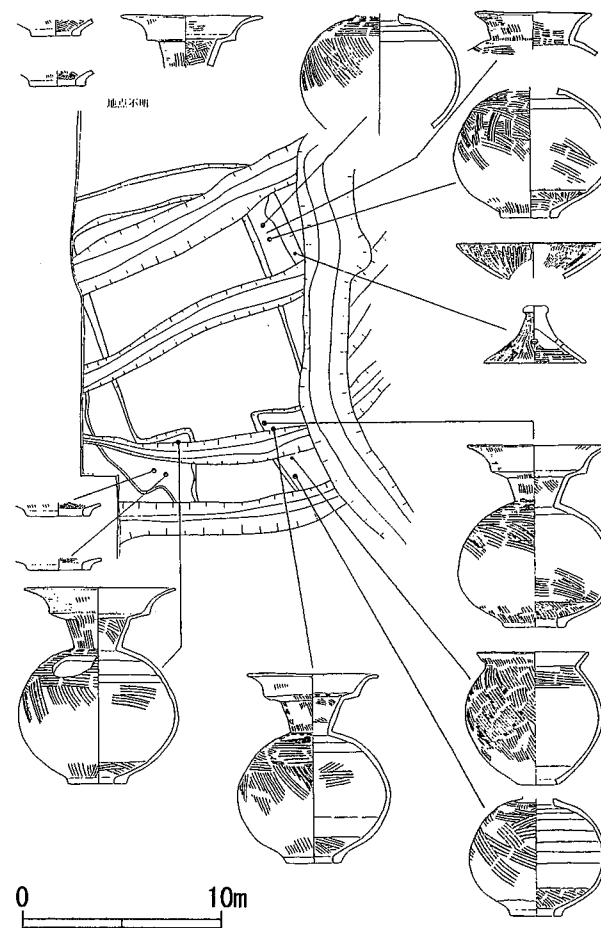
図版 1 5 2 群馬県堀ノ内CK-2号墓



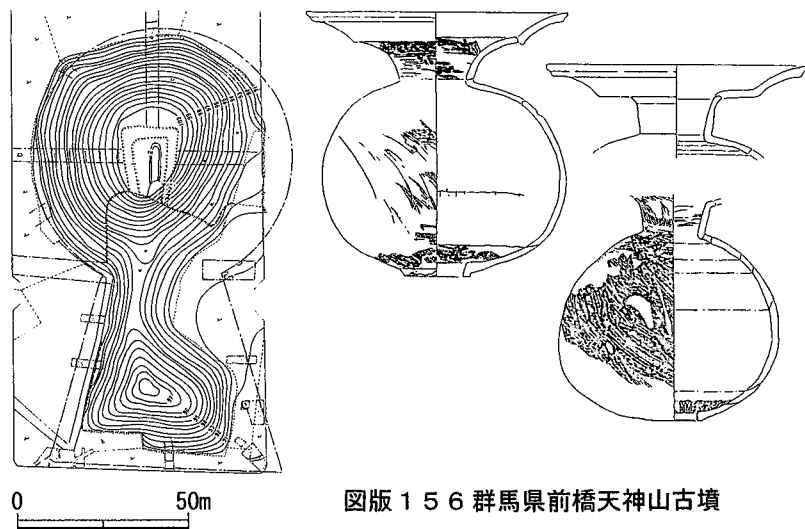
図版 1 5 3 福島県男壇 1号周溝墓



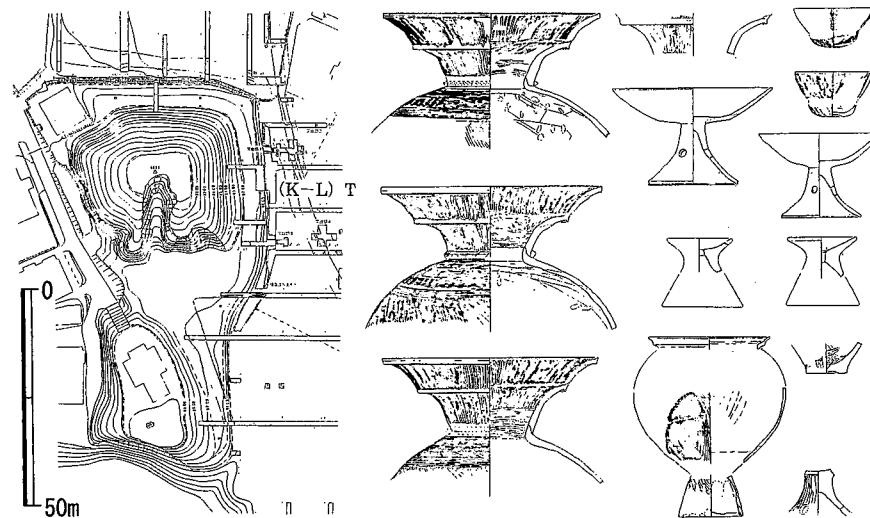
図版 1 5 4 宮城県今熊野 1号周溝墓



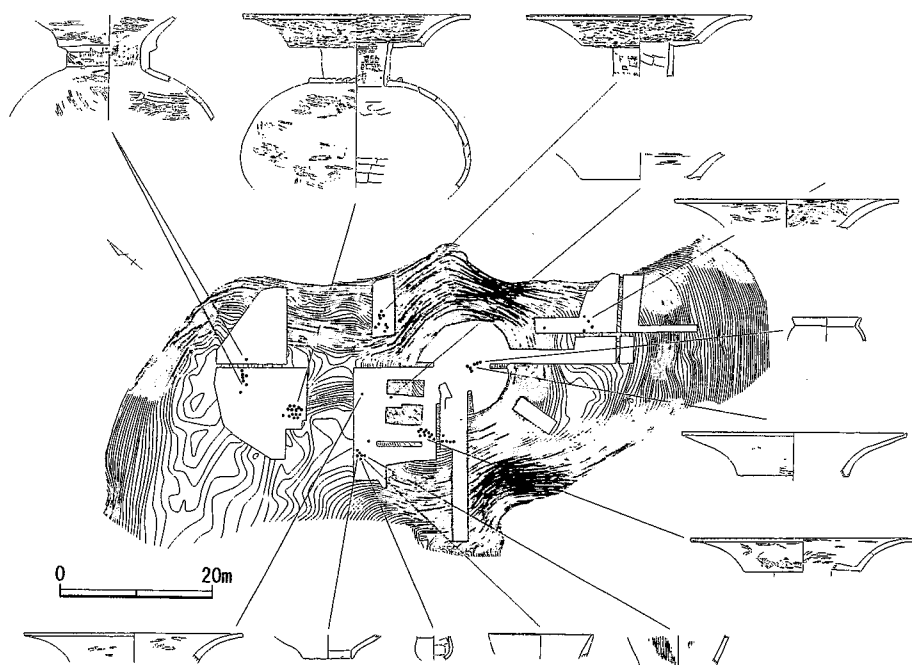
図版 1 5 5 宮城県安久東周溝墓



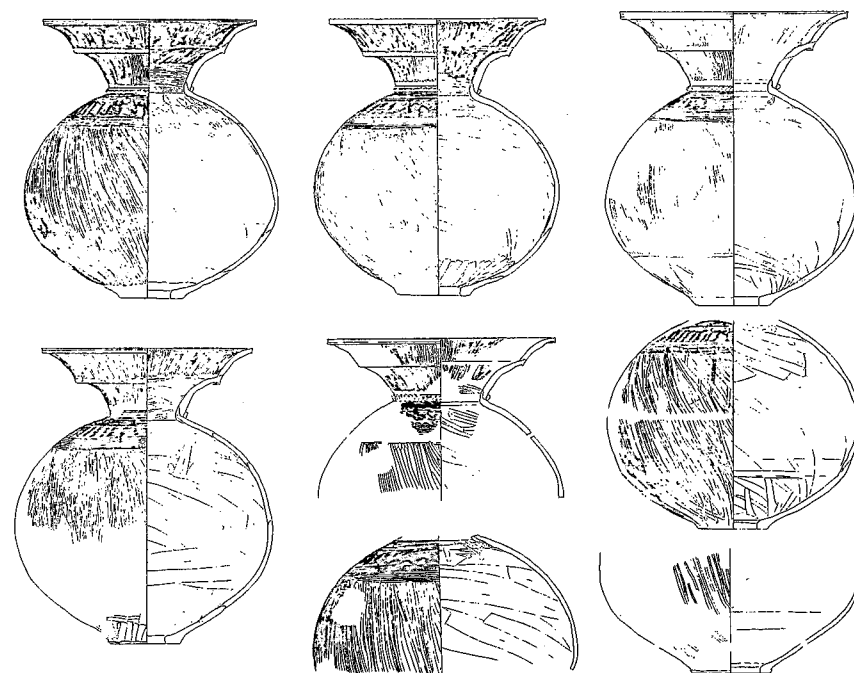
図版 1 5 6 群馬県前橋天神山古墳



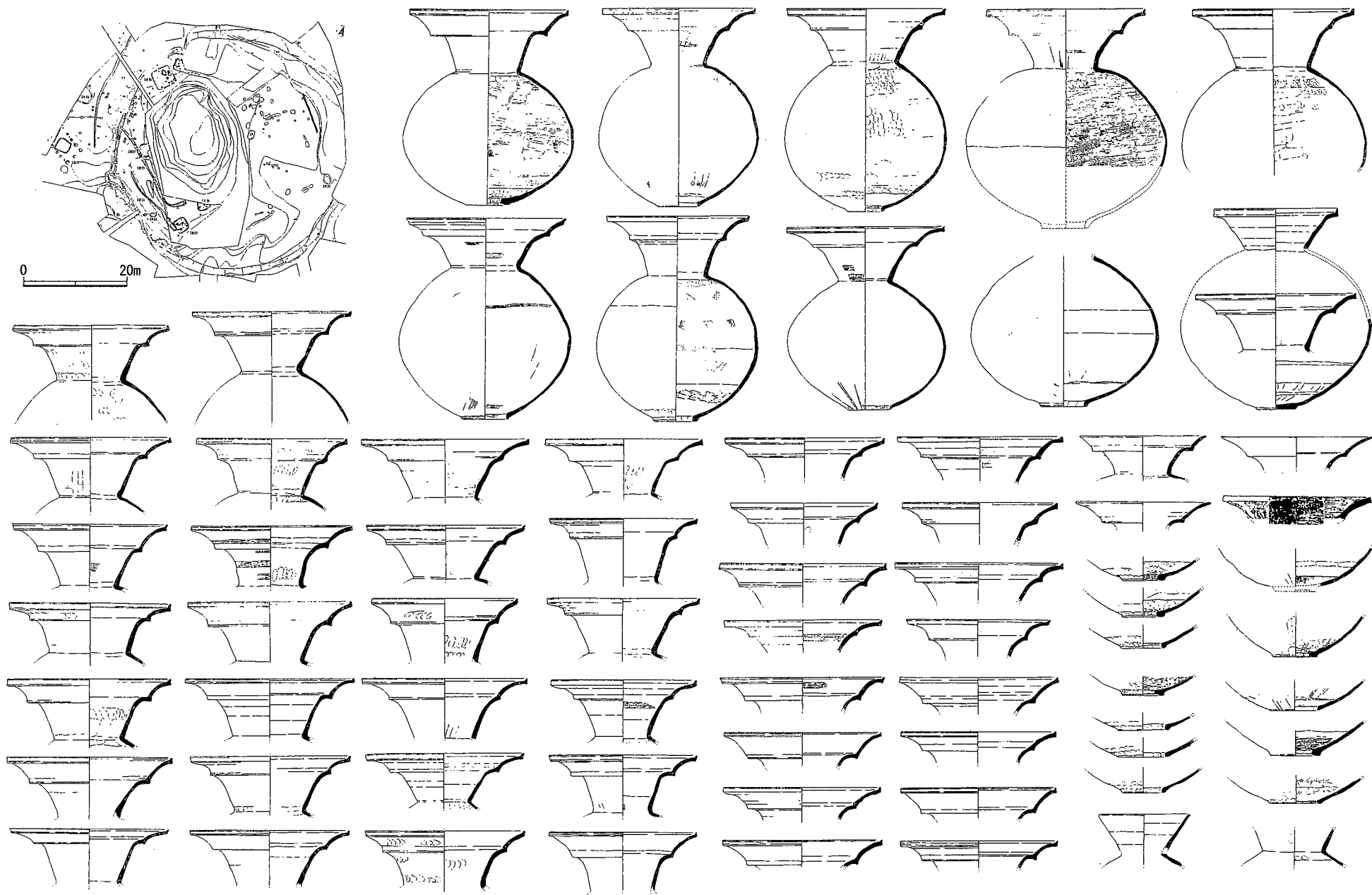
図版 1 5 8 群馬県元島名将軍塚古墳



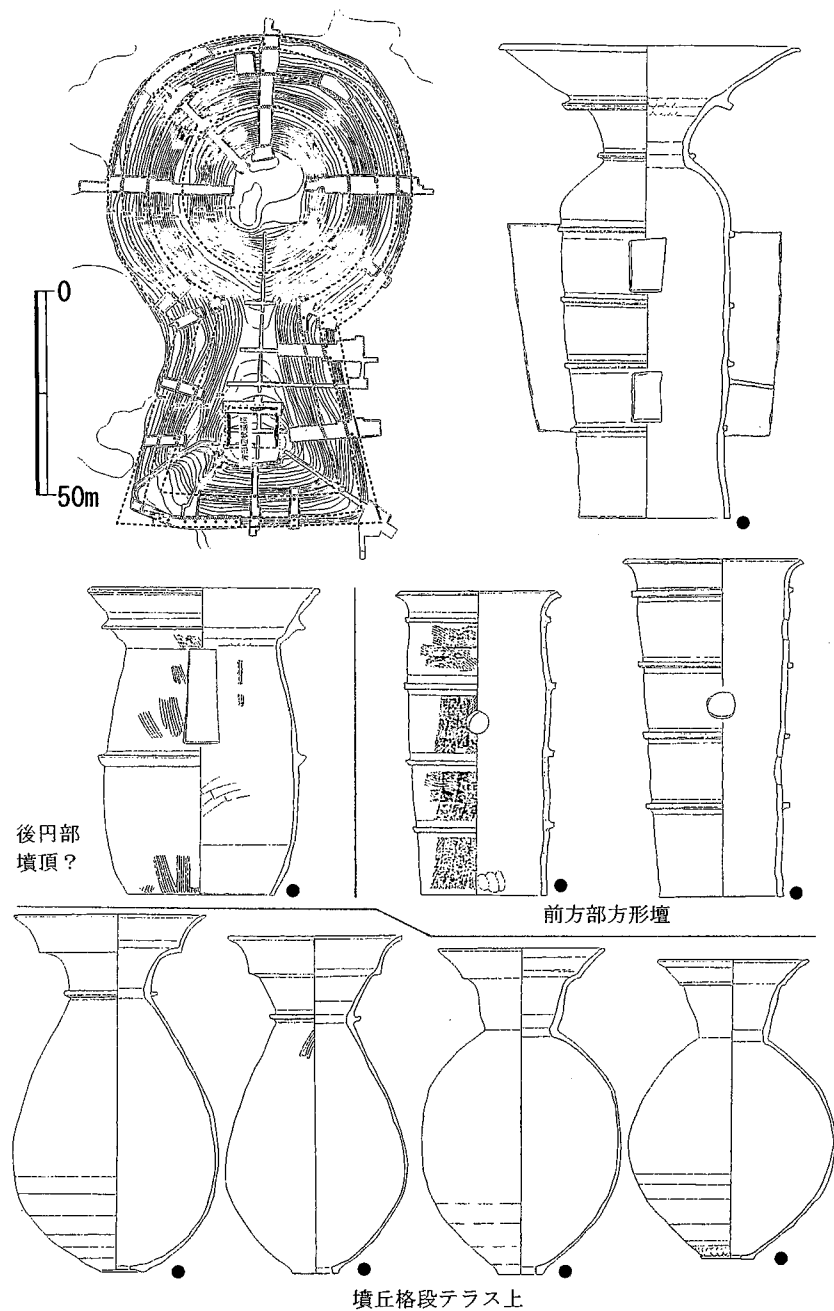
図版 1 5 7 福島県森北 1 号墳



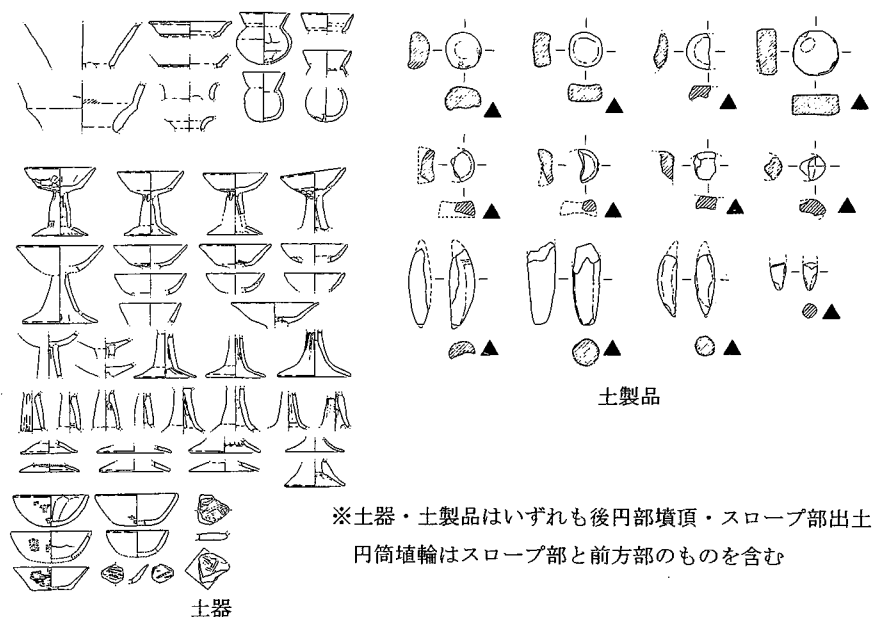
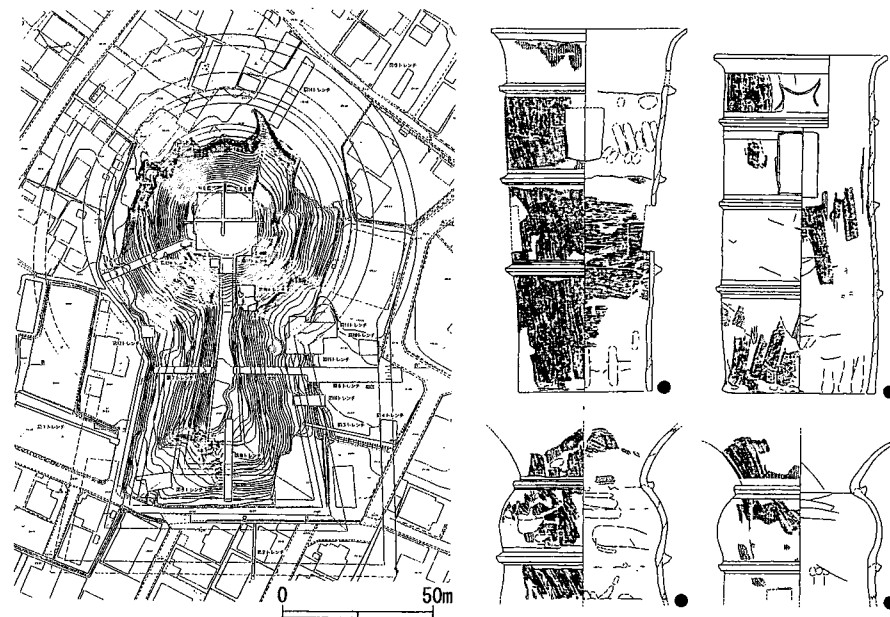
K-L トレンチ出土土器



図版159 三重県深長古墳

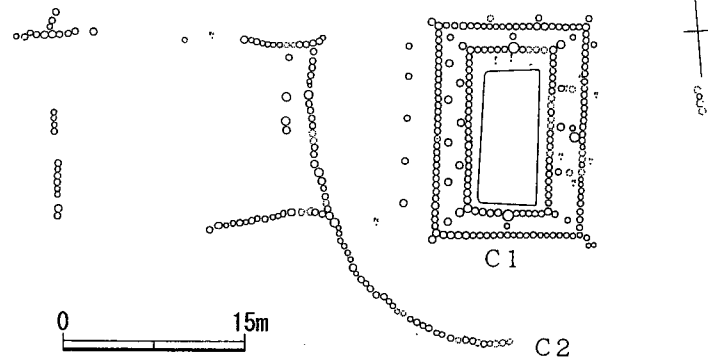
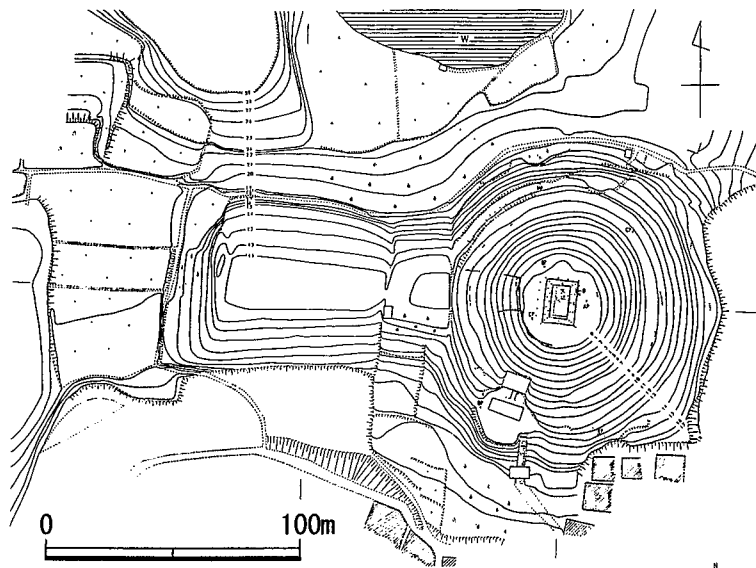


図版160 愛知県青塚古墳

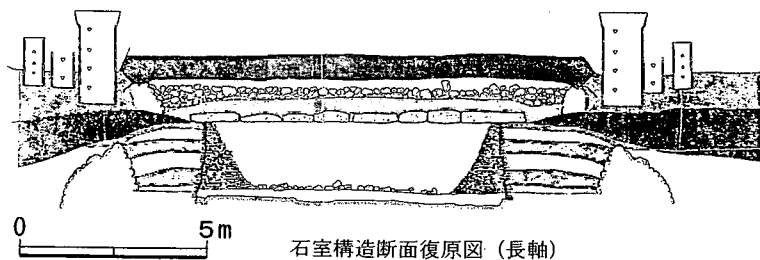


図版161 岐阜県昼飯大塚古墳

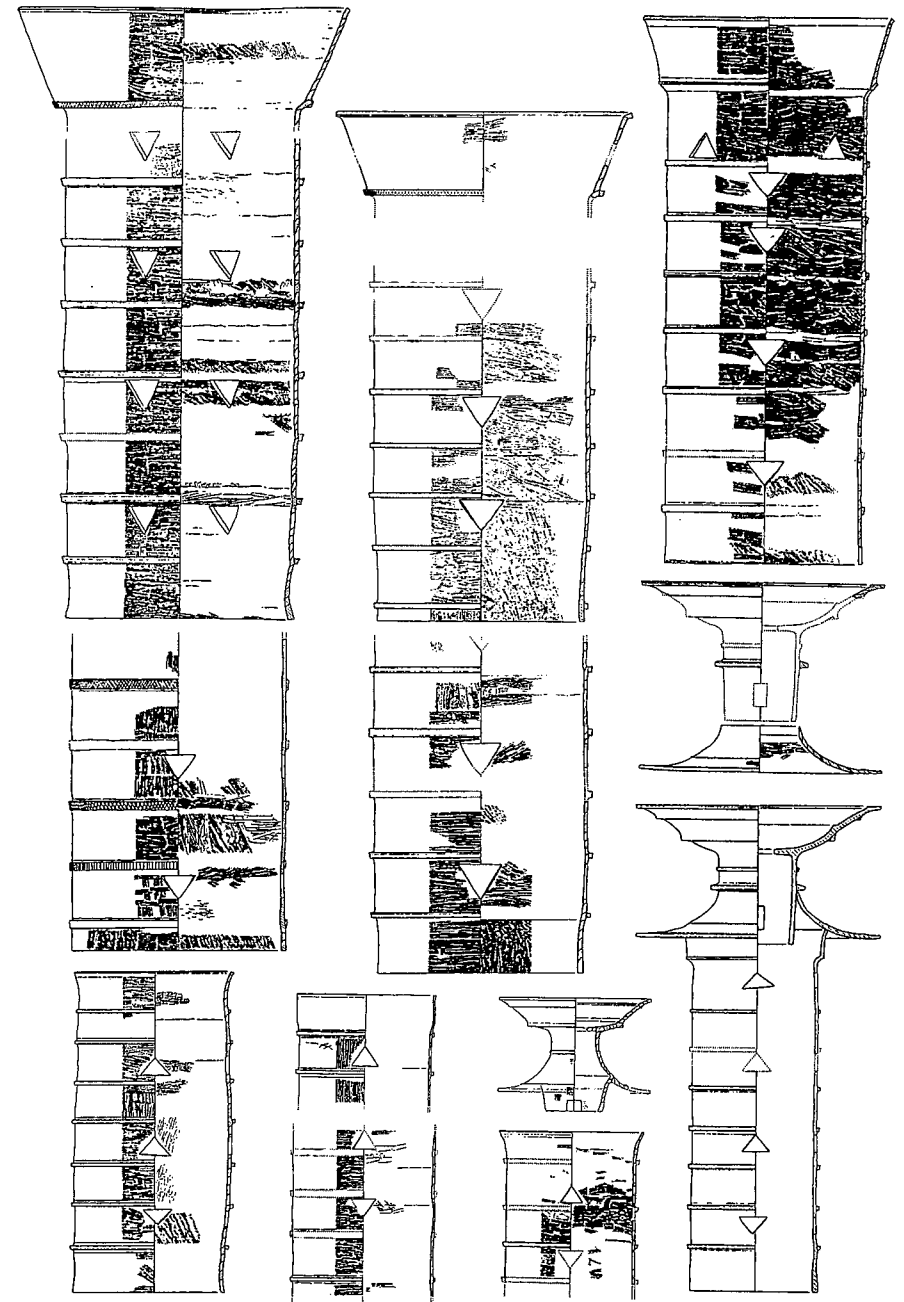




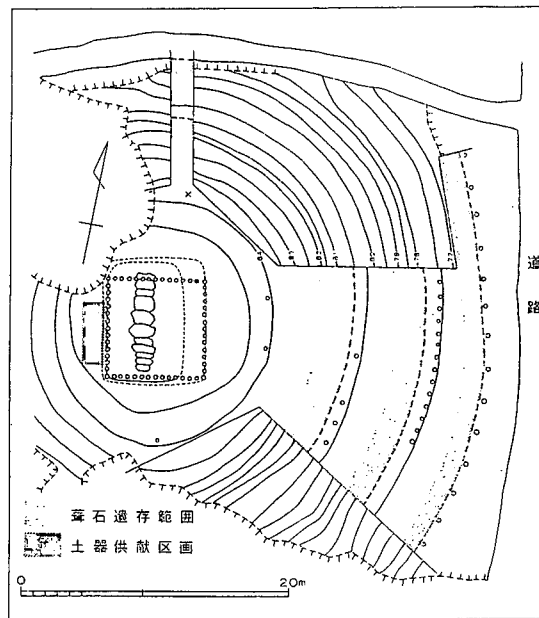
後円部墳頂埴輪配列



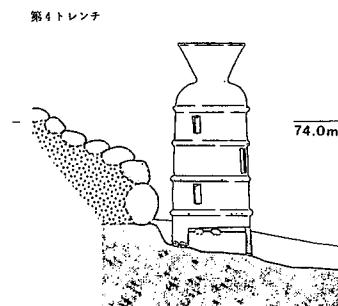
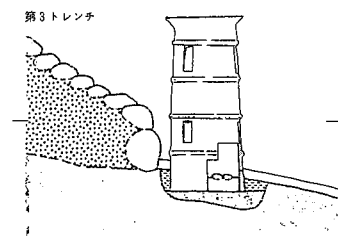
石室構造断面復原図 (長軸)



円筒埴輪 (S=1/30)

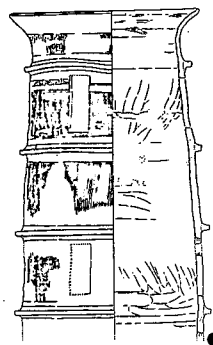
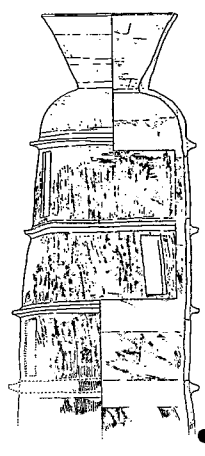
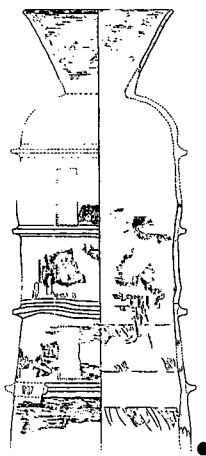


後円部の円筒埴輪配列および「土器供献区画」

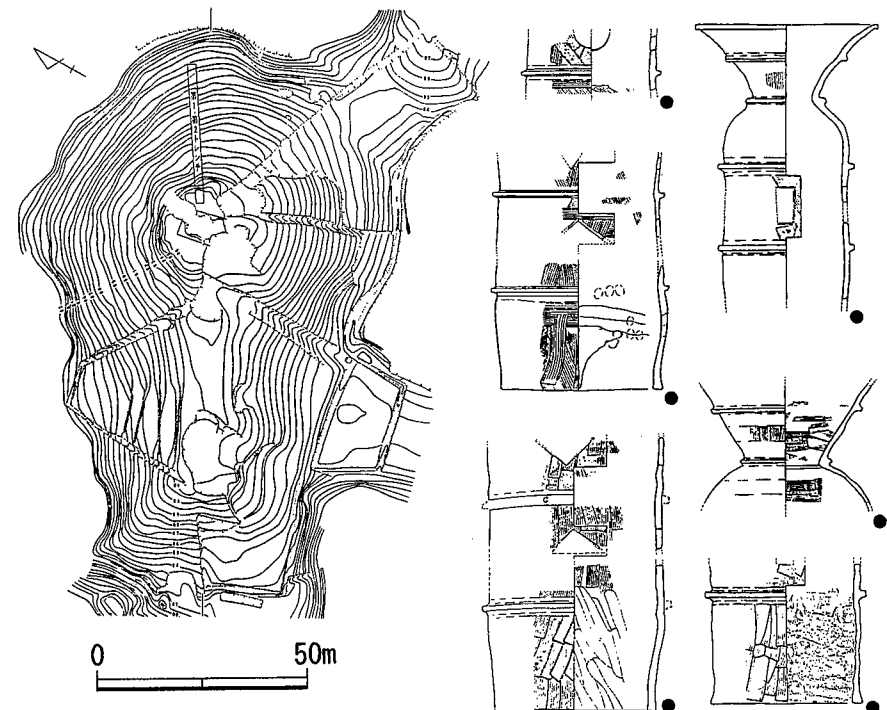


- 地山
- 礫き土
- 埴輪内埋土
- 化粧土
- 堀り方内埋土

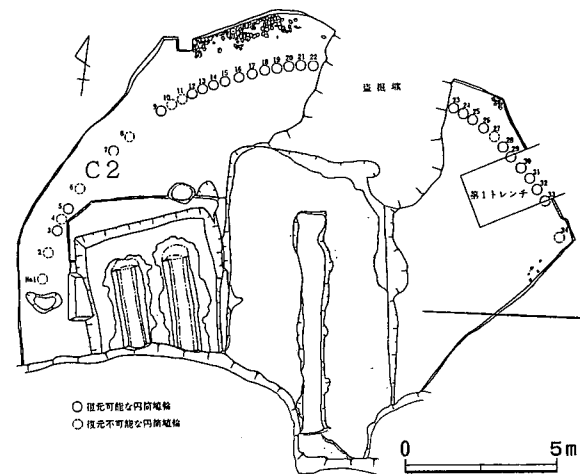
円筒埴輪樹立方法模式図



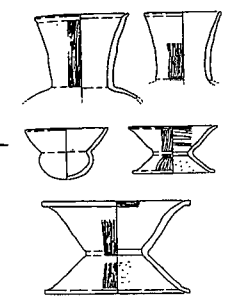
図版163 京都府寺戸大塚古墳



後円部墳頂縁

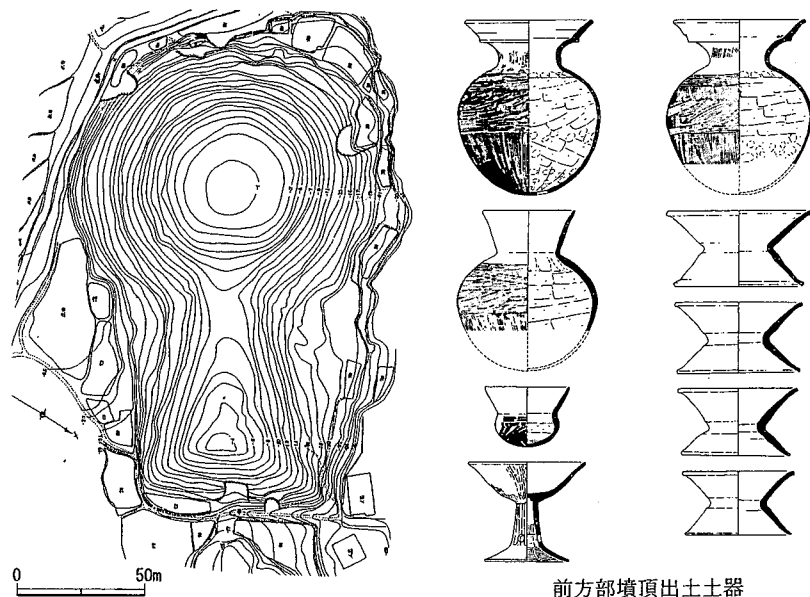


後円部墳頂埴輪配列



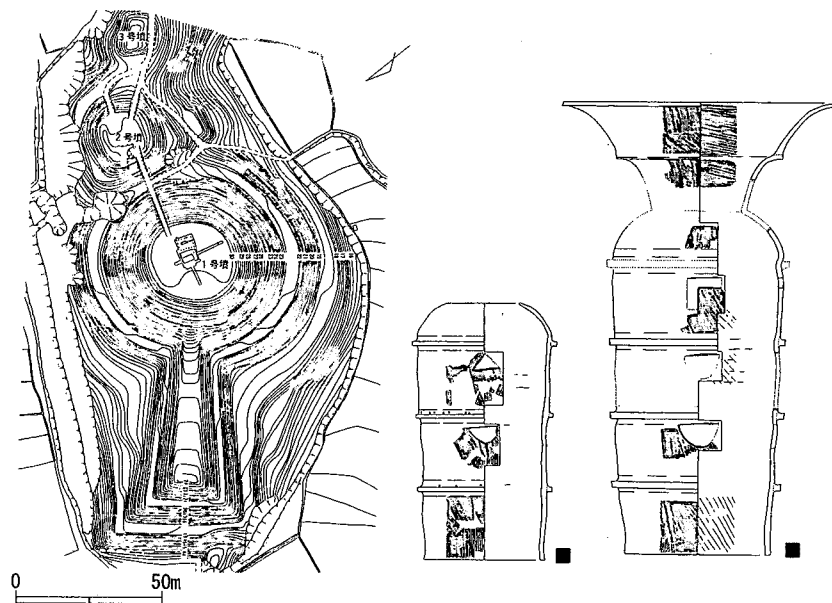
主体部脇

図版164 京都府平尾城山古墳

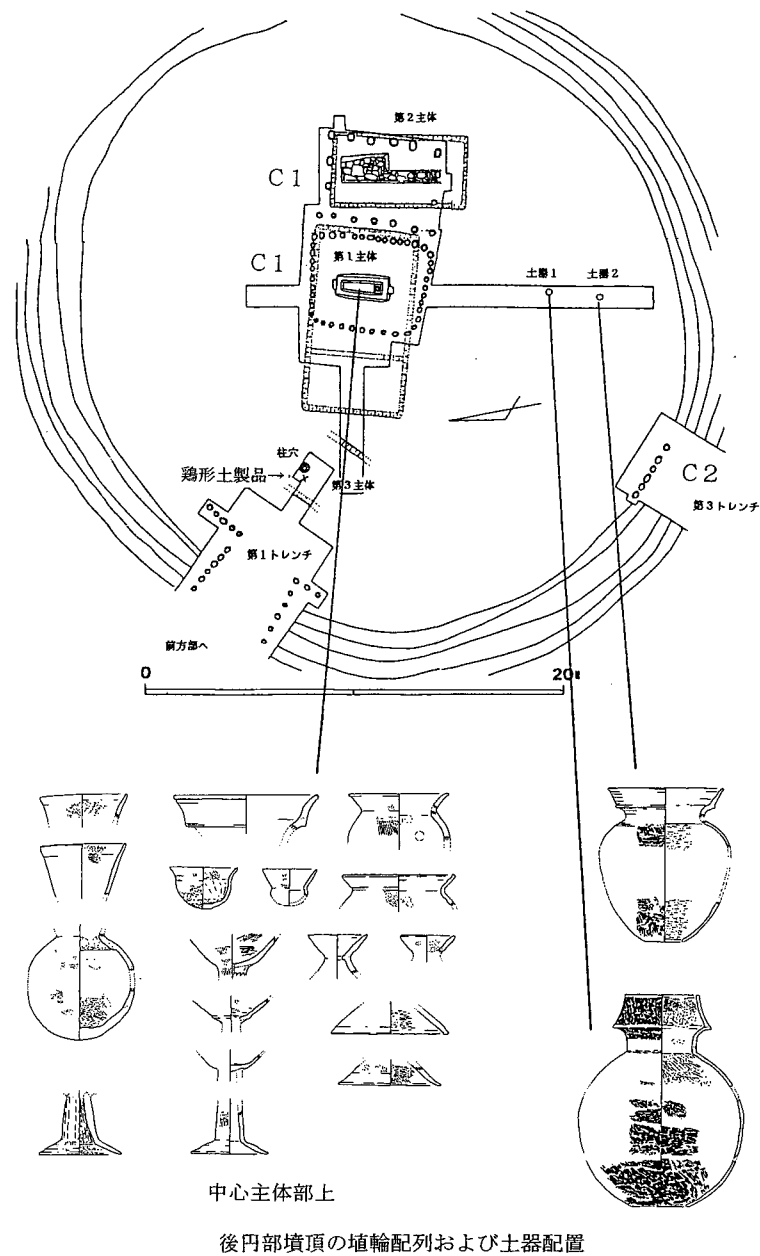


前方部墳頂出土土器

図版165 京都府神明山古墳



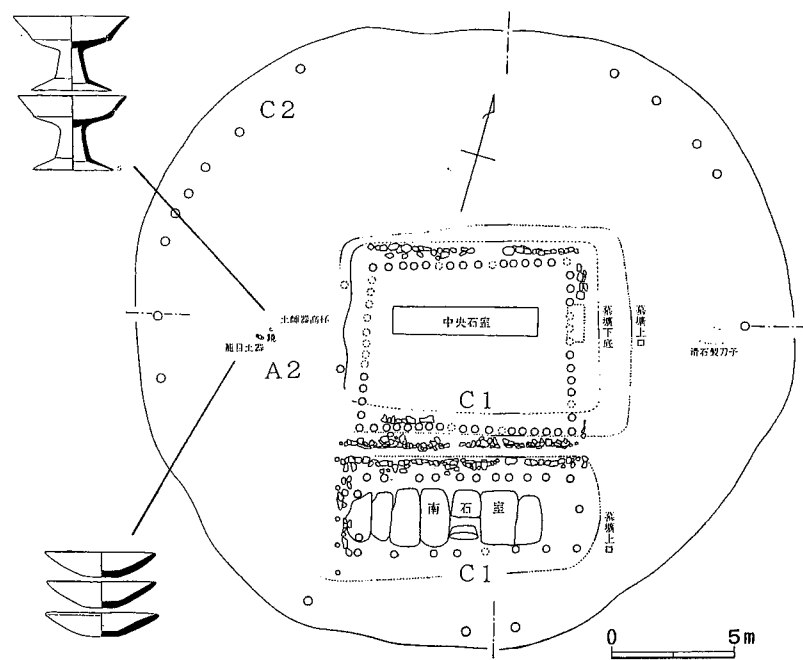
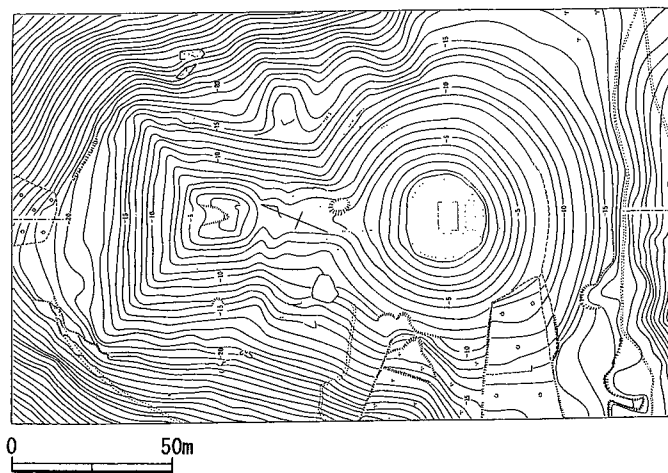
図版166 京都府蛭子山1号墳(1) 墳丘と埴輪



中心主体部上

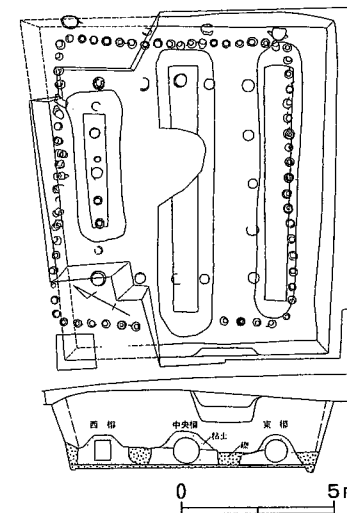
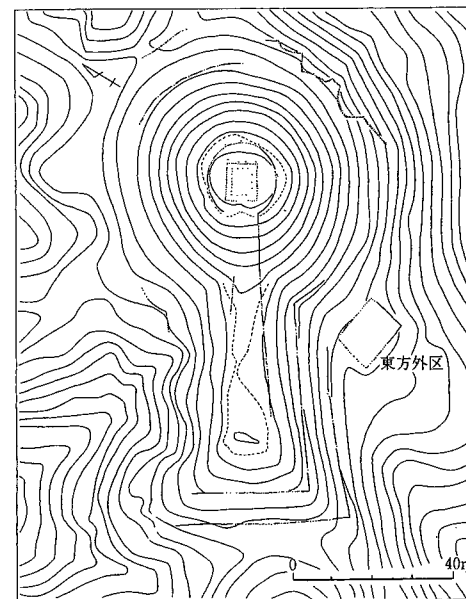
後円部墳頂の埴輪配列および土器配置

図版167 京都府蛭子山1号墳(2) 後円部平坦面



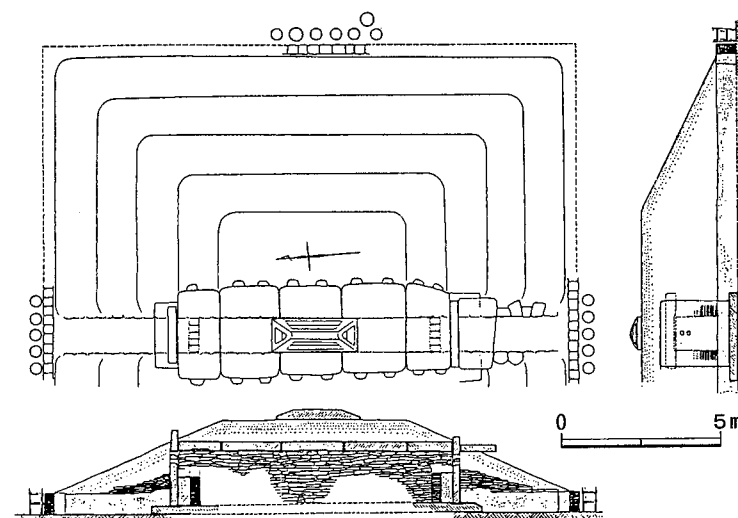
後円部墳頂の埴輪配列および土器配置

図版168 岡山県金蔵山古墳



後円部埴輪方形区画

図版169 三重県石山古墳



後円部墳頂方形壇復原図

図版170 奈良県佐紀陵山古墳